THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十月號

第四十三年　第十號　第四百八十二號



改造社版

經濟學全集

第一回配本 目下配本中

全國各書店にあり御申込と同時に御渡し出來ます

（第二卷）

經濟學原理

總論及生產篇

一千頁に垂んとする大冊。經濟學界の最高峰を代表す。河上―福田。福田―河上この兩雄は本全集によつて始めて握手。何たる壯觀ぞ。

執筆擔當者

法學博士 福田德三

宣言

世界的經濟不安は世界的經濟知識の欠乏に依る。今や我國民は來るべき經濟受難を豫想しつゝ之が對策を攫み得ないで悩々として安んぜざるの狀がある。我社は深く之に鑑みる所あり、茲に一般經濟學者、マルクス經濟學者實際家を一堂に會せしめ、驚倒的內容を具備

3	經濟學原理（流通篇） 法學博士 福田德三
4	經濟學の基礎理論 高田博士 高垣博士 中山助教授
5	經濟哲學 早大教授 二木保幾 京大教授 恒藤恭
7—6	經濟學特殊理論（上）（下） 田中教授 小林教授 高城教授 小島講師 阪西講師 藤井教授 內池博士 和田教授 大熊教授
8	マルクス經濟學の基礎理論 法學博士 河上肇
20—19	財政學（上）（下） 阿部博士 小川博士 三田村教授 青木局長 神戸博士 汐見博士 西野貴議員 河本檢査官 小林博士 田中課長 後藤信夫
22—21	經濟學史（上）（下） 小泉教授 增井教授 高橋教授 加田教授
23	マルクス派經濟學史 森戸辰男 久留間鮫造
24	マルクス經濟學說の發展（上）（下） 猪俣津南雄 山田助教授
33	統計學 有澤助教授 藤本博士 竹下講師 森統計官 小倉博士 小林教授
36—35—34	經營經濟學及商業學（上・中・下） 增地教授 內池博士 森博士 黑正教授 向井教授 太田教授 吳教授 ホイス教授 小田內教授 吉田教授 阪口所長 野村教授
37	企業形態論 法學博士 上田貞次郎
38	特殊問題 渡邊博士 アモン教授 細貝正邦 松宮部長 鈴木茂三郎

[illegible]受[illegible]の一大堤防を築成せんとす。若しそれその體系の秩序整然として權威者の絶對支持を得、機構の雄大にして、廣汎と深遠とを兼ねたる斷じて世界に其比を見ず。而して何人の生活にも絶對に必要なる全集たるべく編輯した。我社は世界に於ける出版界の革命者である、廉價全集の創始者である。我社は今ここに永年の訓練と總經驗とを本全集の完成に集注して七千萬民衆に應ふる所あらんとす。我民衆諸君の絶對支持を俟つ

18	17	16—15	14	13	12—11—10
社會政策 波多野講師 田中九一 藤井悌 山川均	社會化の理論並に諸行程 那須博士 東畑博士	經濟政策（上）（下） 河津博士 小島博士 中島教授 高島教授 氣賀博士 上原教授 竹内教授 社會經濟研究所	世界經濟論 作田教授 松崎教授	部門經濟學 河田博士 林博士 吉田博士 小林博士 早川博士 小島博士 山本博士 中川講師 小島講師	資本論體系（上）（中）（下） 河上肇 大塚教授 櫛田民藏 山田助教授 向阪逸郎 有澤助教授 宇野教授

32	31	30	29	28	27	26
社會統計論一斑 法學博士 高野岩三郎	日本資本主義經濟史 猪俣津南雄	唯物史觀經濟史概說 山川均 石濱知行 河野密	日本經濟史 土屋助教授 鈴木茂三郎 小野博士 武藤教授 瀧本博士 高橋龜吉 石橋湛山	日本社會經濟史 經濟學博士 本庄榮治郎	各國經濟史 野村教授 嘉治隆一 丸岡重堯 上田教授 石濱知行	世界經濟史 田崎博士 高橋教授 阪西講師 上田教授 加藤博士

47-46	45	44	43	42	41	40—39
經濟學辭典（上）（下）	經濟法令集 東大教授 田中耕太郎	經濟行政法 法學博士 佐佐木惣一	世界及日本經濟圖表 有澤助教授 高橋助教授	我國經濟及金融 三菱銀行常務 山室宗文	金融政策の將來（交渉中）	日本經濟の研究（上）（下） [illegible] 高橋龜吉 小川博士 澤村教授 木村博士 早川博士 東畑博士 本多博士

本全集の各篇は總べて書き下ろしだ。河上博士の二書は今年まで大學で講義せられて來た有名なる題目。福田博士の流通篇は三伏の炎暑裡に客を斷つて執筆完成中のもの。尚博士の總論及生産篇のみは世界的定評を博せる最良書にして更に幾多加筆せられたもの。

第二回配本 印刷中

（第一巻）
經濟學大綱

經濟學界の王座。博士最後の講義福田氏のそれと對峙して一大壯觀無比。本書は天下萬人の均しく讀かんと欲した名講義の解放である

執筆擔當者 法學博士 河上肇

豫約募集 内容見本進呈

■全四十七巻・一冊壹圓■

■〆切十一月五日限■

（四六判上製。總クロース金文字入美本函入。九ポイント組。一冊約五百頁乃至千頁。申込金壹圓（最後の會費に充當））

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

（本誌愛讀者に限り十一月末日迄申込有効）

天下を動かす大全集!!

御國の爲め、同胞のため
眞劍熱誠！大犠牲大壯擧!!

面白い〳〵
感動感激
上品で愉快
爲になる

修養全集
講談全集

善い全集だ！
詳細＝十月一日發表

これ程良い！安い
立派な全集なし
見る人皆驚嘆！

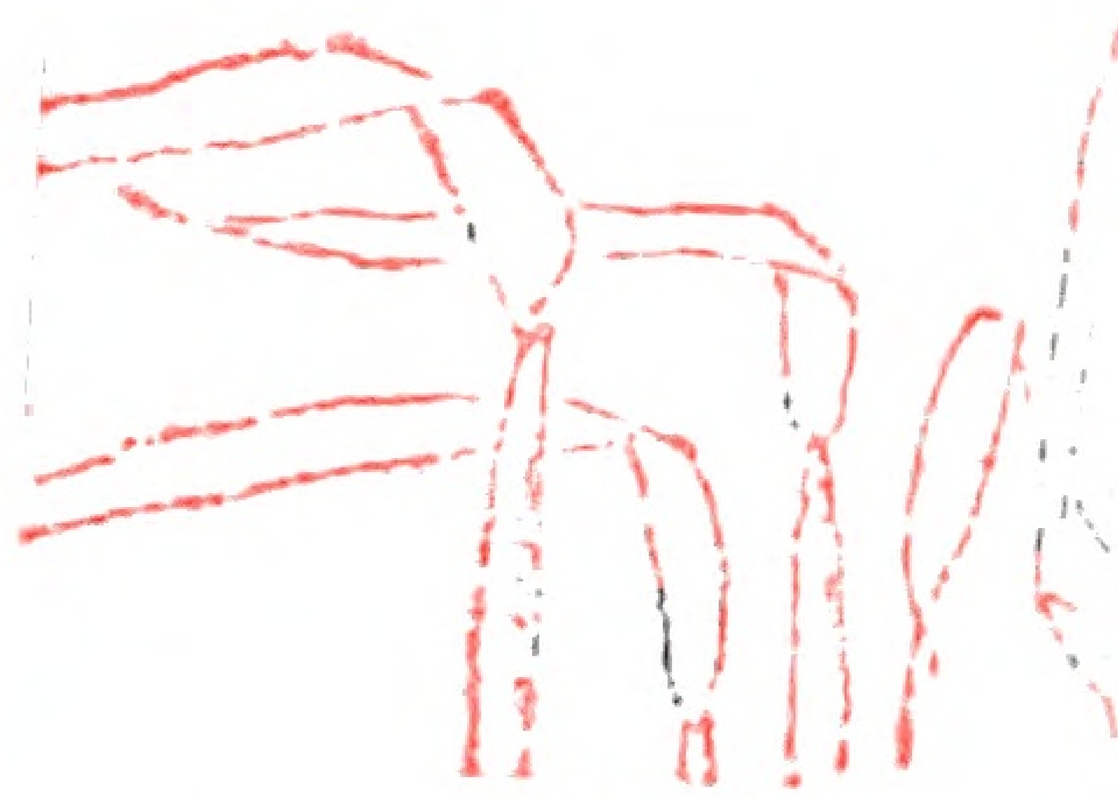
朝野名士大賞讃

日本人には誰でも讀ませたいものだと

東京・本郷
大日本雄辯會講談社


寫眞材料界ノ權威
アグファ製品ヲ推薦ス
東京市麹町區丸ノ内仲通
十四号館五号
アグファ合名會社
大阪市東區南久寶寺町
四丁目七号地
アグファ合名會社





特選畫



秋晴　　　安田靫彦筆

世界知識の一大パノラマ

世界地理風俗大系

豫約募集

内容見本　ハガキで申込み次第進呈す

珍奇最新の世

生きた世界の一大展開

『先づ世界を知ること』これ我等現代人第一の急務である事はいふまでもない。本大系は諸君にこの生きた世界を知らしむべく我社が數年來あらゆる苦心と莫大の費用を拂ひ、學界各方面の權威者後援の下に漸く大成したもので、最もアップツーデートな生きた世界の展開であり活動映畫である。

居ながら全世界の見物

即ち本大系は全世界の文明國と未開國とを問はず、政治、經濟、產業の現狀は勿論都市、田園、山川、湖沼、建築、奇蹟、名勝、記念

刊行書目及內容

1 日本（內地）
2 日本（殖民地）
3 滿洲、蒙古
4 支那（上）
5 支那（下）
6 南洋（インドシナ マレイ）
7 インド、西アジヤ
8 ソヴェートロシヤ

編輯委員及執筆者（五十音順 〇印編輯委員）

〇文學博士 石橋五郎
〇理學士 飯本信之
文學士 今井登志喜
林學博士 上原敬二
滿鐵囑託 上田恭輔
學習院教授 遠藤金英
前總領事 大山卯次郎
〇文學博士 大類伸
商大教授 緒方清
〇早大教授 小田內通敏
理學博士 金原信恭
早大教授 煙山專太郎

界名勝風俗の一大繪卷物語

物、奇觀、文明的施設、風俗習慣、祭禮、遊樂行事、衣食住等々、地球上一切の自然と人事とに亘つて其現實の狀態を網羅し、鮮麗なる寫眞と興味豐かな本文と相待ち世界の隅々まで仔細に見物し、驚異と變化と感銘の限りを盡さしめんとするのである。

無慮一萬個の寫眞圖版

若し夫れ其內容に至りては本文全部百廿斤アート紙を使用し、印刷は現代我國が捧げ得る最高程度の能力を表現すべく勉めてあるので、一冊五百個、全二十卷にては無慮一萬個に達する夥しき數の寫眞版は、鮮明正確一々其實物を見るやうで、あるが儘の世界の姿を活寫し來り、讀む者のをして卷を掩ふ能はざらしむるものがある。粗製亂造の圓本流行の折柄我等は眞に本らしき本として劃時代的なる本大系を提供し得た事を喜ぶものである。

9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
北歐諸國	ドイツ（ポーランド）	イギリス（ベルギー・オランダ）	中歐諸國	フランス（スペイン・ポルトガル）	イタリヤ・地中海	アフリカ	北米合衆國（上）	北米合衆國（下）	カナダ・中米	南アメリカ	太洋洲・兩極

文學士 後藤朝太郎
○理學士 佐藤弘
文學士 吹田順助
農學博士 鈴木茂次
文學博士 關野貞
理學博士 高橋純一
○子爵 田中阿歌麿
理學士 田中館秀三
代議士 鶴見祐輔
○文學博士 鳥居龍藏
理學博士 中村新太郎
○農、法學博士 新渡戶稻造
前ブラジル大使 堀口九萬一
前英國大使 松井慶四郎
○理學博士 松村瞭
林學博士 三浦伊八郎
○理學博士 脇水鐵五郎
○理學博士 渡邊萬次郎
他數十氏

第一回配本 伊太利編出來

全國書店にあり親しく御手に取つて御覽ください本篇に限り賣します

略規

▼四六倍大版、背皮天金クロース上製函入、本文全部百廿斤アート紙一冊紙數三百餘頁、本文九ポイント總ルビ附、挿繪寫眞版一冊五百餘個三色版八枚、地圖一枚

▼全廿卷、豫約會員にのみ頒つ、第一回既刊、第二回は昭和三年十一月刊行、以後毎月一冊宛刊行

▼會費毎月拂一冊に付き金貳圓八十錢、一時拂金五十圓外に送本料を要す、入會金は申受けません。

申込締切 十一月五日

發兌 萬有科學大系 科學畫報

發行所 株式會社 新光社

東京市神田區錦町一ノ一九 振替東京四三二四〇

無產政黨戰線の整理

——(卷頭言)——

過般發會式を擧げた無產大衆黨の出現は、其成立の由來に於て已に他の無產諸政黨に重大の影響を與へずしては置かぬものである。新秋と共に開かるる各無產政黨の例會では、必ずや之に促されて起る重要問題が討議の中心を爲すであらう。而して私は之を機として無產政黨の戰線が著しく整理されるだらうと考へる。必しも統一とは云はない。孰れにしても之に由て無產階級の政治的活動が一段の堅實味を加ふべきは疑を容れぬ。

何故無產大衆黨の出現はさうした重大なる波紋の源泉となるのか。云ふまでもなくそは所謂極左分裂主義者を清算しての現象だからである。舊勞農黨內に二派の對立あり、所謂分裂主義派の幹部獨占が他無產政黨との提携を不可能ならしめて居たことは今更說くまでもない。而して勞農黨の解散命令と共に之等幹部派が「新黨準備會」に據つて捲土重來の機を狙つて居るに對し、先きにその壓迫に屈して居た非幹部派は、今度猛然起つて「無產大衆黨」の名の下に合法的結成を仕上げたのである。新黨準備會派が之を喜ばず無產階級戰線統一の攪亂者との汚名を投げかけるは怪むに足らずとして、兎に角永い間無產政團內の癌とも云はれた極左分裂主義の清算されたことは、則ち戰線の統一整理の上の最も大きな障礙を取り除いたことに外ならず、無產政黨運動に一新局面を展開するものとして大に吾々の注目に値するものである。

先きに舊勞農黨の屢々提唱せる無條件合同論を他の無產政黨が事毎に受容れなかつたのは、極左分裂主義を默認するのがいやだと云ふにあつた。換言すれば合同を論ずるに先つての前提要件としてそれの清算を求めたのであつた。然るに之は今度の無產大衆黨の出現に依て一應成し了うせられた訣になる。然らば所謂新黨準備會を除外せる無產階級の戰線は玆に完全に統一せらるるだらうかと云ふに、必しもさうではない。實際の形勢はそこまで未だ熟して居ない樣に私には思はれる。

第一の障礙は右翼の合同尙早論に在らう。右翼の陣營內には主義として無產階級の戰線統一に贊成であつて而も從來の經驗上容易に合同の結果に樂觀を持ち得ぬ人が多い。私は一面之等の人達の立場を諒とすると同時に、他面に於て最近形勢の變化に伴ひ新に各方面に起りつゝある合同の熱情を餘りに輕視せざらんことを望まざるを得ない。

第二の障礙は、極左分裂主義者を除いた各無產階級間にも實は根本の思想なり指導方針なりに於てまだ可なり大きな隔りのあることである。極左分裂主義と戰ふに忙しかつた間は一寸この事を等閑に附したが、さて之から累されざることが明になつて見ると、此事が亦合同に付ての一大關心事たるに氣付く筈である。この點に於て彼等の間に渾然たる融和を見るには更に尙ほ若干の日月を要するのではあるまいか。併しその限りに於て合ふものは合ひ離れるものは離れ、所謂廣き範圍に亙る統一は期せられないまでも、相當重要視すべき整理の近く行はるべきは之を期待して間違ないと思ふ。而してこの整理がやがて遠からずして來るべき「統一」の第一階段として視すべき理由あるは亦申すまでもない。

中央公論



第四十三年第十號
十月號
四百八十九號

ムカーディに現はれたる現代印度經濟思想

出井盛之

一

經濟組織はつまり人間性の表現である。それ故、人間性に差別のない以上、經濟組織の理法に、東は東、西は西の區別が成り立つべき筈はない。けれども近世の經濟學者の中には、西洋には西洋の、東洋には東洋の經濟法則があると說くもの

がかなりあるやうだ。

古典經濟學者は、現在厳しい非難を浴せられて居る通り、人間性を簡單化して考へた。勿論彼等は人間性の複雜さに全く盲目であつたのではなかつたが、人は自愛心によつて最も強く、經濟活動の支配を受くるものであると信じたのであつた。この古典學者の人性觀は人間性の單純化ではあつたが、彼等は東と西に、人間性の根本を差別するやうなことをなしたのではなかつた。從つて古典學者の經濟理論は、階級的性質を有しながらもある意味の普遍性を有した。しかるにその後歴史學派が興つて、古典主義の根柢に批評を加へ、經濟學説に『相對性』を與へてから、近代の學者はその影響より免がれないやうである。近代の經濟理論には陰然か陽然か、多分の地方性が現はれて居る。日本の經濟學は遺憾ながら正直に觀察して、パロデイの域を脱しない状態に今もなほ在る有様であるから、引例を近くこゝに求むるわけにはゆかない。色彩の明白な米國のクラーク、印度のムカーヂイの如き思想によつて、かゝる近代經濟學の特質に關し觀察を試みるのが便利である。西にクラークをとり、東にムカーヂイをとるといふのは、『レゼタチユニ・ドヂユルドヰ』の著者シーグフリードの筆法に倣つて、ヘリンー・フオードの國の思想と、ガンデイの國の思想を、對照せしめるといふほどのことではない。

チエ・ビー・クラークは彼の著作『經濟學説精義』の終尾に於て、明瞭にかく言つて居る『われわれの研究は、全世界の活動を包括して居るのではなく、經濟的諸影響に對して高度の感覺を有する、世界の中心部分に就てのみである』。クラークの經濟學説は多くの人々がすでに理解して居るが如く、オーストリヤ學派の限界主義を分配論にまで、極めて精緻に適用するに成功した、所謂限界的生産力分配學説と稱せらるゝものである。クラークによれば、北米と歐洲は『セントラル、パート』すなはち『中國』と飜譯すべき世界の部分をなし、亞細亞を夷狄の部分として扱つて居る。しかし彼は何故に世界が、しかく二大部分に區別せらるべきか、この肝要なる點に就いての説明は、全く忘れて居る。けれどもクラー

タのこの等閑よりも、一層甚だしい迂濶なことは、日本の經濟學者達がクラークの學說を紹介する時、かくの如き重大な但書のあることを全然忘却して居る場合の多いことである。クラークのみに限らず、西洋の經濟學書の中には可成り多く、東洋の經濟生活は、西洋の經濟法則に對して不感覺性を有して居るものであると、假定して居る。例へば、ホブソン、ビグー・シルバーマンなどの錚々たる英國學者は、現時英國産業の窮境にあるを救ふ一つの途は、バックワード・ピープル――それは主として日本、印度支那、を意味する――の勞働條件を、國際機關を通じて向上せしむることにあると說いて居る。しかもこの議論といふものは、英國勞働者の生活程度を低下せしむることは、英國産業の能率を減退せしむることになるのであるから、それは採るべき方策ではないといふ說を背景として居る。すなはちしからば彼等は、東洋の勞働狀態が國際勞働會議の如き機關の作用によつて、改善せられた場合、英國內であれば當然促進すべき筈の生産能率の進步といふことは、東洋に於ては少しも惹き起さず、たゞ英國製品の海外競爭にとつて好都合なる、東洋製品の生産費騰貴といふ現象のみが現はれるとなすのである。つまり同一法則が英國には常に利益を生み、東洋に行つては、不利益を與ふることとなるといふのである。かゝる得手勝手の議論を樹つるまでに、西洋學者の中には東洋と西洋とでは、異なつた經濟法則が支配するものであるとなすものが多い。

印度ラクナウ大學のラドハカマル・ムカーヂイは、西洋の産業主義の趨勢、産業革命の澎湃とした傾向も印度の生活を洗ひ去ることは不可能である。印度には印度の産業法則があるのだ。西洋の學者が一齊に合唱して居るやうに、小産業はすべて壞滅して、大規模機械生産に併呑される運命を免かれるわけには行かないものであるといふやうなことはないと、彼は西洋學說の押賣りに反對して居る。カール・マルクスが一般産業社會變化の宿命的行程を信じ、資本主義崩壞の經路を豫言したが、現代印度の學者ムカーヂイは、西歐諸國の産業的經驗は印度には不感覺であるといふて居る彼の論據は大要下の如くである。

すなはち現代印度の産業状態を仔細に觀察すれば、産業の大部は悉くコッテージ・インダストリーの上に築かれて居る。この小工作産業は西洋に於ては最早顧みられなくなつたものだ。産業革命はひたすらに大規模産業を利往して、多くの産業の場合、小規模組織は全滅して了ふべきであると考へられて居る。しかし西歐諸國でも小産業の存在が、通常思考されて居るところよりは、案外に根強いものがあることは事實が證據立てる。印度に於てさへ、近來小産業組織は、時代後くれである、大工場制度の到來が當然であるとまで思惟されるにいたつた。その理由を探ぐるには難くない。最近二三十年の間に紡績工業に於て、大規模生産が手工業制度を破壞して了つた。そこで斯くの如きことが他の産業にも及ぶであらうことは必然であると誰も考へる。けれども例へば、印度に於ける手織機産業の衰退は、經濟的原因によつたものではなくて、かの東印度會社の商業政策によつて犠牲とされたものである。またランカシャ工業の優秀であるといふことも、それは安價な婦人勞働を使用し得るからであつて、すべての産業が婦人を雇傭し得ない限り、大規模生産があらゆる場合に壓倒的になるであらうなどと結論するのは、早計の甚だしきものである。印度の小産業組織は最も不利益な狀態の下に於て、強き抵抗力を却つて發揮しつゝあるのである。しからば何故、印度に於て小規模産業に將來があるかといふと、それは印度の經濟的環境と社會的道德的理想とが、西洋とは著しく異つて居ることに歸因せしめ得る。第一に印度の農業は常に小農組織であつて、農業をなす傍に小工業を營むといふ制度が普ねく行はれて居る。第二に西洋の産業主義は家族制度と階級制度を破壞せずして、採用のできるものではない。しかるに印度人は家族生活の道德と、カスト制度による社會理想より離れるものでは決してない。第三に西洋の産業主義採用は、印度人の人生觀を變化せずしては、實現されるものではない。西洋人の欲望滿足に對する態度と印度人のそれとは、全然正反對して居る。西洋人は飽くことなく、凡俗の欲望と贅澤とを、追求して止まない。これに反して印度人は、僅少にして自然的な欲望の滿足を得れば、幸福を感ずるのである。「佛」の心境に入らんとして自我を否定する念願は、印度の經濟組織にある顯著な特質を與へて居る。印度に於ける

生産の目的は、富の集積ではなくて、富の齎らす洗心のための閑暇にあるのだ。近い將來に於て印度人の特性や、社會經濟制度や、法律や、慣習が一變するとは到底思考し得べきでない。故に西洋と印度との間には、産業化の方向に於て區別の生ずべきは必然である。西洋の學者が抽象的に西洋文明の進展の跡を、いづれの國民も追從するものであると臆斷するが如きは錯誤である。

ムカーヂィはかく東は東、西は西の文明原理があると説明する。彼は印度といふ言葉と、東洋といふ言葉を同意語として用ふるほどの僭越を勿論敢てなして居るわけではない。この點はとくに斷つておく必要がある。あくまで彼は『印度』と『西洋』の別を説いて居るのであつて、日本や支那までの代辯者を以て自ら任じて居るわけではない。然し彼の論ずる處は、おのづから東西文明對峙を暗示する。西洋文明を以て東洋文明に、優れたるものと前提して議論をなすが如きは、以てのほかで、印度における理論經濟學者にして西洋産業主義を無批判的に受け賣りしやうと企てるものに對しては、西洋産業組織そのものが、すでに西洋それ自身の思想家によつて、絶えず改革、否、破壞までも叫ばれて居ることを警告せねばならぬと、熱心にムカーヂィは西洋文明偏重論者に反省を促がして居る。思想の根底に於て、ムカーヂィは所謂地方主義（Regionalism）である。それは限界主義學派のタラータが、亞細亞を野蠻視するが如き意味とは聊かその内容を異にして居る。古典學派に地方的の色彩が乏しかつたことは、さきに一言した。マルタスの學説が萬國主義であることは言ふを俟たぬ。古典學説とマルタス學説が上の點に於て共通して居るのは、兩者とも中心を勞働價値に有して居ることに據る。勞働價値説の淵源は、十八世紀の自然權利の思想、殊にジョン、ロッタから流れ出て居る。原始的な自然的な社會を、思惟の基礎とした思想に、人類文化の錯綜から生ずる東と西の差別が、喰ひ入る餘地はなかつた譯だ。

ムカーヂイは東洋の社會科學界を、一人で背負つて立つほどの學者であるとは言ひ得ないまでも、一般現代にも東洋に、代表的な學者として、何人も異論のないやうな人物が存在するか否かは大なる疑問である。現代日本と支那の經濟學徒は、すべて西洋の學問から獨立した見地に立たうとはしないやうである。そのことが良いか、惡いかそれは別問題として、とにかく西洋を模擬するものが學んで遙かに西洋に及ばざる結果となるは當然のことである。革命の兵火をも餘所に、福澤先生が三田臺上に、ウエーランドの經濟原論を講じたほどの悲壯な勇氣を振つたが、依然として西洋追從の學風を脫しなかつたわが學界は、大學初年級式の論文を饒富に産出したほか『學の獨立』は實現されずに居る。政治的には天壤無比の國體を誇る日本が、學問的精神に於ては、全く西洋の捕虜であるのに、之れとよき對照を形造るものは、政治的には英國商人に征服せられながら、學問の根柢に獨立を叫ぶ印度である。印度の教育は約百年以前より、洋化が強く行はれることとなつた。マコーレーが曾て豫言した通り、今日の教育せられた印度人は顏面の暗色を除くほか英吉利人と異なる處がなくなつた。支那も日本も近世英語教育に熱心したが、印度人の如く英語を巧に繰り、英文に堪能なるものを輩出して居らない。印度の學者が日本の學者に比して、世界的に認められ易いのは、彼等が英語に自由であるといふことにも依るであらうが、精神的獨立これが彼等に光彩を添ふる本元の理由である。

ムカーヂイは所謂經濟學者であると、斷ずることはできないかも知れぬ。彼は社會學者であり、また同時に政治學者であると見做さるべき勞作を公にして居る。現代印度の經濟學は、その間に諸流があるにせよ、大體古代ギリシヤの經濟思想の如く、經濟といふものは道德や政治より、分離されるものではないといふ立場を保つて居る。それ故にムカーヂイの學問が、專門や分岐を尊重する人々から見るならば、餘りに多方面の研究に亘つて居ると稱せられるのも止むを得ないことであらう。余はムカーヂイの經濟思想につき、少しく詳細に研究を進めやうとして居るのであるが、その事業に着手するに先きだちて、近代印度の經濟思想發展の歷史を大觀しておく必要があると思ふ。印度經濟思想史は、あまりまだ我國に

紹介されて居らない。この史的智識の背景を缺いては、ムカーヂイの思想に對して充分なる正義を與ふることはできぬ。

近代印度經濟思想史の初期は、『三人のD氏』によつて開かれたと言つてよい。それはダヾブハイ（Dadabhai）と、ディグビー（Digby）と、ダット（Dutt Rowesh Chunder）である。彼等の時代は千八百六十年代から、十九世紀の終末に亘る約四十年間であつた。印度の思想にいつも濃厚な特異性を現はさしむるのは、英國の强手によつて握ぎられた政情である。こゝに印度の經濟思想が、政治的實際運動に作ふて勃興し進展すべき必然性を具へて居る。ダダブハイは印度政治運動の父と仰がれし人である。彼には經濟問題のみを論述した著書がない、しかし彼の政論は常に印度經濟的考察に立脚して居つた。彼は痛く印度の貧窮を慨した。しかしてその根本原因は、富の『流出』(Drain) に歸すべきものであるとした。この『流出』を以て、印度經濟狀態が貧弱である本源であるとなしたのは、彼の說明が最初ではなかつたかも知れないが、ダダブハイによつて、『流出』學說は堅き根據を印度思想に植え付けるにいたつた。ディグビーは官吏であつた。彼は永い歲月の間民衆と接觸して深き實際知識を有するに至つた。彼は『繁榮の英領印度』なる著書を出だし、印度は英國の支配の下に於て、物質的荒廢を來たすに至れることを摘發し、『流出』が印度の貧困に至りし眞因なることを主張した。開拓者『三人のD氏』の最後のものはダットである。彼も役人生活を永く勤め、地方民の生活狀態を知悉する機會を多く有した。彼はまた能文の著作家でもあつた。ダットは『流出』說の支持者であつたが、同時に新見地より地方民衆の疲憊を解說した。すなはち彼は地方民が貧困と饑饉に呻吟するのは、政府によりて、高率なる地租が課せられ、安固とした耕作權を有せざるに歸因するものなりとした。彼は十八世紀と十九世紀の初頭に於て印度の諸工業が如何に破壞され、農業のみが唯一の生業として殘存し、しかも農業民が高稅に苦しむの結果、極端なる貧窮と饑饉とが必然的に印度民衆を苦しむるのであると說いて惱むところがなかつた。彼の論說は一般に深き感銘を與へずしては止まなかつたのであ

ダダブハイ、ディグビー、ダットの三人は所說に於て一の共通點を有して居た。印度の疲弊は掠められる富の『流出』によるのであるといふ見方に彼等は共鳴し合つて居つたのである。英國はそのむかし、拾世紀の頃、デーン人の侵入を蒙り、デーンゲルトと稱した貢を支拂ふことを餘儀なくせしめられたことは歷史が語る。その英國が江戸の敵を長崎にの流儀によつてか、東印度會社と呼ぶ機關を据え付けて盛んに印度よりデーンゲルトを搾取したことは爭はれぬ。どれほど英國が印度人を絞取するに無節制であつたか、それは英國人自ら認めて居る。例へば最近チロルの『印度論』の如きは、そのよき例證である。かくの如き搾取制度の下に永く置かれた印度に、三人のD氏によつて唱へられたるが如き論議の起るは當然過ぎることである。またこの說に動かされた印度人が、『流出』に對して極度の恐怖を感ずることになつたのも怪しむに足らぬ。けれども印度の經濟的不進步が單一に流出說を以て說明し盡し得るほど、簡單明白なることであらうか。近代印度經濟思想の先驅者は、感動を民衆の心に深刻に殘しつゝも、彼等の所說には補正を受くべき充分の餘地を持つて居た。

印度の經濟思想に新生面を開かしむべき基礎を下したのは、ラナデ（Mahadeo Govind Ranade）である。彼の主要な貢獻は、印度經濟學を西洋事情と全く異にして居る印度獨自の經濟的特性の考察の上に築かうとしたことである。彼は明瞭に印度の生活が、西洋のそれに比して諸種の點に於て相容れざる差異を有することを指摘した。印度の社會生活の基調は『契約』や『競爭』にあらずして、『分限』であり、『結集』であること、農業が全人口の殆んどすべてが依賴する產業であり、しかしてその收獲は豫想を許さざる雨量の多寡によつて支配さること、大規模の商工業の發達なく、各種產業はいづれも小資本小組織なること、資本者階級なく土地は國家の獨占であること、富を集積するの念慮に乏しく、宗教は富の追求をでき得る限り避けしめんとすること、これらが印度經濟生活の特徵であつて、印度に於ける經濟生活がかく根本的に西洋と相異なる以上、西歐の學說は普遍回妥當性を有するものでなく、印度に適用さるべき學說は、改造せられた原理で

あらねばならぬとラナデは主張した。彼は印度貧窮の問題に就ても他の諸家より遙かに廣い眼界より觀た。印度固有の諸工業が東印度會社の魔手によつて、衰亡の悲運を餘儀なくせしめられたと通常は解説されて居るけれども、歐洲産業革命は東印度會社の存在がなかつたにせよ、同樣なる結果を齎らしたに相違ないであらうと述べて居る。從つて『流出』論一天張の諸先輩とは意見に隔たりがある。二十世紀の劈頭に於てラナデの提唱した處は不幸にして體系的に建設されて學説とまで成果しなかつたが、彼の示唆は强大な影響を後進者に及ぼすに至つた。

千九百零五年にはかの『ベンガル分割事件』が勃發した。該事件は總督カーゾン卿が輿論に耳を傾けず、人口八千萬を包括する廣大なる地方ベンガルを二洲に分割したといふ問題であつた。この專權的行政は、ベンガル人のみならず全印度人に大なる忿怒を激發して、反英運動は、猛烈に起つた。この政治的運動は經濟的な『ボイコット』と『スワデシ』（Swadeshi）との二手段によつて、目的を達成せんと計畫された。ボイコットとは英國貨物を排斥することであり、スワデシとは國産品を使用することであるから、兩語の意味は内容に於て殆んど一見相異なるところはない。しかしたゞ前者は對外に、後者は對内に重きを置く點に差異がある。印度全土に漲つたボイコット及びスワデシの運動は、熾烈に行はれたが、到底英國の膝を折らしめるまでの結果を收めることはできなかつた。しかしこの不成功に終つたボイコット、スワデシ運動は印度の經濟思想史に忘るることのできない印象を刻んだ。第一に感情問題を離れて、ボイコット、スワデシ運動が正しき理論的根據を有するか否かを、大いに思考せしめられた。若し外國品を排斥しその結果として、國産品にそれだけの購買力が振り向けられ、國内産業が勃興すればその運動の效果は顯著であるけれども、たゞ海外品の忌避が物價の昂騰を促がしたといふほか、印度人それ自身の企業の隆起を刺戟し得なかつた場合、それは單なる徒勞に歸する。激發した感情の拔口或は報復手段としての效用のほか、ボイコット及びスワデシ運動の經濟理論は、冷靜に立ち歸つて考ふるならば大いに反省すべき點を有した。現在の支那は日貨排斥を以て、外交の屈辱から生ずる鬱憤を晴さんと企てる當套の

手段となして居る。然し支那の日貨排斥はいつも失敗せず、有耶無耶の中に立消えとなるのが例であるが、現代世界に於て、外國との交易を無理に遮斷し、孤立的經濟狀態を維持しやうとするが如きは、相手に苦痛を及ぼすよりも、自己を却つて苦境に導くこととなるのである。ガンディの『スワラジ』の觀念が何を意味したにせよ、經濟的に觀れば復古主義であり國産主義である。倫理と經濟との調和は、いつも難問題と云はさるを得ぬ。印度の識者は過去の經驗に學んで、遙に高く廣く印度の將來を望むこととなつた。印度の經濟的環境を觀よ、富源を自己の力で開拓すべき技術と方法を修得すべしと彼等は目覺めた。ボイコット、スワデシの運動が、印度經濟學そのものの建設に一進境を造る直接動因をなしたことを見逃すわけにはゆかぬ。ボイコットは土を堀り返へし、スワデシは種を蒔く民族的運動であつたが、それはすなはち『政府』を離れ、國民の自力を以て産業の樹立を計る自覺の運動であり試練であつた。如何にして印度産業の前途を開拓すべきか、自ら當るこの建設的大事業の基礎としての學說闡明が先づ順序として要求せられた。千九百十年頃を轉機として印度經濟學は一大進歩を現はした。千九百〇九年に出でたるサアカール(Jadu Nath Sarkar)の『英領印度論』(British India)の如き、或は千九百十一年に出でたるバンナージエ(Pramath Nath Bannerjea)の『印度經濟學研究』(A Study of Indian Economics)の如きは、如何に潑剌として印度經濟學が建設的方向に進みしかを最も有力に物語るものと言はねばならぬ。なかにもバンナージエの『印度經濟學研究』は出色の著作である。この書の體裁は四六判四百頁程の謙遜した教科書タイプではあるが、余は東洋の有する最良の經濟學教科書の一といふ讃辭を呈するに躊躇しない。著者は東洋を知り、西洋もよく解して些の生硬を思索の結果に止めない。西洋の著名の學者であれば、斷簡零墨をも蒐集して、丹精振りを見せんとする我が國の學徒が、眞に東西兩洋の經濟原理を融合するに努力したバンナージエの著作の如きに一瞥も與へないのは、甚だ遺憾である。バンナージエはたゞ印度の經濟的事實を羅列或は解剖したのではなくて、事實を學說の光に照して見たのである。しかして彼は一切の政治的偏見から離脫して、眞正の科學者的態度を保持するに一貫して居

る。この點は印度の事情よりして、最も難關であるべき陷穽よりよく免かれたものである。

バンナージエの好著と同年に、ラドハカムド・ムカーヂイによつて『印度經濟學入門』(An Introduction to Indian Economics) が書かれた。彼はラドハカマル・ムカーヂイの兄である。さきに述べたラナデは、印度經濟學の改造を提唱したが、そこに議論は盡きて居た。ラドハカムドはラナデの暗示した方向に、研究の一歩を進めたのである。千九百十四年にはラドハカマル・ムカーヂイによりて『印度經濟學の基礎』(The Foundations of Indian Economics) が出版された。多産なる彼は更に『比較經濟學』(Principles of Comparatine Economics)『經濟學要論』(The Groundwork of Economics)、『經濟學の接境地』(Borderlands of Economics) 等を引き續いて公にした。先頃のことである約半歳を印度經濟生活の研究に費して來朝された、元慶應のブキャナン氏が、ムカーヂイに邂逅したことについて語られ、「彼は君位の年輩のやうだ」と余に言はれた。少壯氣鋭なる彼の學問的事業は多くを將來に期待しなければならないが、こゝに略記したる印度經濟思想發達の史的背景を有して生れたる以上、彼の思想をこゝに解剖して見ることは、興味が深い。とにかく現代印度の經濟學者の抱懷する希望は遠大となつた。彼等は初期の學者とは異つて、眼前の印度經濟問題に對して解說を與ふるといふやうなことよりも、全世界の經濟學に對して、その偏狹を正し、不備を補はんとする意氣に燃えつゝある。余は印度學界の進步を慶賀し、多くの期待を將來に繋ぐものである。

三

ラドハカマル・ムカーヂイは多方面の多作家だ。彼の筆は浩瀚な政治學書も書けば、また社會學に關する著述も成すのである。しかして行文はいつも流麗で、些の難澁がない。彼は倦まざる讀書家であるらしい。實に諸方面の智識に明い。彼は心理學を知り、地理に通じ、歷史にも該博である。たゞ彼は數學的符號を用ゐて理論を解說することと、貨幣問題に

關する議論は好まないらしい。ムカーヂイがかく多岐の學問に興味を有して居るといふことは、彼を經濟學者たらしめるに幸して居ると同時に、やゝもすれば彼の才氣が却つて經濟學に彼の研究を執着せしめない誘惑にならないとは限るまい。限界主義の經濟學が敗れた後に興るべき新經濟學の樹立のためには、種々の學問的素養を必要とする。在來の經濟學が行き詰つたのは、その前提的根柢に不合理が發見されたためである。新らしき基礎を造るには、數多の他の學問的進歩を綜合集成せねばならぬ。形式論理的經濟學から離れた學徒の興味が、從つて多方面に赴くのは自然であると言はねばならぬ。故にムカーヂイが學問的に多能であるといふことは、新興印度の經濟學の建設にとつては有力なる利器を具へたものと言はざるを得ない。しかし最近彼がやゝもすれば社會學や政治學に力を傾けんとして居るのは、經濟學的寄與を期待するものにとつては、多少の失望である。多作は必ずしも學者の地位をつくらない。アルフレッド・マーシャルが學界に名聲を成したのは、既にかの小冊『エコノミックス、オブ、インダストリー』を出だした時にあつたのである。余は未だラドハカマル・ムカーヂイの著作全部を讀破するには至らないが、主要なる勞作につき、彼の思想の分析的紹介を試みやう。

經濟學は要するに自然と人と組織に關する研究である。西洋の經濟學に現はれた自然は、犬の如く人間に忠從なるものであるが、印度人に對しては自然はベンガルの猛虎の如く、强暴なるものである。印度の生産は、ムンスーンの量と分配と季節とによつて決定せられるのであるから、西洋人流に自然をいつも消極的な手馴らし得るものと考ふることは不可能である。『進歩』といふ言葉は、人間が自然を征服する度合であると西洋思想は定義をする。印度人にとつては自然が征服されるには、餘りに强大であることが直感される。西洋人が常に生産的或は獲得的であるに反して、ムカーヂイが屢々說明する通り、印度は富の悦樂に關しては淡白であるのみでなく、之れを卑下する風が一般である。日本の自然は決して從順ではない。地震と雨とは、われわれが普通考ふるよりも、遙かに根深く日本人の生活行動を支配し變化せしめて居る。けれどもわが現代經濟學の文獻は、自然に對し西洋思想よりはなれた異色を出だしたことを示して居ないやうである。寧ろ

徳川時代の學者の思想にはつきり日本的自然觀が現はれて居た。それはともあれ、印度に於ては自然は人の奴隷とはなり難く、人間こそ却つて自然の鑄型にはめられて、その性格が形成せらるものであると明瞭に意識される。ムカーディの『地方主義經濟學』の主張の根本は、畢竟するにこの印度的自然觀に由來する。印度ほど雨と濕度とによつて、直接影響を受ける生活を營んで居る民族はない。この特異なる環境に育成する學問が、學問的特色をそこに求めんとするのは無理ならぬことである。ムカーヂイによれば、人は氣候、濕度、土壤等によつて、直接間接影響されるが、殊に内分泌に變化を受け、感情の機能まで變化を蒙るのである。しかして特殊なる社會心まで形成するに至る。故にある國民の社會行動の特質を理解せんとするには、ある地域に住居する同人種の個人に對する同樣の刺戟と反應による、社會的トロピズムや反射や本能を考察せねばならぬ。なほ人の社會行動は各地域が制限する職業や食料や財産の形式等によりて大いて影響せらるゝものである。かくの如き地域的特異性は習慣や習性となりて、個人の行動を型成する。故に個人の腦髓の働く處は悉く環境の支配を享くるのである。從つてムカーヂイの經濟學は『地方主義經濟學』であり、彼の社會學は『地方主義社會學』であり、なほ彼の心理學は『地方主義行動心理學』である。『地方主義行動心理學』とは何か。ムカーヂイ自身の言葉をして説明の任に當らしめるがよい。曰く『生物的反應行動の科學としての心理學的見地より觀るならば、相異れる文化標準に於ける各民族は、そのおかれてある特殊の周圍の中に築かれたる機會に從つて反應行動を現はすものとなさねばならぬ。しかし通例人間の精神は永遠の實在であつて、西洋文化の個人の中に完成せられ、これを以て他民族の心を判斷すべき標準となすべしと考へられて居る。生物行動心理學に依れば、異種文化の精神、道德、制度を、歐洲人の生活や思想に現はされた唯一無比の狀態に達する道程の階段にあると思考するのは非科學的である。なほ社會的行動主義は本能的傾向、感情、習慣等を理想或は價値に變化せしむる熱感と批評の役目を認めねばならぬ。これは最近の社會心理學に於ける非理智主義を訂正するものである。社會價値や文化標準なるものは、人間の本源性が使用によつて、變改せられ、個人

的基に社會的行動形態を形成せらるゝ過程を示すのであるが、これと同時に付け加へねばならぬことは、[illegible]これた本能や衝動に優れる存在價値を有するものである。故に新心理學は、人種間に精神的根本性の差異あることを指示し、これが故に社會及び經濟的形態も、異れる環境と發生的條件に於て、異れる反應組織を發達したことに起因して差異を生ずることを明示するのである。」（經濟學の後境地二六四―五頁）

古典學派の『經濟人』は漠然と一般の人間性を抽象化したものであり、限界學派の『經濟人』は實業家的西洋人についてのみの典型化であつた。いづれも獲得的である點に於て同一であり、印度の學者にとつては共に不可解である。『經濟人』の特性としての自利は、必ずしも惡徳を意味するものではない。この點に關して我國には多少の誤解がないとは言はれぬ。英吉利人の意義する、セルフ、インテレストといふのは、他人を突きのけ、押しのけての我利ではない。ある獨逸人によりて書かれた『音樂なき國』といふ著述に、次のやうなことが記されてあつたのを記憶する。英吉利人の意味する自利心を理解するには、倫敦の地下鐵道に乘つて見るがよい。車掌は列車の止まるたびに停車場の名を呼ぶ。けれども高聲に發音するだけで何人も、はつきり停車場の名を聽きとり得るものはない。車掌は停車場の名を高く叫ぶことを以て職務の一と心得、それを忠實に行つて居るだけなのだ。それで乘客が停車場の名を明瞭に聽き取り得るかどうか、そんなことは彼の關する問題ではないのである。他人のことを顧慮せず、たゞ自己の職責を盡すことが、即ち英吉利人の所謂自利心或は自愛心といふことであると。『經濟人』が惡徳的自利心の權化でないにしても、すべての人間生活要求、家庭や國家や藝術や宗教や科學に先んじて、獲得的収得斷定のみが、人間活動を支配して行くといふ假定には承服し難い。ムカーヂイの人性觀は現代の客觀的、行動主義の心理學に基礎を置いて居るが、強大なる自然に服せられ、その命令によつて生活が緊つて居る印度人としては、西洋經濟學の假設が如何に不合理であるか、それは分析を俟たず、直感し得るところであらう。ムカーヂイにしろまたは『印度の富』の著者ワディアやジ・シ如きにせよ、所謂行動主義心理學的經濟學者だとい

ひ得る。之れは我が國の學界が殆んど與つて、今なほ古典主義かマルクス主義かの論爭に停滯をして居るのと、大いにその傾向が違つて居る。わが經濟學者の頭の中には、スミス、リカード、ヴヰザー、マーシヤルと而してマルクスのほかにはない。今に古來の階級制度を神聖視する、傳統的の印度の學者が、ワラス、マクデュガル、ヴヰブレン、ワトソンなどの影響をうけやうとして居るのは、若い現代米國學者と全くその行き方を同一にして居る。新智識輸入にかけては人後におちざるわが學界が、いつまでも既成學説の訓詁注釋に日を過ごすのと、何んと興味ある對照を示して居るのであらう。

印度は半島でなく大陸であると印度人は考へて居る。印度の自然は廣漠として三億二千萬の人口を容れて居る。ヒマラヤの高峰は千古の雪を頂き、ガンヂス、インダスの二大流を走らせ廣大な沃野を造つて居る。ヒマラヤの高嶺はムンスーンの濕氣を奪つて、中部亞細亞を沙漠と化し、印度の氣温を高めて居る。ヒマラヤ山脈こそ印度を亞細亞の一部といふよりも、印度は印度人にとりて一の宇宙をなして居るといふ觀を抱かしめるものである。印度人は東洋と印度とを同一視するか或は印度を以て東洋の代表的部分であるなどとは敢へて思考しない。印度大陸は他の大陸が有するが如く、樣々な氣候、人種、宗教、方言と廣大な資源を藏して居る。印度が資源に豐富であることは言ふまでもない。豐沃なる土壤、無盡藏なる鑛物は、印度人に國民的可能勢力を自覺せしめて居る。けれどもムカーヂイの眼にはこの豐なる天然は、將來を約束する政治的潜勢力であると映つるよりは、彼の『地方主義』を支持する素因と考へられて居る。彼に依れば、自然は人間の性能を形造り、周圍に順應した特性なる行動形式と、社會價値を與ふるのみならず、かく變化せしめた形態を、何時までも持續せしむる保護者であると觀るのである。印度は幾度か他民族によつて侵略せられた。アリアン人に、シシアン人に、モンゴリヤ人に、またトルコ人の爲めに。けれども侵入はいつも徹底しなかつた。都市は侵略を受けやすかつたが、印度の地方的文化がその爲めに容易く動搖するが如きことは無かつた。侵入文化はいつも融合か交換に終つて、印度の傳統的文明は光を失ふやうなことはなかつた。かくムカーヂイは外來文化の不浸透を信じて居る。

印度の自然は如何なる特異の社會組織を育成し保育せしめて居るであらうか。ムカーヂイの說明によれば、家族制度とカスト・システム（階級制度）こそ印度經濟事情に大いなる特徴を與ふる社會制度である。『愛情と自制との道德の上に築かれたる家族制度は、犧牲、互讓、依信の精神を發揚するものにして、近世產業主義の基調である、競爭的個人主義の精神には正反對をなす。然しこの家族制度が培養した感情と經濟的諸結果とは、わが產業生活を明白に歐米諸國のそれより區別せしむる、根本的差異ある特性を生ぜしめて居る。』西洋に於ては經濟單位は個人であるが、印度に於ては家族である。例へば個人の欲望の內容や、個人の生活標準といふやうなものは、印度の人口繁殖には關係がない。西洋の人口增加は食物を獲んとする競爭とその法則によつて制限せられるのであるが、印度にあつては、この嚴格な法則は家族制度の作用によつて、緩和せられて居る。家庭は常に老幼を扶養して、西歐諸國の疾病手當や養老年金の如き制度を不用ならしめて居る。ムカーヂイは勿論家族制度の美點を稱讚するとともに、その弱點を充分に認識して居る。殊に家族制度は小企業時代に適するも、現代の產業生活に於ては、個人の自發心を抑壓し、且つ大規模組織の發達に適合せざることを指摘し、なほ堅牢なる印度の家族制度も、漸次個人主義の風潮に大なる不安定を感ぜしめられて居るに至つたことを說いて居る。われわれ日本人は彼が家族制度に就いて論ずるすべてに對して全幅の同情と理解とを寄せ得るが、印度經濟組織の單位は個人でなくして、家族であるといふ彼の主張のほかに、新らしき意義の問題は學び難い。

印度の社會に於て、最も特異なるはカストの制度である。嚴格なるこの階級制度成立の起源に關し、ムカーヂイは經濟的要素を强調して居る。元來カストは征服民族が、血液の純潔を保んとしたことに、由來すると通常解釋せられて居る。故に英吉利人は印度人自ら人種的差別を堅く設けながら、皮膚色の區別を撤廢せよと今日叫ぶは大いなる矛盾であると揚足取りをいふて居る。ムカーヂイはカストの本質が經濟的であることを力說し、該制度は西歐のギルド、或は勞働組合、露西亞のソヴィットの如きものと、相等しき性質のものであると言つて居る。印度の社會階級は更に幾多の階層に分れ、

各職業及び地方は、夫々複雜極まる階層を成して居る。この煩瑣なる社會層制度は、個人の活動天地を著しく狹隘ならしめるのほか、存在の價値なきものの如く見ゆるのであるが、彼はこのカストに重要なる社會經濟的意義を發見して居る。彼によればカストは家族の綜合であり、傳統的職業組合である。故にカストの一員であることは、大集團の一員たることである。衣食を缺けばカストによつて保護せられ、職業教育はカストによつて遺憾なく授けられる。幼少より早くカストの職業を見習ふによつて、技術的秘義を修得することができる。吉凶禍福を相わかち、各カストは破門の刑罰を以て各員の行動の監視を行ふのである。何故今もなほ印度人はこの階級制を固執し、「カストの正義」に莫大な資力を傾けるのであるか、それはカストが實に印度の社會理想を表現するがためである。西洋の獲得文明は生產に熱中して、社會の眞正なる目的を忘れて了つた。印度のカストは生產よりも分配を、能率よりも文化を追求し完成しやうとして居る。最もよき社會組織とは何ぞや、それはすなはち環境に最も適應したるものである。印度人の生活に大なる職能を發揮しつつあるカストを競爭主義の西洋眼を以て皮相の觀察を下してもらひたくない。これがムカーチイの印度カスト論の大要と稱してよい。

四

ラドハカマル・ムカーチイの經濟思想は、要するに三つの主要點から成つて居る。すなはち第一、自然的環境の個人及び社會心理に及ぼす影響に關する見解、第二、社會經濟組織と社會進化過程の地方的特性の概念、第三、印度社會理想を實現せんがための經濟組織建設の主張これである。しかし彼の著作は、西洋既成學說に對する批評を、強く表面に現はして居るので、やゝもすれば讀者は、彼の建設的努力を見逃がして了はないとも限らない。彼の批評は英國流の皮肉を交へた論理の遊擊ではない。學說の基礎前提に對し、可成り手嚴しい批評を加へてゆく點は、寧ろヴ・ブレンに類似して居る。殊に彼が在來經濟學の行き詰りは、最近に於ける生物學及び心理學の發達に歩調を揃へなかつたためと、功利主義心

理學と倫理學の交ぜ合せを規矩にしたためとであると強調するが如きは、ヴ・ブレニアンの口吻そのまゝである。またヴ・ブレンの如き『インスティチューシ・ナリズム』を高唱しないが、彼の所謂地方主義は、理想主義的インスティチューシ・ナリズムであるとも見做し難いことはない。ともかくもムカーチイの思想のある部分は、米國最近の學派に類似して居る。當然英國流の學問に影響せられねばならぬ立場にある印度學者達は、米國學説に傾きつゝあるやうである。

從來の傳統を打破して、經濟學を新方向に導かんとするものによつて、リカード主義や限界主義のやうな、價値と分配に關する理論を、架空な完全自由競爭の社會に於て試むることが、無用とせらるゝのは何等不思議ではない。故にムカーチイの經濟理論が、價値と分配とに關し甚だ無關心であること、或は在來の形式による價値論及び分配論が少なくも中心的地位を占めて居らないのは、不思議とするに足らぬ。彼が重心を價値論に置かなかつたことは、彼の理論體系の欠點ではないといひ得る。しかしその重きを置かざる部分に、容易く古典的學説を取り入れて居るのは、彼の思索の最大弱點である。彼の『經濟學要論』(The groundwork of Economics) は小形の書ではあるが、體系的に彼の經濟理論を明示する書籍である。この著述によつて彼の價格論の一斑を窺つて見やう。貨物の價格の高低には短期長期の別がある。賣手買手ともに少數であつて、市場の範圍が狹少なる時は、價格は常に貨物の稀少性と、買手の富力によつて支配される。然るに交通通信の發達により、市場の範圍が擴大すれば、需要と供給とは相一致する傾向を生ずる。故に需給が均衡して、交換が『平常價格』を中心として動揺するに至ることを考へ得る。平常價格は海水の平滿する場合の水準面であり、市場價格は風によつて生ずる水面の波の如きものである。長期的變化の場合は、平常價格が生産費に合致するに至ることは爭はれぬ。もし生産方法の進歩が期待される時は、買手は購入を延期すべく、また賣手は供給を新生産費によつて調節することが能きる。たゞ物價の低落が急速度であり、在荷が豐富である場合は、價格は生産費に逹せざるに至るかも知れない。

市場價格は絶えず新生産費の方向に動いてゆくのであるが、一般に動的狀態の下に於て、その合一することはあり得ない

となさねばならぬ。以上の如き概要の價格論は、余の腦裡に直ちにアルフレッド・マーシャルの理論を想はしめる。先づ需給法に於て『長期』『短期』『需給の均衡』等が、マーシャルの愛語であつたことは誰れしも氣づくことであらう。しかし如何にマーシャルとムカーヂイとの間に共通した點のあるを知るにせよ、余はムカーヂイが木に竹を接いだやうな摸倣を敢て試みて居るとは言はぬ。若しムカーヂイがマアシャルの說に負ふ處がありとせば、それは印度に於ける現實の價格問題を、解說するに至極便宜であるがためである。印度の食料品の價格は十九世紀の初頭まで非常に安價であつたのだ。しかるに十九世紀の中葉に於ては亂高下をなし、千八百六拾年以後よりは昂騰の勢を示し、二十世紀に入つては、一層甚だしくこの傾向を繼續し來つて居る。何故に印度の穀價が近世著しく騰貴するに至つたか、これが印度人を惱ましつゝある問題である。ムカーヂイはこの問題を說明せんがために、『短期』と交通の開發なき場合の『地方的市場』とを、『長期』と、『世界的市場』とを同一視して、實際問題を解明するに巧妙なる理論を組みあげたのである。交通機關の乏しかりし時代に於ては、印度の穀價は地方的に決定されたが、外國市場の影響が容赦なく浸入するに至つては、世界人口の增加と、富の增進とは印度の穀價を世界的平準に引きあげずにはおかなかつた、と彼は彼の理論によつて說明することができる。しかし彼が地方主義經濟學樹立の宣言にも似ず、餘りに競爭主義の西歐學說に依賴した嫌がある。マーシャルの主要な學績は、英國古典學說と、オーストリヤ學派の學說を調和したことにあつた。けれども彼は靑年時代英國々教會の僧職に就かんことを目的に勉學しただけに、マーシャルの學說の中には、何處かに人道的理想主義の香が漂ふて居る。ムカーヂイがこのマーシャルに私淑すべきは充分に理解し得る處である。それにしても、價格に及ぼす因習と競爭との關係につき、もつと突き進んだ硏究が望ましい。各取引每に新らしく價格が成立するものとなす西洋學說が、傳統を重視する印度の如き國における經驗に添はざるべきを考ふること、敢て難くないではないか。

ムカーヂイは分配論、殊に地代に關する說明に於て、案外脆く自由契約自由競爭の經濟學にまた安協して居る。彼によ

れば近年印度に於ける、地代の騰貴は甚だしいものがある。その原因はいろいろであるが、その一因は鐵道の敷設によつて、內奧地が開發せられ、僻遠地の産物が增加した價値を以て輸送せらるゝに至つたことにある。すなはち農民はこれがため收益を增大し、土地を得んとする欲望も從つて强大となつた。この欲求と土地の拂底とは地代の昇騰を促す原因をなしたのである『かくの如くにして高き價格は高き地代の原因である』と。つまりムカーデイの地代論は、地代を以て生産費の如何なる部分をも構成するものでないとした、リカードの論そのまゝである。しかるに前に述べたバンナジエは、之れとは全く異りたる理論を立てて居る。バンナジエは言ふ、印度に於ける地代は、因習と競爭と立法との三者の複合作用によつて居る。村落社會に存在した相互扶助的因習によつた地代は、近世競爭によつて侵かされ、農民生活を脅威したので、地代立法を設けこの形勢を防止せねばならなかつた。しかし立法は因習を無視せず、却つて因習の基礎の上に設けられたものである。故に因習は今なほ印度の地代の根柢を成して居る。なほバンナジエは曰ふ『リカードの地代理論は、世界のいづれの部分に於ても絶對に眞實であつた例がない。その理論の假定する諸條件を完全に具備した處はない、たゞ英國と合衆國に於てのみそれらの條件に餘程接近した狀態を現はして居るが故に、それだけこれが兩國に在つては、適應性を有して居るわけである。印度に於ては殊に顯著にそれらの條件を缺いて居る。リカードの理論は印度に於て眞理であるとはなし難い』と。バンナジエは地代も農産物の生産費の一部をなすと主張するのであるから、ムカーデイの說との間には、大なる距離が生じて居るわけである。これら印度二學者の間に於ける學說の相異を、詳細にこゝに論評する必要はない。地方主義を標榜する以上、閑却すべからざる分配の要素に就き、わがムカーデイは充分なる考察を試みて居らない恨を殘して居るといふことができる。

五

ラドハカマル・ムカーヂイは印度の自然と人と社會組織の特性をよく把握し、地方主義學說の旗幟を高く揭げながら、純粹理論の建設に於て新らしき異色を出だし得なかつた。これは彼が本質的に理想主義者であつて、科學的分析者や理論者ではない證據である。東洋の勝れた學者に豐に惠まれた天賦の素質は、いつも理想を啓示することにある。東洋の靈感と西洋の論理とを結合するに成功することほど至難の事業はない。たゞ東洋の血を享けたカール・マルクスは、獨逸の歷史哲學と英國の經驗的學問と、猶太の豫言者的理想との三者を融合せしめた。マルクスの學說そのものに對する論評は暫らく措り、彼に於て稀有な東西思想の調和が果されたのだ。露西亞は元來東洋である。それが西洋的文化によつて浸透せられたのは、比較的近世の歷史に屬する。もしマルクスの思想に東洋的要素がなかつたならば、本來に於て東洋的な露西亞人を動かし得る筈がない。

理想は鐵砲を打つ場合に必要な標的に等しい。銃は的に向つて放たれることが肝要である。鐵砲そのものを造ることが科學の仕事であれば、的を置くことは理想の役目である。近代の產業組織は限りなき能率を發揮して銃器を製造する、然し近代技術の進步は目的を教へて居らない。何處に向つて恐るべき現代產業の活動力を導かんとするのであるか。これは大なる人間の問題である。近世の產業發展は所謂資本主義制度の下に於てなされた。然してその結果は、有する者はますます與へられ、有せざるものはいよいよ剝がれ、利潤を追ふて機械的設備は完成を急がれると同時に、人間勞働は全く無味單調の苦役となつた。かゝる少數者專制の非人間的社會生活は何時までも持續することを許さるべきではない。そこで社會主義制度を迎へんとする聲が高い。しかしムカーヂイは社會主義によつて近世產業主義の產んだ惡弊を一掃し得るとは思はない。彼はなほいふ社會主義によつて西洋の社會は改造されない、否それは却つて西洋文明を破壞に導くものとならう。西洋が今日必要として居るのは社會主義でなくて、社會改造理想主義である、個人の發意と天才と企業心は社會進步の源泉であると言つて居る。ムカーヂイの意味する社會主義は一切の生產手段を國有化せんとする所謂國家社會主義に過

ぎない。精神文化を犠牲にして止まぬ印度人に、唯物的社會主義が共鳴を得ないのは寧ろ自然であると言はねばならぬ。

ムカーヂイは所謂社會主義に對して反對である。けれども勿論節制なき自由競爭主義を採用しやうとするのではない。印度の社會組織に於てこそ西洋に於けるが如き、過度個人主義の發達を見ずして濟むのである。印度の社會生活と經濟生活は共産的原則を最早すでに實行しつゝあるのである。それのみならず一體米常食人種は社會共同性を有し、小麥食人種は個人主義的社會制度を自ら發達せしむるものであると彼は觀察して居る。何故食物と社會制度の間に關係があるか。その説明は概略次の如くである。米作は必ず灌漑を要する。各耕作地は水を引く爲めに、協同的に一定のレベルに均らす勞働がなされねばならぬ。また洪水を修め、堀を造り、或は旱魃に處するに際しては、村落の全員一致協力して、晝夜の差別なく働かねばならぬ。若しその一員が共同利益に謀友するならば、直ちに社會的擯斥は下るのである。水を用ふことは孤立的個人勞働に常に相反し、必ず協同的所有とを作ふことになつてくる。故に收獲の行はれる毎に、共同的本能と習性が、米作國に於ては養成せられるのである。之れに反し小麥の耕作は他人の協力を要しない。個人的勞働の如何が、直ちに收獲の多寡を決定するのである。ローマ法、英吉利のコンモン・ロウは、ともに小麥國の産物である。なほムカーヂイは更にいふ印度にあつては、共産主義も個人主義も共に目的それ自身ではない。個人の目的完成は、社會の目的完成を無視して行はれず、社會の結集的目的の達成は、個人及び階級の目的を度外視して貫徹せらるゝものではない。社會と個人との完全なる有機的融合、それを印度的共産主義眞髓とするのである。更に印度的共産主義の精神は先験的人生觀によつて、特色を發揮する。今日に於ても印度に於ては、富力の大小や官位の高下が社會價値を測らない。衣食を低くして高遠な思想を抱くことが、印度人の理想である。清貧と克己とは好んで追求せられるのであつて、貧乏は西洋に於けるが如く反社會的でもなければ、慘酷でもない。往々貧者は全社會の最高名譽を與へられるのである。かくの如くムカーヂイはあくまで印度神秘主義の不滅を主張するのである。

彼は具體的實行政策として（一）小工業の興隆と、（二）農村の改造を提唱して居る。これによつて西洋産業主義の害弊をのがれると共に、傳統的印度精神を發揚することのできる經濟生活を樹立せんことを企てゝ居る。小工業とは家族或は少數の職人の協力によつて行はれる小工作産業であつて、種々の態様に分類し得べき産業組織が意味されて居る。曾ては繁榮した印度の村落工業は漸次衰頽し、殊に十九世紀の後半に於て、手織機産業は壞滅の悲運に際會した。しかし今もなほ諸種の小産業組織は依然として存在するのみでなく、歐洲諸國の例に就いて見ても、小規模産業の勢力の侮るべからざるものあるを學ぶことができる。獨逸に於ては人口の五分の二が、デンマークに於ては人口の八割が五人以下使用の産業に從事して居る。故に適當なる金融制度を設け、政府が機械の貸與をなす等の保護を實行し、技術教育を奬勵し、かつ小規模企業の弱點たる販賣組織の缺陷を補ふ施設を怠らざれば、印度に於て小工業の隆盛を期することは難くないとムカーヂイは熱心に論ずるのである。彼の小工業復興論は資本主義的大規模産業の齎らす、階級の分裂や、人間勞働の機械化等の事實に秀えて中世紀への復歸を主張する懷古論とは性質を異にして居る。彼は餘りによく印度の現狀を知つて居るが爲めである。我國の人々はやゝもすれば、印度の學者はたゞ安易な辭を弄ぶ感情家に過ぎないと思ふの弊風があるが、ムカーヂイは村落より村落へと旅して實地の踏査をなし、或は夜學校を自ら設けて土人の子弟を訓へた。それらの經驗によつて彼は印度經濟の實相を深く握つたのである。搾取せられた印度人の手には資本がない。資本の蓄積なくして近世的企業を起し得る望みのないことは言ふを俟たない。それに加へて印度の中流階級は教養にのみ專念した教育方法を固執する結果、青年は官吏や辯護士となるを欲して、實業的生涯を求めない。それ故に旺盛な企業心と科學的工業技術とは、容易に印度に於ては得難しとせねばならぬ。これらの實狀の下にあつて、産業の勃興を期するにはどうしても、小規模組織の線路を通らねばならぬと、ムカーヂイは結論したのではなからうか。彼が理想主義を高唱するの裏面には、かゝる周到なる事務的用意と、印度の將來に對する明るき希望をすてざる民族愛の發露とが、悲壯の姿に於て隱されて居る。

ムカーヂイは農村問題の熱心なる研究家である。都市は外國勢力の脚下に蹂躙され易きに反して、田園には印度古來の組織と精神を保有するが故に、村落生活の荒廢を防ぐとともに、その前途を大いに開發しやうとする努力を惜しまない。彼は日本の耕地整理の實驗をよく語り、また二宮尊德翁の功業を推稱して、印度に二宮翁出でよと激動の言葉を發して居る。また彼が力說しつゝある都市對農村均勢論は大いに傾聽すべき價値がある。世界諸國に於ける農村の不安は、都會に住居する商人と金融業者との横暴によることが多い。殊に日本に於ては最近地方の小工業と農業は、非常なる都市の壓迫を受けて居る。その反動として、『地方主義』運動の徵候が現はれるに至つて居る。(富山縣下に於ける電燈問題の如きは、都市中心統制主義に對する反抗の、地方共同主義の擡頭と見做し得る)。印度に於ても都市が村落を强奪する傾向は著しい。これを救ふべき手段として、地方が現時も固持する共同精神を善導し或る意味に於ては地方聯合ギルドとも考ふることのできる、カスト制度の基礎の上に、經濟的協同社會の實現を彼は目論んで居るのである。

ムカーヂイは理想をしきりに叫べども、空想者では決してない。彼は近代科學の最新方法論を充分に會得して居る。しかし彼が餘りに印度精神を美化する結果、やゝもすれば冷靜なる判斷を缺いて居る。例へば千九百十六年出版の彼の著書に、印度の協同的精神は、ストライキの勃發の如きこと絕無とするであらうと豫言した。然るに本年ボンベイの工業に起つた熾烈なる勞働爭議の如きは、明白にかれの言葉を裏切つて居るではないか。こゝに於て疑問は涌くのである。『西方諸國の經濟制度は、それらの國の地理的及び社會的環境に適合したるものである。經濟制度の根源はその地に居住する民族の人種的特性にある。故に印度の地理的及歷史的環境は、その特異ある經濟組體を發達せしめた、しかして將來の進化は必ず過古の途を踏むに相違はない』といふ彼の論斷は、幾何の眞理を果して保つであらうか。印度には非慾なる資本家起らず、階級間の紛爭なく、小工作場には二三の織機が電動機によつて動き、分配はいつも公平にして勞働は常に愉快を伴ひ、絲を紡ぐ勞働者はまた野菜を作り家畜を飼ひ、萬民喜悅歡樂の生命を享取するといふ、彼の求むる極樂淨土は、果し

て過古の軌線の延長によつて實現せられるであらうか。

環境が人間身體の內分泌にまで影響して、人間性を變化せしむるといふ、ムカーヂイの『地方主義心理學』のいふ處は、全く證明せられざる假定に過ぎない。少なくともわが日本の場合、西歐人の眼には、傳奇的とのみ思はれたほどの、優雅なる風俗と習慣と制度を有して居つたのだ、それが今日は產業革命の渦中に、都會も田舍も擧げて卷き込まれ、西洋が經驗した殆んどすべての問題を現はして居る。現在の日本は最早『東洋』ではない、けれどもまた勿論『西洋』に全然なつたといふわけでもない、しかし日本は完全に世界の一部分となつたのだ。印度の綿花はランカシヤ產業の原料とはなり得ないで、日本の紡績業を進步せしめて居る。これが現代の伴ふことのできぬ傾向である。運輸交通通信の驚異すべき革命と、取引決濟手段の便利とは、世界を否く一個となさしめた。けれどもそれと同時に世界の立體的色彩は、漸次平凡なる平面的模樣と化せられるの歎はそのやむを得ない代償である。印度のみこの世界的大勢より超然たることは許されない。印度の家族制度やカストも近來大いに動搖しつゝあることは、ムカーヂイの近著に彼自ら指摘しつゝある處である。

余はムカーヂイの經濟思想を、できるだけ主觀を交ふるを避けて專ら紹介をなすにつとめた。彼の學說が未だ渾然として珠玉の如き完璧の域に達しないにせよ、思想の規模雄大にして、豐富なる暗示を含有することに於て、何人にも魅力を及ぼさずしては止まぬ。殊にわが國の學徒に對しては、彼が步みし思索の跡は限りなき價値を有する好個の參考である。この稿を結ぶに當り、特に感想することは日印兩國間に學界の交通―紹介、批評、交遊―が盛んに開けたならば、必ずや彼我の文化に貢獻することの多大ならんことである。(昭和三年八月十五日)

(附記、印度經濟學の發達を述べるに當りては、在ボンベイ濱野恭平氏より贈られたる、D.A. Shah, Indian Point of View in Economics に負ふ處が多かつた。)

政治國家と賄賂

長谷川如是閑

一 政治生活即賄賂生活

A 賄賂といふものは、何處にでも行はれるものでせうが、東京市ほど絶え間なく行はれてゐる所は少くないでせうな。

B 絶え間なく行はれてゐる所はあるかも知れないが、絶え間なく發露されてゐる所は少いでせう。

A それだけ社會が敏感なのでせうか？

B 潜伏し切れないほど豐富なのでせう。

A 星亨も賄賂で殺ろされたのですが、賄賂をとつたので、代りに命をとられた例はあまりないやうですね。

B 東京市は賄賂に關していろ〳〵のレコードを作るつもりでせう。

A 尤も東京市ばかりでもありませんね、復興局が出來ればすぐ收賄事件が持ち上るし、ずつと昔も開拓使問題なんてのは隨分怪事件でした相ですね。シーメンス事件も可なり大規模でしたね、貴族院で田中男爵が山本伯を彈劾した時は猛烈でしたね。製鋼所事件だとか宮内省事件だとか西本願寺事件だとかいふのは、一體何でしたか、とても覺えてゐ切れない。

B 覺えてゐる必要もありますまい。人の噂にも上らず仕舞ひになつてゐるのがいくらあるかわかりやしません。天知る、地知る、我れ知る、汝知るで、知らぬは世間ばかりなりといふのも澤山ありませう。

A さうなると、金時計一つで醜名を鳴かした齋藤修一郎なんて人は氣の毒ですな。あの時分は賄賂に對する一般の感覺も多少鋭敏だつたのでせうね。

B かう慢性になつては感覺も鈍りませう。

A　然し東京、大阪、京都などと大都市が代る〴〵問題を起すのは、やはり自治體の制度が賄賂と密接の關係でもあるのではないでせうか？

B　西洋人の說では、賄賂は專制主義につきもので、つまり社會の監督をうけない獨占的權力の下に於て最もよく賄賂が行はれるといふのです。だからデモクラシーの西洋よりも、デスポテイツクの東洋に賄賂が公行する。トルコ、ペルシヤ、支那等は賄賂公行國で、つまり、賄賂はオリエンタリズムの一つだといふのです。西洋でも、東洋風の專制主義の榮えた舊ロシヤなどはだから賄賂が公行してゐたさうです。

A　だからソヴイエツトになつても賄賂に嚴罰を加へる必要があつたのでせう。……ぢや昔からデモクラテイツクの自治制は賄賂とは緣のない筈ですが？

B　さうです、自治制そのものゝ行政には賄賂は比較的行はれないが、然し、その自治體の人間が、國家の政治に關與すると盛に賄賂をとつたものです。イギリスなどでも十九世紀の初頭までは隨分ひどかつたやうです。市や町村は、大抵纏めて市民町民の投票を候補者に賣つたものです。その評判には市町村が直接それに當つて、市町村の收入の一法としたのだといふことです。

A　日本では今でも村などでさういふのが大分あるといふことです。寺が檀家の投票を纏めて賣るのは當り前のことのやうに考へてゐる坊主もあるさうです。此間の普選で、それが盛だつたといふから驚きます。

B　イギリスでも十八世紀には、寺院や宗教團體が投票を纏めて賣つた相です。

A　日本は百年餘り遲れてゐるわけですね。

B　國家の政治は、自治體の利害と關係がないといふので——殊にイギリス人などにはさういふ觀念が强いでせうからね——さういふことを平氣でやるのでせう。つまり自己に直接の利害の關係のない政治上のことについては、賄賂をとつたゞけが得になるといふので、自治體が自治體として賄賂をとるといふことになるのでせう。

A　然し、地方の地主などは直接に中央政治の利害をうけるのでせう。

B　ですから、大地主などは借地人や小作人が地主の所屬する以外の政派に關係することは許さなかつたのです。だから土地が賣れると、その地域の住民は、全部買主即ち新地主の黨派に轉じたといふことです。

A　つまり賄賂は國家の政治によりよく行はれる性質のもの

だといふのですね？然し、日本では自治體の方が——とも云へないまでも——自治體にも皆に行はれるではありませんか？

B　それは日本の自治體が、實は自治でも何でもないからです。元來、自治といふものは、決して與へられたものではなく、自分でこしらへたもの、市なり町村なりが歴史的に發展させたものでなければ意味をなしません。だから自治は政治狀態であつてはいけない、生活狀態でなければなりません。前にいつたやうにイギリスで十八九世紀までは地方自治體は甚だしく腐敗してゐたといふのは、國家が市邑自體を國家政治に參與させたからです。つまり市邑といふものが自治だから、それを國家が收益の目的とするには、それの代表者を國政に參與させるといふことにして市邑から纏めて租稅をとらうとしたのです。市邑の方では迷惑千萬だから、御免を蒙らうとしたが、國權の强くなるに從つて、それを拒絕することが出來なくなつて、代表者を出すことになつたが、此の代表者が商人階級の發達につれて、中央政治に於て、貴族や僧侶と互角以上の勢力を得るやうになるに從つて、自治體は、今度はその代表者に投票を賣りつける商賣を始めた譯です。オッスクフォードなんて町は二千磅で賣つたなんて話もありますが、昔は隨分安かつたものですね。

A　それに、自治體そのものが國家政治に對して賄賂をとつたといふことになるのですからいゝが——あんまりよくもなさ相だが——日本の自治體のはそれとは違つて、市民の代表者が、自治體をだしに使つて個人的に賄賂をとるのです。賄賂も日本のは公共的でないね。

B　ですから、今いつた通り、自治體は自分から發展したものでなければならないのに、日本の自治體は、元來、自治的でもなんでもない市民の頭の上に、西洋の自治制をとつてくツつけたのだから、市民は市政を自分の組織とは考へないで、西洋の自治都市の人民が國家に對すると同じやうに、市なるものを心得てゐるのです。日本では、市民は、市を、我々市民から租稅をとる機關であると考へてゐること、西洋の市民が王樣をさう考へたのと同樣なのです。だから市政なるものに對して、市民は、國政に對すると何れだけの區別もないのです。市政は日本では國政です。從つて國政につきものゝ賄賂が、日本では盛に市政に行はれるわけです。

A　國家の政治に賄賂がより盛に行はれるといふのは？

B　國家の政治は、昔から階級の政治でした。階級の政治は、政治者と被政治者との敵對關係で、所謂『自己の政治』ではありません。從つて、政治者は、政治することによつて、

決して社會的責任を感じてゐるものではなく、階級的責任を感じてゐるものです。昔の封建的國家なら、國家のためならば人民をどんなに扱つてもいゝと考へ、所謂『御家大事』でしたが、今日ならば、資本家大事です。それは何故であるか。百姓からの掠奪によつて生活してゐた武門階級でも、『農は國の本なり』などゝいつて社會的關係を考へた位だから、その責任も社會的な筈だが、と思はれますが、然し、階級的の政治が自治の統制と異る點は、支配する者が、支配されるものゝ生活を生活してゐないといふことです。政治的支配の特徴はそこに在るのです。武士は、農は國の本なりといつても、決して自分で百姓はしない。今日の資本家も、勞働がなければ決して生産は出來ないといひながら、自分は勞働しない。で資本がなければ生産も出來ないのですから資本も大切だといふ理屈を案出してゐるが、然し資本は生活でなくて、所有です。彼等には所有はあるが生活はないのです。自治統制は、その正反對で、生活はあるが所有がなかつたのです。即ち自治團はよかれ惡しかれ、生活自體の統制組織ですが、政治團は、自分の生活の統制ではなく、他の生活の支配です。だから支配の利は自己が受けるが、害は相手が受けます。

A　大さう都合のよい譯ですが、で賄賂が取りいゝといふ譯は？

B　『賄賂が取りいゝ』のではありません。それは賄賂的利得による生活なのです。武門貴族又は地方豪族の類は、何によつて生活したか、歴史を御覽になればわかるが、貴族は地方豪族からの貢物によつて生活し、地方豪族は地方民からの貢物によつて生活したのです。だから豪族が盛になれば、そのまゝ貴族になりました。この貢物生活が武門生活の中心です。これは即ち賄賂そのものです。西洋のギルド即ち職業的自治團は、王様や地方貴族に年々この貢物を出して、その掠奪を脱れ、又自治の特許即ち行政に王様の干渉をうけないといふ特權所謂チヤーターを得たのです。これは賄賂の最も大規模のものです。西洋人は賄賂を東洋的などゝいふのが、彼等の封建政治は王様や貴族の賄賂生活であつたこと東洋と何の變りもありませんでした。

A　で政治的生活は賄賂生活といふロジツクになるのでせうが……

B　ロジツクではありません。事實です。

A　事實でせうが、然し賄賂と呼ばれるものをとるのは王様でなくて家來ぢやありませんか？

B　王様が貢物をとり得ると同じ組織を家來も持つてゐるのです。

A　家來は貢物はとりますまい？

B　性質が同じなのです。家來は即ち舊政治に於ける行政官、裁判官の類ですが、それが丁度王様と同じやうに、ある利益を提供しないものには妨害を與へるといふ獨占的地位をもつてゐたのです。少くとも、ある利益を提供すれば、交換的に利益を與へてやることが出來る地位にあるものです。彼等の職務は彼等自身の任意によつて何うにでもなるといふ專制組織では、賄賂を誘發させぬことが却つて困難です。又これを取らぬことも困難です。清廉の士が偶賄賂を退けると、それが歴史に殘るほどです。彼れは常人の決してやり得ぬことをやつたからです。此の組織で、賄賂を出させまい又は取らせまいとするのは、人間が皆歴史に殘るやうな清廉の士たることを要求するものです。それは貢物をとらないやうな王様が欲しいといふのと同じです。

A　然し、そんな封建組織でなく、今日でも賄賂は公行――ではないが――潜行してゐるのは、賄賂が格別封建政治につきものといふ譯でもないからでせう？

B　封建政治につきものではありません、政治につきものなのです。政治は、支配する者が、自分の生活に沒交渉な事務を扱つてゐるのです。政治する者は、丁度前云つた、イギリスの自治市邑が國家の政治に干與することを、自分の生活以外の「政治」に干與するものと考へて、そんなことには何うでもいいから賄賂をとれ、と考へたのと同じやうに、生活利害の異るものを支配するのには、正當な判斷でするよりは、利得のある判斷でする方がいいと考へるのは人情です。吉良上野之介が賄賂專門だつたのも、彼れの仕事が自分の生活上のことではないからです。いくら上野之介だつて、貴様に賄賂をやるから貴様の子供を親不孝ものになるやうに育て上げて呉れと頼まれたら、決してその賄賂はとりますまい。よし取つても、決して自分の子供を態態自分に對して不孝をするやうに育て上げますまい。從つて賄賂を出す方でも出すことをしますまい。自治體に於て、眞の意味で成立してゐる自己統制はさういふ意味のものですから、賄賂は各自の生活自體を惡くする結果になるから、行はれないのです。尤もかういふ意味の自治は、アリストテレスや、老子やヒユームやが考へたやうにその自治體が古代ゲルマン式の全員會議の出來るほど小さいものでなければなりますまい。だから今いつたやうに、自治體の統制が直ちに自己に響いてくれるやうな理想的のものは今日は存在しないでせうが、自治體の組織の性質に於てはさういふものなのです。反之、政治は、その政治の判斷なり過なりが、自分に響いて來ないで、自分が支配してゐ

る他の階級へ響いて行くのです。つまり醫者が藥を間違へても、響くのは患者の身體で自分の身體ではないのと同じです。だから國家的地位で人民に對する仕事をしてゐるものは賄賂をとるが、また人民が偶々國家の仕事をすると賄賂をとる。殊に、實際の仕事をする『家來』即ち當時の行政官、裁判官は、その支配階級內でも、これはまた主人と違つて、その階級自體の利害さへも直接自分に響いて來ない連中です。丁度、上野之介が大名の生活に於けるが如きものです。といつて百姓の生活に共同の利害をもつてゐるでもない。つまりどつちがどうなつても、自分だけよければいいといふ地位にある中間派です。だから上からでも下からでも、利益なり賄賂なりを提供されれば、これだけ利得するばかりなので、決して辭退すべき必要を感じない。その被害者は、共に彼れ自身と共通利害をもたぬ階級です。これで賄賂をとらないものは、人間並の欲望を缺いた片輪でなければ、聖人です。だから偶々さういふ人間が出ると歷史に殘つたのです。イギリスの自治體で昔、公行したといふ賄賂もつまり此の意味の賄賂だつたのです。自治市邑は國家の仕事などに利害を感じないと考へたのです。そのころの自治體だつて、ギルドの組織自體、市邑の統制自體には、少くともそれほど烈しく、賄賂は行はれなかつたのでせう。ワルポール時代には『人間には代價がある』といはれましたが、それも人民の代表者が自分を國家に賣りつけたのです。國家組織の必然です。國家はそれを防ぐために大抵死刑を科したものですが、それでも防げなかつたのは、それが『政治』といふ支配組織そのものの本質から來てゐるからです。

A　古代のデモクラシーでも賄賂のやまないのは、やはりそれが『政治』といふ組織だからといふのでせうが、然し近代政治は所謂セルフ・ガヴアーメントで、その性質が自治體に近くなつてゐるぢやありませんか、それにやはり賄賂のやまないのは何うしたものです？

B　だからです、その『セルフ』は封建的セルフではなくて、階級的セルフで、その生活形式は、封建的支配者のそれと同じく特別のものだからです。今でも政治される者の生活と政治する者の生活とが、別なカテゴリーに屬することは、政治階級が自分を文化階級などと呼んでゐるとによつても明かです。彼等の生産階級を見る事は、やはり『農は國の本なり』式で頻りと『勞働の神聖』などを高調するが、自分自からは決して勞働を生活しないで、文化だけを生活してゐるのです。がやはり此の連中は殿樣で、實際の支配的仕事をしてゐるものは、今いつた封建的時代のそれと同じく、資本家階級の利害が間接にしか自分に

害と一致しない、それと一般勞働階級の利害とも直接には共通でないといふ中間派の、所謂ベチブル連です。この連中は、鳥には獸だといはれ、獸には鳥だといはれてゐるのですが、それが鳥の仕事をしてゐるのだから、百姓が農村の自治に干與をしてゐるのとは全く違つて、やはり上野之介式に『政治』に干與してゐるのです。それが賄賂取りの條件を充分に備へた組織である點に於ては、アンシアン・レジームのそれと少しの相違もありません。

A　日本の市政はその政治と同じものだといふのですか？

B　同じよりは、少し惡いでせう。

A　おや〳〵何うしてゞす？

二　日本の自治體と賄賂

B　つまり國家の政治よりも惡くなるわけがあるのです。國家の政治も今いつたやうに、賄賂的ですが、然し、國家の機關は近代に至つて、國家組織の完備に伴つて大分發達して來て、いはば段々科學的になつて來て、その各部が専門的となつて、官吏も科學的の意味で専門家的になつて來つゝあります。非科學的で非専門家的なのは、最高機關たる、所謂政務的官吏だけです。ですから國家の官吏のうちには、賄賂によつて得る利得よりここでの技術家的要求を貫徹することも出來ます、たとへば土木技師は、セメント屋が賄賂をもつて來ても、惡いセメントを買り込まうとしても、専門家的興味と責任感とでこれを退けることも出來るといふ譯です。法制の立案者は、上官や人民から利益や賄賂を提供されて不都合な立案を強いられても、學理的に、自分の信ずる案を固執するといふ心理を持つことも出來ます。その上に組織や仕事に關しても、國家のそれは、近代國家であれば、所謂國民的監視といふ奴が――たとへいゝ加減のものにせよ――多少は實際的の効果をもちます。政黨などは、自分はとにかく敵黨の非違は見逃がすまいとする。――尤もこれは、近頃のやうにお互に烈しくなつてしまうと、めい〳〵自分の藪に火のつくことを恐れて、敵に對して甚だ寛大になつて來たやうですが、それでも、何しろ監視者の區域がひろいことは、自治體の比でない。自治體の方は、やはり大都市では、組織も仕事も國家同樣、科學的になつて來つゝあるが、然し、自治といふ制度である以上、所謂市民の代表者と稱して實は非市民的生活態度の階級――即ち政治階級――に屬する連中が、その恐るべき、上野之介的『政治』行政の生殺權を握つてゐる譯です。甚しい偏僻の町村へでも行かない限り、此の中間生物が日本の自治體の支配者です。市民的生活者でもない、國家的生活

者でもない、といつて外國人でもないから、『排外』を喰はせる譯にも行かない、といふ厄介な人間が日本の自治體の統制者です。だから彼等は、市民の利害も、國家の利害も、關せず焉で、鐵管もかぢる、レールも喰ふ、砂利も喰ふ、况んや板舟をや、瓦斯をやです。その上國民的監視といふやうなものは、自治體には及ばない。大阪や北海道のものは、東京の市政がどうならうと構はない。

A　でもその代り市民が國家の仕事に對するよりも直接に監視するでせう？

B　所が日本の自治制は、市民の頭上に、外國から移し栽せられた外來制度たること、前いつた通りですから、昔の百姓が政治階級に對すると同じで、市民はたゞ租税の高くなるのを恐れてゐるのみです。その上日本の自治體は、租税はとるが、やつてゐることは大抵商賣的で、電車でも電燈でも水道でも、金儲けにしてゐるとしか思はないから、――又事實儲けてゐるのでせうから――市民にいはせると、日本の市は、市民の金で商賣しながら、利益配當をしてくれない勝手千萬な株式會社です。尤も道路では儲けてゐますまいが、その代り、世界の大都市に類のない惡道路をこしらへて、これも世界の大市民の穿物にしては類のないゴムの長靴を穿いて通行するがいゝといふ見幕です。その長靴も道路に備へつけてあるのではなく、めいめいに買つて穿けといふのです。（尤もそれを洗ふ道具だけは備へつけてあるやうですが）あんな長靴は、冬は積雪一丈に及ぶといふやうな國の市民でも……

A　ゴムの長靴が賄賂に關係がある譯でもないでせう。

B　ですから、租税をとりながら、泳ぐやうな道路をこしらへて、それを渡る舟も提供しないやうな市政では、市民はこれを見ること百姓の封建政治におけるが如くであつても、市民を咎めることは出來ません。從つて監視などが出來る筈もなし、それよりは、封建時代の支配者に對する如く、これに賄賂を提供して、市民自身の利益を計る方が早道だと考ふるに至るのです。もし賄賂を提供することによつてあのがたくりにして而かものろのろの電車が……

A　がたくりなるが故にのろのろなのです。

B　あの電車が賄賂を出してもう少しよくなるものなら、私だつて賄賂を出します。だから賄賂を出すことによつて利得さるものは、賄賂を出さぬのは不道德と考へるのは當然です。何となれば自他――賄賂を出すものと取るものと――を利益するやうな善事を爲さぬのは不道德ではないですか？

A　何うもロジツクが少し妙になつて來たやうですが、まあ

これで、日本の自治體に收賄事件の盛な所以はわかつたこととにして、日本の裁判官に比較的、收賄の少ないのは何ういふわけでせう。收入の上では、日本の裁判官は、世界中で最も貧弱な方だ相ですが？

三　裁判と賄賂

B　それは何うも……格別研究したこともないのでよくわかりませんが、一つは裁判といふ仕事の性質から來てゐることではないでせうか？

A　裁判が行政事務と何う性質が違うといふのです？

B　裁判は、先きにいつた政治とは全く別ものです。結論を先きにいふと、裁判は政治的必要から出た仕事ではなく、社會的必要の仕事です。それは政治組織とは別のもので、寧ろ根本的の意味でいふ自治の一つです。政治以前の社會にも裁判がありました、政治以前にはそれは長老の會議や全員の會議によつたものです。政治以後にはそれは國家階級の仕事になつたのですが、でも全く階級的の行政的の仕事とは區別されました。「國王さへも裁ばかれる」といふのは、裁判の性質が超階級的、即ち社會的であることを暗示してゐる事實です。この觀念は、國家が强固になると段々廢れましたが、法の淵源を國家以前とか[illegible]です。所謂三權分立主義はモンテスキューが、イギリスに於て裁判や議會が王權に對して比較的獨立性をもつてゐる事實から思ひついたらしいのですが、何處の國でも、裁判といふことは、階級的觀念から多少獨立してゐるといふ信念がありました。青砥藤綱が、北條氏の領民に對する他領の百姓の訴訟を勝たせたといふのは、プリンス・ヘンリーをふん縛つたガスコインとは比らべものにならないにせよ、やはり、裁判の超階級性即ち社會性の信念が日本にも生きてゐた證據でせう。

A　西洋でも裁判官の收賄事件は少ないのでせうか？

B　さあよく知りませんが、然し、裁判も國家組織が腐敗してその階級的專制が烈しくなると、それの手に行はれる裁判は甚だしく亂暴になつて、封建領主の裁判なんぞは飛んでもないものになつたことでせう。だからその頃は、ギルドや自治の都市や大學やは、皆自分の裁判組織をもつてゐて、國家から特許をとつて、裁判權を自から行使してゐました。つまり國家の階級的裁判を排斥して、裁判の社會的性質を支持しやうとしたのです。寺院が自分の裁判をもつてゐたことは無論このことです。國家の裁判は、やはりそんな風で階級政治の仕事の一端ですからやはり盛に賄賂をとつたものでせう。裁判の獨立を目標

のイギリスでも、十七世紀頃までは盛に裁判官が賄賂をとつたといふことです。

A　ベーコンでさへも收賄事件で失脚したのですからね。

B　ベーコンでさへもと云ふが、大法官としての彼れの罪狀は二十八件もあつて、罰金もその頃の金で四萬磅も科せられたのだから、餘り『でさへも』でもないでせう。然しあれほどの大學者が瀆職罪となつたことは大に刺戟となつて、その後裁判が着々改善されたといふことだから、歸納法ほどの貢獻ではないが、間接に貢獻してゐる譯です。

A　そんな風に裁判の墮落したのは、裁判が社會的でなくなつて國家的になつたからだといふのですか？

B　つまり、自治的でなくなつて、例の『他治』的になつたからです。裁判の獨立といふのは、國家的觀念ではなく、寧ろ國家以外の社會的觀念をもつて、國家的階級觀念に對抗したものでせう。從つて裁判官となると、自づから社會的な心理になるのではないでせうか。

A　大分ぼんやりしてゐますね……一體、人民の方からも裁判官には餘り賄賂を提供しないといふ傾があるやうですね。

B　さうだとすると、やはり、社會一般に裁判に對する觀念が、今いつたやうな自己統制の觀念に近いからでせう。

A　ぢやつまり賄賂を無くするには、階級的の組織をやめて、自己統制的の組織にするより外はないといふことになるのですか？　前途遼遠ですね。

B　さうですね。それまでは『石川や濱の眞砂はつきるとも』でせう。それについて、田口鼎軒の賄賂論は確に一見識あります。

A　それはどういふ說です？

四　田口鼎軒の賄賂論

B　鼎軒の賄賂論なるものは、明治二十年の經濟雜誌に掲げたものですが、先生の說では、賄賂には六種ある。第一は『謝恩賄賂』といふので、『官吏の盡力に因り利益を得たる爲めに、其利益を殺ぎて官吏に贈遺するもの。第二は『間接賄賂』で『直接に求むる心なくして官吏に遺贈するもの、譬へば盆暮に贈賄する貨物若くは觀花の宴を開きて招待する類』。第三は『直接賄賂働き掛け』といふので『直接に求める心ありて官吏に贈遺するもの、例へば事件の裁可を得んがため私宴を開き、官吏を招待して種々なる物件を呈する類』。第四は『直接賄賂受け身』で『若し若干の貨幣物件を贈與せば汝をして利益を得せしむべしと、官吏より要求せられて與ふるもの』。第五は『豫約賄賂働き

掛け』で、『若し請願の件實現せば若干の貨幣物件を進呈すべしと豫約するもの』。第六は『豫約賄賂受け身』で『若し若干の貨幣物件を將來に至りて贈與せば汝の請願をして成就せしむべしと豫約するもの』といふので、その中で、第一第二の賄賂は、人情の自然である、大工に茶菓子を與へ、茶屋の女中に茶代をやるやうなものだが、それが咎められなければ、銀行の役員が、それを貰つても咎められないわけで、さらば進んで官吏がそれを貰つても咎める譯には行くまい。たとへ賄賂によつて私利を望んだ場合でも、苟も『他人に種々なる手數と迷惑をかけて其の御蔭をもつて非常の利益を得ながら、其人に向ひて一文半錢の御禮をも爲さず、生シャー／＼然として居るは德義心の恥づる所、人情の耐ゆべからざる所にして欲心に富める人と雖も耐ゆべからざるに因』つて賄賂を出すのだから、況んや殊更私利のためでなく、正當なことを望んで、それが叶つたので謝禮をするに於てをやだといふのです。

A　さつきのお話とは別の意味で、やはり賄賂を出さぬのが不道德といふ同じ持論に來てゐる譯ですね。

B　賄賂をうける方でも、受けて少しも差支ない場合がある。たとへば、銀行員が、危險でない人に貸與を爲し、會社の社長が、適當な請負人に事業を請負はしめた場合に、その借手や請負人が賄賂をもつて來たはは、[illegible]普通で『賄手として斯くの如き面倒なる授受を排斥するの氣慨にならざるよりは凡て皆な此空氣の内に感染せられ』て、これを貰ふのが當り前だ。國家の官吏の場合でもさうで、苟も國家が保護又は特權の制を行つて、特殊の利益を特殊のものに與へる制度の下では、それを決定する地位にある官吏は、保護や特權を受けやうとするものに對し生殺與奪の權を握つてゐるのだから、人民が此官吏に通じ、種々なる事を請願する事の起るは決して避くべからざる事だが、物を賴むには、公然應接の間で議論をしかける方法もあるが、官吏の人物によつては、搦め手から行かねばならぬのもあり、饗宴會などが起る。さうしてとにかく望を遂した時には、官吏は國家のためにそれに特權を與へたにしろ、請願人は、それがために巨利を博し、特權を與へてくれた官吏が貧乏してゐるのを見れば、義理にも、何とかせねばならぬと感ずるのが人情である。その人情によつて、賄賂的の贈物をもつて來たのを退けるのは、尋常人のよくする所にあらず。最初は、退ける能はず、の程度だが、次きからは喜んでこれを受けるやうになり、後には進んで、貰ひたくなる。賄賂授受は當然のことであるといふのです。

A　やつぱり別軒一流の自由放任主義から來てゐるのです

ね。

B　だから進んで、特許會社の株劵を貰ふことになつても別に惡いことゝはいへない。元來、國家に有益な會社だから特許を與へ保護を與へたのだから、これに特權を與へた官吏がこの事業に贊して、その株主になつたつて、ちつとも差支へない。それが差支ないとすれば、更らに進んで、官吏と請願人とは、種々の事業を相談し合ふのは當然で、從つて御禮もするだらう、それを受けもするだらう。でも第一第二の賄賂は咎むべからず避くべからざる習慣であるとするとそれは鼎軒の所謂『良種賄賂』といふので、社會の事態であるとする外はないが、もしそれが事態だとすると、苟も特許、保護の制度のある以上は、決して、第一第二の詐托に止つてしまう筈はない。必ず第三第四以下の、鼎軒の所謂『惡種賄賂』なるものに移つて行くのである。此惡種賄賂は元來、許された良種賄賂が無ければ、決して突然に起るものではない。必ず先づ良種が起り、それが發展して惡種となるのだから、この惡種賄賂も、良種と同じく、到底防ぐべからざるものだといふのです。

A　ぢや鼎軒は賄賂放任論者なのですか？

B　さうではないのです。各國の歴史を見ると、政府の腐敗は必ず賄賂から始まつてゐる『深く戒愼せずして可ならんや』といつてゐます。

A　ぢやどう戒愼すればいゝといふのです？

B　それは鼎軒流で、甚だ簡單です。いつてゐるのはこれだけです、『賄賂の性たる此の如きものなるを以て、余は全く之を社會に絶つことの爲すべからざることを信ずるなり。但し制度を改良せば少しく其勢を制するを得べし。その事何ぞや、特許、保護、重税等の事を廢すること是なり。それ特許、保護、重税等の制ありて、請願人の出づるあれば、當局者に取入ること此の如くなるは亦た防ぐべからざることならずや。然らば則ち之を改むる大本を改むるにあり、其大本を改むとは、特許、保護若くは重税を設けざるにあり、嗚呼人民の爲さんと欲する所之を禁ぜず、人民の爲さゞらんと欲する所之を勸めざらんには、人民何ぞ頭を垂れて當局者の鼻息是れ窺はんや、然るを況んや賄賂を行ふをや。賄賂の源は實に特許、保護、若くは重税の制にあるなり。』云々といふだけですが、これだけの所で、特許、保護、重税云々を三遍も繰り返してゐます。

A　外に思案もないからでせう。君が政治、々々、々々といつてゐるやうなものです。

B　ですから『大本を改める』方法の科學の外に、賄賂を撲退する道はないのです。（終）

不戰條約と太平洋の將來

蠟山政道

一

この一文に於て、私は、這般成立した不戰條約が、太平洋諸國の國際關係に如何なる影響を齎らすべきか、と云ふ問題に答ふる目的を以て、不戰條約の意義と效果とに就て若干の考察を遂げて見ようと思ふ。蓋し、我が國の國際外交の樞軸は、太平洋關係に存することは、多く說くを須ひない所である。若し、我が國の國際外交の基調に何等かの變化を及ぼすものありとせば、そは必ずや太平洋の國際關係に於ける變化でなければならぬからである。

先づ、日本政府は、この不戰條約の提議に對して、如何なる態度を以て臨んだかを見よう。それは、去る五月二十六日公表せられたる回答文に現れてゐる。その文章は例に依つて紋切型の公文體である爲め、我々日本人には、反つてその文章の中に含められたる意味を、國際的用語例の意義に於て理解することが看過せられるが、之を翻譯した外國文で讀む外國人にとつては、そこに注意を要すべき日本政府の國際政策の基調が現れてゐるものと容易に觀察され得る。その回答文の第三節に曰く、——

合衆國提案は獨立國家に對し自衞の權利を拒否せず且國際聯盟規約及ロカルノ諸條約中に包含せらるゝが如き一般平和を保障する約定の義務と何等抵觸するものに非ずと了解致候仍て帝國政府は前記六國間の討議に依り本件條約に付各國相互に受諾し得べき條文の一致協定を實現し得べきことを確信し且帝國政府は世界全國民の共通の願望なりと信ずる戰爭の廢止及各國民間に恒久的普遍なる平和時代の樹立を確保する目的を以て右討議に於て誠意協力するを欣幸とするものに有之候

The proposal of the United States is understood to contain nothing that would refuse to independent states the right of self-defence, and nothing which is incompatible with the obligations of agreements guaranteeing the public peace, such as are embodied in the Covenant of the League of Nations and the Treaties of Locarno. Accordingly the Imperial Government firmly believe that unanimous agreement on a mutually acceptable text for such a treaty as is contemplated is well capable of realization by discussion between the six Powers referred to, and they would be happy to collaborate with cordial good will in the discussions with the purpose of securing what they are persuaded is the common desire of all the peoples of the world-namely, the cessation of wars and the definite establishment among the nations of an era of permanent and universal peace.

この回答文は、アメリカ合衆國の識者の間には相當の注意を以て讀まれ、且つ一般公衆に註釋付きで紹介するに値するものと見られた。單なる外交辭令と看過すべきものではなく、そこに日本帝國の最近に於ける國際外交の基調とも見らるべき原理と方法とが籠められてゐるものとされた。日本政府の外交當局者と一般公衆とが、それを明確に意識するとせざるとに拘らず、國際關係又その内政關係に於ける思惑や術策の異同に拘らず、國際關係に於ける日本の外交は、結局のところ、かうした輪廓によつて規定せられてゐるものと注視してゐるのである。

不戰條約の今日あるに至つたに就て個人としていろ／＼關係のあつたことで著名なコロンビヤ大學のショットウエル教授は、右の回答文に接した後、數個の新聞に寄稿して、アメリカの一般公衆に向つて、日本の外交政策を解明し、併せて不戰條約を加えたる後の日本外交の赴く所を論定してゐる。代表的な米國識者の見解として、一應我々日本人の注意を要する所と思ふ。ショットウエル教授は、右に引照した回答文の一節を二個の部分に分析して、その各個に就て次の如く註釋を加えてゐる。

第一の部分は、日本政府が「國策手段としての戰爭の廢棄」なる提案が、自衞權を拒否するものでなく、又國際聯盟を中心として成立せる諸條約に負ふてゐる義務に抵觸するものでないと云ふ了解の下に、之に應じようとする意思を表明したものである。日本はロカルノ條約の當事國ではないのに、その條約ま

でを引用してゐるのである。換言すれば、日本の國際外交を動かす樞杆の重要なる一端が、ジエネバに置かれてあることを明白にしたものである。この事は、國際聯盟の參加國に非る米國民に對しては、決して當然自明のことゝして理解さるゝものではない。從つて、相當詳しい註釋を必要とする譯である。これと反對に、國際聯盟との關係が不明なる國際關係の提案が米國より發せらるゝ場合、我々日本人の先づ發する疑問は、米國の國際聯盟に對する關係である。米國人が、その質疑を不思議と感ずるのは、丁度我々日本人が日本のジエネバに對する關係を改めて註釋する米國人を不思議と感ずるのと同じである。國際政治に於ける日米の外交政策には、かやうな許りのあることが先づこの一文から知らるゝのである。

第二の部分は、ショツトウエル教授に依れば、より重要な內容を含んでゐる。それは、原則として「國策手段としての戰爭廢棄」を承認するが、その原則の具體的應用は、之を國際會議に於て決定せんとする會議外交の主張である。之は最初に英國に依つて暗示された所でもあるが、日本政府も之を提唱した。然るに、之に對しては、米國政府の主張は最初より反對であつた。即ち、米國政府は、外交官や專門關係者の會議の開催に最初から反對し、所謂會議外交なるものに働く「現實政策」によつて、この會議團の有する或種の[illegible]ることを懸念して、專ら文書の交換、新聞紙に發表する公開外交の方法を採用したのである。結局この方法が繼續されて、英國も日本も追隨するの止むを得ざるに至つた。そして佛米兩國を始めとして各國が、この方法を通うして所謂留保條項なるものを次第に直接間接に公にするに至つたのである。

以上の二點は、現在の日本政府の外交上の原理及び方法が奈邊に在するか、を暗示するものであると共に、日米兩國のみを比較して見るならば、兩國の間に存する原理及び方法上の差異の何たるか、を知らしむるものである。

二

右の二點より見たる日本の國際外交の原理及び方法が、單にその輪廓を傳なるものに過ぎぬことは明白である。その具體的應用に至つては、未だその時機は到來して居らぬが、我が國の對外關係の實際問題に對して、不戰條約の成立後如何なる影響が將來するかは、寔に深甚なる注意を要する研究問題である。

不戰條約の提案ありたる後、その交渉過程に現れたる日本政府の國際外交の原理及び方法は、ショツトウエル教授の揚抉を俟つ迄もなく、全く國際聯盟加入國殊に佛英二國の夫れの追隨

又は協調である。そこに、何等獨自の立場も無ければ、特殊の主張も現はれてゐない。そうかと言つて、原理上だけでも人をして首肯せしむる思想の發露もない。ただ消極的に贊成といふ丈けのことである。六月二十二日の最後回答文の如何に事務的な低調なものであるか、はそれを一讀せる人の齊しく感じた所であらう。

この消極的なる國際聯盟强國への追隨又は協調外交の原因は奈邊に存するのであらうか。この問題に對して、充分答ふることは、何人にも豫期し得ないであらうが、これの解明は將來に於ける國際日本の進路を卜するに當つて、甚だ肝要なことである。そこで、翻つて、不戰條約に對する輿論の動きを一應顧て見よう。

各種の新聞雜誌に現れた諸論調を綜合して得たる一つの感想は、我が政府が消極的乍ら、國際聯盟てふ據り所を尺度として、その議論を進めてゐるに反して、輿論を構成して行く言論機關の論調には、日本の立場を中心として、明確なる態度を指示したものが尠く、多くは漠然たる議論をしてゐる、と云ふことである。第一に、政府の態度を批評したものが無い。第二に、不戰條約の含蓄する條項を實現又は遵守して行く場合に、對支政策の如き具體的の問題に對して、外交政策上如何なる調節を爲さねばならぬ、かを指摘したものがない。第三に、今後決定さるべき「侵略戰爭」の意義及びそれに對する保障の如き、又國際紛爭の平和的處理方法に關する日本の執るべき態度等に就て、之を論究したものが殆んど見當らぬことである。不戰條約の成立と軍備縮少と關連せしめたり、米國の國際聯盟への接近を論じたり、することは、今日の國際政治の趨勢と內容とに全く緣遠い事柄である。日本政府の國際外交の原理と方法とが、餘りに消極的であるが極めて實際的なるに反して、民間輿論の餘りにアカデミカルであるか或は極めて非現實的な漠然としたものであることは、二者の間に大なるギャップを構成するものであつて、我國に國民外交の實未だ充分備はさる證左と言はなければならぬ。なぜなら、言論機關の理想的批判的なるは一面甚だ結構なことであるが、他面現實に對して積極的の影響を有してゐない場合に生ずる事柄であるからである。今回の不戰條約の成立に參加したことが、果して日本國民及びその政府が曾つて戰爭を以て國策遂行の聖なる手段として、心から之を信奉し、又はしつゝある事實あるに拘らず、今日それを放棄したものであるとするならば、今後この新たなる指導原理に合致すべき方策が樹立され、之と矛盾する政策を除去されねばならぬ筈である。過去、不戰條約の討議の際、ロバート・セシルが英

[illegible]に於て[illegible]演説にも引用する所に依れば、[illegible]クラウゼウイッツは、「戰爭は一國がその意志を他國に强制する國策手段である」と言つたさうである。クラウゼウイッツやビルマルクを生んだ舊き獨逸のみならず、現代の國家にして、戰爭を國策遂行の手段として來ないものは殆んどない。かうした明かな事實あるに拘らず、之を廢棄すると云ふからには、チエンバーレンの告白ではないが、少くとも「心の中では戰爭を廢棄してゐる」ものであるが、特殊の場合に限つて、之を棄て得ない、と云ふのであらう。然らば、その特殊の例外的場合を如何なるものと又如何に決定するかが重大な問題となる。

然るに、これに對して、米國と英佛との間には明かに意見の相違がある。又英佛に於ても、各政黨の間に見解の相違がある。然るに、我國に於ては、その何れに與するか、或は獨特の見解があるのか、更に判然しない。政府も之を明かにせねば、反對黨も追及せず、又言論機關も之を問題としない。勿論ジュウエー教授の言へる如く、輿論は人間の社會關係の變革に對して除々に調節して行くものであるから、いま突然我が政府が餘儀なく、假りに心にもない條約に調印したとしても、之に相應ずる調節は急には期待しないであらう。しかし、不戰條約の意義と効果とを論じようとするならば、政府や輿論の如何に拘らず、[illegible]ければならぬ。

三

不戰條約の意義と効果とは、その第一條に規定されてゐる所の國策遂行の手段としての戰爭とは如何なる種類の戰爭を謂ふか、換言すれば之が除外例と見らるべき戰爭の定義が爲されてゐないことと、第二條の一切の戰爭に代はるべき國際紛爭の平和的處理方法の機關手續に就て何等の規定が無い所を吟味することに依つて判定され得る。

かうした具體的な規定を具備しない單純な條約を以て一本調子に推し切つた米國の用意に、今日の國際關係の眞相が反映してゐるのであるが、或る程度までは列國の主張に讓歩しなければならなかつた。即ちこの條約に違反して侵略戰爭を爲す場合と正當防衛の權利に依つて、或は條約上の義務として戰爭手段に出ずる場合とを區別することは、後者の如き戰爭を除外例として認むることによつて消極的に決定された。然し乍ら、侵略戰爭の何たるか、を積極的に規定せざるのみならず、各國もその見解を發表することを拒絶した。この點に就て、最も積極的な主張を有してゐた佛國側の解釋すら、或は國際法上の正當防

衞權に基く戰爭以外のものを意味するが如く、或はその正當防衞權による戰爭をも含めて總ての戰爭を現存條約に基くものに限定し、それ以外のものを侵略戰爭と見做すものゝ如く、必ずしも明確でない。

斯樣に廢棄すべき戰爭の意義が不明確では、切角の不戰條約も効果がない譯であるから、この意義を明確にすることが、先決問題である、と云ふ考へが出て來る。所が、この定義を下すと云ふことは、單純にアカデミカルな仕事ではないのであつて、そうした企劃をするか、しないかが實は大に爭はれてゐる政策上の岐れ目の一つなのである。

侵略戰爭を條約上明に規定しないで、否することに反對してゐる者の中、最も有力な國は恐らく米國自身であらう。なぜならなら、今日の事態に於て、之を確定することは、反つてその範圍を狹く規定する結果となり、歐洲諸國殊に佛英二國にとつて有利な status quo を認諦することゝなり、米國自身の立場を拘束する結果となるからである。英佛二國の現在の政府も亦、之と反對の動機から、又これが確定を好まない。即ち、今日不戰條約に對して附した消極的解釋を以て、寧ろ國家主權の自由をより多く確保する所以と考へてゐるからである。從つて、不戰條約の第一條に關する限りに於て言ふならば、米國と英佛二國との態度がかやうな消極的態度を持す限り、この條約の効果は直接大なる影響を國際關係の上に齎らすことはあるまい。我が日本としては、これに追隨すべきであらうか

次に問題となるのは、廢棄された戰爭手段に代るべき國際紛爭の平和的處理方法である。第一條の侵略戰爭の意義を無理にも確定しようとするのは、決して策の得たるものではない、寧ろそれは現狀の儘にして置いても、他方この平和的處理方法の機關及び手續を進捗するのが良い、と云ふ考へも生じ得る。この見解を有する者は米國に於て相當有力である。ケロッグ案が最初より、一切の戰爭に平和的處理方法を適用すべし、と云ふ主張を固執したのは、一面米國內の輿論の反映でもある。これに對しては、英佛二國の意見は大體反對である。從つて、この二國の指導の下に在る國際聯盟は、無條件的平和的處理には反對と見られ得る。從つて、第二條の平和的處理に就ても、今後米國と各國との間に締結せらるべき仲裁々判の條約の內容が、その一端を示すであらうが、今日のところでは極めて限定的な價値しか有してゐない。

そこで、この問題が不戰條約參加國の間にどういふ形式を以て實際化して行くかを想像すると、先づ考へられることは、ジエネバ平和議定書及びロカルノ協定等に於て、國際聯盟が經驗

して來たつたやうに、一般的に或は地方的に、安全保障の問題と共に平和的處理の問題を統一的に、或は之と軍縮問題とを同時に、決定して行くと云ふやり方に、米國や露國の如き非聯盟國を招致し得るか否かの點である。

安全保障と仲裁々判と軍備縮少との相關々係を認識し、之を相互的に統一的に解決しようとする企圖は、その難易は別として、今日の國際聯盟に於ける確認されたるテクニークである。このテクニークを米國や露國の如き有力な、聯盟外に獨立してゐる國々を含めた、不戰條約の網によつて疎漫ながら張り渡された國際政治社會に適用され得るや否やが究明に値する問題なのである。

露國の態度は、今春の軍縮會議や今回の不戰條約に參加する際に發表した聲明に於て發表されてゐる。露國は明にこのテクニークを認めてゐない。單に無條件的軍備撤廢――その割合は半減の程度まで讓歩したが――てふ一角からのみ問題を解決しようとしてゐる。或は之は臨機應變的なタクテイークに過ぎないもので、若し國際聯盟規約に或る重要な改正を施し得るなら、必ずしもこう云ふ政策に終始しないだらう、と見てゐる人もある。曾つて、一九二四年の英國勞働黨内閣にこの問題を提議した先例もあることであるから、或は來年の總選擧に再び勞働黨が政權を得たならば、この問題が再燃するかも知れぬ。かう言へば、最近マクドナルドがカナダに於ける演說に於て、露西亞との國交恢復の必要を力說してゐたのは、かうした遠謀深慮に出でてゐるのかも知られぬ。又、最近聯盟總會に於て、軍縮に關する英佛協定の成立にも拘らず、軍縮會議の開催が否認せられ、一九三〇年度に延期されるに至つたのも、英國現内閣の運命が一般に懸念されてゐることもその一因ではないか、とも傳へられてゐる。

露國と聯盟との關係は國際政局全般から見て大した問題ではないが、米國と聯盟との關係は、甚だ重大であつて且つ甚だ豫想に困難である。今回の不戰條約によつて、米國が國際聯盟に接近したと云ふ論者もあるが、寧ろ此の二者の國際政策の原理及び方法は、調和に困難な、容易に融合し得ないものであることが明白にされたと見る方が眞相に近いであらう。それ故に、國際聯盟を中心として發達せるテクニークを米國が容認するや否やは、甚だその可能性に乏しいと見なければならぬ。果して然らば、不戰條約によつて端緒を見出した、聯盟諸國と共れ以外の國を包含する國際平和の組織は、最早これ以上成長の見込がないものであらうか。多くの皮肉な論者が冷評するやうに、不戰條約は共和黨の大統領選擧を控へての對内政策に過ぎ

ない、非實際的な芝居に過ぎないものであらうか。

四

ここに於てか、論點を本文の冒頭に於て述べた、不戰條約の太平洋關係に及ぼす影響如何の問題に進めて見る段階に到達した。國際聯盟を歐洲聯盟と見る限りに於ては、聯盟規約とそれ以後の諸條約によつて武裝された新神聖同盟である。佛人の論理的頭腦と英人の實際的態度によつて固め上げられた組織とテクニークとは、米人の樂天的政策と公開的外交の爆彈を以てしても、表面上の讓歩を贏ち得ることはあり得るとしても、到底その實質を動かすことは出來ない。大西洋を越えての米國の國際政策は、遂に消極的たらざるを得ないのではあるまいか。

翻つて太平洋關係を見る。ここに至ると局面は聊か異る。第一に、ワシントンはジエネバよりも近い。第二に、華府會議以後、太平洋關係を規律する國際立法は何等見るべきものが無い。華府會議すら、太平洋の國際關係を統制するものとしては、最初の企圖でしか無いばかりか、それも半ば成功したに過ぎぬ。第三に、太平洋ロカルノなる案策があるが、これは國際聯盟の組織原理とテクニークとに通曉せる米國人が、自國の理想と實際とを太平洋關係に實現しようとするものである。換言すれば、太平洋岸に於ける聯盟加入國の、ジエネバを通うして歐洲諸國に對して有する關係を顧慮しつゝ、尙ほ且つ聯盟と獨立な國際組織を實現せんとする米國の意圖が試みらるべき場所として太平洋は恰好の地域と考へられてゐるのである。

かうした事情を顧慮する時、太平洋の局面には、新たなる視野の展開し來るのを覺ゆるのである。國際聯盟は太平洋岸に對しては、その僅かな參加國を通うして、又委任統治地域に對して、直接間接の關係を有するに過ぎない。歐洲に對する關係とは全く異るのである。然るに、今や粗漫にして薄弱なる國際條約とは言へ、不戰條約によつて太平洋岸に位する總ゆる有力國に一個の國際組織の網が張り渡された。國際聯盟の組織原理と方法とが、その儘に此の地域に應用され得ぬのは多く言はずして明かである。そうかと言つて、國際聯盟は無視され得ない。ショットウエルの如き聯盟通が、日本の國際外交の基調が、聯盟の夫れに追隨し、協調しつゝある事實を殊更らに特筆大書して米國の公衆に向つて說く所以のものは、その意蓋しこゝに存するのであらう。

斯く論じ來るならば、太平洋關係に平和の支配を齎らすべき國際組織と手續とは、所詮アメリカ・ロカルノでなければならぬ。即ち、アメリカ式外交と國際聯盟式外交との調和妥協の産

與に外ならない。國際聯盟式外交とは、國際平和主義外交の別名ではなくて、相互保障とサンクシヨンの制定とを目標として動く外交の謂ひである。換言すれば、ライン問題と東歐中歐諸國の現狀維持とを主張する佛國外交であり、エヂプトの保護權と大英帝國の安全保障とを主張する英國外交であり、ユーゴー・スラビアを覘ふ伊太利外交であり、滿蒙の支配權と山東に於ける勢力範圍とを失はさらんとする日本外交の集合名詞である。アメリカ式外交とは、理想主義的人道外交の別名ではなくて、實はモンロウ主義と領土主權の露骨なる發揮を主張しつゝ同時に戰爭なき國際平和を樹立せんとする予盾外交の謂ひである。

從つて、この米國の予盾外交が、その儘太平洋に現れ來り、今日の不戰條約の程度を越えて、積極的に何等かの國際機關の設定を主張し來るならば、恐らく支那の贊同を受くるであらうが、日本は益々聯盟式外交の袮に隠れるであらう。その際、英國は今回の不戰條約に於て、表面上米國と佛國との中道を選び、實際上は佛國を支持した如く、表向は米國に贊同しつゝ、裏面に於て日本の立場に不利ならざる行動を採るであらう。その結果は恐らく太平洋をして遂に第二の大西洋たらしむるものであり、米國外交の失敗となるであらう。

斯くのごときに、アメリカ・ロカルノの原理及び方法によつては[illegible]ない。この新らしき企圖は、恐らく、今後に於ける不戰條約の最も意義ある成長であり、果實であらうが、この成功を遂げる爲めには、我國に關する限り、一つの前提條件が必要である。それは國際聯盟の原理及び方法に變革が生ずることそれである。今日の國際聯盟の原理と方法とが存續する限り、日本は忠實なる聯盟國として、東洋に於ける佛國の地位を保ち得るであらう。ドイツとオーストリアの合併が困難なる如く、滿洲と南京との合一は困難である。ラインランドの撤兵が容易に行はれない如く、山東の撤兵も簡單でない。そうして、之等の事態は國際聯盟のオーソリテイの下に行はれ得るのである。斯くの如き事態の下にある太平洋に、ロカルノ協定が如何にして行はれ得るであらうか。

華府會議以後我が對支政策はその凡その輪廓は規定されてはゐる。如何なる內閣の下に於ても、その行動は或る一定の埒を逸脱し得ない。現內閣の對支外交と所謂幣原外交とは、對內的には同一政黨の分裂まで來す程の相違の如く見られてゐるが、對外的には結局五十歩百歩の所を出でないのではあるまいか。最早今日の極東諸國の國際關係には、その一國の自由意思にて侵犯し得ない所の規範が存立して居るのではなからうか。

所謂「積極」政策と「軟弱」外交との差異は、この見えざる規範を意識して、之に積極的に適應して行かうとするものと、强ひて之を無視せんとして結局無視し得ないものとの差異に過ぎないとも見られる。

そこへ、更に不戰條約なる規範が加へられた。米國の識者は、日本の外交は、やがて過去に於ける場合の如く、この新事態にも適應を餘儀なくせしめらるゝであらうと見てゐる。然し乍ら、具體的に如何にその適應が行はれるであらうかは、容易に豫斷し得ない。少くとも、大なる變化は、國際聯盟の存する限り、その原理と方法とが、英佛保守黨系の政府に依つて支持せられてゐる限り、之を期待し得ない。ジエネバと歐洲とから遠く離れてゐる日本が、比較的熱心なる國際聯盟の支持者である所以は、東洋の現狀維持の爲めに必要であるからである。米國の進出と支那の擡頭を防ぐ兩面の楯を、日本は遠くジエネバに求めてゐると云ふ結果になる。日本政府の意識するとせざるとを問はず、現在の日本政府の聯盟政策の意義は此處に存する。故に、この太平洋及び極東に於ける Status Quo に變化を齎らし、ここより國際紛爭の種子を除去せんとするアメリカ。ロカルノの如き企圖は、先づ國際聯盟に於ける原理と方法との變化を前提とせねば成立せぬと云ふ主張の根據は此處に存する。然らざる限り、不戰條約の成立によつても、何等の見るべき效果は直接に生じ來ることは無いであらう。この意味に於て、又この條件の下に私は不戰條約の意義と效果とを大なるものと見ない。

然し乍ら、一度聯盟に於ける變化が來り、それに追隨協調を餘儀なくせしめられたる日本と、この變化を認識して、之とその傳統政策との調和を試みんとする論者が勝利を占むるに至れる米國とが、太平洋を距てゝ相對する日が來るならば、その時こそアメリカ・ロカルノの成立が期待せられる。そうして、その時こそ不戰條約の眞實の意義と效果とが、發揮せられる。然し、その日の來るまでには、太平洋の波浪は幾十年か、同じやうにその岸邊を洗ふことであらう。

社會時評

無產黨合同問題

吉野作造

無產政黨合同問題は隨分古い題目である。之に付ての私一己の見解は、この三四年來本欄に於て幾度となく述べた。但だ局外者たる私の所見は當の無產政黨の幹部達の意には召さなかつたと見え、毎に彼等から嘲笑され罵倒され時としては全然默殺されもしたのであつた。無產政黨は一日も早く合同すべきもの、所謂全國的單一無產政黨は現に可能疑なしとでも說いたら、彼等によろこばれたかも知れないが、併し眼前の事實は、數年の努力にも拘らず、說く所の合同は一向實現しないではないか。主義として合同を不可とするのかと問へば、どの黨派も遲疑する所なく否と答へる。而も合同は今日に於てその端緒をだに現はして居ぬではないか。して見れば我々はこゝに問題を轉換して、主義として反對を見ぬ合同が實際に於て何故實現せぬのかを改めて究明するの必要があるやうに思ふ。抽象的に合同の必要なるを說いた丈けで問題が解決するものなら、仕事は極めて簡單だ。無理に民衆を瞞着して一時の效を擧ぐるに安んぜざる限り、活きた人間を同じ方向に纏めることは元來頗る骨の折れる事業である。私は斯うした事業の爲の準備が彼等の間になほ頗る缺けて居ると云ふ觀點から、或は無產政黨の合同を尙早と論じ、又或は全國的單一無產政黨論の空夢なるべきを說いたのであつた。私の見解そのものの是非は姑く別論として、少くとも我國の現狀に於て何が無產政黨の合同の實現を困難ならしめて居る原因かを究明するは、之等の問題に直接の利害を感ずる人達に取て焦眉の急務であるべき筈だ。店を開いても客が付かなければ、如何すれば買手を惹き付け得るかの工夫

が肝要である。買ひに來ない客が馬鹿だと怒鳴るのは何の役にも立たぬ。商賣はさう單純なものではないぞといふ私共の批評をまで邪魔にする程に、無産政黨の當局者の一部は焦燥を極めて居つたのではないか。彼等が何と辯解しても、事實はこの兩三年來の私の見解通りに進行してゐるのだから致方はない。而してこの大勢は今後も飽ほ引續き此儘で進むだらう。最近無産大衆黨の出現（七月二十二日）に由て無産政黨の合同問題は再びチラホラ吾人の耳朶を打つも、私は之に大した期待を置いて居ない。

× × × ×

私の見る所に依れば、無産政黨の提携合同を妨げて居る根本的原因の重なるものとしては第一に行掛りがある。之を分析すれば、色々のものがあらうが、最も普通なるは幹部間の感情の阻隔より來るものだ。我々日本人は元來公明正大の爭鬪に慣れない、敵味方と分れると直に馬鹿野郎呼ばはりする。少くとも敵方を惡口雜言することの外に自家の立場を主張し得ざる連中が多く、元と一派を成してゐたものが二つ三つに分れた場合に此弊殊に著しい。第二には組合運動と政治運動との交錯がある。勞働組合の運動と別個のものとして政治運動を立てるでなければ、單一戰線の張り難きは謂ふまでもないのである。前者が十分に發達しない中に後者が起つたので、兩者の運動に交錯の生ずるは已むを得ない數ではあらうが、最近はロシアを眞似る政治運動が簇然として起つたので、この紛亂が一層甚しくなつた樣だ。第三は指導精神の異同である。この點を顧慮せずただ〳〵共同の强敵に對し戰線を統一せよと云つたツて容易に成功するものではない。合同を說く前にモ少しこの邊の議論を相鬪はす必要があらう。第四には人生觀の相違である。この點で私が無産政黨の合同の尚早を說き來りしは讀者の已に知悉せらるゝ所であらう。詳細の說明は他日に讓るとして、私は人生觀を異にするものは窮極に於て一旗幟の下に集まり得ないことを確信するものである。故に單一無産政黨論は理に於て一場の空夢たるを免れずと私は考へて居る。啻に之ればかりではない。更に指導精神の吟味に基く離合集散に依て我國の無産政黨はもつと複雜になるの恐なきを得ないと私は考へる。

× × × × ×

指導精神の點より觀て我國の無産階級政治運動には大體次の二つの流れがある。

（一）共産主義系　政治運動の觀點よりして共産系諸團體の根本的特色は「無産階級獨裁權の確立」である。無産階級の觀て以て正しき社會的秩序なるものは、無産階級それ自らの努力

に依てのみ建設することが出來る。他の階級との協力に賴ても成就し得ると考ふるは空想であり、些でもこの手段に倚らんとするは墮落である。故に差當りの目標は何を措いても先づ無產階級をしてその獨自の力を以て獨裁權を握らしむることでなければならぬ。この立場から來る當然の歸結として、彼等は主義として議會否認論者であり又所謂社會民主主義をば自派の立場の宣傳に邪魔になるといふ考から極力排斥する。その他獨裁權の獲得に出て來るべき社會の繁榮を豫見する所から、目的を達するに急いで動もすれば手段を擇ばざるの嫌がある。實際の問題として獨裁權の獲得の容易に實現し難き國柄に於ては、彼等の運動に依て無產階級の平和なる生活の紊さるる場合が亦尠しとせぬ。

更に小分すると共產系にも二つの分流がある。(甲)は秘密結社として發達するものである。目的を達するに急いで手段を擇ばずと決心すれば、始めから專ら不法の手段を採用することになる。從て公然名乘りを擧げるわけには行かぬ。彼等の中には現に非合法的秘密結社たることを誇りとするものもある。そは合理的結社として猫をかぶるは、假令それは假面であつても、矢張り現在の法律制度に對する一種の妥協に外ならぬからだと云ふ。彼等以爲く、現在の法律制度は元來支配階級が自分達を虐ぐる爲に作つた一つの仕組みに外ならぬ、彼等から見れば新しい秩序かも知れぬが、我々から觀れば假面を被つた一種の暴壓に過ぎない。之に對抗する爲めの我々の努力こそ、我々に取ての正義であると。今裁判上の問題となつて居る日本共產黨は恐らく斯の立場を執るものであらう。(乙)は合法的結社として現はれるものである。窮極の目的は同一であり、只不法の手段を取らぬといふ點で甲と區別される。從て甲と乙とを區別すべき積極的の目標は何もないと謂はざるを得ない。只消極的に不法の手段を採らないと云ふまでのことである。

共產系の政治運動の形式として合法的結社の存立し得る根據は、合法的手段でも最後の目的は達せられると云ふ確信の外にはあり得ない。今の世の中で合法的手段などでこの目的は達せられるものかと云ふので、秘密結社が起つたのだ。この秘密結社の傀儡としてなら格別、合法的手段で目的の達成の期し難きものと決まれば、合法的結社として獨立の存立を主張するは全然無意義である。之を無意義に非ずと强辯する以上、手段の選擇に於て彼は根本的に秘密結社の連中と相容れざるものとせなければならぬ。而して實際の事實として所謂無產階級獨裁權の確立は合法的手段に依て到達せられる見込があるだらうか。

實際の見込の有無は客觀的の判斷だ。合法的共產黨の意義と

將來とに關する客觀的の評價は或は略ぼ定つて居るのかも知れない。だが疑のないのは、合法的結社主義の人達が主觀的には皆その可能を確信して居ると云ふとである。少くとも可能性の潤澤なるを恃んで熱心に運動して居るとである。然らば問ふ、無產階級の獨裁權の確立は如何にして可能なりや。曰く、國民中の大半を占むる無產階級を我が味方にすればいゝ。大半を味方とし得る見込があるか。曰く、彼のいふとに異議のある筈はなではないかと。所が同じ無產階級の運動に付ても、具體的には色々の說があり得る。其間自ら特定の主張を掲げて全體を之に從はしむるといふは、實は容易なことではない。併しそんなことを眞面目に考へてゐては無產階級の統一的指導は出來ない。是に於て此種の人は、丁度西洋の天主教會に見る樣に、獨斷的に我の主張を絕對の眞理とし、之に反對する一切の說明を排擊する。一般大衆に對ては、敎育的といふよりは寧ろ單純な宣傳乃至煽動を以て臨む樣になる。眞理は一なりといふは抽象的には正しい。だから俺の言ふことの外に眞理はないぞといふ所に、此派の弱點がある。從て此派は自家の誤つた信念に出發して無產政黨の合同問題などには極めて熱心であるが、事實に於ては寧ろその偏狹を以てして當時合同提携の機運を無遠慮に破りつゝある。現に我國でも宗派的分裂主義者の名を冠せられた者が最も寬大な合同論者であつたではないか。

(二) 民主主義系　最終の目標に於て之と共產系とどれだけ違ふかは別に攻究するの必要がある。政治運動の觀點よりするに、此派は先づ無產階級の全部をして確實に同一の方向を執らしむることの困難を認めて掛かる。その原因は必しも支配階級の攻勢にのみ歸するわけには行かぬ。最も大きな理由としては大衆の無智を擧げねばなるまい。無智だから煽動せよといふも一つの手段だが、煽動に依て右に向はしめた大衆は、同じく煽動に依て何時左に向はしめられるか分らない。本當に彼等の方向を確定せしむるは、實は敎育の外に方法はないのである。さて敎育に依て彼等の見識を高めるとなると、同じ仕事をするにしても種々の議論が起り得る。一方の爲に他方を壓したのでは本當にかたい結束は出來ぬ。斯う考へると、例へば無產階級の政治的立場を優秀ならしむると云ふ目的だけを取ても、所謂合法的共產黨には根本的に形勢判斷の誤算あり、我々の採り得べき方法としては、秘密結社的共產黨として隱密の活動をするか、又は民主主義的社會黨としての活動に終始するか、この外に途がない。外に途があると考へるのは錯覺である。

我國ではロシア革命の影響を受けて一時共產主義系統の諸議論が相當に流行した。それに政府側の狼狽を極めた過度の彈壓

が幾分その勢を振つた嫌もある。その爲め年若い人達の間には早くから單に左翼急進たることを誇りとすると云ふ風潮を生ぜしめた。其外附隨の理由を擧ぐれば澤山あるが、左翼共産系に與つて何等かの掛り合ひを有つ者今日實に少くはない樣だ。この事はまた當然に所謂民主主義的政黨運動の一時的困難を說明する材料にもなる。我國の如き狀況の下に於ては、少くとも客觀的狀勢の推移から云て、本來民主主義系はもツと氣勢を揚げても然るべき筈だつたと考へる。

×　×　×　×　×

以上論ずる所でも明なるが如く、我國の無產政黨が更に合同提携に一步を進むる爲には、指導精神の宣明に於てもう一段の洗錬を必要とするのではあるまいか。舊勞農黨に所謂宗教的分裂主義の喰ひ入つて居たと云はれた間は、所謂福本イズムの清算非清算が唯一の難關のやうに思はれたが、實はそればかりではなかつたのだ。單にそれだけなら無產大衆黨の出現に依て少くとも日勞黨は直に之と提携合同すべき筈であつた。而して多年無產階級の戰線統一を最も重要なる旗幟として來た日勞黨が、無產大衆黨の成立に對して多少の好意を表するにとゞめ、戰線統一の大使命に促されて起つたと稱する無產大衆黨が、今や同じ系統の地方小政黨のかり集めに御茶を濁す外、日勞黨其他に對て用心深き沈默を守るのは、兩者の間に本質上大なる溝渠の存することに氣付いた爲であるまいか。思ふに根本的指導精神に於て兩者の間相容れざるものあるを發見して、彼等は互に今後の局面を如何に打開すべきやに迷ふて居るのではあるまいか。

無產政黨の合同問題に付ては猶ほ語るべきもの頗る多い。局面の發展と伴つて今後も隨時報道と批判とを怠らぬ積りで居る。

政黨は公共財物の常習的盜取者

舊友T君が遊びに來て平渡信君の噂をした。平渡君は松島遊廓事件の元兇として天下に有名である。私の中學時代の友人で彼れ程天下に名を馳せた男はない。彼が結局惡人か又それ程でもないのか彼を知る者に取て一つの疑問であらうが、子供の時からの彼の經歷を知る者の間に在ては、少くもあの位の事をやり兼ねない男だと云ふ判斷には全然一致して居ると思ふ。私は

割合によく彼の心意氣を知て居る。一時は親しく往來したこともある。今も多少の好意を寄せて居る。無論彼と私と道德的判斷の標準は大に違ふらしい。緻密な彼も恐らく自分の言動に私の賛成を得られない位のことは熟知してゐるだらう。同時にまた私が友情に於て全然彼の敵でないことも分つてゐる筈だと推察する。實際彼には到底憎み通すことの出來ない愛すべき一面がある。彼があれ丈け天下を騷がして居りながら、案外自分ではさう惡い事をしたつもりはないと平氣で居れる點も、私には若干分る樣な氣がする。

私は時々友人の一人として平渡君を論じて見たいと思ふことがある。あゝ云ふ異常の人格がうまれたと云ふ一つの社會的事實に對し單純な一公人として考へて見るは亦相當意義のある必要なことだとも思ふのである。そこでT君と共に斯うした點まで觸れて語り合つたのであるが、それ等の詳細の事は今こゝに之を語る遑を有たない。私はT君の傳へた或る一事に付て大急ぎに之を我が讀者に告ぐる責任を痛感して居るからである。

T君の傳へた話と云ふのは斯うだ。平渡信君は初審二審共に有罪の判決を受けながら、不謹愼にも依然として仍ほ松島事件の進捗に大活動して休まない。彼は所謂贈收賄を大した惡事とも思つて居ない。松島遊廓移轉問題そのものはまた瀆職事件とは全く別個の問題だ。色々の點から近き將來の形勢を推するに、遠からず移轉の命令の出るは疑を容れない。裁判沙汰位に怖ぢてこの大仕事をやめられるものかと云ふのださうである。彼は決して世間並に謹愼などして居る男ではない。一旦狙ひを定めた以上何處までも最後の目的に突進する。傍若無人は彼の生命である。だから右の話を聞いても一向之を怪まぬが、併し私の玆に問題とするのはこの話の眞僞如何の論ではない。事實であつてもよし、事實でなくてもよし、更に倚斯う云ふ話の根本に橫はる或る重大な問題に對し、私は改めて世上有識の諸君子に訴へて見たいと思ふことがあるのだ。

それは外でもない、所謂松島事件なる稀代の大疑獄を起した原因なる利權の處分の問題である。T君は平渡君が不謹愼にも今仍ほ醜怪なる運動の手をさめぬのを、一つには彼の性分に歸すると同時に、一つにはまた彼がやらなければどの道巨大なる利權の何人かに依て掠め去らるるの事實に原因する旨を說いた。成る程そこに巨大な利權のころがつて居る以上、後から後からと之に躓く者の簇出するは避け難い。平凡な我々は固より木石ではない、利權の誘惑には實に陷り易いのだ。陷つてはならぬぞと戒むるも無論僻つてはならぬが、併し我々市民の平和

る生活を保障する公安的見地から云へば、之を脅かす恐れのある執拗な障碍の如きは、國家の警察的任務としても一日も早く之を取除くべきものではあるまいか。利權さへなければ醜怪な運動は起らないのだ。裁判沙汰となつてから醜だの腐だのと罵つたツて始まらない。之を例示して風敎の戒にすべからざるを說くは敎育家の任、公器を弄んで私利をはかるものは裁判官が現に用捨なくやッつけて現れてゐる。獨り政治家の側が禍因の剷濟とその掃蕩に心を向けぬのは私の怪訝に堪えざる所である。

一擧に禍根を斷つの妙策は遊廓を許可せぬに限る。併し遊廓の存在は暫く之を許すとして、從て又移轉のことも早晩何れにか定めなければならぬものとすれば、新しき指定地に於ける巨大な暴利の問題は依然として殘る。この暴利を從來通り民間の競ひ取るに委しておけば、必ず復た醜陋なる形態の生ずるは鏡にかけて見るが如しである。之をどうにかせでは問題の根本的解決は到底期せられない。

一寸横道に這入るが、斯う云ふ事件に伴ふ利權とは一體どの位の額のものかを說いて置かう。T君の語ふる所に依れば、例の松島遊廓に在ては、新に遊廓地と指定さるべき土地は買收原價平均坪當り五十圓で、指定が確定すれば少くとも六百圓には賣れるのだそうだ。すると一坪につき五百五十圓の利益がある。地域全體を假りに十萬坪とすると、利益の總額が五千五百萬圓といふ巨額に達する。だから之を默つて見て居る筈はないのだと云ふ。土地會社が起つ、俄に競爭する、土地の買占めをやる、之に附隨する末梢的策術を數へれば、僅に大金を手に入れた小地主の都へ出ての放蕩三昧がある、彼等の懐をあてにする怪しげな商賈が其處此處に出來る。やがて土地會社は指定を急ぐ、官廳に運動する。そこへ代議士だの何だのと云ふ常習的世話人が飛び出す。儲けが大きい丈け出役を惜まず運動の範圍を擴張する。聞く所に依ると、松島事件では貴衆兩院議員全部を始め政界の有力者概略千人を買收する目算を立て、一人當り平均壹萬圓として約千萬圓の賄賂を覺悟して居つたとやら。尤も金額が大きいから之れ丈けの用意が始めから出來て居たのではあるまいが、五千五百萬圓を濡れ手で粟と攫めるのだから、壹千萬圓の賄賂は計算上決して重い負擔ではない。さればこそ二十萬三十萬と云ふ大金を物の數ともせずばッぱッと撒き散らしたのであらう。

之は金額の大きい例だが、最近東京で起つた二業地指定の問題の如きも、理窟は皆松島事件と同一である。この指定に依て土地の値段が暴騰する、地主は躍起となつて運動する。そこへ必ず政黨の有力者が這入る、問題に依ては有力者自身が出る、

けに行かぬといふので、彼を黒幕とする木派の誰れ彼れが表面に顔を出す。要するに其者等の盡力に依て許可の指令を得ればいゝのである。自分の運動に依て成功すべきを信ずる者はまた時として知らぬ顔で安く附近の土地を買占める。斯くして之等一團の者共は、結局目的達成の曉、巨額の暴利を占めるのである。獨り醜業區域ばかりではない、都鄙を通じ之に類した利權の爭奪は今日殆んど政黨者流の副業となり、少數の策士と結托して世間に害毒を流して居ること頗る夥しきものがある。

斯う云ふ話を聞いて私の最も憤慨に堪へざるは、今日の政黨が常に之を當然の利權として自派の便宜に惡用することである。自派の勢力を扶植し又之を擴張するに之程いゝ方法はない。政黨の幹部は官憲の決裁を左右する力を有つて居る、或は有つて居るが如く見せびらかす。是れ利權屋と結托して不義を働く所以である。人を惑はす樣な原因を根絶せしむべき立場に在る者が、之を餌にして私利を圖るのだから堪らない。甚しきは無理に餌を作つて我から進んで人を誘ふ者もある。最近現れた東京市會議員の醜狀の如きも、彼等を利用し彼等の不正を默認した政黨の幹部に全然責なしといふことは出來まい。

更にモ一つ私の怪訝に堪へざるは、例へば松島事件に見るやうな五千五百萬圓の巨額の金を、何故に一私人の掠め去るに委さねばならぬかの點である。一坪五十圓の土地が何に因つて一躍六百圓に暴騰したか。それは決して地主の働きの結果ではない。荒地を開墾して立派な耕作地にしたとでも云ふのなら、一圓に買つて十圓に賣らうと二十圓に賣らうと本人の勝手だが、松島事件の場合は、單に府知事の職權に基く指令の結果で五十圓の坪が六百圓になるのだ。何人の力に因るものでもない、從つて何人も賣買値段の差額に對して要求權を有し得ないのである。然らば之は當然官府に收めて然るべきものではないか。但し差額の五百五十圓を全部官府に納るるや否や並に之を收納するものの中央政府なりや大阪府なりやは、別に専門的見地より決定されねばならぬが、要するに其差額の性質上公共のものたるべきは一點の疑を容れない。讀者諸君は此問題に付て果して如何の見解を有せらるるだらうか。

故に私の見地からすれば、松島事件の樣な場合の利權の掠取に政黨の關係するは、（一）其事自身瀆職の非難を免れず、（二）社會の平穩な生活を保障するといふ公安的使命の懈怠であり、（三）官府に歸屬すべき公財の不正なる盜取であると考へる。ひとり松島事件の如き場合ばかりではない、政黨關係のあさる利權の大部分は、本來みな公共に歸屬すべき性質のものの樣である。此點に於て、今日の政黨は公共財物の盜取を常習と

すと評られても致方があるまい。知らずしてやるのは悍悖の至りだけれども、過を悟らずして傲然不義の威力に醉ふ者に至ては、吾人何の辭を以て之を評すべきかを知らない。

現行選擧制度の補修としての職能代表主義

一

MT生なる人より、最近米國新聞とかで見たとて各國に於ける職能代表主義試行の狀況を述べたる一短篇の飜譯を寄せられ、之に關連してまた種々の疑問の提出に接した。深くその厚意を謝し併せて玆に不束ながら私の所見の一端を述べる。先づ最初にMT君の寄せられた譯文を載せよう。原文の儘一字の刪訂を加へない。

二

西班牙は新憲法に於て國會議員の選擧に從來の地緣主義をすて職業代表主義を採用すべしと云ふ風說がある。果して然らば之で現今この新しい主義を試みて居る國は合計七ツとなるわけだ。

既にこの主義を實驗しつゝあるのは獨逸、ユーゴ・スラヴィア、波蘭、ソヴィエト・ロシア、墺太利及び伊太利の六國である。

假りに我が合衆國で之を採用するとしたらどうなる。例へば上院に付て云はんに、從來の樣に各州に於て二人宛を選ぶと云ふ制は廢められ、各種の組合から議員が擧げられることになるだらう。醫師會から一人、生産工場組合から一人、四大鐵道會社聯盟から一人、全國教師會より一人、婦人聯合會より一人と云ふ風に。つまり投票權を有する全アメリカ市民は、その職業に依て彙類せられ、それ〲の組合に於て、代議員を選擇するのである。

何事でもさうだが、斯の思想だつて決して今日突如として出現したものではない。昔時貴族、僧侶、庶民の三級に分けたのも、大體に於ては職業を基準としたものであつた。

併し今日唱へられる樣な職能代表主義は、獨逸新憲法の第百六十五條と露西亞のソヴィエト組織から始まるものである。獨

逸憲法の方は各工場の勞働者會議と國民經濟會議とを規定したものであるが、後者の構成は次の如く定められて居る、(一) 農業及林業代表六十八名、(二) 一般工業代表六十八名、(三) 商業及銀行業代表四十四名、(四) 小工業代表三十六名、(五) 運輸業代表三十四名、(六) 市場及漁業代表六名、(七) 消費者 (都市・消費組合・婦人團體) 代表三十名、(八) 官公吏及自由職業代表十六名、(九) 政府指名代議員二十四名。以上の中、一般工業代表といふ中には勞働者と雇主との兩側が相半して居ることを注意しておく。

猶ほ獨逸の經濟會議は諮詢に應じて意見を答申するだけの權限しかない。今までの所大した仕事をしたと云ふわけには行かないやうだ。

墺太利では各州に於て勞働會議所を作ることに定められて居る。それは工業並に公企業を通じ、筋肉勞働者と下級事務員とを包含せねばならぬことになつて居る。波蘭、ユーゴ・スラヴイアと、モ一つ序に云つておくが自由市ダンチヒでも、中央の政治組織に職能主義を織り込むことの企てが骨折られて居る。

ソヴイエトはそれ自身已に一つの職業團體なのだから、その政治組織に職能代表主義の色彩の最も濃厚なるは怪むに足らぬ。併し今のところ資本はまるで發言權を與へられてゐないし、又都市勞働者の一人には田舍の農民の五倍の投票權が認められて居るなどの特異の取扱があるのだから、その經驗は直接にあまり我々の參考にはならぬやうに思はれる。

新聞の報ずる所に依れば、ムツソリニは先き頃現議會制度を攻撃し已にその排斥を宣明したと云ふ。然らば彼は之に代ふるに何を持つて來るつもりだらうか。

フアツシスト革命以來伊太利の政治は多少流動的狀態に在つた。昨今に至て漸く職能的にかたまりかけた樣である。最初提案されたのは資本、勞働及び公務の三群であつた。けれども公務員とその組合は今や勞働群に組み入れられることになつたから、結局資本と勞働の二大群の對立を見ることになる。

尤も同國の市民は次の十三種の組合のいづれかに屬せなければならぬことになつて居る。そしてその中の六つが資本群の所屬で、他の七ツが勞働群の所屬と云ふことになるのだ。資本群に屬するものは (一) 全國フアツシスト工業組合 (以下各團體は皆全國フアシツストの文字を冠するも、煩しければ之を省略する、正式には皆之を頂くものと考へられたい)、(二) 農業組合、(三) 商業組合、(四) 海上及航空運輸業組合、(五) 陸運及沿海航業組合、(六) 銀行組合で、勞働群に屬するものは (七) 工業使役者聯盟、(八) 農業使役者聯盟、(九) 商業使役者聯盟、

（十）海運及航空運輸業使役者聯盟、（十一）陸運及沿海業使役者聯盟、（十二）銀行使用人聯盟、（十三）智能職業者聯盟である。

猶ほムッソリニはこの十三團體の上に組合聯盟總書記なるものを置いたが、最高の調停事務を掌らしめるものらしい。果して然らば、資本及勞働の對立二群の間に起ることあるべき爭議に對し、彼は「祖國の利福繁榮」の名のもとに明快なる裁斷を下す積りなのであらう。

三

之よりMI君の質問に答へる。

（一）職能代表主義は今後益々盛に歐洲諸國に行はれるだらうか。　この問題に對し私は大體に於て否定的の考を有つて居る。尤も之は問題の意味の取り樣に依て少しく趣が違ふ。從來の地緣代表主義を根本的に否認し之に取て代るべき絶對的の主義としての話なら、私の否定の度は一層强いが、若し在來の主義の缺陷を補ひ之と或る程度に併行して行はれるものとしての意味なら、或は漸次行はれる様になるかとも考へらる。少くとも局部的には行はれるだらうし、殊に最近試行の經驗が良好の結果を示しでもしたら、一層採用せらるゝ度合は高まるかも知れない。併し大體の上から論ずれば、職能代表主義の唱導を事實上促した原因たる現行選擧制度の缺陷に、實に此の方法を以てする補修の試みに依て多少緩和せられんとするの見込あり、從て實際の必要は職能代表主義の採用まで行かなくとも一旦は事が足りると云ふとになるかも知れぬ。それに職能主義はその據て以て立つ所の理論に尤もな所が多々あるとしても、之を實際の選擧制度に織り込むのにはまた種々の實際上の困難がある。今日現に之を實行して居る諸國の經驗はこの困難を大に少からしむるものだとはいへ、兎に角この新しい試みはさう急激に盛行するものではない様に思はれる。

（二）職能代表主義を主張する根據は何か。　私の考では之には三種類あると思ふ。一は代表の本質より觀て人は特殊の職能的立場を代表するといふことはあり得るが一般的立場を代表すると云ふことはあり得ないとする考である。此考によれば職能代表だけが唯一の正しい代表といふことになる。二は理論を以て表面を粉飾するもその實プロレタリアの獨裁權を確立するの楷梯として之を唱導するものである。ロシア流の共產主義者の立場からすれば、初めからプロレタリア以外の代表を認めないから問題はないが、さう露骨に出ない處に在つても、職能代表制の仕組み方如何に依てはその獨裁的地位を事實上築き得ないと限らないといふので頻りに之を唱導する。從つてこの派

の人の說明には特に經濟的職能を過分に重要視すると云ふ特徵がある。三は利害及感情の共通なるの基礎として地域といふものが昨今大に重要味を失つたと云ふ考に出發するものである。勿論之と同時に職能を同うすることが地域を超越して昨今大に利害及感情の共通を味はしむる樣になつた事實を前提として居る。但しこの考を抱持する人は概して地域の意味が全然廢つたとまでは考へない。近隣であること同じ地方に住んで居るといふことは、今日でも田舍などでは人と人を結ぶ可なり强い紐帶になつて居る。そこで職能代表主義の價値をも絕對獨自のものとせず、地域主義と併行してその缺陷を補ふべきものと考ふるのである。以上は固より論理的の分類ではない。實際の政治事實として職能代表說を主張するものに以上の三種あることを指摘したまでである。

序に一つ言つて置きたいことは、現行選擧制度が種々の缺陷を暴露したと云ふ事實が、之に代位するもの又は補修するものとして職能主義を顧みるの風潮を大に助長したといふことである。必しも職能主義の根據に聽くべきものありとの前提から來るのではない、現行の制度とは違つたものだと云ふ所から、そんならそれも一つ參考として聞いて置かうと云ふ位の所である。職能主義それ自身の理解が先に立つたのでないから、所謂現行制度の缺陷が他の方法で修訂されると、此方は一寸高閣に束ねられるといふ憂がないでない。職能代表主義が徹頭徹尾さう云ふ風に取扱はれて居ると斷定はしないが、實際政治家の態度の中には可なり斯んなのが多いやうに思ふ。

現行制度の缺陷を修訂する他の方法とは何か。比例代表主義である。一體從來の地域主義では、謂はば同一の地域內で有產階級と無產階級とが爭はしめらるるのである。單純なる數からいへば無產階級は絕對的優者なのだけれど、今日までの經驗は、選擧の勝敗は單なる數だけでは決らぬことを明白に教へて居る。その結果現行制度は少數有產者の專政に便する以外の何者でもないことになつた。而して此弊が比例代表主義の採用に依て若干除かれ得るは理論及び經驗の明示する所である。尤も今日のところ、この制すらがまだ不完全だから十分その效用を發揮したとはいへない。之が職能代表を全然不要ならしむるか否かは問題だが、實際上の順序として甲から乙にと漸を追うて進むのであらうから、比例代表主義すら採用されない我國に於て職能主義の實施を見るは、少し遠い先きのやうに思はれるのである。

（三）職能代表主義試行の諸國の實驗より我々は何を學ぶべきか。

職能代表主義は下院の構成に之を用ふるに付ては仍ほ

種々の異論あるべきも、上院の構成に之を採用すべしとか少くとも之を加味すべしとの議論は夙くから我國にもある（拙著「現代政治講話」二一二頁參照）。少くとも大都市の市會議員選擧などには是非之を用ゐたいものだと思ふ。殊に私は東京市會最近の醜狀に直面して昨今頻りにこの必要を痛感するものである。前にも述べた如く、大都市に於ては格別地緣關係の人を動かす度合は弱い。現に私共は東京に住つて居つて、何時何處へ轉居するか分らない、從つて現に居る處を自分の故鄕だと云ふ風に感ずることは出來ない。其上都會生活は一般に殺風景極まるもので、隣りの人とも交際するでなし、先方も亦同樣で、よしんば十年相隣して居ても一度も顏を見合したことがないと云ふ場合もある。斯う云ふ人を一體どうして選擧團體として有効に組織することが出來よう。國會議員の方は候補者が既に相當の聲譽を有つて居るから我々は單獨でも良否の判斷をするに苦まないが、市會議員や區會議員などになると、近隣と相談するといふ便宜がないので誰が何やら皆目分らない。私一己の經驗に於ても、此方になると、未だ嘗て一度も相當の自信を以て投票したことはないのである。之が若し職能代表制に依て教師の組合とか文筆勞働者の組合とかに於て代表者を擧げると云ふ樣なことであると、私共は十二分の確信を以て相當の人物を擧げ得ると信ずる。從てまた事後に於ての責任を十分に監督することも出來る。市政の腐敗を防止する一つの有效な手段は職能代表主義の採用であらうと、近頃つくづく感ぜられてならない。

只職能代表主義の實施に當つての大なる困難は、有權者をどう彙類するかである。之等の詳細のことは專門の研究にゆづり茲には述べぬが、何事でも新規に試みることは困難の伴ふやうに、格別此事は六つかしいとされて居つた。然るに現に世界の七ケ國は既に之を實地に、試みて居ると云ふ。是れ我々に取て頗る幸福とすべき所ではないか。主義として之を試むるの好ましとする以上、殘る所は實行上の苦心だけである。この點に於て右の國々の實驗は、我々に取て實に貴重此上もないものと謂はなければならぬ。

（四）我國に於て近く此制度の行はるる見込はあるだらうか

この問に對しても遺憾ながら否と答へざるを得ない。我國今日の支配階級は、國會は勿論、市會でも區會でも、在來の制度の上に種々自己に便宜な仕組を設けて巧に自家の政權を維持して居る。今まで通り安逸を貪る爲には制度の上に變革を加ふるが如きは何よりの禁物だ。新しき基礎の上にあらためて努力するなどは頭から考へて居ぬ。それが國家の爲だらうが社會の爲だらうが一向頓着せぬのである。現に識者階級一般の輿望たる

比例主義すらが、近く採用せらるる見込はないではないか。私はこの點に民衆一般の注目を向けしめ、彼等を刺戟し輿論の聲として强く支配階級に迫ることの外に、該制採用の目的を達する方法はないと考へる。輿論の叫びが强ければ嫌々ながら普通選擧制をすら採用した程に根の弱い政治家だ。直接に彼等に説くは全く無用の事、我々は國民大衆に依てこの制の必要の大に叫ばれんことを希望するものである。

英國勞働黨の新政綱

最近開かれた英國勞働黨の年度大會は、次期の總選擧に臨むの用意として、新政綱を發表した。一九一八年發表の有名な政綱以來の詳細を極めた長文の政綱として、今や英國の内では勿論、ひろく全世界の注目をひいて居る。

併し乍らこの新政綱の基調は、よく讀んで見ると、十年前のそれと殆んど異る所を見ない。一言にして云へば、最も平凡な又最も常識的な社會主義的政治方針を事新しく表明したものに過ぎない。

元來英國の勞働黨は、その國民性にも依るのであらうが、大陸諸國の社會黨や勞働黨の如く、その政綱に理論上の原則をくどくしく並べ立てることを好まない。新政綱は曰ふ、勞働黨の社會主義は、物事の本質には道理があると云ふことと、凡そ人間は本質的には互に協力する者であると云ふことを現實に認めるに在ると。從て彼等の社會主義的主張を聞いて見たところ、何等の新奇な理窟がある譯ではない。宛も思慮分別に富む年輩の人から分り切つた道理を諄々として説き聞かされると云つた感じである。

今度發表された新政綱には、所謂理論的原則といふ様なものは殆んどなく、要するに社會主義を奉ずる勞働黨の根本的な而してまた常識的な態度を一ト通り述べた後、將來彼等が内閣を取つた際に實施すべき諸政策六十三項目を掲げて居るに過ぎない。だから何も新奇なものを發見しないと云ふのであるが、それでも尙ほ我々が該政綱を讀んで强く打たるるのは、英國勞働黨の指導精神が最近幾多の試錬に遭遇しても些の動揺を見ず、却てその政策をば益々具體的に現實的に發展しつゝあるを見せ付けられるからである

英國勞働黨は人の知る如く無秩序に反對し、混亂を生ぜしむることに依て主張を貫かうとする態度を排斥する。選擧民多數の同意を得て且又民衆政治の機關を通じて、平和的に政策綱領の實現を期せんとする。斯ういふ態度で押し通さうとする限

り、彼等一味の言論行動が平凡化され常識化されて行くのは怪むに足らない。社會に混亂を捲き起しその異變に乘じて一部無產階級の反抗心を激發し、巧に之を統率煽動することに依て目的を達せんとする所謂共產黨式の戰術は、到底彼等の容るる能はざる所である。我國と同じく或はそれ以上に、英國はこの共產黨式戰術には惱まされた、今現に惱まされつゝあるともいへる。故に彼等の平凡なる政綱宣明は。斯かる苦鬪の結果と觀る時に一種特別の興味を覺えるのである。彼等の宣明が平凡であり常識的である割合に、その運動形式が積極的であり同時にまた頗る活潑であるのも、故あるかなと首肯せらるる。蓋し平和的に又確實に社會主義の要求を實現するには之を措いて外に方法がないのである。この意味に於て英勞働黨の如きは、最も典型的な常識社會黨と謂ていゝ。尖銳な理論と激情的な文字を缺く點に於て、英國勞働黨の新政綱は年少活潑の社會運動家の氣には入るまい、併し國民大衆の贊同と支持を得て國民大衆と共に事を成すには、この方法に依るより外に途はないのである。

社會主義の理想は獨裁主義に由ては斷じて實現し得ない、民主主義の勝利を以てその第一の梯梯とする。英國勞働黨がその新政綱に於て相變らずの平凡振り常識振りを發揮したことに、寧ろ我々は敬意を表したいと思ふ。次期の總選擧に於て彼等が如何なる戰績を示すかは今より豫斷することが出來ないが、私共は正しい主張の當然の勝利の爲に切にその成功を祈らざるを得ないのである。

擧國一致といふ意味

前號所載「外交調查會是非」に對し、さる讀者から次の樣な質問に接した。曰く、貴論の末段に「眞に擧國一致の外交をやらうとなら外交調查會をして外交指導の最高權を有せしむべし」とある。外交指導の最高權を與へたとて之に集る人々の意見が歸一すると限らぬ以上、擧國一致の外交とは本來不可能な事ではないか云々と。一應尤もの質問である。成程斯く開き直つて來られると、私の論文は甚だ言ひ足らぬのであつた。依て次に數言を補足し、併せて質疑に對するお答としておく。

一、外交調查會の席上で色々の議論が火花を散らしたとする。多數決を以て或る一主張が勝つたとしても、之に反對な主張の澤山あつた事實は爭へない。果して然らば事實上擧國一致の主張といふものはない理窟である。故に單に事實を語る丈けの話なら、御質問の通り、所謂擧國一致の外交なるものは本來全く無意義の謎言に過ぎないのである。

二、併し乍ら之を外交調査會と云ふ制度の上に現れた特殊の現象として考へると、問題は違つて來る。ひとり外交上の事に限らず、又公けの政治問題でなくとも、百人集れば百人皆意見が違ふので、到底一つに纏まる筈のものではない。そこで之を一つに纏める機械的の方法が工夫せられた、即ち多數決の制が是れである。この機械的の約束に依て、多數の同意する決定を全體の者の意見とするのである。之は一見甚だ姑息な意味のない約束の樣だけれども、必しもさうでない。今日の開明の世の中に於て、多數の可とする所に多分の眞理ありと一應の推定を下すは必しも不合理でなく、結局之に服し得ぬ者は自己の説を懇切に釋明するとに依て他日從來の決定を覆し得ぬとも限らない。多數決は現に多數の贊同を得たものを永久に是とする制度ではない、一人でも多くの贊同を得れば何時でも之を是とすると約束する制度である。一時の決定は誤ることありとしても、同じく之を補正するの途を安易にして置く所から、結局に於て眞に正しい立場に最後の勝利を得しむる制度だと謂ふことになる。

三、從てこの制度の運用に際して最も大切なることは(イ)最後の決定を見るまでには十分に各種の意見を闘はしむることであり、(ロ)一旦決定を見た以上は、先きに之と違つた意見を主張した人でも、形式上全體の意見として之を尊重し之を支持すべきことである。不幸にして我が日本には斯う云ふ制度の意味を解せず、その運用をあやまることが多い。自分の意見が容れられないと直に異を樹てて相手方を罵倒する。隱忍して更に一層自らをみがき、徐ろに他を説服して次の機會に自説を勝たしむべく努力するの餘裕を有たないので困る。

四、外交調査會にしても同じ事だ。之を正しく運用するの訓練を欠くので、意見の更に歸一するものがない樣に見えるのだけれども、内部に於ける各種主張の爭鬪は、實に外交に關する國論の社會的に構成せらるる一重要過程に過ぎず、一旦多數に依て歸着點を觀たる以上、之を擧國一致の外交方策と見做して差支ないのである。事實に於てそが國民多數の支持する所なりや否やは別問題だが、一人でも多數の贊同を得たものを勝しめると云ふ制度の精神に、擧國一致の意見の發現の可能が許されるのである。

五、右述ぶる所に依り、多數決の制度は其處に集つて居る者の間の全體の意思如何を決めるものなるは明だ。故に外交調査會の決定が形式上擧國一致の外交方策であると云ふに妨げざるも、事實上そが果して國民多數の支持する所なりや否やは、又別に外交調査會其者の構成如何に依る問題である。外交調査會

[illegible]網羅するものでないと、之と國民全部の考と相合致すと認らるべき何等の根據もないことになる。外交調査會の決定を以て形式上擧國一致の方針なりとする結果に、更に一步を進めて國民全體の支持ありとする事實を附帶せしめんには、先づ其構成を愼重にせねばならぬこと勿論である。

六、或る意味に於ては、斯んなものを設けなくとも擧國一致の外交方針を云々し得ないことはない。朝野兩黨對立の事實があつても、制度運用の當然の歸結として或る一黨が政府に立つて居る以上、其政府の方針は即ち國家の方針として許されて居るのだ。野黨が之と相容れぬ立場を常に主張しても、それは內部のこと――少くとも國家の方針の決定を見るまでの內面的發展過程に於ける一紛爭であつて、全體としての事態の變更を見ぬ限り。既定の方針に急激の變化を見るが如きことはない。故に政府が愼重なる攻究の下に方針を決定して居る限り、改めて外交調査會の如きを設くる必要はないのである。但し政府の態度が輕燥に失し、公平なる批評家の間にもその失態の聲の叫ばるる特殊の場合には、政策上外交調査會の如きものを設け、暫く政府既定の方針を封ずる必要が起るかも知れない。此場合には一時外務省の活動を停止し（停止と云ふ意味は最高方針の決定を之に求めるを停止するの意、普通の事務をまで停止する意味ではない[illegible]）[illegible]本當の擧國一致の外交にはならぬのである。

尤も外交調査會は一寸問題になつて間もなく[illegible]みになつたからもう此上論ずる必要はない。此種の國家機關に就て一般の意味、之に依て作らるる決定の效果等に就ては、憲政運用上いと重大な問題として獨立に留意せられんことを希望せざるを得ない。先決問題として其構成をあやまる可からざるは勿論だが、更に細目に亘りて、（一）會議に於ては憚る所なく各種の意見が闘はされ、（二）一旦多数を以て決定を見た以上、勝つたものも負けたものも等しく皆之を以て自分達の立場なりと承認するの雅量を有ち、（三）同時に又少數意見にも絕へず耳を傾け、少しでも取るべきものあれば何時でも之に聽從するの用意を怠らず、（四）要するに多數決の制度を自說の通過に利用するのではない、全體の立場から觀ての最良の意見を通過せしむるのだと云ふ考になれば、各種の會議機關は頗る圓滿に且活潑に其效用を發揮するだらうと思ふ。我々はとかく餘りに勝敗に拘泥する。勝敗は內部のこと、外に協力して現すべきもツと大きな仕事がある。勝に驕し敗に屈するの訓練を積まずんば、折角の制度も却て紛亂の度を增す道具になるばかりだ。無産政黨なども此の點の訓練を積んで居つたら、あゝまで見苦しく分裂をせずとも濟んだらうにと、今更殘念に思はれぬでもない。

前段に於て私は一寸外交調査會の問題に觸れた。之は世上の反對論に壓されて何時の間にやら立ち消えになつたが、併し田中首相が之に依て遂せんとした目的をも同時に放棄したのでないことは、能く心得ておく必要がある。外交は擧國一致でやらなくてはならぬと云ふは、外交調査會設置の表面上の口實に過ぎず、本當に擧國一致と云ふ點に重きを置くのなら、構成も權限も首相の暗示せる如きものでは駄目だ。この事は先きにも私の指摘した所である。首相の本當の肚裏を讀んで見ると、外交方針は既に決定してある。之を皆が支持して呉れると、先方と掛引をするに甚だ都合がいゝと云ふ位の所にあるは明白だ。乃ち見る、田中首相の遂せんとせし目的は、自家の對支方針の支持者を作るに在りしことを。故寺内伯の故智に倣ひ、外交調査會の設置に由て無理に各派首領の他日の批評を封ぜんと試みしも、まんまと失敗に終り、同時にまた彼の對支方針に對する輿論の批難が益々昂まるのに焦ち、今や彼は頻りに第二第三の秘策妙計に腐心しつゝある樣である。

外交調査會の設置に失敗した田中首相は、更に何の方面に活路を見出さんとしたか。第一は床次一派の新黨俱樂部である。第二は最近の憲政一新會である。初めにことわつて置くが、私は新黨俱樂部や憲政一新會やに田中首相がどれ丈け關係あるかの確證を握つて居る譯ではない。又時期に於て彼と此と詳しくはどんな關係に在るかを明にしてゐるのでもない。只論理的に考へて彼は甲に失敗して乙に移つたと觀るまでの話である。事實或は甲と乙と同時に手をつけたのかも知れぬ。若しそれ新黨俱樂部と憲政一新會とに田中首相の密切に關係あるべきの點に至ては、彼れ及び政友會の從來のやり方に徵し、特に明白なる反證の擧示せられざる限り、我々の之を確信するを敢て異とすべき理由はないと考へる。

事實は最も雄辯に裏面の消息を語る。床次は支那問題に付て民政黨の表示する意見と相容れざるを主たる理由として脫黨した。憲政一新會の宣言も亦對支政策を政爭の具に供すべからざるを力說する。是れ事實に於て兩者共に田中首相の對支政策の絕對的支持を表明するものではないか。その他の點に就てこの二つの新團體がどれだけ政友會と通謀ありやは明白でないが、少くとも對支政策に付てかたき聯繫の成立せることだけは間違ない。是れ田中首相近來出色の離れ業として彼の爲に大に其成功を祝すべきものであらう。但し、帝國百年の大計の爲にも同じく之を祝すべきか否かは問題である。

今日眞面目な國民を百人集めて各種の意見を懇切に說き聞かした上、さて對支政策につき諸君は如何なる立場を執らるるか

[illegible]まいと思ふ。別に確たる根據ある譯ではないが、比較的に多くの且ついろ／＼の人に接する機會を有する私の感じを正直に告白すれば右の通りだ。是れ亦多少の參考にならぬとも限るまい。現に有力なる諸新聞の論調を見ても分る。田中首相の方策を支持するものは殆んど皆無に近いではないか。然るにも拘らず、彼の政策は樞密院の喜んで迎ふる所、而して貴族院の多數も之に向つては異議を唱へぬと聞いて居る。民政黨の傳統方針が根本的に間違つたものだと云ふ空氣は衆議院にも相當に強いとやら。之に由て觀れば、我國の所謂上層階級の對支政策といふものは、我々から見ると、實に變なものである。我々は實は所謂民政黨の傳統方策なるものにすら贊成し得ないのだ。然るに之をすら許し難しとするのだから、彼等の對支方針の如何に我々と對蹠的反對の關係にあるかが察せられるだらう。

古い甘夢に陶醉せる者と新しき時代に目ざめたる者との對立は斯んな方面にも段々鮮明になつて來る。之を憂ふべしとするや否やは、今後の發展に徵するの外はない。必しも今より一概に豫斷すべき性質のものでないかも分らぬ。

いづれにしても昭代の奇怪事

の　下關稅關で發見された[illegible]　[illegible]に於て「[illegible]勇敢」といふ仰山な見出しで次の意味の下關通信を載せた。

滿鐵副社長松岡洋右氏一行の荷物を門司稅關下關出張所で取調中、衣類入といふ大型行李の中から毛皮毛布九枚とゴルフボール四打が出たのを始め、各トランクや預荷物などから葉卷贅澤品其他高價な奢侈品が續々現はれたので、秘書は青くなつて陳謝したが、同出張所では法則に依て見積り價格の十割を課稅し、特に今回だけは處分せず嚴重將來を戒めた。同出張所が一行の荷物を斯く嚴重に取調べたのは、先般山本滿鐵社長の東上の際、重要書類入と稱してゐたトランクの中から山なす贅澤品が現れたからである。

右の新聞記事は（一）所傳に誤りなしとせば、滿鐵正副社長ともあらうものが斯んなケチな破廉恥的行爲を恥ぢない時代もあつたと云ふことの證據になり、（二）又其所報が間違であつたとすれば、朝日新聞と云ふ本邦第一の信用ある新聞でも地位名望ある紳士に對し詳細に事實を調査もせず斯んな思ひ切つた讒誣の記事を載せたこともあると云ふことの證據になる。孰れにしても昭和の今日を他日に語らしむる好個の資料として今の中から之を保存しておく必要があると思ふ。

經濟時評

紙幣發行準備の問題

保證擴張と比例準備制

牧野輝智

大藏省の金融制度調査準備會で現行の日銀兌換券發行準備制度の改正が問題となつてゐる。それが如何なる內容にて實現するや、或は又實現に至らず立消となるや、今のところ全く未定であるが、問題は經濟界の全體に亙りて關係深い重大問題である。容易に決定し難いこともさることながら、現在の制度を此まゝ繼續することの不合理なるは識者を待たずとも甚だ明白である。以下本問題に就て少しく私の意見を述べて見たいと思ふ。

日銀發券制度の改正に對して一部には此の企ては問題の本末を轉倒したものと非難するものがある。之は銀行家仲間に聞く議論であるが、其の言ひ分は我國は今尙ほ金の輸出を禁止してゐる。金解禁を其のまゝにし發券方法の改正を調査することは本末を誤つたものでなくて何であらうといふのである。如何にも金解禁問題を其まゝにして兌換券發行制度の改正のみを實行せんとするのは誤つてゐる。併しながら此改正は金解禁に關聯して實行す可き問題である。少くとも金解禁後近き機會に實行す可きものである。今日に於て之が調査研究を試み其方針內容等に就て準備を整へ置くとは決して本末を轉倒したものではない。是を最近の各國の例に見るに伊太利では金解禁と幣制改革とを同時に決定した（一九二七年末）。佛蘭西では本年六月金解禁の決定と同時に發券準備制度を始めとし、貨幣制度全般の大改正を斷行した。希臘では金解禁の準備として幣制の改革を行ふた。英國では一九二五年四月に金解禁を行ふたが、其の後三ケ年の經驗を基礎として本年五月發券制度の改正を中心とし

一、紙幣發行額と正貨準備とを統一する政策を實施せしめた。

我國にても金解禁は遠からず斷行せねばならない時勢となつてゐる。金解禁反對の三土藏相なども最近の態度は餘程變つて來てゐる。是は寧ろ當然のことであるが、日銀發券制度の改正も亦金解禁に關聯し是非とも解決せなければならない問題である。それには色々理由があるが、第一の理由としては元來我國の發券制度が時代の進步に適合しないものであるからである。假りに此の制度の根本的改正は暫く措くとするも、少くとも保證準備の擴張は是非實行せねばならないことである。といふのは現行の保證發行は明治卅二年五月の改正にかゝるもので、當時の我國の兌換券發行高は二億二、三千萬圓に過ぎなかつたのである。然るに今日は兌換券の流通高が其の五倍以上に達し年末などには十六億十七億の巨額に達することもある。今から三十年前の保證發行限度一億二千萬圓は流通紙幣總額の半分以上であつたが今日では一割にも足りない程である。此の限度を擴張せよとの主張は單に此の一點から考へても合理的の根據深いものであることを會得し得るのである。第二理由としては金解禁を決行するとなれば正貨の流出により通貨發行の狀況に急激の變化を來さないとも限らない。此の激變に應當するために保證發行限度を擴張し置く必要があるといふのである。

後の一つの理由を[illegible]するものもないといふこと、[illegible]金解禁の同時に或は其以前に解決せねばならぬことゝなつてある。

我國に於て保證發行限度の擴張が識者に依りて提唱されたのは數年前來のことである。其の代表的の主張者ともいふ可き人は高橋是清氏であつた。高橋氏は金解禁には反對であるに拘らず、保證限度擴張の必要を力說したが、それは主として右に述べた第一の理由に基くものであつた。其の後財界の一部には高橋式の提唱に共鳴するものも少くなかつたけれども金解禁が延び〳〵になつたため其問題の解決も遷延されてゐるが此の意味の遷延は右に述べた第二の理由に關聯してゐるのである。

元來我國の現行發券制度は明治廿一年に制定したもので、貨幣學上伸縮的制限法（エラスチツク・リミテツド・メソツド）と稱するものである。之は其當時獨逸の發券制度に倣つて制定したもので、永い間實際家も經濟學者も（我國では）最も理想に近い發券制度として承認してゐたやうであつた。たゞ限外發行が頻繁に行はれることに就ては識者の非難を免れなかつたが、是は保證發行限度が少いからである。保證發行を擴張しさえすれば此の弊を一掃することが出來

るといふ辯明もあつた。然るに我國の模範とした獨逸では此の制度は失敗に歸し、一九二四年の幣制改革では米國と同樣の比例發行法を採用した。改めていふまでもないが、伸縮的制限法といふのは、兌換券の發行には正貨の全額準備を原則とし、其の外に或る程度の保證發行を許し、財界の事情切迫し、その以上兌換券の發行を必要とする場合には、制限外發行と稱し、保證發行限度以上に兌換券を發行し得る制度である。英國などの制度が保證限度以上絶對に限外發行を許さなかつたのに對し、伸縮力ある發券制度として多くの人から賞讃されたのである。併しながら飜つて考ふるに保證發行の限度なるものは何を標準として定めらる可きものであるか甚だ理義の徹底を缺いだものである。

英蘭銀行の最近までの限度は千九百五十萬磅、今回改正の二億六千萬磅、我國の保證限度一億二千萬圓、是等は何等合理的の根據により算出されたものではない。

我國に於て初めて保證限度を決定した時の事情を考ふると如何に兌換の請求がしてもこの位の兌換券は流通市場での必要上兌換の請求なくして殘るであらうといふが如き極めていゝ加減の推測に基いて決定されたものゝやうである。故に此の點は保證準備限度擴張の問題が起るごとに常に問題となるのである。英國でも大戰後政府紙幣を英蘭銀行券に統一することはカンリフ委員會の決議により殆ど既定の事實であつたが、是に關聯して保證限度を何程に擴張すべきかが不明なために今年まで其解決が遲延されたのである。我國にても保證限度を擴張するとなると何億圓だけ擴張す可きかゞ問題である。

然るに世界の狀勢を見ると大戰後新に幣制を創定した國々は、殆ど例外なく比例準備制を採用してゐる。又古來の幣制を改革した國々も、英國を除く外は殆ど皆比例準備制を採用してゐる。此の世界的傾向は果して何を語るものであるか。我國近年の發券制度改正問題は保證發行限度の擴張問題のみに限定されてゐたやうであつたけれども、今日の場合苟も此改正に手を染むる以上は其萬全を期するために何が故に比例準備制が世界的に見て發券制度の本則たる地步を占むるやうになつたかの理由をも、十分討究せなければならない。聞くところによれば大藏省の本問題調査も從來の如く保證限度の擴張とのみ限らず、更に根本に立入りて保證擴張可か、比例準備制是かの問題を研究してゐるといふ。是は寧ろ當然のことで私は大藏省の研究態度に贊同を表すことを惜まない者である。

近年世界の各國が競つて比例準備制を採用するに至つた

としては米國の比例準備制採用が與つて力あるやうに思ふ。米國の聯邦準備銀行制度は一九一三年末に確立されたものであるが、此の制度では紙幣發行の準備として四〇パーセントの金準備を必要とする旨を定めた。若し米國の比例準備制が失敗に終つたならば歐洲の各國でも之を採用することに躊躇したであらうが、米國の制度は其運用上十分の好成績を擧げた。歐洲大戰後各國が幣制改革を行ふや、南阿聯邦では一九二〇年の幣制改革にて米國と同率の四〇パーセントの比例準備制を採用した。其翌年の露國の幣制改革では二十五パーセントの比例準備制を採用し、一九二二年の墺國の幣制改革では四分ノ一準備に初まり十五年後に三分の一準備に達せしむる制度を創定した。其の後幣制改革を行ふたる獨逸白耳義等にては米國同樣四〇パーセントの準備制を採用し、今年の佛國の幣制改革では紙幣發行最高額法定の制度を廢棄して三五パーセントの準備制を採用した。斯の如く準備率に就ては幾分の相違があるが比例準備制の採用といふことは同一である。

然らば比例準備制の採用には如何なる合理的の論據があるか私は其の第一として兌換準備に對する思想上の變化を指摘したい。以前兌換準備なるものは何時にても金の兌換に應じ國内に於ける金貨流通に支障ないやうにせねばならぬといふ趣旨に基いて發案されたものであつて、[illegible]經驗により、國内流通を目的とする金兌換準備は必要でないといふことが了解される。今日に於ける金兌換準備は主として國際決濟上の必要の爲めに存置されるものである。此の趣旨は英國の新幣制に於てさへも十分に承認されてゐる。既に正貨準備が專ら國際貸借上の決濟の爲めに備へられるものとなつた以上は、通貨の購買力信用を完全に維持し、對外決濟に不自由なき程度の正貨を準備して置けばよろしいといふことになる。而してそれには比例準備即ち三分ノ一準備、或は四〇パーセントの準備にて十分目的を達することが出來る。若し國際收支が著しく逆調になり正貨の取付が激増する場合には在外資金の調達其他の方法により此の情狀を阻止し若くは緩和することが出來るからである。從つて根本の問題としては正貨準備を充實することよりも、國力其のものゝ充實が必要といふことになるのである。又正貨準備は必ずしも國内の中央銀行庫裡に保有するにも及ばぬといふことになるのである。

今日の世界の實狀を見るに正貨の充實した國が必ずしも幣制の鞏固な國であるとは云へない。昨年末現在世界の金存在高は百八十億圓であるが、それが如何に配布されてゐるかを金準備の多い國から順々に揭げると次の通りである。

世界主要國の金保有狀況

——昭和二年末現在——

一、	北米國合衆國	八、三四三、〇五八、〇〇〇円
二、	佛蘭西	二、一四六、四〇三、〇〇〇
三、	英吉利	一、四六三、六八八、〇〇〇
四、	日本	一、二七三、〇〇〇、〇〇〇
五、	西班牙	一、〇〇七、六〇〇、〇〇〇
六、	アルゼンチン	九〇一、九九九、〇〇〇
七、	獨逸	八八七、四五六、〇〇〇
八、	伊太利	六一六、二六三、〇〇〇
九、	加奈陀	三九五、一八二、〇〇〇
一〇、	和蘭	三一一、三六〇、〇〇〇
	世界の金保有總額	一八、四〇七、一九四、〇〇〇

米國が今經濟的に優勝の地位を占めてゐることは其の金保有額の巨額なることと並行してゐるが、米國に次で金保有額の多いのは佛國である。然るに佛國の貨幣事情は非常に混亂し最近思切つて通貨價値を五分ノ一に切下げ其安定を實現さしたといふ狀態である。金の多いことからいふと西班牙は世界第五位にあるけれども今尙ほ金解禁も出來ないといふ不健全な狀態である。世界第四の金保有國である我日本も此の點に於ては西班牙と酷似したものがある。英國の金保有高は佛國よりも少く我國よりも少し多いといふ程度であるけれども、通貨事情の堅實なる點に於ては、佛國と比較すれば勿論、我國などよりも遙に優つてゐるのである。

私が右の計數を揭げたのは正貨の保有高の多少が國力の標準にはならない、又貨幣事情の堅實なる證據にもならないことを實證せんが爲である。既に金準備を多くする程通貨事情は堅實になるといふ性質のものではないとすれば非常な無理をしてまで巨額の正貨を保有する必要はないことになる。米國などは何等無理せずに正貨が激增したのであるが、それでも必要以上の正貨を庫裡に死藏するのは不經濟であることを悟つて、近年は頻りに海外投資を試み、正貨を死藏せず是を活用することを努めてゐる。各國が大戰後相率いて比例準備制を採用したのは、正貨が激減した場合に、不必要な多額の正貨準備を整ふるにも及ばないといふことを悟つたからである。

以上は比例準備制に對する大體論であるが、我國の準備制としては保證擴張と比例準備制の採用と何れを可とするのであらうか。云ふまでもなく幣制改正の實際に當りては各國の通貨歷史事情を十分に考慮する心要がある。英國の幣制改革に際し前藏相マッケナー氏が英國の現在の準備制を廢棄し、米國と同樣の比例準備制を採用することの必要を痛論したに對し、バー

[illegible]グウテナウ[illegible]があり英國特殊の貨幣事情があるとて比例準備制の採定に反對し、英國の今年の幣制改革はグウテナウ氏等の意見の勝利となりて實現したのである。此の實例を見て一部の人は我國の發券制度改正も亦英國同樣根本的改正を避け、保證準備の擴張に止むべしとの論をなすものもある。或は之が我國の實際家の輿論ではないかとも思ふ。

然しながら私は此の際我國としても發券制度を思切つて改正し、比例準備制を採用することが合理的でもあり又經濟政策上有利でもあると考ふるのである。比例準備制が他の準備制よりも合理的であることは既に陳べた通りであるが、我國の通貨事情は實際問題としても比例準備を採用した方が有利な事情があるやうに思ふ。英國の新幣制では全額準備を原則とする在來の幣制を維持し保證限度を二億六千萬磅に增額したが、今日の通貨總額からいふと新制度の下に於ける正貨の準備率は三割八分に過ぎない。米國や獨逸の四〇パーセント比例準備よりか却つて少い率である。從つて實際問題としては比例準備制を採用しても、正貨を節約し得る望みはないのである。我國は此の點に於て大に事情を異にしてゐる。最近に於ける日銀帳尻を見ると、左の通りである(九月九日帳尻)。

一、兌換券發行高	一、一八八、一二[illegible]
一、正貨準備高	一、〇六二、七二六
一、發行餘力	〇
一、限外發行	九、三九七

昨今のやうな金融緩漫は時にも尚ほ且つ五百萬圓の限外發行を見ることは今日の發券制度の不完全を實證する一つの材料であるが、此の限外發行をも加へた兌換券發行總高と正貨準備との比率はどうなつてゐるかといふと九〇%即ち九割見當の高率になつてゐる。斯の如き高率の準備も米國のやうに十分の餘裕があつて保有するのであるのならまだ幾分よろしいが、外債に仰いで六分、六分半といふ利子を拂ふてまで保留する必要があるであらうか。尤も是だけの高率の正貨準備がなければ貨幣制度の堅實性を望み得ないといふなら、高利の外債を負ふて準備を整ふることも必要であるが、各國が三割四割の比例準備に甘んじ、何等支障なき場合に我國のみ借金し高利の外債利子を拂ふて九割の正貨準備を保持することは頗る不經濟な裝飾でなくて何であらう。我國が金解禁を行ふた場合何程の正貨流出あるかは的確に算定し難いが、私は國際收支の現狀に顧みて近く金解禁を行ふても大した正貨の流出はないものと見てゐる。併し金解禁を行ふ以上は、幾分の正貨流出が現はれても差支ないだけ

の覺悟は必要である。此の點からして保證擴張を行ふて正貨の流出による通貨の動搖に備へたいといふ論も現はれる次第であるが、私は比例準備制の採用により通貨の安定に備ふることが實に一層有効であると思ふ。

比例準備制を採用し假りに四〇パーセントを準備率とすると日銀の正貨準備は今より四億圓減じても十五億程度の兌換券を發行し得ることゝなる。一方我國の外債關係を見ると我國は今日十四億五千萬圓の外債を負ふてゐる。其の内大正十三年の米貨債は六分五厘の高利、英貨債は六分利子である。是は利率が高いだけに期限は差迫つてゐないが、我外債の中には償還期限の近づいた巨額のものがある。それは明治卅八年借入の四分利第二回英貨公債で未償還の金額は二億三千萬圓、期限は明後年一杯である。我が大藏當局は金解禁に關聯して二ケ年の後に近づける此の外債の償還を頭痛に病んでゐるやうであるが、私は比例準備制の採用により出づる正貨の剩餘を此の英貨債の償還に充てたらよからうといふ意見を抱いてゐる。

從來比例準備制に反對したものは此の制度には屈伸力が乏しいと稱してゐた。成る程我國が現行制度に先つて最初に採用しやうとした三分ノ一比例準備制の如きは屈伸力なき固定的の制度で金融恐慌などに應ずる準備が欠けてゐた。併しながら今日米國や獨逸などで實行されてゐる比例準備制には十分に伸縮の餘地を與へてある。試みに一九二四年制定の獨逸中央銀行法第二十九條の限外發行規定を引用すれば左の如し。

特別の事情ある場合には評議會の決議を以て準備率を四〇%以下に引下ぐることを得。右の準備引下が一銀行報告週間以上に亘る時は中央銀行は四〇%の準備を缺く額に對し次の如く發行税を納付するを要す

一、準備が三七%以上四〇%未滿なるときは　年三分

二、準備が三五%以上三七%未滿ときは　年五分

三、準備が三三%三分ノ一以上三五%未滿なるときは　年八分

四、準備が三三%三分ノ一以下なる時は年八分の税に加ふるに準備率が一%を下る毎に年一分の税を以てす

我國にても比例準備制を採用するとなると此の伸縮力に關する規定に就ては十分考慮を拂ひ、在來の比例發行制に對する非難を一掃する必要がある。而して之を少しも六ケ敷い問題ではないと思ふ。

無產政黨の戰線統一は可能か？

無產政黨統一運動の經緯と將來

麻生久

一

大正十四年十二月、日本農民組合提唱のもとに、所謂單一無產政黨として農民勞働黨が誕生したのであつたが、同黨は誕生三時間後にして、當局の禁止するところとなつた。これよりさき、日本の無產階級運動は、同年春惹起せられた日本勞働總同盟の第一回分裂に依つて左右の激烈なる對立を見、其對立は漸次に一般的無產團體の間に、左右の對立を激成しつゝあつたのであるが、たま〳〵新らしく勃興し來つた無產政黨の運動は、此勞働組合運動の分裂的傾向に逆行して、統一的形勢を示し來つたのである。即ち其統一的態度の具體的現はれは、『單一無產政黨』と云ふ名目に於て提唱され來つたのである。

茲に於て、此農民組合の提唱にかゝる單一無產政黨の企てを成功せしめて、分裂せる無產階級の戰線を統一するの成否は、勞働總同盟と、之れより分離せる勞働組合評議會とを如何にして調和し融合するかの一點にかゝつてゐたのである。

農民組合の提唱にかゝる單一無產政黨の企ては、其長き準備期間に於て、此左右兩派の調和に費されたのであつたが、遂に成功するを得ずして、農民勞働黨結黨前に於ては勞働總同盟の脱退となり、評議會の獨立となり、農民勞働黨は、此左右の代表的兩組合の一時的除外の上に結成せらるゝに至つた。

當時に於て、左翼を代表する評議會の指導精神は共產主義であり、其指導勢力は第三インターナショナルと關係ある共產黨であつた。而して、此左翼の指導勢力は、單一無產政黨結成の過程を通じて、あらゆる無產團體の上に進出し、農民組合を始め、其他の團體の上にも指導權を掌握するに至つて、表面上、農民勞働黨結成に對しては勞働總同盟と共に、組合評議會も除外されてゐたのであるけれ共、實際上に於ては、農民勞働黨の指導的勢力は左翼の手中に陷つてゐたのであつた。

內務當局は、此形成を見て、生れたる農民勞働黨が共產主義者の指導下にありとして之れを禁止するに至つたのであつて、其代表的團體として明かに指示したのは、評議會、無產

青年同盟、水平社青年同盟の三團體であつた。

農民勞働黨禁止の結果は、無産政黨結成の上に、新らしき形成を生み出すに至つた。

即ち、當局の方針が、左翼三團體の加入を以て禁止の理由とする以上、此三團體を除く他の無産團體を以て、單一無産政黨を結成せんとする事である。

此新らしき企ては、農民組合、勞働總同盟を中心にして新らしく展開され、大正十五年春に至つて、遂に勞働農民黨の結成を見るに至つたのであるが、併しながら、左翼三組合の除外を以て、左右兩翼の對立闘爭の問題は實質的には毫も解決するに至らなかつたのである。

何故ならば、さきに述べた如く、單一無産政黨結成の過程に於て、左翼の勢力は、農民組合中に著しく侵入して、農民組合の主勢力も亦左翼的立場をとるに至つたからである。

茲に於て、新らしく結成された勞働農民黨の內部に於て、評議會等左翼團體は、自己の手中にある農民組合を動かして、さかんに割り込み運動を開始し、農民組合亦其手先きとなつて之れを加入せしむるの態度をとるに至つたため、勞働農民黨內部には、勞働總同盟と農民組合との對立を生むで、遂に此對立的形成は、同年十月の中央委員會に於て大破裂を來し、遂に勞働農民黨の大分裂を惹起したのである。

併しながら、此左右兩派の對立闘爭の長き過程に於て、日本の現下の社會的狀勢に鑑みかゝる對立闘爭を不可とする一團の勢力が漸次に結成さるゝに至つた。而して此勢力の中心は勞働總同盟と農民組合との双方の中に生れ來つた統一的正義派の一團であつた。而して又、多くの中間的勢力も之れと歩調を一にするに至つたのである。

その結果として、一度勞働農民黨が其內部に於て左右兩派の大衝突を來し分裂するに至るや、此統一的正義派の結成も急速度に進行して、新らしき一勢力をなすに至つた。茲に於て、勞働農民黨の分裂は、左翼としての勞働農民黨を殘し、統一的勢力として日本勞農黨を生み、更に右翼としての社會民衆黨を生むに至つたのである。

二

最近の無産政黨の對立は以上の如き經路を以て生み出された。而して此無産政黨の分裂は必然的に、勞働總同盟の再分裂を來して勞働組合同盟を生み、日本農民組合の分裂を來して全日本農民組合を生むに至つた。

斯くの如くして勞働農民黨と、日本勞農黨と、社會民衆黨とは、それぐの無産團體を背景にして對立的狀態に置かるゝに至つたのである。

此對立闘爭の間に於て、勞働農民黨は、愈々共産主義的色彩を濃厚にし、其指導的勢力は、今回明かになり來つた日本共産黨に把握さるゝに至り、社會民衆黨は、愈々右翼的立場を濃厚にして、眞の議會黨となり、從つて黨構成の主勢力も勞働階級農民階級よりも寧ろ小市民階級に廣く形成を馴致するに至つた。此間にあつた日本勞農黨は、其主勢力を勞働者農民に置き階級的立場を厳守して、一般無産大衆を其傘下に集め議會と大衆的闘爭とを並用して進むの態度をとり來つた。

而して、無産黨の統一問題に對しては、勞働農民黨は、表面合同を叫びながらも、其合同統一は、他黨の幹部を排除して大衆を戰ひ取つて實質に於ては他黨を自己の指導精神に併合するの態度を示し、社會民衆黨は、其指導精神の異る以上、對立闘爭は當然なりと

し、統一合同を不可とした。此間に於て、日本勞農黨は、勞働農民黨の幹部の合同論は、其名は合同論であるけれ共、其實質は宗派的分裂主義であつて、可能なる合同論に非ざる事を喝破し、勞働農民黨が、此宗派分裂主義を清算の上、各黨の合同を完成すべしと主張した。

以上の如く、無產黨の合同論と其運動とは社會民衆黨を除き、日本勞農黨及び勞働農民黨に依つて主張されたのであるが、併しながら、其統一論合同論は兩黨の間に根本的相違を存し、ために、一面合同論が主張さるゝと共に其對立鬪爭は漸次に激化するに至つた。昨年九月の府縣會議員總選擧に於て、本年二月に行はれた衆議院議員總選擧に於て、對立候補を避くるための選擧協定が行はれたけれ共、其結果は破壞せられるに至る迄に對立候補を生じ、ために、無產黨議員は少なくとも廿名近くを獲得すべき形勢にあつたに拘らず僅かに八名を獲得し得たに過ぎざる結果を招來したのである。

玆に於て、一般的輿論は、無產政黨の合同を要望するに至り、合同論は漸次に各黨に向つて其强制力を强め來つた。

三

斯くの如き形勢の間にあつて、本年二月の總選擧以後に至り勞働農民黨並に社會民衆黨の内部には漸次に二つの新らしき傾向と潮流とを生むに至つた。勞働農民黨内部に於ける一つの傾向は、日本勞農黨の合同論に基きて招來せられた反宗派の擡頭であつて、勞働農民黨の内部に巢食ふ宗派分裂主義を排除して合同に向はんとする傾向である。而して社會民衆黨にあつては、關東の勞働總同盟を中心とする非合同派に反對して、日本勞農黨との合同を實現せんとする關西の勞働總同盟の少壯派の運動である。

勞働農民黨は、今回の日本共產黨事件の暴露するに及んで、遂に解散の運命に逢着したのであるが、從來擡頭しつゝあつた勞働農民黨の反宗派の勢力は今回其解散の裡から反宗派の勢力を糾合し、今回、無產黨の合同を其主張として無產大衆黨を結成するに至つた。即ち、舊勞働農民黨は解散後二つの勢力に分離し、宗派的傾向のものは新黨準備會に集まり、反宗派のものは無產大衆黨に結成せられ來つたのである、

玆に於て、各無產黨の合同論は大體次ぎの如き形勢を示すに至つたのである。

新黨準備會……全黨の合同（但し自己の指導精神に買ひ取る合同）
無產大衆黨……宗派を除く全黨の合同
日本勞農黨……宗黨を除く全黨の合同
社會民衆黨……日本勞農黨との合同（此傾向を代表するは關西總同盟の少壯派）
　　　　　……一切に對する非合同（關東總同盟）

各黨が合同問題に對して最近以上の如き形勢に變化し來つた時に於て、日本勞農黨を支持しつゝあつた全日本農民組合、舊勞働農民黨を支持しつゝあつた日本農民組合は、政黨支持の問題を保留して合同を完全し、全國農民組合を組織するに至つた。而して今回新らしく無產大衆黨の結成を見たが故に、全國農民組合の内部は、現在の狀勢を以てすれば、政黨的には、日本勞農黨、無產大衆黨、新黨準備會の三つを支持する部分に分れてゐるのである。たゞ此間にあつて、新黨準備會は未だ合法的政黨として結成されざるが故に、長く其結成を見されば漸次に其殘存せる勢力は

日本勞農黨、無產大衆黨に傾かんとする傾向を示しつゝあるのである。

四

斯かる形勢のもとに於て、無產政黨の合同問題は、實際的に如何に展開して行くであらうか。

新黨準備會は、其合法的政黨結成の上に、又合同問題の上に、幾度か其態度を變化せしめ、何處に眞意があるかは捕捉しがたい。彼等は無產大衆黨に對しては官許無產黨の名を冠して之れが結成を防害し罵倒した。そして飽くまで合法性を戰ひ取るべしと主張したのである。然るに九月六日の東京日日新聞紙の報ずるところに依れば、大山氏等は、從來の主張を棄てゝ彼等の所謂官許無產黨を組織し、他黨と合同する目的を以て、今日より其準備にかゝり十二月頃結黨する意向であるとの事である。

併しながら、此企ては未だ未來の事であつて其形勢が如何に變化するかは豫見するに難いのであるからして、今當面の問題としては縁が遠い。其新黨準備會の合法的結黨の成否の如何は別としても、今日の日本勞農黨、無產大衆黨、社會民衆黨を主體として考ふる時、大山氏等の新らしく結成せんとするものも入れた合同は餘りに不可能である。

そこで當面の合同問題の組合せは、大體次の如くなるであらう。

一、社會民衆黨、日本勞農黨、無產大衆黨との合同か

二、社會民衆黨、日本勞農黨との合同か

三、無產大衆黨と日本勞農黨との合同か

第一の合同は、最も完全な合同であるけれ共、社會民衆黨は之れに對しては殆んど不可能な形勢にある。たとへ關西に於ける總同盟の小壯派はこれに賛成であつても、關東側の合同反對派に對しては、これでは殆んど問題にならない。こゝまで合同論を持ち來すためには、もつと重要な形勢の變化を要するであらう。

第二の合同は、日勞社民の關西側には可能が濃厚であるが關東側の双方に難關が存してゐる。しかのみならず、日本勞農黨にとつてはこれのみにては所謂右翼結成となり眞の統一でない點になやみがあり、更に農民組合關係に於て大なる困難が存してゐる。

第三の合同は一見一番可能の如くであつて農民組合關係も亦良好であるが、日本勞農黨全體としては、右翼結成の形をとるに在り之亦眞の統一と云ふ事の出來ない點に難關が存してゐる。

五

以上の如き困難が如何に克服され、如何に整理せられて、合同問題が解決せられるかは今後の問題にかゝつてゐるのである。

今日各黨は其指導精神、其戰ひの方法に於て夫れ〴〵の立場を異にしてゐる。所勞働農民黨の合同方針は、自己の指導精神の下に各黨の大衆を戰ひ取らんとするのであつて、合同と云ふよりも自己指導精神への統一である。この方針を以て進めば、合同も亦對立鬪爭の一變形に過ぎない。

社會民衆黨の幹部は、既に指導精神が相違する以上、各自對立して對立鬪爭を行ひ、何れが勝利を得るかを決定すべしと云ふのである。

併しながら、一般的大衆の合同論は、今日の日本の社會的狀勢に於て、未だ力をなさゞる無產階級運動が、其理論鬪爭のために分裂して對立鬪爭を行ふは無益有害であるからし

て、小異を棄て大同に就き、即ち各異なれる指導精神の上に妥協を行ひ、當面現實の必要の上に指導精神を定めて大合同を行ひ、支配階級に對抗すべしとなすのである。

斯くの如くして無産黨の合同問題は一面大衆的要望であると同時に幾多の困難を含んでゐるのである。而もかりに各指導精神の形式的調和を得て、合同するも、合同後の運動の進展の中にも亦幾多の困難が含まれてゐる。

各指導精神の妥協を行つて各黨の合同をなすべきか。各指導精神の截然たる對立鬪爭の間に、最も日本の社會に適合せるものを勝たしめて其指導精神の下に統一を行はしむべきか。長き將來まで考へて、其何れが無産階級解放運動の上に有効なる戰術であるかは一と議論あるところであらう。

たゞ、日本勞農黨は、現下の日本の狀勢に於ては、當面の必要として、あらゆる困難を排し、各黨の指導精神の妥協の上に大合同を成就し、全無産階級の一團としての勢力を結成し、其大なる力を以て支配階級に對抗し、先づ當面の獲得すべきものを獲得し更に無産階級の力を増大するを以て最上の策と思考し來つたが故に、合同論を高唱して各黨に働きかけ、合同的形勢の招來に努力し來つたのである。而して現在も亦其實現に努力しつゝある。

成るか成らざるか、現在のところ直ちに判斷を許さぬ狀態にあるけれ共、何れにせよ此秋に於ては一展開を示すであらう。

量的統一を排して質的統一へ

赤松克麿

一

戰線統一の聲が數年來ずいぶん叫ばれてきたが、現實の運動狀勢は中々簡單には片づかない。そうすると淺薄な論者は、すぐそれは右翼分裂主義者が居るからとか、左翼分裂主義者が居るからだとか知つたかぶりなことをいふ。しかし若し無産大衆が眞に全線的統一を切望して居るのなら、少數の分裂主義者が居たとしても、そんなものは蹴飛ばして統一へ急ぐはずであるが、一部の論者が「大衆の要望」だといつて騷ぎ立てゝも、大衆は案外に踊らないのである。故に今日では所謂戰線統一論は、やゝ空砲的調子を帶びてきつゝある。

しからば無産戰線はいつまで立つても現狀のまゝの四分五裂狀態を續けるのかといふに、我々はさうは考へない。それは何等かの方法によつて何等かの程度に整理され統一されなければならぬと信ずる。大勢は落ちつくところに落ちつくのである。しかし一體大勢はどんなところに落ちつくか、また落ちつかすべきかといふことに就いて、見解が分れてくる。私は現下の社會運動戰線に於いて、戰線統一に關する見解が二種あると思ふ。たゞ漠然と戰線統一といへば、これは誠に結構なことだといふ外はないのだが、これらの二種の相容れざる見解の、いづれが正しいか、そしていづれが優勝するかといふことが問題となるのである。

二

第一の見解は量的統一論である。この見解は、激烈なる資本の攻勢に對して、無産勢力は左翼（共産主義派）も右翼（社會民主主義派）も中間派も、指導精神にこだわらずに合同して強大なる單一無産戰線を作つて以つてこれに對抗しなければならぬと主張するのである。この見解を取るものは、勞農黨、無産大衆黨、日勞黨である。尤も日勞黨は一寸ちがつて居る。彼は宗派的分裂主義者一派だけを排除して、他の一切の勢力を統一せよといふのであるが、この宗派的分裂主義者といふことが、はつきりしない。彼の目指す所は勞農黨の幹部派（福本主義者一派）であることは察せられるけれども、いやしくも戰線統一を使命とすると自負する日勞黨が、何が故に此の一派だけを「宗派的分裂主義者」と烙印を押し、そしてこれを排除せねばならぬか。理由が分からない。コミンテルンが福本主義者を清算せよといつたところが、そんなことに追随したり義理を立てたりする必要はあるまい。しかし日勞黨は、この一條件を附してはゐるが、其他の諸勢力は指導精神にこだわらずに戰線を統一せよといふのだから、大體の系統からいへば、やはり量的統一論者に屬する。

量的統一論者は指導精神にこだわるなといふ。しからば統一された陣營内に於いて、相異る數個の指導精神を綜合し化合して、一個の新しい指導精神を確立して戰へといふのかといへば、彼等はこの點には口を噤んで語らない。自黨の指導精神に就いては、あれだけ他黨を罵倒してまで強調してきた彼等が、戰線統一に關して、自黨の生命とする指導精神の行方を語らないのは奇怪千萬である。しかし彼等は語らないといへども、他の言動によつて彼等が戰線統一の後に於いて自己の指導精神を放棄しないことは極めて明白である。

三

そうすると各々の指導精神は對立したまゝに戰線を統一することになるが、これによつて果して眞に強大なる統一戰線が形成されるか甚だ疑問である。否、疑問ではない。そんな機的な統一戰線は、出來上つても直ちに激烈な内部闘爭を惹起して、戰闘力を增大するどころか、却つて戰闘力を減殺し、揚句の果ては再び戰線分裂の破目に陷るであらうことは、過去の多くの事實がこれを切實に立證して居る。例へば勞働總同盟は組合評議會と寄合世帶で居たときよりも、分裂した後の方が、遙かに組合勢力を增大し、その戰闘力も增大したことを斷言することが出來る。また杉山元次郎君を組合長とする農民組合と山上武雄君を組合長とする農民組合とが合同して最近出來上つた全國農民組合はどうであるか。この新組合の内部に依然として二潮流が並存し、有機的な統一勢力になり得ないで困つて居ることは事實であつて、この合同が明かに失敗であつたとは、同組合最高幹部の一人が私に洩らした僞らざる告白である。

世間の傍觀者は、實情に暗いために、相異る指導精神が對立しても、合同統一は出來るもののやうに考へて、ともすれば量的統一論に共鳴したがる傾向がある。だから量的統一論は世間の淺薄な人氣には投じやすいが、社會運動の經驗を積んだものに取つては、正に札つきの愚論である。いかにも指導精神を統一せずして、戰線を統一しやうといふのは一大矛盾である。量的統一論者はこの矛盾を認識して居るかといふに、若し認識しなかつたら

曖昧啞示足りないといふ外はないが、私の觀る所では、彼等に明かにこれを認識して居ると信ずる。しからばこの矛盾を認識しながら、なぜ戰線統一を遂げやうとするのかといふに、こゝにその矛盾を克服せんとする戰術が彼等の胸臆に用意されて居るのである。

四

その戰術の一例を示さう。昭和二年度の日勞黨全國大會に於いて決定された日本勞農黨方針書なるものを見るに、戰線統一に對する日勞黨の立場として次の言葉を述べて居る。

「今や世界を擧げて統一戰線への要求は澎湃として漲りつゝある。我等はこの時に當つて、一方に於いては協同戰線の美名の下に戰線の攪亂を企畫しつゝある勞働農民黨幹部を排除し、他方に於いては大右翼結成の名の下に分裂戰線を組織せんとする社會民衆黨幹部を叩き伏せ、以つて統一政黨主義の大旗の下に資本に對する單一戰線を樹立せねばならぬ」

つまり日勞黨の方針は、他黨の幹部を排擊することによつて、右の矛盾を克服し、以つて自己の指導精神の下に全線を統一せんとするものである。量的統一論者の統一方針は、勞働農黨にしても、無産大衆黨にしても、日勞黨の方針と根本に於いてかわる所はない。

しかし一體こうした自己中心の人を食つた戰線統一論が、うまく成功すると思つて居るのだらうか。一體量的統一論者は、他黨の幹部と大衆とを容易に中傷離間出來るものと思つて居るが、それが抑々の見當違ひである。そしてそうした中傷離間策を藏した戰線統一論に他黨を誘ひ込まうとするところに、あまりにも人を甘く見すぎた簡單さがある。相手が馴換たと解り切つて居るのに拘らず、こちらが物を掴られたら、よほど間抜けた話である。せちがらい此の節、そんなだらしのない御人善しもたんとは居ないだらう。

二三年來、共同戰線論又は戰線統一論を笛太鼓で騷々しく觸れ廻つたのは、勞働農民黨及び日勞黨等の量的統一論者であつたのであるが、今日までの過程に於いては、それは悉く失敗の歷史を重ねて居る。量的統一論の空砲的であつた所以がこゝにある。量的統一論者諸君も、もういゝ加減にしてこの店ざらしの扸物を引つ込めたらどうだ。

五

量的統一論に對立するものは質的統一論であるが、これは我々は取るものであるが、この見解は、相容れざる左右兩翼の指導精神を把持する諸勢力が、同一陣營に屬することの不自然と不合理とを明確に認定することを前提とする。そして現下の四分五裂狀態を左右兩翼の二大分野に整理しやうといふのである。

無産戰線が左右兩翼の二勢力に對立することは世界的の傾向であつて、我國だけが如何に特殊國とはいへ、此の傾向の除外例を作らうとしたところがそれは無理な話である。無理と知りながら、戰線統一の美名に隱れて、これを強行しやうとするところに欺瞞があり陰謀がある。現實に於いて左翼主義者は右翼主義者を以つて協調主義者といひ、右翼主義者は左翼主義者を以つて空想的觀念主義者といひ、相互に極度に罵倒し合つて居る仲ではないか。

さて質的統一論に立つて、現下の混亂狀態の無産政黨界を整理することを考へて見るならば、新黨準備會と無産大衆黨と日勞黨とは直ちに合同すべきである。そうすることによつて大左翼を結成すべきである。我が左翼の中には極左翼と普通左翼とあるけれども、そ

んなことと位ひは、大衆の要望たる戰線統一のために我慢して協同しなければなるまい。他方に於て社會民衆黨は日本農民黨の反動的要素を清算してこれと合同すべきである。日本農民黨は果して無產政黨なりや否や、一般から可成り疑はれて居るが、我々はその反動的色彩を清算すれば、これを無產政黨の右翼分子として取り扱つてもよいと考へる。

かくの如くして無產戰線が二大勢力に整理されるならば、よほど清々してくると思はれるが、我々は此の質的統一論を以つて最も自然的な最も合理的なものと信じて疑はない。そして將來は必ずやこの質的統一論が勝利を占めるに至ると確信する。

唯た一つ殘る問題は、實際の整理の過程に於いて日勞黨がどうなるかといふことである。日勞黨の指導精神は明かに左翼的であるが、その構成分子は左右兩翼の混合劑である。日勞黨の煩悶がこゝにある譯である。今後この政黨が思ひ切つて左翼たることに觀念をきめるか、若くは發心して右翼陣營へ飛び込むか、これは最も興味ある見物であるが、我々はどちらでもよいと思ふ。左翼ならばもつと左翼らしく、右翼ならば思ひ切つて右翼らしく、しつかり腹を決めてかゝるべきである。戰線統一を最も高調する日勞黨が、これについて最も煩悶しなければならぬといふのは、聊か運命の皮肉を感ずる。

無產大衆黨の結成を歡迎して一路合同へ

加藤勘十

一

無產政黨の合同問題は無產政黨の對立のそもそもの發端から叫ばれてゐる問題である。——其處に對立即ち分裂抗爭の不自然さと合同慾求が如何に大衆の眞實なる慾求であるかを見る——從つて大衆の政治的結成である無產政黨としては當然に容易に解決されなければならない問題である。が、事實は容易に解決されそうでなく、徒らに各黨各樣の異なれる合同慾求の相交錯せるを見るのみである。即ち今日までの合同論は一般論としては一人の異議あるなく、具體論において多大の間隙を見せ、理論的に幾何の發展を示したとは云へ、實踐的には何等の實をも擧げ得ないのであつた。寧ろ理論上の飛躍的？發展と反比例に實踐的には合同を愈々困難ならしめるが如き背信的な行爲さへ行はれないではなかつた。にも拘らず、現實なる反動勢力の彈壓下に苦悶せる大衆は、力の集中としての無產政黨の合同を慾求して已まない。

斯る情勢下に吾が日勞黨としては其の結黨の趣旨からも且つは昨年度大會の決定點からも、小兒病的左翼の宗派主義に對する自己精算を要求する以外——今日の段階に於ける大衆黨の任務から見てこの要求は合同の必然的條件であらねばならぬ——理論的にも實踐的にも無條件的に合同の實現に努力し來つたのである。殊に對立抗爭三年の現實を無視することなく、この苦がき經驗を愼重に考慮し、

合同協議會を形式一片に終らしめざらんがために、事前の注意を周密にせんため、屢々具體的なる實踐の第一歩を踏み出さんとしたのであるが――農民組合の合同に對する積極的な進出も其の一つではあるが――例へば各黨間の事前に於ける懇談諒解のための努力の如き――多くの場合、客觀的條件の未だ熟せざるものあつて其の實現を見るに至らなかつたのである。彼の一度は無條件合同を排擊し、再度遽然として無條件合同を提唱した舊勞農黨が三度合同を不可能に陷らしめるが如き有條件的無條件合同に改說して、合同問題が頗ろにゑきらない情況の下にあるとき、突如として勞農黨は反動政治の犧牲となつて解散の運命を餘儀なくされた。

勞農黨の解散は無產政黨の全線的合同問題の上に一頓挫を與へた。然しながら、勞農黨解散前までの合同慾求の具體的動機は主として選擧戰を通じてであつて、合法的存在としての無產運動の主體が僅かばかりの理由によつて解散されると云ふが如き反動政治の狂暴振りについてではなかつた。それ故に運動の主體を擁護せんとする大衆の慾求は、一方において全線的合同を困難ならしめたにも拘らず、勞農黨の解散によつて却つて深刻猛烈に力の集中即ち合同に對する熱度を高潮せしめるに至つた。

解散後の舊勞農黨首腦部の合同に對する態度は、解散直前に於ける態度と何等變る處がなかつた。合法性を持續してゐる間でさへ、其の有條件的――社會民主々義の批判、勞働者農民の政府――無條件合同論は、他の無產政黨の容易に肯んぜざる處であつたのであるが、合法性を失つた後に於いての同樣の主張は、一層他黨をしてさうした意味においての合同論に異論を生ぜしめた。若し舊勞農黨主腦部――新黨準備會――が斯る態度を持して動かないならば、合同は全く困難な事業となつて了ふ恐れが充分にあつたのである。然るに舊勞農黨時代から勞農黨の有力なる指導理論となつてゐた小兒病的宗派主義に對して内部に於いて抗爭しつゝあつた一團の勢力があつたが、それ等の人々は、新黨準備會が動々もすれば合法的大衆黨の結成を放棄せんとするが如き傾向さへ示すことに不滿を感じて、別に自ら合法的大衆黨結成への困難な實踐を踏み出した。而して其の苦心の結晶として無產大衆黨が生れた。吾等は無產陣營合同のために無產大衆黨の結成を心から悅ぶものゝ一人である。

無產大衆黨は其の宣言にも述べてゐる通り實に舊勞農黨の再建ではない。が、新黨準備會が今の儘である限り、而して合法的大衆黨の任務が歷史過程において重要性を持ち、大衆が熾烈にこれを慾求してゐる限り、舊勞農黨員を最も多く合法的大衆黨に再組織し得るものは、云ふまでもなく新生の無產大衆黨でなければならぬ。戰鬪的試錬を經たる舊勞農黨大衆をして無產大衆黨へ再組織せしめることは大なる喜びでなければならぬ。合同を熾烈に欲する舊勞農黨大衆は無產大衆黨への再組織を通じて再び合同の主體としての重要なる役割を果し得るのである。吾等はそれを欲する。

二

勞農黨の解散によつて實踐的に一頓挫を來たした合同問題は、無產大衆黨の結成によつて有力に復活した。殊に無產大衆黨が其の

組織においても、又其の宣言においても小兒的左翼の宗派主義を排除してゐることは吾等の主張と完全に一致する處である。——これは大衆黨の任務を正確に把握するもの丶當然のことである——此處において、已に合同主體としての社民、日勞、大衆、其他の地方政黨の間に於いて大なる軒輊なしとするならば、合同問題は一轉して具體的實踐に乘り出さねばならぬ。これ、無産大衆黨の結成と同時に、一時低迷狀態にあつた合同問題が活氣に充たされ來た所以である。

さて、合同の具體的問題は、一應各主體の分野が明瞭になつたと云ふだけで、決して簡單にスラ／＼と何等の曲折なく進行するものとは想はれない。再分裂黨存在當時に於けると同樣の困難は依然として存在してゐる。その困難な事情がどの黨派に內在してゐるかは茲では述べない。とにかく斯る困難な事情が存在してゐることを前提として——困難は困難であつても不可能事ではないのだから人々の熱心と誠實とはこの困難な事情を解消し得ると信ずるから——合同の具體的內容について考へて見る。

問題は二つに分れる。即ち(イ)全部の合法政黨の合同に最善の努力を拂つても尚且つ不幸にしてその實現を見ない場合、一つの黨派のさうした事情のために、他の合同可能な各黨間の合同をまでも、はるか彼方の岸に追ひやるか(ロ)それとも斯る場合にはさうした內部事情を有する黨との合同を第二段として、先づ合同可能な黨派間の合同のみを第一段として決行するかである

合同主體としての各黨は是非ともこの二つの場合に當面せざるを得ないのであつて、若し若干の困難があつたにしても第一の場合が順潮に進行すれば、これに越した喜びはないので問題は自ら消滅する。これに反し第一の場合の纏りがつかないで第二の場合に當面せざるを得なくなつたときに、各黨は果して如何なる態度を取るであらうか。否、取るべきであらうか。問題は茲に存する。他の社民、大衆、其の他の地方無産黨の斯る場合に於ける態度は、それ等の政黨の特殊事情それ自身が黨の態度を決定するであらうから、茲でかれこれ議論すべきでなからう。が、吾が日勞黨は其の立黨の精神を統一主義におき、且つ其の基調に階級的大衆的統一政黨である。而して昨年度の大會に於いては宗派主義の排除を合同の絕對單一條件として確定し、大會後ひとへにこの精神に則つて合同に對する態度と努力を一貫して來たのである。合法的大衆黨の規定については社會民衆黨も無産大衆黨も其他の地方政黨も大同小異の見解——各黨の綱領政策——に立つてゐる。だから、虛心坦懷に全無産大衆の現下の任務についての認識を持つならば、恐らく第二の場合に臨むことなくして濟むものと思はれるが、不幸中の不幸なる場合を豫想しての斯る場合に於ける日勞黨の態度はどうすべきであるか。勿論未だ斯る特殊な場合の態度について黨としての意見が決定してゐる譯ではない。從つて茲に私個人の意見を述べても或ひは結果は正反對の現象を招來するかも知れない。が、私は吾が日勞黨の今日までの合同問題に對する經過から觀て且つ黨自身の活動力の俊敏を欲する點から觀て、斯る場合、先づ合同可能な立場に立つものから合同を實行し、困難な事情を內在せる黨との合同は第二段として考慮すべきであると考へる。而して其の具體的現れが何

んであるかは勿論今日に於て想像さるべきものではない。即ちモット露骨に云ふならば、斯る場合は、日勞と社民との合同、日勞と大衆黨との合同、その何れがより可能性が強いかと云ふ問題になるのであるが、それはどちらにも同等位の可能性があるし、且つ地方無產政黨の動きを無視することになるのである。地方無產黨と一口に云ふけれども民憲黨の如きは一名の代議士を選出して居り其の溢からも其の質からも押しも押されもせぬ政黨である。從つてこれ等の政黨の動きを社民、大衆兩黨の動き同樣に考慮せなければならぬから、簡單に、社民か大衆かと一方に容易に合同すると云ふが如きことを述べ得るものではない。要は階級的大衆的統一政黨と云ふ合法的大衆黨の規定を日本の現實に當ては めて最も妥當なる戰術を採り得る主體を完成することにある。

之を要するに日勞黨としては黨自身の立場からも現下の無產運動の情勢からも、急速に合同し得られる黨との合同——勿論茲に到るまでには熱心と誠實と最善の努力を拂つて全部の合同を謀り、それがどうしても一應不可能と見定めがついた上での斷に已むを得ない第二善策としての手段である——をすべきである。が、斯る豫想を合同の進行過程に懷くと云ふことも愼まなければならぬ事柄である。私は全無產大衆の反動政治の重壓の鞭の下に成長しつゝある意識の指示、必ずや全無產政黨の合同を障害なく進行せしめるものであることを信じ且つ切望に堪へないものである。

(九、八)

新勞農黨準備會の合同問題に對する態度

細迫兼光

勞農戰線の統一、勞農政黨の合同が、わが無產階級陣營に於ける緊急なる大問題である事は議論の時代を過ぎてゐる。眞に勞農大衆の利害を代表するものは、この問題を自己の任務として取り上げ精力的努力を拂はねばならない。勞農大衆の利益に忠實なもの程この問題に對して熱心である事も當然なことである。わが準備會の勞農黨時代からの歴史を知るものは、われ〳〵が如何に此の問題の具體的促進に努力してゐるかを知つてゐる筈である。

われ等は合同の具體的、根本的方策として各黨大衆間の共同鬪爭の展開を主張し實行してゐる(或一部の者が誣ふるやうな、合同問題が具體的に現實問題となつた時にでも、必ず一度は共同鬪爭の形式を主張するといふが如き機械的な事を主張してゐるものではない)。此のわれ等の根本方策の正しさは、過般農民團體の合同問題に於て、全日本農民組合同盟の幹部の合同贊成の誓約が如何にたあいもなく裏切られたか、日農、全日間の合同に於て、如何に共同鬪爭の行はれた地方が實質

的な合同へ進み得てゐるか、等の事實が證明してゐる。さうだ。我々は如何に口先で合同を唱へても、共同を唱へて共同闘爭に進出した黨員や支持組合を除名したり、共同闘爭は警視廳の極力禁ずる處だと支部の共同闘爭を叱り飛ばす者は斷じて合同に進んでゐる者でない事を斷言する。

かくの如きわが準備會の合同に對する根本方策については數次、殊に最近には「社會科學」七月號に述べられた處であるから、詳しくは此れ等について見られたいが、最近われ等は、無產大衆黨から合同問題を中心とする極めて興味ある一書を得た。この一書を對照として記述を進める時は、わが準備會の態度を、その限られた問題に對しては、より具體的に闡明ならしめ得る便宜なものでもあるが故に、私はしばらくそれを借りる事にしやう。

その「大衆黨からの一書」は三段に分たれて質問と通告とが盛られてゐる。

第一段に於ては

わが準備會が日勞黨と準備會のまゝ即時無條件合同を主張した事實。及び大衆黨に對しては、その結黨前には流產を希望し、結黨後には排撃の辭を羅列したが、最近には大衆黨その他からの合同の提議に應ずる誠意あり、と述べた事實を指摘して、

一、「貴會（準備會）は日勞黨のみとの即時合同方針を放棄されたのであるか」

二、「又わが黨（大衆黨）に對する見解を修正されたのであるか」

との二質問を發してゐる。

（一）について

なる程わが準備會は日勞黨との即時無條件合同を提議した。否、今でもその意思を持つてゐる。だが之は積極的に他黨との合同を排斥する事ではない。われ等が全勞農政黨の合同を主張してゐる事は歷史が明かに示してゐる。

ただ日勞黨への合同提議なる事實は左の二つの事を示してゐる。

（イ）すべての勞農政黨の內、その大衆の共同闘爭が最も緊密に進行しつゝあるのは日勞黨とである。從つて合同問題に於て最も可能性のあるのは日勞黨とである、との認識をわれ等は持ち續けてゐる事

（ロ）われ等はわが勞農陣線の分裂狀態を一時も早く統一し、少しでもより強い力を以て資本家地主と戰はん事を熱望してゐる。それがためには可能なものは即時合同すべしと主張する。社民等との合同が實現し得る日まで、この可能な範圍の合同をも延期すべしと主張し、事實上は全部の合同を口實に部分的の合同をも永遠い彼方に追ひやらんとする分裂主義に反對である事。

（二）について

なるほどわが準備會の主張を、その都度切り離して機械的に解釋するならば大衆黨に對する認識は常に浮動して居るかの如くに見えるであらうが、われ等の態度は一貫してゐる。曰く「批判を控へる事はしないが何時たりとも合同の提議に應ずる誠意を持してゐるし尙ほその實現を希望してゐる。」即ち、大衆黨幹部の行動は、勞農黨の傳統を守るわが準備會の下にある勞働者農民の戰線をかき亂す事に於てのみその存立の基礎と意義を持つものであつて、それはとりもなほさず、最も戰闘的な勞働者農民に向けた資本家地主の鉾に力を添へるものであつて、斷じて勞働者農民

は絶えず續けられるであらう。然し注意すべき事はこの徹底的批判は唯心論者が恐れるやうに合同を妨げるものでもないし、合同に向つて進む事と何等矛盾するものでもないといふ事である。一貫せる右の態度は、當然大衆黨の結黨前には、その進れる行動に出でざる事を希望する——即ち流産を希望する事になるし、その結黨及び行動に對しては絶えず批判が繰り返される事になるし、又合同に誠意を有する意思表示になるのである。その一部々々を見て見解の修正といふものは象の足をの味方にあらざる事を徹底的に宣明する事案つかまへて「象は柱の如し」と主張した盲人を笑ふ資格はない。

第二段に於て「大衆黨の一書」は

わが準備會が日勞黨との即時合同を主張した事實及びその後一路結黨へ進む事を聲明した事實、並びに日勞、大衆黨その他の合同提議に對し何日何時たりとも衷心の誠意を有すと意思表示せる事實を指摘して左の質問を投げてゐる。

一路結黨せんとする事と準備會のまゝ他の政黨と即時無條件の合同を行はんとする事とは二つの全く相容れざる方針であるか貴會（準備會）はいづれに進まれんとするかと。

機械的解釋も此所に在つて極まれりと云ふべきである。

わが準備會は最初から一貫して、結黨への準備組織であり、勞働者農民無産市民の日常利益のための闘爭組織である。闘爭を通じて結黨への大衆組織である。結黨の前たると後たるとを問はず嚴然たる勞農大衆の組織であるのである。而して最も階級的任務を自覺し實踐しつゝある組織である。合同は一時たりとも早い方が望ましい。その爲めには勞働者農民の利益を闘ふ者は常に弛みなき努力を拂はねばならないのだ。結黨への努力、或はその他の努力の行はれつゝある最中に於ても、常に努力し續けられなければならないのだ。

即ち、わが準備會は結黨へ進みつゝある、また合同へ進みつゝある。此の二つの間に「全く相容れざる」ものが見えるとは、我々にはむしろ了解し難い不可思議事である。

機械的解釋しか爲し得ないものには、それが「全く相容れざる方針」に見えるのだ。準備會時代に合同を提議した事は直ちに、合同に準備會時代にのみ限つて提携する事に見え、一路結黨へといへば、それが直ちに合同の「放棄」に見えるのだ。そこへ突然（と見える）「何時たりとも合同に對し誠意を有す」と云はれて全く拾收し得べからざる混亂に陷つてしまつて、何が何だか判らなくなり人に聞かなければならなくなるのだ。

第三段に於て、「大衆黨の一書」は

先づ「貴會（準備會）が今や正に全力をあげて努力さるゝ方向は所謂結黨の急速なる實現にあると理解してよろしきや」と質問を投げておいて二つの事項を通告してゐる即ち一は「わが黨（大衆黨）は貴會（準備會）が我が黨並に舊勞農黨戰線に於ける地方政黨と同一の結黨方針を以て合法政黨としての結黨を實現せられるならば他の無産政黨に對すると同様に貴會との協議に入る準備を有するものである」事、

二は、「舊勞農黨戰線の再建と擴大並に全無産政黨の合同の爲めに先づ地方政黨との合同を爲さんとする」事

まづ此の質問に答へよう。

「然り」と。然し斯く答へると必ず間違つて

了解せられる。何となれば大衆黨幹部にとつては「一路結黨へ」は「合同方針の放棄」であるからである。だから「否」と答へなければならないであらう。既に第二段に就いて述べた處によつて明かであるから此の點に關する記述は以上に止める事にしよう。

次に大衆黨からの右の通告に對する我等の態度も既に述べられた根本的態度から明に見て取る事が容易に出來るわけであるが、煩を避けずに具體的にしておくならば、第一に、大衆黨が合同協議に入る準備を持つ事を喜びとするものである。だが、それには一は結黨を實現する事、二は大衆黨と同一の結黨方針の下に結黨する事、の二條件が附されてある事を遺憾とするものである。

前述した樣に、わが準備會は一の確然たる勞働者農民の合法的組織である。眞に勞農戰線の統一を念とするものならば「結黨」といふ如き形式に拘泥する必要は全然認められない、と同時に、わが準備會或は他の無産政黨が如何なる結黨方針の下にあるかに拘らず、それが勞働者農民の組織であるといふ事實に基いて直ちに合同の協議に入るべきものなる事を主張する。

第二に、大衆黨が地方政黨と合同しやうとする事は何等我等の干渉すべき事柄ではない。もと〳〵一つのものが一つになるだけの事だ。だから、その合同が何等戰線の統一に資する所あるものではない。眞實の「新勞農黨の再建と擴大並に全無産政黨の合同」が一體、わが準備會を除外して可能とでも考へてゐるのか。それが絶對に不可能事である事は自他共に認めざるを得ない嚴然たる事實なのだ。だからこそ、大衆黨にしても所謂「再建」へ行く道すがらわが準備會の門前を默つて通り過ぎるのは氣がとがめて、「あなたは一路結黨へ、（合同放棄）行くのですね」と獨り決めの挨拶を投げて自らの氣休めを計畫しなければ居れないのだ。

然るに、此の事實に目を閉ぢて、口に「勞農黨の再建と盛大並に全無産政黨の合同」を叫びながら、行動に於ては現在大衆黨幹部の目論見つゝある所を進行させる事は結局、舊勞農黨の戰線を攪亂し、戰鬪的勞農大衆を除外孤立せしめんとする資本家地主の意圖と同一の軌道を進むものである事をハツキリと知らなければならないのだ。

かく我々は過てる處は何處までも徹底的に批判を用捨しない。だが合同に對しては常に大人らしく大手を擴げて、懐を寬けて手をさし延べてゐる。之れに對し、日勞、大衆黨の一部幹部は或は何々主義を清算せよとか、或は結黨して來いとか、或は同一結黨方針でなければとか全無産黨の合同の時にとか種々雜多な條件（だがその根本は一に戰鬪的分子排除にある）を出して戰線の分裂を企圖し勞農大衆の要望を裏切りつゝ即ち資本家地主の意圖に添ひつゝあるのが、現在合同問題をめぐる僞らざる姿であるのである。

（以上）

海外近事

英國勞働黨の右翼化と左翼の反逆

英國における勞働團體の右翼化は、最早動かない事實になつてしまつた。一昨年の同盟總罷業までは、勞働界の趨勢は大體において階級闘爭によつて闘ひとることにあつたのだが、それが失敗してからは勞働組合の態度は急轉直下し、殊に本年に入つてからは、勞資協調熱が盛んになつて、產業平和會議となり、鐵道就働者の俸給引下げとなり、續々具體的事實が現はれて來てゐる。

この傾向を知るには矢張り數字によるのが便利である。現在（九月始め）スワンシーに開かれてゐる英國勞働組合會議においては、右の產業平和會議を承認すべきか、すべからざるかゞ問題になつて、これを投票に附したが、結局七十六萬票對二百九十二萬票、即ち大略四對一の割合で勞資協調派が勝ちを占めたと電報は報じて來てゐる。今までの同會議はなほ原則的な決定をしたに過ぎなかつたのだから、今後はかうして大衆の意嚮が明らかになつた以上は、具體案に進むだらうと思ふ。

この大勢に對して元より不滿なものが少なくない。マクストン（獨立勞働黨の議長）及びクック（鑛夫組合幹事）等はその最なるもので、既に兩人の間には同盟が出來て、全國遊說行脚に出かけてゐる。恐らくは勞働黨はその溫健な態度によつて大衆を引き入れ、その代りに勞働黨內部の左翼は離脫して別に旗幟を立つるのではなかろうか。現に左翼派はマクドナルドの地盤にも、來年候補者を立て爭ふといひ、マクドナルドもその挑戰を喜んで受けて『共產黨の投票によつて當選するよりも、これを敵とした方が本懷である』といふ意味のことを云つてゐる。

× × ×

勞働黨內における左右兩翼の爭ひを書くのには、矢張り產業平和運動の經過を說明せねばならぬ。事の起りは今年の一月、重なる資本家團（最も有力なのがサー・アルフレッド・モンドなので、この會議をモンド會議ともいつてゐる）と、勞働組合同盟の代表者が集まつて、產業界における勞資の協調について協議したことから始まる。なにしろその前の年（一九二七年）から協調氣分が動いてゐて、同年の罷業は過去四十年間を通して一番少なかつたといふ實狀であつたから、勞働組合側でも、喜んでモンドの提議に應じて、話しは頗る順調に運んだのだ。この間、一人で反對したのはクック君だけであつた。

資本家側も出來るだけ誠意を示した。その證據には七月四日に開かれた第二回の同會に、モンド側の資本家達（モンドはその後華族に列せられてロード・メルチエットになつてゐる）は左のやうな原則を承認した。（一）勞働組合を承認する。（二）勞働組合の活動に關し Victimisation に反對する。（三）國內聯合產業委員會（National Joint Industrial Council）を設立し、また（四）產業爭議を避けるため調停機關を造る。

右の內 Victimisation といふのは、資本家がその從業員中勞働同盟に屬するが故に、解雇したり、區別待遇したりすることであるが、この第一、第二の問題の如きは長く勞働組合が主張して來たに拘はらず、從來資本家側の承認する所とならなかつたものである。始めに書いたところの九月六日に勞働組合員の投票に附したといふのは、このモンドの產業平和會議に對し、組合員の意志を問ふたものなのである。

× × ×

かうして一方勞資協調の相談が進んでゐる

時に、他方七月廿八日には驚ろくべき發表があつた。それは英國における最も有力なる四大鐵道會社が、勞働組合と協定なつて八月十三日より給料を値下げするといふ事である。鐵道といふのは the Great Western, The London Midland and Scottish, the London and North-Eastern, the Southern Railway の四つであつて、同社に働くものは重役から支配人から、事務員から、悉く二分五厘の俸給を引かれることになつたのである。

勞働者は俸給を値下げするかはりに、從來二ケ年以上も短縮勞働(ショー・タイム)をしてゐたのが、一週間に五日は働き得る保證が得られ、それから會社は新しい機關車や貨車が買ひ得られるから、他に十萬人ぐらゐの人間が雇ひ得られることになつた。そしてこれが結局何程會社側の利益になつたかといへば、一ケ年二千萬圓乃至三千萬圓に達するだろうといはれる。

鐵道從業員組合のトマス君などは、この解決を非常に喜んで『空前の最善なる解決』なりといひ、『英國人の常識の勝利だ』と發表した。これ等の事實より見るも、英國人が資本家勞働者が相互に、眞に所謂『紳士』としてその言質を重んじてゐることが明らかで、日本のやうに政治家や、資本家は惡いことばかりしてゐるといふ事實を見せつけられては、自己の俸給を割いて會社に二千萬圓もの金は與へられまい。

× × ×

からした傾向に對して反旗を翻がへしたのはクック及びマクストンの兩君である。クックは前述のモンド會議に對して反對なのであり、またマクストンはその屬する勞働黨の(同君は代議士だ)政綱が、I・L・P(獨立勞働黨)の主張を無視して、穩健でありすぎるのに不平を持つてゐたので、同病相憐んで提携したものである。兩君はまた勞働組合などが共產黨員及び左翼派を壓迫することについても、不快に感じてゐた。

この兩君は突然週間雜誌"Forward"及び"New Leader"において連名のマニフェストを發表した。その意見は『近時の勞働運動は何處に導かれて行くや懷疑にたへぬ。われ等の信ずるところによれば、勞働運動の根本的主張は

一、貧困と、そして勞働階級の奴隷的境遇に對し絶えざる戰鬪。即ちこの事は資本主義に對する絶えざる戰鬪を意味する。

二、彼等自身の努力によつてのみ勞働者はその勞働の完全なる生產を取得し得る。

といふにある』といひ『社會主義者としてわれ等は資本主義の意見を代表し得ない、社會

主義と資本主義とは一致したる何物もない』と述べ、勞働總同盟の幹部及び勞働黨が、戰鬪心を殺しつゝありとて『われ等は三十年の努力が、資本主義と平和を結び、資本家正敵の哲學と妥協するを見るに忍びない』と論じてゐる。

この二人の立場にも無論同情者はある。勞働黨内閣の保健大臣であつたホイトレーなども『保守黨のバークンヘッド卿は勞働黨は近時愛國的になつたといつた。マクドナルド君はその護衛(ボデー・ガード)閣の中にバークンヘッド卿を入れるを喜ぶまい』とて、二人の運動に贊意を表してゐる。

最近府の新聞では二人は地方遊説に出て、直接に民衆に打突かつて居り『サー・モンドは電氣屋さんで、物(もの)を混合(ミックス)することはお手のものだが、社會主義と資本主義との混合だけは出來まい』などと大向ふを唸らせてゐる。

米國大統領選擧に何れが勝つ?

米國の大統領選擧戰も、いよ〳〵本舞臺に入つて、今や血の出るやうな政戰をしてゐる。今まで米國の歷史にも嘗てない好取組なので、米國における人氣は想像外に熾烈である。

今回の選擧の特長は從來の分野が全く崩されたことである。元來、共和黨と民主黨とを並べると共和黨が北部米國即ち都會の商工業を代表し、民主黨が南部の農業諸州を代表すると見て、大體に間違ひはなかつた。然るに南部諸州(農業、禁酒、新教等が其特長だ)を土臺とすべき民主黨のスミスは、ニューヨークに生れ、禁酒反對で、舊教信者だと來て居る。

それ許りではない。共和黨は元來資本家黨でビッグ・ビジネスを背景にしてゐる。ところが今回スミスが大統領候補者に指名されるや、殆んど一存でゼネラル・モーターズの重役兼頭ラスコブを引きぬいて全國委員長にしてしまつた。ゼネラル・モーターズといふは從業員三十萬も擁する自動車會社で、産業界に根を張つてゐるのは無論である。ゼネラル・モーターズがスミス側になると、今度はその商敵フォードはフーヴアーを支持するやうになつた。ウォール街の金權がスミスに贊成すると思ふと、モルガン商會のラモントがフーヴアーを後援することを聲明する。

たゞにこの動搖は外部ばかりではない共和黨の有力者でコロンビア大學總長バトラー博士はフーヴアーの禁酒贊成の立場が氣に食はないとあつて、これを後援することを拒絶した。また例の野球のベーブ・ルッがフーヴアー

と握手を勸められて、自身スミス黨たるの故を以てこの光榮を斷つたといふやうな挿話もある。その反對に一九一六年の民主黨全國委員長はスミスを捨てた。いづれは選擧に對する熱心と、分野の崩壞を示す例である。

× × ×

分野の崩壞、投票の混亂の外に今回の選擧の特長は少なくとも二つある。

第一に未曾有の程度に選擧費を使ふであろうことである。始め兩黨では今回は何れも選擧費を三百萬ドルに制限し、一人から受くる寄附は二萬五千ドルに限るべく紳士協約を結ばうとしたが、これは破れて無制限といふことになつた。ある新聞の觀測では大統領選擧のために兩黨が八百萬ドル、兩院議員選擧のために百萬ドル、それから他の獨立した政黨や補助機關で一千一百萬ドルぐらゐを費消するだろうといつてゐる。

第二はこの金を使ふのと、候補者の取組みの顏觸れがいゝのとで、未だ曾てないほどの多數の投票があるだろうと見られてゐる。今までの投票數の內、この前——一九二四年度の選擧は第三黨運動のラフオレットが出た關係から多い方で二千九百萬票あつた。これは有權者數の四割八分に當つて居り、棄權率が五割二分に當つてゐた。これに對し本年は三千五百萬票ぐらゐは投票されるだろうと專門家は見込んでゐる。即ちある人の說では禁酒問題、宗教問題、タマニーホールの問題(スミスが屬する政治團體)等で、大衆が投票によつて自分の意志を發表すべく、その參加率は恐らく六割乃至六割五分に及ぶべしといふのである。

× × ×

然らば何れが勝つか。勝負事に對して豫想をすることは、極めて危險な仕事であるが、地盤からいへば共和黨のフーヴアーが依然優勢だといふの外はない。人氣は相匹敵するから殘るは地盤の問題だ。

誰も知るやうに米國の大統領選擧は二重選擧になつてゐる。即ちこの十一月六日に選擧委員を選出して、この人々が形式的に來年正月ワシントンに寄つて正式に決定するのだ。このエレクターが總數で五百三十一ある。從つて大統領に當選するためには絕對多數たる二百六十六票を獲得する必要がある。これに對し一九二〇年には民主黨は僅かに百二十七票一九二四年には百三十六票を獲得したぎりであつた。

民主黨の地盤といへば南部諸州で、これを Solid South といつて、曾て共和黨には投票したことのない固い地盤だが、これが總計百十一票しかない。殘る百五十二票は他からとらねばならぬ。この南部諸州もスミスの宗教と禁酒問題で動搖したといつてゐるが、これは大丈夫であろう。

スミスがこの外まづ取り得るのはニユー・ヨーク州である。この州は自分の生れたところであり、四回も知事をしてゐるから、大體いゝと思はれるが、この州で勝てば四十五票ある。前の南部諸州の投票と合せれば百五十九票になるが、勝利を得るのにはなほ百〇七票不足だ。

併しニユー・ヨークが民主黨に投票するぐらゐなら、その他の東部州でも勝てるだろう。これが合せて四十一票ある。マサチユセツツ、ニユハンプシヤー、ロードアイランド、ニユージアーシー皆來ると假定してだ。以上で二百票になるから、後六十六票不足だ。この不足數の補足が中々困難で、勝つといふ見込みは中々立ち難い。

この小論文で專門的な數字をあげるのは避けるが、スミス優勢といふ譯にはいかぬ。それも對手がフーヴアーでさへなければ乾度勝つに相違ないのだが、對手が米國一の Vote Getter だから問題は六かしい。日本のある英字紙で假投票をしたらフーヴアーが壓倒的に多かつた。この文の筆者などは實はスミス黨なのだが……。

文壇縱横論

大宅壯一

一 文學に於ける遠心性と求心性

「文學は常に反逆す」とは、進歩的な作家批評家が屢々口にする言葉である。だが、われ〳〵にとつて最も興味あることは、文學の反逆性そのものではなくして、如何なる文學が如何に反逆するかといふことであらねばならぬ。

現在の社會秩序が、その社會の優秀な分子にとつて忌まはしいものであり、彼等を拘束し、抑壓し、彼等の精神的並に物質的發展を阻止してゐるにも拘らず、その秩序を改廢することが大多數の人々にとつて全く絶望視されたとき、この秩序に對する反逆は、總じて個人的、主觀的、獨斷的形態をとつて現れるものである。

かくて少數の智的貴族階級による個人的、主觀的、獨斷的反逆は、現實忌避の文學となり、現實を謳歌する文學、俗衆に追從する文學と對立し、それが「忌まはしき現實」を遊離すればする程益々高級視せられるのである。かの「俳聖」芭蕉が最後に到達した境地は即ちそれであり、それが今日尚一部の人々によつてわが民族の最深最奥の文學的傳統であるかの如く考へられてゐる所以も即ちこの點に存するのである。

全國が幾つかの藩に分割せられ、永遠性を帶びた世襲的階級制度が嚴存してゐた封建時代にあつては、人々は現實に追從するか、現實を忌避するより外に生きる方法はなかつた。そして有識階級にして多少の氣甲斐を有するものは、擧つて後者を選んだことは言ふまでもない。それどころか「世に容れられない」ことが、東洋に於ける知識階級の傳統的矜持であつた。

彼等は自ら「閑人」と稱し、その主張するところを自ら「閑

語」と呼んだ。この「閑人閑語」が東洋に於ける「高級文學」のモットーであつた。現實を超越してゐるところに、如何なる實際的行動をも示唆しないところに、彼等の誇があつた。この「閑人閑語」といふ一見自卑的に見える言葉の背後には、彼等の理想の高さと深さとを誇示する甚だしい自負心が潜入せしめられてゐるのである。

だが、今われ〳〵がこゝで問題にしたいのは、東洋文學の普遍的特質であるところの個人主義的、隱遁的、非現實的、非實行的傾向そのものではない。かゝる傾向が、さまざまなエキゾチックな假面の下に、資本主義末期の今日の「文壇」を今尚支配しつゝあるといふ事實を指摘したいのである。

自然主義的凡俗主義と東洋人的虚無主義の奇怪な混血兒である正宗白鳥氏については、今更何物をも言ふを要しない。嘗つてはあれ程峻嚴なリアリストであつた志賀直哉氏も、あのハイカラな近代的憂鬱から出發した佐藤春夫氏も、今日では完全に單なる「文人墨客」に還元してしまつた事實は何を語るであらうか。

わが國に於ける「藝術至上主義」とは、この「文人墨客」主義の謂ひである。われ〳〵はかゝる「文人墨客」の幼雛な「進步的」な新進作家や文學志望者の間にさへ、いくらでも見出すことが出來る。

又この「文人墨客」的傾向は文學者のみが專有するものではない。わが國の知識階級全般にあてはまる特質である。先年の共産黨事件に連座した人々の中の一部が、嘗つて「茶の湯の會」を催したといふことを私は傳へ聞いたことがある。民族生活の「前衛」である「革命家」の中にすら、さういふ古典的風流氣が存するのである。この東洋人的傳統が如何に根強く日本人の魂に巣喰つてゐるかは、木下尚江、石川三四郎等々の古い社會主義者の最近の生活態度を見れば明瞭に看取することが出來る。「火の柱」や「良人の告白」の如き熱烈な作品の著者が、精神療法を教授して餘生を送つたり、多年世界を放浪して歸つて來たアナクロ・サンヂカリストが、德富蘆花に倣つて千歳村で半農生活を送つたりしてゐるのである。又わが國マルクス派經濟學の重鎭である河上肇氏の隨筆その他にも、われ〳〵はさういふ文人墨客的趣味を多分に見出すことが出來る。

佐藤春夫氏は嘗つて「風流」を徹底的に解剖し、批判し、否定した人である。だが、今日の氏は完全に「風流」の奴隷であるかの如く見える。「風流」は東洋に於ける智的貴族階級の住み心地のいゝ魂の故郷である。

しかしながら、日本に於て、東洋に於て、偉大なる集團文學

の發達を阻止してゐるものはこの「風流」である。文人墨客趣味である。この誘惑から、この魅力から完全に解放されない限り、眞に、本質的に「新しい」文學は生れて來ないであらう。

この獨善的、孤高的傾向は、東洋文學の最大の長所であると共にその病である。この病が今尚さま／＼な、一見歐化的にさへ見える「新しい」形態をとつて、新しいゼネレーションを代表してゐる筈の若い作家の心臓をまで蝕ばみつゝあるのである。

例へば、「改造」の懸賞小説に當選した龍膽寺雄氏の「放浪時代」は、從來の「文壇」流に考へれば、確かに「傑作」である。頽廢沈滯の極に達した最近の文壇にあつては、一寸得難い收穫であることは事實である。筆致も「新鮮」であり、人物もすべて生々と描かれてゐる。しかも私は、先月の「新潮」合評會に於てこの作品を「古い」といつて斥けた。それは何故であるか？

作者の人生に對する、社會に對する、集團に對する考へ方が、本質に於て從來の東洋的風流心から一歩も出てゐないからである。私は決してこの作品を直にマルクス主義的イデオロギーの定規にあてはめて、立ちどころに否定し去らうとするものではない。だが、この作者の生活は、彼を包んでゐる人間の集團と有機的に結びついてゐない。有機的に結びつかうとする努力が見出されない。それどころか、彼は集團生活を超越（實は逃避であるが）することに「美」を發見してゐるところに、彼の救ひ難い「古さ」がある。道行く人に望遠鏡で月を覗かせて、生きんがための戰ひが最も深刻に戰はれてゐる大都市の眞中で悠々たるルンペン的自適生活を送り、それを肯定し、それに一種の得意さを感じ、その中に「美」を見出してゐる作者の態度は、徳川時代の虚無僧と、本質に於て何等異るところがない。たゞ尺八が望遠鏡に代つたまでのことである。

新しい美は集團の中から、集團の集團としての生活の中から發見されなければならない。集團生活から遊離した文學、作家としての個人的、主觀的感情に溺れた文學に對して、もはや時代は何等の魅力をも感じなくなりつゝあるのである。

新しい作家は、作家である前に先づ社會人であらねばならない。集團生活の一單位でなければならない。彼の感情には、彼の理性には、常に集團のそれが浸透してゐなければならない。彼の生活態度――創作態度は、全コンミユニテイを中心にして、求心的でなければならない。

從來の日本の文學は、あまりに遠心的であり過ぎた。遠心的であればある程高級であるかの如き誤つた考へが、從來の文壇をあまりに支配しすぎてゐた。民族の生活に積極的に働きかけるところの、眞の意味に於て新しい、偉大なる普遍性を有する

文學は、かういふ東洋文學の遠心性を徹底的に止揚しない限り生れて來ないのである。

二　葛西善藏を否定す

私は常々、葛西善藏が日本の文壇に一流の作家として存在するといふことは、奇怪な、變態的な現象であると考へ、これまで幾度かその考へを表明したことがある。それに對して彼を辯護する目的をもつて書かれた駁論にも接したが、その駁論は、この生活的に惠まれざる作家に對する同情と文壇的情實から生れたものであらうと私は考へてゐた。ところが、愈々彼が死んで、各雜誌に現れた彼の追憶記を一通り讀んで見て、同時代人に對する評價が人によつてかくも對蹠的に違ふものかと、今更ながら驚かされた次第である。

それらの中で「新潮」に出た間宮茂輔君の追憶記は、私自身に呼びかけた言葉を包含してゐるから、左に引用する。

「嘗て大宅壯一君は「文壇一院制度論」中に私小說を難ずるに當つて、葛西氏の作品に認識不足の言辭を弄して居たかに記憶するが、大宅君にして若し眞に藝術を理解するの心と目があるならば、襟を正しくして『葛西善藏全集』を再讀するがよい。葛西氏の藝術は、思ふに、マルキシズムの世となつても滅びぬであらう……」

そこで私は『葛西善藏全集』の第一卷を手にとつて、久し振りで彼の作品に接しようとしたが、今日の私にはもはやそれを讀み續けるだけの根氣がなかつた。

葛西善藏は、彼を「稀な天才」として激賞してゐる宇野浩二氏も認めてゐるやうに、徹頭徹尾イゴイストであつた。それに對してわれ〳〵は、先づ第一にイデオロギー的、人生觀的反撥を感じる。彼の感情には、彼の思索には、彼がその中に生きてゐる集團の投影を少しも見出すことが出來ないからである。

彼は自分の住んでゐる社會に對して、或は恐怖を、或は憎惡を感じた。しかしながら彼は嘗つて一度でも一人の社會人としての自覺の下に生活したことがあるだらうか。

彼は生涯貧苦に惱んだといはれる。しかしながら彼の貧苦は、資本主義制度の下に於ける多數の無產階級若くは無產知識階級のそれとは何等相通ずるところのない、この上もなく贅澤な貧苦である。

間宮君は、彼の作品の底に「脈々たる人生苦の響を聽き得る」といつてるが、彼の人生苦とは一體何であるか。彼の苦しみは、たゞ單に彼の個人的因由によるものであつて、彼には時代の惱み、集團の惱みといふものが少しも感じられてゐない。

[illegible]、不[illegible]、又はそれに必然的に伴ふ不健康、[illegible]まる戀愛沙汰、及びそれに必然的に伴ふ痴話喧嘩――さういふものから生ずる惱みに對して、われ／＼は何故に共感しなければならないのであるか。さういふことは舊「文壇」の變態的ルンペン性によつて訓練されたものでなければ出來ない藝當である。

又間宮君はいふ。「葛生氏は生きた、只一つの自己の生き方を。斯くの如くに徹し、斯くの如くに溺れ切り、斯くの如くに自分自身を他の道、他の生き方から守り庇ふた作家は無い。葛西氏の藝術に、時に獨自の形容の附されたのは當然であつた。」――私と雖も彼の存在が獨自であつたといふことを認めるに吝なるものではない。獨自であると云ふ點にかけては、恐らく世界にその比を見ないであらう。(それよりもかゝる作家を一流に祭り上げた日本の「文壇」の方がより獨自であるといふべきである。)しかしながら、獨自であるといふことゝ、その獨自性に價値があるといふことゝは別箇の事柄である。獨自性は常に好奇心の對象ではあり得る。しかし好奇性は常に藝術的價値に化し得るとは限らない。

間宮君は更に言ふ「葛西氏の狹さ、葛西氏の無慾さ、或は時に被害妄想とさへ見える一筋の道の頑な歩み方は、日本の藝術家と藝術の達し得る殆ど最後の壁であつた。」――それは確かに[illegible]である。彼の作品は、東洋的、透徹的[illegible]る最後のところまで達してゐる。さういふ點から見れば、彼の如き作家は世界中にその比を求め難いであらう。しかも彼の作品が、日本の極めて少數の人々にだけ理解されないのは何故であるか。理智的に、感情的に、集團の生活と何のかゝはりもない醉ひどれの愚痴に、親切にも「藝術」を見出すだけの暇と根氣とを持ち合せてゐる人間は、さう澤山ある筈はない。

「もう一つ葛西善藏の名評」として、宇野浩二氏は廣津和郎氏の批評を拔粹してゐる。「若し誰かゞ葛西善藏のやうな生活を眞似たら、それは鼻持のならないものとなるだらう。彼の生活は彼だから構はないのだ。彼だから許せるのだ。そしてそれ以上に更に、彼だからその生活から貴い人間味を我々に味はせるのだ。」――かういふ言葉は、特殊な(それは集團からの遊離を意味する)作家若くは特殊な作品を批評する場合に、從來の「文壇」に於て屡々用ゐられたものである。そしてさういふ割引若くは割増附の批評によつて、從來の「文壇」は社會を欺瞞し、辛うじてその特殊部落的存在を持續して來たのだ。何故外のものが眞似たら鼻持のならない生活が彼だから許せるのか。どういふわけで、そんなものが我々に貴い人間味を味はせるのか。こゝに於て、從來の「文壇」なるものゝ、延いては從來の

文壇的「文學」なるもの丶反集團性が完全に暴露されてゐるではないか。勿論誰の性格にだつて、生活にだつて、嫌惡すべき點がいくらもあるであらう。しかし大抵の人はそれを嫌惡し、それから脫れようとして踠き苦しんでゐる。然るに彼の場合に限つて、どうして彼の欠點までが「貴い人間味を味はせる」ものとして讃美されねばならないのか。「文壇」内に於ける葛西善藏の存在は、一般生產社會に於ける從來の「文壇」それ自體の存在を暗示するものではあるまいか。「文壇」が葛西善藏をあまりに甘やかせすぎたやうに、社會は「文壇」をあまりに甘やかせすぎてはゐなかつたであらうか。

最後に、宇野浩二氏は「自分は作をしてゐて、感興が乘つて來たら、そこで筆を擱く。感興に乘つたら、つい嘘を書くことになるから。」といふ葛西善藏の言葉を例證にして「こんな言葉を云ふ作家が、天才でなくて、何處に天才があらう、この一句は世界のあらゆる作家に聞かしてもいゝと思ふ。」とまで言つてゐる。その他、彼の一字一句も苟くもしない藝道に對する精進振りに關しては、多くの文壇人が、彼の性格や生活に好感を持たない人々までが、口を極めて激賞してゐる。だが、私はこのことについても、次のやうな素朴な質問をしたくなるのである。「いつたい彼が二十年も費やして描かうとした嘘でないことゝは何であるか？　彼があんなにまで他人に迷惑をかけ、あんなにまで家族を虐げて、少しの嘘も混へずに描かうとしたことは何であるか？」

彼の作品は殆どすべて彼の日記であり、初期の數篇を除く外は、大抵原稿の書けないことを書いたものである。中でも甚だしいのは、たゞ單に編輯者に對する斷り狀に過ぎない。彼が表現に甚だしく苦心したとしても、さういつた種類の苦心が果して文學にとつて第一義的なものであるだらうか。如何に描くべきかといふことについて苦心する前に、彼は何を描くべきかといふことについて考へないのであらうか。何を描くべきかといふことについて考へる前に、如何に生くべきかといふことについて考へないのであらうか。そこまで來れば、當然彼は自分を斷絕してゐる集團の生活にぶつつからねばならず、一度それにぶつつかつた以上は、前記のやうな苦心が如何に馬鹿々々しいものであるかといふことを悟る筈である。

假に百歩讓つて彼の描いたものに相當の價値があるとしても、彼は果して彼の讃美者達が言つてゐるやうに、一意專心藝道に精進したのであらうか。彼は果して酒以上に「藝術」を愛したであらうか。彼の「一言一句も苟くもせざる」態度は、單に彼の先天的懶惰の辯解に過ぎないのではなからうか。

私は昨年青森へ旅行したとき、葛西善藏に原稿を送つたところ、そのまゝ彼の名で發表されたといふ青年の話を聞いた。先日「新潮」の合評會の終了後、葛西善藏のことが話題に上つたのでそのことを話したところ、同會に出席した某君は（名前は言つてもいゝが敢て言ふ必要もあるまい）、葛西の作品を十數篇も代作したものゝあることを、出席者一同に向つて確言した。（もつとも葛西は、そのためだかどうかはわからないが、死ぬ前に自ら全集を編んで代作は採らなかつたとのことである。）「感興が乘つて來たらつい嘘を書くから筆を擱く」とまで言はれてゐる峻嚴な作家が、十數篇もの代作を許すといふことは、眞に悲慘にして滑稽なる矛盾ではないか。

私は今こゝで勇敢に、卒直に、人間としての作家としての葛西善藏を否定する。何となれば、それは同時に、彼を育み、彼を成長させ、彼を殺した舊い「文壇」を否定することであるからである。

三　文壇に於ける「公娼」と「私娼」

從來の文壇に於ては、作家が彼自身の第一義的な要求に基づいて書いてゐるか、それとも讀者を標準にして書いてゐるかといふことを檢討することによつて、藝術作家と通俗作家とに峻別されてゐた。かくて通俗作家は、藝術作家から、貴婦人や令孃が娼婦を蔑視するやうに、蔑視されてゐた。つまり通俗作家の文壇内に於ける、といふよりは寧ろ、文壇外に於ける地位は、公娼の社會に於ける地位のやうなものであつた。

ところが、最近になつて所謂「藝術作家」の間からも、通俗ものに志すものが續出した。つまり從來の貴婦人作家や令孃作家の大部分が私娼化したのである。

從來通俗作家は俗衆に「操を賣る」といふので輕蔑されたのであるが、今では所謂「藝術作家」の間に、操は勿論魂まで賣るものが多く、反對に所謂「通俗作家」の間からは、操は賣つても魂までは賣らないといふ硬骨漢が現れるやうになつた。

しかしながら、或る作家が果して魂を賣つてゐるかどうかといふことは、從來のやうに簡單に片づけてしまふことの出來ない問題である。社會が多元的になるに從つて、善惡の標準が多元的になつて來る。善惡の標準が多元的になるに從つて、各人の魂が多元的になる。

私の知つてゐる大衆作家に、通俗雜誌に通俗小說を書いて、それによつて得た金を左翼の運動に注ぎ込んでゐる人がある。彼は果して魂を賣つてゐるであらうか？　彼は私にかういつてゐる。

「もし自分のしてゐるとが魂を賣つてゐるといふのなら、砲兵工廠の職工は殘らず魂を賣つてゐるとになるではないか？」

だが、今日莫大な普及力を有する有力な新聞雜誌は殆どすべて資本家の手で經營されてゐるものである。その紙上で反資本主義的な思想を表明するには、勿論或る程度まで妥協しなければならぬ。しかしその妥協はどの程度まで許さるべきであるか？ 屢々その妥協を重ねて行くうちに、木乃伊取りが完全に木乃伊になつてしまふやうなことがあるまいか？

最近の「文壇」で最も目覺ましく活躍をしてゐる片岡鐵兵君は、「若草」に少女小說も書けば、「文藝倶樂部」に通俗小說も書き、「戰旗」にプロレタリヤ小說も書くが、一體人間の魂はそんなにまで自由自在に使ひ分け出來るものかどうかといふことが屢々問題になる。だが、これは片岡君のみに關した問題ではない。今日ヂヤーナリズムの世界で生活してゐるものは、多かれ少かれ、魂の使ひ分けをするべく強いられてゐる。

一方では葛西善藏のやうに、一人一藝主義的な、一店一品主義的な作家が段々亡びて行くと共に、他方では註文に應じて何でも書けるやうな萬能的文筆業者が著しく擡頭して來た。さういふ人々を私達の間では、最近の造語でデパート・メンと呼んでゐる。デパート・メンとはデパート・マンの複數である。デパートとは勿論デパートメント・ストーアから來た言葉である。デパートメント・ストーアが近代人の生活にとつて欠くべからざるものであるやうに、デパート・マンは最近著しい發達を遂げたジヤーナリズムの必要に應じて生れた、極めて便利重寶な存在なのである。

資本主義が末期に近づいて來ると共に、從來の如き知識階級の自由主義的立場が許されなくなつて、單に文筆業者のみならず、教師も會社員も、追々魂の使ひ分けを學ばねばならなくなつて來たのである。

知識階級は一つの獨立した生産階級ではないが故に、精神的にも物質的にも常に他の階級に倚存しなければ生活して行くことが出來ないのである。大ぴらに賣るか、私かに賣るかの違ひはあるが、いづれにせよ、魂の全部若くは一部を賣るべく餘儀なくされてゐる。全部を賣りたくなければ一部を賣つて、他の一部を自分のためにとつておかねばならないのである。しかもその殘された一部でさへ、完全に獨立させておくことは容易な業ではない。そこに深刻な「時代」の悩みがある。

新しい知識階級の文學は、この悩みに徹し、精神的「立ちん坊」たる自己の階級的立場を徹底的に批判し、檢討することから出發しなければならない。

東京市政論

馬場恒吾

世人は東京市政を一種の泥川と見る。年々二億五千萬圓程度の豫算を遣つて、常習的に醜惡見るに堪へざる不正事を曝露する。市政粛正が屢々叫ばされて、それを叫ぶ人々が軈て粛正される側に立つ。此泥川に足を踏み込んだ人で多少の泥を蒙らずして出る者は少ない。そしてそれが現に吾々が住む吾々の東京市の事であるが故に、吾々は此泥は如何にして作らるゝか、如何にして取除き得られるかと云ふ事を研究せんと思ふ。

先づ手近の例を採る。現に市政腐敗の問題となつてゐるのは板舟權賠償と京成電車乘入れである。板舟權の問題では檢擧の目的とせられた市會議員が十二名、其中の一名死亡一名釋放されて、十名は收監されてゐる。京成電車の方では會社の役員二名が收監されて、其れが何處迄波及するかは豫想出來ない。併し今迄の經過を見ても、今回の事件は市の過去の疑獄事件に比較して、其重大性に於て少しも遜色を示してゐない。

板舟と云ふのは魚河岸の魚問屋の前に並べてある幅一尺、長サ五六尺の板臺である。其上に魚を並べて商賣するのである。所ろで間口の廣い問屋は、自分で商賣をすると同時に、不用の板臺を他人に貸して商賣さす。其所が魚河岸なるが故に、板舟一枚で立派に商賣が成立つ。其結果として板舟に權利が付いて、賣買、貸借、擔保の目的物となつた。大きな問屋では、板舟の貸賃丈けで一月二三百圓の收入を得るものもあつた。これは舊幕時代からの習慣で誰れも怪しまない財産權であつた。

所ろで大正十二年九月の大震災で、魚河岸は警視廳に依つて築地に移轉を命ぜられた。魚問屋は皆築地に於て商賣する所を與へられた。併し板舟は消滅したのである。自分の處の商賣は出來るが、板舟を他人に貸して、貸し賃を取つてゐた商賣も消

減した。從つて板舟權を抵當として金を貸した連中も丸損になつた。魚河岸と云ふ一小社會の關する限り、一種の社會組織の變化があつて、私有財產の部分的な否認が行はれた譯けである。魚河岸は其代償を市に求めた。大正十五年中村是公氏が市長であつたとき、板舟權賠償百萬圓の計劃が市會に提出された。それが今年の春になつて七十萬圓の賠償として市會を通過した。其間に魚河岸から市會議員に向つて二十萬圓內外の賄賂が贈られたと云ふので、今回の疑獄が起つてゐる。

京成電車の市內乘入れはそれよりも一層古い歷史を有つてゐる。京成電車の今の停車場である押上は、市の中心から餘りに離れてゐる爲めに、乘客にも不便であり、會社の經營にも困難である。會社は之を淺草邊迄市內に引込ませやうと云ふ案を立てた。大正十年以來、會社は屢々其許可を出願して許るされず、これが今年七月市會で許可の方針に決せられたのである。其爲めに會社は三十萬圓、或は六七十萬圓の運動費を遣つたと疑はれてゐる。

法律的に見て罪の所在が何處にあるかは裁判所が決めるであらう。それは吾々に採つては第二義的の興味しかない。吾々は政治的に見て腐敗の源泉は何處にあるかを突止めなければならない。かうした疑獄の起る度毎に、輿論は必ず之を市民全體の責任に歸する傾きを見せる。曰く市民が平常から市政に冷淡である。下劣な市會議員を選擧するからだ。市民の覺醒が第一だ。市民を教育せねばならぬと。其云ふ所が幾分の眞理を含んでゐる事を否定するのではないが、かうして最後の責任を市民に持つて行く事は、無意識であらうが問題の焦點を誤魔化す事になる。市の行政は國家の行政と異つて、其事業の性質が技術的、營業的、專門的になつてゐる。其仕事の重もなるものは電氣、水道、瓦斯、建築、道路と云つたやうな、すべて技師の管轄に屬する事柄である。市民は自己の生活に沒頭してゐる、沒頭しても尙且、生活の不安に脅かさるるを免れない。其市民に向つて、此等專門的、技術的の各方面の事業を監督し得るほど理解せよ、それを理解せずに居ることが、市政に冷淡である、無自覺であると云ふならば、吾々は永久に冷淡にして無自覺なる市民となるより外はない。市民全體を漠然と罵倒する事は、理論としては如何に尤もらしく聞こえても、實際的には問題の解決に少しの効果をもたらさないものである。

今回の如き事件が起ると、世人は事件關係者と事件其物とを一緒にして一口に塵埃溜めに投込む如き態度を採る。例へば板舟權賠償の爲めに不正を行つた連中の憎むべきは勿論である。併し板舟權の賠償を要求すると云ふことは、現在の資本主義社

會に於ても少しも不合理でも不自然でもない。現在の國家と社會が行つてゐる所の金錢の支出に於ては、それよりは一層不合理にして不自然なる例を發見するのに苦しまない。板舟權は一種の私有財産であつた。世間の他の多くの不當利得と比較しうべき、一種の不當利得を含む私有財産であつた。併し現代の惡法と稱せらるる治安維持法は、私有財産擁護の原則を定めてゐる。私有財産制度を否認するものをば七年の懲役を以て脅かしてゐる。だから魚河岸が此板舟權の賠償を得んとして、行つた行爲は惡くむべきであつても、板舟權賠償の要求其物は、社會に存在する他の多くの不合理不自然なものに比較して、より以上に不合理、不自然とは云へない。

京成電車を市内に引き入れる事はそれ以上に合理性を有つてゐる。千葉成田方面に旅行する東京人は、場末の押上迄行かなければ此電車に乘れないと云ふ不便に對しては、蓋し萬人が萬人迄痛切に感じてゐる。尤も其終點を押上から市内に持つて來ることは押上近邊の人に取つては損害であらう。併し東京市民全體から云へば、其終點を淺草所ろではなく、寧ろ之を丸の內迄持ち來らす事を以て一層便利とするであらう。若し押上地方の市民が利益を奪はると云ふ理由の爲めに、其延長を拒むと云ふ事にならば駕籠舁の利益を奪ふが故に、自動車も、汽車も不許可にせねばならぬと云ふ事にならう。損害を受くる者に對しての人々には他に補償の方法を講ずるにしても、社會全體の進歩發達は阻害してはならぬ。

京成電車乘入れに反對するものは、それは市の交通機關は市の公營にすると云ふ根本主義に反するからだと云ふ。併し市は已に東武鐵道に向つて業平橋から、淺草花川戸迄の延長を許るしてゐる。交通機關の公營主義は一貫して維持されてゐない。若し飽くまで市が自分の手に依つて市內の交通機關を統一する意志ならば、市は宜ろしく、速かに高速度電車を此等郊外鐵道の終點迄架設すべきである。それをせずして、徒らに郊外電車の市內乘入れに反對するのは、餘りに市民の便利を眼中に置かぬ政策である。

それ故に問題の中心點は、板舟權賠償、京成電車乘入れに現はれた政策が當然であるか、不當であるかと云ふ點ではなく、それが如何に東京市に依つて取扱はれたかと云ふ點にある。而して現代の市會の空氣を正當に評價すれば、今日東京市に交渉ある事業で、如何に其事業を遂行する事が、社會全體から見て合理的であり、或は市民の爲めに緊急缺くべからざる必要の事であつても、市會議員に相當渡りを付けなければ、それが實行されぬ。又市會議員に渡りを付けさへすれば無理な事でも實行

されると云ふ現狀にある。問題は政策の可否でなく、渡りの有無である。板舟權と京成電車が如實に之を見せ付けてゐる。市會は恰かも市民の血を吸ふ鬼の住家の如くなつてゐる。其斯の如くなつた理由は何か。

市政腐敗の歷史は古くして且深い。明治卅一年迄は東京府知事が東京市長であつた。其官治制度が廢せられて、市の自治制が確立した翌年に星亨が市會議員となり、市會議長となり、市參事會員となるに及んで、市政腐敗の火蓋が切られた。市街鐵道を私設會社に許可した事、水道鐵管購入、汚物掃除の請負など、何れも醜怪な問題の種となり、島田三郎の主管する每日新聞は『公盜の巨魁星亨』と呼ぶに至つた。星の子分であつた市會議員利光鶴松外八名は投獄される。世間の批難の矢面に立つた星は遞信大臣を辭職し、後に市參事會室で暗殺された。此等の事實は其當時の記錄を見れば、何にでも詳はしく出てゐるが故に、玆では只さうした事件があつたと云ふ事のみを書く。

星は市會に於て郡市聯和會と云ふ政友系三十三名の團體を牽いてゐた。當時の市會議員の總數六十九に對して、彼れは過半數を有してゐた。其反對派としては憲政本黨系の公民會があつた。其牛耳を採つてゐた中島行孝と星亨との會見が一つの插話として殘つてゐる。中島は一日星を訪れて、

『今日は政治上の反對派としてゞなく、只友人として、よく君に話し度い事がある。君は澤山の子分を世話をしてゐるが、其子分の人物が心配だ。中には單に鷄鳴狗盜と云つたやうな人間が居る。それらは軈がて、累を君に及ぼすかもしれぬから、今少しく注意して、如何はしい人物には用心したらどうか』

と云つた。星は言下に

『そんな馬鹿な事があるものか。僕の目的は市の仕事をする事にある。仕事をしやうと云ふには多數を取らなければならぬ。鷄鳴狗盜でも何んでもよい。頭數を揃へればならぬ。君のやうに綺麗な事許り云つてゐては市の仕事は何一つだつて出來るものでない』と答へた。

星は暗殺される迄は世人は之を醜類の巨魁と見てゐた。併し星の死後に於て星の眞價は善惡共に認識された。星が市政を腐敗せしめた元兇である事は之を否認出來ない。併し星個人としては金を取らなかつた。他かの利權屋が運動に來ると、星は露骨に

『よし其運動をしてやるとして、何は心得てゐるか』

『へえ、それはもう心得て、こゝに持つて來てゐます』

と云ふ風に、恭しく奉書に包んだ金を出す。星は政黨關係の會計方を呼んで、

「ヨオシ、其[illegible]、こちらに取つておけ」

星は其の包みを見向かうともせぬ。凡べて之を黨と子分に與へたものであると、これは星を知れる者が云ひ傳ふる所である。それ故に星は個人としては金持でなかつた。かつて外務省雇のデニソンから英國判決例全集を二萬圓で買つた。一萬圓は即金で拂ひ、殘一萬圓を月賦にして拂ふ約束をした。そして、其月賦を拂ふのに苦心してゐたと云ふ。

星は自分の爲めには金を取らなかつた。併し黨の爲め、若しくは子分の爲めには露骨に金を取つた。それ故に、彼れ自身は如何に金錢に淡泊であつたにしても、彼れの行動は市政を腐敗せしめた元兇と云ふ評價に値する。彼れは不淨の金を聚めて、市の政策を實行すると云ふ政黨の行動原則を立てた。彼れの後繼者は之を修正して、政策の善惡に關らず、不淨の金を聚めると云ふ事にした。それが市會の行動原則になつた。

星の政界指導原理は今日に至るまで日本の政界を支配してゐると云つて差支ない。金を拵しらへて政權を取る。政權を取つて、善惡共に仕事をする。星が死んで三十年になる。併し星以後の政治家で、それが國家の政治であると、東京の市政である、とを問はず、別の指導原理を創造した例を知らない。國政の舞臺に於て、星の後繼者と見るべき、政友會の原敬、田中義一は、何れも明白なる政治資金を作つて、政權を取り、政權を維持する事を以て方針とした。其口にする所の政治理想は何んであるにしても、其行ふ所の實際は此指導原理以外に一歩も踏み出して居らぬ事は、何人の目にも明白なる事實である。政友會との對抗を續けて來た所の元との憲政會、今の民政黨と雖も矢張同じ指導原理の下に動く。只其行き方が不徹底で大膽でない丈け、それ丈け現在の政界に於て成功しないのみである。

蓋し天下の愚論は現在の政治組織の下に於て中央政黨の地方自治體、殊に東京市政に侵入するを防ぐべしと云ふ說である。かゝる議論は議論其物の價値は別として、實際問題としても關人囈語と見る外はない。何となれば、國家が政黨政治に依つて支配さるゝ時代に於て、政黨が自治體に侵入し來ることは避くべからざる事であるからだ。政黨は選擧に勝つを以て生命とする。殊に全國の中心たる帝都に於ける勝敗は全國に及ぼす氣勢に關係する事が大きい。從つて彼等は東京に於ける府會議員、市會議員の選擧には死力を盡くして爭ふ。それは彼等の帝國議會に於ける代議士の地盤を作らんが爲めである。それは誰れが何んと云はふとも、彼等が政黨として活くるが爲めに、必然的に採らざるを得ざる運動方針である。中央政黨が地方自治團體に侵入するの可否の如きは、それを議論する丈け探つぶしの仕

事であつて、それが善くとも惡くとも政黨は侵入し來る事實は動かない。

只かうした議論がある爲めに、中央政黨は自治團體に入るときに、名を變じて來る。例へば高橋義信氏が率ひた公和會が政友會であるに關らず、政友會と云はずして公和會と云ひ、三木武吉氏の率ゆる革新會が憲政會であるに關らず、憲政會と云はずして、革新會と云つた類である。かうした變名を使用することは一種カムフラージに過ぎない。そしてそれは有害無益なカムフラージである。何となれば、公和會若しくは革新會が疑獄事件に引かゝるとき、若しそれが政友會若しくは憲政會と名乘つてゐたならば、吾々は直ちに政友會若しくは憲政會の責任を糺彈し得るのである。不幸にしてそれが別名を名乘つてゐるが故に、中央政黨は幾分か吾れ關せずと云ふ顏をしてゐられるのである。それ故に東京市政は中央政黨との關係に於て理解さるる外に理解されるものでない。現に大正九年の瓦斯疑獄が其年の春に衆議院總選擧のあつた年に起り、今年の板舟權、京成電車の疑獄が今年春衆議院總選擧のあつた後に起つたのを見ても判る。これが只の偶然な暗合とは云へない。大正九年の市疑獄は其年の十一、二月に亘り、初めは只明治神宮の參宮道路の不正工事、市に納入する砂利檢査に關しての市吏員の瀆職罪として曝露されたが、後には東京瓦斯會社が瓦斯料金値上げを實行せんが爲めに、三四十萬圓の運動費を市會議員中に蒔いた事が曝露され、その關係者としては高橋義信、長澤延次郎、其他政友會の有力者が數へられた。而かも其當時は、此事件を只東京市政に關する腐敗の一例として見てゐたが、其れ以後に事情の判明した所によれば、此瓦斯疑獄は當時の政界の中心に喰ひ入つてゐた。當時瓦斯問題と並んで、滿鐵問題大連取引所問題、阿片問題等の數多の綱紀肅正問題があつたが、事情に通ぜる者の言に依れば、滿鐵問題の如きは、瓦斯事件に比較すれば、比較にならぬほどの小問題であると云はれた。時の司法大臣大木遠吉伯は新聞記者に向つて、これ以上市の疑獄を擴大すれば、日本の社會を根柢より破壞する事になる。それ故に檢擧も相當の處で打ち切ると云つて、世間の物議を惹き起した。其當時は此言明の眞實の意味を知ることが困難であつたが、今日より見れば、成程と思はれる節もあつた。現に當時は秘密にしてあつたが、或裁判官は原總理大臣と及び今一人他の大臣とを其私邸に於て訊問してゐる。そして彼れが辭し去らんとするとき、原首相自から土間に下りて玄關の戸を開けて與れた丁寧親切に驚いたと云ふ。元より原首相が訊問されたのは只證人としてゞあらうけれども、東京市の瓦斯問題が如何に政界の中心に糸を引い

てゐたが曝露されたぞ。市の疑獄必ずしも市の疑獄と見る譯けに行かない。

板舟權問題の中にも亦今年春の衆議院總選擧に際し、魚河岸より出した陣中見舞金が注目される、陣中見舞金とは市會議員にして衆議院議員候補者となつてゐるものに對し、五百圓又は千圓の見舞金を贈つた事を云ふ。此陣中見舞金はそれが市會議員にして代議士候補者となつた者の全部に贈られたとしても幾許の金にもならぬ。高々二萬圓程度のものだ。之に對して魚河岸の運動費は二十萬圓と稱せられ、京成電車は四十萬圓或は六七十萬圓と稱せられる。其眞僞は裁判の進行を待たなければ明白でないが、かゝる大金の授受は中央政黨の活躍と切離しては考へられない。

今回の疑獄事件に於て眞先きに引懸つたのは革新會系の市議であつた。革新會は大正十五年の市會議員總選擧に於て、憲政會の三木武吉氏が作つた絕對多數黨である。今日迄の政界記錄に於て、比較的清淨潔白の歷史を保つて來た憲政系が、市會に於て汚辱の記錄を作つた事は、自他共に遺憾とせざるを得ない。尤も市會に於て橫暴と不正を働らく機會は、何日も多數黨に與へられる。憲政系（即ち改進黨系）は東京府知事が東京市長を兼ねてゐた明治卄年代に多數を制してゐた以來、其後は大抵の會に政友會が多數を占めてゐたが、其一時大正三年六月に內閣の下に行はれた市會議員總選擧に於て、非政友派が多數を占めた。それは森久保作藏氏の率ゆる常盤會（政友系）の橫暴に對し、新聞記者團（黑岩周六（故）松下軍治（故）大谷誠夫、須崎默堂氏等）が常盤會打破を叫んで立ち、森久保の地盤である深川に於て、當時無名の士であつた太田信次郎氏を市議候補者に擁立し、見事に森久保を落選せしめた時である。此新聞記者團は其直ぐ前に、シーメンス事件で山本權兵衞內閣を攻擊し、終にそれを沒落せしめた。そして其勢に乘じて市政刷新を叫び、遂に市會に於て多年暴威を振つてゐた常盤會を沒落せしめたと云へる。此選擧に於て作られたる非政友の市會議員團は定員七十五名の中五十四名の絕對多數を占めて、市政俱樂部と稱してゐた。それは今日の革新會と同じく二三年たらずして、四分五裂して市會の實勢力を政友派に讓るに到つた。

併し注目すべき點は市會の選擧に於ても時の政府の力が偉大なることである。日本の衆議院選擧に於ては政府黨が不當に優勝の地位を占めると云はれる。東京市會の選擧に於ても、大隈內閣の時には非政友の市政俱樂部が絕對多數を占め、憲政會の若槻內閣の下に行はれたる一昨年の選擧に於ても憲政派の革新會が絕對多數を占めたことである。そして此絕對多數は、內閣

の更迭と共に、何時となく自己崩壊を行つて、四分五裂となる。東京市の自治制は奈邊にあるやを疑はざるを得ない。

併し三木武吉氏が采配を振つて、東京市會の絕對多數を憲政派の手に收めるには相當の努力を要した事は疑はれない。其努力と云ふのは選擧運動資金を作る事である。其資金が何處から出たかに關しては種々の風說が傳はつた。其重なるものは東京瓦斯會社との關係に對する疑問であつた。瓦斯會社は大正十五年に五千五百萬圓の增資をした。其增資株百十萬株の中、十萬株の功勞株の行衛不明であつた。一株のプレミアム八十圓として八十萬圓が行衛不明である譯になつた。同時瓦斯會社は其配當率を年九朱に制限せられてゐる。此配當率制限を撤廢されん事を市に申込んだ。即ち配當を增して、株の値段を釣上げんとする策である。市としては瓦斯會社の配當を增すよりは市民の拂ふ瓦斯料金を下げさす方針を取る事が正當な行方である。然るに三木氏一派は此增配案が今年二月になつて市會の議に上つたとき、極力其通過に努力した。革新會員であつて此增配案に反對せんとした太田信次郎氏などは暴漢の襲擊を受けた。結局市民の反對に依つて增配案は通過しなかつたが、此等の事實に依つて三木氏は其瓦斯會社との關係を疑はれた。

併し最近に司法當局者であつた人の云ふ所を聞くに、三木氏と瓦斯會社との關係には不正は發見せられないと云ふ。瓦斯會社長である渡邊勝三郎氏は憲政會內閣の時に、あかぢ銀行の事に關して檢事局で訊問された事がある。彼れは檢事の前に立つと、眞實の事、記憶違ひの事、胸に浮ぶ儘にすべて告白する特長を有つ、其時瓦斯會社の事も洗ひざらひ喋つたが、三木に關する事件はなかつた。其後政友會內閣になつて、再び此を物にせんとして、檢べたが、物にならなかつた。それ故に三木氏に關する風說は單なる風說であらうと。

尙三木氏とは反對側に立つ所の民政黨幹部の云ふ所を聞くに、市會議員候補者に、自分の子分を立てると云つても、さう何十萬と云ふ金は出て居ない。代議士候補に出す金ですら、黨からは一人前五千圓乃至七千圓である。市議候補ならば大體一人前五百圓から千圓、中には只葉書一萬枚と云ふのさへある。平均千圓として六十人の候補者を立てるに要する金は六萬圓位だ。それ位の金は、三木ならば、先輩の處から一萬圓宛取つて來ても出來ると。畢竟するに金錢關係の事實の眞相は今尙明かでない。併し三木氏自身は潔白であつても、其率ゆる所の革新會には滔々として不淨の金を操つた者があることは、今回の疑獄事件が證明する所だ。

市會の空氣がそれである。それが如何に腐敗してゐるかは、

伊澤市長が三ヶ月にして市長を辭職した事を見ても判る。三木氏は市會に於て絶對多數を有する革新會を作ると同時に、專斷練將であつた伊澤多喜男氏を市長に迎へた。伊澤氏は市會を革新すべき適當な市長だと思はれた。彼れの明敏さは市會議員の不正な劃策を看破する力があり、彼れの剛情果斷は市會議員を威壓し得るであらうと思はれた。然るに市會議員の性格は普通の條理や威力で改善されるには、餘りにすれからし的に鍛錬されてゐた。或市長の語る處によれば、市會議員を懐柔する爲めには一年約百五十萬圓は入る。それを市長自身のポケツトから出さなければ、市議が利權漁りをするを大目に見ねばならぬと云ふ。それは幾代か前の市長が、市會操縦難としてつく〲述懐した所である。市會議員に或事を相談せんとする。必ずそれを待合若しくは料理屋に於いてせざれば話の緒口を切ることさへ出來ぬ。それ故に現代の市長たるものは非常な富豪か、然らざれば市議の不正を大目に見るものでなければならぬ。伊澤氏は富豪でなく、且市議の不正を大目に見るには餘りに神經過敏であつた。それ故に彼れは三ヶ月にして市長の椅子を捨てた。伊澤氏を市長に引張つて來た三木氏は伊澤氏の度胸のない事に不平であつた。併しそれは性格の相違であるから已むを得ない。吾々は凡べての政治家を泥田に沈沒せしめる必要を認めない。

伊澤氏に逃げられた革新會は西久保弘道氏を市長の椅子に座らしめた。後には同じ革新會の連中が西久保氏を邪魔であるからと云つて、市長の椅子を去らしめた。併し邪魔であればこそ彼は伊澤氏の如く、三ヶ月にして逃出げさなかつたのである。西久保氏は剛直の性格を以て鳴る。彼れを評する者は、彼れは竹を割つたやうな男であると云ふ事に一致する。併し彼れは板舟權、瓦斯増配の議案を市會に提出した、其裏面を透察する明敏さがなかつたのであらう。兎に角無邪氣な市長として、彼れは市民に愛せられた。

然るに昨年の内閣更迭と共に、中央政府の壓力が東京市政に加はり出した。東京市政、其苦き汁と甘き汁をこめての東京市政を反對黨の手に委れて置く事は政府の忍ぶ能はざる所であつた。而して西久保市長を追ひ出すべく鈴木前内相鳩山書記官長が作戰計畫を立て、警視廳の久保田刑事部長が活動した。其活動の模様は革新會市議小俣政一氏が市會で素破抜いた、速記錄によると

『十月廿四日(昭和二年)午后一時頃久保田刑事部長を訪問し云々、進んで彼(久保田)は市長追出しの相談を余に持ちかけ、革新會の中にも大分賛者があるが、市長問題を圓滿に解決するなら問題にしない考へであるといつた。越えて十一月三日余を官邸迄呼んで極めて露骨に話を進めて曰く、市長更迭問題

は市會正交、中正は一人も漏れなく、革新會の幹部にも大體の了解を得たから是非同意して呉れ給へ、でないと大分綱付きが出ると脅迫的態度を採つた。……十一月六日小島は余を田中家に呼び、現内閣の方針として大都市乘取りを劃策してゐる。東京市乘取りに付いては中島守利、矢野鉉吉、其他の代議士が黒幕となり、警視廳が策源地となつてやつてゐる。市長問題を片付けない内は三木（洋行中）も歸れないと云つた。

小島と云ふのは革新會の幹部で市會議長なる小島七郎氏である。それが西久保市長を追出す爲めに、他の七名と共に革新會を脱して、市長不信任案を通過せしめたのである。彼れは後に政友會に入つた。

市長は市會を解散することを内務大臣に申請した。併し市長追出しを目的とする政府が其市長の云ふ事を聽く道理はない。市長の申請を却下して、西久保氏は市長を罷める外はなかつた。

世にも憐れなる存在は東京市長の職責である。彼れは市會に選擧されるが市會を解散する權力はない。そして其市會は事毎に市長に指圖し、市長が少しでも反抗すれば直ちに之を取換へんとする。明治四十年市長が市の執行機關となつて以來、歴代市長にして三年と其椅子に留まり得たものはない。市會議員は四年の任期なるが故に、彼等は任期中に一度は必ず市長の取換へを行つてゐる。市長が其職に留まらんとすれば、市會議員の私利私慾の行動に對して絶對に見て見ぬふりをする外はない。そして幸ひに市會の逆鱗に觸れる事を避け得るとしても、彼れの上には二重の監督機關がある。即ち彼れは第一次に東京府知事、第二次に内務大臣の監督を受けるが故に、彼れは中央政權に對して猫の如く柔順ならざるを得ない。如何に柔順ならんと勉めても今回の如く、内閣の變動があつて、別な政黨が政府を取るときは、容赦なく彼れは追出される。其時彼れを擁護すべき市會議員が、政府に弱點を握られてゐるときは、結局彼れを見殺しにする立場を取るのである。

此所まで私の記述を讀まれた讀者諸君は已に氣付かれた事だらうと思ふ。市會議員の腐敗の原因が何處にあるかを。

市會議員の腐敗は、議員それ自身の人格の下劣なる事にも原因するは勿論であるが、彼等をして其下劣なる野心を逞ふせしめる事情は中央政權の庇護を期待するからだ。大正九年の瓦斯事件のとき、時の大木法相が此事件の檢擧は相當の處で打ち切ると漏らした事は、其間の消息を覗はしめる。東京市會の政派は其名は變つてゐるけれども何れも中央政黨の延長である。市會議員の働らく利權漁りは必ずしも市會議員自身の私腹を肥やすものと見られない。星亨の場合の如く、全部が黨の軍資金に入れられなくとも、市に於ける活動は矢張黨の活動である。

其黨が中央政府を握つてゐる場合には、市會議員は其如何はしき行動をなすときに、中央政府の庇護を期待する。星亨の場合に於ても、彼れが明治三十三年の市の疑獄に連座する危險があつたとき、容易に遞信大臣の職を辭さなかつた。併し貴族院が猛烈に星を彈劾して、首相伊藤博文も星を辭職せしめようとしたとき、時の司法大臣金子堅太郎子は政友會の會合に臨んで、星は起訴されないと演説した。星はこれで一身の安全を保障されたと云ふ格恰で、悠々として遞信大臣を辭職した。

今回の板舟權、京成電車の疑獄に於ても檢擧は重もに民政黨の代議士と市會議員に向けられてゐる。世間では京成乘入れでは二三の政友會代議士が巨頭であると信じてゐる。それらの疑問の人は未だ檢擧されない。此系統で檢擧さるべき者は不思議に行衛不明になる。吾々は檢事局の公正を疑ひ度くない。併し檢事は司法大臣の指揮命令の下に動き、司法大臣は内閣を組織する政黨首領の統制に從ふ。それ故に市政を腐敗せしむる人々が偶々政府黨に屬する場合には、彼等が不正を行ひつゝ、尚且まさかの場合には中央政府の庇護を期待しても、それは敢て不思議とするに當らない。不正を働らく市會議員から、其最後の避難所を奪へ、彼等は利權漁りに今少しく臆病になるであらう。

日本は中央集權の政治組織になつてゐる。中央集權は中央政府が國民の希望に添ふ政府であることを前提としてのみ其存在理由がある。今日の如く、買收されたる投票、誘拐されたる代議士を基礎に有つ中央政府が存在するときは、中央集權は曲歪されたる政治を助長するのみだ。吾々は中央政府に依つて泥田の如くに蹂躙せられたる東京市政を見る。吾々は吾々の東京を中央政府より奪還せねばならぬ。其方法としては先づ市政の二重監督を廢せよ。内務大臣、府知事の監督は兩つ共中央集權的な制度なるが故に其必要を認めない。市長を市會の傀儡たらしめざる爲めには、市長を市民の直接選擧とせよ。市長に市會の解散權を與へよ。市長と市會議員と共に其任期中と雖も、其行動に非違のあるときは、市民の投票に依つて之を停職せしめる方法を創設せよ。かくして、市長と市會議員は市民の不斷の監督の下に置かれる。市は市自身の警察官と檢事局を有つべきである。それは市長と共に選擧に依つて任命さるべきだ。かくして不正議員をして中央政府の庇護を期待する代りに、市民の每日の審判に戰慄せしめよ。

時勢の變化に伴つて、吾々は東京市を中央政府に返却する事もあらう。制度は四圍の狀勢に依つて適當に定めらるべきものであるからだ。今日の狀勢は、中央政府の權力から解放する事に依つてのみ東京市は救はれる。それ以外に方法があると云ふ者があらば、私は喜んで其人の教を乞ふ積りだ。

張作霖は誰が殺したか？

清　澤　洌

一　事實の眞相日を經て益々不明

張作霖は誰が殺したか。

かれが非業の死を遂げてから、最早三ケ月の月日は流れた。しかも時日が經過すればするほど、その下手人の本體は不明になつて行くのである。生きては東三省の獨裁者として、正面から凝視する者すらなかつたほどの權威を有したかれが、四邊の明るい早朝、自己の領土内において、しかも自己の百官、護衛隊、憲兵に取卷かれて爆殺されたに拘はらず、その百ケ日を過ぎんとする今、犯人については殆んど手がかりだにないといふのは何故であらうか。

張作霖が殺された頃、長男の張學良は兵を纏めて關内にゐた。父の訃報は元より逸早くかれのところに通ぜられたであらうのに、かれは中々奉天に歸つて來なかつた。かれが歸奉したのは、それから丁度二週間を經た後であつて、かれの親近者の傳へるところによると、かれは鐵道の守備軍の一兵卒に身を變裝して、窃かに奉天城内に入つたとのことである。かれはその後人の顏さへ見ると——特に知つた西洋人などに對しては、執拗なほど『おれの親父を殺したのは誰だ』と聞いて歩いたといはれる。

張學良ならずとも父の仇が誰であるかを知りたいのは人情であらう。かれは今や推されて東三省の總司令であり、誰がかれの父を殺したかを調査するには絶好の立場に居る。しかも爾來二ケ月餘、この點に關して奉天側から何等の光明が齎らされて居らないのである。これは何故であらうか。

併し奇怪なる事實はこれに止まらない。われ等の聞くところ

にして謬りなければ、支那においては首ら北も、張作霖を殺した犯人を以て、日本人なりとすることに毫末も疑ひを懐かないまでになつて居ることである。最近、國民政府が張學良に對し、三民主義奉戴に關し、その言質の反古を責めるや『父の敵は供に天をいたゞかず、日本を味方として諸君を敵とするやうなことは絶對にない、安心を乞ふ』と使を以て云はしめた事實がある。この言葉にどれだけの決心と、重大性があるかは自づから別問題である。『おれの父を殺した者は誰だ』と問ふた者が、自からから答ふるに至つた點に張作霖爆殺事件に關する彼等の態度を知ることが出來るではないか。

日本においては從來この問題については、不思議なほど何事も論ぜられて居らない。支那問題が國內問題と同じやうな興味を有する現在においては驚くべきことである。その論ぜられない理由は無論種々あるであらう。第一は多數の者の無頓着に歸し得べく、第二には當時の新聞は擧げてその犯人を南方政府の便衣隊乃至は揚宇霆一派の所業の如くに報導したから、その通りに信じて居るのであらうし、第三にある一部のものはこの問題を深く調査することは結局日本のために非ずと信ずるが故であらう。

併しながらその理由が何れにあるを問はず、日本が沈默を守ることは、少しも日本のために事態を惡化しないのである。支那と、そして世界の輿論は、日本の沈默如何に關せず形造られて居る。日本が論議しないが故に、世界がこれを知らずとする者は、自己の耳を蔽ふて世上音のなきを安んずる如きものである。日本は始めから積極的にこの問題に關し事件の眞相を調査すべきであつた。そしてこの點において田中內閣は、その責務を在すに充分であつたといへないことは後段說く如くである。

二　張作霖の都落ち

張作霖爆殺の責任者が何人であつたかを詮議する前に、われ等は順序としてまづ當時の模樣を知つてをく必要がある。

今年の春、雪が解けて支那の所謂戰爭シーズンが始まると、南方軍は先年來の繼續事業である北伐を開始した。途中、濟南において日本軍と衝突し、一時出鼻を折られた觀があつたけれども、北伐そのものは大した障害を受けないで、閻、馮、蔣の三軍は三方面から京津に攻めよつた。當時、大元帥として北京に頑張つてゐた張作霖は、持前の強氣から飽くまで一戰を交へる氣で『敵は二十五萬、われは四十一萬の兵力があり、銃器、彈藥も南軍のそれに比し著るしく優勢だ』とて、兎角引き込み勝ちであつた周圍を叱咤し、身を以て教へるつもりか、その頃

になつて最もお氣に入りの第五夫人を、わざ〳〵奉天から呼び寄せたりした。

かうして大衝突の[illegible]上つた時、日本政府は突然芳澤公使を以て、張作霖に對し關內を引揚げ東三省に歸ることを勸告した。張作霖がこの勸告を如何に憤慨を以て迎へたかは當時の聯合通信が、これを傳へてゐる。

張作霖氏は極めて嚴肅なる面持ちで有野通譯官の通譯せる有覺書內容を傾聽してゐたが、談一度引揚勸告に移るや、にはかに昂奮の色をみせ、京濱線方面における奉天軍は極めて有利に進退しつゝあり、關外引揚の要は斷じてない。京津地方の赤化は國民のため忍びざることで、予は最後まで赤賊を防止する。日本が支那赤化の脅威を受くる結果となることは不利であると、持前の癇癪を起し、怒りに頬を痙攣させ腕を振りつゝ足音荒く室內を歩き廻つた。

他の外務省邊から出たと思はれる記事には「激昂の餘り言語を發する能はざる有樣で會談四時間に亘るも議論終結せず」とあり、いづれにしてもかれが如何にこの勸告に不快を感じたかゞ解る。(この時の勸告といひ、最近の張學良に對する南北妥協反對の勸告といひ、一國の代表者を通して勸告することを、時候の挨拶ぐらゐにしか思つて居らないのが田中外交の特長だ)。

張作霖は一時怒つて見たけれども、滿洲に育つて日本の恐さは骨身に染みて知つてゐる。かれは結局北京を撤退することになつた。今までの大總統の都落ちが、何時でも慘めだつたといふので、芳澤公使などの勸めもあつて、外交官連を招いて盛大なる別離の宴を催ふしたり、元老王士珍を招いて、治安維持の後事を托したり、かれは兎に角水鳥の立つ跡を濁さないことをつとめた。

張作霖一行を乘せた汽車は六月三日午前一時十五分といふに北京停車場を出發した。珍らしいほど月の明るい夜で、プラットフォームに張學良、楊宇霆、孫傳芳などと別れを惜むのが如何にも淋しさうに見えた。汽車が煙を吐き出すと軍樂隊が劉喨たる奏樂をしてこれを送つた。

汽車の發着は無論絕對秘密にしてゐた。天津についたのが三日午前六時廿六分で、三十分計り停車した後、一路奉天に向つた。山海關には吳俊陞が出迎へて居つたので、更に一つの車を加へるため四十分計り停車した。その後は何處にも停まらず、普通は蛇度停車する皇姑屯驛すらも除行して過ぎた。

三　爆發當時の現狀

六月四日午前五時半頃、張作霖に瀋陽驛(奉天)に近いので起きてゐた。自用列車のスモーキングに、山海關から乘り込んだ黑龍江督辦吳俊陞と二人で話し込んでゐると、そこへ北京か

ら同行して來た大元帥府顧問儀我誠也少佐がやつて來て、二人の間に据つて話し込んでゐた。

列車が爆發したのはこの時のことである。儀我少佐自身の話しでは『午前五時半頃、クロスガードの下を潜つたかと思ふ頃、吳俊陞氏が張作霖氏と私に「寒いから外套でも着なさい」といひながら私の外套を着せかけようとした時であつた。私共の車の右前の方で大爆音起り、煙と車輛の天井が落ちて來たので、張作霖氏の顏も吳俊陞氏の顏も見えなくなつた』といふ。

（「大阪每日」五日所載奉天特電）

それからの狀況は當時、詳しく新聞に報ぜられたから詳く必要はない。吳俊陞はまづ死し、張作霖も續いて死んだ。一緒に居つた儀我少佐は、幸ひに膝部に打撲傷と、顏、腕に微傷を負ふたのみで無事であつた。一行の死傷者は張の第六夫人及び婢女は即死し、從者に廿一名、衛隊に三十餘名を出だし、現場は奉天驛に近いことゝて、混亂の巷と化した。

この報が傳はるや、支那側は極度に狼狽した。彼等は直覺的に（大した理論的根據もなしに）それが日本人の陰謀であると信じ込んだ。支那兵は爆發直後、小銃機關銃を亂射した。張作霖の病室には日本人醫師は無論として、日本人は一切寄せつけなかつた。城内の人氣は殺氣立つて、日本人は多く引きあげた。日本學生にして通學の途中支那兵に刺されたものもあつた。甚だしきは平素は人一人あげない城壁の上に砲兵、步兵を多數あげて、野砲機關銃を据へつけたりした。元來、奉天邊では問題が起る毎に、支那人は必ず日本居留地に引きあげ、家賃の暴騰を見るのを常とするが、今回に限つては居留地に居るものも却つて城内に歸つて、奉天街の家賃が下落するといふ奇現象を示した。

それ許りではない。張作霖自身もこれを以て日本の陰謀だと明言したといふ說すらも傳はつた。即ち當日（四日）意識明瞭となつた時に、『今回の事件は日本の行爲に相違ない、一刻も早く張學良、楊宇霆に詳報し、かつ南方軍とも提携して對策を講ぜねばならぬ』といひ、大元帥府秘書長鄭謙を天津に派遣し、閻、蔣、馮の三者にも『今後支那全土をあげて、この日本側の陰謀に對抗せねばならぬ』と通告したといはれる。

これを日本側の陰謀と考へたのは、啻に張周圍のものばかりではない。私の知つてゐる某貴族院議員にして、支那に二十年近くを過して、支那人の間には極めて有力なる人が、その朝總理潘復の家に行つた。挨拶がすむと直ぐ『今朝、張作霖の列車が爆破されたが知つてゐるか』と聞いた。『知らん、何處で』と聞き返すと『滿鐵の鐵橋下だ』といひながら、小さい聲で

『オイ知つてゐるだらう、ほんとの事を話してくれよ』と云つたといふ。『その樣子でこれは辯解したつて無駄だと感じて、私は何にもいふことを止してしまつた。實際また當時は何にも知らなかつたのだし』と、その人が後で私に話してゐた。

四　犯人を想像して

支那側が頭からさう信じてかゝつたといふことは、併しながら客觀的事實がさうであつたといふことゝは無論別である。

當時、張作霖の列車爆破と共に何人もの頭を襲つたのは『犯人は誰だ』といふ疑問であつた。そしてこれには大體五つのケースを數へ得た。第一には無論南方政府より派遣された便衣隊の所爲なりとする說であつた。これは常識的にも首肯し得られる想像であつて、當時南方唯一の敵は張作霖であつた。その後の變化でも判るやうに、かれの配下の若い有力者は何れも南方の指導精神及び勢力と一味の諒解あるに拘はらず、かれのみは頑としてこれに應ぜず、飽まで赤賊討伐を標的としてゐた。この大なる障害物に對して南方が何等かの方法を用ひて除き去らんと努力したであらうことは、容易に推測し得ることである。

殊に爆破事件の當日午前三時頃『怪しき支那人三名潛かに滿鐵線鐵道堤を上らんとしつゝあるを發見せる我監視兵は直ちに之に近づき誰何せしに、該支那人は我兵に向ひ爆彈を投擲せんとしたるため我兵は直ちに其二名を刺殺したるに、他の一名は遂に逃走せり。我兵は該支那人の屍體を檢查したるに爆彈二個及三通の書信を發見せり、内二通は全く私信に過ぎざりしも、一通は國民軍關東招撫使の書信の破片にして是等の點より考察すれば、南方便衣隊員なること疑なし』（六月十一日陸軍省發表）とあり、南方の行爲なることが益々疑はれるのである。

たゞ多少殘念なことはその屍體を支那官憲側に引渡さなかつたことであり、從つて支那側では便衣隊が殺されたことを、共同調査で否定して居り、便衣隊所有の手紙なりとして發表された文書に對しても『支那人が書く文章にあらず』と一笑に附して居る模樣がある。その後、南方に關係ある凌印閣を捕へて『有力な證據』を握つた旨電報があつたが、その後如何なつたか判明しない。

第二に爆破の主謀者として疑はれるのは楊宇霆である。楊宇霆が若手の勢力家として、大志をいだいてゐるのは以前から知れ渡つた事實である。殊に當時、かれの無二の腹心常蔭槐は交通次長として鐵道界を自由になし得る地位にあり、この人にして努力すれば、列車爆破のことは決して困難ではない。現に事件後二週間を過ぎて新聞は、左のやうな報導を傳へた。

一常蔭槐氏は十六日京奉線機務處長孫鴻哲氏と共に天津より唐山に赴いた際、孫氏が南軍と通謀しをれることが明瞭となり、張學良麾下の第三方面軍に捕へられた。然るに又孫氏の口より常氏の爆破事件に關係あることが判明し、常氏も直ちに同地で捕縛されたと傳へられる。もし常氏の捕縛が事實とすれば、これに關係し楊宇霆氏にも疑問の眼が向けらるべく延いては如何なる事件を引起すやも知れず』（東京朝日六月十九日北京特電）

その後楊が殺されたとの風說が確からしいとて關東廳から報告され、閣議で話しの種になつたことすらある。

第三に疑はれるのは勞農ロシアである。今でこそこれを疑ふ者は餘りないやうだが、當時はロシアに對する疑惑が深かつた。東支鐵道において張作霖が一敵國である關係から、一應これを疑ふことは必らずしも無理ではない。

第四には楊宇霆以外の張作霖部下の不平分子である。さきの郭松齡の反逆以來、かれに表面歸順して居りながら、異志を抱くものは決して少ないといへない。この人々の策動も無視出來ないことである。

第五に疑はれたのは日本である。その爆發の現場が、日本の鐵道租借地なりしが故に、日本は正當以上に疑はれた。支那字新聞で南方便衣隊の所爲だと書いたのは日本人經營の盛京時報だけである。

五　問題の三條項

爆發後、支那側はこれに關し一切の記事を差し止め、日支兩官憲は直ちに現場について共同調査を行つた。共同調査の內容については後で說くやうに、支那側の拒絕により發表されないが、重點は左の條項を出でないであらう。

（一）まづ責任の歸すところである。これについては日本の陸軍省は早くも日本側に責任のないことを發表した。その趣意は『元來同所は京奉鐵道と滿鐵と交叉する地點で、滿鐵の鐵橋の下を京奉線が通つて居る關係から、日本が警備に當る場處であるのは事實だ』

『然るに今次張作霖の歸奉に際しては右交叉點に支那憲兵を配置して警戒し度旨六月三日支那側より申出であり、我守備隊に於ても時節柄支那側の申出も尤もの事と思惟し、各方面と打合せの上支那側の申出を容諾し、支那側は皇姑屯驛より瀋陽驛に至る約一哩の間の京奉線路上に騎兵及憲兵約五十名を配置し、該交叉點には三日午後八時頃より金中尉外數名の支那憲兵警戒配置につけり』。

とて日本側の警備責任は上方の滿鐵線だけで、下方の京奉線については、全然これなしと主張してゐる。

（二）次ぎに問題になるのは犯人が何人なるかである。張作霖の列車は發着の時間を秘密にしたのは無論として、その何番目

の列車にかれが乘つて居つたかは、極めて少數の人より知るものはなかつた。當時の列車の編成は左のやうであつた。

（一）機關車二輛（二）護衛隊乘用三等客車三輛（三）奉天側高官、張作霖第三息（四）一等客車三輛（五）同高官用津浦線一等甲鐵車一輛（六）張作霖乘用車（第八十號）一輛（七）食堂車』。

この長い列車において、外部のものが張が何の列車に乘つて居るかを、如何にして知り得たかである。況んや山海關で與俊陞を加へたがために、列車は編成替へをして居る。內部に策應者があるか、然らざれば餘程の通信機關を有して居るのでなければ、到底あのやうな手際を以て大事を行ふことは不可能である。即ち

一、該列車に同乘し、車輛の位置に通曉し、爆破敢行者に之を知らしめたもの

二、張作霖座乘列車爆破のため緩急宜しきを得、爆破箇所附近で特に速力を緩めたる列車運轉機關從業員

三、爆破をした下手人

の三つが、獨立的にか、策應的にか行動したことは事實であらう。（一）驛までには尚一キロもあつて普通なら相當の速力を出すべきに、列車が爆破したにも拘はらず、後の列車が折り重ならないで、直線的に停車し毫も異狀なかつた事實なども、除行した證據であり、（二）元來爆彈では汽車が燃えることはないのに直ちに燃えたことなども不思議だと、日本及び支那側の相當有力な技師が述べて居る。

（三）つぎは爆破藥の種類及び裝置の場處である。專門家の意見では黃色藥にあらずして、ダイナマイトであらう。そして藥量は少くとも三十キログラムを下らないであらうといはれる。然らばその爆藥裝置の場處は何れであるか。鐵橋の上にあつたとすれば日本軍警備の責任であり、その下方乃至は列車に仕かけられて居つたとすれば支那側の責任である。日本軍部の發表では

『破壞の程度より看て爆藥量は相當大なるものと推測せられ、投擲せるものとは認め難く又張間（橋の）飛散の狀態に照すも滿鐵線路の上面に爆藥を裝置したるに非ざることは確實にして或は張間の下面若くは橋脚附近に裝置されありしならんと想像せられあり』。

とあり。更に上海七月十六日發のルーター電報によれば

一、爆發は多量の爆藥を使用せるもので、鐵橋北側及び中央スパンの下方、及び側方にある北側ピアースに裝置せられたものだ。

二、爆藥裝置は鐵橋の安全距離にある位置より電氣裝置を以て行ひたるものなるべく、發電位置から電線によつて連絡せる電氣裝置によつたものならん。

三、爆藥の裝置及び發火方法は極めて專門的に熟練せる技能あるものによつて實行されたものであらう。

四、專門家の判定によれば電氣裝置による斯くの如き爆發を行ふには熟練せる專門家四五名を用ひ行ふも六時間を要するであらう。

と報導してゐる。

六　日本を誣ふるもの丶論據

爆發事件に關する日支官憲の共同調査は、約一週間の後に完了したが、支那側は意見に相違ありとして、これが共同報告書の作成を拒絕した。

この內容については元より窺知することは出來ないが、七月十日のロイテル電報はこれに重要な說明を加へてゐる。同通信員は林總領事から外務省に提出した報告書を入手したとて曰く

『右報告書中まづ驚くべきことは、日支双方共爆藥に關する專門家の意見を徵せなかつたことだ。次に

（一）警備問題に關しては日本側は支那側司令官の要求で事件發生の前夜、鐵橋の下を監視するため、支那兵の派遣を許可したといふに對し、支那側は右は一旦許可されたけれども、六月三日午后八時支那兵派遣の際日本側はこれを拒絕したと主張した。尙この點に關する報告書の字句は極めて曖昧であるが、鐵橋及び橋梁の爆破狀態を目擊したものは、恐らく爆藥が日本側警備區域たる陸橋の上部にある橋梁附近に裝置せられたものであつたことを推斷し得べく、果して然りとせば日本警備隊の目につかなかつたものであらう。

（二）事件發生前、現地附近に起つた疑問の支那人三名の射殺については、支那側は全然事實を否認し、もし彼等にして日本側のいふが如く連類者であるとすれば、爆發裝置を終つた後、態々手榴彈及び證據物たる手紙を携へて、現地附近を徘徊するやうな愚をなさないであらうといつてゐる。

（三）爆破の原因については、爆藥の猛烈にして電氣仕掛によつたであらうことは記載してゐるが、裝置場所については何等の決定に達せないもの丶如く、單に橋上又は地上に裝置せられたものであること記載せるに止まる。（中略）その他或は橋柱の上とか、或は列車の上とか詳論をあげたるも、何れも證據をあげず、要するに事件の原因は依然不明だ』

外國通信は何れも日本に向つて不利な報導をしてゐるが、これを極めて大膽に發表したのは、リノツクス・シンプソン（プツトナム・ウイール）である。かれは北京に英文雜誌を經營し、兼ねて張作霖の顧問であつた。張の葬儀が行はる丶や、かれは奉天に赴き自からこの問題を研究して歸來『張作霖を殺したものは日本の秘密結社である。そしてこれに日本陸軍のある部分の者が助けた』と公表したのである。かれは張學良とも交つてゐるから、かれの發表に奉天側の意志が含まれてゐると見てい丶であらう。かれはこれについて數種の理由をあげた。

（一）日本人が鐵道交叉點に十二の八十ポンド爆發機械を据へた。（二）日本人顧問（儀我少佐の事）が、交叉點を夜明けに通るべく汽車を除行することを勸めた（三）日本軍人が交叉點の三百メートル以内に支那軍人の入るを許さなかつた（四）その晩日本兵は何人をも捕へなかつた（五）日本人顧問は北京から同行したが天津で下りた（町野大佐のことであらう）（六）爆發後一臺の自動車が列車の方に疾返して來た（七）ある有力な日本人が自分の家の屋根から汽車の到着を眺めて居り、爆發後家に入つた（八）張作霖の部下が殺したのでない證據には張の死後かれに反旗を飜したものはないではないか。

かうした理由をあげた後、かれは大膽にもその下手人が黑龍會の如き團體であることを明らかにしてゐる。

『日本にはサラジエボを殺したセルビアの如き團體がある。例へば黑龍會の如きで支那の事件に興味を持ち、廿一ヶ條の要求を製造し、壯士を雇つてをく。日本の行政廳が爆殺事件後、奉天より送還したる如き人間がそれである』。

このシンプソンの説に對しわが外務省も黑龍會も英字新聞においてこれを否定した。（八月十八日ジヤパン・アドバタイザー紙參照）殊に外務省の反駁はシンプソンの理由十ケ條を一々駁し、更にその下手人が日本側ではあり得ない事七ケ條をあげてゐるが、その何人の手になつたかは知らず、強い議論の上に立つてゐる。

七　所謂支那浪人の活動

支那人及び一部の西洋人が主張する『日本』といふものゝ限界は極めて不明である。それは時に無名の個人を意味し、また時には政府をも意味する。

もし張作霖爆殺の陰謀が日本政府によつて計畫されたといふものあらば、識者は決してこれを信じないであらう。（かれの關外撤退を勸告したのは田中内閣だから、爆發の責任も田中にあるなどといふ深廻しの議論は別として）田中首相は張作霖の將來について、餘り多くを期待しなかつたのは事實であるが、この人なき後に東三省を統治する者なきに顧みて、暫らくかれを利用するつもりでゐた。それも今までは大元帥として鼻息が荒かつたので、かれが旗を卷いて一應奉天に歸れば直ちに、繼續中の土地商租權問題や鐵道問題を押して解決する意志を持つてゐたと信ずべき理由がある。故に張の死亡によつて豫定の筋書が狂ひ、最も失望したのは恐らく田中首相であらう。われ等の常識は安心して、この事件に政府の手が加はつてゐなかつたことを斷言し得ると思ふ。

併しながら支那及び支那同情者が、『この陰謀の蔭に所謂壯士の活動があつた』と主張する點は、實際の證據は何にもないがやゝ疑問を存してゐる。當時の新聞に出たことであるが、田中首相は林權助男をして張學良にいはしめて『日本政府の意志は林總領事を通してのみ通知するから、他の人の言を信じてくれるな』と繰り返し述べた。一國の政府の意志が、その國の正式

代表者の口を通して對手に傳へらるべきは、餘りに明白すぎる事である。然るにこの事を特に高調せねばならぬ理由は何處にあるか。それは林總領事以外に活動する者があるのを示すものに外ならない。

元來、滿洲における日本人の策動は團體中心であるよりも、個人中心であるやうである。從つて所謂滿洲浪人が何を考へて居るかを全幅として斷定することは困難である。たゞ彼等の内に眞面目に滿洲獨立論といふ如き空想を畫いてゐる者のあるのは否定出來ない。かれ等の筋書きによれば、張作霖の如きは昔から日本の厄介になりながら、日本に酬ふるところを知らない。故に日本としては別な方法を講ずる必要があるといふのである。

この筋書から出たものが、滿洲人のための滿洲といつたやうな標的から、今は天津に居る宣統廢帝を連れて來るとか、大連に居る恭親王を推戴するとかといふ芝居である。この筋書を實行するには、併し平和ではいけない。滿洲を一應擾亂の巷に陥れて、細工は粒々仕上げを見てくれといふわけである。

かうした目で見ると、如何にも張作霖爆殺後、種々な不思議な事件はあつた。安奉線で爆彈を所持した日本人が捕へられ、時節柄記事掲載を差止めて調査したのは事實だ。捕へられたのは二人で、一人は本溪湖、他は安東で發見捕縛された。また不發に終つたけれども、東支鐵道西線（ハルビンの西方）の海林で、ある日本人が爆彈装置を試みたといふ事實もある。

爆發事件があつた後で、奉天の日本人居留地及び城内で盛んに爆發事件があつた。日本居留民會を始め、一夜に六七回づつ家屋が爆破され、新聞は筆を揃へて南方便衣隊の所業なることを報じた。新聞記者が支那官憲に詰問すると

『巡警を増し憲兵も派して商埠地の警戒を嚴にする積りであるといつて居るが、なほこの事件に對する犯人の見當については笑つて多くを語らなかつた』（東京朝日十二日奉天特電）

とある。『笑つて多くを語らない』は意味深長ではないか。

不思議なことは『張作霖を殺したのは自分だ』と料理屋などで豪語するものが二十人も三十人も居ることである。官憲が調べてみると爆彈に關する初歩的な智識すらもないといふ滑稽な事件もある。またある關東廳の高官のところに來て『張を殺したことにして南方人を南京に屆けたいから、〇〇〇〇圓計り出して貰ひたい』といつて來たものもあるといふ。日本の新聞に宣統廢帝を擁して東三省に大清帝國を復活する運動が流行したと大きく報ぜられたのもこの頃の事である。

說いて明らかであるを得ないは遺憾であるが、一部人士の策動の様を知るべきではないか。

八　根本的調査を要す

先頃、シアトルに國際會議が開かれた。そこへ日本からは英

文學者の頭本元貞君が出席した。丁度その前に爆發事件があつたので、この問題が必ず話題の中心になるだらうと思つて、同君は態々奉天に行つて種々調べあげた。そして澤山の材料を採つて出かけたものである。

然るにシアトルにおいても、またウイリアムスタウンにおいても、これが少しも問題にならぬ。プットナム・ウイールの記事なども新聞の隅にかゝげたぐらゐだとのことで、かの排日家ハーストのブリスベーンすら「日本に政府があるのだから、秘密結社の黒龍會が下手人だつたら、これを捕へるだらう」と、クー・クラックス・クランにあてつけたに過ぎないと話してゐた。

これによつても分るやうに、支那の宣傳は從來の宣傳に溺れすぎて、最早英米の識者の注意を惹くに足らない。故にこの事件に關しても、支那における一部外人は別として、大勢が日本に非常に不利に動くやうなことはないかも知れないと思ふ。

併しながら前述した通り事件の始めから日本に深い疑問がかけられて來たのは事實である。そして爆發事件が相當周到な準備を必要とする點から、軍部をまで疑ふる者があるのである。田中内閣は何故最初に、斷乎として徹底的にこれが調査をなし、苟くも疑ひのある者は悉く糺明して、事實を天下に明らかにしなかつたか。個人として自己の短見から國家を誤つたものは今までとて決して少なくない。三浦子の朝鮮王宮事件、李鴻章、ロシア皇太子等に對する加害などはその例である。しかも當時は何れも極めて公平にこれ等を調査して責任の歸するところを示してゐる。

今回の事件においても日本だけが不利な批難を受くべき理由はない。南方の便衣隊、楊宇霆一派に對する疑ひなどが何時の間にか去つて、日本だけが疑問の矢表に立つに至つたのは、田中内閣がその事件を明らかにするに怠慢であつたからである。警備の責任が先方にありとの主張を以て、萬事終れりとする如きは事の輕重を知らないものである。今こそ南方政府は強敵張作霖が殺されたので、喜びと滿足から默つてゐるけれども、喉元過ぎた後は必らず、これを以て日本を打つ道具とすることは明らかである。

先頃、田中首相は對支政策に關して伊藤巳代治伯を訪問した。この時に伊藤伯はこの張作霖爆殺事件を持ち出して、政府が何故これを根本的に取調べなかつたかを責めたとのことである、その人を以てその言を捨てず、私はこの點で伊藤伯の説に賛する。一國に對する外交は正邪を明らかにすることから始まる。私は田中内閣の名譽のためにも――西比利亞出兵、滿洲緩衝地帶説の本家として、浪人の策動に近い考へを有しては居らないだらうかといふやうな疑ひを晴らすためだけにも、田中内閣がこの事件を根本から調査して、苟しくも手の黒きものならば寸毫も假借せざることを希望せざるを得ないのである。そしてその時期は未だ遲しとなさない。（三・九・六）

志賀直哉と葛西善藏

正宗白鳥

（一）

「荒絹」「老人」「清兵衞と瓢簞」「赤西蠣太」「十一月三日午後の事」「小僧の神樣」「矢嶋柳堂」……志賀直哉氏のこれ等の短い作品を讀んで、私は、少し大袈裟な言葉であるが、醇乎として醇なる藝術に接した感じがした。蕪雜な荒つぽい毛むじやらな腕をまくつて、ゆすり文句を並べてゐるやうな文學を、屢々讀まされてゐる今日、私は志賀氏のある作品によつて、胸のすがすがしくなる氣持がした。強烈なる文學、戰鬪的な文學、濃艶な文學、悲壯な文學。古今の文學はそれぞれの形に於て存在の價値を保つてゐるのであるが、激しさしつこさを表に現はしてゐない、和やか感觸を讀者に與ふる藝術も、珍重していゝのである。ことにこの頃は、さういふものがなさ過ぎる。

如上の小說には、淡彩の日本畫といつたやうな趣きがある。これ等に比べると、有島武郎氏の作品は油繪である。志賀氏のやうな作品は、原稿料を當てに生活してゐる作家には、とても書けさうでないが、そこに、文學者としての氏の弱點

も潜んでゐる。世路の經驗を經たあとでも、溫室育ちのお坊ちやん氣質の跟を留めてゐるところがあつて、讀者に與へる感銘に於て損をしてゐる。氏の初期の作品ではあるが、「網走まで」を取つて、葛西善藏氏の「急行券」といふ小品に比べて見るといゝ。共に、汽車のなかで起つた小事件であるが、二人の作者の日常生活を反映してゐて面白い。無論前者の方が、物を見る目も傑れてゐるし、筆の使ひ振りにうま味もある。しかし、後者の、作者自身に備はつてゐる生活苦から染み出てゐる哀愁の影に、前者の遊び氣分よりも我々の心は惹かれ勝ちになるのを如何ともしがたい。

それで、志賀氏には、「溫室育ちのお坊ちやん」らしい所が、隨所に作品に現はれてゐて、時として作品を安つぽくしてゐるが、藝術家としての天分の備はつてゐることは、葛西氏などとはよほど違つてゐる。人間を見る目が冴えてゐて、頭腦も粗雜でない。

「老人」がいゝ。「小僧の神樣」がいゝ。二つとも私の好きな作品であつたが、今度新たに讀直して、新たに興味を覺えた。藝術の匂ひがしてゐるやうで、人生味も豐かだ。かういふ作品には、有勝ちな感傷語の濫用がない。ユーモアが自から備はつてゐて、わざとらしさがない。下品でない。「老人」は、四本の細字で僅か二ページばかりの小品であるが、ある老人の心境を、簡にして細かに寫してゐる。作者の初期の作品であるが、若くしてよくこれだけ客觀的に印象明晰に書けたと思ふ。

この小品を一つの問題として、もつと批評を進めよう。老人にもいろ／＼ある。概括して云ふと、世上の老人といふものは、ここに現はされてゐる「ある老人」のやうに物分りがよくはない。もつといやらしいものである。もつとしつこいものである。もつと意地きたないものである。しかし、老人の醜いところを捉へて、面皮を剝がないで、和やかに彼れを取扱ひながら、空疎な描寫に墮しないこの小品は、志賀氏の藝術のいゝ方面をよく代表してゐる。またかういふ藝術をも鑑賞し愛好し得る興味が、私の心にもあればこそ、この世の生存に堪へられるのである。

十年ほど前に、當時の新進作家有島生馬氏は、「文章世界」に志賀直哉論を寄せてゐたが、その中で、「老人」を推賞して、「かういふ題材を自然主義の作家が扱つたなら、皮肉の目で老人を見たであらう」と、結末のところなどを例として擧げてゐたと、私は今も朧ろげに記憶してゐる。老人が死んで、「かつて老人の坐つた座布團には、公然と子供等の父なる若者（老人の妾の密夫）が坐るやうになつた。その背後の半間の床の間には、羽織袴でキチンと坐つた老人の四つ切りの寫眞が額に入つて立つてゐる。……」といふ結末は、讀者を微笑ませもするし、悠々たる人世の影がそこに映つてゐるやうにも感ぜられる。しかし、この老人の一生をかう見ないで、この作者の閑却した方面から老人の心に喰入つて、結末に於て、人生の破産の影を見せる作風が、菊池氏の思つてゐたらしく、藝術の邪道であるとは思はれない。志賀氏のやうな境地もいいが、それに安じ過ぎると、世の中があまりお目出た過ぎるやうになるのである。

あの頃は、世間一般に自然主義系統の作品に嫌厭を感じてゐたためか、微温的な明るみある「白樺」一派の文學が、文壇に地歩を占めた。ことに、志賀氏はあの頃の新進作家の仲間に敬畏されてゐたやうであつた。廣津和郎氏も、會ふたびに、私に向つて、志賀直哉讃美の語を放つてゐた。芥川龍之介氏は、あれほどの才人でありながら、志賀氏の前へ出ると頭があがらなかつたといふことも、この頃聞いた。去年芥川變死の後間もなく、輕井澤に私を訪ねて來た某氏の話によると、志賀氏は、芥川氏の作品をも人となりをも、あまり好まなかつたさうだ。それ故、面と向つて芥川氏から敬意を表せられる時には、返答に困つたさうだ。私はその話を聞いた時、「何だ。芥川は志賀なんかに對して引け目を感じる譯はないぢやあないか」と、口に出かかるのを危く壓えた。龍之介は直哉の藝術のどういふところに推服したのであるかと、私はあとでいろ／＼に考へた。それから、自分を輕視してゐる人の前でその人を讃美することの、いかに頓間であるかをも考へた。……一昨年の一月であつたと記憶してゐるが、「新潮」の合評會に私は出席した。その時花袋氏も芥川氏も出席してゐたが、志賀氏の「鵠」といふ小品を、花袋氏は特に推賞した。「いい日本繪である」といふ意味の評語が下されたやうだ

つた。私が何とか云つて非難すると、芥川氏はその非難を不當とするやうなことを云つた。今度讀んで見ると、この小品は、成程、茶室掛けに相應はしい繪である。龍之介は、かういふ作物に現はれてゐる風韻に傾倒してゐたのであらうか。
かういふ藝術味は、感覺の粗雜になつた今日の文壇では味はれなくなつてゐる。しかし、「白樺」派の盛時に於ても、多くの青年讀者は、志賀氏の持つてゐた風韻や雅致を賞味してゐたのではなくつて、むしろ、彼れの作品の中の一つの特色となつてゐた所謂「人道主義」といつたやうな思想感情に共鳴を覺えてゐたのであらう。「十一月三日午後の事」といふ小品の如きが好箇の代表作である。

（二）

「十一月三日午後の事」が發表された時、その月の雜誌月評を讀賣新聞でやつた和辻哲郎といふ人は、この小品を極度に賞讃して、この寶玉のやうな傑作の前では、他の雜誌小説は瓦礫のやうだとでも思つたらしく、他のすべてを默殺したことがあつた。文學その他の藝術については、異性に對すると同樣に、好きとなると、盲目的に好きになるもので、そこがまた面白いのである。志賀氏のこの小品が、當時迎へられたのは、そこに「人道主義」「非軍國主義」の感情思想が現はれてゐるためであつた。田舍道を鴨を買ひに行つた主人公が、途上で兵隊の演習の苦勞を見て心を動して、「自分は一人になると又興奮して來た。それは餘りに明らか過ぎる事だと思つた。それは早晩如何な人にもハツキリしないではゐない事がらだ。何しろ明る過ぎる事だと思つた。すべては全く無知から來てゐるのだと思つた」と、現今の軍事組織を憤慨して、家へ歸つても、折角買つて來た鴨を殺すことは勿論、自分で食ふ氣もしなくつて、他所へ送つてやつたといふのが、この小品の要點である。この小品は、田舍の秋の街道の光景を敍し、演習の片影を敍し、それに觸れそれに離れる主人公の微妙な氣持をまつはれて、味ひの深い純藝術品をつくり上げてゐる。私は、今度も愛讀した。しかし、和辻といふ人などの感

限したやうな非軍國主義の現はれに感心したのではない。軍國主義の非難は、誠何ぞ容易ならんやと思ふ。小説家が秋のそゞろ歩きに二三の兵士の勞苦を見て感傷的感慨を起したくらゐで、國家の大事が極められるものではない。「すべては全く無知から來てゐる」と云つても、實際について深くしらべたら、どちらが無知か分つたものぢやない。由來詩人藝術家は、あはれみの情に富んでゐるので、他の勞苦を見るに忍びないのだからこの小品には、その詩人らしい美質が現はれていいのであるが、しかし、その思想を實際界に當嵌めて卓見視するのは幼稚である。

當時の青年批評家が「卓見」視した志賀氏の思想は「山形」といふ短篇や「和解」といふ長編や、その他の小品のなかにも、をり〳〵微見えてゐるが、しかし、十年足らずの間に時代の思潮は變つて、今日の青年讀者や青年批評家には、志賀氏の社會觀などは微温的なものとして冷笑されるやうになつた。もつと荒つぽく根本的でなければならぬと云はれるやうになつた。しかし、それは志賀氏の作品が價値を失つた證據にはならないので、藝術家たる氏の藝術を味はゝないで、附屬の思想を見るから起つたことなのだ。トルストイを廢物視するのも、粗雜な頭腦をもつた一部の現代青年の愚昧な所業であつて、トルストイのえらいところは、原始宗教觀や無抵抗主義の説教にあるのではなくつて、その藝術にあるのだ。今日のプロレタリア文學だつて、一知半解の思想や理窟だけで、藝術としての價値を有つてゐなければ、明日は亡んでしまふのである。

「十一月三日午後の事」にしても「小僧の神樣」にしても、一幅の人生圖として翫味してゐると、今日見ても、昨日見た時に劣らないほどの味ひが味はゝれるので、十年や二十年で廢物になる譯がない。假りに、兵隊の演習が廢止される時代が來ても、商店の小僧制度がなくなる時代が來ても、それ等の作品の妙味は失はれないのである。文學は日常の實用品とは違ふ。

同じ「白樺」派であつても、有島武郎氏の「生れ出づる惱み」と、志賀氏の「清兵衛と瓢箪」とを比較すると、この二

人の作風が如何に異つてゐるかゞ分つて、年少の徒の小說學研究の好資料になるのである。どちらも美に對して敏感な貧家の少年を題材としてゐるのだが、武郎は、力を籠めた筆使ひでゴテ〳〵と書いてゐる。直哉は、いかにもアツサリと書いてゐる。油繪と日本畫の相違がある。武郎の油繪には、今春上野の博物館に陳列された松方所藏の英國の前世紀の油畫に見られたやうな、鈍重さギコチなさがいくらか見られ、直哉の日本畫には、昨秋芝の美術倶樂部で、山陽遺墨とゝもに陳列された竹田の畫帖にでも見られさうな含蓄のある筆致が見られる。

私の愛好する志賀氏の作品は、所詮はかういふ短篇や小品の範圍に留まると云つていい。作者は「閑木」の序詞に於て、「作者といふものから完全に遊離した存在となつてゐる」藝術を渇仰してゐる。藝術の極致はそこにあるのかも知れない。樂屋落ちの興味によつて辛うじて存在を保つてゐるやうな瑣末な身邊雜記小說の如きは、藝術として、下の下なるものかも知れない。そして、氏の小品のうちには、作者から遊離した藝術の趣きの偲ばれるものがないでもない「遊離」といふ言葉に、志賀氏はどういふ意味を寓してゐるのか知らないが、私は、この言葉の意味を、自我を無視したものとして受取らない。むしろ自我が完全にその作品に融和し盡くしたものと思つてゐる

(三)

ところで、私は、志賀氏の自傳的小說には、あまり興味を有つてゐないのである。ある家庭ある社會の事相の記述として、多少の興味が寄せられないことはないが、それは敬意を持つた興味ではない。傑れた藝術に對しての興味ではない。

長篇「大津順吉」の甘さ淺さに、同人雜誌小說見たいな未熟を感じるばかりでなく、「ある朝」「鵠沼行」などの短篇にも、ある人の日常雜記以上のものは感じられない。この點では、葛西氏の身邊雜記小說のある者はまだしも讀者を動かす力をもつてゐる。ここには自から生活苦が出てゐるからだ。

私は、最初雜誌に出た時、非凡な小說のやうに云はれて、文壇に珍重された、この作者の製作のうちでは大篇の部に屬する「和解」にも、さほど感心しない。無論よく書かれてゐるのだ。描寫に於て凡俗の作家の及ぶところでない。しかし、父子の爭鬪の根本が、曖昧模糊の感じがする。かういふ生活の餘裕のある家庭では、お互ひの我儘から、こんなことがあるといふ、客觀的態度を、作者があくまで持してゐるのではなく、作者は、こせ〳〵と主人公たる自己をいじり廻してゐるので、作柄が小さくなつてゐる。この主人公は、自分に接觸した人物の瑣末な一言一行一擧一動を、自分勝手に解釋して、「いゝ印象を與へられた」だの、「不快だ」のと云つてゐるのが、私にはせゝこましく思はれることがある。志賀氏は芥川氏のお辭儀の仕樣にまで難癖をつけてゐたと、去年某氏が云つてゐたが、小說家には有勝ちの神經性によるとは云へ、「和解」には、これに類した煩はしさがある。

私は、はじめにこの作者には「溫室育ちのお坊つちやん」風のところがあると云つた。しかし、武者小路氏とは、「お坊ちやん」ぶりが違ふ。武者氏は、正統的お坊ちやんで、お目出たいところがあるとゝもに、天空海濶のところがあり、物に拘はらないのび〳〵したところもあるが、志賀氏は、その作物によつて判斷すると、なか〳〵に神經質で氣六ケしくて細かいところによく氣がつくのである。家庭の事情にもよるのであらうが、生存に對する不滿の影も、彼れの心に差してゐる。これで、生活難があつたら、葛西氏よりもこの方が陰氣な厭世家になつてゐたであらうと想像される。

「和解は」、當時この小說を微細に批評して激賞した小宮豐隆氏を泣かせたものらしい。頑な父子の反目も解けて、父も子も日を濡らし、繼母も泣き叔父も泣き、妻も泣き妹も泣くといふ一篇の結末は、多くの讀者をも泣かせたらしい。ところが、私は、ここの場面は、通俗小說の泣かせ場のやうな感じがした。志賀氏のやうな作家にあるまじきところだと思つた。「老人」を書いたやうな態度で、なぜここを冷靜に書き得なかつたかと思ふ。作者は、自分の事であるためか、自分に甘へて書いてゐるのである。私は、「和解」を通讀して、根柢の淺い葛藤につゝかれて來た揚句の果てに、淚攻めになるの

で愛想を盡かした。この場面と、「濁つた頭」とは、私の讀んだ範圍に於ては、志賀氏の悪作であると思ふ。私は、小説を書きはじめの頃、藤村花袋の兩先輩が、ある所で執筆難を話合つてゐるのを傍聽したことがあつたが、花袋氏は他人の事を書く困難を云ひ、藤村氏は、自分の事を書く方が一層困難ではないかと云つてゐた。要するに、どちらも、よく書きこなすことは六ケしいのであるが、龍之介直哉などの作品では、自己の直接實驗を直寫したものよりも、題材を離れた所から取つたものに於いて一層よく藝術的効果を現はしてゐる。芥川氏は、死の少し前くらゐまでは、自己の露出を嫌つてゐたらしい。志賀氏は「自分の仕事の上で父に私怨を晴すやうなことはしたくないと考へてゐた。それは父にも氣の毒だし、尚それ以上に自分の仕事がそれで穢されるのが恐しかつた」と云つてゐるやうな遠慮をもつてゐた。

しかし、「和解」には私の心の捉へられたところがあつた。ことに赤兒の病氣と死亡のあたりは眞に迫つてゐて、しかも主人公の心は混亂してゐながら、描寫は客觀性を持して亂れてゐない。私はここを讀んでから間もなく葛西氏の「不良兒」を讀んで、子供のために苦勞する親心を想像した。私には體驗のないことであるが、葛西と志賀のやうな、他の題材は稍々もすると遊び氣分を作中に現はしてゐる人達の藝術にも、子供の生死の危機、運命の岐路に立つと、極度の緊張を示してゐるのに感動した。

（四）

文壇に割據してゐるいろ／＼な團體のうちで「白樺」派と云はれてゐる仲間は、私に取つては最も縁の遠いもののやうにかねて思はれてゐた。志賀直哉氏の如きは顔も見たことがない。葛西善藏氏は早稻田に學んだ縁故で、文壇で「早稻田派」と云はれる系統に屬する作家であつたが、私はこの人とも殆んど面識がなかつた。たゞ一度、徳田秋聲氏夫人の葬式の時に、寺院の庭で會つたゞけである。で、私は、個人的に葛西氏をよく知らなかつたのみならず、氏の作品にもあまり

親しんでゐなかつた。

「子をつれて」といふ短篇を、「早稲田文學」で讀んだ時、この作者の名をはじめて知つた。そして、貧窮の生活を叙してゐるうちに飄逸なところのあるこの小説を面白いと思つた。それから、「贋物さげて」といふ小説を、やはり「早稲田文學」で讀んで、よくある材料だが、かういふ題材を取つた小説では、近松秋江氏の「伊年の屛風」の方が面白いと思つた。その後、二三葛西氏のものを讀んだ筈だが、私には興味がなかつた。

ある時、文學志望の青年が來訪した時の話に、彼れは葛西氏の作品に最も敬服してゐると云つて、「あの人はどうして自殺しないのでせうか」と云つた。突詰めた生活をしてゐるこの作者に取つては、自殺が當然の運命であると、この青年は思つてゐるらしかつた。またさういふ運命にある人間を、凡人とちがかつたえらい人間であるやうに思つてゐるらしかつた。私はかういふ見解には同感しなかつたが、葛西氏に心酔する青年もあるのかと、むしろ不思議に思つてゐた。

今、「葛西善藏全集」を披いて、幾つかの短篇を續けて讀んで、私はウンザリした。「暗欝、孤獨、貧乏」の生活記錄の繰返しであつて、それが外形的にも思想的にも單調を極めてある。「私の一番悲しく思ふことは、貧乏であること、そしてその貧乏に打克つてグン〳〵金持になつて行けるほどの豐富な創作力を惠まれてゐないと云ふことである」と、自分で反省してゐるが、その通りであつて、氏の創作力の貧しさに、私は驚いた。兎に角四十餘歳までの生涯を文學に托して、呻吟苦惱、かういふ作品をこれだけしか書上げられなかつたのは悲慘に感ぜられる。これだけのものも、貧乏の鞭が彼れを追立てたればこそ書けたのである。改造社などの雜誌社が彼れをせき立てゝ書かせたればこそ、幾つかの身邊小説も辛うじて出來たのらしい。世が彼れの天才を虐遇したのではなくつて、貧苦の運命は彼れの身に具はつてゐたのであつた。

しかし、それに關らず、「葛西全集」は、現代の日本の文壇に存在を價ひする資格は有つてゐるのである。才氣に乏しいかはりに彼れは自己の藝術に誠實であつた。當て氣や通俗味は夢にしたくもなかつた。世俗に所謂成功の資格たる「運、

鉢、根」のうち、彼れは「鉢」は充分に持つてゐたが、「蓮」と「根」とがなかつた。しかし、飲んだくれに有勝ちの、孤逸さ、多少身に帶びてゐた仙骨が、彼れの暗欝鈍味な作品に、藝術の光を失させてゐるのである。

「私は、妻子を棄てて、あの鬼のやうな繼母の迫害に堪へかねて、郷里を飛出して來た。それ以來、私はすべての女性と云ふものに對して脅迫と敵意を感じてゐる。どんな女に對しても、私は私の繼母と云ふものを通さずには、考へることが出來ないのだ。私は自分の妻や娘たちのことすら、信じたく思はない。すべての女性の蔭には、私の繼母の邪鬼のやうな影がひそんでゐる」（暗い部屋にて）と、彼れは云つてゐるが、しかし、その作品には、さういふ態度を持つた觀察に基く女性は、一人も半分も現はれてゐないやうである。「彼等はすべて邪惡で、毒婦で、涙にも媚にも、すべて死の毒を含んでゐるのだ」と、どうしたはずみか、興奮して吐いてゐるに關はらず、そんな女性を一度も具體的に書いてゐない。そんな女性もこんな女性も、女といふものを小說のなかに丸で書いてゐないのは珍らしい。主人公の妻とかおせいとか、溫泉場の藝者とかで、作中に出てはゐるのだが、女の名前でそこへ坐つてゐるに留まつて、外形に於て女の容姿を備へてそこに現はれてゐるのでもなければ、一人の女としての心理の動搖がそこに見られるのでもない。「急行券」のなかに、主人公の妻が、ちよつと見つかりにくいところへ、夫の小使錢を入れて夫に渡してゐる女らしい心使ひを、私はこの作者の作中では珍らしいと、思ふくらゐである。あれほど主人公と關係が深く、あちらこちらの作中に現はれてゐるおせいだつて、少しもいき〳〵して描かれてゐない。この女の心理なんかを、作者は歪みなりにも觀察してゐない。「いつも相手を疑はない」一寸ぼんやりの女として、作者は見てゐたのかも知れないが、さういふ平凡な女としても明晰に描かれてゐない。

やくざな書冊を賣つて大金をせしめようとした「贋物」と同じ心理を取扱つてゐる「馬糞石」は、葛西氏の傑作で、田舍者の無知な慾心が、無器用なうちにも一種の味ひのある筆でうつされてゐる。村のスケッチである「仲裁人」もいゝ。しかし遺憾にもかういふ田舍の世相を寫した小說も、さう多くはないのだ。一人の異性をも描き得なかつた彼れは、自己

を隱れた世態人情をも、描き得なかつた。彼れは、たゞ狹小な範圍でころがつてゐたのだ

私は、私の讀んだ彼れの數十篇の短篇のうちで「仲間」といふのが、最も彼れの面目を知るに都合のいゝ代表作であると思つてゐる。これは割合に自由に書けてゐる。世才にも文才にも貧しい、しかも、肉體に病氣をも有つてゐる彼れが、差迫つた金の工面をしに上京して、運のいゝ友人達が面白さうな生活をしてゐるのを見て、心を暗くすること、友人達に揶揄されること、金策は不成功に終つて病氣の惡くなること。……みじめなことの連續なのだが、そこに、獨得の諧謔味がにじみ出てゐるので、自から一つの藝術境をつくつてゐる。

「狸」といふ綽名を仲間からつけられたことを氣にして、「哀しき狸……」と、泣きたいやうな自嘲の氣持で呟き、「若い彼等の眼には、自分のやうな人間は、餘程滑稽に見えるに違ひない。老いぼれの道化者としか彼等には見えないのだらう。ほんとに泣いてる自分の心持は、全盛揃ひの彼等に理解されやう筈がない」と歎じてゐる。

しまひの方で、全盛でない方の友人を訪ねて、自棄の戲談をお互ひに取りかはしたりしてゐるあたりからが面白い。細君に逃げられたその友人と、急を要する金の工夫のつかない上に、九度近い熱の出てゐる彼れとは、喰ひ散らした佃煮などを肴に、金持、才能、名譽、美、藝術、健康、女性——さう云つたすべてのものに口から出任せの罵倒を浴びせて痛快を叫んだ。あらゆる者に向つての罵倒のはてが、今度は二人の間の罵倒となるのが面白い。不平不滿、胸のもだえの極は、互ひに他を罵つたゞけでは收まりがつかないで、面と向つた二人が互ひにぶつゝかり合ひでもしなければ、どうにもならなくなるのだ。

「貴樣は臆病者だぞ、卑怯者だぞ、巷に出ろ」と、だしぬけに友人が、主人公たる「彼れ」を叱咤する。

「さう云ふなよ。おれは病氣ぢやないか」

「だから尙出るんだ。貴樣の壽命なんか後幾ら持つものだ。おれについて來い。おれは原稿なぞ書いてやしないさ。世俗

折つて、猶太人見たいな人間共に頭をさげて持廻るなんか眞平御免だよ。……おれは民衆に捷かん。……」

昂然と云つて、やがて、

「K來い。角力を取るから來い。」

「駄目だつて云ふに。そんなことしたらおれは死ぬぢやないか」

「死んだつて構はない。生きとつたつて何になるか。さあ來い」

「貴樣は若い細君に逃げられたんで、おれに角力を挑む氣なんだな。……よし。貴樣なんなに敗けてたまるか」

理由のない取組合ひがはじまつた。

「貴樣はおれを殺す氣か。……參つたから放せ」

「放さん。貴樣のやうな病弱者はいつまで經つたつて放さんぞ」

「そんな亂暴なこと云はんで放して吳れよ。苦しい。苦しい。おれはまた血が出るよ。許して吳れ。……君許して吳れよ」

主人公は半ば泣聲になつて、依然友人の咽喉を攻めながら云つた。

虐げられたる人の一生といつた感じが、讀後に油然として起つて來る。「虐げられた」と云つても、それは、天才が衆愚に認められないで侮辱されてゐるといふ意味ではなくつて、才能の乏しい人間が藻搔いてゐる苦しさが、傍人に侮蔑の目で見られることを私は意味してゐる。「半ば泣聲になつて依然友人の咽喉を攻めて」ゐるのは、自から葛西善藏の一生を表象した言葉である。力乏しくして描けないのに苦しみながら、なほ相手（藝術）の喉から手を離さないで鬪つてゐるのである。

（五）

「女性はすべて邪惡で、淚にも媚びにも、すべて死の毒を含んでゐる」といふ女性觀を眞に構築してゐたのなら、自分の憤懣を晴らすためにも、小說の好材料としても、數十年の作家生活の間に、それをこそ力を入れて書くべき筈なのに、さう云つた女性の片影をさへ書かうとした形跡もないのは、不思議である。作者は果してそんな女性觀を持つてゐたかどうか疑はれるくらゐである。たまに、彼れの筆から出て來る女は、「死の毒を含んでゐる」どころか、凡庸なお人よしである。そして、彼れの周圍の男性にしても、どちらかと云ふと、人がいゝのである。彼れの老父は、わが子と一しよに酒を飮んで、わが子に唄はせたり踊らせたりして悅しがる人間である。たび／＼作中に出て來る彼れの弟は、貧しいながらも、心力を盡くして、兄の世話をしてゐる。志賀氏の身邊雜記風の小說のなかの人物の親しみが形式的に見えるのと異つてゐる。愚鈍の善良さが彼れの作中の人物にはよく現はれてゐる。比喩が提灯と釣鐘になるが、彼れの文學的面差しはドストエフスキーに少しは似てゐるのであらうか。それが彼の創作上の總財産である

「暗い部屋にて」は、彼れが力をつくしていろ／＼な人間を書いたものだが、どうも抽象的で客觀性に乏しい。「湖畔手記」は、彼れの晩年の作品であるが、鈍重な筆にも錆を帶びてゐる。心境と筆致とぴつたり合つたいゝ作品である。「春」や「雨」や「歲晩」は彼れの詩である。「寺の梅も堅いながらに最早蕾を揃へ、枯れ朽ちたとしか見えない牡丹の枝にも瑪瑙の牙のやうな芽を見せて、年を送り春を迎へる用意が出來てゐるが、自分自身を顧みて見ると、北嶺に寒い姿ばかりで、南枝に香しい梅の面影と云つたやうなものは、どこにも望まれなかつた」と歎ずるなんか、文學者通有の感傷語で、私などは聞飽きてゐるのであるが、小說に現はれてゐるやうな葛西氏も、獨居靜座の折には、自然と自己を對照して、かういふ月並の感想に耽つたのかと思ふと、新たなる興味が覺えられる。

（志賀氏の「暗夜行路」は、前篇だけはかつて通讀して、讀後感を述べたことがあつた）（八月二十五日輕井澤にて）

新しき日本に呼び掛ける

衆議院議員　鶴見祐輔

日本は今、もう一度立ち止まつて、自分自身の姿を正視しなければならぬ時になつた。明治新政府の指導原理は、もう昭和の日本人を感動さすことが出来なくなつてゐる。明治新政府の樹てた世界政策は、もう日本の世界に於ける位置を進展させることは出来なくなつてゐる。明治新政府の経済政策は、もう日本民族の生活を安定さすことは出来なくなつてゐる。

昭和の日本民族は、もう一度新しい探索を初めなければならなくなつてゐるのだ。さうでなくしては、今日御互の新しい生活様式は直らない。さうでなくしては、今日御互の精神的飢渇は醫せられない。さうでなくしては、今日の世界に於けるお互の民族的確信は定まらない。

その光を我々はどこに求めるのだ。私はかゝる光を求めて過去十八年間、大きい世界の隅々を跋渉した。亜細亜の大陸に、南洋の孤島に、南北亜米利加の山と野とに、欧羅巴の川と都とに私は真理を尋ねて行脚した。人あれば訪れ、書あれば読み、寺あれば入り、俗あれば參し、名山大川の間、平野海浜の上、私は倦むところなく五大洲を彷徨ひ歩いた。

さうして、豁然として、ある朗らかなる曉に私は開眼した。日本を救ふの光は、広い五大洲のうちにあるのではない。狭い六十余州のうちにあるのだ。名だたる世界の百人の頭の中にあるのではなく、名もなき日本の男と女との胸の中にあるのだ。

さうだ。王政維新を作り出したるちからが、孔子孟子朱子のうちにあつたのでなくして、貧しき松陰と南洲と山陽と龍馬との中にあり、否、かゝる史上の人物ともならずして死んだ無名の青年達の胸の中にあつたやうに、昭和の時代を作り出すべきちからは、いまは水田に稲を植ゑ、工場に槌を揮ひ商店に荷作りをしてゐる無名青年男女、少年少女の胸の中に燃えてゐるのだ。

その清新なる魂を呼び醒ますことが、それが新しき日本を作り出すことなのだ。其中から第二の松陰と第二の南洲と第二の龍馬とが出てくるのだ。

日本は艱難の日に於て常に義人を欠かなかつた国だ。弘安の日に時宗と日蓮とを恵まれ、維新の日に南洲と海舟とを恵まれた日本だ。昭和の御代にはきつとどこかの山村の田の畔から、雄叫して躍り出てくる大丈夫があるに違ひない。

私はいま、斯のごとき未見の大丈夫にむかつて呼びかけんがため、苦心長日月、渾身の熱誠を罩めて『英雄待望論』を著し、之を世に送る。わが敬愛する満天下の愛読者各位、願はくは『英雄待望論』の一巻是非御一読を賜り、新日本の運命打開の為、八千萬同胞の福祉の為、御協力賜はらんことを。

——読者曰く

鶴見祐輔氏著『英雄待望論』は熱誠熱意、全巻これ血であり肉である、之を読んで奮起しない者があらうか！　何といふ名著であらう、此際老若男女を問はず日本国民全部の必読を望む、四六判四百頁の大冊、定価五十銭破格に安い。九月下旬発売『東京本郷大日本雄弁会講談社』振替東京三九三〇



モダーンを語る

魯庵生

(1) 銀座のモダーンは和製

モダーンの本舞臺は銀座で、日に一遍は銀ブラをしないと寢られないものがある。夫程で無くとも、少くも月に二三遍は銀座の風に吹かれないと全身が濕氣て黴臭くなると思ふのがモダーン心理である。ラッシ・アワーの電車戰が一としきり濟んで、サラリーマンの勞れた顔や勞働服の汗臭い不景氣面が四散したあと、飾窓のチカ〳〵光る電氣の町に帝劇の女優喜劇の一と幕を引拔いて來たやうな若い男女の幾群れか續く。此群れに交つて右行左行、脂粉に陶醉しつゝメロンの一臠を喫しカクテルの一杯を擧げるのがモダーンであるさうだ。モダーンの價は餘りに高價では無い。毎日銀ブラをするのは經費よりは時間の空費に堪へないが、月に二遍や三遍、不二屋や資生堂の椅子に腰を掛け、タイガーやクロネコのドアを潜つてモダーンになれるなら世にモダーンとなる位、時間的にも經濟的にも安價なものは無い。

一體流行といふものはイカモノである。萬人に一人しか企てられないといふやうな高價な七六かしいものでは餘り流行しない。萬人が萬人直ぐ眞似の出來る輕便簡易なものでなければ野火の廣がるやうに流行するもんでは無い。モダーンにもピンからキリまであつて、中には"Vogue"や"Bon Ton"の型でなければ納まらないものもあるが、萬人が萬人モダーンがる和製モダ

ーンは左程目を睜つて驚くほど新奇なものでも又金の掛るものでも無い。ツマリは流行であるから流行の必然性なる安つぽい薄つぺらな感じが伴ふのを免かれ難い。

實を云ふと銀座其物が東亞第一の近代都市を代表せしめるには餘り貧弱過ぎる。久しく歐米の大市に滯留した海外生活者が歸朝第一歩を踏む銀座の餘りに田舍びてるには誰も彼もウンザリされる。が、地震前の銀座は文明の市街としては田舍臭くても相當時代の苔がついてゐて沈着きがあつた。古い銀座が亡び再造された地震後の新らしい銀座は店舖の外觀から店内の粧飾が惣て面目を更め、此の數年間世界の都市設計又は建築を一變しやうとする新味が惣て齎らされて、市街と行人とを併せて悉く新らしくした。地震前と後とを比べて決して五年や十年の差で無く、少くも四半世紀を距つる感があるは獨り日本ばかりでは無いが、殊に日本のやうな世界の大渦動の中心を外れて其餘波ばかりを受けてる國では猶更其感が深い。が、此の思想的大渦動に攪醱されるモダーンの深酷味は繰つり人形のカツタリカツタリ踊出すやうな銀座のジヤヅとカクテルの交響樂には現れない。銀座に象徴されるものは惣てが（新らしいが）薄ツぺらでぞつぽく且間に合は世である。

(2) モボやモガは赤化防止のマスコツト

モダアンは世界を通ずる大戰後の頽廢狀態である。啻獨り日本の銀座通りの問題では無い。夫故にモダーンは世界の情勢の變化からして考察しなければ理解されないのだ。

世紀の初めにはイツデモ文明の頽廢作用が行はれる。歐洲戰爭は正しく此の作用を完全に成就した文明の轉換であつた。が、文明史的に見て頽廢された新文明が必ずしも舊文明よりも進歩し且人類の理想に近づきつゝあるとは速斷出來ないが、文明が爛熟し緊張し或は反對に弛緩し敗頽して週期的に新陳代謝するのは爭はれない。大盤石と思はれた世界の二大コロツサスが相並んで地響打つて倒れたのは何人も豫期しない古い文明の地殼の陷沒であつた。世界は皆天變地異にでも遭逢つたやうに惶惑して、各々多少の危惧と動搖とを感ぜざるは無かつた。モダーンの「トプシー・ターヴイー」は此の動搖から生れたので、決して一時的の風潮では無い。

尤も古い文明に對する革命の機運は一世紀前から動きつゝあつたので。決して一時に突發したのでは無い。が、戰爭に由て俄に速度を早め、一か撥かの勝負を一擧に決すべく骰を振つたのが意外にも（勝利者にすらも）案外の奇捷となつて、革命の

進歩を妨いだ大戰後の二大コロッサスが脆くも崩潰したので、當然起るべくして强壓抑制されてゐた諸運動が一齊に起つた。無産者の擡頭、女の進出は之に伴つたので、戰爭が熄むと忽ち燎原の火の如く廣がつた。新舊思想の衝突は老人と青年と並存する限り何れの時代にも珍らしく無いが、今日の思想の扞格は文明の基礎や社會組織の根本概念に觸れてるから、從來反覆された新舊の軋轢とは本質的に異なつてをる。モダーンの突飛な風俗も亦此の時代の風潮から産れたので、單なる一時の流行と目するのは短見である。

例へば女の斷髮短袴の如き、大戰中の女の奮闘の名殘で、大戰の試練に由て强められた女の自奮でもあるし、又男に對するデモンストレエションでもある。鄰邦支那が女の斷髮を、張作霖は禁じ南方政府は之を厳令した如き、單なる髮容が思想に影響する事の決して寡少ならざるを認めたからである。政友會政府が風俗上の微妙な心理に鈍感であつて、女裝困難としてモダーン・ガールを取締らないのは女の幸運である。

モダーンは思想の交渉が有つても無くても新らしい文化の建造を使命とする以上は古い傳統の眼からは叛逆である。少くも善良なる風俗の破壞である。何十年を一夜に躍越えた如き此の大戰後の急轉直下的變革は古い傳統の保持者には夢のやうで、新らしい風俗や好尚が事毎にホリブルを感ぜずにはゐられないだらう。社會思想研究會が内閣直屬の養成所として呪咀されるのはマダ道理（もつと）だが、思想に直接の聯絡の無いモダーン・ガールやボーイの彈壓されるのは不思議だが、矢張同じホリブルが感ぜられるのだらう。

一體日本人は思想的に恐るべき民族では無い、困難に數へられる近代思想も二次的三次的に移入されたもの丶鵜呑であるから、外面的の口眞似はするが肝腎の中味が空虚（からつぽ）で底が拔けてをる。原産地からの直接輸入である如く吹聽されるものでも氣が拔けて酸味だけが殘つてる。何等の恐るべき危險性は無いのだ。例へば頭株の少數者が（單なる論理遊戯として）マルクスを擔いで、若干のマルクス・ボーイが雷同しても、夫は左團次がモスクワで熱狂的に人氣を湧かすやうなものだ。

日本人は昔から芝居氣があり野次性があつて、要でも無い事に見えを切つたり、買はずともイヽ喧嘩を買つたりする。且何事にもお祭り氣分になつてワイ／＼噺し立てる惡い癖がある。其上に思想的に走りを好んで半熟を生囓りにし、イカモノ喰に舌打ちして得意になる稚氣がある。之が爲めに聰明とも買被られるし、生意氣とも誤解される。が、根は温帶國の妥協性に富んだ安全第一の民族である。夫故に多少の危險性がある思想で

も日本へ來ると風土の關係が辛辣味を失つて了ふ。丁度天城の山葵(わさび)を畑で作ると辛味(からみ)が拔け、加州のオレンジが日本で栽培されると香氣を失つて了ふやうに、革命的の危險思想も日本の空氣に觸れると燃燒性が濕氣て了つて爆發しなくなる。

モダーンも亦此の如く、日本へ來ると背景の思想が薄ボンヤりとぼやけて有るか無きかに消えて了ふ。獨逸のユンゲン・クンストが日本へ移植されると咄々人に迫る深刻味を失つて唯の出鱈目の畫となり、デッサンさへも滿足に描けない貧口美術書生を有頂天ならしめたのみである。モダーン・ガールやボーイの輩は器用に新譜を奏づる九官鳥の類で、銀座の地廻りとして漫畫の材料を提供する外には何の役をもしない。渠等はモダーン劇のエキストラで、銀座の色彩に無くてならぬ代物(しろもの)であるが、目を瞬つて驚くほどのものでも、苦蟲(にがむし)を潰して顰蹙するほどのものでも、又切齒扼腕して憤るほどのものでも無い。渠等は不二屋か資生堂か、タイガーかクロネコあたりにのさばらして、勝手な氣焔を擧げさして新らしがらしてさへ置けば、革命の三つや四つは成功した了簡でイヽ氣持に納まつてゐる。到つて無事なお目出度い人種である。渠等は宜しく赤化防止のマスコットとして顰蹙するよりは相當保護を加ふべきである。

(3) 日本のモダーンのお手本は亞米利加の映畫

然るに此の、思想上の聯絡があるとも背景があるとも、又清盛が洛中へ放つた種子のやうな役目を勤める赤化の使者であると誰も思ふ者が無い此のモダーン・ガールやボーイをナゼ苦蟲(にがむし)潰(つぶ)して瞻(なが)めるのか。一言すれば何でも無い。渠等と、渠等の父兄や周圍の年長者の頭が餘り懸離れ過ぎて互に異國人同士であるからだ。不良兒だとも思はないが不良兒らしく感ぜられる。危險だとも考へないが危なツかしくて堪らぬ。頭痛の種子ともなれば疳癪の種子ともなる。腹立たしくもあれば心配にもなる。ツマリ渠等のする事なす事が一から十まで傳統の型に陷らないで、生活の定石を外れてるのを却て得意とする風があるのが苦苦しくて堪らんのだ。

殊に渠等が從來の傳統からマジメな生活と考へられない藝術に趣る傾きのあるのが老人たちには氣に喰はない。夫も謠曲(うたひ)とか長唄とかいふ固有の藝術なら食後の腹ごなし、業餘の道樂として多少の同感もされるが、オペラ唄やヴワイオリンでは第一理解出來ないから老人達には面白くない。殊に映畫劇を中心としての外國劇の趣味の普及は、第一役者の名からして中老以上の（多少は外國の飯を喰つたものゝ）耳にさへ聞慣れないの

で最新流行の美男だより小野町で通したい。デブやチブやチャプリンぐらゐでは今日の映畫劇の太刀討は出來ない。ヤニングやウエルネルクラウスやコンラッド・フアイトやアドルフ・マンジュウやチャールス・フアーレルやベン・バードや、初めて聞く人氣役者の名を十も二十も列べられると、一廉マダ時代に遲れないツモリのものでもタヂ〳〵として內々冑を脫ぐ。

ヴワレンチノの死が紐育の全市の女を喪に包んだといふが、東京でもモダーン・ガールの集團は日本の政治家を百人一度に失うより世界の文明の大事件としてヴアレンチノの死を悲んだ。モダーン・ガールが外國の映畫劇の人氣役者に血を湧かすのは中々今の福助の慶ちやんどころの騷ぎぢや無い。ロナルド・コルマンやジョン・バリモアやロイドやキートンの一ト頃の人氣と云つたら、日本の壽美藏や三津五郎や芝鶴や千代之助を束にしたつて及ばなかつた。

殊に劇でも映畫でも、モダーン・ボーイやガールが露西亞や獨逸に隨喜するのが危險と思はないまでも何となく氣に喰はない。總ての露西亞人が共産主義を腸の底に浸込ましてゐるとも、第三インターナショナルの宣傳者となつてるとも思はないが、俳優でも藝術家でも何とかスキイといふ奴はボリセウヰクの臭ひがするやうで無氣味でならなかつた。劇でも映畫でも何とかスキーといふ奴が、報知といつてもどこかしらコンミユニズムの禮讃者である如き心配がして、接近するのを躊躇してゐた。モダーン・ガールやボーイが露西亞の藝術を讃美して、何とかスキーを伯父さんか伯母さんのやうに扱ふのが氣に入らないのだ。

殊に表現派や構成派の舞臺裝飾が何とは無しに危險を孕んでるやうで物騷を感じる。露西亞のでは無いが『カリガリ博士』とか『朝から夜中まで』とかいふ類は地獄の演出を見る心地して無氣味さに堪へられない。かういふものをモダーン・ガールやボーイが喜んで見るといふ親父連には呑込めないで、イカモノ喰ひとしか思はれない。丁度維新の初に西洋人が牛肉を喰ふのを氣味惡るがつて、噂を聞くだに恐ろしかつたと同じ心理である。

だが、此の藝術上の深い議論や映畫劇を通じて味得される現代思想の理解等は姑らく措いて、斯ういふ映畫劇が滿都の青年士女を熱狂せしめる處にモダーン・ユースの心理及び傾向を知るべきである。何人も失敗を豫期せざるは無かつた築地小劇場が(興行師としての算盤を持つ事は出來ないにしても)毎回客席を滿たさゞるほど繁昌し、脚本の說明に等しき舞臺の藝術が人氣を吸收して、左も右くも劇壇の一勢力となつたは時代の好尙の移り變る一端を知るべきである

所謂モダーンが何を意味するかは外國映畫劇を見て初めて知

るべきである。殊にモダーン・ガールの實物教育といふべきは亞米利加物の映畫であつて、クラヽ・ボーやルイス・ブルツクはモダーン・ガールのお手本となつた人氣者である。渠等の髮容、服裝、態度、表情、身振、步行振等、總てがモダーン・ガールを魅了して其の顰みに倣はしめた。其事の是非善惡は第二の問題として、モダーン・ガールを論ずるものは先づお手本からして知らねばならない。亞米利加物の映畫を見ないで、モダーン・ガールやボーイを理解する事は困難である。

一體日本は老人國で、老人の心を以て青年を規矩して老人の型に陷めやうとし、青年を理解しやうとは少しも努めない。モダーン・ガールやボーイを色眼鏡を掛けて見る前に、先づ自分達の青年時代を顧み、趣味や嗜好は變つても老人達に追隨するを屑しとしないで新らしい理想に趨る青年心理を慮からなければならない。モダーン・ボーイやガールの功過論は暫らく措いて、青年の嗜趣が漸く國際的となつて渠等の趣味や好尙が區々日本の地方的傳統を追はないで世界的となりつゝあるのは亦青年の進步では無い乎。

(4) 日本のモダーンと亞米利加

日本の今のモーダンは亞米利加がお手本である。亞米利加の文明が模範とするに足るや否やは人に由りて各々說があらうが、亞米利加の文明が如何に安ツぽくて下品であつても先進國として日本の學ぶべきものが多くあるのは爭ふ事は出來ない。且日本は之まで（或は今も猶）亞米利加から敎へられるので、後進國民として亞米利加の文明を輕んずる如きは冷靜といふよりは寧ろ不遜である。亞米利加をお手本にした日本のモダーンの風俗が假に低劣淺陋唾棄すべきものであつたなら、夫はお手本となつた亞米利加の文明の責任では無くて、缺點短處をのみ學んだ日本人の無思慮無批判を戒むべきである。

一體少年が大人を擬ね、後進が先進に感化される場合、美所長所のみを學ばないで惡い癖まで見習うは有勝ちである。中には物眞似や聲色遣ひが特有の癖を誇張して模倣するやうに（然ういふ成心を持たないでも）自然的に餘り芳ばしくない性癖まで感化れて却て得意になるものがある。長を學び短を棄てるといふは誰も心掛けるのだが、實際は然うお誂へ通りに行くものでは無い。且個人の性行や民族性の美所短所といふは大抵は一つの性癖が時と場合と看方とで美所とも短所ともなるのだから、學ぶものゝ擬ね方一つで善くもなり惡くもなる。日本のモダーンの亞米利加かぶれは必ずしも擯斥すべきでは無い。

亞米利加の文明が下品で安ツぽくて、町人臭くて、歐羅巴の氣品と沈着とを缺くといふのが多少肯綮に中つてゐるとしても、夫は國が新らしくて國民の多くが致富を目的とした出稼人の子孫であるからだ。が、日本と比較すると、日本には特殊の古い文明はあつても、世界の仲間入りをしたのは亞米利加よりも新しい。特殊の文明を以てしては世界のドコにもヒケを取らないでも近世の文明では遙かに亞米利加に瞠若する。郊外の其處此處に簇生する文化住宅や（大震後とは云へ）日本の文明都市を代表する銀座通りの貧弱さを見ては亞米利加の文明を下品で安ツぽいナゾとは義理にも云はれないわけだ。亞米利加の文明が町人臭いのは國柄の上から據ろないが、日本の此頃のダラ・アリストクラシーは亞米利加以上である。實を云ふと日本のモダーン・ガールやボーイの大部分は町人の子で、一番鼻持のならないのは目腐れ金の財力を鼻に掛ける渠等のダラ・アリストクラシーである。日本のモダーンの安ツぽいのは亞米利加をお手本にするからでなくて、日本自身の文明がマダ新開で苔が生へないからだ。

亞米利加の國民性は一言すれば開港場氣分で、紐育の摩天角（スカイ・スクレーパー）が亞米利加文明を代表してゐる。何でも世界一を目標として、出來るなら喜馬拉山（ヒマラヤ）を午穿抜にし希臘羅馬を地面ぐるみ買取つて亞米利加へ運んで行かうといふが渠等の心事である。其の肝玉の馬鹿々々しく大きいのは高が一新聞社の八景の選に入らうとして全國の名所自慢が眼の色變へて騷ぐ日本の島國根性では思ひも及ばない。恁ういふ圖拔けたベラボウな國民だから個人としても亦思切つて突飛な眞似を平氣でやつてのける。ツイ此頃ナイヤガラの一番高い瀧を護謨玉の中へはいつて上流の急湍から逆落しに瀧壺へ落下したものがあつたといふが、恁ういふ冒險は亞米利加人の得意の藝當で、ダグラス一派の冒險劇の如きは亞米利加人に取つては家常茶飯である。亞米利加人のモダーンは恁ういふ突飛な冒險性である。

ツイ此頃紐育では長時間のダンス競爭があつた。二十日四百八十時間を夜晝ブツ通しに踊抜いて終に官憲から中止を命ぜられたが、シカゴでは黑んぼの長時間ダンス競爭があつて、二十四日五百七十二時間を踊抜いて紐育の記錄を破つたさうだ。越えて數日（本月六日の紐育特電）紐育では長距離のマラソン・ダンスといふ開闢以來の不思議な競爭が行はれた。四日の夜の十時、コンネクチカツトのブリツヂポートからスタートを切つて六日の正午フヰフス・アヴエニユウの決勝點に入るまで六十四マイル三十六時間五十分を踊り續けたといふ。殊に最終の日は四十年來の酷暑であつた上に拂曉からの豪雨であつたが、此の惡天候に毫も萎まず勇敢に踊續けたので、環視の公衆は皆舌を捲いて驚いたさうだ。ダンスも恁うなると命掛けである。ダ

ンスホールで僅か五分か十分、レコードを掛けてグル〳〵廻つて得意になるナゾは小兒のマヽ事である。日本のモダーン・ユースは亞米利加をお手本にしてゐるといふが、日本と亞米利加とのモダーン振の差違は此の如く、亞米利加が獅子の角鬪なら日本のは二十日鼠の曲藝ぐらゐなものだ。

が、ダンス・レコードのマヽ事ダンスでも、ダンスに現を拔かすものが銀ブラをするモダーン・ガールやボーイばかりでなく、到る處の地方、ダンスホールの三つや四つは無い土地は無いといふほどダンスの流行が全國に傳播した日本のモダーン振も驚くべきである。市の隣接地と云ふ條、柏木の里と云へば『江戸名所圖會』が偲ばれる東京の郊外である。其の柏木の里に若夫婦とは云ひ兼ねる三十七八がらみの夫婦者が住んでゐた。主人の會社員らしきが夕暮近く歸つて來て、一と風呂浴びて晩酌を濟ました八時頃、きまつて蓄音機を鳴らして夫婦掛向ひの家が中々陽氣だつた。其の近くに住む私の友が、何を面白さうに騷いでるかと或る晩通り掛りに窓と塀の節穴を隙見すると、旦那どのも細君も男はテヽラ女は二布してといふ下帶ばかりで、男が一生懸命蓄音機を廻してダンス・レコードを鳴らすと、女はタラタララと夢中になつて踊拔く珍不可思議の一と幕を開いてゐた。ウソでは無い、ホントウの噺だ。恁ういふ男はテヽラ女は二布してといふ容體で、中年の夫婦掛向ひでダンスに興ずるといふは銀座のモダーン・ガールよりもヨリ以上モダーンである。

(5) だが、モダーンは沈澱した空氣を新らしくするオゾン

前にも云つたが、日本は老人國で、少くも五十を超えなければ社會的に羽根を伸す事が出來ない。ドウいふわけだか一番年齡が無さゝうな大學教授だけに定年があるが、他の方面では大學教授の定年を超した老人が頭を押へてをる。世渡りに利口な男は四十を越したばかりでモウ老人振つてる。老成振つて早くから壯年者に超越してゐるやうな顏をしてゐるのが成功の秘訣の一つである。

恁ういふ老人が羽根を伸してる國だから、東京の町は半分動脈硬化症に罹つてゐる。何とか困難ばかりを四苦八苦に掴んで裝けてゐる。不景氣ばかりを呟いて後退りしてゐる。此の沈澱した空氣を淨化するオゾンを與へるのはモダーンである。銀座がイクラ安ツぽくても明るく活き〳〵として生氣の充滿た顏が動いてゐる。其中を泳いで花やかな色彩を添へるモダーン・ガールやボーイは金魚のやうなものだ。鮪や鰹のやうな大きな利益を齎らす魚では無いが、生氣が潑溂として見た眼が氣持よく快い美感を與へる。

サンタ・ルチア號の丸窓(ポールド)

猪間驥一

ゼノアを出帆してから、地中海岸の南歐の諸港を、連日の樣に入港出港を繰り返して居る間は、次から次へと、賑やかだが、併し、わづらはしかつた。乘つた客、下りる客の手荷物が、どうかすると、三所も四所も廊下の隅に置かれたままになつて居たりして、船も人も、ざわざわと、少しも落ち着きがなかつた。

それが、アゾーレスで愈々歐羅巴の最後の島影に見切をつけて終ふと、もうその氣分ががらりと變つて終つた。泥溝板(どぶいた)を引繰り返したり、泥濘の水をはねたりして、がたぴしと路次から路次を縫つて居た自動車が、漸く、坦々たるアスファルトの並樹道(ブールバール)に乘り出した樣に、モーター汽船サンタ・ルチア號は漸く陸から獨立して、水と空、青一色の南大西洋の眞中で得意になつた。彼女は、その眞紅の二本の煙突でグッと反身(そりみ)になり、のびのびと橫へた船橋(ブリッヂ)で堂々と肩を聳(そび)やかせて、巨大な船體を微かに搖がせ乍ら、海上を悠然と滑つて行つた。舳(へさき)で眞二つに斷ち割かれた白浪は、船の兩舷側(サイド)を顚轉狼狽して後に逃げて行つた。が、傍の白浪などには眼を呉れ樣ともせずに、巨船は、その腹の底から、內燃機關(ディーゼルエンヂン)の男性的な鈍重な唸り聲を震はせ乍ら、ただひたすらに走り續けるのであつた。

半月の假住居の船室(ステートルーム)の中は、何時か、あるべきものがあるべき所に常に整頓されて、狹いながらに、落ち着いた安住の快よさをたゞよはせる樣になつた。太陽が反對のサイドに廻つた樣な時には、室內は、うつすらとした青暗さが淸爽の氣を肌に與へ、小卓を飾つたスヰートピーの花瓣(はなびら)が、內燃機の周期的の震動を受けて、鷦鷯(みそさゞい)の心臓の樣に、心細氣にふるえて居るのが靜寂の泉の樣に思はれた。

入用港の度に、荷役の人足やポーターなどに立ち交つて、右往左往してさわめいて居た水夫や給仕達も、一體何處に隠れて終ふのか、上甲板(メインデッキ)は毎朝の甲板洗(ワッシュデッキ)に眞白に淸められて、伯剌西爾移民の二三家族が、あちらこちらにかたまつて、編物をしたり、靜かに語り合つたりして居る。その上のブリッヂデツキも、午後になると、滿員に近いと云ふ客の影も稀で、端から端まで見通しの外廊(パセーヂ)には、床板の合せ目を塗つた黒塗料(タール)の數條が、競技のトラックのコースラインの樣に整然と並列して、ハウスの白ペンキ塗りの鐵壁を、水泡の流れの反射が、あとから、あとから、ちやもやと、明るく探ぐつて行つた。

太陽は白銀色にくるめいて、紺碧の海が跳いた。白光が空を占領した。吾々は空氣を呼吸すると云ふよりは、空を吸ひ、白光を吐くと云つた方の適當さを思はせた。

海は斯うした日の連續であつた。

鈴の音が夢と覺醒との境を鳴りつゞけた。私は朦朧として、先づ白い光を感じた。さうして追々にははつきりと鈴の音を意識して行つた。ボストンテリアの小さい犬が、その頸をチリチリと音立て乍ら甲板(デッキ)を向ふの方に小走りに行くのが見えた。次に、その犬の歩みに連れ乍ら、直線的に歩を運んで行く、健康そのものゝ樣な、豐かな女の脹脛(ふくらはぎ)を見た。ふつくらとした大腿を、微風に撲るワンピースのふくらみが、マシマローの舌さはりを思はせた。

『例の女だ。』

と思つた時、私は完全に覺醒を意識した。私は、遊歩甲板(プロムナード・デッキ)の籐椅子に長々と寢そべつた儘、何時か午睡の凉味を貪つて居たのであつた。

『あの女に、俺の寢像をお眼にかけて終つたのだな。』

と思ふと子供らしく羞恥を感じたのが、猶その感じを强めさせたのは、ふと見ると、私が、讀みさしの、ド・ミユツセの『ガミアニ物語』を、眞逆覗き込んで行く人はなからうとしても、大膽にも傍にその一頁を開けつ放しにして居ただらしなさであつた。

私は氣まり惡く心中に苦笑し乍ら女の後ろ姿を見送つて居ると、過日からその女を見る度に經驗する樣に、心が、その後姿に吸ひ込まれて行く樣に思つた。さうして、女がそれを意識して、心中で、後ろをふり返つて私を見つめて居る樣な氣がするのだつた。

私は殆んど無意識に『ガミアニ物語』を取り上げて、無意味な文字の配列の上に眼を走らせた。少々頭が重く、身體がだる

かつた。私はぼんやりと海を見た。明るい海の上を、波を掠めて白鷗が飛んで居た。獨逸人らしい男女の一組が、ラケットを抱いて私の前を通り過ぎた

その時お茶の知らせがあつたので、私は立ち上つた。さうして、デッキからホールに入ると、階段の降り口で、ソファに凭つて編物をしてゐる『例の女』に又出會した。女の眼と私の眼とがぶつかつた。私は『機會だ。何とか挨拶すべきだ。』と、どぎまぎして居る内に、棕櫚の葉が視線を遮つて終つた。女の足許に、長くなつて居た仔犬が、仔細らしく頭をもたげて、階段を降り行く私を見送つてゐるのが、『何より雄辯な御挨拶だ。』と皮肉つて居るかの様に見へた。私は苦がい氣持がした。

『かうやつて、歐羅巴と南米とを往復して居ると、色々面白い話の種があるだらうね。』

ある日、私は、私の船室給仕のエンリケを捉えて、何氣なく、

『時に君』

と、訊ねかけた。

『あの犬を連れた女ね、あれは一體何かね。』

『あの百三十番の婦人ですか。』

彼は一寸薄笑ひを洩らして、

『あなたも氣にしておゐでなんですね。大分方々で問題になつて居る様ですね。ですけれど一向解決がつかない様ですよ。何故なら、あの婦人は、名と國籍と乗船地と行先とが解つて居るだけで、後の事は一切封印されて終つて居るのですからね。實際誰も近附きになつて居ない様だね。』

『どうも、はつきりしませんですね。たしかなところではあの犬だけが、あの婦人の近附きですよ。あの犬は何でも知つて居ませう。』

私は笑つた。

『そりやあ正しくさうだ。幸福な犬さね。』

『が、人間でもあの女の事を知つて居るものは居るかも知れませんよ。』

『ほう！』

『私にはさう云ふ事が云へるんです。』

『何だか大變面白い曰くがありさうぢやないか、一つ話し給へ。』

『面白いどころぢやないでせうが、現に只今乗つて居るお客様の内緒話なんですから、まありオを過ぎてからお話ししませう。あの婦人は、リオ・デ・ジャネイロ乗りなのです。』

私は此の給仕の、小說中の探偵かなぞの樣な話し振りに、ひどく好奇心を引釣られ乍らも、私の、不純な興味に滿ちた心の動きを此の若い男に見すかされるのを惧れる樣に、さうしてからかはれて居る樣な不愉快さを感じて、

『いやに勿體をつけるぢやないか。』

と、眼を外らして、煙草に火を點けるのだつた。

シニョリイナ、イポリイタ・ラサロ（未婚婦人（シニョリイナ）だつた）の名は斯うして知つた。所でそのシニョリイナ、ラサロは、まるで變裝術をでも使ひこなして居るかの樣に、毎日樣子が變つて居た。

ある朝の甲板（デッキ）には、彼女は、絹のワイシャツに、赤い細い襟飾（クラバット）を結んで、愛蘭の女騎士の樣に輕快な姿を見せた。演奏（コンチェルト）の夜の彼女は、純白のデ・コルテーに髮を黑く染めて、マノンの樣に愁ひを秘めて見えた。又或る時は、入毛を使ふのであらふ、時代に髮を結んで、無雜作な平常着、然かも、流行を無視した長いスカートの裾捌きが、『ラ・ボエーム』のミミイの樣に純眞な娘に見えた。『女優だらう』とは誰しもの先づ觀察するところであつたらう。でなければ、恐ろしい扮裝道樂か。男を目的とする單純な技巧にしては、その效果が男の心を惹くと云ふ爲には充分過ぎる程だが、これ以上手許に男を引附け樣とする樣子が少しも見えなかつた。然し、彼女を一番豐麗に、この特徴を躍かせて見せるのは、赤い絹で頭を束ねた、南西班牙風の服裝であつた。豐かに張り出た胸、丸く彈力に富んだ二の腕、淺黑い皮膚の色、栗色に底深い眼、これが、私に、ガブリエラ・ベ・サンソニの酒場のカルメンの舞台を想ひ泛べさせた。

さうした扮裝が一番彼女の柄であることは彼女も自覺して居たのであらう。或は西班牙肩掛（マントン・デ・マニラ）を羽織り、或は西班牙櫛（ペイネッタ）を頭に挿して、彼女はダンシング・サルーンに出た。

彼女は、食堂でも、隅の方に一人で靜かに食事をして居るのだつたが、踊り場でも決して眼立ちのする席を占めようとはしなかつた。が、その立派な押し出しだけで、彼女の出現は、サルーンに、濃艶な雰圍氣を呼吸ぐるしい程に漂はすのであつた。その重い空氣の中を男女の視線が、觀艦式の探照燈（サーチライト）の樣に交り番に集注した。

『あの女と踊つたら……一度踊つたゞけでも、俺の生活は色彩の濃い記憶に依つて飾られるだらう。』

と、私は思つた。勿論踊りを申し込むだけの勇氣はない、心の中で、しきりにその欲望を燻ぶらせて居るのだ。が、斯う言ふ時、西洋の中年者、老年者は臆張りして大膽である。亞爾然丁の銀行家だと云ふ初老の紳士や、伊太利の飛行將校とか聞い

た背の高い男などは、私の眼の前で彼女に申し込んだ。拗ね者の様に、つんとすました様な彼女でも、斯う云ふ時決して男を斥けはしなかつた。そうして快よく立ち上つた。勿論彼女が中央に出ると、傍の女達は、月の出の空の群星の様に影を薄くした。然かも、シニョリイナ、ラサロはタンゴの一つ二つも踊り終ると、皮肉にもすつとサルーンを出て行つて終ふのである。彼女は小面憎い程吾々の心を根こそぎ奪つて行くのであつた。

輝かしく晴れた南太西洋を、サンタ・ルチア號は走つた。赤道を越して、伯剌西爾はもう近かつた。狭められた世界の中で、交際好きの、南歐や南米、拉丁系の人間の寄り集りの事だ、何れも宿知の様に口をきゝ合つて、ベランダ・カフエーでは、冷めたい飲物のグラスの間に夜の話がはづんだ。骨牌室では、ブリツヂの遊戯を終つたタキシイドの男達が、ウホスキーソーダに女の話の興を煽つた。

ある西班牙の若紳士は話を續けた。

『是れは或る年の馬徳里の謝肉祭の出來事です。御承知の通り、馬徳里では、此の日に、どんな冗談も悪戯も、愉快に笑つて許されなければならない日です。ある男が祭りの中心の町を歩いて居ると、行き違つた假面の男が、いきなり『よう今日は、』と手を握つて、『私は知つて居るぜ。君の細君の股には大きな黒子があるだらう、ハツハツハ』と笑つたんです。若し皆さんならどうしますか？　その男はカツと逆上してその場で彼を射殺して終ひました。言ふまでもなく不義を直覺したのです。所がですね。その假面の男と言ふのは、實は細君がかゝりつけの婦人科醫だつたのださうです。落し話ではありませんよ、有名な事件です。所で、女の秘密とは此の黒子一つ位ひなものではないでせうか。さうして、その黒子一つがドクトール一人を殺したんです。』

『成る程ね。』

南米の醫師が合槌を打つた。さうして、やがて、代り合つて、次の物語を初めた。

『是は私が實際に私の此の耳で聞いた女の話です。題して、「愛すべき女の無知」とでも言ふところでせうか。私の患家のある若い奥さんが、年老いた亭主との間に子がない。で、非常に子供を欲しがつてゐるのです。所で注文が難かしい。男ならバレンチノの様な美男子、女なら絶世の美人でなければ、生む氣がしない、何とかよい方法はあるまいかと言ふのです。私は笑ひましたね。そこで一寸その女を揶揄つてやらうと思つて、「貴方

の御近附きに誰かさう云ふ理想的な美男子は居ないのですか！』と訊ねると『それがあるのです。』と彼女は眞顔です。『それなら問題はないぢやありませんか』と、私が笑ふと『矢張りそれより外には方法はないものなんですかね。』と、暫らく萎れて居ましたが、やがて私の眼を瞶めながら次の樣に言ひました。『是は貴方を信じての御願ひですから秘密を守つて聞き届けて頂き度うございます。殊に依ると私は私の主人のでない子供を生むかも知れません。所でその事が表面の問題になる樣な時、貴方に、私の、その動機が決して主人に對する叛逆ではなかつたのだ、と云ふことの證人になつて頂き度いのです。』『與さん、冗談ぢやありませんよ。』と私は慌てましたが『でも、是は貴方の御忠告に依つて動くのではなくて、私の考へが、あなたの御意見と一致したまでの事なのですから。要するに、私の動機の眞面目さをさへ承知して置いて下さればよろしいのです。』私は呆氣に取られました。所が、話しは、其後再びその細君に會つた時の事です。私はその結果に就て訊ねますと、彼女は悲し氣に微笑を見せ乍ら、でも眞面目に言ふのには、いゝですか、『私は無二の好機に飛んでもない失策をして居りました。その夜になつて、私の寢室には、コンドームの用意がすつかりきれて居ることを發見しました。』

何と皆さん、實際さう話したんですよ。

それは退屈凌ぎの猥談として聞き流すことは勿論なかつた。皆は暫時顔を見合つて居た。皆が各自に問題の意味を解釋づけやうとする樣な顔付をして居た。

併し、斯うした秀逸は、さうさうは續かなかつた。誰かゞ、

『僕はまだ日本の女を經驗した光榮を持たないが――』

と、私の顔を見乍ら、東洋の猥談を求めやうとする頃から、話はそろそろ下落して、東西上下共通の、通り一遍の猥談になつて終つた。姦通、賣買春、變態不倫の性行爲、等、等――さうして、その結局が、期せずして、

『時にあの百三十番の婦人は――』

と、シニョリイナ、ラサロの噂に中心づけられるのであつた

彼女の話となると、身假金假を耳にして、眼を輝かせるのは、私ばかりではないやうだつた。

『私は今日菓子を一つ損しましたよ。』

と、或る一人が苦笑した。

『何、將を得んとするものは馬を射よ、ね。私は、彼女が、あるの、犬で、その馬を吾々の前に突き付けて、チャンスを見せびらかして居るのだと解釋したのです。これは娼婦型の女の技巧の最も普通な奴ですからね。で、打ち明けた話、恰度機會がある

つて、私はデッキで犬に菓子をやつたのです。すると、一寸離れて籐椅子に倚つて居た彼の女は、軽く『難有う』と言つたきりで、直ぐ犬を呼び戻して知らん顔をして居ましたぜ、思はせ振りで居乍ら、どうも一分の隙も與へないから、話のきつかけもない。私は頗るまづかつたですよ。』

一座は陽氣に笑つた。

『が、菓子一つでも『難有う』を貰へれば大成功だつたでせうよ。』

誰かゞ彌次を入れた。笑聲がもう一度高まつた。

『併し「グラチェー」と挨拶したと云ふと、あれは伊太利人と云ふことになるでせうか？』

一人がもつともな質問を發した。

『所が、船の方には、ルクセンブルグ人と云ふことになつて居るですよ。』

事務長が言つた。

『旅券を、どうしても見せて呉れないので、その通りにして居ますが、あの外貌でルクセンブルグとは受け取れない、名前から云つても伊太利か西班牙でせうが、若し出鱈目とすれば、人を食つた出鱈目ぢやありませんか。若しあの犬を、將を得んとする場合の馬として用ひて居るのだつたら、ルクセンブルグとは名乘りますまい、本船に乘つたら、さしづめ伊太利とか西班牙とか、又は南米の國を持つて來る所でせうね。ルクセンブルグとは洒落ましたよ。所で、愉快な事には、船客事務員が、「今航は妙に船客名簿を見せて呉れと事務室に來る御客様が多い。」と言つて居ましたよ。』

私はハッとした。私の表情に注意して居た人があれば、恐らく私の表情の變化を認めたらう。何故なら、私もその船客事務員の語るお客さんの一人だつたのだから。私はつい前日『どんな人が乘つて居るかと思つて』と、何氣なく船客名簿を見せて貰つたのだ。

Signorina Hipolita Lazzaro の名の下には、國籍と、乘船港と、行先、最も興味の少ない所にだけしか記入してなかつた。さうして、私はその名前の上に紫鉛筆で「レ」の印がつけてあるのを見て妙な氣持を經驗したばかりなのだつたから。

『金持の若後家かしら』

『女優の古手と云ふところだらう。』

『伯剌西爾の耕主の寵者が郷里訪問の歸り道さ。』

『要するに曲者さね。』

誰も是れ以上の観察眼と探査の腕を持つて居るものはないらしかつた。

『して見ると』私は先日の船室給仕（ケビン・ボーイ）の言葉を思ひ出した。『リオを出てからお話ししませう』と言ふ内密話には何かしら尋常でない興味が含まれて居るに違ひない。いつその事思ひ切つてあの時根堀り葉堀りにでもその秘密を訊ね出せばよかつた。若しさうしたら此んな時に『實はね』と一膝乘り出して船の中で得意の鼻をうごめかしてやることが出來ただらうに、一度聞き流して終つてからはあの給仕の顏を見てもうばつが惡くて、聞き出す機會も得ずに居るのだ。

が、女の事にかけては生れ乍らに海千山千の南歐人種の間に於てすら立派な謎である彼女、しかもどんな客とでも自由に話が出來る筈の事務長でさへ『まあ娼婦ではないでせうな。』と言つて居る程の彼女の秘密を、係りでもない斯の給仕が何うして知り得よう。あの給仕がいくら小さつぱりとしたよい男振だと云つたつて、あの女と彼とが忍會つて居る。そんな事は信ぜられない。かと云つて、若しあの女の秘密を彼が知つたとしたら、一方は興味の中心になつて居る女、一方は口善性ない給仕の事だ、噂が忽ち擴がらぬ筈がない。

『して見ると』

私は思つた。

『あの男の言ふことも掛値半分の出鱈目かな。』

『船で、一人ぼつちで寝るのは氣の利かない話だよ。』

と、誰かゞ言つたが、船室の獨居と云ふものは、妙に性感の壓迫を覺えさせるものだ。情熱時代の夫婦などに取つては、船の旅は實に甘美なものに違ひない。

私は寝床（バース）に入つて『ガミアニ物語』を取り上げた。が、さて、半頁も讀んで行くと、もうそれが單なる文字の配別に過ぎなくなつた。一つの行を眼が無意味に往復した。南米のドクトールの話が思ひ出された。さうして、謎の存在であるシニョリイナ、ラサロの姿が眼に泛んだ。健康美に滿ちた、引き締つたその四肢、完全なる發育を思はせる、豐かな乳のあたりのまるみは思つたゞけでも胸が苦しい程だつた。西洋の婦人は、寝室の中では下婢に手傳はせる時にでも着付には全然の裸體を見せると云ふことの聯想の下に、私は、彼女が寝床の傍に立つてするするとその衣服をすべり落すところを想像した。止度のない空想の中で、彼女の豐滿し切つた肉體が無際限の美しさに結晶する。かと思ふと、ルーベンスの女の様に、爛熟を過ぎた様な肉の丘が匂ひを伴つて、むりむりと眼の前に盛り上る。

楊貴妃の下着になりたいと吟じた支那の詩人があつた。今私は彼女の船室の鏡になりたい。その鏡の前に、彼女の姿態が如何に艶かな肉線の屈曲を見せるだろうか。私の眼の前には、ガミアニの情熱的（ハデイエンテ）な言葉が杜絶れ杜絶れに印刷されてあつた。私

はその言葉を鏡の前のイボリイタ・ラサロに囁かせて見て耳に想像した。ガミアニが、實は彼女の氣がした。胸が呼吸づまる樣だつた。私は寢台に横はつて、ぢつと彼女の室の中に根を張つた妄想の止度を失つた儘、煙草の火の消えて終つて居るのも忘れて居た。

ふと見ると、二つの丸窓（ボールド）が、外の夜空を黒く睨んで居るのが、巨人の兩眼が私の心持を氣味惡く監視して居るかの樣に見えた。自分見た樣に、斯んなにはしたなく彼女の妄想に思ひ耽つて居るものがあるだらうかと恥かしかつた。先刻の猥談の連中も、各々もうそんなことからは解放されて、靜かに寢付いて居るだらう。が、ウヰスキーの微醉が醒めて、その反動で、私はますます眼が冴えた。窓の外では、陸岸に近いのか、夜の南大西洋が珍らしく荒れ氣味に浪を立てゝ居た。相變らぬ内燃機關（ディゼルエンヂン）の震動に伴つて、サンタ・ルチア號はすくなからず搖れた。當番交代を告げる十二時の八點鐘が風を切つた。

私は、醉醒めの渇の上に、少々動搖の船醉ひを感じたので立ち上つた。電鈴を捺すのを止めて氣分を轉換旁々室を出た。配膳室（パントリー）にでも行けば、誰かゞタンサンでも世話して吳れるかと思つたのである。

食堂の近くまで行くと、丁度折よく、配膳室（パントリー）の入口で、私の船室給仕（キャビンボーイ）が小本を讀み乍ら電鈴當番（ベルデューティ）に服して居るのに出會した。

『君、タンサンか何かないかしら。少々氣分が惡いのだが――』

『さあ、見て來ませう。少しかぶつて參りましたね。』

彼は斯う云ふと、氣輕に本を置いて立ち上つた。私は、何氣なくその本を取り上げて表紙を見た。"The Memory of A Surgeon" ――ある醫師の手記――と云ふバルセロナ版の猥書（リブロベルデ）――好色本――だつた。『大變なものを迂闊にも忘れて行つたものだな』と思ひ乍ら、私は好奇心に驅られて眼を走らせて居ると、

『お室の方に持つて行つて置きましたが。』と、給仕が戻つて來た。私は一寸ひけ目を感じたが、すかさず、

『えらいものを讀んで居るぢやないか。』

と本を指し示して笑つた。

『やあ、飛んでもないものがお眼にとまりましたね。』

と、彼は頭をかいた。

『お氣に召しましたか？』

『面白さうだね。一晩貸すか？』

『さうですな。私も、實は今夜初めて讀むので、それに、今から二時までの當番（ワッチ）には何よりの退屈凌ぎになりますので――明日でよければお貸しいたしませう。』

『さう、ぢや、讀んで終つたら貸して吳れ給へ。』

私は輕く斯う云つて立ち上つた。

夜の海には大分白浪が立つて居る模樣だつた。その所爲か、人々の寢靜まり方が一層底深いものに思はれた。

長廊下(パッセージ)を歩いて行くと、通りかゝりの化粧室(トアレト)の扉が開いて、鼻のさきに、寢衣姿の髮を亂した女が突然に現はれた。船の動搖にあをりを食つて、二人は危ふく衝突しさうになつた。

『オツ』

女は小際に狼狽して、キモノの襟を掻き合せ乍ら、小走りにすり拔けて行つた。私も一寸周章てゝ、梯段を下ると、歩を早めて私の室に歸つた。さうして、ドアを引き開け乍からふと見ると遠くの方のドアが半分程開いて、その間から人の顏が出た。私は、何と云ふことなしに、急いで室の中に身を滑らせた。深沈とした船の中で、人々がひそひそとその影をうごめかして居る、と云ふ氣がした。

私は、丸窓(ポールド)を開いてやゝ冷めたい風を入れ、これからタンサンの栓を拔いた。

翌朝、私は寢過した。朝餐の合圖の銅鑼の音を夢現(うつゝ)に聞いてから、まだうとうとして居ると、見慣れぬ給仕が私を起しに來た。私はまだ寢足りない氣がしたので

『食堂には出ないから、エンリケにさう云つて、珈琲と燒麵麭(トースト)だけ持つて來させて下さい。』

と云つてやると、給仕は歸つて行つたが、暫らくすると注文の品を盆に乘せて、再びその給仕が現れた。私は、『妙だな』と思つて、

『難有う、だが、エンリケはどうしたの？』と聞いた。彼は瞬時表情をこわ張らせて居たが、

『病氣なんです。』

『へえ、でも昨夜元氣で當番して居たぜ。』

『それが、その、今朝方急に惡くなりましたんで、ことに依るとすつかり寢込むかも知れませんから、今日からお室の方はづつと私が見ることになるだらうと思ひます。』

『そんなに惡いのかね。』

私は昨夜の"The Memory of A Surgeon"を思ひ出して輕い失望を感じた。

で、その交替の給仕が室掃除に來た時云つた。

『實はエンリケに賴んで置いたことがあるのだがね。』

私は、バルセロナ版の綠冊(リブロベルデ)など、どうせ大したものだとも思はなかつたし、又『ガミアニ物語』の、世にも流麗な表現に感心して居る今、そんなものを讀む事は、ド、ミユツセに對する冒瀆の樣にすら思へるのだつたが、エンリケが寢込んで終つたとなると、意地惡く、一寸見せびらかされた樣で、妙に追求し度

くなるのだつた。

『はあ、ですがどんな御用でせう？』

『いや、一寸昨夜約束したことがあるのでね、若し大した容態でもないのだつたら、さう云つて吳れ給へ。約束のものを寄越して吳れとね。』

　私は、吾乍ら見つともない樣にも思つたが、さう云つた。さうして、客の前であの本を置き忘れる樣な彼でも、せめて新聞紙に位ひ包んで、此の男に言付けて寄越すだらうと思つた。

『でも、どんな御用なんでせうか、仰有つて頂けませんですか？』

『いや、エンリケにさう云つて貰へば譯るんだがね。』

　すると、給仕の顏に、見る見る困惑の表情が見えた。さうして、暫らく躊躇の樣子を示して居たが、やがて思ひ切つたと云ふ樣子で、

『實は……』

　と口を切つた。

『エンリケは死んで終つたのです。』

『なに？死んだつて？』

『はあ、昨夜海に落ちて死んで終つたのです。此の事は『お客樣がおゐでの間は絕對秘密にする樣に。』との事なので、私も申し上げまいと思つたんですが。』

　彼はもう最前の出來事を說明する爲に今までの快活さを忘れて居た。

『一體どうしたんだね。』

『あの男は、過日内から、どうも皆の嫌がる十二時當番(ミドナイト・ワッチ)を、毎晩の樣に引き受けるので、妙だとは思つて居たのですが、――實は、今朝になると彼奴の影が見えないのです。しますと、今朝甲板洗(ワッシデッキ)の水夫達(セイラー)が、船側(サイド)にチヤコップ(航走中に水先案内(パイロット)などが上下する爲に用ひる繩梯子)がぶら下つて居るのを見附けたと云ふのです。此んな海の眞中で、何の爲にチヤコップを出したんだらう、と云ふので甲板部(デッキ)の倉庫番(ストアー・キーパー)を呼んで見て一切が判りました。エンリケは倉庫番を抱き込んで繩梯子を持ち出して、手鏡まで用意して、毎晩ジヤコップを下りて行つたのです。成る程毎晩夜中の當番をやり度がる譯です、ジヤコップは丁度險蔽甲板(シエルター・デッキ)の百三十番室の丸窓(ポールド)の傍までぶら下つて居るぢやありませんか。昨夜は一時頃隨分浪が高かつたですが、もう味を覺えると我慢が出來ないと見えるのですね。エンリケは、遂々(とうとう)、シニョリイナ、ラサロの腕力にかゝつて、浪に攫はれて、取り殺されて終つたのです。』

　彼は斯う口を閉ぢた。

　私は、巨人の兩眼の樣な丸窓(ポールド)に眼を遣つた。其處に、二つの朝空が白光を漲らせて居た。

西洋綺語

眼鏡―薄物―英吉利の手紙―花火―女形―ピアノ―裸體寫眞―扇

秦豊吉

眼鏡

僕は大森の停車場で、蒲田の女優栗島すみ子さんを度々見かける。世の知る如く玉のやうな美貌だが、寫眞の上では見馴れぬ金縁の眼鏡を掛けてゐられる事に氣が付く。映畫女優の靑眼鏡が氣にかかるとは、詩人西條八十の歎ふところであるが、役者が素顔に眼鏡を掛けるのは、敢て珍しい事でもあるまい。明治時代の歌舞伎役者が、絹ハンケチで頸を卷いて、黑眼鏡をかけて、雪駄をはいた風俗は、まだ僕の記憶にもある。あの眼鏡は素顔を隱すといふ一つの道具であつたらしいが、今はそんなばかばかしい事をする役者も無くなつたやうだ。栗島すみ子さんの眼鏡は、靑眼鏡でもなく、黑眼鏡でもなく、細い金縁の近眼鏡であらう。

然し役者が眼鏡を掛けて歩くのは、折角の美貌を臺なしにするものである。日本は甚しい近眼國で、僕等は歐洲を旅行してゐる日本人と支那人の區別をするのに、日本人は必ず眼鏡をかけて、寫眞器をぶら下げてゐる、と言つた位に、歐洲に來てゐる日本人は大部分眼鏡を掛けてゐる。小さな陰險な顏に、金縁を光らした眼鏡をかけたのは、決して好印象を與へるものではない。まして低い鼻を摘み上げて、無理やりに鼻眼鏡を挾ませ、八の字を寄せてゐるに至つては悲慘である。まだロイド眼鏡の方が無邪氣だ。

西洋の女が眼鏡をかけたら、美しい女としての第一條件は既に失はれたものである。女優が眼鏡をかけるに至つては、寧ろ致命傷である。そこで斷じて眼鏡は用ひない。

然し美しい女だつて近眼に成る事は不思議ではない。ところが眼鏡を掛けると美しい顏も機械化してしまふから、物を見るに必要な時丈けに、手に持つて目に當てる眼鏡が出來た。これがロニエツト又はロニヨンである。ロニエツトは柄のついた双眼用の疊み眼鏡で、ロニヨンは柄のついた一眼用の眼鏡である。尤もロニエツトの方は、今はばあさんしか使はない位にすたれた。若い女はロニヨンを使ふ。さもなければ柄のない硝子玉丈を一つ目の窪味へはめ込む。

「四つの目は二つの目よりもよく見える」といふ諺は、近眼の女の負け惜みであるが、近眼の女はこの眼鏡といふ機械を、いかに美化しやうか、眼鏡によつていかに新しい美しい身振を作り出さうか、その持ち方、目に持つてゆき方、等に並々ならぬ苦心があるらしい。

柄のついたロニエツト又はロニヨンは、手に

持つて必要な時丈に目に當てて覗くのであるから、その手はごく贅澤な、暇な手でなければならぬ。常にこの眼鏡を玩具にしてゐる丈の、餘裕のある手でなければならぬ。この眼鏡を手で玩ぶ丈でも、貴婦人には相當な仕事であらう。芥川龍之介の名作「動物園」の中では、ロニエットを持つた貴夫人を、白孔雀に例へた位である。そこで今日でも舞臺に出てくる貴婦人は、必ずこの柄付眼鏡を手に持つて、上品とか高貴とかの象徴にする。僕にはこの眼鏡で覗かれる位氣味の悪いものはない。かうなると眼鏡は必ずしも近眼の爲ではなく、伊達の爲である。

ところが眼鏡にもう一つ、硝子玉丈のものがある。これは目の窪味へはめ込んで、上下の肉の壓力で抑へるもので、日本人には使へない眼鏡だ。この眼鏡は元來一方の眼が悪い人が、その眼にだけ當てるものである。僕はある日本人が献立表を讀むのに、この眼鏡を右の目に當てて、左の目を閉ぢて見てゐるのに會つた事がある。そんな無理をしてまで片眼鏡を使はなくても好ささうなものだ。この眼鏡は兩鏡用とまるで違つた性格を現す。酒麗た人、氣取つた人、遊び好きの人に近い社會的階級の印象を與へるものである。この硝子玉が最もよく似合ふ女は、斷髮を男のやうに撫でつけて、黑づくめのスモオキング、ジヤケツトに近い仕立の衣裳をつけた、近代美人に限るやうである。

かういふ眼鏡をかけたり、外したり、或は疊んだロニエットを開いたり閉じたりするのも、女の一つの技巧である。言葉と沈默、意思と嫌惡等にそれぞれの力と色合をつけるのは、この種の眼鏡の扱ひ方による處が多い。目に當て方の早い遲いによつても、神經質や不安や焦燥が現れる。眼鏡を通して見る眼が、無遠慮であり、批評的であり、嘲弄的であり、或は熟慮を現すのも、日常經驗する處だ。眼鏡はかういふ自負心のショオキンドオのやうなものである。

ロニエットやロニヨンは、貴婦人の手すさびに近いが、現代の女はそんなものをもて遊ぶ餘裕のある手は持たない。そこで反つて鼻から耳へかける輕い眼鏡が多く用ひられる。ロイド眼鏡がこれである。尤もさすがに花の如き夜會服に、眞黑なべつ甲緣のロイド眼鏡を掛けたのは、映畫の上でも見受けないやうだ。この眼鏡の特色は、精神的、理智的、特異的であり、新しい經驗を求めて、既成道徳の勿體ぶつたロニエットを一蹴したものである。

日本の女の眼鏡は金緣か、たまに緣なしばかりで、白く小さい顔に金を輝かすのは、僕などにはいかにも無刺戟無感覺である。栗島すみ子さんの素顔の眼鏡も、僕には寧ろ痛々しく見える。惜むべきものは美人を臺なしにする近眼である。

薄物

日本の女の夏の着物が次第に薄くなつてきて、風俗を害すからと警視廳が取締つたのは、昭和二年の夏である。昭和三年の夏は大目に見るといふ方針だと新聞に出てゐたが、生憎大に暑くない夏であつた。いくら女の着物が薄くなつても、乳房でも腰でもおかに透かして見せやうといふ流行ではあるまい。いつも乍らお上の御苦勞は絶えないものだ。

尤も帝國美術院第六回美術展覽會に、木谷千種作「眉の名殘」といふ評判の繪があつたこれは黑い薄物を着た女が、眉を剃り落さうとする夏姿で、その黑い薄物を透かして、豐麗な新妻の乳房でも腰でも股でも見せやうといふ、極めて卑俗な繪である。歐洲の二三の

雜誌ではこの繪を轉載して、日本で展覽を禁止された風俗壞亂の繪である、と吹聽したものがあつた。

薄物をつけた女の美は、實は薄物を透かして見せた肌の色ではなくして、薄物の中に漂ふ女の體の影繪である、と僕は思ふ。

歐洲の女の衣裳の美は、必ずしも斷髮と短い裾には限られてない。今日でも「王女服」と呼ばれてゐる、裾が花のやうに開いて、房房とした、薄く白い、アンピイル式の女の衣裳が、再び悦ばれさうな流行が起りさうである。この衣裳はすでに古い型である。けれどもこれに新しく加へられた美さは、その霧のやうな衣裳を透かして見せる、すらりとした若い女の肉體の影繪である。肉體を影として衣裳の中に浮ばせやうとする逆光線の效果である。勿論かういふ衣裳が、不健康に肥つた體の女に似合ふものでない事は、言ふ迄もない。

僕等はリリアン、ギッシュ孃の映畫で、逆光線で映した美しいこの女優の肉體の影繪を見る事がある。白くほのぼのとした光の渦の眞中に、漂ふやうなギッシュ孃の姿は、逆光線を巧に利用した薄物の效果であるに過ぎない。

薄物を着た女の美は、肉欲的のものではなくして、もつと印象的のものである。黑いエルで隱した女の顏や、黑い帽子に隱れた女の眼が、ひどく誘惑的であるやうに、黑い薄物が女の體を美くする事はいふまでもない。日本の女も薄物を着る以上、肉體の色を透かせないで、肉體の影を透かしてはどうかと思ふ。意氣な薄物の愛好者の一考を煩したいものだ。

「英吉利の手紙」

我日本帝國にも、昭和三年九月一日から花柳病豫防法が施行される。その細則を讀んでみると、接客業者はなるべく客をしてサックを使用せしむべし、とある。今迄は日陰者のやうなルウデサックも、これで法律の認める立派な國民衛生器具になつた譯である。

我國の花柳病の蔓延は識者の歎く處だが、その割にこれに對する國民の恐怖心は餘り強くないやうだ。世界の歷史で歡樂の限りを盡したやうな十八世紀の巴里の模樣を調べてみると、反つて花柳病に對する恐怖心は頗る大である。西洋好色一代男と呼ばれて、女を犯す事數知れぬカザノオフアすらも、決してよその疑惑では眠らなかつた、と自傳の中に書いてゐる。そこでどういふ豫防方法が最も多く用ひられたかといふと、これは今日の日本の花柳病豫防法細則の示す通りのサックの使用である。どの巴里の娼家にも、この豫防具が「一と倉あつたとさへ言はれてゐる位に備へつけたものである。

カザノオフアの自傳によると、ある旅からマルセイユに歸つてくると、早速遊びに出掛けた。すると女がこの「英吉利の手紙」を出したので、大に安心したと書いてある。尤もその質が惡いといふと、女は「一個三法の上等品」を賣りつけたが、これは町で買へば一個づつしか賣らぬと言ふと、拔目のないカザノオフアは、安いと思つたか一打すぐ買つた、と自ら書いてゐる。佛蘭西人はそれを「英吉利の手紙」といふが、英國人は逆に「佛蘭西の手紙」と呼んでゐる。笑止の至りだ。

ところがこの「英吉利の手紙」は、實はチヤアレス二世の時に、倫敦にゐたドクトル・コントンといふ人の發明したものである。從つて元來は「コントン」と稱すべきものだ。初めは小羊の盲腸を切つて、これを上等の油と糠で軟く薄くなめしたものである。尤もこれは乾くとじきに裂けてしまふ欠點があつた。これが大に用ひられてくると、千八百二十六

年に、羅馬法王レオ十二世が告諭を發して「これ神の攝理を妨ぐるものなり」と大に攻撃してゐる。成程「コントン」も大に惡用された傾向があつて、道德論直操論者から批難の聲が起つたが、どんなものでも惡用されないものは世の中にない、その位ならいつそ頭から冠るコントンを拵へるが好いと冷笑した醫者がゐる。

かういふ時代に、花柳病を必ず癒すといふ惡德醫者の橫行する事も、東西古今どこも同じである。十八世紀で最も有名な醫者は、プレワアルといふ男で、田舍で開業してゐたが、後に巴里で解剖學を研究して、千七百五十年にドクトルの稱號を得た。それから二十年間花柳病専門の醫者として、必ず癒る事請合といふ藥を發明し、全快八千人、賣行印度米國に及ぶと稱した。それは「溶解水」と稱する石灰水に昇華物を溶かしたいかさまもので、遂には梅毒の豫防まですると言ひ觸らした。そこで宮廷方面でも大に興味を持つ者が出來て、遂にこの醫者を宮中に呼び寄せ、ある施療院に入つてゐたひどい梅毒患者の賣春婦を引張り出して來て、リシユウリウ將軍其他多くの貴族を立會人として、その面前でプレワアルに自分の藥を飮ませて、梅毒が傳染するかどうかの實驗をやつたさうである。巴里市廳でも本氣にして、男六人女四人を實驗に供した處、遂に巴里醫科大學は醫師名簿からプレワアルを除名した。後に二千法の罰金まで食つたさうである。

我國にもこの類の惡德醫者は近頃特に少くないやうだ。

花火

西洋人の見た日本の風景には、富士山でも藝者でも町でも、必ず之に描き添えるのものに提灯がある。なる程日本程提灯をぶら下げる國は世界にない。そのくせ國旗を掲揚する事には甚だ無頓着で、國祭日でも中々旗は出さないやうだ。國旗の好きなのは米國人のやうである。紐育あたりの空に聳える灰色の大建築物に、小さく、然し極めて鮮明に翻る星條旗の色は、一種の潑剌たる米國的感情を喚び起させる。そして何か事があればすぐ旗を揚げる。それが日本では何か事があれば、すぐ提灯を出させる。毎年强制的に新しい提灯を買はせる。提灯も綺麗な小さい日本家屋の入口にぶらさげてこそ、果敢ない日本的センチメンタリズムもあるが、西洋風な大ビルヂングまで提灯をぶら下げるに至つては、悲慘である。

提灯も好きだが、花火も日本人の好きなものの一つである。尤も花火は夏の夜を樂む國には今でも好まれてゐるやうだ。僕はいつでも兩國の川開きがくる毎に、一夜にしてあの贅を盡して數百金の金を散じる花火を考へると、何だか日本が西洋のバロック時代に遡つたやうな氣がする。

歐洲では花火をアラビア人が發明したものだと言つてゐる。いづれにしても陶器や、絹や、土耳其風の椅子や、水煙草と一緒に、東洋から傳へられたものの一つであらう。歐洲で花火が最も悅ばれたのは、十七世紀、十八世紀の專制時代である。王侯貴族の少數者の祝典や宴會には、必ず夜になれば花火をあげて、一瞬間に千變萬化する贅澤な風物を樂んだものである。又この花火が餘程大がかりであつたと見えて、その花やかな夜宴の模様が、必ず詳細に書き留められて、皮表紙の立派な文書になつて、虫に食はれ乍らも今日に殘つてゐる。繪で見てもその時代の佛蘭西の花火は、決して兩國にも負けてゐないやうだ。その形

からいつても、火の瀧、輝く太陽、明い噴泉、燃える水、寓話、古代の神々、或は幸福、運命、勝利を表象したものがある。

この王侯貴族時代が次第に力を失ふに及んで、花火も大に衰微して、之に代るイルミネエシヨンが現れた。耐風蠟燭、ランプ、松明等を使用して、建物の線に點々と火をつけたり、祝賀の文字を現したりする。市民の奉祝にも自分の家の屋根や入口やバルコンに蠟燭のイルミネエシヨンをつけた例があるが、暗い空と狹い町に赤く光る蠟燭の火は、西洋の浮世繪を見るやうな心持がする。

花火は祝賀、歡迎に多く用ひられたが、ルイ十五世時代の宮廷では、森の深い宮苑に催された夏の夜の宴會に、硝子の燈籠や蠟燭を澤山に用ひられてゐる。夜十時過ぎになつて食事が濟むと、ルイの愛妾ポンパヅウルが人の目を奪ふ裝ひを凝らして現れて、ルイを初め來客一同を庭の森の中に案内する。その暗い森の中では、小さい子供のバレエをお目に掛ける、といふ趣向が度々あつた。來客の男や女は黑い假面でみな目を隱した。夏の夜の森を透して、小さい白い蝶のやうな子供のバレエを耀かす燈火、道々を照すランプ、吊燈籠等を想像すると、眞に十八世紀の夜といふ氣がする。

夏の夜の燈火、といふ主題で、花火も燈籠も提灯もイルミネエシヨンも加へ、日本の夜としては、攀國の兩國川開之圖から、淸方の燈籠流しの圖に至り、ついでに螢の風情も入れた丈でも、おもしろい文化史が一册位出來さうである。

女形

モスカウへ歌舞伎劇を見せに行つた左團次一行の記事が、日本の新聞にもいろいろ見えた。その一節に女形の松蔦丈の道成寺が評判で、あれが男か、とみな驚嘆したといふ事が載つてゐた。短い新聞電報であるから、この驚嘆したといふ意味がはつきり分らないが、男がうまく女に化けたものだといふ意味も入つてゐるのだらう。

日本で男が女裝して往來を歩いたら、恐らく巡査に捉るであらう。然し劇場の中なら公然と男が女裝する事を許されてゐる。獨逸で男が女裝して歩くのは、闇の中の男色專門の蔭間である。勿論女形といふものは現代の歐洲劇壇にはない。

そこで日本の女形といふものを、一種の同性性慾家と考へる事は、無理もない筈である。伯林のチイヤガルテン公園から、印刷局の傍をスプレエ河の河岸へ出やうとする閑靜な横町に、私人の經營ではあるが、堂々たる看板を出した立派な「變態性慾研究所」がある。あの研究所の一室には、特に日本の部があつて、德川時代の桐の箱に入つた淫具が、蓋をとつて、硝子箱の中に陳列してある。僕はかういふものを日本では一度も見た事がなくて、反つて獨逸へ來て見聞を廣くした。然し說明をする書生に「これはあなた方のほうがよく御存知ですから說明しません」と言はれたには僕も閉口した。

ところがこの硝子箱に向き合つた壁には、一尺四方位の大きな寫眞で、日本の有名な明治以來の有名な女形役者が、袴をはいた紋付姿で寫したものがずらりと並んでゐる。これは日本に固有の同性性慾的役者であると、麗々しく說明されてゐる。之を聞くと日本人なら、何を莫迦な、とすぐ思ふが、西洋人だと中々さう簡單にはゆかない。日本の劇場では今日でも同性性慾者が女優の代りになつてゐる、と早呑込みされても、どうも止むを得な

いやうである。

尤も千九百二年ライプチヒ發行の「中間性及同性性慾學年報」第四年度年報を見ると、我日本の童話の大家巖谷小波先生が、日本の男色について獨逸語の小論文を寄稿されてゐるが、その一節に

「私は女形といふものが、誰も彼も同性性慾家であるかどうかは知らないが、好んで舞臺で女になりたいといふ傾向を持つてゐる者が女形として養成されるので、かういふ人達の動作が女性的であるばかりではない、體格上から見てもかなり女性的な骨格をしてゐる事は、私にも斷言出來る。解剖學上から研究したら、きつとおもしろいであらう」

と述べられ、女形の代表者として、粂三郎(梅幸)、故人の女寅、福之助、源之助の寫眞を掲げ、前二人は寧ろ男性的に見えるが、後二人は容姿甚だ女性的であり、その體格には甚だ多くの女性的のものを持つてゐる、と書き添えられた。

小波先生の主張されたやうな、女形の解剖學上の研究は、まだ今日までには行はれてない。松蔦の白拍子姿が褒められるのは好いが、こんな機會に獨逸あたりの性慾學者から、日本の女形の同性性慾者としての研究でも初められると困る、と僕はつまらぬ事を氣にもんでゐる。

ピアノ

獨逸フランクフルトのゲエテの家を訪問された方は、其處に二つの亞細亞的なるものを見られるであらう。一つはぢいさんの番人が怪げな日本語で部屋の名を説明する事である。もう一つは二階にあるピアノの赤い漆塗の支那模様である。

ゲエテの支那に對する興味は、よほど後年になつて起つたものである。「支那ゴシック」なぞといふ文字さへも書いてゐるが、少年時代に家にあつたピアノの支那風景の赤い繪は、別に小さいゲエテの好んだものでもなかつたらうと思ふ。

獨逸で見たピアノとして僕の記憶にあるのは、バッハの家のピアノ、ベエトオフエンの家のピアノがあり、更にワイマアルのリストの家には、プリユウトネル製のグランド、ピアノと、イバッハ製の竪臺とが置いてあつて、この二つの製作者は今日でも盛に製造してゐるから、特に親しい心持がした。リストの家のピアノは、少しも古色蒼然とした感はなく、昨日までリストが使つてゐたかと思はれるやうで、誰も一寸手を觸れてみたくなるものだ。

日本の小説にもピアノが次第に多く現れるやうになつたのは、ピアノが日本の家庭にも餘程入り込んだ證據であらう。菊池寛作「新珠」の中には、青春の男女がピアノの傍で「罪と罰」を語つて、やがて女が小曲を彈くといふ一節がある。その外中村武羅夫、三上於菟吉等の諸作家の書かれる新時代の小説に、日本の少女の一カルチアとなつたピアノが、どんな風に描寫されてゐるか、僕はよく研究してみたいと思つてゐる。芥川龍之介はさすがに珍奇なピアノの場景を書いてゐる。全集第五卷の「ピアノ」は、多くの作家と全く違つて、地震に崩れた洋館の廢墟に、無慘に押し潰されたピアノの物語である。このピアノは「蓋を開いたなりのピアノ」とあるから、明にグランド、ピアノであらう。然しこの一篇の骨子である、落ち栗が鍵盤を打つ、といふ作者の想像は、僕には餘りに纖細に過ぎるやうに思はれる。落ち栗の重さでは、餘程の重力でもなければ、鍵盤が動いて弦を打つ迄には至るまい。ましてこれはピアノの事である。作者の言ふ如く僕もリアリストとして考へると、これはきつと開いた蓋の下に曝された弦の上に栗が落ちたのか、或は弦がゆるんだ爲鳴り

かであらう。なぞと言つても、この作者が生きてゐたら、何かと僕を說き伏せてしまふであらう。

然しピアノの美さを說いた現代作家は、すでに十七八年前にある。樂器は戀人の縮姿にも等しい、と言つた永井荷風は、「樂器」といふ小品の中で、獅子のやうに前足を揃えて、長く靜にしやがんでゐるグランド、ピアノと、薄曇りの晝過ぎの光と、一輪の薔薇の花の靜物畫を描いてゐる。ピアノといふ樂器の美しさを、遠い昔に僕に敎えたのは、實にこの文章の數行であつた。

僕はあらゆる樂器の中で、最もピアノを好む。壁に押しつけられた堅牢のピアノは、無時に四角くて、荷物の箱のやうに思はれるが、どんなに小さい型でも、グランド、ピアノの方が好い。然しピアノの美しさは、確に荷風先生の言葉通りに、薄曇りの仄かな部屋にある時、薄明のやうな光の陰に置れた時のみにあつた。宏壯な音樂堂の冷い白壁を背景にして、きらびやかな振袖姿や洋裝で、幾多の聽衆を前にして彈かれるピアノは、實は最も醜い、最も憐みのない、最も冷酷な樂器である。

僕はエリザベタ女皇の美しい十六世紀の挿話を讀んだ事がある。女皇はある日の午前に、マリア、スツアルトから派遣された公使を引見して、マリアの衣裝、髮の色なぞを尋ねた時に、公使はマリア女皇が獵から歸へられると、昔のピアノのスピネツトを好んで彈かれると答へた。その日の午后である。エリザベタ女皇は一人その居間に閉じ籠つて、同じくスピネツトを彈いてゐた。マリア、スツアルトの公使は秘かに之を立ち聽きした。之に氣が付いた女皇は、直ちに彈く手をやめて、公使にかう言はれた。

「わたしは男の前で今迄に一度も彈いた事はありません。わたしはたつた一人でゐる時に自分のメランコリイを逐ふ爲に、彈くのです。」

このエリザベタ女皇の言葉は、僕等にピアノの眞髓を聞かしてくれるやうである。ピアノは實は大衆を前にして彈く樂器ではない。ピアノは唯一人、又はごく親しい友達を前にして、黄昏の薄明の中に彈き且つ聽くものである。この時こそピアノの甘いハアプに似た音は最も好く味ふ事が出來る。あらゆる音樂の陰影の、歌ふも叫ぶも囁くも泣くも笑ふも、一切を十本の指の下に自由に玩ばれるピアノは、軀こそ大いが、實は餘りにはみかみ勝な、おとなし過ぎる感傷の樂器なのである。

ショパンは嘗て、自分が世にあること、恰もコントラバスに對するヴイオリンのEの弦の如く、だと言つてゐる。ショパンは大勢の聽衆を前にした音樂會を甚だ嫌つた。大衆の前に臨して、その呼吸に窒息を感じたショパンは、巴里時代に所謂音樂會を開いた事は極めて稀である。ショパンの彈奏を巴里で聞く人は、波蘭の放浪の貴族とか、巴里の文士藝術家とか、美しい貴婦人とかの、ごく僅な人數丈が、サロン、プライエルに集つて、ショパンを取り卷いて聽いたのである。リストはこの音樂會を名付けて、「親しい集り」とも「時流の音樂會」とも言つてゐる。しかもその集りのサロンは、夕闇の如くにうす暗く、僅にピアノの傍においた燈火と、煖爐に燃える火だけが、この薄明を照してゐた。ショパンの彈き出す樂器の音は、どこから來て聽く人の耳に入るか分らなかつたさうである。その黄昏の光の中に靜に座し、或は立つて聞く人には詩人ハイネ、マイエルベエル、畫家デラクロアも入つてゐた。情人ジョオヂ、サンドの美しい姿も勿論交つてゐた。

エリザベタ女皇はメランコリイの爲めに彈くといひ、ショパンは薄明の中に彈いたといふのも、みんなピアノの室內的な親密性から

來た事である。ショパンの催したやうな音樂の集りが、今日の日本にあるかどうか僕は知らない。然しピアノは新聞社のホオルか上野の講堂でばかり聞くものと思つては、甚しい考へ違ひのやうだ。音樂の大衆化は僕の大に賛成する處だが、大衆の爲の音樂は別にある。ピアノは決して大衆の爲の樂器ではない。唯ピアノ一個として、靜な小さい部屋で愛撫すべき樂器である。それを今のピアノは無暗に切符を賣り付けては、音樂堂へ押し出さうとばかりしてゐる。

昔若い太田黒元雄君が大森の自邸で「シエンペルヒの夕」なぞを催された事がある。「夕」といふ字を使ひ出したのも、同君が初めてであらう。あの催しは彈奏者に人を得ずに中絶したやうだが、形だけは確に純なピアノの集りであつたらう。あゝいふ集りが東京にでもあるなら、僕は何とかして入れて貰へぬかと秘かに思つてゐる。

裸體寫眞

歐洲から歸つてくる人の鞄には、大概西洋の女の裸體寫眞を潜めてゐると言つて好い。或は巴里で賣り付けられたと謙遜し、又は特に苦心したコレクションだと得意がる等様々あるが、上陸の前の晩の荷整理に、悉く何處かへ巧妙に隠して、税關の目を掠め、やがて友人に秘かに披露して悦んでゐる仁も少くない。

然し多くの日本に持つて歸られた裸體寫眞は、實は極めて安價な賣春婦かモデルの繪ハガキで、薄物をはをり、靴下を脱がんとし、花を抱き、鏡に向ふ等、風俗壊亂の汚名を一歩にして逃れやうとする下劣な寫眞のみである。

今日の歐洲でいふ裸體寫眞は、全くこの種の古くさい趣味を離れたものである。十九世紀末では、靴下さへ示した繪は、もう卑猥とされたものである。大戰前の女の海水浴着は、裾の長い外出着と大差ないものであつた。けれども今日の舞踊とスポオトとレビユウの世界では、女の裸體そのものは、肉慾を示すものではなくして、青春と健康とを匂はせるものである。女の裸體はもう不思議ではなくして、自明のものになり、新しい裸體寫眞が、無禮なもの大膽なもの、まして肉慾的なものといふ觀念は、全く消え去つたものといつて好い。

僕等は今日名立たる歐洲の貴婦人が、黒いレエスに裸の胸を被ひ、そのレエスの雲のやうな模様の中に、微に乳房を匂はせる肖像寫眞を撮影させてゐるのを、屢々見掛ける。これが昔ならば寶石を輝かし、眞珠を頸にかけ、裳を長々とひいて寫すべき寫眞の主である。スポオトの女が、昔の女の想像も出來ない程に腕を露はし、股をまる出しにしても、日本でさへ少しも怪まなくなつた今日、肖像寫眞として半身程度の裸體寫眞位は、或は近い將來に日本でも寫し出すかも知れない。

裸體寫眞は寫眞技術上の光と影との錯落によつて、女として、時と處とを絶して、一つの神の如き存在を示さうとするものである。今日の裸體寫眞の特色は、出來る丈若く、青春の雰圍氣にあらうとする處にある。妖婦型や母性型や貴婦人型といふ概念にはもう捉はれない。少女でも中年の女でも、相通じて「青春の女」としての共通な型に入らうとしてゐる。結婚してゐる女でも構はない、女として、青春の女としての雰圍氣を出來る丈永く保つて、これを肉體の上に現さうとするのである。これを保つ手段は、健康と洗練の外はない。その健康を最も助けるものは、光と空氣のみである。歐洲の舞踊の練習が、裸で、太陽の眩しい草原や砂濱で行はれるのも、これから來てゐる。かくしてスポオトを愛する女が一日毎に殖え、戸外に肌を露はす事が多く

なるに從つて、眞に美しい裸體が發達してくれば、やがて女の寫眞はすべて裸體のものになるかも知れない。

女の裸體は今日まで唯彫刻と繪にのみあつた。然し寫眞撮影術の發達は、裸體の日常生活に於ける觀念の變化と共に、新しい裸體寫眞を作らうとしてゐる。この新しい裸體寫眞こそ、日本の旅行者に好んで買ひ求められる春畫寫眞ではもうない。

扇

扇を主題にした小説には、芥川龍之介に「湖南の扇」がある。凄艶な支那扇を點綴したものとして、珍しい作品だ。「枕の草紙」を讀むと、日本の古い扇の風情は、甚だ美しく且澤山に描かれてゐる。三重がさねの扇を「なまめかしき」ものに數へ、扇の骨は、青色の紙に赤い骨、紫の紙に綠の骨を勸めてゐる。その外、香染の扇、扇に隱した童女の顏、枝扇の戯れ等、この頃の宮廷生活にも扇は大事な物になつてゐる。

「美しい女の扇は、世界の王笏だ」といふマレシヤルの言葉がある。この美しい女の持つ扇の悲劇を描いて、オスカア、ワイルドの「ヰンダミア夫人の扇」に優るものはない。この芝居の第三幕を讀むものは、一本の扇がいかに人生を飜弄してゐるかに驚嘆するであらう。

扇も東洋から初まつたものだ。蓮や椰子や芭蕉の葉で拵へて、うるさい虫や强い日光を遮るものが、日傘に先立つて出來て、これが扇の初まりであらう。第五世紀の頃には、すでに孔雀の羽根の扇が印度に出來てゐる。埃及で孔雀の扇は、王様の印であつた。羅馬では自分であほがないで、若い女の奴隷が寶石を鏤めた重い柄の扇で、主人に風を送つたものである。

歐洲に扇が傳つたのは、十四世紀である。羽根や眞珠や寶石で飾つた扇が、貴婦人に用ひられたが、十五世紀に支那の扇が西班牙の宮廷に傳へられて、これが全歐洲を風靡した。フランク一世時代には、扇を「秘密」と名付けて、女が帶に垂らす純然たる裝飾品乃至手慰み品に成つてゐる。歐洲の中世の女王、貴婦人の間には、扇の中に鏡を仕込んだり、青貝をはめたりして贅を盡したものが流行した。扇が本當に一般の流行になつたのは、ルイ十四世時代であるが、抑々扇は冬用ひるものか夏用ひるものかといふ問題は、常に女の間の議論の種になつてゐたさうである。ロココ時代の象牙骨の扇には、ワトオ、ブウシエ、ジロオ、ルブラン等の一流の畫家が繪を描いてゐる。近代でも扇の繪を描いた畫家に、ドカやマネエやピサロがゐる。日本の古い扇に大家の筆の殘つてゐるのと全く同じである。

續いて執政官時代になると、小さい扇が流行した。この時代には女がみんな圖々しくて、顏を紅くするやうな事がなくなつたから、顏を隱す大きな扇が不用になつた、と言ふ人がある。

扇を最も愛用するのは西班牙の女である。今日でも西班牙の女といへば、黑いレエスに扇をすぐ考へる位に、西班牙の風俗になつてしまつた。

西洋の羽根の扇はこの世で重くないもの、移氣のもの、悪戯じみたものの象徴である。生きたもののやうに體に近く或は遠く飛び乍ら、浮氣な月の喜劇、無駄話、戯れ、しなだれかゝる心持を囁き語るものである。ある時は媚めかしき目を隱し、男の頬を撫で、男の鼻をくすぐり、口よりも多くのものを言ようとするのである。

西洋の扇に比べると、日本の扇はずつと色氣がない。那須與一の扇、梢の枝を載せた白扇、緋の袴に檜扇は、餘りに冷く感じられる。

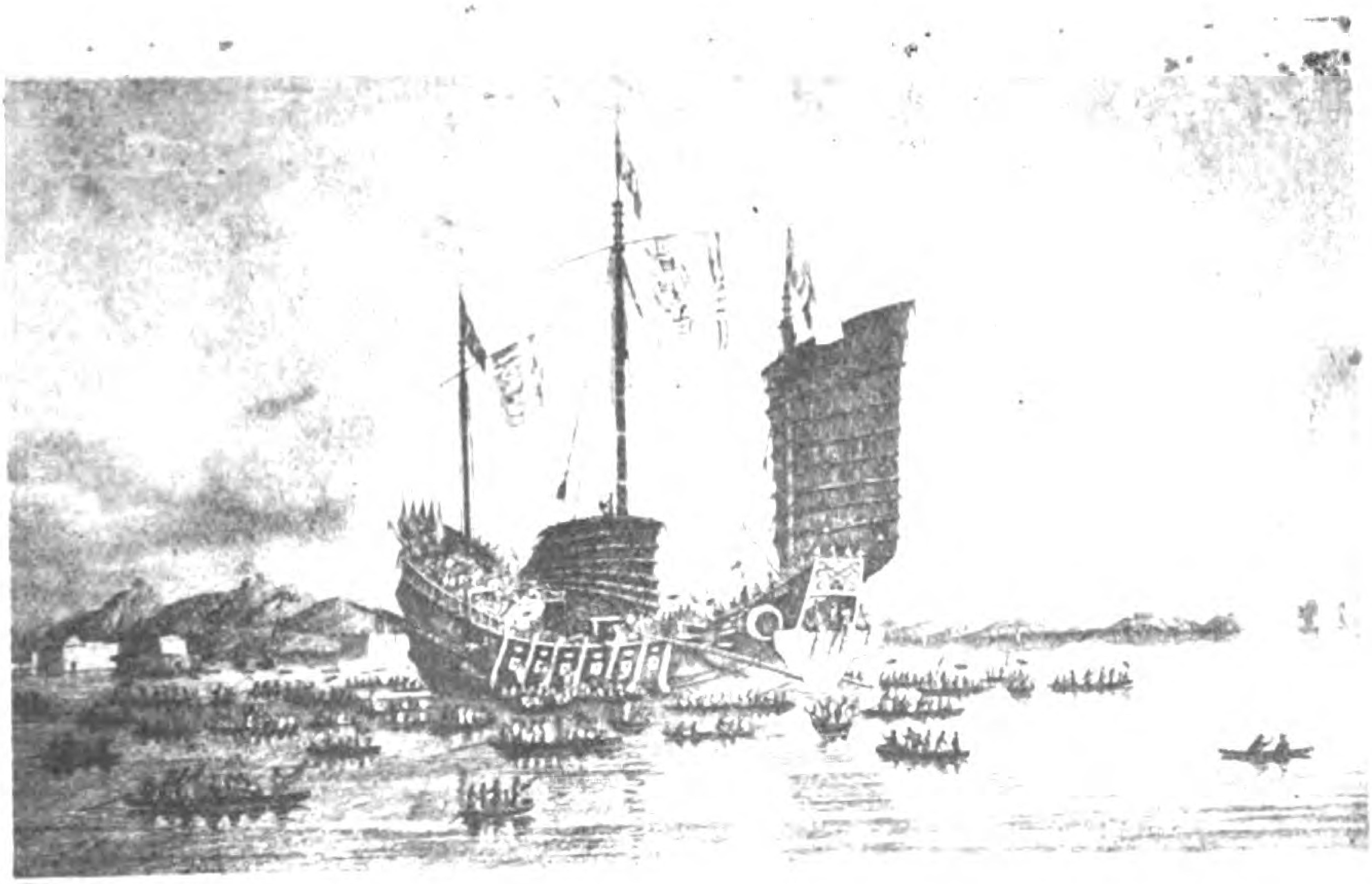
（昭和三年八月）



本社特派員谷讓次氏夫妻がロンドンにおける市村羽左衛門氏夫妻をパアク・レエン・ホテルに訪問した時の記念撮影である。詳しくは本號所載「新世界順禮」——「黄と白との群像」を參照あれ。

寫眞向つて右より

谷　和　子氏
羽左衛門夫人
市村羽左衛門氏
左端　谷　讓　次氏



琉球今昔圖

伊波普猷

進貢船の那覇港解纜

近頃、金田一京助君に拜借した英國ビーチー提督の Narrative of a Voyage to the Pacific and Beering's Strait（大平洋及びベーリング海峽航海記）に Departure of a Loo Choo junk with tribute to Pekin といふ見出しのついた挿繪があるが、當時の光景を眼前に髣髴たらしめるものがある。これは本文中の記事にも、前の日に積荷してゐた一艘の大きなジャンクが澤山の小舟に引船されて、港内から沖に出たが、或る琉球人がこれは二年に一度琉球から福建に送られる進貢船であるといつて書いてあるから、西暦一八二七年の五月廿一日に、英人が實況を目擊して寫生したものであることはいふまでもない。唯一艘だから接貢船ではないかと疑へないこともないが、進貢船も二艘共同日に出帆したのではなく、小唐船はいつも大唐船が福建に着いた頃に出帆したとのことだから、やはり進貢船と見る方が正しいやうに思はれる。

この繪の右の方に見えてゐる砲臺みたいな所は、三重城で、それに相對して右の方に見えるのは、四百年前倭寇に備へる爲に築いたヤラザモリ城である。そして後者の入口に近い所に、之を築く經緯を書いた琉球文の金石文が立つてゐるが、今は磨滅して、僅に十數字を留めるのみである。兩者の間の



河口のやうな所が、所謂那覇江である。三重城の後に、城壁らしいのがあるのは、臨海寺（俗に沖の寺といふ）である。この建物は、其後間もなく取拂はれたが、この外廓はつひ三十年前までは原形のまゝで遺つてゐた。

盛んな見送り

ビーチー提督より十年ほど前、即ち西暦一八一六年に、琉球を訪問した英國の艦長バジル・ホールの Account of a voyage to the discovery of the west coast of Corea, and the great Loo Choo island （朝鮮の西海岸及び大琉球島探検航海記）の挿繪（原本のは彩色が施してある）で、ホールの一行を臨海寺で饗應した琉球の大官が、英人の歸艦を三重城で見送つてゐるところである。冊封使や進貢使の見送りの光景も多分こんなものであつたらう。

ホールが、歸途セントヘレナに寄航して、ナポレオンに會ひ、琉球三百年の平和の歴史を說明して、この島では古來かつて戰爭をしたことがないと語つて、千古の英雄を驚歎させたことは、人口に膾炙する所であるが、この會見談は、ホールが一八四〇年に、其の航海記を廉價な版で再版に附したものに始めて附記されたものである。

因にいふ。三十年前文科大學で教鞭を執つて居られたバジル・ホール・チャムバレン氏は、この艦長の外戚の孫に當る人で、子供の時分、この本の珍らしい挿繪を見たのが動機となり、後日日本に渡來して、日本語及び琉球の研究に指を染めるやうになつたといはれてゐる。



畫像石のある古墓

鳥居龍藏

私が前號に紹介した同じ鞍山滿鐵苗圃內を大正十三年十月に馬で地ならしをして居つた際、遇然或石につき當つたから、不思議に思ひこれを堀つて見たが、地下に綠泥片岩の板石を立てつらねてあるのを發見した。そこでこれを一々堀り上げて見たが、その石面には一々圖畫が彫刻せられ、それが都合九枚からなり、幅の狹い石の傍には切目がつき、それに幅の廣い石が差し込まれる樣になつて居り、而して並列した九枚の石の前には大きな薄い石が置かれてあつた。上の寫眞は當時地上に畫像石を取りあげ、同苗圃係の大西氏がもとの儘にならべて見て撮影したものである。

この畫像石のことが當時名高くなり、終にこれが運ばれて大連滿鐵本社に行き、今は同圖書館の保存する所となり、今日これは何に用ひたもの？　その畫像石の年代如何？　等に就て種々に論議せられて居るのである。私はこの畫像石に就て近頃著した『滿蒙の探査』のうちに聊か記述して置いた。

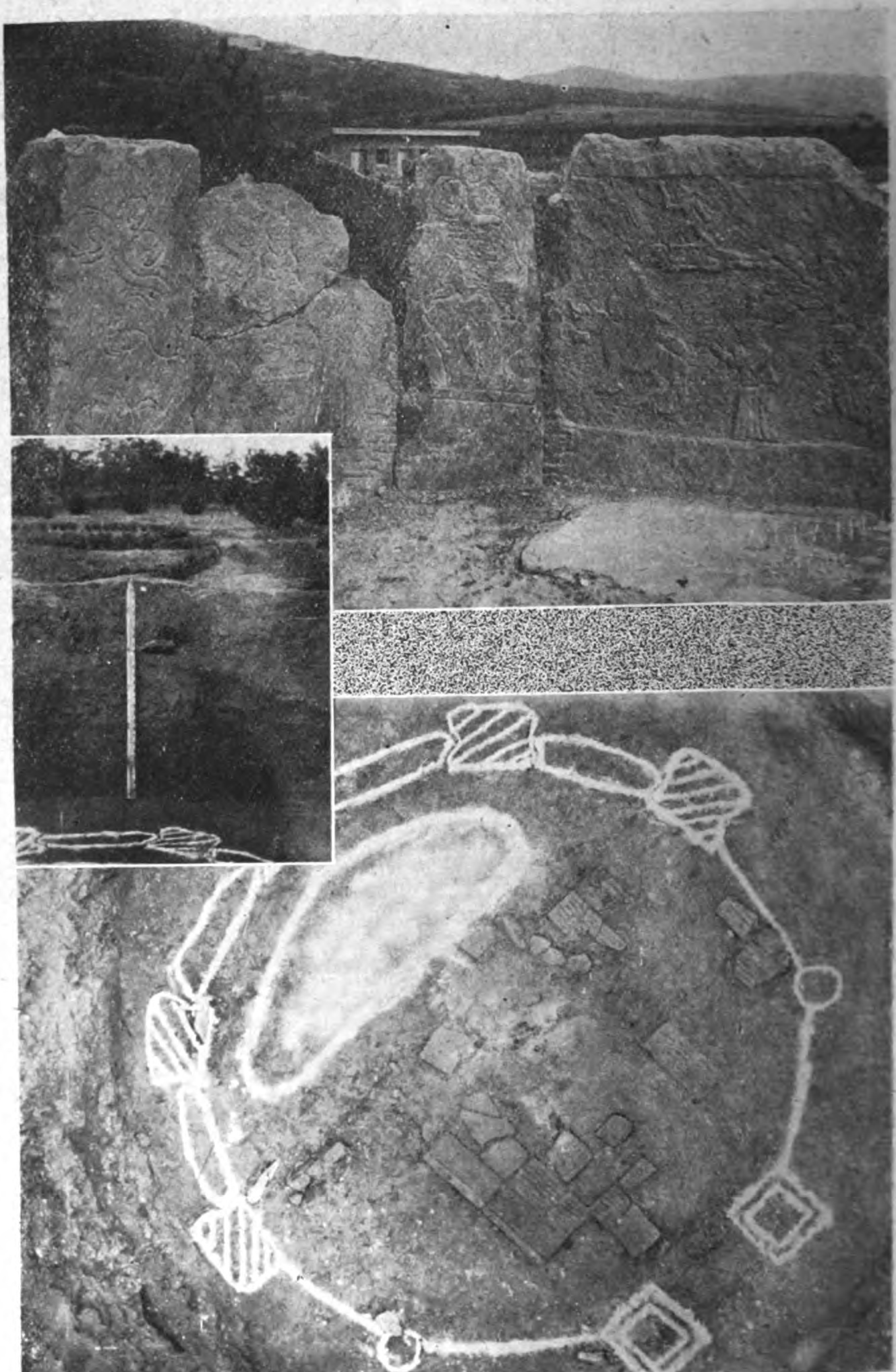
私は今回この疑問の畫像石のあつた場所を探ぐり調べたく思ひ、當時の大西氏その他の加勢を得て各所を發掘したが、僅かに四五年か經過して居らぬに拘らず、容易にその場所につき當らない。漸やくにしてその位置に堀り當てた。これは即ち左の寫眞であつて、中圖は深さと位置と周圍の環境を示したもの、下圖は上からその遺蹟を撮影したもので、白色の輪廓は殘存せる基礎石から推考して大西氏と共にこれをもとに復えしたものである。九枚の石の印は即ち畫像石そのものである。

これで見ると、此處は地上から一メートル一五程下にあるので大正十三年の當時は畫像石が九枚許あつたが、殘存物の上から調べると、尙ほその外に數枚はあつたがすでに古い時代に一度發堀せられたらしい。そして一方に門の樣なものがある。門に接した所に塼で棺が設けられて居り、その附近から今回人骨の破片が出て來た。後には一枚の石が敷かれて居る。位置は入口と棺は稍や正しく南北に面して居る。この遺蹟の形狀は八角形を呈し　直徑は南北二メートル九五、東西幅三メートルある。

以上から見ると此處はまさしく墓であつて、南に門を設け、その周圍　ストンサークル狀に畫像石がたてられて居つたのである。

この畫像石古墓は、私が前號の本紙で紹介した十字形の出た古墓と同一場所のグループ內に存在する（兩者の距離一二〇メートル）もので、兩者は等しく八角形の墓式であつて、時代はまた同じく遼代（契丹）のものであろ

（前號の「咸平元寶」は「咸平元年」の誤）





1

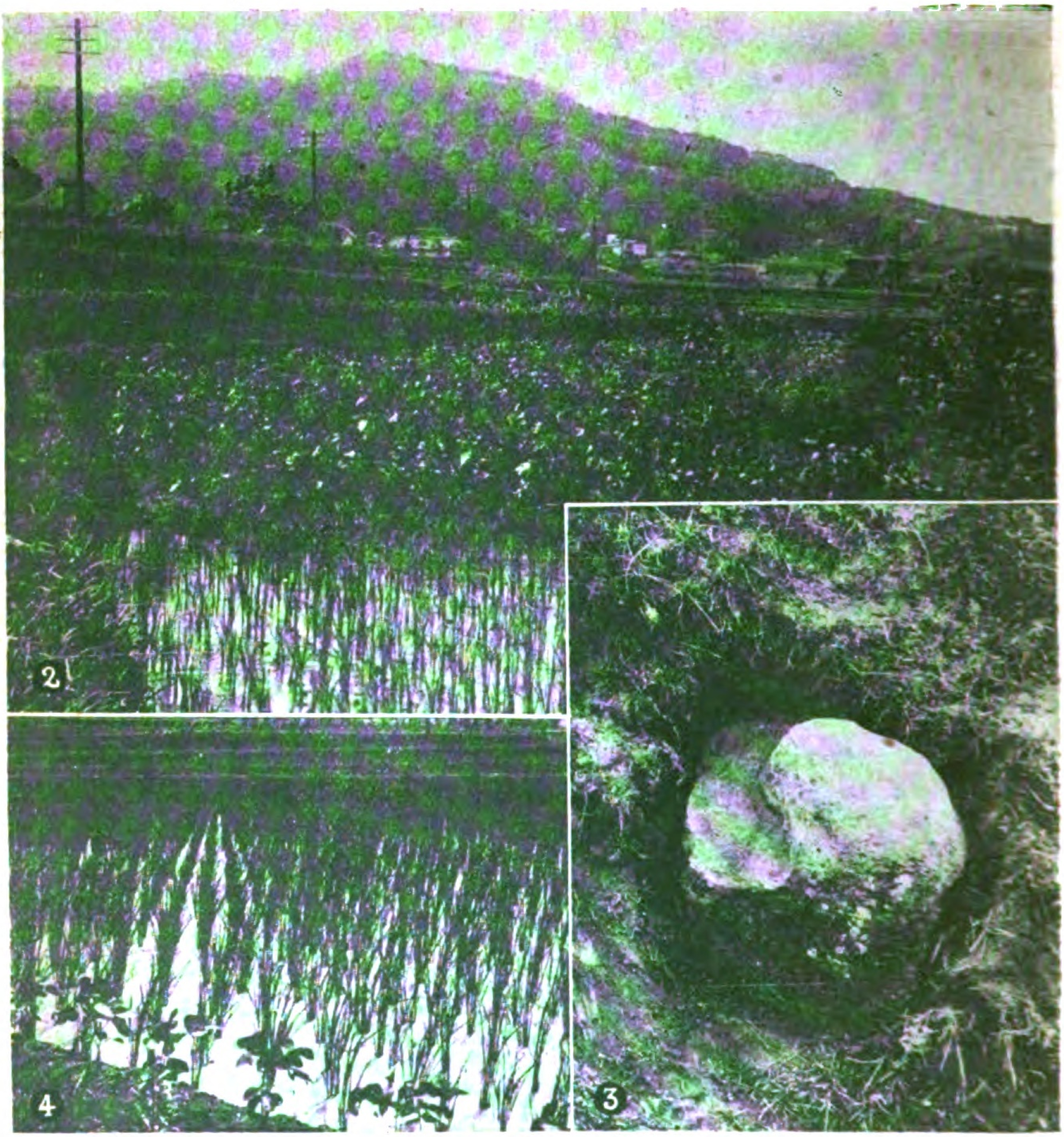
備後の國分寺遺跡

西村眞次

國分寺の研究は近年段々と進んで、殆ど半數は遺址が明らかになつた。私は此夏備後の國府や國分寺を研究して見たが、少々は面白い材料が見つかつた。備後の國分寺は在來深安郡御野村に現在の國分寺がある爲め、そこが昔から國分寺のあつた場所のやうに信ぜられてゐたが、そこは國府のあつた蘆品郡の府中から五里ほども隔つてゐて、國分寺建立の目的に副はないやうに思はれる。即ち國府の裝飾にはならないやうに思はれる。

で、私は其遺址を他に求めて見たが、蘆品郡栗生村のトロモ附近に於いてそれらしいものを見出した。こゝはこれまで國分尼寺の址といはれてゐたが二三の瓦しか今までは發見されなかつた。また遺址もどこらであるかはつきり分らなかつた。で、今回、色々研究の結果、目星をつけて掘つて見たら布目瓦がどつさり出て來た、巴瓦も唐草瓦も共に古い型式のもので天平時代のものと斷言するを憚らない。

トロモには『寺屋敷』といふ字が殘つてゐるが、そこが主な建築物の



あつた場所であらう、また『塔田』といふ場所がある、塔婆の立つてゐた場所であらう。『門田』といふのは門の立つてゐた場所であらう門田以北を『垣の内』といふから門は南大門であつたと思はれる。かうした建物があれば自ら礎石がなければならぬので、それを探したら川の岸で二個計りそれらしいものを見出した。

かうした次第で、私は栗生村大字栗柄小字トロモが事によつたら當初の國分寺の址でないかと思ふのである。

【寫眞説明（一）は國分寺址の布目瓦の色々（二）門田（三）小川の岸にある礎石（四）塔田

機械音樂器

……本號八ポイント欄參照

鹽入龜輔



（一）はレニングラードのテレミン教授が伯林で「エーテル波音樂」の實驗をした席上、自作のセレナーデを演奏してゐるところである。右側に立つてゐる棒はアンテナで、之に對して手でエーテル波を振動させて音の高低强弱を調節する。（二）はエーテル波音樂の發生裝置と受信裝置である。（三）は無電式ベルトラン・オルガンである。

八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、普く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隠れたる智識と漏れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の變名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以内にコンデンスして頂きたいことを希望する。

「日本村」の話
—黒海遊記の一節—

尾瀬敬止

日本は世界的になつた、五大強國の一つになつた、まさに東洋諸國の覇王である……なんかんといふ聲を、近頃よく聴く。その鼻息の荒さ、あな恐ろしとでも言ふべきか。

今紹介しようとするのも、さういふ日本の豪さうな事なのである。いや、大して豪さうな事ではないかも判らない。だが、荒い鼻息で蠅の一疋ぐらゐは吹き飛ばせさうなものがロシヤにある。黒海の畔にある東洋的な大植物園——いはゆる『日本村』がそれだ。

序に言つておく。コーカサスの一部である黒海附近は、ロシヤでももつとも風光明媚であるとされてゐる。あつたかい氣候、日あたりの美さ、すが〱しい大氣、そして、すつきりと晴れ渡つた空の色。あの、北の方、モスクワあたりでは雪がしん〱と降つてゐるのに、こゝ、南の方では、赤い薔薇の花がうつくしく野に咲きみだれてゐる。死んだトルストイも、誕生百年と聞いて目をさまし、自分の若い日を思ひ出してゐるかも知れぬ。まことに、この黒海の風景を、誰かゞサウエート共和國の「眞珠の鏈環よ！」と叫んだのも、あながち無理だとも考へられまい。

×

黒海のちよつと東南に當つたところにバツームといふ港町がある。試みに、自働車をブーブー唸らせながら、海岸通りをまつしぐらに郊外へと疾驅して見給へ。ものゝ一時間半も飛ばすと、道の片側に、日本のそれとほとんど同じやうな杉の並木を先づ見る。さゝやかながら蜜柑畑もある。茶畑もある。だが、まだ『日本村』といふ資格を有つまでには至らない。そして、なほ三十分も過ぎると、われ〱はすでに目指す植物園に到着してゐるであらう。

入口の柵をぬけて、阪道を登らうとすると、右手に番人小舎と言つたやうなものがある。これは、實は入場切符の賣場で、「園内の案内記をお求めの方は……」などと書いた札も出てゐる。でも、その小いさな窓口を覗いたつて、本當に人ッ子一人見當らない。こゝいらも、ロシア式と言ふのか判らないが、兎に角あたりは閑々寂々たるものである。

前日が雨降りで、おまけに地が赤土と來てゐるので、急勾配の阪道はなか〱骨が折れる。一歩進んでもツルリ、一歩進んでもツルリといふ具合に、きはめて滑らかなのだ。しかし、やつと峠見たやうなところまで上が

ると、そこからは眺望が素的だ……急に天地がすつかり拓けでもしたやうに。バツームの黒くけぶつた町が背後に在る。人家が黒點を描いてゐるチャルコ村は前面にある。その村のはづれには磯があつて、波がのべつに白く砕けてゐる。そして、對岸の『綠が岬』に何か語りかけてでもゐるやう。

暫らくゆくと、今までどんよりとしてゐた空はカラリと晴れた。日光は、松や杉の幹の間から洩れて、赤土道の上をあかるく見せる。落葉を踏みながら歩いてゐると、頭の上では名もしらぬ小鳥がチ、チ、チとばかり啼いてゐる。足許の草むらの中からは、尾花の白い花がひよろ〳〵と伸び上がつてゐる。何んだか、莫迦に靜かなやうな氣持。また、莫迦に淋しいやうな氣持。すると、「此處はもうロシヤでもなければ、コーカサスの一角でもない。自分の生れ故郷である――京都の山の中なのだ……いや、少くとも、かういふヒツソリとした木の蔭までは、革命軍の勇ましいラツパの音は聞えて來なかつたらう」、などとも考へられて仕方がなかつた。

×

われ〳〵は、とある小高いところに、華奢な展望臺をもつ白堊の洋館を見た。正面の壁の上には、『1892』——といふ創立の年が刻み付けてある。植物園の事務所兼標本部と言つたやうなものなのだ。

玄關の前に佇んでゐると、アバタ面に鼻眼鏡をかけた園長らしい人が出て來た。かれはこの植物園の沿革史と言つたやうなことを説明する。それに由ると、實に七十町歩の面積ある園内には、殆んど全世界の植物が集められてゐるさうな。アメリカのものもあれば、オーストリーのものもあり、ニユージーランドのものもあれば、支那のものもあると言つた風。しかも、日本ものが一番多く、優に歐米を凌いでゐるとは一寸愉快な事ではないか。

園長に導かれて、玄關からすぐ二階へ上がると、右手の部屋の中には白く塗つた棚が三つ四つあつた。棚の上には幾つかのアルコール漬けのガラス罎がきちんと並んでゐる。窓の近くおかれた棚の傍へゆくと、オールド・ミスといつた感じの婦人が一つの罎をとり上げて、

「これは日本の金柑です」

と説明する。彼女はおそらく自分達が日本人である事をとつくに知つてゐたのだらう。で、ソンナ事をわざとらしく、自慢さうに言つたのであらうが、これでは先生から理科の話でも聞いてゐる小學校の生徒見たやうだ。だが、默つてゐると、それからそれへと色んなものを見せてくれる。ところで、どの罎にも白い紙が貼つてあつて、「キンカン」だの、「ミカン」だの、「ビワ」だのと書いてある。しかも、それが日本語の發音どほりになつてゐるのには些さか感心する。さうかと思ふと、片隅にある木箱の中には土だらけのサツマ芋が轉がつてゐるし、向ふ側のテーブルの上には花か何かの模樣をきざんだ竹筒が置いてあつた。

×

この植物園の事務所兼標本部を出て、奥の小道にかゝると、そこはもう全く日本的風景だ。三四町も歩いたかと思ふと、

「こゝから日本の部になります」

と、例のオールド・ミスは言ふ。見ると、道の片側には茶の白い花が咲き、崖下には熊笹の青い葉がそよぎ、一方にはすばらしい竹藪もある。だが、私をもつと驚かしたのは、日本式の庭園が立派に出來上つてゐる事で

あつた。茅葺きのいきな門を入ると、つゝじが小いさな花をつけ、楓がまつ赤に紅葉してゐる。眞ン中には、池があつて、その向ふには、阿亭(ちん)もあつた。聞けば、池の燈籠には、灯がともされる事もあると言ふ。どんな青い瞳(ひとみ)をした佳人が、そゞろ歩きをするのだらう、などと考へてゐる時、パラ／＼と雨が落ちて來た。

で、ちよつと遠くに見える監理人の小舍へと急いだ。そこには如何にも人の善さゝうなお爺さんがゐた。かれは、慇懃に椅子を勸めたりしたあとで、「俺たちがウンシウ・ミカンを喰べられるやうにして下さつたことを、日本人に感謝しますぞ」などと言つた。その話によると、今まで植物園には三人の日本人が働いてゐて、內一人はロシヤ人の妻君を貰つて蜜柑を栽培してゐるといふ事である。

私達は、植物園の裏門を出ると、また自働車に乘つて山の中をぐる／＼廻つた。あんまり急勾配なので、谷底へ落つこちはしまいかと心配した事もある。でも、やつと頂上へ登ると、元來た道とはちがつた方へと降りた。この間に自分達は果して何を見たか。それは、小山といふ小山や、山蔭といふ山蔭や、窪地といふ窪地一面に、青々とした茶畑が展開してゐる事であつた。誰かゞ、この植物園の感じを「靜岡縣へ行つたやうだ」と言つたのも無理はない。あゝ、これこそ、異國に惠まるゝ——日本の自然境だ。

だが然し、それが日本のロシヤで誇り得る唯一のものである。少くとも、先頃の自分の旅行においてはさう信じられた。こゝろ細い哉。（完）

機械音樂の發達

鹽入龜輔

近頃の機械音樂の發達はまことに目覺ましいものがある。今迄の機械音樂と云へば、蓄音器と自動ピアノ位であつた。それに新たにラヂオが出現した爲めに、此等のグループの機械音樂は一時に異常な進歩をした。殊に蓄音器にあつては、器械の製作及びレコーヂイングに於て殆んど昔日の面影を止めない位に改良された。器械では發聲裝置が全部更新されて、現在では人間の耳に聞こへ得る以上の音響を再現する事が出來るやうになるし、レコードにあつてはマイクロフオンに依る電氣吹込によつてラヂオでも不可能な反響まではいるやうになつた。ポリドールで製作したベートーヴエンの第九交響曲などは演奏會場で我々が直接聽く時より以上の音響的効果をもたらしてゐる。

然し蓄音器や自動ピアノ、ラヂオ等、いくら發達した所で結局音の再現に止まつて、機械音樂としての獨自の立場を展げることは出來ない。唯、演奏者と聽衆との間に立つて音を傳へるだけのものである。

所が此所に機械音樂としての獨自の立場から、其れ自身音を發生する裝置が現はれて來た。その一つはレニングラードのテレミン教授に依る「エーテル波音樂」であり、他の一つはパリイの科學者ベルトラン氏による「無電式ベルトラン・オルガン」である。

テレミン教授のエーテル波音樂發生裝置に關する實驗は昨年來ベルリンでアインシタインやリヒヤルド・シトラウス等の科學者や音樂者の前で行はれて非常な賞讚を博したものだつた。その裝置は現在のラヂオに似たもので、その器械の前では、手を動かす、指を動かす。眼ばたきをする、頭をかしげる、

此のやうな身體の運動が皆音となつて現はれてくる。即ち空中のエーテル波を音に變化させて現はすのである。此れを如何に音樂的に使用するかと云ふと、その新らしい器械の上に一本のアンテナが立ち、兩手をそのアンテナに近づけたり遠くしたりしてエーテル波の振動に變化を與へ、その變化がアンテナから器械を通りラウドスピーカーから音を發するまでに一個の旋律（メロデイー）となるのである。テレミン教授は此の實驗に於て彼自作のセレナーデを演奏した。そして彼の右手は音の高さを奏し、左手によつて音の强さを與へながら演奏した。ラウドスピーカーから出て來る音は丁度ヴアイオリンとフリユートとを一所にしたやうな音だと云ふ。

此のエーテル波音樂の發明は非常なセンセイションを起して、テレミン教授自身ベルリンにエーテル波音樂演奏者の音樂學校まで建てゝ演奏者の養成に力めてゐるが、此の裝置の缺點は、音の高さ、音の强弱、音の速度だけで、音樂の立體的構成である和音を奏する事が出來ない點にある。即ち唯一個の旋律の流れだけで、和聲は全く出て來ない。

此れに對してパリイの科學者ベルトランの發明した無電式ベルトラン・オルガンは旋律と共に和聲も出す事が出來て、エーテル波音樂よりも音樂的にはずつと獨立したものになつて來た。

此のベルトラン氏の裝置は約十年も前から取かゝつてゐたもので、例のエツフエル塔研究所でフランス・ラヂオクラブ副總裁アルマン・グリヴレエ氏指導の下に研究されて來た。此れは低周波と高周波との二個の電波を利用したもので、その發振裝置はラヂオに似たものである。器械の面には音階に相應する目盛りがほどこしてあつて、第一のハンドルが此の音階の目盛りに從つて動くと旋律が發生する。そして第二のハンドルに依つて、その旋律の基音に對する第八音と第五音とを發することが出來る。テレミン教授のに對して新たなる點は此の和音を出す裝置で、今の所は八度と五度の和音だけであるが將來は更に複雜な和音を出すことが出來るやうになると發明者は云つてゐる。それに旋律にあつても音階が決定してあるから發する音が正確だと云つてゐる。音はパイプ・オルガンに似てゐるさうだ。

今までの音樂と云へば人がピアノなりヴアイオリン等の樂器を使用して演奏したものだつた。それが、斯の如き機械音樂の進步は機械が人を使つて音樂を演奏するやうになるだらうと見てゐる人がゐる。大體に進步した歐洲の音樂評論家は、斯る機械音樂の出現によつて音樂もやつと他の藝術に伍して現代の藝術として生存して行く方向を執ることが出來る、と云ふ考へに一致して來た。事實此の機械音樂の出現はピアノの構造に電磁氣作用を應用して音の繼續時間を延長する事を考へさせ、作曲界にあつては無調音樂を出現させ、機械に依らざる音樂も漸次機械的要素が濃くなつて來た。もう五年と經たずに西洋音樂は其の形を變へる事であらう。

（特選情報參照）

密貿易の機關

伊波普猷

南島人は、天孫民族の一支族で、日本の建國以前に、南島に移住した者であるが、北方の同胞が瑞穗の國で幸福な生活を送つてゐる間に、彼等は低氣壓の發生地に近い

瘠地で生活して、最後まで孤島苦を嘗めなければならなかつた。

　隨分古くから島傳ひ浦傳ひに日本々土と交通してゐたこと、「日本書紀」や「續日本紀」の語る所であるが、本土では南北朝の分爭が始まり、自國でも三山の鼎立があつた爲に、折角の交通は全く斷絕して了つた。恰度其の頃、明主朱元璋が來諭するに及んで、中山王察度は經濟政策から臣を朱明に稱するに至つた。當時支那は漢民族の勃興時代で周圍の小民族の入貢が盛んであつたから、中山人は其處でこれらの諸蕃と知合ひになり、從つて南蠻貿易の端緖を開いて漸く富强となり、十五世紀の初葉に島內を統一するに及んで、久しく斷絕してゐた日本との交通を復興した。それから半世紀後、中央集權を斷行して、武備を撤廢したので、未曾有の黃金時代が出現したが、この幸福の時代は一世紀と續かなかつた。卽ち國內は至つて平和であつたが、禍は北方から起つて來た。日本六十餘州が豐臣氏の天下となつて、日本軍が朝鮮半島に侵入した時、その餘波は果然琉球の岸を洗つた。秀吉が征明の師を起すに當つて、琉球からも兵を徵しようとしたが、島津氏の意見に從つて、其の代りに七千五百人の十ヶ月の糧米を賦課することにした。琉球に取つては、全く寢耳に水であつた。不承不承に承諾して、其の半分だけは肥前の陣屋に送つたものゝ、あとは容易に納めようとはせず、島津氏から再三督促を受けて、たう〳〵琉球入の口實を與へて了つた。

　かねてより琉球に垂涎してゐた島津氏は、征韓の役が中止して、德川氏の天下となつて間もなく、幕府の許可を得て、慶長十四年の三月に、愈々琉球に侵入した。百年間の內亂にこり〳〵して、武備を全廢した琉球は、この時脆くも負けて、城下の盟を結び、薩軍は國王尙寧以下百官を捕虜にして凱旋した。如才ない島津氏は、亡國の君臣を無理矢理に江戶見物につれ出し、その間に琉球諸島の土地並に支那貿易について綿密な調査を遂げた。そして南島經營の方針が確定した後、王の一行は誓文三章を差出して漸く歸國を許されたが、三年振りに歸つて見るとさながら島津氏の植民地に身を寄する旅客のやうな心地がしたといふのである。兎に角この戰爭の極、薩摩と琉球との關係は、兄弟の關係より主從の關係に代り、そこに一種の奴隸制度が設けられることになつた。

　そも〳〵島津氏の琉球征伐の動機に、利に敏い薩摩の政治家が、當時は鎖國の時代で、長崎以外では、外國貿易は一切出來なかつたに拘らず、琉球の位地を利用して、日支貿易といふ密貿易を營まうとしたのにある。だから彼等は戰捷の餘威に乘じて、琉球王國を破壞するやうな事をせず、所謂「王國のかざり」だけは保存して置いて、之を密貿易の機關に使つた。琉球人をして薩摩のとを「御國元」と稱へさせながら、琉球國王をして不相變支那皇帝の册封を受けさせたのも、これが爲だ。

　爾來、島津氏は、琉球が支那に進貢船を派遣する都度、或は海賊に備へる爲に、大小砲を貸附し、或は銀銅等を供給して、大に其の進貢を奬勵したが、實權は素より其手中にあつたから、監督がかなり嚴重で、貨物は多くは薩摩を經由して、長崎若しくは京坂で轉販されるといふ有樣だつた。でも、琉球人は、歸帆の際、屢々薩吏の目を掠んで途中の島々で拔荷をやつたので、監督は益々嚴重になつた。

　おまけに、薩摩の方では、御贔屓荷といつて、琉球人の支那へ行く者に、日本の貨物の依托販賣をもさせたが、そんな事から日本と

の關係が發覺して、進貢の障碍になつては、大變だから、琉球では頻りに苦衷を訴へて、これはやめて貰ふことにした。又薩吏が琉裝して、進貢使に随行し福建までいつて、貿易の監督をするやうなこともしたが、柔遠驛(即ち琉球館)に出入する支那人中に、琉球語に精通する者が出て、感付かれさうになつたので、これも亦やめて貰ふことにした。

この進貢は近代では二年一貢といふ規定になつて、二艘の進貢船が派遣されたが大きい方は大唐船といつて、百四五十人位の人員が乘組み小さいのは小唐船といつて、七十人位の人員が乘組んでゐた。福建に着くや否や、乘組員の大部分は、琉球館を根據として、商賣に取りかゝつたが、進貢使の一行二三十人は、早速福建の伴送官に導かれて、北京へ赴いた。いよ〳〵北京に着くと、吏部尙書の宅で下馬宴が開かれ、進貢が終つて、歸途に上る時には、上馬宴が催された。そして歸りには、欽差官に福建まで送られて、新に本國から差向けられた接貢船に乘つて、歸國するのであつた。して見ると、二年間に三艘の船が那覇福建間を往復して、貿易を營んだ勘定になる。

さて、進貢の序でにやる貿易から上る利益は、果してどんなものであつたか。かつて琉球國王尙貞が島津氏の命を受けて、三司官(國務大臣の事)に調査させた覺書によると、進貢船二艘が、元和二年に齎らした銀が八百七十六貫錢(金で一萬四千六百兩)、貞享元年に齎らした銀が八百八十七貫錢(金で一萬四千七百八十三兩)で、接貢船が、天和三年に齎らした銀が、四百二十六貫錢(金で七千一百兩)であつた。以上は內端に計算したものだらうから實際の數字は、もつと多かつたに違ひない。しかも搭載の貨物はこの外であつた。

だが、この利益の大部分が、島津氏の倉に這入つたからたまらない。謂はゞ、當時の琉球人は、水中に潜つて、おいしい魚を呑んだと思ふ頃に、引上げられて、すつかり吐出させられる長良川の鵜のやうなものであつた。

さういふ貧國でありながら、不斷儲けさせて戴く恩返しに、一代に一度支那の册封使の一行が見えた時、彼等は思切つて歡待してやらなければならなかつた。前にも述べた通り慶長役後、所謂琉球王國は、事實上は薩摩に屬して名義上は支那に隸してゐるのだから、久しく人質となり薩州に行つてゐた王子を島津氏が國王に立てることにきめると、琉球では早速支那に使者を遣して、册封を請ふと云ふ形式を踏むことになつてゐた。そして册封使は大方七八月の交に、少い時は三四百人、多い時は七八百人の兵士に擁せられて、威風堂々と乘込んだのだが、今まで那覇で時めいてゐた薩摩の在番行以大勢の薩人は支那人に見られまいとして、倉皇片田舍に逃隱れ、支那人の滯在中は日本に關する談話を嚴禁するは言ふに及ばず、一切日本風の物を隱蔽して、さういふ所から兩屬政策の內狀がばれるのを禦いだ。それから、支那人は殆ど半年內も滯在して翌年の二三月頃に歸つたが、彼等の船が解纜する刹那に、那覇市の光景は一變して、再び日本臭くなり、片田舍にくすぶつてゐた隼人先生等は、のそ〳〵出て來て威張り散らした。實に兩大國の間に介在してゐた琉球の立場こそは、宛然賣笑婦のそれのやうなものであつた。

然るに御維新になつた結果、所謂琉球王國は、最早島津氏の密貿易の機關ではなくなつて、明治五年琉球處分の議が起り、爾來幾多の曲折を經て、同十二年の三月に、愈々沖繩縣が置かれることになつた。かうして所謂琉球王國は滅亡したが、三百年間島津氏に搾取されて、瀕死の狀態にあつた南島人は、日本帝國の中に這入つて、漸く蘇生することが出來た。(特選雜報參照)

「若返り法」大觀

醫學博士　高田義一郎

一

「いろ／＼の若返り法の話に就て」といふ問題を與へられたけれども、考へて見ると之は甚だ厄介な注文であつた。音も無く忍び寄つて來る「時」といふ曲者は、誰一人容赦することと無く、地球上の人類の悉くに對して、最も公平無差別に、「平等の標準は之であるぞよ」といふが如き態度で、怪しげな藥をふりかけて行くのであらう。久遠に若く美しくありたいと願つて止まない、花も羞らう手弱女をも、むごたらしく皺苦茶の梅干婆に變化させてしまひ、此の世のあらん限り、その權力を恣にしたいと思ふ支配者をも、荒々しくむしり取る様に君王の椅子から引ずり下して、空しく地下の墓穴の中へ投げ込んでしまつて、不老不死の望みすら叶へてはくれないのである。萬里の長城を築き上げて、外には匈奴の侵入を防ぎ、内には萬民の不平を壓迫して、儒生數百人を、思想問題の圖書と共に或は坑殺し、或は燒き棄てゝ、四百餘州を風靡した理想的の暴君、秦の始皇帝の如きすら、不老不死の靈藥を求めに出かけさせた徐福の土産を手に入れ得ないで、果敢なくも死の旅に上り、下男の如く辭を低くし、禮を厚くして、その膝下に一顧の媚びを求めに來る貴顯紳士の數々を、塵芥の如くにあしらつて、九十九夜まで通ひつめた深草の少將にまでも、焦れ死をさせて顧みなかつた小野の小町すら、卒塔婆にすがりながら、憐れにものたれ死をしたのは、皆此の「時」といふ曲者の所業であつた。

不老不死は甚く困難ではあるけれども、不老長生といふことは、全然不能のことでもなく、その例證は澤山にある。つまりそれは、「時」の曲者の藥の利き目を食ひ止めて、比較的長期に

耳つて、一定の程度に踏み止まることであるからであるが、若返りといふことは、一定の程度に踏み止るだけでは滿足せずに、更に一歩を進めて、「時」の力に逆ひながら、若さを逆にあと戻り——バック——させやうといふ、世にも大それた、圖太い慾望なのであるから、之こそ頗る非常の難問題なのである。之を厄介な注文といふのは、決して私の無能の爲のみではないであらう。

二

若返りとは何ぞやの定義のかはりに、一、二の例話を擧げて見る。

爺さんが、いつもの如く山へ獵に出かけたが、その日は小鳥一羽すら見つからなかつた。所が偶然一羽の鳥が足許から飛立つたので、一生懸命になつて追かけて見たけれども、どうしてもつかまらないばかりか、いつの間にか、山深く入つて道を踏み迷ひ、疲れ果てゝ倒れてしまつた。咽喉が燒きつく樣に渇いてたまらないで苦しんで居る耳許に、向ふの方からドウ／＼といふ水の音がするので、膝行る樣にして音をたよりに谷川の方に近づいて、手に掬んで呑んだ所が、その水が甘露の樣にうまいのみならず、今迄の疲勞は拭ふが如く消散して、手足の筋までも延び、若い時その儘の血色のいゝ艶やかな皮膚となつたのである。

家へ歸へると婆さんが、若々しく輝かしい夫の顏を見て、驚きながら右の次第を聞いて「それなら妾も行つて來ませう」と、敎へられた通りに谷川へ辿りついて、一口二口用意の茶椀で飲んだまではよかつたが、成るべく若くなりたいといふ欲望から、續け樣に數十杯、息もつかずに飲み乾した。すると不思議にも婆さんは、忽ちの中に若くなつて、二八あまりの美しい娘となつたのも束の間、更に止め度もなく若返つて、遂に未だ齒さへ生えない赤ん坊と化してしまひ、歩いて歸る事さへ出來なくなつたといふ話がある。

それから又こんな話もある。

非常によく利く若返りの靈藥を、名醫の所から貰つて來たお爺さんが、藥瓶を卓上に置いて一服して居る間に、去年高等女學校を卒業して、昨今婿選み最中の令嬢が、リモナーデと間違へて、コップに一杯グッと呑んで、忽ち生後二、三ケ月の乳呑兒に變つてしまひ、オギャー／＼と大聲に泣き叫びながら、大小便のたれ流しを初めたのである。

時ならぬ赤兒の泣聲に、家中の者が驚いて集つて來た。しかし赤ん坊が令孃の衣服にくるまつて居るだけで、何の事かわか

らないので、姉の傍に蹲いて貰ひ泣きをして居る、尋常一年生の弟に聞くと、弟は「姉ちやんは、此のお藥をかうして呑んだら、それつきり居なくなつたんだい」と云ひながら、說明の爲に姉のした通りに一杯を呑んだ。すると、その瞬間に弟の姿は消失して、疊の上に一滴の液體のみが殘つて居た。

往診を依賴されて、馳けつけた醫者が學究的の男で、疊の上の液體を顯微鏡で檢査した所が、その中にたつた一疋の精蟲が、元氣よく游いて居るのを發見したさうである。

私はこれから此の如き純粹なる若返り法の有無に就て一瞥しやうとするのである。

三

歴史的に最も古い若返り法は、紀元前十一世紀にイスラエル王ダビドに依つて行はれたものであらう。それは老衰に傾いた者が、元氣潑剌たる若人と共に起臥して青春の氣を補充する方法であつて、フーフェランドの著「長命術」（Hufeland; Die Kunst das Leben zu verlängern, 1798）中にも「舊約時代に若き處女と接する時は、老衰を回復し生命を延長するものと信ぜられたり、即ち所謂處女回生術にして、ギリシヤ人、ローマ人等に多く採用せられ、延いて近代に及べり」或は「若き乙女の氣息中に、清新なる生命の活力を包含する事は云々」等の記載があるのみならず、近代の大醫ボエルハーフも亦、之をオランダ國アムステルダムの老市長に勸めたと傳へられて居る。加之、處女回生術に對する信仰？は、十七世紀に發掘された碑文に「クラウヂウス・ヘルミツプースが、少女の氣息を受けて百十五歲の高齢に達し得た御禮として健康の神エスクラツプに奉納する」旨が書いてあつた事に依つても知られ、我が國にも此の考が入つて居ることは說明を俟たないが、此の肉蒲團に依る若返りの效力は、老者に對する最も贅澤な保溫法であるといふ以外に、醫學的の立場から之を保證することは困難である。

四

松葉を煎じて呑めば腦病に特效があるといふ俗說は、男爵松本順國手の褒賞を得たとかで、往年相當行はれたものであつたが、近年になつて又松葉や松の實を食用すれば、血壓を降下させて中風の豫防となるのみならず、精力を增進して若返らせるといふ理由から、中々盛んに廣く行はれて居る樣である。從つて種々の經驗談も發表せられて居るから、その一例を擧げて見やう。

「黑松では効が少く、赤松がよろしい。特に百年以上の老木が

よい。就中よいのは人里を離れた深山の自然木から、夜中、日光のあたらない時に採取して、之を暗所に貯藏したものである。之を水で洗つて、そのまゝ噛むのであつて、初め二週間位は食ひにくいが、一ケ月も連用すれば胃腸の消化作用が旺盛になつて活力を増し、音聲も美しく、皮膚も白く艶やかになつて來る」云々。

それから又トロボフといふロシヤ人は、レモン汁飲用若返りを宣傳して、第一日にレモン一個、翌日には二個と、一日一個づつ増して十五日目には十五個の汁を呑み、十六日目からは又一日一個づつを減少して、三十日目に又一個に歸り、之を十數年反覆して非常に若返つたと云つて居る。之を聞いて夏蜜柑でも同じであるといふ説も起り、昨今夏蜜柑がよく賣れるとの噂もある。

しかし食物に依る若返り法の著しい例としては、映畫女優グレタ・ガルボ嬢を紹介する必要がある。彼女は昨年メトロゴールドウイン撮影所で、トルストイの「アンナ・カレニナ」の飜案劇をやつて居た最中に、腸カタールを病んで數週間休養したのであつたが、休養後再びステージに立つた時には、病後の疲勞のないばかりか、以前よりも著しく若返つて居たので、容姿を生命以上のものとするワンサガール達の詮議の種となつたのであつた。

綿密なる調査の結果、彼女が病中、ヴイタミンAの缺乏を補ふ爲に毎日四回づつ肝油一匙を飲み、パンにはバタを澤山塗り、ミルクはコツプに三杯、クリームは二合、鷄卵は三個、その他にヴイタミンCの必要上、トマト數個、菠薐草、ちしや、甘藍、人參、はなはぼたん、きくぢしや、オレンヂ、レモン、葡萄、苺、林檎や馬鈴薯等を食し、肉類の他に肝臟、腎臟、腦等をも欠かさず食したといふことがわかつた、これだけ旺盛な食慾があれば、特にヴイタミンAやCの類をわざ〳〵採らないでも、十分若返り得られやうと考へられるではないか？

五

若返り運動法といふものにも、いろ〳〵の方法があるけれども、數年前に評判になつたベンネツト式若返り運動を、その一例として掲げるに止める。その方法は屈伸運動、打撲運動、摩擦運動に三大別せられ、次の三十則から成立つものであつて、ベ氏は五十歳にして老衰したのを、此の方法に依つて七十二歳にして再び若返つたと云ふことである。即ち、

一、足を曲げる運動――左右各五回、

二、上半身を左右する運動――左右各五回、

三、頭を撫げ、下腹部を叩く運動——十回、
四、兩肩を交互に前後する運動——左右各五回、
五、臂を上下する運動——左右各五回、
六、双手で首を撫げる運動——十回、
七、咽喉部の緊張運動——十回、
八、首を左右に曲げる運動——左右各五回、
九、兩肩を交互上下する運動——左右各五回、
十、頤裏を押す運動——五十回、
十一、前腕の運動——左右各五回、
十二、後腕の運動——左右各五回、
十三、腕の廻轉運動——左右各五回、
十四、脚を曲げ膝を動かす運動——左右同上、
十五、腿及腓部の運動——左右各五回、
十六、膝を兩手で引く運動——左右各五回、
十七、肝臟部の仰臥摩擦——五十回、
十八、肝臟部の打撲運動——五十回、
十九、側面屈折運動——左右各五回、
二十、肝臟部の横臥摩擦——五十回、
廿一、全身の伸張運動——三回、
廿二、頸部の摩擦——左右各五十回、
廿三、耳の前後の摩擦——左右同時に五十回、
廿四、頰部の摩擦——左右同時に五十回、
廿五、鼻の兩側の摩擦——左右同時に五十回、
廿六、頤部の摩擦——五十回、
廿七、眼球の運動——五十回、
廿八、前額部の摩擦——五十回、
廿九、口腔の運動——五十回、
三十、頭髮の摩擦——五十回、
追加、脛部內側の打撲、脊筋の摩擦、深呼吸運動、足蹠の摩擦、等。——以上。

主唱者は以上の運動に依つて、血液中から老衰の原因となる石灰質、其他の有害成分を排除して、青春の特長たる肉體の彈力性を蘇らせると云ふが、之は動脈硬化といふ老年性の一變化のみを重視した説である。無論惡いことではないけれども、之のみに依つて若返り得るとは、醫師として斷言するに躊躇せざるを得ない所であると思ふ。

六

ペンネット法と同一に、老人に於ける血管の石灰沈着と、筋肉その他の彈力性の減少を重視したものではあるが、前者が、

物理的であるのに反して、之を化學的に行かうとする方法がある。それは硅酸ナトリユーム溶液の靜脈內注射であつて、醫師に依つて考案されたゞけあつて、前者よりもその說明が精しく、成る程と首肯させる所がある。

フランスの醫家オリヴイエは、自體に三年間硅酸注射を施して、動脈の硬化と慢性腎臓炎から免れ、七十歳に達して身心共に若返つたと云ひ、ブリツシエ、セツフレル、サルトリ氏等も亦之を患者に於て確認して居たが、ドイツ國ロストツク大學教授キユーン氏は、それを基礎として一九一一年に、次の若返り法を發表したのである。

老衰するに從つて、結締組織中のエラスチンが減少して、彈力纖維網が粗鬆になることは、旣にヒユツク等の云ふ所であるし、又シユルツ等の研究に從へば、人體組織中の硅酸鹽類の分量は、老年者に於て著しく少くなるもので、筋肉一キログラムに就て見れば、壯年者二六ミリグラムであるのに、老人には僅に一九ミリグラムに過ぎない。反之、壯年者に少い石灰が、老人には增加して居て、兩者間に密接の關係が存在するから、老衰の一徵たる石灰沈着防止の爲に、硅酸の補給が必要であるといふ見解から、キユーン氏は一週二回づつ十乃至二十ミリグラムの硅酸ナトリユーム溶液の靜脈內注射を適當と認めたのである。

その注射は十回か十二回位で一段落とするもので、第一回注射では何等の認むべき所もないが、三四回頃からそろ／＼效果が現れて來て、八十歳の老婦人が動脈硬化症と强度の狹心症發作から救はれたり、七十九歳の男子の心臟障碍と强度の呼吸困難が治つた等、澤山の好成績の實例を持つて居ると報告して居るのである。

七

我が國では、大正九年中、一漢法醫が某雜誌上に發表したのが動機となつて、有効なる若返りの藥として、全國の津々浦々にまでも、廣く行はるゝに至つた「何首烏」と稱する漢藥がある。

何首烏といふのは、名を聞けば烏の一種かと思はれるが、之は藥學雜誌や東洋學藝雜誌等に發表せられた研究成績によれば、「つるどくだみ」なる草であつて、大黃と同科の藥草と認められ、主成分の緩下劑に屬することも亦大黃と同一である。故に特に若返りの効力があるものでも無く、「支那四川省の山中で取れた、四百年以上を經過したものを最上とす」といふ式の廣告は、畢竟その有難味を增さしめんが爲のものに過ぎないこと

がよくわかる。

此の如く若返り藥と稱せられて、その主成分が單純なる緩下劑であるものは、何首烏以外にも二、三有るが、それはつまり便通を調節して身心を爽快ならしむる結果、人の元氣を旺盛ならしめる所から考へつくものではあるまいかと解せられるのである。

何首烏を强精劑とし、且つ若返りの靈藥として一時世間で持て囃したのに就て、思ひ合せられのは、若返りといふ事と、性慾の亢進との混同せられ勝ちな事實である。印度の性的聖書と稱せられる Kāma-sūtra のうちに、「酪、蜜、砂糖、マドフーカ、各二パラ（分量の單位）乳一プラストハを混和してアムリタ（甘露）を作れば、滋養に富み、精力を増し、長壽を保たしむ」とあるのも、その一例とするに足るが、支那の內地に於て古來、牡鹿の陽根を乾し固めたものを「鹿鞭」と稱して珍重し、先端の方から少しづつ削り取つて、長壽補陽の目的に、酒に混和して飲用する風があるの等は、最も遺憾無く此の謬想を發揮したものといふことが出來るであらう。

八

若返り法のいろ〳〵唱へられた中にも、最も世界的に問題を起したのは、オーストリーの首都ウヰーンの學者、スタイナハ氏の主唱した外科的手術で輸精管結紮をする方法である。之は長壽を保つ人には性慾の旺盛な者が多い事や、何等かの方法に依て性的機能を恢復させると、自然に他の老衰に由來する諸現象も消失して行くといふが如きことを前提として考案せられたものであつて、輸精管を結紮すれば、いつでも睾丸の間質細胞、即ち所謂レイヂッヒ氏細胞が増殖して、性慾が旺盛になり延いて著しく若返ると云はれ、我が國に於ても福岡醫科大學教授、榊保三郎博士が非常に之に熱中した結果、巷說の中心となつて、遂に瀆職の名の下に馘首されたといふ歴史附の若返り法であるが、男性のみがその恩惠に浴して、女性は與らずといふ不公平なものであつた

此の顯著なる差別待遇に對して、不思議にも男女同權を主張する婦人論客は一言をも發しなかつたが、醫學者仲間からは異論が紛々として四方から起つて、さしも世界的に大流行を極めて居た此の人々をも、間もなく山師扱をして葬り去つてしまつた。即ちスタイナハ氏等が「間質細胞は內分泌を司る發情腺であつて、性慾を喚起するものである」といふのを否定して、「その若返ると認められるのは精神的の暗示作用に過ぎないし、假に一時的に性的興奮が起るとしても、それは決して永續しない

ものだ」としたのである。

此の若返り法に就ては、もう少し詳細にいふ者であつたが、之は本誌の大正十年新年號に、永井潜博士が精しく述べられたことがあるから、單に主眼だけに止めて置く。

九

若返り法としてその次に出現したのは、一九二七年、即ち昨昭和二年の新春早々に、セルジ・ヴォロノフ氏がパリーで發表した外科手術に依る方法である。此の方法も亦スタイナハ氏と同じく、生殖腺の內分泌を旺盛にして、若返らうといふ考へであるが、前者が輸精管の結紮に依つて、所謂、發情腺から內分泌が起るのを待つといふ間接手段であるのに反して、之は單刀直入に若い元氣の良い內分泌腺――睾丸或は卵巣――を移植しやうといふ直接手段である。即ちヴォロノフ氏自身は「使ひ古した自動車の部分品を取り換えるのと同樣で、老衰消耗した內分泌腺を新しくすればいい。之に依つて百二十五歲まで生きられることは、自分が一千名に就ての實驗に徵して確實である」と云つて居るが、方法自身はスタイナハ氏法よりも單純であるし、且つ既にス氏以前に、ブラウンセカール氏が睾丸エキスの注射に依つて、若返ると主張したのと同一の考案であるから、新し味が反つて少いかと思はれる。但しスタイナハ氏法が男性にのみ行はれて、女性を除外したのに反して、此の方法が公平平等に男女兩性をして恩惠に浴せしめる點は、少くとも女性の立場から見て、賞讃に値するものと云ふべきであらう。

しかし同一考案に基くブラウンセカール氏の注射法は、ホンの一時的のものとして、久しき以前に葬り去られたものであるし、本法に對しても亦、本年正月にドイツ國フライブルグ大學のホフマイスター教授が、反對論を發表して、「無効なるのみならず、反つて危險を及ぼす場合さへある」と云つて居るのである。

尤も反對論は何にでも出るものであるし、睾丸エキス注射の効力が少くても、睾丸全部の移植は、注射と同日の比ではあるまいから、あながち急に之を否定すべきものでないかも知れない。

十

近頃に至つて、スタイナハ氏と同じオーストリーの學者、カール・ドップラー氏が、ヴォロノフ氏の樣に、他の動物の睾丸や卵巣を移植すること無く、老衰して活力の消耗した本人の睾丸又は卵巣に、直接に血液を補給することに依つて、その組織の更生をはかる若返り法を發表して、已に二百人に實驗したが、無効の者は一人も無かつたと揚言して居るのである。有効

か無効か、はた又どれ位の持續性があるか等、すべて未定の問題ではあるが、之も亦面白い考案と云つてもよいであらう。

十一

之を要するに、若返り法と稱せられるものにはいろ／＼有るが、飲食物や藥品、或は運動の如き全般的の方法では、中々その効果を現はすまでに暇がかゝつて、性急なる希望者を滿足して持續せしめるに至難であるかの如き觀がある。血管の硬化を防いで、血壓の降下をはかる事に依つて若返る方法、或は性慾を亢進せしめて若返る方法の如き、部分的に全力を注ぐ方法が、全般的のものよりも多く、又廣く行はれるのは、恐らく此の關係からであらう。しかし血管の硬化を防ぐだけで、果して全身が若返り得るであらうか？　又性慾を旺盛ならしめることが、即ち全身の若返りそのものであると云ひ得られるか如何か？　に就ては、大に疑問を存するのである。かゝる部分的に全力を注ぐ方法の主唱者は、皆その部分が若返れば、他の部分も亦若返つて、やがて全身が若返るのであると力說して居るけれども、表向は、兎に角、主唱者自身と雖も、内心にはそこまで思ひ詰めて居ないのではあるまいか？　唯々若返りたいと切望する者が、所期に急なるの餘り、何等かの方法に依つて部分的に効果の現はれるのを見る時に、「やがて全身も若返るであらう」といふ暗示――それは最初は術者から受ける暗示であるが、やがては一歩を進めて、自己の要求の爲に生ずる自己暗示となつてしまう――の爲に、確に若返つたと信ずるに至ると、それが同じ希望者と、物珍しさの大衆の好奇心とに依て吹聽せられ、喧傳せられて、事實以上に奏効した樣な外觀を呈して來る樣な氣味が、大に有るかと思はれる。

主唱者自身も、徹頭徹尾、大衆を感心させて、巨利を占めやうといふ山師的根性のみを持つて居るのではあるまいが、之も亦自己の特意の考案をして、有効に且つ有名ならしめたいといふ熱望から、試驗中に自己暗示にかかつて、どれも之もヒイキ眼で、有効確實であつたものゝ如く、曲解し勝ちのものである。

此の二つの考が經となり、緯となつて、有名な、而して確實な、幾多の若返り法を作り上げるのであるけれども、何れも皆短い年月の間に、世間から忘れられてしまうのは、つまり奏効が、主唱者の云ひ、或は被術者の吹聽するが如くに確實ではないからであらう。

若しもその奏効が確實であつたならば、人として殆ど之を望まない者の無い、有難い若返りの靈術が、一時的の流行に止つて、急速にその跡を絕ち、影をひそめる筈は無いのである。假令、一時は止むとしても、後から／＼問合せ、聞き訊して、その靈術を懇望し、切願して止まないものが、踵を接して主唱者の

門前に市をなして居る筈である。

私は折角の若返り法に對して、門外漢の身として無効であるとは云はないが、しかしそれは望む方が無理な事がらであることだけを、斷言して憚らないのである。

その理由は次の如くである。

十二

人類、殊に他に不足のないブルジョアー階級に屬する人類の、「金はいくらでも出すから、若返りたい」といふ欲求の熱烈であるが爲に、後から〱手を代へ、品を替えたいろ〱の若返り法が、出ては消え〱て走馬燈の様に、目まぐるしくも去來して居る。考案者は熱心にその腦漿をしぼり盡し、之に要する資本は惜しげも無く補給せられて居るに拘らず、古い時代から今日に至るまで、不斷の努力が繼續せられて居るのも報ひられないのは、一體何の爲であらうか。

それは不思議でも何でもない。自然に對する大なる反逆だからである。不老長壽以上に慾張つて、地球を逆に回轉させやうといふ、「時」に對する謀反だからである。

大自然が、折角有難い至公至平な思召に基いて、「王者も老いよ、美女もしなびよ」といふ無差別待遇を與へたのであるのに、その大慈悲心に感謝しないばかりか、地球上にのさばり返つた人類が、飽くことを知らぬ慾望から、遂に地球の廻轉を食ひ止めやうといふ不老長壽から、更に一歩を進めて、地球を逆に廻轉させやうといふ、此の蟲のいゝ欲求は、到底大自然の許可を得られる筈が無いのである。若し又許可無くして此の欲求を貫徹せんが爲には、實力で大自然を抑へつけなければならないのであるが、さうするには人類といふものは、大自然の前にあまりに小さい。象の背に飛上つた蚤や、大佛の頭にとまつた蚊どころの比でない程、あまりに小さ過ぎるのである。

萬里の長城は、同じ小さい人類の匈奴を防ぎ得ても、大自然に對しては物の數でもない。深草の少將は追返せても、「時」の曲物の侵入は防ぎ得ないのである。

或る程度までの不老長壽を保ち得るに止つて、若返るといふことが完全に出來ないことは、自然を「出し惜しみ」する吝嗇漢として罵倒すべき理由にはならない。反つて人類一般に對する、至公至平なる大慈悲心を、自然に對して、厚く感謝すべき理由となるべきものである

學者や山師の手に依つて行はれる、幾多の若返り法は、畢竟、ブルジョアーの氣休めの遊戲に止るであらう。而して、眞正の完全なる若返り法は、遂に永久に冒頭に掲げた様な偶話の中に踏み止つて、一歩もそれから外には足を踏み出すことをしないであらうと思はれるのである。（昭和三年六月中旬稿

投手生活の今昔

岩瀬五郎

三田稻門戰の思出

八月二十五日、秋のシーズンに魁けて、三田稻門第一回戰が愈々神宮球場で開始された。私は適々此一戰に大連から參加したのであつたが、ゲームは八對一の大差を以て、稻門軍が三田側を慘敗せしめた。

日は移り時は變つて、七年の星霜は早くも過ぎた。大正十年春、風寒き芝浦に於いて、早慶戰復活の前哨戰として、初めて開始された三田稻門第一回戰に私は投手として立つた。其頃は兩軍とも、稱選手以外、現選手の出場は五人に限られ、試合は春秋二期に定めて引續き芝浦で行はれた。

大正十年頃は試合は勝つたり負けたりであつたが、兩軍選手の精鋭を以て當り、其白熱し、緊張せる試合振に於いて、三田稻門戰は當時球界の權威であり、興味と人氣の中心であつた。

恰も吾が早大野球部は大正十年春渡米することになつて、其二回戰は留守選手に依つて行はれたが、渡米後の秋の試合には完全に三田側を征服することが出來て、天晴米國遠征に於ける練磨の手腕を發揮した。然るに大正十一年春は、三田側に名を成さしめたが、秋には又逆モーション問題が祟つて試合を失ふ原因となつた。

逆モーション問題

此試合に於て私の逆モーションなるものが大問題になつた。それは私の逆モーションが三田側の主張によるとボークであるといふことであつたが、私はそれはボークではない、只ボデイスキングが反對であるといふ丈けで、何等文句をつけらるべき性質のものではない、若し私の逆モーションがボークであるなら、アンダースロー投手はボークとなるのではないかと反駁すると、あれは習慣性のものであるからボークとは云へないといふことだつた。そこで私も今日から此モーションを習慣性とするなら何等差支へないではないかと大いに主張した。

もと〳〵此問題は第一回戰に於いて私の逆モーションに三田側がすつかり打撃を封じられたので、第二回戰に於いて問題化したのであつたが、併し之れは一面に於いて、その頃の三田稻門戰がそれ丈け白熱してゐた證據にもなる。實際熱狂したフアン自身も二派に分れて、めいめい勝手な彌次を飛ばしてゐた。

私は其時、さういふ文句が出るやうでは今後三田稻門戰に出場する

のは厭だと先輩に申出でたところ、さう君のやうに怒つて了つては困る、もうすこし冷靜になれといふことで、また審判の蘆田内村兩氏も大いに心配されて、兎に角此問題は保留といふことにして、試合をやつてはどうかといふことであつたが、私は保留などする必要はない、どうしてもこのまゝ使用させてくれと申出でた。當時三田の主將は高濱氏稻門は市岡氏であつたが、兩氏の間に兎に角試合を續行しようといふことに妥協が出來て、私も不滿ながら投手として再び出場することになつた。

併しこんな時にはもう氣合を殺がれてゐるので、滿足に投球が出來る筈がない。あの頃の三田側は試合中色々と難癖をつけては自己の方に勝利を導いてゐたが、時には人を馬鹿にしたやうな態度を示しては、選手を怒らせたりして試合を進めた。丁度第二回目に高濱君が打者に立つた。高濱君は三田の主將、それに社會的地位も紳士として立つて行かれる人。私は一學生に過ぎない。それにも拘はらず、私がそのやうなゴタ〳〵のあつた後で、氣を惡くしてゐる時に、私に向つて舌を出し、唾を吐きつけて私を逆上させた。若し高濱君が學生であつたならば、さうした行爲もさほどまでに感ぜられなかつたであらうが、相手が相手丈けに私は非常に憤慨した。よし！　彼と一騎打をしよう！　決鬪をしようと思つたが、併し私と彼とは投手と打者との關係で、私は投球をつゞけるより外に途はなかつた。——かうなるともう稻門の敗北は免れない。今日は高濱をやつゝけてやらう、是非やつゝけなければならぬといふ頭で、高濱君にのみ全力を擧げて投球したが、さうすると反つて安打されるといふ始末で、三田側は益々優勢である。最後にまた高濱君が打者の時に、私が餘りに高濱君を三振に打ち取らんとして氣が上つて了つたので、ボールが打者の後方に投げられた。高濱君はいきなりバットを私に向つて投げつけた。私は遂に憤慨の絶頂に達してベンチへかへつて了つた。もうあゝいふ人とは試合はやれぬと思つた。……

ところが他の人達は、早稻田スピリットはさういふものではない。假令相手の行動が非であつても許してやれ、こゝはどうしても投球を續けなければならぬ。ゲームは敗けてもいゝ、あのやうな行動をして迄勝ちたければ勝たしてやれといふことで、私も早稻田スピリットのため、野球部のため、涙をのんでまた出場した。其結果、ゲームは八對三であつたと思ふ、あつさりやられた。

私は其夜眠れなかつた。どうしてあゝいふ卑劣な行動をしてまで試合に勝たねばならぬかと思ふと殘念であつた。今から思ふと私も隨分興奮したものだが、私は彼を探し出して決鬪しようかとまで思つた。私の友人が心配をしていろ〳〵と宥めてくれたが、しかし私の興奮は容易に去らなかつた

新聞は此事件を大いに喧傳した。とう〳〵安部先生の耳に入つたので、先生は私の行動を早稻田スピリットに反するものとして、私に一ヶ月の謹愼を命ぜられた。丁度其時部員は新潟から大阪へと試合に出かけ、私一人が廣い古びた合宿にポツネンとして空しく一ヶ月を待つた。其間私は考へた。野球なるものは、時と場合に依つては、手段は選ばずとも、試合には必ず勝たねばならぬと。どうしても勝負をする上に於ては、是が非でも勝てと、何處からともなしに私に告げる者があつた。私の心は一變した。——

球場では第二選手が練習をしてゐた。私も一緒にやらせてくれと願

んで、一生懸命にやつた。そのうち一ヶ月の試用の期間も解けた頃、丁度其時にアメリカの職業チームがハンター氏に引率されて日本にやつて來た。横濱に彼等が上陸した時に、最速審判モリアリテイに私の逆モーシヨンに就いて尋ねたところが、それは米國球界でも嘗て或投手が用ひたことがあり、決してボークではないといふ決定的な審判が下された。それを聞いた時に、私は負けた三田稲門戰が一時に勝つたやうな氣持になり、同時に高濱君の顏が見たくて堪らなかつた。翌朝の各新聞には一齊にそれに關する報導が出た。私はこれで胃の中の大きなカタマリがとれたやうに輕くなるのを感じた。

私の苦境時代

私は大正十二年四月久留米聯隊に入營して、一ヶ年間東都球界から離れてゐた。それから除隊後は間もなく滿洲大連で在職することになつたが、十三年秋に再び私は上京した。

秋の三田稲門戰に私は久振で出場した。其時も私は投げたが、ゲームは樂々と勝つことが出來た。

其後私は滿洲球界で苦境に落ちて、肩の調子も良かつたり、惡かつたりで、常に不調であつた。

大正十五年春、私は最も惡い狀態にあつた。そんな時にはどんなに攝生をしても調子の惡いもので、私も此時ばかりは諦めてもう球生活を離れようかと思つたが、其頃私の知人に柔道三段で、骨格筋肉の調整に恐しい人があつて、今頃野球生活を引退するのは意久地がない、私が引受けて肩の痛みを癒してやらうといふことで、それから日に二回づゝ治療をして貰ふことになつた。其人はなか／＼意氣のある人で、私とよく氣も合ふ人であつたが、其人の云ふには痛くとも、無理でも投げて見てくれといふことで、私も一生懸命其人を信頼して投げ續けた。かうして約二週間の治療を受けたが、肩の調子は日に増して段々よくなつてくる。私もやうやくボールが面白くやれるやうになつてくるところへ、外來チームが法政、慶應といふ順序でやつて來た。其時は私は治療中ではあつたが、どうやら試合をやり了せ、敗北はしたが慘敗の憂目は見ないで濟んだ。

最後まで投げる意氣

敗北はしたが、併しそれらのチームにはきつと勝てるといふ自信はあつた。最近の各大學チームはたしかに意氣が缺けてゐるやうで、私が投球をしてもこれが恐ろしいと思ふ打者がゐない。チーム全體の意氣が缺けて來たといふのは、試合數が餘り多くなつて、選手自身にもゲームの一つ位はどうでもいゝ、未だ後があるんだといふ氣になるためではなからうか。それで試合毎に燃え立つ如き意氣が見られない。投手も自然意氣を失ひ、自分が打たれ出すと早くも新手の投手の救助を待つやうになる。私は投手が交替されるのは投手にとつて一つの恥辱だと考へてゐる。どうしても最後迄投げ通すといふ意氣が必要だと思つて居る。

此度私のからだは非常に忙しかつた。都市對抗戰を終へた後、大連で立教と試合をしてストレートで之れを取り、直ちに三田稲門戰に上京して相當の努力をした。私には未だ元氣がある、現選手には未だひけはとらないつもりである。――

都市對抗戰

東日大毎兩社主催、第二回全國都市對抗野球戰は、八月一日から神宮球場に於いて開催されることになつた。

昨年の爭霸戰に於いては滿洲倶樂部の優勝となり、大優勝旗は遼東の一角大連市の空に燦々と輝いた。

其滿洲倶樂部と吾實業團との間に行はれる模範試合（毎年六月第一日曜日に火蓋が切られる）に於いて、本年は幸に吾實業團はストレートで滿洲倶樂部を敗つたので、大連市を代表して實業團が都市對抗戰に出場の權利を得た。

一體吾大連軍は五月一日から實・滿戰に備へるために、毎日二時間づゝ仕事の餘暇を割いて猛練習を行ふことになつてゐる。實・滿戰の終了後は外來チームを迎へて大連ファンを喜ばすのであるが、十分練習を積んだ吾々選手は、内地の大學チームと對戰して常に恥しからぬ成績を殘してゐる。かうして吾大連野球界は、實業、滿洲倶樂部の二野球チームの對立から、相互に技倆向上に、選手養成に力を入れてゐるために、兩チームの實力は益々進歩し、陣容は益々充實するのである。

斯くして猛練習を積みし我々ナインは今回の都市對抗戰には必ず優勝出來るとは信じて居たものゝ、ゲームは時に運命の支配するところとなるもので、それだけに心配も多かつた譯である。それに今年は昨年と異り、出場チームも増加して、各都市の選手が訓練されてゐることは明かなので、一寸油斷は出來なかつた。

愈に出發の日は來た、大連に於ける試合はあつたが、留守を滿洲倶樂部に依賴し、七月廿七日香港丸にて、大連に再び大優勝旗を靡かせることを約し、意氣揚々と市民に送られて内地に向つた。

宿屋と縁起

三十日朝、一行が東京驛に着いた時は雨が降つてゐた。そのうちに晴れることを豫想しながら、一行は青山一丁目の宿屋に疲れたからだを橫へた。（其頃は最早各都市のチームは上京濟みで一行が殿軍をつとめた譯だつた）宿は一寸小ぎれいだつたが、外には雨がしと〳〵降つてゐるために室内は薄暗く、じめ〳〵してゐて、何んとなく頭が重かつた。

晝食の時に。一行は二間に分けられて食事をさせられたので、「何んだ、此家は道具が揃つてゐないのか」などゝ苦情が出る。私は第二回目に廻された。飯を口に入れると冷たい、それにじめ〳〵してゐる。――着京早々、それも大事なからだだ、人を馬鹿にしてゐる――縁起をかついだ私は餘りな宿の仕打に憤慨して、こんなところは早く退却だと監督に申込んだ。そのうちにめい〳〵用事もあるので外出する人もあり、訪客の接待や何かでやがて夜が來た。晩餐もどうやら無事に終へると、門限は十時までといふ掟なので、外出してゐた人々も三々伍々急いで歸つて來た。

ところが夜も十一時頃になると腹の虫がそろ〳〵と東京の「そば」を戀しがり出した。宿に注文すると東京には今頃もうそばはありませんとあつさりことわられた。其態度が吾々をまるで田舍者扱ひにしててんで相手にしないので皆は益々憤慨し、そのうちの四五人が雨の中を近所のそば屋に飛び込んで、思ふ存分食つて宿に歸ると、女將がプンプンして吾々に食つてかゝつた。

「皆さん、お出かけになるんでしたらちやんと戸締をして行つて貰はないと困りますネ、今刑事さんが來て、お前の家は戸締をちやんとして置かないと無用心で困るぢやないかとひどく叱られましたよ」とこんどは吾々に向つて、まるで刑事のやうな恐い顔をして苦情を言つた。

こんな調子で吾々も着京早々氣が荒くなつてゐたので、女中が山と云へば川と云つて、口論の絶間なし――それに横濱軍も同宿して、吾々の上に陣取つてゐたので、これを口實に他に轉宿すべしと一同意見一致し、宿を探した結果牛込築土八幡の植木屋旅館へ移つた。

試合は一日から行はれる筈であつたが、雨のために延期された。各都市のチームも我々と同樣に躍起になつてゐるらしい。吾々は、長い旅の疲れが雨のためにすつかり癒えて、元氣が十分に出て來た頃である。

しかし、雨、又雨で、主催者側も困つたと見え、晴間々々を見て試合をやることになつた。八月四日午前九時に入場式と定り、吾大連軍が先頭に立つて式は始まつた。かくて第二回都市對抗競技は先づ東京倶樂部對太洋倶樂部の試合で火蓋が切られた。雨は練習の頃から降つて來た。東京方は雨模樣のために選手も四五人位しか集つてゐなかつたので、大急ぎで電話をかけて參集して貰つた。しかし第二回までやつてとう／＼雨がひどくなつたゝめに試合は一時中止となつたので、吾々は宿に歸つた。午後から再び前の試合の繼續戰をやつたが、遂に東京方の勝利となる。これで愈々吾大連軍は明日午後三時から神戸軍と對戰することになつた。

吾等の試合も亦時に白雨に見舞はれた。併し試合は案外平凡裡にむ對零で我軍の大勝となり、先づ第一回戰は樂に運んだ。翌日は對横濱戰であつたが、横濱は餘り問題にしてゐなかつたゞけに、二十三對零といふ壓倒的勝利を得た。其結果不戰組の大阪軍と吾等は翌日對戰することになつたが、此一戰には吾等は死すとも勝たねばならぬと覺悟し、明日こそは優勝戰だといふ意氣込が吾選手の眉宇に現れてゐた。それ丈け大阪を强敵視してゐたのであるが、事實又彼等は吾等の苦手であつた。

當日は午後零時半から東京對京城のセミファイナルがあつたが、吾等は一時半頃宿を出て七回目から觀戰した。試合は一對一で息もつまるやうな投手戰だ。併し京城が少し押し氣味で、東京のキヤプテンチームが危いやうだ。大阪方も同じ時刻にやつて來て觀戰をしてゐたが、面白いぞ、此試合は京城が勝つのではないかなどゝ言ひ囃してゐる。しかしとう／＼補回戰に入つて京城方はエラーで惜敗して敵に名を成さしめた。

遺憾――頽勢――神のお告

愈々吾々の番が來た。前の試合で一寸待ちくたびれたやうだつたが、兎に角元氣を出してグラウンドに出た。併し何んとなく氣が落ちつかない。三時は過ぎ、四時頃にサイレンの響で、試合は大阪先攻で開始された。

私がプレートに立つた時、何んとなくチーム全體が何時もの大連實業團の意氣がなく、皆がそわ／＼してゐて、一向私の方に精神が集つ

て來ない。

「今日はやられたかも知れない」といふ豫感がピンと來た。第一球ボール、二球目はストライク、續いてボール、ボールで遂に第一打者岡田君に四球を與へて了つた。腹の底であつといふ悲鳴があがつた。やられたと思つて私はすつかり緊張して了つた。次打者犧打、三番打者は梅田君だつた。同君は私が學生時代から最も苦手とする打者で、私は内心困つたものだと思つて投げると、果然左翼前に直球の安打となつた。此一打によつて私の氣分はすつかり大阪方に名をなさしめる原因となつて了つた。とう／＼第一回に一擧二點を先取された。そのためか大連方は打撃に調子が出ず、凡打を續けてゐるのに反して、敵は第二回に打者が二壘手のエラーで生きた後に安打に續いてまた一點を加へられた。これは愈々駄目だと思つて、兎に角山本投手に代るべく主將に申出で、私が一壘に入つた。ところが私が未だ壘へ入つたばかりのところへ投手は二死後一、二壘に走者を置き、一壘に牽制球を投じた。其時に走者と私とが重り合つてゐたので衝突し、ボールは空に飛びスタンドのフェンスに當つたのでたまらない。私が球をとつて急いでホームに投ずれば捕手も亦ボンヤリしてゐて其球を逸して了ひ、其ためにまた二點とられて五點の開きになつて了つた。

絶望だ！といふ心持は各自の胸にあつたが、しかしこんな見苦しい試合をして、敗けておめ／＼大連に歸れるか！ 私達は出發の時の市民の期待を思ふと苦しくなつたが、同時に云ひ知れぬ力が身内に湧いて來るのを覺えた。奮起した吾軍は三回に安打と敵失で二點を回復し、やつと三點の差に迫つた。五回までは敵味方凡打に終つたが、六回に大阪方安江君本壘打して更に一點を加へる。大連もいよ／＼敗けてはゐられない。其裏に又一點を取返す。（此回大阪一壘三木君を長濱君に代へる）

遂に幸運は吾等に微笑みかけた。

丁度七回目、吾等の攻撃の時に、突如ベンチの上から「實業はもう敗けた」といふ小學生の放言が黄色く尖つて耳に入つて來た。此時まで試合に負けてゐた私は、思はず赫となつて「何んだ、此野郎奴！」と泥を摑んで投げつけた位にその小供の言葉が癪に觸つた。ところがまた「大連は負けた」と怒鳴つたものだ。そこで今度は山本君が癪に觸つたと見えていきなりまた泥を投げつけた。しかし此小供の言葉が全軍に大きな刺戟を與へたと見えて、八回攻撃の時に第一打者が一壘手の過失に生きたのが初まりで一點を奪ひ、遂に差は二點に迫つた。

愈々九回は來た。差は二點！ 大連は再び絶望の淵に落ちたが、幸にも吾軍は守備の方であつたゝめに、最後の攻撃が出來る。突進せよ！こゝで實業團スピリットを發揮しなければならぬ。第一打者はどうしても生きよ！大連神社！ 吾等を守りたまへと心に念じた。

打者が立つた。

打つた！ 遊撃へ。駄目だ！と思ふ間もなく球は一壘へ、あゝ一壘手はポロリと落した。瞬間、これで勝つた！ と思つた。吾等の武運を守つて下さつた大連神社に感謝するとゝもに心から一壘手長濱君を拜む。

次はピンチヒッター池永君、彼は大連でゲームをする時にもなかなか運のいゝ人で、今日もラッキーボーイに違ひないと、彼の一擧一動を注視してゐると、彼と實業時代同窓であつた大阪の岡田君が、中堅から走つて來て、投手の鶴田君に彼の缺點でも教へに來たらしく見え

たが、池永君もさるもの、何をといふ氣で打つた。球は投手頭上をバウンドし、遊擊それをとつたが一壘にワイルドスローして、其間中島君二壘スチールに成功してゐたゝめ一擧本壘を奪取し、茲に遂に一點！ 池永二壘にあり、此時私が打者に立つた。一死後ではあるけれど、私の次の打者安藤主將今日は當つてゐない、私はどうしても打たねばならぬ。私は萬神々を念じ、また大連神社のお守りを念じて、必ずこゝで打たしめ給へと、ツーボールまで待つた。

ツーボールナッシングといふ時投手は大抵好い球を投げるものである。その球を私は打つた。

カン、と氣持のいゝ遊擊越の安打となつた。その球を岡田中堅ハンブルしてゐる間に走者二壘から生還！ やつと同點になつた。此刹那觀衆は總立ちとなり、選手は各自に抱き合つて涙を流してゐる者や、聲を立てゝ泣く者もあり、大連のために初めから應援してくれた人々はいふまでもなく、皆がベンチの前をウロ／＼して落着を失つてゐる。私自身も打つた球の音は耳に入つたが、無意識で一壘に入つて涙がボロ／＼出て來て仕方がなかつた。熱涙の込み上げてくるにまかせた。——

其時から大阪方の慌て方と來たらない。敵の陣營は全く亂れた。かうなればこつちのものだ！ 歸りかけてゐた觀衆はまた腰を下ろした。

遂に延長戰に入る。私は山本君に代つて再び投げた。敵もなか／＼剛の者で、逆襲の意氣凄じく攻めるが、かうなると味方の守備は打つて變つて良くなつて、容易に乘ぜしめる隙を與へない。十回裏！ 吾軍は敵失で無死二走者生き、次の打者は山本君、大阪方に危機は來たが、果然山本君の一打で萬事休矣！ 勝利の榮冠は遂に大連軍の上に輝いた。

此時大阪方の無念も思ひやられるが、吾々としてもどうしても負けてはならない立場にあつた、といふよりは是が非でも勝たねばならない試合であつた。

試合終つて東京倶樂部の連中と顏を合した時、明日は愈々君達とやるんだが優勝旗は大連に貰つて行くぜと冗談にはいふものゝ、心では互に「何を」といふ決心の色が眼にギラ／＼光つてゐる。

兎に角今日の試合は決戰だつた。若しあの時に子供の言葉が耳に入らなかつたならばどうであつたか、あれはきつと神の使であつたに違ひない、丁度吾々が氣を落してゐた時にあんな言葉を放つた少年はたしかに天使でなければならない。——

併し大連軍が大阪の強敵に最初五點といふハンデイキャップをつけられたことは大きな苦痛であつた。よくも後になつて盛り返すことが出來たと思ふと、全く山本君の健闘に感謝しなければならない。それに全軍の意氣が一致してゐた事と、大連の後援會の力が大であつたことが結局大阪軍を征服して大連軍を勝利に導いた有力な原因でなければならぬ。感極つて神宮球場を出た私達は、疲れ切つたからだを自動車で牛込の宿へ歸つた。

大阪方は今夜は眠られまい。あれだけの點數の差を以て、九回に形勢が逆轉するとは夢にも思つてゐなかつたであらうから。——吾々も平常なら舌鼓を打つ牛のすき燒も、今夜は腹一杯で、折角の御馳走もまるで駄目だつた。今迄も縁起を祝つて來た連中は「神樂坂に出て活動を見ればいゝ」とか、「寄席に行けばいゝ」とか「氷牛乳を飲めばいゝ」

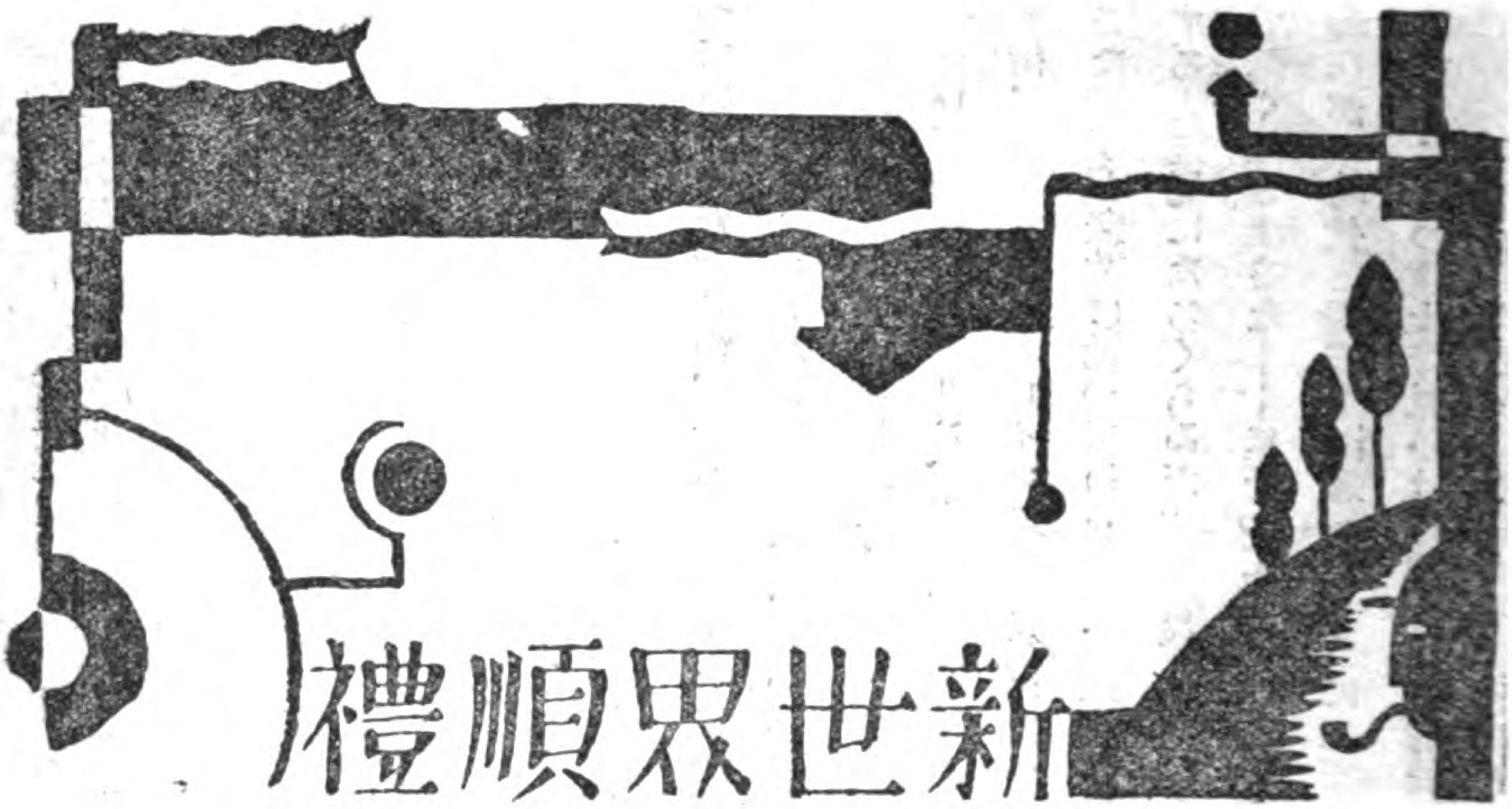
とか云つて、てんでに出かけて行つたが、やがて其連中も十時頃には歸つて來た。併し私達は明日が決勝戰だと思ふと興奮して容易に眠付かれなかつた。

優勝

愈々決勝戰の朝は來た。七時頃、片山博士が明治神宮のお守を授けて下さつた。一同押戴き身につける。

午後三時から東京倶樂部と決勝戰の火蓋は切られた。東京方は前日に引續き新出君が連投した。私は大連の投手として立つた。私は昨日四回しか投げてゐなかつたので肩の調子が馬鹿に好い。試合は果然投手戰となつたが七回目に大連一點を先取し、其まゝ押して遂に一對零で最後の光輝ある勝利は大連軍の上に惠まれた。かくて第二回都市對抗戰に於ける優勝旗は燦として再び遼東の空に輝くことになつた。

此度の都市對抗戰は雨天のために豫定より四日間も遲延したことは遺憾であつた。それに試合が降雨中に行はれたことが多かつたゝめに、思ふやうに實力を發揮することが出來ずに惜敗したチームがあつたのは氣の毒であつた。それに引かへて最初から幸運に惠まれた大連軍はそれらのチームに對して濟まないやうな氣さへする。最後に吾々が優勝した原因を語れば、それは我々の戰が常に炎天の下に於いて戰はれなかつたといふことである。——



黄と白の群像

谷　譲次

アイチミュラ・羽左衛門

『ミスタ・ウザエモン・イチムラ――有名な日本の俳優がこゝに泊つてゐるはずですが、いまゐらつしやいませうか？』

あちこち動きまはつてゐる番頭(クラアク)たちのなかから、やつとのことでひとりの注意を捉へ得た私は、せいの高い帳場(オフイス)の臺ごしに上半身を乗り出して、どなるやうにかう訊いた。

相手の番頭といふのは、縞ずぼんに黒の脊廣を着た、いかにも英吉利のホテルのクラアクらしい五十がらみの赤毛の男である。場處は倫敦ピカデリイのパアク・レイン・ホテル――午前十時。

六月末の蒸暑い曇つた日で、戸外の、世紀的に古いロンドンの雜踏を貫い

て、まへのピカデリイを走る自動車の警笛が、しつきりなしに、それでゐて妙に遠く聞こえてゐる。

メイフエア——と言へば「倫敦のロンドン」だ。ベイスウオウタア、ベルグレヴイア、サウス・ケンシントン、それにこのメイフエアの四つが、いつぱんに倫敦市内で一ばん高級な住宅街となつてゐるが、メイフエアの持つ歴史と香氣にくらべれば、ジョウヂアン時代以後に出來た他の三つの區域は、嚴正な意味で倫敦的であるべくあまりに生々しい。いひかへれば、それほどメイフエアの石と煉瓦は、雄辯に、じつに雄辯に倫敦を語つてゐるのだ。この、十八世紀初期の建築が低い表階段を並べてゐるメイフエアなる地點は、いろいろな裝飾で取り卷かれた中心に小さな寶石が象眼してあるやうに、地理的にいへばごくせまい。南はピカデリイ、北はオックスフオウド街、東はボンド街、西はパアク・レインにかこまれた一劃に過ぎないが、小さな横丁が無數に通つてゐるので、生粹の倫敦人でもうつかりすると迷兒になるくらゐだ。大富豪の邸宅——といつたところで驚くほど小さな——にそつて、ばかに内部の暗い本屋や毛織物店が、時代と場處を間違へたやうに二三軒かたまつてゐたりして、こゝの街上で見かける紳士は何處までもふるい英吉利國の紳士であり、角の太陽酒場から口を拭きながら出てくる御者と執事と門番は、そのむかしワイルドのむらさきの四外套をわらつた御者と執事と門番に完全に——服裝以外は——おなじである。しづかに過去を歩かうと思へばこのメイフエアに限る。近代化、もしくは亞米利加化しつゝあるいまのロンドンに、いぎりすらしく頑固にそして忠實に倫敦を保つてゐるのはメイフエアと巴黎だけだからだ。十八世紀の中頃までは、毎年五月にこゝにお祭があつて、この名もそこから來てゐるのだといふ。成程メイフエアの家は一つひとつが古いエッチングのやうに重く錆びてゐる。そのなかの半月街に、一つちよつと通りへ出張つた窓があるが、シエレイが快活な表情と輝かしい眼とで、本を手に、朝から晩まですわつてゐるのがおもてから見えたといふのはこゝだ。鳥籠と餌入れと水がないだけで、まるで若い貴婦人に飼はれてゐる雲雀が、日光のなかで歌ふために出窓へ吊るされてゐるやうだと當時近處の人が陰口をきいたほど、この半月街の窓とシエレイとは離れられないものになつてゐる。つぎのクラアジス街三番邸には一時マコウレイが住んでゐたことがあり、三二番はよくバイロンが訪問したので有名だし、ボルトン街にはドユ・アブレイ夫人のゐた家があり、そこの玄關にしばしばウオルタア・スコットの姿を見かけたさうだし、チヤアルス街四二番はボウ・ブラメイルの住宅だつたし、ボンド街は倫敦

のルウ・ドユ・ペエだし、アルブマアル五十番は、この屋根の下でバイロンとスコツトがはじめて會つてゐるし——さうしていま、そのメイフエアの西端パアク・レインに、辨天小僧の、切られ與三の、直侍の、とにかく日本KABUKIの「たちばなや」がマハラジヤ印度大名のごとき國際的意氣をもつて雄々しくも——フジヤマとサムライとゲイシヤの藝術國から——乘り込んで來てゐるのだ。パアク・レイン・ホテルは新しい建物で、さして大きくはないが先づ一流。朝の十時、まだあの有名な耳が枕に押しついてゐる頃ほひ——枕をはなれたが最後、耳も耳の主人もともに外出して終日印度大名の一行のごとくうろつく危險があるから——を狙つて、かうして私は彼女を引具し、職務に興味をもつ——といふのはつまり入社後間もない——フリイト街の犬——新聞記者——みたいに奇襲して來た次第である。BANZAI!

と言ふと、いかにも私が、デエリイ何とかの訪問記者にでもなつて、この「日本むすめ（フラッパア）の寵神（アイドル）」——じつさいデエリイ何とか紙は羽左衛門の寫眞を掲げてかういふ說明をつけてゐた。再びBANZAI!——から何段かを埋めるに足る Story を引き出すべく、常備鉛筆（エヴァ・シャアプ）を片手に「好意的批評眼」をぽけつとに忍ばせ、いまし編輯長の激勵裡に「紙屑の谷」を驅け出して來たやうに聞こえるが、じつはたゞ、たまたまこの六月の朝、單なる旅行者としての私と彼女が、Doing the-London の重要な一つであるかの名だたるメイフエア彷徨を實行しながら、英文學の教授みたいに穩厚なそしてクラシツクな品位を養ひつゝある最中、ピカデリイへ足を向けやうとして丁度パアク・レインへさしかゝつたとたん——いつたい何ごとによらずいつも「思ひつく」のは彼女にきまつてるんだが、この時も彼女が思ひついて、and as an idea came to her 、歩道に急止して私を使嗾したのである。

この近處のホテルに羽左衛門が來てますよ、と。記憶が私を强打した。倫敦の英字日本新聞アサヒ・プレテンにかう出てゐた——。

巴里より來倫したる市村羽左衛門氏夫妻は目下ピカデリイのパアク・レイン・ホテルに宿泊中。ちなみに近日蘇格蘭土に遊び、歸來六月下旬まで滯英の由。

ついでだが、この新聞はなかなか奇拔で、じつによくロンドンに於ける「日本紳士（ジヤパニイス・ジエントルマン）」の動勢を調査し、細大洩らさず報道してゐる。まづ役所・銀行・日本關係の公共機關の所在からはじめて個人の移轉到着退國はもちろん、出產結婚死亡にいたるまでなに一つこの紙面から逃れることは不可能だ。それに廣告がふ

るつてる。
日本語で印刷してある部分だけ見本に二三。
多年日本紳士諸彦ノ御引立ヲ蒙リ廉價ニ御調製仕候。
これはフエンチヤアチ街一四九番のブリストウ&スタアリング洋服店。御叮嚀に日本字の書き版である。

日本御料理仕出シ御旅館　日ノ出家
日本食料品製造元特約代理店トシテ特別安價ニ販賣仕候
英國製毛布ヒザ掛類
製産地直接取引ノ爲メ日本ニ輸出卸値ト同様多少ニ拘ラズ勉強仕リ御便宜ノ爲メ事務所トシテ日ノ出家ニ賣物取揃申居候間御買上被下度候
創業千九百八年　　矢野商會

これも書いた字。つぎは活版だ。

支那御料理並にすき燒
一、支那御料理特別獻立
晝食壹志八片　夕食貳志六片
其他御尋ねに從ひ各位樣の御嗜好に相叶ひ候御料理色々御紹介可申上候
一、すき燒開始
牛鍋　貳志六片
鳥鍋及豚鍋各參志及參志六片
鴨鍋及鯛ちり各參志
プライベイト大宴會室の設備も有之候

これこそストランド「中國飯店」――藤井米治氏大奮闘――の紙上披露である。すき燒開始並びに神秘的な豚鍋よ、永久にBANZAI!

さて、新聞のことはこれでいゝとして羽左衛門だが――。

かういふいきさつを經たのち、こつぜんとしてパアク・レイン・ホテルの帳場に出現した私たちである。市伽古トリビユウンの寫眞班が亞米利加漫遊中のニウジイランド鑛泉王を襲撃に來たやうに、うつかりしてゐる番頭の顏へ、私は出來るだけ氣取つた發音を吹つかけてやる。

『ミスタ・ウザエモン・イチムラといふ日本の俳優の方が――。』

と言ひかけた私は、じつはこゝらで、その赤毛の番頭が大いに感激の色を呈し、思はず、AH! とか、OH! とか多分の肯定と「!」を含んだ聲を發することであらうと内心期待して、事實そのために言葉を切つて先方に機會をあたへたくらゐだけれど、鈍感に洋服を着せたごとき感あるかの番頭は、依然ぽかんとして、『ミスタア誰(フウ)?』

『ミスタ・ウザエモン・イチムラ――。』

羽左もミスタア・ウザエモンちやあ何うもめりはりが合はなくて申譯ないが、これもこの場合まことに致し方ないといふものは、橘家さんや大師匠ではこの赤毛の「をとこしゆ」に一さう通じつこないんだから――。

現にまだ頤と合點がゆかないとみえて、かれ番頭(クラアク)は、灰いろの眼をぱちくりさせて謎に面したやうに默つてゐる。假りにも羽左衛門(たちばなや)を知らないなんて、何たる――なんかといくらむかついてみたところで、こゝは英吉利ロンドンの、しかもさつきもいふとほりのメイフエアである。英詩のごとく飽くまで上品に、そして、何よりも怒つてはいけない。

こゝで、機をみるに敏な私は、とつさに羽左衛門こと市村錄太郎氏を英語ふうにもじつたのである。

『The p rty I want is Mr. ラツクテロ・アイチミユウラ。Now, don't say you don't know him!』

『MR・R・アイチミユウラ、え？！』

とサンスクリツトの呪文を唱へるやうに口中に繰りかへしながら、「羽左衛門」を知らないほど間の拔けた彼の顏にも、漸時に了解の情がそれこそ倫敦のしのゝめのやうに擴がつてきて、

『乞ふ待て(プリイズ・ウエイト)。』

なんかと仔細らしく指を上げてみせたのち、宿帳のところへ行つて暫らく頁をめくつてゐたが、やがてのことに發見の喜悦とゝもに、

『おゝ！ ミスタ・アイチミユラ、いえゝす、居ます、たしかにさういふ名の人が泊つてゐます――が、今は三 四。さあ、お部屋にゐますか何うか――。』

といふわけで、やうやう電話で羽左衛門の在室を突きとめ、それつ！とばかりにかうして昇降機上の人となつてきた六時の六三七號室である。

ノツク。開扉。來意。侵入。

『どうぞちよつとお待ち下さい。いま丁度ひげを剃つてをりますから。』

といふ東道役のことばに、そのまゝ控便に別室へ通れば、眼の下にはピカデリイ・サアカスからハイド・パアクへと、およびその反對の交叉――車輪と靴による――のさわめき、鐵柵のむかうにグリイン公園の芝生、メイフエアの家々の煙突の林、車道を横ぎる女、手を上げてタキシを呼びとめる老紳士、郵便箱をあけて袋いつぱいにさらへ込んでゐる配達夫、それを見物してゐる使小僧(メツセンジヤア)、&スワンエドガアの赤塗り商物自動車、If Its, Trueman, It Is a Beer の看板――それらが靜斷に扁平に鳥瞰されて、朝のおそいこゝらにもさすがにもう晝の事務の開始さ

れてゐるのを知る。が、一たび眼を轉じて室内を見わたすや、かたはらの卓子に、主人公羽左衛門が愛讀するらしく「面白くてためになる」日本の娯樂雜誌――幕末劍客・妖婦列傳・成功秘訣・名士訓話等々滿載――が二三投げ出してあるきり、こゝばかりはなつかしき故國の勇敢な延長だ。

いかさま「日本娘の精神――カブキの偶像」が正(まさ)しく鬚をそつてゐるとみえて、水の音が長閑にきこえてくる。そこで、その雜誌の頁をばらばらと繰つてゐた私は、間もなくすぐ眼のまへの戸口に、黒と銀の派出なドレッシング・ガウンをまとつた半白の一人物が、タオルで頬を撫でながらぼつんと直立してゐるのに氣がついた。市村羽左衛門の登場――はいゝが、なるほど今まで「剃(そ)」つてゐたらしく、しきりに頤のあたりを氣にして拭いてゐる。縞フランネルのパジャマのずぼんをだぶだぶに折返して――西洋のは脚が長いから――その上から洒落れた部屋着(ガウン)なんか引つかけてはゐるものゝ、だんまりのうちによく見るとやつぱり辨天小僧の、切られ與三の、直侍の、さうしてKABUKIの「大たちばな」だ。いくら西洋のドン・ジュアンに扮したつて爭はれないことには耳が裏切つてゐる。と同時に私は、この倫敦ピカデリイとメイフエアのあひだにあつて、たしかにちようんと木の頭を聞き、のしのついた引幕の搖れを見、あの雜色的な「おしばや」の空氣を感じ、ぷうんと濃厚な日本のにほひを臭ぎ、辨松の膳――幕あひの食堂で――にむかつて衛生御割箸をとつた氣になつた。のは、私だけが勝手にそんな錯覺におち入つたにすぎなく、一日本紳士市村錄太郎氏としての羽左衛門は、アブドュラの卅八番、薔薇の花びらで吸口を卷いたシガレットをくゆらしながら、いかにも外遊中の日本紳士らしくぼうつとしてそこに腰かけてゐる。

以下、面談(インタヴュウ)――といひたいところだが、羽左衛門によればただ――。

倫敦は、地味でおちついてゐて。

巴里は、騷々しいが呑氣で面白く。

亞米利加は、おそろしく便利でにぎやかだが、ロンドンが一番好き――おちついた氣分だから――といふだけのことで、

『何しろあめりかは大したものです。早いはなしが、食ひ物屋へ出かける。あちらでいふカフエテリヤ、つまりレストランでさね。あなた方もまあ一度は亞米利加へも行つてごらんなさい。這入るてえとかう、ずらりと機械みたいな物が並んでて、穴へ金を入れると自働でもつてパンが出る、ね、肉が出る、はゝゝ、コップにコウヒイが出て一ぱいになると止まりますさあ――つて調子で、萬事が簡便主義です。そのかはり人間も簡便

だ。あはゝゝ、エロウストン・パアクですかね、それからナイヤガラ——芝居は駄目です。活動に押されましてね、活動のはうが簡便だから——そりや勿論さうでせう。活動はさかんなものです。』

『こつちへいらしつて、たべ物は何うです？べつにお困りぢやありませんか。』

『いえ。日本にゐても私は洋食が好きでしてね、巴里のトウタルジヤン、あそこはうまいですな。倫敦ぢやあスコットのステイキ——えゝ、芝居はずゐぶん見ましたし、その方面の人にもいろいろ會ひましたが、日本の芝居はどうも時間が長すぎる。あれあ一つぜひ改良しなくちやあ——それにこつちは背景や舞臺裝置を取りかへるのが非常に早くてなだらかだから氣あひが短い。これもいいことです。服裝ですか？男は洋服に限りますね。が、女は？さあ——こつちの女は綺麗な脚をしてゐる。だからああ脚を出すんでせうが——ネクタイ？亞米利加は派出です。で、私もはでなやつをして來たんだが、ある人に注意されましてね、じつさい英吉利は、みんなくすんだネクタイをしますね。あめりかみたいなのをしてると人が見ます。私もこちらで買つて掛けかへました——何か蒐めてる物？さう、行つたところで匙をあつめてゐます。』

ここで羽左がかへり見ると、東道役がいままで蒐めた記念匙を列擧する。

『ホノルヽ・桑港・ニウメキシコ・市俄古・ナイヤガラ・紐育・巴里・倫敦・エデンバラ・ストラットフオウドオンアヴオン。』

『それから、歸つて楽屋へ飾らうと思つて方々で寫眞を買つてゐます。』

羽左衛門がつけ足した。

何しろ、あのせつかく大きな耳が何の役にも立たないんだから、どうやら眼で見たことと、はうばうの日本人に言はれたことしか這入つてゐないわけだ、などと誰やらわるくちをいつた人もあつたやうだが、たゞ一つたしかに實感と思へたは

『西洋ぢやあ何でも自分でするからいゝ。ことにかうして旅をしてると、まあ自分のこたあじぶんでするはうが多がさあ。それが自然運動になります。それに食ひ物の時間がきまつてゐて、ほかの時に勝手に食ふわけにいかない。日本ぢやあんた、よる夜中に歸つて來ても、ちやあんと女中が起きて待つてゝ、茶を出す。すると意地がきたないから、おい、何か食ふものあねえのか、なんてね——日本でこつちふうにやつてごらんなさい。何だ、旦那が歸つてきたのにも茶も出さねえ——。』

こゝらで私たちも座を立つた。

歸らうとすると、羽左衛門が東道役に時間をきいてゐた。
『タイム？』
と英語で―じつに流暢な英語で―

綠蔭

芝生に日光がそゝいで、近くはかげらふに燃え、遠くは煙霧にかすみ、人はみどりに醉ひ靴は炎熱に汗ばみ、花は蒼穹を呼吸し、自動車は薫風をつんざいて走り、自動車に犬が吠え、犬を白衣の佳人がパラソルを傾けて叱り、そのぱらそるに――やつぱり日光がそゝぐ。

まるで印象派の點描のやうに晴明な効果を享樂するのが、初夏のハイド・パアクだ。

草に男女。遠足籠(ピクニク・バスケツト)。サンドウイツチ。

水にはボウトと白鳥と、それらの影。

さうしていたるところに陽線と斑點とtete-a-teteと笑聲。群衆の會話。

男と女・男と女・男と女。

そのなかに私たちふたり。

椅子にかけて、遠くの野外音樂が送つてよこすかすかな音の波紋に耳をあたへてゐると――。

草を踏む跫音が私をふり向かせた。制服の老人が革のふくろをさげて立つてゐる。

青い眼の愛蘭人の微笑だつた。

『二片(ペンス)づつどうぞ。』

私も、わけもなく好感にほゝえんでしまふ。

『――お構ひなく(ノウ・サンキユウ)。』

老人がしづかにくり返した。

『二片(ペンス)づつどうぞ。』

私は重ねて辭退する。

『いゝえ、有難う。こゝで結構です。充分きこえますから。』

すると、老人の顏に困惑がうかんだ。言ひにくさうにもじもじしたのち、彼は手に提げた袋の小錢をがちやがちやさせて、

『椅子にかける方には二片づつ戴くことになつてゐます。そのかはりこの切符を上げますから、これさへお持ちになればけふ一日ハイド・パアクとグリイン公園のなかなら何處にかけても構ひません。もしまた私の仲間が切符を賣りにきたらこれを見せればよろしい。ひとり二片です。』

倫敦へ着いて二三日してから、私たちはふたりきりでハイ

ド・パアクへ來てゐるのだから、お金をはらつて椅子にかけることなど知らなかつたが、道理で氣がついてみると、制服の切符賣りがあちこち椅子から椅子へと歩きまはつてゐる。そこへくる前にどこかの椅子で買つた人はその切符を見せてゐるし、はじめて掛けた人はそこで椅子代を拂つてゐる。もつとも無料の長腰掛(ベンチ)もあるが、たいがいふさがつてゐてなかなかかけられないけれど、二片の椅子は數が多いからすこし歩いて草臥れたところで隨所に腰がおろせる。この、公園に椅子を供給するのは一つの會社にでも請負はしてあるらしく、ロンドンぢう何處の公園へ行つても、車掌のやうな帽子に裾の長い輕外套(ダスタア)を羽織つた椅子代あつめの多くは老人が、綠いろの展開のあひだをゆつくり大股にあるいてゐるのを見かける。公園の入口に机でも据えてそこで賣つたら宜さそうなものだが、何人あるひは何十人かの老人が一日いつぱい公園中を歩きまはつて二片の椅子料を集めるはうもあつめるはうなら、勝手に腰かけてゐて取りにくれば默々として金を出すはうも、いかにもいぎりす人らしく、莫迦々々しく野呂間で神經のふといところがうかゞはれる。はるかむこうの芝生を豆のやうな人かげがこつちをさして旅行——それは全く旅行といふ感じだ——してくる。近づくにつれてそれが椅子の切符賣りといふことを自證する。かれは、こつちの端に椅子を占めてゐる人を望遠鏡ででもみとめて、すでに二片の金を拂つて切符を所持してゐるか何うか、もしまだならその金員を徵集すべく、かうしてはるばると、そして急がずあわてず、同じ步幅をつゞけて旅してくるのである。掛けてゐるはうもまた、切符の有無にかゝはらず、豆から針、針から燐寸の軸といつたやうにだんだん大きくなつてくる切符賣りの姿を、見るでもなく見ないでもなく、悠然と腰をおちつけてゐる。やつとのことで傍まで來ても、もし客が默つて既買の切符を示せば、制服の老人はちよつと帽子をとつて汗を拭き、そのまゝ直ぐ、またもや遠くに霞む椅子をめざして新しい長途の步行に發足するだけだ。じつに冷靜にそれを繰り返してゐる。この、ロンドンの公園の椅子賣りは、よく英吉利人の「やり方」を象徵化してゐて、私には印象ふかく感じられた。何十人何百人の人間を使はうが、決まつたが最後、なんらの感情なしに規定どほりに「實行」するのである。その愚鈍にまで大まかな着實さがいさゝか私の敬意を強ひて、倫敦といふと、私は反射的に、小さな鞄を胸へ下げて公園ぢう半哩一哩を遠しとせず、自信と事務に滿ちて重々しく芝生を踏んでくる制服の「老いぎりす紳士」を腦裡にえがくのだ。もしこれが亞米利加なら、廣いところを一々二片あつめて廻るかはりに、さしづめ白銅(ニクル)一個入

れなければ腰かけられないやうに全部の椅子を改造することだらうし、そしてまたその椅子が、白銅一個入れるごとにちりんとかがちやんとか、なんと恐しく證據的な大音響を四隣へむかつて發散することであらう。これにくらべれば、英吉利のは遙かにそこにおのづから古典的な一つの趣きがあるやうな氣がする。

――などと考へたのはあとのことで、そのときは一片出してもつとよく音樂の聞えるところまで這入りこむのだと思つたから。私は、いや、こゝで澤山だ、ノウ・サンキユウと挨拶したわけだつたが、そのお爺さんの說明でこゝろよく四片(ペンス)を投じ、ところどころで切符うりが來るたびにそれを呈示しながら、休みやすみ半日公園をうろついたのだつたが――

草に日光がそゝいで音樂が沸き、KODAKが活躍し、演說が人をあつめて兵隊は戀人と腕を組み、夫婦は寢そべり子供は何時の間にか柵につかまつて獨り步きし、そこにもこゝにもカタネイの發音が漂つて――一くちに言へば英吉利人の好きさうなハイド・パアクの油繪だ。いくぶんでもこの國の人の興味をひくためには、それは何よりも先に出來るだけ平凡であることを必要とする。

公園を出やうとして右の道へ來たときだつた。またすこし憩(やす)まうといふことになつて見廻すと、ちようどそこに空いた椅子がふたつ私たちを招いてゐた。で、腰を下ろしながら氣がついたのだが、何だか眼のまへの芝生に粗らながら人だかりがしてゐる。

大きな楡の木のかげである。

白づくめの若い保姆が乳母車を停めてやすんでゐるのだ。

黑塗りの小さな乘物、そのなかのふつくらした白布(リネン)、それらのうへにまんべんなく小枝の交錯を洩れる陽が降つて、濃い點が無數に搖れてゐる。乳母車の主の赤ん坊は、白い被り物の下から赤い頰をふくらせて、太短い直線的な手の運動で、非常に熱心に、自分の靴下の爪さきを引つ張つてゐる。保姆のほかに女中がひとり、それに、すこし離れて私服の役人らしい紳士がぶらりと立つてゐた。

みんなが赤んぼうを見て往く。なかには帽子をとつてゐる人もある。

保姆は片手を乳母車にかけて、うしろ向きに女中と話しこみ、赤んぼはひとりでいつまでも自分の足と遊んでゐる。一生懸命に靴下を摑んで、ながいことかゝつて或る程度まで脚を空(くう)に上げる事業に成功するんだが、そのうちにぽつんと切るやうに手が離れると、身體ぜんたいがころつと反り返つて驚いて

両腕をひろげる。そしてまたしばらく自分の足さきを凝視し、その誘惑に負けたやうに手を出すのだ。いつまでも同じことを反復してゐる。

赤んぼがびいいんと足をはぢいて車が動揺する時だけ、保姆はちよつとかへりみるが、小さな主人が飽きずに幸福にしてゐるのを確かめると、安心してふたゝび女中とのおしやべりに熱中し出す。役人らしい男は、喫みおはつた紙巻をぽろんと遠くの道へ捨てゝ欠伸をした。

来る人も往く人も足をとめて、ほゝえみと軽い礼を赤んぼへ送つてゐる。

草を踏んで近づいてくる跫音が私たちをふり向かせた。さつきの切符売りの老人である。眼の蒼い愛蘭人の微笑とゝもに、そつと彼の低声が私たちの耳のそばを流れた。

『あれ――知つてますか誰だか。プリンセス・ニリザベスですよ。』

エリザベス内親王殿下は、現陛下の第二皇子ドユウク＆ダッチエス・オブ・ヨウクの第一王女である。

椅子を立つて歩き出すときの肩ごしに覗くと、内親王殿下には御機嫌いと麗はしく、まだおみあしへ絶大な御注意を集中されて、あんまりつゞけさまに引つぱるものだからすつかり伸び切つてしまつた御靴下のさきを、不思議さうに御研究なされてゐる最中だつた。

ずらりと行人が垣をつくつて、あらゆる角度からカメラがならび、瞬間シヤタアの音が草を濡らす小雨のやうだ。無意識らしく話しこみながら、保姆がちらと手を上げて髪を直した。

SAKURA

一七一二年に発行された、ABCのいろは歌留多みたいな"Trivia"のなかに、

A――小路(アレイ)はぶらぶら歩きに持つてこいだし、
B――本屋(ブック・セラア)の主人は天気の予言が上手だし、
C――群集(クラウド)は馬車がくると左右にわかれ、
D――塵埃屋(ダストマン)には閉口だ。

などとE・F・G・Hとtrivialなことを詩の形式であげてある。

月並(トリヴイアル)には相違ない。が、よくこのABCの詩をにらんでしばらく眼をつぶり、それから眼をあけて、こんどは行と行のあひだをぢつと凝視してゐると私はそこから昔の倫敦が青白い姿でよろばひ出てくるのを見るのだ。

私は空想する――二十二世紀まへの倫敦の街上を。

織るやうな人通りだ。

黒子を貼つた貴婦人と相乘りの輕馬車を驅つていく伊達者。

その車輪にぶら下がるやうにして一しよに走りながら、大聲に哀れみを乞ふ傴僂の乞食。何といふそれは colourful な世であつたらう!

古本屋のおやぢは一日いつぱい往來へ出て兩手をうしろへ廻し、空を見上げて天氣の豫言に夢中だ。通りすがりの御者の鞭が一ばんあぶない。ぴゆうつと唸つておやぢの丸帽子を叩きおとし、掛聲を殘して行つてしまふと、鵞鳥のやうに追つかけてやうやう拾つた帽子を袖で拂ひながら、あとからおやぢが眞赤になつて呶鳴つてゐるが、町の人の笑ひ聲でそれはおやぢ自身にさへ聞こえない。

單純(シンプル)で、そして樂しく華やかな過去のろんどん街上圖だ。これらすべてはあの善くうつくしき時流といふものの働きかける魔法かも知れないが、いま私たちが、その單純さ、その噪がしい華やかさ、そのロンドンらしい「遊奉されたる蕪雜さ」において、この「巷の詩」のもつ調子(ニユアンス)とすこしも變らないものを見出し得る通りが、こんにちの倫敦にたつたひとつ存在してゐるとしたら、それは、「すでにロンドンの失つたものをロンドンに求める」無理な旅人にとつて、たしかに一福音であると言はなければなるまい。

チヤアリング・クロスだ。

AH!ちやありんぐ・くろす!

いつたい亞米利加人や英吉利人は倫敦を征服――完全に見物――しやうとする場合、この摑まへどころのない漠たる大都會に立つて、そもそも何處からその事業に着手するかといふと、それはハイド・パアクの一角からはじめることに、ほとんど因襲のやうにきまつてゐる。そこに、公園の內に面して東側にちよつと人眼につかない灰色の石造建築物が立つてゐる――これこそロンドン一番地とでもいふべきアプスレイ館(ハウス)である。このロンドン市一番地といふ概念は、よくこゝを起點にして倫敦の「足による研究(スタディ)」が開始されるからで、もちろん番地それじしんは何ら公式の權威を持たない。現にアプスレイ館のほんとの所在(アドレス)はピカデリイ街一四九番だ。が、それほどあめりか人なんかが「ロンドン一番地」を重要視して、かならずこの家のまへから倫敦見物の足を踏み出すことにしてゐるに反し、佛蘭西人はふらんす人らしく藝術的不整頓を愛する好みから、このおなじろんどんに獨特の出發點をもつてゐる。それがこゝにいふチヤアリング・クロスなのだ。

そのむかしいぎりす島の王様が皇后の棺をウエストミンスタア村の寺院へ埋葬するため、ともらひの行列を仕立てゝテムズの河畔を進んだとき、途中いくつかの休み場所をしつらへたのだつたが、當時チャアリング・クロスは、ウエストミンスタアへ這入る手前の、最後の葬列休憩所だつた。あの、倫敦の歴史とは切つてもきれないドクタア・ジョンスンは、其の時の淋しいチャアリング・クロス村が後日人間の潮（タイド）が浪をなして寄せては返す濱べになるであらうといつてゐる。その豫言のとほりに、いまのチャアリング・クロス街は大ろんどんの中心となつて、市の劇的生活の主役のひとつを演じてゐるのだが、ＡＢＣの詩にあらはれてゐる田舍町（スモウル・タウン）めいた人混みと音律とあの色彩、それはその舞台面にふさはしい狹く暗い、曲りくねつたチャアリング・クロスにだけ、いまもそのまゝに生きて動いてゐるのだ。

時間と煤煙と霧に黑ずんで、昔とほりの輕い心臟の群集を兩側の歩道に持つてゐる英吉利での羅典區（カルテ・ラタン）——私は、皮肉で、粹で智的なフリイト街の雰圍氣とゝもに、この細い一本道の提供する古めかしい樂天さ（ケア・フリイ）を愛する。チャアリング・クロス——あまりに多くの不可思議（ミステリイ）を見てきた町。

新々あらびや夜話が鑛脈のやうに地底を走つてゐる往來である。

何と澤山の物語の主人公と女主人公がこのまち筋を歩かせられ、またこれからもどれだけその人道を踏むことだらうか——ＯＨ！そして小説のなかの彼らめいめいの用事と目的と感情、それらのすべてを、過去のものも來るべき作家のペンに宿る性格も、書物を讀むやうにすつかり心得てゐるのがチャアリング・クロスだ。なぜなら、人はそつくりろまんす中の人物となつて魅縛的なこゝの敷石に立つ——と言はれてゐるほど、それ程じつさいチャアリング・クロスを晝夜上下に押しかへす通行人は、ロンドンの他のどの町をとほる人ともちがつて、いぎりす人らしくない一種ぼへみあんな理解に溶けあつてゐるやうに思はれる。

チャアリング・クロスは古本の港。

トテナム・コウトは家具の山。

この、古本と古本屋のおやぢと、おやぢの自慢する天候觀測能力とごみだらけの小さな飾り窓とのチャアリング・クロスを、トテナム・コウトの地下鐵（チュウブ）停車場から新オックスフォウド街を越して二三歩左へ切れたところに、すこしでも注意ぶかい人なら、そこに、一風變つた人種の出入によつてしきりなしに不氣味に揺れてゐる一つの戸口（ドア）を發見してぎよつと——その最も不用意な瞬間に——することであらう。

デンマアク街X番——上に、SAKURAと金文字が讀める。

日本御料理「さくら」のまへに、私たちはいま立つてゐるのだ。

想像をも許さない「東洋神秘の扉」——それが現實にかうして倫敦の一横町へむかつて、冒險心に富む全市民のまへにひらいてゐるのである。

さくら—— Ah, Yes! Just off Charing Cross!

日本の「ロ」のオアシス。

日本旅人のれいんでゞうだ。

何といふ民族的に禮讃すべき存在であらう！——なんかといくら私ひとりでさわいでも、日本にゐる日本の人には何だか一から譯がわからないかも知れない。が、解らなくても構はない、とにかく、ロンドンへ着いた日本人のほとんど全部が、この戸へ面したとき、やつとのことで一つの望みへ辿りつき得た大きな喜悦を、その涙ぐんだ溜息によつて表現するのだとだけ言つておかう。「あゝ——！」と。

そして、もう一つ、もし幸ひにして諸君が些さかの同情と理解をもつて聞いてくれるならば、私はこゝへかうつけ足したい——つぎの刹那、私たち——と言ふのは倫敦へ着いた日本人——は、勇躍してドアを蹴り、完全に萬事を忘却して「頭から」にそのさくらの內部へ dive する、おみおつけの海に拔手を切るべく、お米の御飯の山を跋涉すべく、はたまたお醬油の瀧に浴みすべく——。

といふと、ばかに大げさにひゞくが、食物は民族の血と骨と肉を作つてゐるばかりでなく、事實歷史的にそのこゝろをも形成してゐるものだと私は信ずる。いや、信ずるといふよりも、じつは今度の旅行によつてそれを發見し痛感してゐるのだ。だから私がこゝに、海外旅行中の全日本人を代表して——はなはだおこがましい次第だが單に便宜上——日本の食物に對する止むにやまれぬ正直な告白——そして他人の正直な告白を嗤ふ權利は神様にも惡魔にもないはずだ——をはるかに故國なる諸君に寄せたからといつて、それは何も私だけが人なみ外れて食ひしんぼうな證據でもなければ、第一、なるほど問題は食物に相違ないが、その奧底に、飲食物なる最も端的な本能的なかたちを採つて「遠い祖國」への戀ごゝろが——可哀さうにも！——動てゐることを考へていたゞきたい。いやに辭を弄して自分の意地きたないところを辯解これ努めてゐるやうだが、とまれ、この「日本食へのあこがれ」—— only too often 私と彼女はこの思鄕の發作におそはれる——ばかりは、日本に居ることに

よつてあまりに其の境遇に狎れしたしみ、恵まれた運命に感謝することさへ忘れてゐる大それた諸君には、たうてい察しが届くまいと私は逸早くあきらめてゐる。しかし、私は確信する。私がこの紙とペンに托して私の最善をつくしたなら――何と大變なことになつたものよ！――すくなくとも幾らかの實感が滲み出て、それが諸君を打たずにはおかないであらうと。

こと食べ物に關して來たらつひむきになつて申譯ないが、ま、一さいの議論はあと廻しにして早速ＳＡＫＵＲＡの戸をあけるとしやう。

戸を開けると、倫敦チャアリング・クロスのそばに、この日本御料理さくらである。

うす暗い帳場のわきを通つて階下の食堂へ出る。高い窓から採光してあるだけなので、くもつた日には晝でも電燈がともつてゐる。壁にそつて白布の食卓、中央の机には「なつかしい故國の新聞」が二三種綴つてあつて、久方ぶりに相見える餅菓子どら燒・やうかん・金つばの類が硝子器のうへにほとんど宗教的敬崇をもつてうやうやしく安置してある。このろんどんの眞ん中に、こゝだけは切り離されたやうに見るもの聞く物すべてが「日本」だ。いつ行つても大概どの卓子もふさがつてゐて、ＡＨＡ！なんと多勢のにつぽん人！みんな嬉しいことには私たちとおなじ黑い髪、黄色の皮膚、眼のつり上つた生眞面目な顔高い頬骨と短い四肢――位地と職業もほとんど一定してゐる。正金のＡさん・住友のＢ氏・三井のＣさん・郵船のＤ君・文部省留學生Ｅ教授・大使館のＦさん――夫妻・子供・それに日本から伴れてきてゐる女中――新聞社特派員のＧ君・「商業視察」のＨさん・海外研究員のＩ君・寄港中の機關長Ｊ氏――これらは、すこし大きな歐羅巴の町なら何處でもかならず見參する「在外同胞」の典型である――が、めいめい日本へ歸つたやうな、at home さをもつて自由に箸をうごかし、そしてより以上非常に驚くべき自由――おゝ！感謝すべき自國語の特權よ！――をもつて談じかつ笑つてゐるのだ。

テエブルにつくと、ＨＯＮ給仕人――日本人の――がＨＯＮ獻立表（メニュウ）――日本語の――を持つて〝Ｎｏ.〟のやうに無言に接近してくる。晝食二志（シリング）・夕食三志六片（シリングペンス）とあつて、ア・ラ・カアトのほうを見ると、からだ。

そのいかに本格に日本的であるかを立證するため、左に出來るだけ忠實に寫し取ることにする。

舌代

お吸物　一志

刺身　十一片

酢の物　十一片
天ぷら　一志五片
そば　いろいろ　十一片より一志六片迄
うどん　いろいろ　同
さるそば　十片
蒲鉾　十一片
大根おろし　六片
味そ汁　九片
うに　しほから　四片
御飯　九片
御漬物　三片

その他いろいろとあるとほりに、ぬた、したし物、湯豆腐、冷豆腐、でんがく、にゆうめん、冷そうめん、茶碗蒸し、小田巻むし、蛤蒲焼、海老鬼殻焼、天丼、親子丼、海苔佃煮、寄せ鍋、鯛ちり、牛鍋、かきどふ鍋、鳥鍋、鴨鍋、御寿司、御辨當――およそ普通日本料理のすべてを網羅してゐて、餘白に曰く。

多人數樣の御宴會には特別勉強致します。

御仕出し御料理その他御辨當御壽司などの御注文は多少にかゝわりませず迅速に御屆け申上ます。

月　日　さくら　敬白

ちなみに英貨一片（ペンス）は日本の約四錢、一志（シリング）がざつと五十錢に相當することといふまでもない。

さて。

そこで私たちも「日本へ歸つたやうな氣」になつて片隅に腰をおろし、耳へ飛びこんでくる雜然たる「日本」の物音を心しづかに味はつてゐると――。

給仕人と女給――ともに日本人――が二階の台所へ向つて注文を通す聲がはつきり聞こえる。

『定食ツウ！』

けだし「ツウ」は two にして二つの意味であらう。

『ナンバ・フオア、味噌汁スリイ願ひます。』

四番さんおみおつけ三つといふところ。

『ワン新香、おうらい！』

『海苔まきフオア・六人（シックス）！』

『ナンバ・セヴンのお椀まだですか。』

『十一番さん、御飯（ライス）おかはり！』

皿の音、澤庵の香、お醤油のこげるにほひ、おつゆを啜る聲大なひゞき、「いらつしやいまし」「お待ち遠さま」「有難う存じます」の聲々――それに混じつて食堂ぢうに色んな日本語が縱横に走り交してゐる。

『おい君、巴里で行つたかい？ええ？ほら、あそこさ、例のところさ。はゝはゝはゝゝ。』

と大聲を發してゐるのは、若い會社員の一團――恐らくは一つ橋出らしい郵船の人たち――の食卓である。

『いや、そのことさ。じつはかうなんだ――。』ひとりが答へかけて低聲になると、みんなの首がまへへ出て話し手のはうへ集まる。

隣りに靜肅にお刺身をつゝいてゐる二人の老人組は、その端正さ、其の謹嚴な態度から押して、ともに大學教授何かに博士に相違ない。口をもごもごさせて何か言つてゐるやうだが、ときどきウヰインといふのが聞えるところから見ると近くウヰインから來倫したものらしい。泰然と落着いて二本の箸をあやつつてゐる容子にどことなく中華大人の風格があつて、なかなか頼母しい眺めである。

こつちの卓子には、頭をきれいに分けて派出な兩前の服を着た日本青年――N男爵嗣子オックスフオウドの學生――がとうに食べおはつたお膳をまへに一月前の東京の新聞に讀みふけつてゐる。そばの家族づれは領事館の人らしい。七八つの男の子が上手に日本言葉と英語を使ひわけてゐる。

『わつはつは！』

といふ猛烈な笑ひ聲が若い會社員のてえぶるに爆發して、一時滿堂の注意をあつめる。かれらは「若い會社員」らしいいはゆる「わいだん」を一しきり濟ましたのち、こんどはゴルフの話題だ。

『そりやあ畑中君にやあ敵はないさ。何といつたつていゝドライブだからなあ――。』

『しかし、はじめのうちから早く廻らうとするのはうそだね。』

『畑中なんか君、玄人(プロ)に言はせるとゴルフぢやないつていふぜ。』

畑中君はその場にゐあはせないとみえて、君と君のゴルフがあらゆる批評を受けてゐる。

『三味線は宜うがすな。』

いづくからともなく澁い聲がする。あちこち見廻して聲の出どころを探すと、いつの間にか商用の重役らしい三人づれが一卓を占めて、牛鍋のアルコホル泥爐をかこんでゐるのだつた。

『婆さんは殘してきても何とも思はんが、三味線だけは手離せんでな、わざわざ持つて來ましたが、洋行に三味線でもあるまい、慶應へ行つとる伜なんか大笑ひしとりました。なあに、國民音樂だから構はん、かう言ふて一挺トランクへ入れてきたんだが、さて、いざとなると何うもホテルぢや鳴らせませんわ

い。氣分になれん。出して弄つてみるのが關の山で、いまでは荷厄介です。』

から言つて、非常に荷厄介らしい顏で食堂ぢうを見わたしてゐる。

べつの方角からべつの聲がする。

『佐々木さんの奥さん思ひつたら君、一週間奥さんから手紙がこないと、君、あいつ何うしたんだらうねえつてとても眞面目な顏で俺んとこへ相談に來るんだからなあ——俺もやりきれねえよ。』

『相手になるな相手に。佐々木のやつこの頃どうかしてるんだよ。』

ひとりがごく簡單に佐々木さんを退治してしまふ。そのほか、日本人は聲が高いから、聞くまいとしても色んな話しが自然と私の鼓膜を訪れる。この二三秒間に聞こえてくるはなし聲を構成派的に並べてみてもかうなる。

『いや、それでは却つて恐れ入りまするから、え〻、伯林のはうは伯林のはうと致しまして、え〻、こちらはわたくしが——。』

『——電報でさ——と言つて來たらう、困つたね僕も——何しろ切符は買つたあとだし——。』

『は。名古屋でございます。いえ、工場は大阪でございますが、どうも事業の中心が——。』

『君、酒、呑るかい? ビイル?』

『伊太利は何うも人氣が惡くて、ムツソリニなんて大山師ですよ。』

『娘は、ことし縣立を出まして、女のくせに洋畫のはうへ進みたい——。』

『僕は思ふんだが、日米戰爭は、だね——。』

『おい、君、君、ボウイさん! こ〻は何うしたんだい。え、あ〻。玉子燒きさ、一人前。』

さうしてむこうではのべつ幕なしに、

『うな丼ワン!』

であり、

『白和へ出來ますか。イエス! ツウ・プリイズ!』

なのだ。

このこんとんたる模型日本の環境のなかゝら外部に擴がるろんどんの世界をうかゞつてゐると、そのあまりにも浮き立つてゐる獨自性が頭から私をとらへて、一種異様な氣もちが雲のやうに覆ひかぶさつてくるのを意識する。

日本! 日本! 東の海のはてに何から何まですつかり他と異つた社會と生活を保持してゐる日本! 變つてゐることは何

かを意味しなければならない。この變りすぎるくらゐ變つてゐる日本こそは、そのかはつてゐるところから見てもたしかに世界の人類にひとつの使命をもたらさうとしてゐる種子——種子だから形は小さい。が、それだけ包藏する力は大きい——に相違ない、と。

これは決して單なる安價な愛國的感傷でもなければ、珍しくしこたま日本料理をつめこんだために急に氣が强くなつての言でもない。じつさい、あちこち動いて國と山と人を見ればみるほど、日本人ほど深い感情、高いこゝろもちに生きてゐる人間は、どこの野、何處の谷にも棲息してゐないことを私は一さう確めるばかりだ。

旅は驚異を求めて絶えず前進をうながす。が、その旅の呈供し得るあらゆる驚異に慣れてしまふと、私は、いまさらのやうに自分の殘してきた孤島を振りかへつて、そこに大きな大きな無數の驚異を感じてゐる。

日本！　早い話が、この眼前の食物一つでもわかるやうに、何といふユニイクな國土！

と、私が、自分の食べあらした皿を眺めて他人(ひと)ごとのやうに感心してゐると、むかうの卓子から見識らぬ日本紳士が立つてきて慇懃に禮をした。

『えゝ、ちよつと伺ひますが——。』

『はあ。』

『わたくしは今朝チエツコスロバキヤから着きましたもので。』

『は。』

『こゝははじめてゞすが——あのう、ボウイのチツプは何うなつてをりませう？　一割勘定書について參りますか。それとも別に——。』

『べつに置くやうです。私はいつも一割やりますが——。』

『あ、さうですか。どうも有難うございました。』

『いえ。何う致しまして。』

さうかと思ふと、あつちの隅では二同胞のあひだに先刻から大論判がはじまつてゐる。

『諾威も瑞典も旅劵の査證は要らないんだ。』

『さうかなあ。どつちだつたか確か要る國があつたと思ふがなあ。』

『いゝや、要らない。』

『いや、たしかに要るよ！』

要る、いらないで際限がない。見兼たとみえて、けさチエツコから來た人が仲裁に這入つて何かくどくど言つてゐる。やがて其の説明に滿足したらしく、兩方とも間がわるさうに默りこ

んで、妙ににやにやしながらふたゝび箸をとり出した。

このとき私たちは、彼女の發議で取つてみた罐詰の羊羹に「日本和歌山市名産」といふ紙が貼つてあるその愉快さにおどろいてゐる。和歌山名物罐詰の羊羹には多分に「明治」の味が罐詰してあつた。

部屋いつぱいにはちきれ切れさうに濃厚な「日本」の發音と臭氣。そしてそとは、チヤアリング・クロスの史的に氣輕な人浪とＡＢＣの詩だ。

蹴古るのと食べるのと、こゝばかりはともに日本の「口(くち)」の綠閑(オワシス)である。

日本旅人のれんでがう。

玄妙きはまりなき東洋日本の縮圖――It is SAKURA; yes sir, Just off Charing Cross!

『ナンバ・エイト、定食スリイ！』

セルロイドの玩具

ヴイクトリヤ停車場のまへは文字どほりに人の顔の海洋だつた。

それがみんなちようど三角浪のやうに一せいに同じ方格をむいて伸び上つてゐる。

午後三時廿七分、カレイ・ドウヴア間の汽船に聯絡する汽車が、巴里で結婚したアドルフ・マンジユウを乘せていま到着しやうとしてゐる。今朝の新聞にさう出てゐた。だからこの人だかりである。

いつぱんに男よりもの好きなせいか、この自發的出迎人には女が多い。それともかれアドルフは全女性のスウイイト・ハアト「甘い心臓」とでもいふのだらうか。とにかくあらゆる類型と年齢の女人がこの廣場を埋めつくして、ロンドン交通の一部に大きな支障を來すほど、巡査が解散を命じやうが軍隊が出動しやうが、いつかな動きさうもない。おそらくは消防夫が喞筒で硫酸を撒いても、すでにアドルフ・マンジユウを瞥見するためには死を賭して來てゐる彼らは、びくともしないで立ちつくすことであらう。

が、これほど群集の過半を占めてゐる女も、かうしてよくみるとタイプと階級はじつに決定的に極限されてゐて、いかにもアドルフ・マンジユウを崇拜おく能はざるらしい、そして、一眼でいゝから、その巴里の花嫁なる人を「見てやり」たいと言ひたげな、そこらの店の賣子、タイピスト、女事務員、女給、老嬢、女房たちである。これらの低い、それだけまた妙に眞劍な

人たちのうへに、ひとつの變に競爭的な空氣が漲つて、青い空の下、黒い建物に挾まれて數へきれない女の顔が整然とゐならび、製本中の頁のやうにいやにきちんと揃つてゐるのだ。ちよつと不思議な壓迫を感ずる。

思ふにアドルフ・マンジユウの映像は、この人々の胸において、それぞれひとつの絶對な存在であるに相違ない。この近代商業藝術の創造したせるろいいど英雄に對するフアンなるもののこゝろもちは、ひどく個人的——戀がひどく個人的であるやうに——で、さうして恐しいまでにひたむき——ふたゝび戀がさうであるやうに——に考へられるすくなくとも女たちの眼が、みんな一やうにかう意氣込んでゐるやうに見えるのだ。

つまり、アドルフ・マンジユウを見るといふことは、この女群の一人ひとりにとつて、聖なる概念の現象化——早くいへば、そのまゝに奇蹟を意味するのだらう。

奇蹟を待つ人々はしいんとしてゐる。

たゞ、まへゝ割つて出やうする女を、ほかの女が肘で爭つてゐるくらゐのものだ。それも、いぎりす人のことである、すべてが厳粛な沈默と靜寂のうちに——。

私たちも朝飯の食卓で新聞の記事を見て、おりから事あれかしと待ちかまへてゐたところだつたので、かうしてぶらりとアドルフ・マンジユウを見物に出てきたのだ。べつに見て何うしやうといふ意志もないから、このとほりおとなしくうしろのはうに引つこんでゐる。

三々伍々あるいてゐる人たちが參加して、群集はふえる一ぱうだ。なかには何だか知らずに立ちどまつてゐる人も多いらしい。あちこちでおたがひに訊きあつてゐる。きつと、皇太子（プリンス・オブ）殿下（ウエイルス）がいま亞弗利加旅行へ出發するところだ、ことの、いや、皇太子殿下（プリンス・オブ・ウエイルス）がいま亞弗利加旅行からおかへりになるところだことのと、いろいろその取り沙汰がたいへんだとみえて、何かさかんに言ひふらしてゐる物識顔と、それに感じてしきりにうなづいてゐる頭とがそこここに揺れてゐる。

時計はとうに三時廿七分を過ぎて、カレイ・ドウヴアの汽船に聯絡する汽車から吐きだされた乘客のむれが、ぞろぞろ停車場を出て來た。アドルフ・マンジユウの出迎人は瞬間石のやうに緊張しながら、一列につゞく自動車のために細いみちを開ける。そこを群集に驚いた乘客たちが、思ひおもひにタキシを走らせて通りすぎてゆく。それがすつかり通り過ぎてしまつても、奇蹟はまだ出現しない。一同散らうともせずに待つてゐる。いぎりす人らしく自治的に、そして厳粛な沈默と靜寂のうちに。

私たちは飽きてしまつた。で、いささかばかばかしくなつて

歩き出さうとしたときだつた。

ざわざわと停車場の出口(エキジト)にあたつて少數の人がうごいたやうに思つた。と、誰もかれもが一さう首を伸ばして、同時にアドルフ、アドルフといふじつにものしづかな――英吉利人らしい自制的な――聲がつたはつてきて、女は手ぶくろを振つてゐる。

灰いろの大型な幌無自動車(オウプン・カア)が人のなかの通路をすべつてゆく。車のまへは一本の隙間がながくひらけ、車のうしろには女の信者たち――女給、女事務員、町娘等のムウビイ・ゴウアス――がぎつしりつゞいて。

たゞそれだけの野次(モッブ)である。

ほかの人々は、自動車のうへを見るよりも、そのまはりとまはりの群集をみてゐる。それも、いかにもいぎりす人らしく厳粛な沈默と靜寂のうちに。

はじめからアドルフ・マンジユウを目的にしてゐたのは、集まつた人々の十分の一だつたのだ。他は、たゞ群集のために一時歩行を中止してゐたのである。しづかに、そして自制的に、いかにも英吉利人らしく。

アドルフ・マンジユウのあの淺黒い光つた顔と、中年女の好きさうなひげと、有閑好色紳士めいた鼻のわきの小皺とが、いぎりす人らしいあつけない群集のなかを、映畫用微笑とゝもにゆるくドライヴして行つた。そばに、巴里の新夫人――新夫人めかしてうつむいた――の肩に、ストン・マアテンの毛皮が自動車の震動でこまかくふるへてゐた。

アドルフは灰色に縞の眼立つ脊廣、夫人は黒のテイラ・メイド・コスチユウムだつた。

「信じられないかも知れないが、いくらアドルフ・マンジユウ」だつて「法律による自分の妻」とゝもにかうして自動車を驅ることも、たまにはあるのである。

空は高く青く、建物は低く黒く、滿足したらしい群集は自治的に解散し出す。最後に、いぎりす人らしい厳粛な沈默と靜寂のうちに。

待つてゐたやうにバスが唸り出し、辻貸りが人を呼び、町かどの巡査は人間性を理解しつくしたものゝごとく長閑にほゝみみ、ふたゝび何時ものヴイクトリヤ停車場までの妙に鄙びたすなつぷだ。

『思つたより年をとつてるのね、アドルフ・マンジユウつて。』

救はれたやうに彼女が言つてゐた。先づ、これはこれでおしまひ――さういつた、けふの見物順序(プログラム)のひとつをすました旅行者のよろこびで。

小野さん

小野さんはロンドンにゐる日本人である。

小野さんは何時も下宿を探してゐる。

この下宿さがし――小野さんと私たちが相識（しりあひ）になつたのは、その「下宿探し」といふ樂しい企業に關する一つの妙ないきさつからだつた。

當時私たちは、西南の郊外に近いパレス街に、そこらによくある賄付下宿（ボウディング・ハウス）の一つ、ベントレイ夫人方に居をトしてゐたのだつたが、はじめのうちは珍しかつたとみえて、何やかやとベントレイお婆さんがよく氣をつけてくれたけれど、しばらくゐると直ぐ慣れつこになつて、だんだん萬事粗末にし出した。下宿といふものはへんなもので、ひとつ嫌になると不思議に何からなにまで癪にさわつてくる。べつに何がどうしたといふわけでもないが、たゞ朝夕その遣り方のすべてが氣に食はないのだ。かうなると先方もこの氣分を感じて、氣のせいか一さう虐待しはじめる。さうするとこつちもつい好戰的になつて、事につけ物にふれ角が立ち、何となく大事件が突發しさうでしぢう胸のばたばたする日がつゞいてゐた。なにもそんなところに我慢してゐなくても、ぽんぽん威勢のいゝ言葉を殘して即刻引つ越したらよさそうなものだが、事實また、悄然と荷物をまとめにかかつたことも一再にとゞまらないのだが、ところがじつさいに當つてみると、夫婦で荷物を足もとに茫然と街上に立つわけにもゆかないしするから一日延ばしに漫然と腰を据えてゐたので、そのまへにほかを探したらいゝだらうといふかも知れないけれど、それは、もちろんあちこちさがしてはゐるんだが、條件がむづかしいからなかなかないのだ。そこへもつて來て、いつそベントレイお婆さんが出て往けがしにしてくれると、日本人の性質として、たとへ當てがなくても即座に飛び出すんだけれど、出られてはまた困るものだから、お婆さんも決して積極的な態度はとらない。そこで、あと脚で砂を蹴るにしたところで其のきつかけがなくて弱つてゐた形だつた。

何よりもうるさくて閉口なのは、同宿の人々がどつちかと言へば無教育な連中なので、おそろしく躾けが惡いとみえ、その子供たちが私たちに對してじつに公々然と興味と好奇の眼を光らせすぎることだつた。

たとへば、私と彼女が外出しやうとして廊下へあらはれたとする。すると、必ずそこに早くも一小隊の少年少女が待つてゐて、氣味がわるいものだから常に相當の間隔をおき、いざとあ

らば直ちに逃げのびられる體が、まへで、世にもしつこく凝視し、觀察し、研究し、批評してゐるのを發見するのだ。

『そらつ！また日本人が出てきたぞ！』

『女がこつちを見てるぞ。』

『何か言つてらあ！』

『おい！　笑つたぞ、笑つたぞ！』

『なに？　笑つた？　ほんとか。』

『やあ、時計を出した。』

『ほら、來るぞ、くるぞ！』

といふやうなことなんだらう。私たちが近づくと、左右の壁にぴつたり脊中をつけて立ち並んで、恐さうに口々に挨拶する。

『お早う！』

『お早う！』

『お早う！』

そして、通りすぎたあとですぐ、

『おい！　聞いたか。男がお早うつて言つたぜ。』なのだ。

これをあんまりつゞけられると、何んなに氣のいゝ異國者(エトランゼ)でも、相手は子供と思ひつゝつひうんざりさせられる。どうもこゝらの兒は普通より質がわるいやうだが、その國の子供は最もよく其の國をあらはす。例のアングロサクソン・スウペリオリティ――不幸にも――の觀念からか、一體いぎりす人は外來者を受け入れない。英吉利では、外國人はどこまでいつても外國人である。自分たちより一段も二段も下の動物と、萬人が萬人さう思つてゐるらしい。たゞ大人(おとな)は、動物にさへ――動物であるがゆえに一さう――惡感情を持たせまいとする紳士淑女らしいデリカシイから、電車内や往來などでも、ちらりちらりと見ないやうにして見る。そこを、子供は子供だけにおほぴらにやるだけなのだ。

なんかと、下宿の不平からはじまつて私たちが全英國のあらゆる事物に反感を抱き、ことあらば今日にも爆發してやらうと手ぐすね引いてゐる最中――小野さんなる人物はこゝへはじめて出てくる。

ある日の朝、ベントレイ婆さんがいつになくにこにこして私たちの部屋へ來た。手に新聞を持つてゐる。讀んでみろといふから讀んでみる。と――。

「下宿を求むる一日本紳士」

といふのが標題で、廣告欄につぎのやうな文章が掲載してある。その近處にだけ出る小さな區域新聞(デストリクト・ペイパア)だつた。

「こゝに年若き日本紳士あり。ろんどんの西南に當り家族的好感の下宿をもとむ。紳士は獨立の事業家にして良

き地位を占め、かつ寝室居間食事に對して週二磅半を最も快く支拂ふべく、其の準備全くとゝのひをるものなり。
うんぬん。」

『ふうむ。』

私が感心したのを見すまして、ペントレイお婆さんははじめる。

『あゝ！　わたしの愛するヴアレイ氏夫妻よ！——詫に曰く。私たちを谷（ヴアレイ）と呼んでくれ、そのはうがお前に覺えよくていゝから。この家へ來たとき、私たちはむこうの便宜をはかつて、つとにお婆さんにかう言ひ渡してあるのだ。だからお婆さんにとつて私はヴアレイ氏であり、したがつて彼女はヴアレイ夫人である——そこで、もう一度ヴアレイ氏夫妻よ！　わたし——といふのはつまりお婆さんじしんだが——は、つねにヴアレイ夫人に忠告して來ました。いかに資本金が出來やうとも、人間、下宿屋だけは始めなさんな、と。おほ！　その世話のやけること、其の氣をつかふこと！——しかし、ものにはすべて例外があります。まかなひつき下宿も、すつかり日本人だけで充滿させることが出來れば、あゝ！　かへつてヴアレイ夫人にも奬めたいくらゐ——日本人！　何てまあお金拂ひのいゝ思ひやりの深い、あちこち屆く國民でせう？　五十年まへまでは野蠻國だつたんですつて？　信じられません！　いゝえ、信じられません！　ほんとに家ぢうに日本人がゐたらわたしは何ふなに幸福でせう！　じつさい日本の方は理想的な下宿人で——。』

と、これを要するに、この廣告の主の日本紳士を何とかして下宿人として捕獲しなければならないから、早速私に推薦状（レコメンデイシヨン）を一本書けといふのである。これには私も困り入つてしまつた。じぶんが嫌で今にも出やうとしてゐるところを、人に、しかも同胞のひとりに、紹介推薦するといふことは、論理にも合はなければ、氣も咎める。しかし、部屋があいて閉口してゐるペントレイ夫人は、この下宿人拂底の世の中に日本人だらうが何だらうがそんなことを言つてはゐられないし、それに事實、日本人は文句はいはず——じつは言ひたくても、一つはその引つこみ思案と、多くは不充分な發表能力とで大がいのことには只にやにや笑つて默つてゐるのだが——と、なにしろお金の受授がきちんとしてゐるのとで、こゝは何とあつてもその「若き日本紳士」を生けどりにしたくてたまらない。出來るだけの愛嬌笑ひを顏に、そのくせ命令的に兩手を腰に、嚴然と私のまへに直立してゐて動かないのだ。おまけに言ひぐさがいゝ

『あなたは滿足してゐるからこそ私の家に居るんでせう？　してみれば、じぶんが滿足なら當然人に、ことに必要に迫られて

ゐる同國人に、その滿足をしらせて幾分でも分けてやりたいとは思ひませんか。』

どうも呆れたものだ――むかう側からヴアレイ夫人が早口にいふ。

『書いてやつたらいゝぢやありませんか。何でもいいから。』

私はベントレイ老夫人に直面して、

『しかし、僕は日本人だから英語ぢや書けない。日本語でいいなら大いにこの家を褒めて書かう。』

するとお婆さんが微笑した。日本語でさしつかへないといふのだ。

これで助かつた私は、そこで、ペンをとつてすらすらとかういふ一文を草したのである。

『病の主婦があなたの廣告を見て、推薦狀を書けといつてきゝません。仕方がないのでかうして書き出しましたが、これは決して推薦狀ではありません。私も近日移らうと思つてゐるくらゐですから――どつかにいゝ家はないでせうか。』

そして、こんな手紙に名前は書けないから、と言つてこのままでは署名がないぢやないかとお婆さんが承知しないにきまつてゐるから、おしまひの下のはうへ「早々敬具」とくつつけて、これが私の日本名だと指したら、お婆さんはますますにこにこして、おなじ國の人からこんな立派な推薦狀が行くんだから、其の日本人はきつと來るにきまつてゐる、と、もう一部屋ふさがつたやうにほくほくもので引き取つて行つた。

すこし罪だね――私たちはさう言つて笑ひ合つたゞけで、このことはそのまゝすぐ忘れてしまつた。もつとも時どきは話題にのぼつて

『何うでせう、あの日本人の人、お部屋を見にくるでせうか。』

『なあに、あゝいつてやつたんだもの、來るもんか。』

などと、そのたびに、お婆さんに對しては意地がわるすぎるが、一つの復讐をした氣になつて私たちはすくなからず溜飲を下げてゐた。が、お婆さんは、廣告に出てゐた「日本青年紳士」のアドレスへ、私の推薦狀を同封した一書を即日正確に飛ばしたものに相違ない。

それから二三日した夕方だつた。ベントレイ婆さんが顏色を變へて私たちの部屋の戸をあけて、廣告主の日本人が來たから、出てきてこんどはひとつ大いに口で推薦してくれといふ。何しにまたやつて來たんだらう?――といさゝか憤ほしく感じながら、ヴアレイ夫人を先に立てゝ、私が別室へ行つてみると、這入つた拍子に、ひとりの色の黑い小さな青年が、ひよこ

りと椅子を立つておじぎをした。それが小野さんだつた。

『やあ!何うですな、このうちの待遇は?お手紙で見るとあんまり感心しないやうですが——。』

ちよつと挨拶がすむと、小野さんはもうじろじろそこらを見まはしてゐる。ベントレイ婆さんは心配さうに小野さんの視線を追ひながらしきりに表情で私に推薦をうながす。が、その哀願を完全に無視して、かうなれば私も日本語だ。

『失禮な手紙をさし上げましたが、どうもこのお婆さんが書け書けといつて きかないもんですから——駄目ですよ、こんな家。なつちやあゐないんです。』

『さうですか。この婆さんはまた無理なことを言ひさうなやつですね。白紙やるから文と讀め、ですか。はゝゝゝ、それでもこいつ喜んでたでせう?てんで何が書いてあるか解らないんだから。』こゝに到つてか、お婆さんは一さういらいらしてくる。それでも、社交性のために表面は上品にかまへてにこにこしてゐなければならないのが、私にとつてはなほ面白い。

さんざん日本語でベントレイお婆さんとお婆さんのいはゆるわたしの家とをこき下ろしたのち、いづれどこかこの近くに移るつもりだから、また會ふこともあるだらうと言つて小野さんはさつさと歸つていつた。歸りがけに小野さんがベントレイ夫人に言つてゐた。『この方——つまりかくいふヴアレイ氏——はお前が「今まで聞いてゐたとほり」言葉をつくしてお前のところをすゝめてくれるけれど、殘念でたまらないのは、お前の家に電話のない一事だ。私は、仕事のうへから電話のない家に住むわけにはいかない。私のビジネスがそれを必要とするから、この點、よく諒解あらんことを望む。では、さよなら。』

ベントレイお婆さんは一言もなかつた。

『おゝいえす・ぐつどばい!』

なんかと小野さんのうしろ姿にひどく口惜しさうだつた。

私たちのあひだに當分小野さんの噂がつゞいた。小野さんは、若いながらも神戸の一輸出會社の倫敦支店の支配人だつた。さう名刺にも書いてあるし、あの短時間の會話に、小野さんはこんなことを話して行つた。

『私が日本を出てくるとき、重役のひとりがかういふ言葉をはなむけしてくれました。日本人たることを光榮とすべし——といふんです。簡單ですが、海外ではこれ以上のモツトウはありませんね。私はそのとき只ぼんやり聞いてゐましたが、今から思ふと、その重役はなかなか何うして豪いですよ。日本人に生れたことを心から光榮とし感謝する。私はすべてこの意氣でやつてゐます。』

さういふ時の小野さんには如何にも若い日本人らしい「色の黒い逞しさ」が見られた。私たちは何となく頼母しい氣がして、この「毛唐ずれ」のした小野さんと、機智に富んだベントレイ夫人への斷はり文句などを毎日のやうに話しあつてゐた。

さうして間もなく、根氣よく散歩に出てさがしてゐるうちに、たうとう私たちもこれならといふ家を見つけて、さつそく引つこして行つた。パレス街の近邊で、ベントレイお婆さんのところからみると一段高級なプライヴエイト・ホテルだつた。

移つた日、私たちが夕食に階下の食堂におりていくと、はじめてなので案內してくれた主婦のチヤンパアス夫人が、食堂の入口で私たちをふりかへつた。

『このなかに驚きがあなた方を待つてゐますよ。日本の紳士がひとり泊つておいでです。』

戸があくと、いぎりす人ばかりの、廣くもない食堂の隅に、いかさま日本人たることを光榮としてゐるらしいひとつの黃いろい顏が、若いくせにおちつき拂つて今やその口へ大きな肉片を押し込み終つたところだつた。

『やつ！こりや何うも――。』

とナプキンを使ひながら立ち上るのを見ると、それが小野さんだつた。

『たうとう脫出なさいましたね。いや、結構々々。え？私ですか？二三日まへにこゝへ來ました。』

『待遇は何うです？』

『駄目です、こんな家。なつちやゐません。近いうちにまた何處かへ移るつもりです。何しろ、こゝの婆さんと來たら慾張りで氣が利かなくて――。』

さうして、そばに謙ましやかにほゝえんでゐるチヤンパアス夫人をかへりみて、小野さんはひどく紳士的口調の英語に取りかへた。

『ヴアレイ氏夫妻よ！あなた方はいま、英吉利におけるあなた方じしんのお宅へ歸つてきてゐることをはつきりと意識していゝのです。それほど高くあなた方がこゝを評價しても、それはしごくあたり前といふべきです。何故ならば、チヤンパアス夫人は驚くほど親切な、おゝ！何とまあ感歎にあたひする婦人であるでせう！』

すわりながら小野さんは日本語でつけたした。

『ひでえ婆あでさあ、因業な――いやはや、どつかいゝ家はないでせうかねえ。』

五日ばかりして小野さんのところへ小野さんが自分で打つた電報が配達された。これはかうしちやゐられない――小野さん

はチャンパアス夫人へさう言つて、ひどくあわてゝ荷物といつしよに出て行つた。どうも手ぎわのいゝことである。

小野さんは自動車を有つてゐる。だからそれへ蓄音機とタイプライタアと鞄五個と尺八と、小野さん自身とを積載して、小野さんは絶えずロンドンぢうを泊りあるいてゐるのだ。

このとほり、小野さんはしぢう下宿をさがしてゐる。

いまもどこかで新しい下宿を物色してゐることだらうが、小野さんの場合、それは單なる下宿深しといふべく、あまりに多分の内的要求がうかがはれる氣がする。無意識のうちに、小野さんはホウムをもとめてゐるのだ。その衝動がつねに小野さんをうごかすに相違ない。

ひろいロンドンに一人ぼつちの、小野さんは若々しい日本青年だ。

小野さんは下宿を探してゐる。

自分では氣がつかないながら。小野さんはどこかに待遇のいい「永久の下宿」をもとめてゐるのだ。

G・B・S

ジョウヂ・バアナアド・ショウは、樹間の白い小砂利道を踏んで私たちのまへまでくると、そこで立ちどまつて、ポケットからはんけちを掴み出してちんと鼻をかんだ。

碁盤縞のノウフオウク・ドレスに、無帽。長い赤い顔の上下に髮と鬚が白い。互ひちがひに脚を絡ませるやうな歩き方、笑つてゐる眼、太い含み聲だ。

「仕事がありますので、ながくはお話し出來ません。ほんの五分、いや三分――さかんに時計を見るかも知れません。どうか氣をわるくなさらないやうに。決してもうお歸り下さいといふもりで時計を出すのではありません。歸るのは私のはうです。時間が切れゝば、勝手に廻れ右をして家のなかへ這入るばかりですから――さあ、何からお話しゝませう――。」

かう言つてショウは、ちよつと首を傾げて考へこむふうをした。

觀衆――それとも聽衆といはうか、とにかくみんな固唾を呑んでゐる。さきに言ふのを忘れたが、俄雨に降られて私たちの逃げこんだ常設館ニユウ・ギヤラリイのスクリインにショウの「物をいふ映畫（アレヴイツヨン）」がうつつてゐるのだ。

私たちは知らずに飛びこんだのだが、このショウの「話す實寫」はじつにライフ・ライクで、倫敦ぢう大評判だつた。そのためこのとほりの滿員である――。

翌日。

これに刺激されて、私と彼女はホワイト・ホウル四番にタキシを驅つた。ホワイト・ホウル四番は、ロンドン市におけるショウの文筆事務所のある、最高級の宏壯なアパアトメントだ。

ところが、遺憾このうへないことには、G・B・Sはすでに、遠く南ふらんすに最近新築した別莊へ避暑に去つたあとだつた。

いつたい今度は、ロンドンへ着いた時季がよくなかつた。ショウをはじめ、會ひたいと思ふ人はみなもうろんどんを離れてゐる。が、その日私たちはショウの秘書の婦人と會つて、秋の文學的社交シイズンには必ずショウを「キャッチ」出來る段どりになつてゐることと、その他の人々とも或る筋を介して最も便宜なときに面會する約束が確立してゐることを、いまはたゞ報告するにとゞめておきたい。

新著月評

二種の經濟學全集

田邊忠男

日本評論社版の「現代經濟學全集」（別卷現代產業全集を附す）と改造社版の「經濟學全集」の間に、孰れを選擇して良いか各々に何の長所と短所とがあるかゞ、此批評の主たる見地で無ければならぬ。

先づ評論社版から云へば、冒頭にその卷數が少ないと云ふこと――改造社版の四十七卷に對して、前者は別卷を加へて三十卷――が有難いことである。

併し內容は何どうであらうか。我々は現在それを顏觸れと綱粁の分類より判斷するより外は無いが、先づ重複せる項目が少なく、大體に於て經濟學の全般に亘つて、正規の科目を網羅して居る。また擔當者に十分なる頁を割り當てゝその意を盡さしむるに、特別の注意が拂はれて居るやうである。

只、最も重大なる缺陷は、マルクシスムスが餘り貧弱であることと、原論に與同一傾向の顏觸れを並べた點であらう。マルクス經濟學が高畠氏のみによつて代表されて居ることは如何にしても、十分であると斷定し得まい。

その他の點に於て、一般に本全集は、經濟學の定石をその定石通によつて數へられると云ふ感を受ける。產業叢書はよく項目と擔任者が選ばれて居るが、その多くは資料の編纂以上に出まい。

改造社版はマルクス經濟學を十分に取り入れたと云ふ所に最大なる特長がある。併しそれと、ブルヂョア經濟學とは、水と油のやうに同一の器に盛られて居る。此內的連絡の缺除、雜然たる盛り澤山と云ふことは、實は全篇を通じて見受けられる。餘りに項目が豐富で餘りに擔當者が多數であることは、一見百花燎爛たるにも似て、眩惑せられるが、重複を免れず、各人に十分意を盡さしめない憾がありはしまいか。併しマルクシストの陣營に於ては、大家、新進とも、今日これ以上の顏觸れを集めることは不可能である。

徒らに抽象的に雜然として居ると云つても無責任であるから、ほんの二、三の具體的なる例を擧げれば、「經濟學特殊理論」の項目は如何なる標準によつて選ばれたか。經濟組織理論とか、生產理論とか、保險理論とかは如何にしたか。「部門經濟學」に於ても、例へば金融業の如きは如何。それは既に前者の銀行論に述べられて居ると云ふかも知れぬ。然らば市場理論と商業經濟との關係如何。總じて「經濟學特殊理論」、「部門經濟學」、「經濟政策」と種々なる標準による分類を併せ採用して其敍述が實質的に重複しないとは考へられぬ。「世界經濟論」は突如として貿易、金融の二項目よりなる。交通、植民、移民には世界の修飾辭が冠せられぬやうに「社會化の理論」は農業學者によつてのみ講ぜらる。それと「マルクス經濟學」並にその「發展」とは對應するものか等々の我々は之等の例より殆んど綱粁なきかの如き感を受け、又それがなされたらば、その卷數を大に減少し得たやうに思ふ。

結局「全集」として見れば評論社版は遙によく纏つて居る。併し獨立せる著作の集輯として見れば改造社版に特に手に入れ度いものがある。若し可能なれば、最も望ましき方法は、評論社版よりブルヂョア經濟學の大部分をとりて、その缺陷を改造社版より補充し、更に改造社版よりマルクス經濟學の大部分を採つて、自ら全集を編むのだが、その各卷を明示することは憚りあれば云はれない。

ムッソリーニとその思想（高畠素之著）

當代隨一の人氣男だけに彼に就ての批評紹介

は從來とても少くはなかつたが、之だけの內容を之だけの小册子に盛つて、而も第一頁から最終頁まで一息に讀ませ、興味の裡に彼の全豹を窺せる所、他著には求め難い所で、流石高畠氏であるを思はせる。（三六版一八八頁定價五〇・東京芝愛宕町・實業之世界社）

河上肇著
マルクス主義經濟學
石濱知行

多くの國粹的思想家が言ふ樣に、我國の思想界は從來多くの外國思想を迎へ、一寸單純再生產を行ひ、やがて夫を忘失し去つた。マルクスの名が日本の社會に入り來つてから恐らくもう廿年を超えるであらう。しかも時の經過につれて——といふのは日本に於ける資本主義の發達につれて——彼の名及び彼の學說は、幾多の壓迫と嫌惡とにも拘らず、益々根深くしかも廣範圍に、日本の社會に擴まり行く傾向にあるのは、(他の外來思想がいつの間にか消失したのとは反對に) そも〳〵何故であらう。これ丈でも、一般社會人は彼の思想を研究すべき義務がある。

本書は「資本論」を中心とするマルクス經濟學が、河上氏の頭腦を濾じて、組織的に『限られたる紙數の中に纏め』られ、縮寫されたものである。解釋に關しては種々の異論もあらうけれど、難解なる資本論の『根本の筋道を初學者に傳へる』ところの『困難な仕事』——方法論に始まり商品の分析による現行社會組織の解剖を經て今日の金融資本の制覇の概狀に至るまでの——を果す人として著者が最も適當なる人であることゝは異論のない所であらう。殊に興味多き日本の實例を以てマルクスの理論を說明し、やるに心にくき迄の快文を以てせるは正しく著者の獨壇上であらう。又僅か二百頁をこゆる小册子の中に、人口法則、恐慌理論、資本集中論等の重要問題を洩らさず包含したところにも本書の特色がある。

某司法官の語る所によれば、思想的犯罪を裁判する時には思想に對する一種の恐怖的心理を以てするといふことである。學問をするには好惡の如き感情や恐怖戰慄等の先存的心理を以てすることは絕對に避けなければならぬ。マルクスの思想を研究するに於いても然りである。入門書として著はされた本書を讀むに當つても、先づ虛心坦懷之に接し、更に之を通じて原著資本論に赴くべきであらう。ある對象の批評は、その對象の理解を前行條件とする。この理解への入門者として本書の宜きは最も恰好なものであらう。八百字內外を以て本書を批評せよとの公論子の要求は、マルクス經濟學を二百二十八頁の本に纏めるよりは（或はそれと同じく）困難である。蕪雜なる文となつた所以は一にそこにある。（定價一、〇〇・東京神田錦町一ノ二・上野書店）

世界革命の裏面（包荒子著）　ムッソリーニをして一再人の恐るべきは社會主義に非ずして實にマッソン秘密結社なり」の言をなさしめた深遠巧妙なるユダヤの世界政策を明かにしたもので、我國人の民族的自覺と政治的財政的並に社會學的警戒を促すを目的としてゐる。發行以來數年にして既に十一版を重ねてゐるに徵しても本書の內容が如何に社會に反響してゐるかゞ分る。兎に角ユダヤ禍を信ずると否とに拘らず一讀するの價値がある。（四六版四四二頁・定價三、〇〇・東京牛込揚方町・二酉社）

會社法の常識（片山義勝著）　兎角無味乾燥に陷り易き法規の解釋を最も平易通俗に說いたもの。會社組織が盛んに行れる今日これ位の常識は備へおくべきだ。（四六版一七四頁定價八〇・東京芝愛宕町・實業之世界社）

芭蕉の俳句と其一生（中　儒堂著）　芭蕉入門の好箇の手引書（四六版四四五頁・定價一、九〇・東京小石川江戶川町・交蘭社）

陪審法の實際知識（陪審制度普及會編）　司法省與官黑住成章氏の監修になる信頼すべき陪審員の必携書である。（四六版約二三〇頁定價二、二〇・東京青山南町六・甲子社）

迷信と妄想(森田正馬著) 科學者としての立場からこの興味ある題目に對して縱横のメスを振ふ、その平易な叙述と豐富な實例とは讀物としても亦興味が多い。(四六版二五二頁・定價一、五〇・東京京橋・實業之日本社)

青淵先生訓話集 青淵澁澤榮一翁の米壽紀念として編纂されたものである。國家訓、社會訓、國際訓、政治訓、教育訓、青年訓、修養訓等各項に亘つて述べられる所、悉くその高き人格德望の反映であり、その憂國の至誠に出でないものはない。眞面目な實業家や青年子女の行路を暗示するものだ。(四六段四〇〇頁・定價一、五〇、神田駿河臺・刀江書院)

「長崎隨筆」と「切支丹史話」

大庭耀著

吉野作造

大庭耀君が本年上半季に續けざまに公刊した「長崎隨筆」と「切支丹史話」とは、既に諸新聞でも讚歎された如く、長崎乃至切支丹研究のフアンの渇望をいやすべき絶好の讀み本であると思ふ。

尤も私は近代の日本を歷史的に究むる爲の必須要件の一は日本と西洋との交渉を審にすることだと云ふ見地から研究的にも斯種の書物を貪り讀むが、この立場からしても大庭君の著書の有益なる資料たるは否み難い。併し專門の人達の間に定評のあることは更めて玆に繰り返す必要はなからう。たゞ「長崎」乃至「切支丹」が昨今ひろく讀書階級間の特別研究題目となり爲にまたこの研究に對する一團の愛好家(フアン)の發生を見つゝある今日であるから、とくに之等の人達に向つて本書の存在を告ぐるは、啻に著者の效を空しからしめざるのみならず、又一人でも多く同好の士を天下に求むる所以として必要なことであると考へる。

私もフアンの一人だが、之に對して有つ私の興味は必しも他の人達と同樣とは限らない。例へば「切支丹」に對して私は野蠻朦昧の地に單身乘り込んで目ざましい最後を遂げた英雄の遺蹟を弔ふと云ふ樣な一種崇高の感激を催ふすが、「長崎」と云ふ題目になると、謹嚴な家庭に育つた子弟が束縛を離れた異鄕に於て一寸常規を逸することあるが如く、他では禁ぜられた東西文物の接觸がとくに此地に於て誇張された形に躍動することを無性に面白いと思ふのである。私は假令自分の專門的研究の必要に促がされなかつたとしても、無論いつの間にか斯道のフアンになつてゐたに相違ない。

それ程に「長崎」と「切支丹」とは今日最早我々讀書階級には專門的な題目ではない、少くとも現代の讀書人に取つては、最も通俗的な常識の缺くべからざる内容を爲すものである。この意味に於て大庭君の此二つの著書は、現代讀書人のすべてから愛讀さるべき十分の資格を備へて居ると謂ていゝ。而して之を耽讀することに依て暫く「長崎」と「切支丹」とを享樂するは、また必しも閑人の閑事業ではないのである。(各册四六版三〇〇頁・定價各二、〇〇・東京小石川茗荷谷・鄕土研究社)

不良少年の實際(河野通雄) 各國が法規を設けてその保護豫防に焦慮してゐるに拘ず年と共に增加の傾向さへある此難症な一文明病に對し、本書は有力な臨床的診斷を下したものである。既に嗜書によつて良心の麻痺された彼等を夢、落書、本能的に書かれたつれづれの文章を通じて觀察してゐるが、そこに示された怖るべき不良化の經路と現在の症狀は社會事業家、教育家及一般家庭人をして沈思せしめるものがある。(四六版三二七頁・定價一、八〇・東京牛込下宮比町・育成館)

金解禁と國民經濟(梶哲次譯述) 昨今財界各方面に於て金解禁問題が盛に論議され從つて同問題に關する著作の尠からざるを見るが、一般に公式論か安價な樂觀主義のみであつて問題を具體的に國内經濟及社會全體と關聯せしめて論じたものの少ない事は評者の結

言の通りである。此際この良著良譯を得たとは獨り讀書界の欣びだけでけない。(四六版一二六頁・定價一、〇〇・東京牛込・二酉社)

歌集・栖霞集(吉植庄亮著) 木曾、みちのく抄、樺太北海道の歌、南國等二百七十餘首(四六版一三〇頁・定價一、〇〇 東京日本橋稿物町・紅玉堂)

歓派第六感(坂田俊夫著) せんちめんたる・じやねえ、モ・ガ輕蔑論、或る都會的モボの幻想、舗道的Y談等等。エロチツク・ロマンテイシズムに富む現代的讀物。(四六版二二六頁・定價一、五〇・東京京橋木挽町・批評社)

市島春城著 春城筆語

柳田國男

至つて自由に話題の選擇がしてあるが、それで居て市島氏の隨筆は、何一般讀者に其全部を讀ませるだけの力を持つて居る。併しその中でも特に面白いと思つたのは、人物雜觀の中では何と言つても田中青山伯、希有の珍本を惜しげも無く贈つて來た氣前に感歎したのも著者らしく、又かの老大官が世間から色色と評せられた他の一面、卽ち無暗に大きな地面を圍つて、庭の備に山水樹石を驅使した豪壯ぶりを、無條件に賞讃したのも或る見方だと思つた。

旅行記の中で珍重すべきは四十餘年前の妙義山登攀。これは僅かに保存して置いてよい實錄である。大風の日の富士禪定に、六合目の小屋の近くで野兎を捕つて喰つたといふ一條なども興味がある。が其他は槪ね自傳として遁すべからずといふのみで、幾分か遼東の豕に近い。

最も推獎する一文は鴻爪錄中の「雪の思ひ出」であらう。印象の新しく又鮮明な點で、勿論代作と稱せらるゝ北越雪譜などを超越する。是は正しく著者の生活心境の自然の表白で、所謂筆を載せて一經過した位の旅人の企て得る事業で無い。

それと同じ程度で、著者の學殖の、些しの機構も無く露れて居るのも嬉しいと思ふ。自分等は之に由つて始めて市島氏が尋常の愛書家で無いことを知つた。其上に以前の新聞記者生活は、確かに讀み易い文章を書く技能を彼に付與して居る。其爲に少しは平俗に失する結果は見たかも知れぬが、それとても未知の內容をもつ「隨筆」といふものを、年々世に問はうといふ人の一資格といつてよいであらう。(四六版四一五頁・定價二、五〇・東京牛込・早稲田出版部)

好色獨逸女(秦豐吉著) 書名は「好色獨逸女」とされてゐるが內容は決して然らず、西歐各國の女を拉し來て、女の持つ美的象徵及び性的感覺の所ゆる方面を面皆きまでに解剖敍述したものである。これは一種の女性文化史であり又大膽にも自らを白日の下に曝した女の性的裏面史でもある。この世のめでたき存在である女の魅力・多樣なる風俗・傳說迷信・技巧的なる姿態が、いかに時代文化を彩り行くかを知る事が出來やう。(四六版三六五頁・定價一、八〇・東京日本橋本小田原町文藝春秋社)

支那の鐵道(石川順著) 支那の鐵道を中心に列國の對支活動乃至國際資本戰の現狀を鳥瞰したもので、支那問題研究に逸することの出來ぬ題目である。(四六版四一〇餘頁・定價二、八〇・東京府下巣鴨宮下・四海書房)

犯罪と豫防(杉本清作著) 各種犯罪の實例を擧げそれぞれの豫防法を說いて一々適當な標語を揭げてゐる。(四六版一七四頁・定價八〇・東京日本橋上槇町・警眼社)

租税判例總覽 野津喜一郞編) 採錄件數約八百關係法令三十餘總頁千二百、多年實務に携れる野津氏の眞摯なる研究の結果に成る。國稅地方稅及賦課徵收滯納處分に關する現行法令の解釋上參照となるべき判例を網羅して、それに百頁に涉る逐條索引を附してゐる。此種判例集中最も懇切正確なるものであらう。(定價五圓・東京京橋加賀町・帝國地方行政學會)

現代教育哲學の研究(勝部謙造著)　歐洲大戰後の教育哲學界をみるに、その基礎づけをなすべく現代哲學の殆どあらゆる重要學派を總動員せるかの觀がある。卽ち、ロゴス哲學及び價値論を中心とせる新カント學派、生命哲學及び體驗了解的方法を高調せる精神科學派、本質直觀を說く現象學派を以て此の期間を代表せしめることが出來る。著者も此の三學派に亘つて紹介批判をなしてゐるのであるが、就中著者の專攻にかゝるディルタイ學派(精神科學派)に就ては學ぶところが多い。その他、「敎育本質の研究」、「父と子」等の獨自の研究を添へて、單に現代敎育思潮の紹介に止らず、自ら著者の體系を窺ふことが出來る。「著者としては一篇一篇悉く自己の思想生活の惡戰苦鬪を物語るドキュメンツならざるはない」と序してある如く、近頃稀にみる勞作である。敢て同學の士に精讀を奬める所以である。(四六版三六六頁、定價二、八〇・東京本鄕駒込動坂町・秀文館)

坂本龍馬(眞山青果著)　一卷を通讀して作者の偉大な技能と深き研鑽のあとに今更ら驚きを新たにする。新國劇が帝劇の八月興行に三十日滿員の新記錄を作つたのも亦故ある事だ。とにかく史劇に一エポックを劃したもので新國劇出版部の最初の事業として選ばれたものだ。(四六版一八一頁・定價一、〇〇・東京下谷上野櫻木町・新國劇出版部)

戀愛と新道德(コロンタイ女史著・林房雄譯)「赤い戀」に依つて思想界に多大な衝動を與へたコロンタイ女史の著。所謂「戀愛もの」と趣を異し、働く婦人――無產婦人の戀愛論である。(四六版・二〇〇頁・定價一、二〇・東京牛込市ケ谷田町・世界社)

永井博士(享)の三新著

室伏高信

永井享氏の三つの新著、「日本國體論」、「日本民族論」、「日本政黨論」の三著が私の前に提供された。永井氏のものは從來何も讀んだことがなかつたので、この三著は努めてこれを讀んだ。

永井氏の企ては新しい科學――社會科學の立場から日本を見なほすといふことである。日本を見なほすことは私もまたもちろん贊成である。この點から永井氏の勞は多とすべきである。が、この日本を見なほすことの切なる要求の存在する時代において、そしてまた社會科學界多士濟々たる今日において、かくのごとき著述のほかに何ものも見られないとしたら、社會科學のためにも、日本のためにも、まことになさけないことであると私は思ふ。

この短い批評では、一々事實を擧げて、いふことはできない。けれども私は、既に批評しなければならないとしたら、私をして遠慮なくいはせてもらひたい。何んといふだらしのない書物であるか！　私は實にかくのごとく批評するよりほかに言葉を知らない。

一例をあげようか、日本の立憲政治は資本主義經濟組織と變つた(でないものがどこにあるか?)とか、日本の民族は文化が存在しない(文化なくして民族ありや?)とか、等等。

曰く世界戰後の事例に徵して明かであるごとく、政治上の民主主義と經濟上の社會主義と結んでドイツの新共和國があり、獨裁主義と共產主義と結んでロシアのソヰエト共和國があり、獨裁主義と勞働主義と結んでイタリイの君主國にフアシスチがある。それ故にもし有產無產何れもの階級に民族的自覺と社會的意識が發達すれば必ずや國民主義は民主主義となり、國民國家は民主國家となつて國家も社會も國民化され、民主化される云々と、概ねかくのごとし。

だが、あらさがしをするのではない、この書物に對する私の憤りは、この書物が徹頭徹尾分けの分らなどほしであるといふことにある。敢て永井君に問ふが、文化のない日本民族がなんで世界に無比なのか(無比の愚劣な民族だといふのか?)また日本の國體が民族の上に基礎を置くといふのはよいが、その民

族、即ち共同社會が今日も尙ほわれ〳〵の社會の支配的形式であるといふか如何。

戯曲集・默禱（前田河廣一郎著） 收むるもの默禱、捕へられた男、盗人、ラスプーチンの死、澤市は見た、ムッソリーニの近作六篇で、何れも氏の社會觀と無產階級的闘志とを覗はせるものゝみである。（四六版二五〇頁定價八〇・東京市外杉並町高圓寺・文藝戰線社）

巡査から警視まで（横山新作著） 警務百般の事項を網羅して斯界の實狀を傳へたもの警務改善の時機に際しての好資料である。（定價一、二〇　東京日本橋上槙町・警眼社）

將軍乃木（櫻井忠温著） 四六版三〇二頁・定價一、二〇・東京京橋・實業之日本社）

長編小説・道なき道（翁久允著） 四六版三九〇頁・定價二、五〇・東京青山南町・甲子社

我が歩める道（三木露風著） 四六版四八八頁・定價二、六〇・東京麴町下六番町・厚生閣

國文學史の概要（小林晉甲著） 四六版一〇四頁・定價四〇、東京牛込新小川町・文藝社

詩集・荒野の魂（塚原嘉重著） 四六版一六〇頁・定價一、二〇・東京王子町新道・新樹社

硝子戸の中（松原巖譯） 漱石の傑作硝子戸の中の英譯（定價一、五〇・東京神田・新生堂）

日本志篇（巖松堂古典部編） 特に散佚せんとしつゝある文獻を汎く探集して編んだ本邦現存の古書綜目錄である。その分類排列に新機軸を出し、選擇者をして崑山の片玉も滄海の遺珠も、探るに最も容易ならしめてゐる點は坪谷善四郎氏の序の通りで、一般讀書家研究家の受ける利便は至大なものであらう。多大の努力と費用とを犧牲にして本篇を出されたことは吾等の均しく感謝する所だ。（四六版總頁一三〇〇餘・定價一、二〇・東京神田中猿樂町・巖松堂）

贅澤本の技術的批評
（堀口大學詩集に就て）

神代種亮

新時代の書物美を創出さうとしつゝある第一書房の近業の一つである。菊判の天地を少しく截つて竪横の均整を圖つてある版型、容積に比し稍勝ち過ぎる感ある重量、深海の色に染上げられた總革に一面の金模樣、處女の指先の神經を持つ含羞草を中心に四周に吾妻菊を配した意匠、舊び行くに隨つて舊さの美を生ずるやうに精選してある材料、等々何れも詩人大學の詩集として相應しかるべく裝幀者出版者の潜心した所であらう。三方金にして、背と表紙は謂ふ迄もなく、裏表紙にも小口にも表紙の折返しにも金版を使つて、八方十方どちらから眺めてもいゝやうに仕上げてあるはいゝ。本場の西洋では俗過ぎるとしても、我國では新しいことである。紙數がもう少しあつたらと思ふのも慾目であるが、枕の材料は聊か見すぼらしい。背の折返しへ横に金の一線も如何なものだらう。序でだが、此書に限らず製本者の名が入れてあるのに、裝幀者の名が明記してないのは甚だ物足りないことだ。

誤植の散見すること、振假名に誤りの目立つことは、著者の見落しとしても、音譯語を平假名と片假名と二様に使つてあるのは、文字上の趣味ででもあらうか。活字に缺、磨滅の甚だ多いこと、印刷機の胴が不潔な爲に反對ペイジに汚れの出てゐることも見苦しい。これは印刷者の負ふべき責任であらう。それに本文も插畫もインキの色が用紙に負けてゐる。綴ぢ目の空き（のど）も狹過ぎる。序文の十ポイント活字をべた組にしてあるのも本文の四分あきと調和してゐない。口繪の肖像は比例を失して大き過ぎてゐるが、其の前のパラピン紙は透明質と云ふ點に工夫があつたものとしても、安物過ぎるやうである。扉は活字の指定が當を得てゐるだらうか。殊に題號の活字は字母が是れ程惡いならば、他工場

鑄造又は他號と換へるべきである。

以上は裝幀、製本、用紙、印刷等を綜合した藝術品を製作しようとする人々に對し本詩集をかりての苦言である。

終りに、本詩集一六五頁「罐詰の亞爾儞保兒漬の三月目の胎兒」は、罐が鑵の誤植でなければ、物珍らしい句である。(菊版三六三頁定價六、〇〇・東京芝下高輪・第一書房)

シネマのABC(飯島正著) 映畫構成の本質論から、作品評人物月旦、海外映畫の纎譯紹介に至るまで、最近の映畫を全面的に理解しようとする人にとつて、良き嚮導となるであらう。(四六版二四八頁・定價二、三〇・麴町下六番町・厚生閣)

人生詩人ブラウニング(帆足理一郎) 普及版・定價一、五〇・東京神田北神保町・新生堂

旅順戰跡秘話(上田恭輔著) 三六版二〇二頁・定價一、五〇・東京日本橋數寄屋町・大坂屋號書店

南洋に遊びて(遲塚麗水著) 四六版三四五頁・定價二、〇〇・東京日本橋數寄屋町・大坂屋號書店

冬花帖(百田宗治著) 菊版八六頁・定價一、二〇・東京麴町下六番町・厚生閣

淺田宗伯處方全集 皇漢醫界の最後の巨星宗伯が數十年の親篤實驗を經てなした斯道の鴻寶、前編は明治九年、後編は同十一年の述作に成ると云ふ。(前後各菊版三五〇頁・定價三、〇〇・東京小石川茗荷谷・世界文庫刊行會)

潜在結核の診斷と療治(鴻上慶治郎著) 四六版二二四頁・定價一、五〇・東京神田表神保町・崇文堂

無産大家傑作集 定價一、〇〇・東京芝新櫻田町・解放社

獨習佛語捷徑(丸山順太郎著) 四六版一二九頁・定價二、〇〇・東京神田小川町・白水社

佛語自習の根柢(藤崎俊茂著) 四六版六七四頁・定價三、五〇・東京神田南神保町・太陽堂

統性術(高田義一郎著) 博士多年の研鑽になる該博なる知識を傾けられた性生活のテツクストであり、且つ高き興趣を盛られた書である。此種の書籍中比類なき好著である。(四六判三六六頁・東京小石川戸崎町・博文館)

ユーモア全集 人はいつも笑を望んでゐる。だが、同じ人を一つ話で二度笑せることは難しい。玆に笑の文藝の非常に變り易い特性があり、之を記錄として置くの必要が認められる。本全集の計畫は此意味からしても當を得たものだ。その人選の粒ぞろいの點に於ても現代ユーモア全集の名に恥ない。同人諸君の一層の努力を望むと共に此計畫の成功を祈つて已まない。

編輯者餘記

○

もう秋の聲を聞いたのに今年は今頃になつて初めて眞夏が來たやうだ。今月號の編輯は正に文字通り汗の結晶だ。併し本號が讀者の手に渡る頃には秋風都門に充つるであらう。燈火これより親むべし。

○

無産黨の合同機運漸く動く。

民政黨のお家騷動はどうなることやら。

市議疑獄事件益々醜を天下に暴露す。

○

今年の運動シーズンは多忙なことであらう。陸に水に。蒼空の下、其處にフェアープレーは行はれる。暗闘や、陰謀や、收賄なんて、眞晝間、まして蒼空の下に於いてめつたに行はれるものぢやない。政治家よ。市會議員共よ。外へ出ろ。明治神宮へ參拜した次でにたまには氣持のいゝ運動場でも覗いて見たらどうだ。

▽

あの輕い明るい新鮮な筆觸感覺について行けない人からはかなり手酷しい評も受けますが、新世界順禮の反響は大したものです。中央公論を背負つて立つてゐるとさへ褒めちぎつて、スペインにも行つて貰ひたい、ムッソリーニとも會つて來いと今後の行動にまで種種の註文を寄せて來る人もあります。彼の今後の計畫に就ては編輯者も分らないが、奇才谷氏、必ず諸君の期待に背かぬことと存じます。

▽

前號豫告通り本號から「新著月評」を掲載しました。組上つて見ると種々不滿の點も少くありません。併し其間いろ〳〵覺る所もありましたので次號以下更に努力する積りです。お忙しい中を此欄のために高評をお寄せ下すつた諸氏に感謝します。

◇

おらが宰相は「政治は水ものだ」と申されました。然し此頃の政治家と稱される人々の離合集散は、なんといふ慌しい事でせう。理屈はなんとでもつくでせう、然し彼等のほんとうの腹の底は、政權の遠いのにしびれを切らし、なんとかお山の大將になつて動いたならば、政權を僥倖出來るだらうといふ醜い心事を、どうして蔽ふ事が出來ませう。なんといふ淺間しい支配者氣質ではありませんか。

◇

文部省といふところも面白いお役所です。第一文教の府といはれる此處の主人に此頃それに相應しい專門の人が座るといふ事はないやうです。實業家の後備役か、政海の渡り鳥とかいふ人が世襲するのが習はしになつたやうです。それにしても、今度の思想善導案とかいふもの程人を喰つたものはないではありませんか。學生監を増員して既に分別のついた大學生を取締るなどは、笑はせるにも程があるといふものです。それよりも、そんなお金で就職の骨でも折つて下すつたら、どんなに彼等は流涕隨喜する事でせう。

□

ロシヤでは、いま、全土を擧げてトルストイの生誕百年祭を催してゐる。このためにサヴエート政府は十五萬ルーブルを支出し、シヨオ、ローラン、バルビユス、シンクレヤその他の高名なる文士を招待してゐる。我國では、此の御大典を期して「文功賞」といふものが取沙汰されてゐる。西にルナチヤルスキイあり東に勝田主計あり、か。

南蠻隨筆

木下杢太郎

日葡協會及び其事業

一兩月前、東京駐在の葡萄牙公使ジヨセ・ダ・コスタ・カルネイロ氏が仙臺に來られた時、日葡協會の事業の一として雜誌を發行し、その創刊號は年內に出したいと云ふやうな話があつた。同氏は日葡交通史には多大の興味を有して居られるから、その雜誌の一部分或は大部分はこの方面の研究の爲めに費されるであらうと期待することが出來る。是事は我々に取つても實に年來の宿望である。葡萄牙の地は遠い、日本の歷史に取つて隨分重要な材料が其國の圖書館に埋沒してゐても、その泉を掬むことは我々には容易の事ではない。今同公使がもくろんで居られるやうな機關が出來たならば、この方面の研究には多大の便宜が與へられるであらう。

近代の我邦に於ける歐羅巴學の隆盛にも拘らず、日本歷史に關するかくも重要なる資料の調査の久しく閑却せられてゐたのは、畢竟我邦に於ける洋學が英獨の學に偏し、拉丁系民族の文明に對する興味が割合に乏しかつたのに因るのであらう。

伊太利亞に於ける文藝復興の事業を研究しなくては歐羅巴文明の完全なペルスペクチイヴを附けることは出來ぬが、葡、西、伊等との曩昔の交渉を閑却しては、日本近代の思想史、風俗史は解明し難き節が殘らう。

取り分け我々の望む所は十種に餘る稀覯本の復製である。又葡國アジユダの文庫に在る未刊の寫本「亞細亞に於けるジエスイタ派（Jesuitas na Asia）」六十餘卷の刊行、並にそれらのもの乃至他の古刊本の日本語譯の事である。大阪朝日の「吉利支丹叢書」も好企圖であるが、その珍ガリズムより此方が一層實用的でもあると思ふ。

是等の事に關しては、わたくしは、實は嘗てしばしば之を論じたことがあるから、今重ねて之を說かば、知る人は之を煩となさう。唯その一二例を擧ぐることの許さるゝならば、例へば嘗て葡國リスボアの一中學の讀書室に藏せられてあつた「基督教ドクトリナ」の寫眞版に由る復製は、橋本進吉氏の好解說と共に近ごろ東洋文庫から出版せられた。この出版は、我々に取つては、龜井高孝氏の「天草本平家物語」の翻字（岩波書店發行）と共に、こよない喜であつた。その中後の者からは、謠曲、狂言、その他お菊、おあん物語などにも見ない、われわれ祖先のなつかしい國語を知ることが出來た。而もその原著作者が多大の文才を有してゐて、編纂よろしきを得たが爲めに、日本古語學の門外漢たる我々には、まるで我國の或地點に新しい森林帶、乃至未知の部落を見付け出したやうな喜悅であつた。

それにも增したる驚嘆を約束するものは、歐文古刊本、別してはアジユダ古寫本の刊行並に翻譯のことであらう。我々がここに興味を向けた時、その一部は逸早く獨逸人の手によつて獨逸語と譯せられた。即ち近々新に駐日本獨逸大使となつて來朝するであらうと噂せらるるE.A.Voretsch氏がジエスイタ僧 G.Schurhammer師と共に、翻譯したルイシユ・フロイシユが「日本歷史」である。この本は實に面白い本である。わたくしはその前後兩部を手にした時、いつも我を忘れ、夜を徹して耽讀した。

かくの如きものがアジユダの文庫にはまだ多數に有る。恐らく葡國公使閣下が我々に望む所よりも、我々が公使閣下に

待つ所が大であらう。我々には公使のこの企圖が有力な物質上の後援の下に、一日も早く實行せられむことを望むのである。

ルイシユ・フロイシユ師が「日本歴史」と大村純忠が八釆と

原書名またその翻譯書の標題などに就いてペダンチックに精しく書く必要もなからう。既に知る人は知る此書（既述翻譯本）は、然し今なほ改めて之を吹聽して無益ではあるまい。

フロイシユ師は當時既に甚だ重んぜられた能文家である。其觀察、精密且つ確實なるが上に、其叙述、極めて印象的である。書中の地名人名などに甚だしい誤がない所を見て（實はその特殊のものは我々は往々始めて之を知るのであるが）その記事に對する信用を一層高めることが出來る。（若し割引の必要があるとすれば、それは宗教的プロパガンドの分子である。）之を歴史と呼ぶには、吾人はその餘りに具象的なるに驚く。之を物語と謂ふには、その餘りに精確なるを看るのである。謂はゞ全卷悉く是れ繪卷物の連續である。南蠻屏風の更に精細となり、而も聲を出してその心中をさへ語るものである。古への屏風の畫が、歴史家、稗史作者の意を注がなかつた一匹の犬、一人の女、その衣裳の模樣、首に卷く巾の褶までをも指示するやうに、フロイシユの筆は、信長、義昭、義鎭、晴信が屍形は無論、山陬の小村の一庶民の心持をさへ精密に描寫してゐるのである。

信長、宗麟は、ここに必しも歴史的の大將軍、大大名ではない。五官、五慾を具へたる人間である。われわれはこゝにそれ等の一例としてかのドン・バルトロメオ大村純忠が如何の風采を以て南蠻僧の前に現はれたかを點檢して見よう。これはコスメ・デ・トルレス師のいひつけで伊留滿ルイシユ・デ・アルメイダが千五百六十三年（永祿六年）の陽暦六月某日に横瀨浦から十里ばかりの陣中に純忠をおとづれた時の記事である。

「純忠は彼を待つに常例の如くではなかつた。即ち自ら數々の間を歩み來つて彼を迎へたのである。是れは日本に於ては同位の人に對してのみ爲さるゝ事である。伊留滿も丁寧に禮して一通の挨拶を陳べたのち、コスメ・デ・トルレス師より依托せられた品物を獻上した。伊留滿心を止めて純忠の樣子を窺ふと、神の恩寵の是人の上に下された徵がいとも明かに表はれてゐるのが會得せられたのである。身基督教徒になつて、是人の如く得意であるものを、嘗に伊留滿は之れまで見たことがなかつたのであつた。純忠はこの國の風習に從ひ、華美の衣を著け、その上に肩衣をはをつて居た。(是等の事は已に本書の冒頭に於て說明した如くである云々。)が、これは極めて異樣なものであつた。兩方の、肩から少し下つたところに、白く地球儀を拔き出し、その眞中には JESUS の名が綠色に、美しい字體を以て記されてあつた。そしてそのジエズスの名のまなかからは名號を記された十字架が拜え出で、又地球儀のまはりの餘白の部には三つの爪(註これ耶蘇會の印である)が美しく且つ程よくあしらつてあつた。肩衣の背には更にまたジエズスの名が記されてあつた。形は前のと同じであるが、これは刺繡圖案、一層精巧のものであつた。首のまはりには數珠と美しい金の十字架とを懸けた。その容貌は伊留滿が嘗てある機會で見た時とは全く變つてゐた。純忠はまだ壯くはあつたし、また眉目秀麗であつたから、かくの如き美裝はいよいよ似つかはしいものであつた。彼の周圍には多くの貴人が居た。それはその臣下たる基督教徒であつた。孰れも首に精巧なる十字架と數珠とを下げた。說敎に當つては、先づ彼等の門から入つて、後宗儀上の門に出るといふ而倒は無かつた。談、徹頭徹尾心靈の事に始終した。丁度食事の時分であつたから、伊留滿は遠慮して、辭去すべき由を申した。尤も彼の話がだいぶ皆人の氣に入つたやうであるから、別室に往つて待つてゐてもよいと思つてゐた。然し殿はたつて彼を留めて、彼も之に從はざるを得なかつた。その食事は尋常の陣中の食事ではなかつた。さてそれが終ると、ドン・バルトロメオ殿は、ガスパル・ヰレラ師が五畿內で著した書物を持てこさせた。これは京の學者たちが、神の掟、異端の宗派の事などに關して提出した多くの疑問並にそれに對する師父の答とを書き記したものであり、嘗に異端の者と限ら

す、亦能く新に、御教に入つた者にも多くの光明を與ふるものであつた。殿はその一つ一つの問題を解明し、且つその解に落ちない二三の點に答へむことを求めた。かくして夜深けても、他事は毫しも話されなかつた。一族を呼び集めて神の事を聽かしめたが、人は皆、宗門に入つてまだ數月しか經たない間に、かかる信仰の火のあることに驚いた。云々。」

これは、唯一例に過ぎぬが、フロイシュの史書は殆ど全部この精しさと、あざやかさとを以て記されてゐるのである。この他にフロイシュの書き殘せるものは頗る多い。長短の年報書翰を併すればその數百四十、百五十にも上らう。フロイシュ全集は實に國史に對する貢獻といふ事のほかに、なほ多大の物語としての興味を約束するものである。

南蠻屏風

六月中開催せられた報知新聞社の浮世繪展覽會には南蠻屏風も數々出陳せられたといふ。近ごろ三越の南蠻史料展覽會にも從來知られてゐなかつたものが出てゐるとのことである。遼隔の地に住んで殘念ながらそんなものをば見逃してしまつた。

永見德太郎氏の刊行せられたる「南蠻屏風」の畫集の解説に據ると、所謂南蠻屏風といふものは「此屏風以外……に東京に三、京都に一、横濱に一、奈良に一、山形に二、但島に一、富山に一」現存して居る。そのうちの大部分のものに就ては曾て、ジエスイトの僧たるヨゼフ・ダアルマン博士が詳しく解説せられた。またわたくし自身も曾てその四五のものを看た。唯日本以外の地に在るこの種の屏風に就ては、あまり知られてゐないやうだから、わたくしの調べ得た所を少しくここに記して見よう。即ち巴里のミユゼエ・ギメエに在る一曲、倫敦のヸクトリア・エンド・アルバアト・ミユゼヤムに在る一曲一雙である。巴里の一曲は餘り出來の好いものではない。全景をば明に記憶しないが、小舟に乘つて櫂を使ふ蘭人を描いた部分は略寫して置いた。地は黑に近く、雲には金泊を敷いてゐる。即ち港及び黑船を畫いた一側であることは確かで



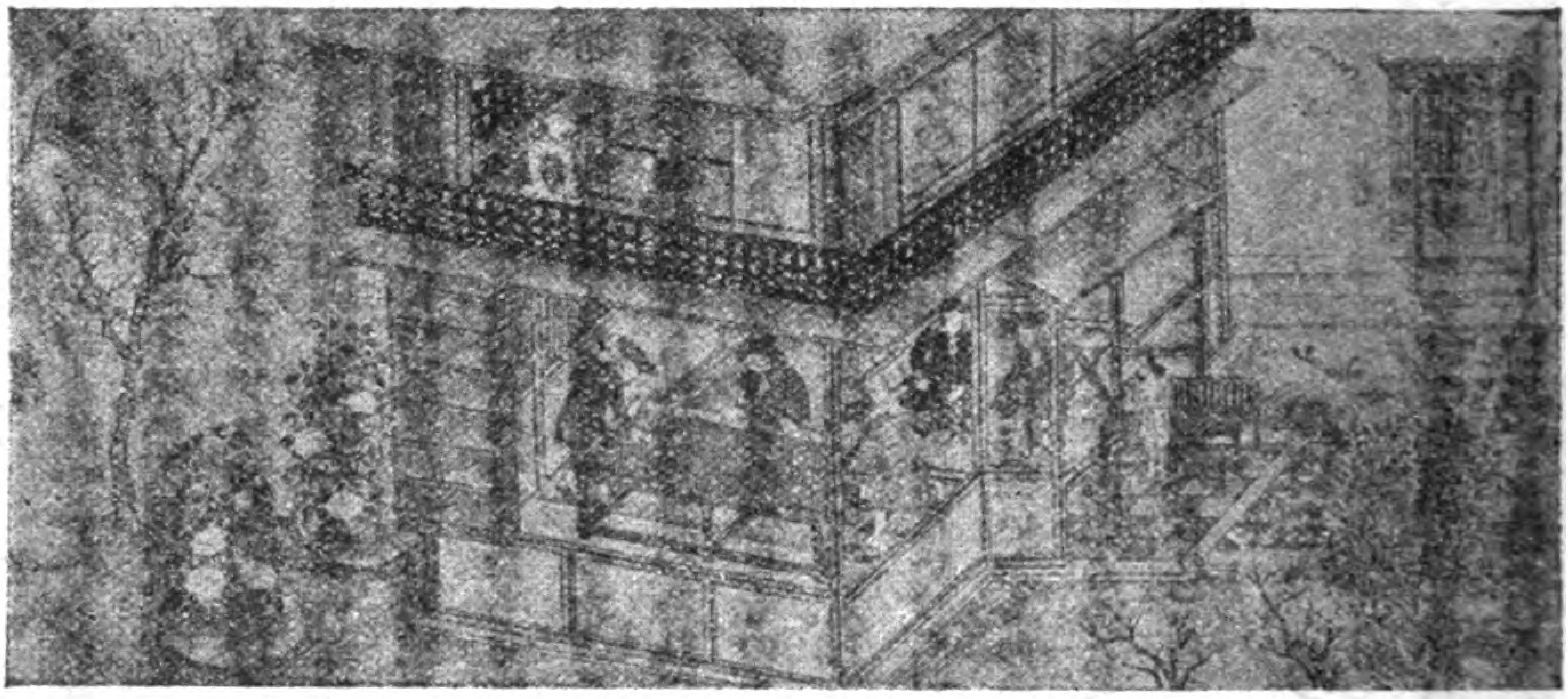
倫教に於ける一曲

ある。巴里のこの博物館には其他洋人を寫す他種の屏風があつた。畫工が女の粉本を得難かつたと見えて、花を手にした一女はまるで日本の女の現在の風俗を髣髴せしめる。

倫敦に在るものはわたくし自身の目睹したのではない。兩三年前巴里の友人 Dr. Lavier 氏から寫眞を送つて始めて之を知つたのである。

その方の一曲のものは相當に古いものらしく、畫品も亦かなり佳い。大船及び波止場を現はし、他より類推して是亦一雙屏風の左の一側であるを知る。そしてその構圖は永見氏所藏のものに酷だ似てゐる。船には四本の檣あり、その一には「吉」字の旗が挂かる。も一つの旗の字ははつきりとは分らない。くだくだしく說明するよりも寫眞圖を挿んだ方がよく分る。

他の二雙の方は畫品が較や劣る。これに至つては左方の船、波止場、右方の町家、南蠻寺等永見氏のものと符を合せたやうである。多少の相違はある。例へば三本の檣の各のものに結ばれた旗が、この方は∴干十の印になつてゐる。又洋人の多數が縁の厚い目金をかけてゐる。然し兩方ともに全く同一の人物事象がある。今でも西班牙人がかぶるやうな、シリンドル形の、鍔廣の帽子を被る壯漢は双方ともに衝立の前にあぐらをかいて、手に軍配のやうなものを持つてゐる。唯一は波止場の敷石の上、一は船の甲板の上に居るといふ點が異つてゐる。年代の關係などは分らないが、どつちが模寫であるだらう。或は同一の粉



倫敦ヰクトリア・エンド・アルバアト・ミユゼアムに在る鬪球圖

本に出來してゐるのかも知れない。

一體南蠻屛風といふものが、少くともそのうちの或者が現場を目睹した畫工の寫生になるものか、或は空想に出り、並に粉本に出り、案出したものかは、今確に判定することは出來ないと思ふ。

異人の球術をしてゐる繪が又倫敦の同じ博物館に在る。これも亦珍らしいものであるから、編輯者が或はこの圖をも寫眞版にして入れてくれるかと思ひ、一寸書き添へる。

四　青年遣歐使者の肖像

この春から首夏にかけて仙臺に博覽會の開かれた時、別に東北遺物展覽會といふのがあつた。伊達家の藏品調度などが、その陳列品の主なものであつたが、大きな牡丹の紋をおいた縞の革羽織、孔雀の尾で織つた陣羽織などあつて、兎角封建時代はだてで美しいと思はせた。イブセン曲中のわかいジユリアン皇帝の白(せりふ)ではないが、異端の行事はなんと美しいことであるぞ。

そこにまた彼の有名な支倉六右衞門の肖像、その將來品などもあつた。毎日眉を摩する人出で、またと思つてよくも見なかつたうちに閉會になつたが、前にも一寸見たことのある常長が肖像は色こそ褪せたれ、しつかりとしたエネチア畫派風の運筆で、この男たしかにこの通りであつたらうとうなづかれた。チ

ントオレツトオ筆と傳へられるが此畫は保證の限りでない。

然しその前三十年の天正の使者たちは、たしかにチントオレツトオが手で寫されてゐる。即ちドン・マンチオ伊東等四人のものがエネチアに滯在した時に、この國の要路の人たちがこの大畫工に命じて彼等の肖像を作らせたのである。「日本使節記」（千五百八十六年羅馬板）の著者グイドオ・グワルチエリイが、その書エネチアの章に記して曰ふ。「この共和國のこれら諸公子に示した數々の厚意のうちから、唯次の二つの事のみを簡單に物語らう。

「その一はこの四人の貴人たちを永久に紀念せむが爲めに、大評定所といふ廣間にその肖像を作らせたことである。この間には諸太公も畫かれてあつた。この畫の爲めに畫工には二千スクチが拂はれた。この間にはその他これらの使者たちの日本文字も揭げられた。且つそれには伊太利亞語の翻譯が副へてあつた。彼等の此地訪問のいはれ、並に各の人の姓名を記したものである。この書きものも評定の間に與へられた。四人の人がめいめいその名を自署した。それが讀み上げられた時に、臨席のもの皆大に滿足した。」云々。

この畫工は他の人ではない、名だたるチントオレツトオであることはリドルフイの美術史書ほかいろいろの本に見えて居る。但しそれが壁に畫いたものか、額緣に入れて懸けたものか、詳しいことは一切分らぬ。又どこかに現存してゐるものか、既に失はれたものかも分らない。否この繪は同畫工の千五百七十四年に畫いた佛王アンリイ三世の肖像と共に、もはや存在はしまいと考へられてゐる。

花火の事

同じグワルチエリの使節記に一行が伊太利マントワの太公から款待を受けたことが記されてあるが、取り分け花火の催しが甚だ精しく描寫せられてゐる。一日サンタ・バルバラの大寺院の儀式に連つたことで、車輪までも鍍金せられた美し

い無蓋の馬車に乘つて市の外廓を廻る濠に導かれた。（わたくしは殘念ながらマントワは知らないが、地圖で見ると市は三方からミンチオの大湖から取り卷かれ、モリニ及びサン・ジョルジオの二橋によつて湖は上、中、下の三部に區分せられてゐる。多分景色の好い處だらうと想像せられるのである。）さて一行湖畔に達すると、ブチエントロと呼ばるる華舫に請ぜられた。船は暗紅色の天鵞絨で飾られてあつた。數多の小舟がまたそれに續いた。孰れも制服を着飾つた漕手を乘せてゐた。かくて喇叭の高らかな響、アルキブチィ又小銃の發射につれて、湖心に乘り出で、夜も程よく暗くなつたころになると、長き橋、高き館、その他建物といふ建物に一齊に火が點ぜられた。別にまた、炎々天を焦すばかりの大篝火を屋形の墻壁の上に置いたから、街衢閭閻及びそこに集ふ三千人、一々指摘するに堪へた。

やがて同じ湖の上に二艘の舟が現はれ、それには三角塔の形に薪が堆積せられてあつた。そしてそのてつぺんにはジランドラといふ仕掛花火が仕組まれてあつた。舟の材木に火をつけたから、焰は炎々と空の上まで立ち昇り三時間ばかりはまるで白晝の如くであつた。忽ち喇叭、太鼓、アルキブシ、大砲の響凄まじく鳴り渡り、この世の終もかくやと思はれた時、館及びその他の方角から銀色の光の雨が空中に降り散つた。湖中の小舟からはまた多數の光彈が迸り出でた。それは一時水中に沈むとやがて再びそれより立ち昇つて巨大な光霧を現じ、暫くして絶大なる爆音を發して消え失せる。その時水は忽ち空中に吹き上げられるといふのであつた。最後には美しいジランドラが水上を回旋した。日本の公子たちはこの上もなく滿足であつたとある。又曰ふには日本では硝石の不足の爲めにこの種の火戯は甚だ稀である云々と云つてゐる。

わたくしは之を機會に日本に於ける花火の歴史を知りたいと思つたが雜書を涉獵する便宜がないので敢て着手せずにゐるが、現在關西地方ではおほげさに弄ばれ、また概して我邦の名物となつてゐる花火もこの時代にはまだ大したものではなかつたと見える。花火の戯が洋人渡來以前に或は支那からも傳はつてゐるかとも想像せられる。信長が天正十九年（千

五百九十一年）に安土でアレサンドロ、ワリニヤニ師の爲めに祭を催したときにも煙硝仕掛で空中に火花を散らしたことはコエリヨのいふジエスイト僧の手紙の中に出てゐる。孰れにしても我邦に於ける火戯の催しは天文十二年（千五百四十三年）の鐵砲傳來以後の事である。

サラゴッサ

わたくしは往年の西班牙葡萄牙の旅行記を集めた「えすぱにや・ぽるつがる記」といふ本を近く出さうと思つて、舊稿を整理してゐる。そのうちに西班牙のサラゴッサ(Zaragossa)に關する記事が拔けてゐるのを見たから今ここに之を追記する。

わたくしが此市に往つたのは千九百二十四年の五月卅一日であつた。そこに着くとまづ何よりも町の見物に出かけた。廣いエブロの河、それに渡した七つの穹窿のある石橋（プエンテ・デ・ピエドラ）、是が何といつても市の景觀の第一であつた。若し橋を渡つて彼岸に至つて顧望したならヌエストラ・セニョオル・デ・ピラル、ラ・セオ等の大寺、取引所の高樓（ロンハ）（孰れも多大の回教建築の趣味を入れたものだが）の並び聳やぐものがあつて、その眺めは一層であらうと思はれた。

この市は我々日本人に取つて、なかなかになじみ深い土地である。千五百八十五年（天正十三年）陽暦八月の某日に九州諸侯の使者伊東マンチオ他三人の青年がこの地を過ぎた。それは、一行が羅馬に到り、法王に謁してのちの歸路である。現に引用する所の、グワルチエリイの使節記（百五十一頁）には次の如く記されてゐる。「時恰もカトリコ敎國王（註フエリポ二世）はモンソンの地にましまし、數箇月以來そこに行宮が設けられてあつた。日本使者の一行、その地に達するや、陛下は彼等の爲めに善美を盡した居室を準備せしめたまうた。かくして謁見の儀があり、前回と同じく（註羅馬にゆく前のことなり）陛下は太子並に諸王子と共に直立して彼等を引見し、有がたき御言葉を下し賜うた。その後は勅令を以

て凡ての入費を公より支出せしめたまひ、それより一行はマドリイに向ふ途サラゴッサの地を過ぎた。ここでは市民いろいろの催しを以て一行を款待し、滞在三日に及んだ。中に就き、彼等の前には美しき對話が朗讀せられ、その詞曲中には日本、スパニヤ、イタリヤが現はれて一行の旅行に因みて問答する處があつた云々。」

更に千六百十五年（慶長廿・元和元年）の支倉常長もこの地を訪ねてゐる。亦羅馬に往くとてマドリイにフェリポ三世に謁し、それよりアルカラ、ダロカの諸地を經て、馬車でこの地に來り著いたのである。「奥州記」の著者學士シピオネ・アマチは語る。「九月三十日の第二十四時に同地に著し、ゲルベス侯ドン・チエゴ・ピエメンテルロは翌朝豫め人を遣はし、使節の手を吻ひて歡迎の詞を陳べしめた。後一行を朝餐に招き、且つ市の見物の爲めに二輛の馬車を用意せしめた。人々は之に乘りピラルの御寺に赴いたが、是れは基督教徒の間には有名な靈場で、一名カメラ・アンシエリカアレと云ふのである。寺に入ると、音樂、儀式、オルガノに出つて、長老（プリオレ）、並に諸役僧出でて一行を迎へ、人々はそこの禮拜堂にてメサを聽き、かの貴き柱を拜し、またかずかずの寶物を見た。それよりサン・フランシスコの御寺に赴き、本堂、僧院を看、その廻廊を通つて副王の屋形に入つた。」

それから副王の館で饗應を受け、食後二時間ばかり四方やまの話をして、太公は一行に馬車を供して散歩せしめたなどとある。人々はなほ日本服を著けて居たと見えて、「珍らしい人々及びその立派な衣服を看せしめむが爲め、その夫人を訪問することを許した」とも云つてゐる。

文中の貴き柱といふは、ピラルともコルムナ・インモビリスとも云はれ、使徒ヤコブのサンチヤゴ・デ・コンポステラに赴く時、聖母この柱の上に現はれたといふ傳説に據るのである

その時は今ではないが、エブロの河の流、又その七つの穹窿の石橋は――日本と違つてさういふ人工物は壽命がながく、自然の景觀もそれほどに樣を變へぬ此國に在つては――そぞろに當年の人々を忍ばしむる便りになるのである。

マドリイのプラドの畫廊に畫工ベラスケスの女婿フワン・バウチスタ・デル・マソ（一六三〇―八七年）の畫いた「サラゴッサの景」といふ大幅が懸つて居る。この市の暴動の後、千六百四十七年の作に係るといふが、成程かの七穹窿の大橋の中ほどのところは破損して居り、前景なる河岸には騎馬又徒歩の士（さむらひ）が物々しげに立つてゐる。（畫のこの部は、ベラスケス自身加筆せるもので、フェリペ四世の宮廷の人々を現はすものとのことである。）然し河の彼方には大厦尖塔が立ち並び、なる程上の空こそは眞く曇つてゐるが、それと思つて注意しない限りはさして不安の氣分はない。若しこの慘憺たる破壞の姿を新しいものとは考へず、又その歴史的事實への聯想を阻止し、却つて前景人物中に、空想的に、騎馬の日本人たちの姿を入れて見れば、正に是れ、貴人に護られつつこの市を往く、わが支倉が道中圖となるのである。

わたくしはこの日の散歩の途中に、少し入りこんだ小さい路次のうちに、ふと心を引く家々を見出した。何がかく瞬間的にはつと心を射いたか確實には追窮することが出來なかつた。門のない家の前には狹い前庭があつて廣い入口からはその奥がふかぶかと見透される。家は三階で黑塗の壁であつた。第一階には入口の左右に大きな窓が二つ。二階には三つあり、孰れもたの層には出張（でばり）があつて欄干が設はれてあつた。そして三階の緻き飾の附いた蛇腹の下には多數のルネサンス風の窓がある。この家の左右にはかの前庭に面して、鉤の手に一棟の家が並び立つ。この家の構造にはどこかヱネチア風の所があつて、有るべき筈でない河をその背後に想像せしめたりして、一種ロマンチックの情緒を惹起せしめたのであらうと思ふ。

歸途一珈琲店の椅子に腰かけてゐると、北部西班牙に特有の頭巾を被つた男が、話しかけた。そしてわたくしの問に答へてマドリイの宿屋の名二三を教へてくれた。その爲めにはマドリイでは高くもなく惡くもない一旅館を求め得て快い滯在を可能ならしめた。

文學博士 上田萬年先生
文學博士 松井簡治先生
共著

大日本國語辭典

全五卷

本文四卷
索引一卷
總頁六千頁

四六倍判マーブル縁
背革角革布裝堅牢美本
定價金六十五圓

苦心卅六年の大著

（御大典記念特價提供）



内容見本進呈

わが國語界の權威なる上田・松井兩文學博士が、**前後三十六年**の超絶的努力の結晶なる『**大日本國語辭典**』**全五卷**（本文四卷索引一卷）**六千頁の國家的大出版**は、愈々今回完成を告げ、新裝して世に出ることになつたが、弊社は恰も今秋御擧行の盛典を記念するために、破格の**奉仕的廉價**と、簡易至便の**分拂方法**を以て、特に**二萬部**を限り、特價豫約募集を開始することにした。昭代曠古の盛儀を記念し、皇國興隆の喜びを子孫に頒つには『**大日本國語辭典**』こそ最も意義深きを信ずる。あらゆる學校・圖書館・官衙・銀行會社・新聞雜誌社・軍隊・軍艦・船舶等は固より一般家庭にこの一部は是非必要である。―**ハガキ一枚**で御申込が出來ます―

豫約特價

一時拂	金五十五圓
月賦拂	金五十八圓
索引分賣	金七圓

（但索引のみの分賣は舊版本文四卷御所有の方に限る）

提供部數 二萬部限

豫約申込 九月廿日ヨリ

ハガキにて御申込ありたし（**申込金不要**）

詳細は内容見本を御覧下さい

東京市九段坂下 **冨山房** 振替東京五〇一一番

井田秀明氏著

長篇小說 石器時代

最新刊 四六判五〇〇頁美裝箱入 定價二圓（送十二錢）

擧世滔々俗流文學の横行する秋、突如として此の驚くべき大小說は太陽の如き光輝を放つて現はれた。

本書は我邦の有史以前に材をとり、森林生活から出發せる原始人を主人公とし、其の轉々放浪の生活を中心に、太古民族の戀愛、掠奪狩獵、農耕、漁業、手工、戰爭等の場面を描き、巧みに其の時代と人類發達の經路を明示せる破天荒の創作だ。

著者は多年考古學及び古代史の研究に沒頭せる隱れたる篤學者で、實に七年の日子を費して本書を著した、有り觸れた空想小說ではなく豐富なる科學的論證に根據を置き、加ふるに流麗な文章と深刻なる觀察を以てし、眞に一世を聳すべき大傑作だ。

弊書局の出版物は内容の高級裝幀の高雅價の至廉を特色とする

村松梢風著

五版

支那漫談

四六判二五〇頁箱入 定價一圓二十錢 送十錢

文壇の支那通として近來俄然として重きを爲し來た著者の、支那に對する縱横の觀察記であり、獨特の現實描寫。秘密と怪奇に滿ちた支那の社會相自然人情風俗習慣あらゆる眞相を描いて、讀者をして居ながら支那を知らしめる。今や世界の謎であり疑問の焦點である支那は本書を俟つてのみ解決される

佐々木指月著

三版

弗の女身像

四六判四五〇頁美裝 定價一圓八十錢 送十錢

著者が朝以後の作品を網羅す。佐々木氏のアメリカ物は正に天下一品、其の文章は弥場の空を行くが如し。わけてもアメリカの女性の大膽な生活解剖は讀者を驚嘆させずには措かない。一讀卷を置く能はざる著者で、近代文明を謳歌する人も呪咀する人も先づ本書を讀んで後再三思する必要がある

東京神田 材木町二

騷人社書局

振替東京二六〇〇八
電話浪花二〇五七

豫約募集――一册五十錢

布裝全十册（一題一册）

朝日常識講座

□人口問題講話　本社專務取締役法學博士　下村宏
□議會の話　東京朝日新聞編輯局長　緒方竹虎
□物價の話　東京朝日主幹經濟部長　牧野輝智
□世界の大勢　東京朝日顧問法學博士　米田實
□支那の現狀　東京朝日新聞支那部長　大西齋
□都市と農村の問題　東京朝日顧問論說委員　柳田國男
□婦人問題講話　東京朝日新聞社會部長　鈴木文四郎
□勞働問題講話　東京朝日新聞論說委員　關口泰
□文藝の話　東京朝日新聞調査部長　土岐善麿
□新聞の話　東京朝日顧問記事審査部長　杉村廣太郎

◇最新知識の綜合――悉く新稿苦心の結晶◇
◇平易明快な記述――一流の新聞人の執筆◇

締切期日――十月十五日

一、體裁　四六判本文九ポイント總振假名付・毎巻約二百五十頁乃至三百頁・金模様金文字入總布裝上製箱入美本
一、刊行期日　昭和三年十月第一册刊行・爾後毎月一册づゝ刊行・昭和四年七月完了の豫定
一、申込方法　お申越の際申込金五拾錢お拂込下さい。之は最終會費に充當しますから第一回分は別にお拂込の事。中途解約者には返金しません、一時拂は申込金不要。
一、會費　毎月拂一册五拾錢　一時拂（前納）四圓五拾錢
一、送料　一册につき八錢、書留は十錢增し。東京大阪市内は六錢、書留は六錢增し。

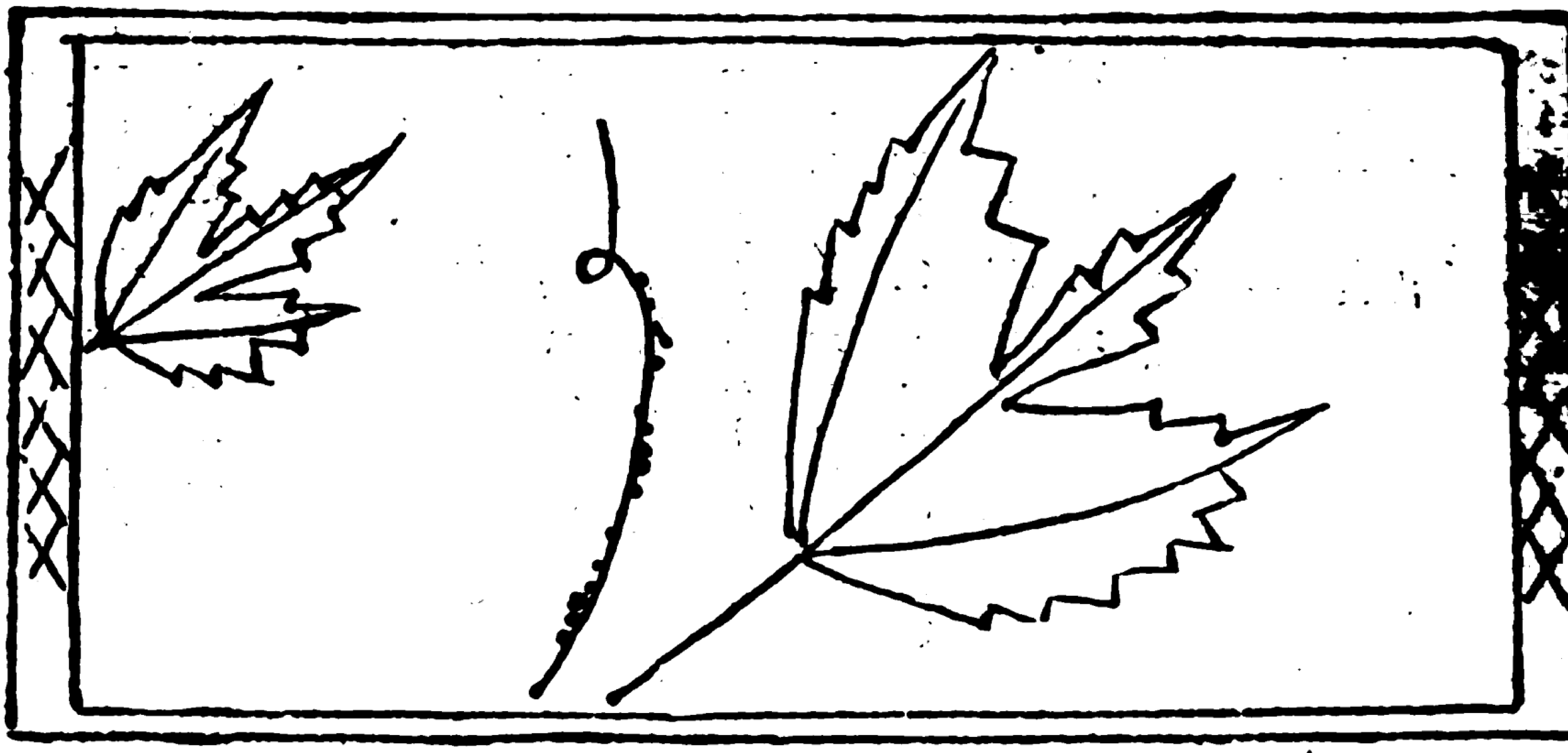
實力は常識より
自信は識見から

第一回配本（十月二十五日より）

人口問題講座　法學博士　下村宏

内容見本は書店は朝日新聞取次店又は
東京丸の内・大阪中之島本社（振替 東京一七三〇 大阪五五〇）

東京◇朝日新聞社◇大阪



クレオパトラ（五幕九場）

前田河廣一郎

時

古代、西暦前三四十年間の出來事

處

主としてエジイプトの首都アレキサンドリア市に於て起る。但し第二幕第二場
第三幕、第四幕は他の個所にステージされる。

人

クレオパトラ（エジイプト女王）

マーク・アントニー(ローマ三頭統治者の隨一人)
アポロドラス(トレミイ王家の宰相)
カルミアン(クレオパトラの侍女)
偉大なる黑人
黑奴の群
アリアニス(國庫の係り官)
デオスコリデス(侍醫)
クインタス・デリウス(アントニーの特命使節)
エロス(アントニーの寵臣)
イラス(クレオパトラの侍女)
シリアス(アントニーの武將)
マルセラス(同)
富豪ポリデマス
船の漕手頭
宦官(多數)
侍女エウノエ
侍女メリラ
牢獄の番人

デオスコリデスの弟子
ローマ兵多數
祭司
潰走兵の群
盜賊（五人）
從臣、ページ、農民など大勢。
（なるべく史實と稱せらるる記錄類に憑據してはゐるが、全然それを離れようとした試みをも含めてあることは諒とされたい。作者。）

第一幕

クレオパトラの寢室。
一面にギリシヤ風な浮彫をほどこした雪白の大理石の壁が、舞台の奥を占領してゐる。天井は高い。壁は、左隅で折れて、低い胸壁のやうに、ペルシヤから移植した薔薇の咲き亂れた花園に臨んで、長く連なつてゐる。花園の下は、ナイルの河口から遠くアレキサンドリアの港灣を瞰おろした宮廷である。朝の空に連柱廣間の一部や、白い彫刻などがひかつてゐる。
左隅に、象牙にて豹身を刻んだ四脚に支へられた低い寢台がある。その前に、食ひ散らした食器や瓶を載せた大理石の長卓。
右隅壁の折れたところに大きい窓があり、大理石の格子（トレリス）の草花の模樣を透して、黃ばむだ朝日が、寢台に熟睡してゐる

クレオパトラの白い全身に、豹のやうな斑紋を投げ掛けてゐる。

その手前にある扉口から、ペルシャ絨緞の緞帳をへだてて、次室の『雪花石の間(アラバスター・ホール)』へ通ずる心。右隅奥に、狹い、壁と同じ色の扉があつて、そこから侍女達が出はいりする。緞帳の向ふ側には、二人のヌウビアン黑奴が、武裝して警戒してゐるが、登場しない。

間近かに噴水の音、すこし遠く鳥の囀り、より遠方にユーノステのドツクに働く船夫や勞働者の掛け聲が響く。又、それらの物音を縫ふて、ときをり、長列の傷いた獸が街を通過するやうな、不穏な空洞な呻吟が、遙か窓の下から反響して來る。劇が進行するにつれて、鳥や水やドツクの音は消えて、ブラキアム宮殿の城壁やパイロンの前にむらがつた群集の喧騷が、次第次第に高まつて來る。

侍女エウノエしづかに右隅の扉を細目に開けて、寢室の樣子を覗ひ、女王の熟睡せるを見て、再び扉を閉す。

クレオパトラ、突然、何物かを抱擁するやうに兩手をさし伸べる。つゞいて、怯えたやうな魘され聲で

『蛇をおつき!毒なんか食はせるものか!――わたしが毒殺したんぢやない!』

と叫ぶ。叫び怒つて、しきりに人と格鬪するやうに手をもがいた拍子に、片足を寢臺から外づすと、石床に轉がり落ちる。

クレオパトラ(ぽつかり眼をひらいて)ああ、痛た!――まあ、この汗は。(膝頭をさすりながら、その邊を搜がし廻る。思ふ物が見あたらぬので、手を鳴らそうとして、不圖、考へなほして寢台へ腰をおろす)犬の星(シイリアス)があらはれると、ナイルの洪水がはじまる。わたしは、――また、わたしの病氣がはじまつたのだ。(指を折つて日數を數へて見る)ほんと

に、人間ほど不思議なものはない。人間となる前に、まづ、男か、女でなければならないんだから！でも、わたしといふ女は、ほんとに女なのかしら？――シイシイアのアマゾン、リカルガスの養成したスパルタの女達、彼女達はほんの強い女であつたに過ぎない。わたしとは違ふ。わたしとは違つてゐる。わたしの胸には、デエル・エル・バアリのあの優れた殿堂を造つたハチエプスート女王とともに、そのかぐわしい藝術をシロツコのやうに荒らした彼女の甥のトトメス三世とが、絶えず列らんで喰ひながら争つてゐるのだ。わたしは、弱い者に對するときは男になる。強い者に向ふと女になる。どちらのわたしがほんとなのだらう？どち――らもほんとのわたしのやうな氣がする。（再び悩そうに低臥する）そして、わたしは、女王なのだ！（起き上がる）

侍女エウノエ、侍女メリラ（再び扉から登場）御目醒めでございますか？

クレオパトラ　今朝は浴みはしないから。――

　侍女達無言にて拝跪、直ちに手にしたる敷物の上にクレオパトラを抱き載せて石床の上に座らせる。この時、もう二人の黒女恭しく銀の鏡を持ち運んで來て、女王の前に斜めに捧げ持つ。侍女イラス純白の雛衣を持ちて登場し、急いで寢衣と取り換へさせる。侍女カルミアン、あはただしく緞帳を分けて入り來る。

カルミアン　女王さま、アポロドラスさまが、今朝早くから御目通りを願ひたいとて御出でございましたが、お寢みのところをと思ひまして、會議室に御待たせいたしてございます。――どうやら、急な事件でもございますやうで、いつもの落々した御顔が、今朝に限りまして、クレトの迷園から出て參りますミノトルのやうに嚴かつう見受けられました。

　この間、最初の二人の侍女達、寢台の側の食卓を片付けたり、低い化粧用の諸道具を載せた卓を運んで來たりしてゐる。化粧卓の上には、十二三通りの櫛、五色の瓶、紫脂を入れた小さな壺類、海綿、鉛白、各種のピンを載せた甲

の盆などが載つてゐる。クレオパトラは、まじろぎもせずに、銀鏡に見入つてゐる。

クレオパトラ　（イラスへ）今朝はよく梳いておくれ。わたしの髪の毛の一本一本が、メヂウサの蛇になつたやうな氣持だ。――カルミアン、アポロドラスが、こんなに早く？　構はない、あの爺さん化石してもいいなら、此處へ御通りと云つておくれ。（カルミアン、アポロドラス去る。イラス鼈甲の櫛を執り上げて、長い髮を梳る。クレオパトラ窓外の物音に氣づく）――何かしら、あの物音は？

イラス　女王さま、あれは世にも不思議な行列でございます。飢ゑた人達が、ナイルの岸を下つて、大通りからラコテスの方まで歩るき續けてゐるのでございます。

クレオパトラ　飢ゑた人達の行列！

イラス　はい、それに、この頃流行ります惡るい疫病に取憑かれた人々も。――どういふわけでございますか、御膝下の都へ出ると癒るとでも考へて居るのでございませうか――昨日の夕方から、ひつきりなしに歩いて參りますのでございます。もうあのソマの前の廣場は人でいつぱいになつて居ります。

クレオパトラ　どうしたものだらう、デオスコリデスや役人どもは何をしてゐるのだらう？

イラス　侍醫さまも、昨夜からヒポドロームへその人達を驅り入れるので、一睡もなされない風でございます。兵隊も出て警戒して居るのでございますが、何しろ對手はアチラスの軍隊とちがひまして、腹の減つた人や、險呑な病人なものでございますから、どうにもしようがないらしふございます。

クレオパトラ　あの聲、あれが饑死する人の聲かしら？

イラス　ほんとに一昨年の御籠城のときには、敵の弩や石砲や、石箭などが御城の周圍を取りかこみましても、まだこれほどの騷がしさではございませんでした。それに、惡るい疫病と云ひますと、どんな宮殿の奥や、長い行廊の涯や、圓

天井の上や、ピラミツトの地下までも、遠慮なく押寄せて參るものださうでございます。……

クレオパトラ　ね、イラス、これはお前とわたしだけの内證話だが、わたしはいつも役人達やカルミアンでさへもわたしに對しては不正直だと思つてるよ。お前、きつとわたしよりも世の中の出來事を、澤山知つておいでだらうね？　わたしの知らないやうな、役人達の知らないやうな事柄を？

イラス　女王さま、このイラスは、お情けによりまして、エルサレムからこちらへ御奉公するやうになつてまだ三年の月日しか暮らして居りませぬので、アレキサンドリアのことにつきましては、さう深い知識はないのでございます。

クレオパトラ　でも、お前、ときをり街へ出て見て、街の人達が困つてゐるかどうか、田舍の百姓達が食ふに困つてゐるかどうかを聞くことがお有りだらう？――もつと引詰めておくれ。いつものギリシヤ風に卷いて！頭の芯が痛んでならぬ。

イラス　女王さまの仰せではございますが、やはりわたくしどものやうな者でも、御殿に勤めてゐると見ると、街の人達は、いままで話し合つてゐたことでもぱつたり口を噤じてしまふのでございます。でも、昨晩からの騷ぎは、もう、御庭先からファラォの燈台を見るよりもはつきりしたことでございますので、――

カルミアンこのときアポロドラスを招じ來たる。[宰相アポロドラスは恰悧なギリシヤ人で、學者、デマゴーグである。女王が先の宰相フォテナスの讒言により兄トレミイ十四世のためにセーベイドに追放された當座、私かにジュリアス・シーザーと女王との仲介人となつた功勞により、現官に昇る。老猾にして、野望的な、しかし、手觸りの柔かな陰險な老人。

クレオパトラ　ああ、アポロドラス、女ばかりですが、外ならぬ御前のことだから許るして貰ひませう。何かわたしの頭痛をなほすほど薫りの高い香料を積んだ船が、インドから這入つたとでも云ふのかい？　それとも、ローマから急使で

も――

カルミアン次の會話の間、侍女達を促がして椅子、デヷアンなどを整へさせ、クレオパトラの衣裳（カッシリス）を持ち來させて着せる。軽るい金冠を女王の頭上に載せると、イラスその他の侍女達、カルミアンだけを殘して去る。カルミアン紅鶴の羽根の扇を取つて、長椅子に掛けた女王に風を送る。

アポロドラス　女王陛下、一國の危機でございます。

クレオパトラ　（さほどに驚かない）お前達は、わたしの顏を見さへすれば、すぐと一國の危機を吹鳴るんだね。わたしも、さう毎朝毎朝びつくりしてゐた日には、シーザーの未亡人だとは云へないね。――今朝は、どんな危機なの？――

アポロドラス　――ええと、ユダヤのヘロド王妃マリアムネさまより、かねて女王陛下には、侍女イラスが殊のほか化粧の技術に巧みなペルシヤ娘であるところから、ひそかに香料商を使嗾されて、彼女を魔醉劑にて誘拐し、當宮中へ御召使ひになられるやうになつたことを根に持たれまして、目下アレキサンドリアにはローマ兵の警備の手薄なるにこと寄せ、いささか挑戰的な使者の口上でございましたが――これは、はや問題になりませぬので、私供參議の者だけで追ひ歸へしましてございます

クレオパトラ　なに、あの赭毛の鬣狗のマリアムネ奴が差出口を利いたと？――それなら、先代のエピフアネス王のやうに、エジプトに居る猶太人といふ猶太人を、エメラルドのついた銀の戰車に縛りつけ、ナイル沿岸の三千の町々を曳摺つてやるわ！

アポロドラス　――いや、その方は、べつに一國の危機と申すにはあたりませぬ。實は、その飢饉でございます。それに、疫病がはげしくなつて參つたので、このことは、いままで、御耳に入れるにはあまりに下々の事柄でございまして、かへつて聽取りの上役人共が自分達の手落を御知らせするやうな結果になるものですから、陛下へ御達しいたさな

……ございます

クレオパトラ　知つてゐます。ソマの前の廣場は人民で一杯でせう、デオスコリデスは眼を赤くしてヒポドロームへ人民を入れようとして働いてゐるのでせう、兵隊も警備してゐるが大通りからラコステスの方まで續く行列で、アレキサンドリアにはナイルの氾濫よりも非道い、人民の大洪水が押寄せたのでせう！

アポロドラス、カルミアンと顔を見合はせて汗を拭ふ。

アポロドラス　そ、聰明なる女王陛下には、何もかも御存知でゐらせられる。して、それは……ひよつとしましたら、誰かほかの參議の役員などが御伺候いたしたのでは？　あの國庫の係りのアリイニアスでもが？

クレオパトラ　それはどうでも良いではないか。女といふものは、お前ほどの天文學者でなくとも自分の運命の星は探りあてるものだ。それよりもわたしに不思議でならぬことは、この豐饒な大エジイプト王國に、餓死をする人民があるといふことだよ。諸外國の船はあの通り、二つの港に蟻のやうにむらがつて貿易を營むでゐるし、世界の學府としてのセラピユウムには富豪の子弟が日夜機械やパピラスの上に賢こい眸を輝かしてゐるではないか？セラピスの本殿には、かなりの國庫支出を見積つて、修繕擴張の鑿の音が朗かに響くではないか？見わたしたところ、庭の薔薇は凋んでゐない。薔薇の花の凋まぬときに、ナイルの沿岸に穀物の熟實らぬわけはない筈だ。聽けば、ついこの間も香水を賣り込めて富豪になつた人民ポリデマスの如きは、お前達や、貴族や、女達を招待して、七日間の祝宴をさへ張つたそうではないか？——ありあまるエジイプトの富をもつて、首都に餓死するものの洪水を來たすといふのは、どういふわけなのか？——アポロドラス、わたしは、今朝は、いつもと違がつて……なんだか世の中の物のすべてについて、くわしくその意味を知りたいやうな氣持になつてゐるのだ。深く、その裏の裏を！

アポロドラス　いかにも御賢明な御尋ねでございまする。——實は、一國の盛衰はなかなか混み入つた事情のもとに置

かれて居るのでございましてな、殊に、この頃のやうに、遠くは西のスペイン、ゴール、ローマ、近くはアゼンス、アクロポリス、更には、シリア、ユダヤ、キプラスと申しまする風に、いろいろな土地との取引が旺んになり、早い御話が女王さまの御使ひになる顔料はフエニキアから參り、又、私の好物の酒も、菫の香りのするフエニキア酒、日光を味はうやうなスペイン酒、無數の眞珠を融かすやうなゴールのめでたい酒、キプラス産の黄金の溶液のやうな葡萄酒といふ風に、いやさまざまな類ひがありまして、ごく簡單には參らぬのでございます。――で、まづ、外國との戰爭ですな、一これが一番に國家に影響いたしますもので。その次は内亂、あのスパルタカスのやうな亂暴者の起こしまする革命が傷手でございます。あの氣狂ひ奴隷の格鬪士が、ゴール人を使嗾かしてローマに弓を引いてから、わづか二年の間にどれほどの費ひが生じ、何萬人の兵卒が死んだかわかりませんのぢや。さういふ怪しい奴は、エジイプトには先づ一人もございませんから御安心遊ばせ。それから三番目には……ええと、その贅澤でございますな。尤も、これは下々の者の、新しく金持になりました輩を指しまするのですが、贅澤のもとは、それ、氣の緩るみから生じましてな、やれ戀の色のと孔雀の翅をひろげるやうに、男女が互にきらびやかな身裝をしたり、高價な香水をふりかけたり、外國のリンネルを使つたりしまするもので、金はどんどん外國へ逃げて行く一方でございます。……

クレオパトラ　（突然大きい聲で笑ひ出す）カルミアン、アポロドラスの爺やは、今朝もわたしが退屈だと思つて、お伽噺を聽かせにわざわざ寢室まで這入つて來たのだよ。御前、これから、一國の危機に騙まされてはならないよ！（窓外の呻吟に氣がつく）――でも、お前の說明では、一向にあの街の中で呻いてゐる人民の窮狀がわからないではないか！

カルミアン　アポロドラスさまは、相變らず御氣永に諄々と御說き遊ばすのでございませう。

クレオパトラ　どうして、人は飢ゑて、疫病になつて街へ押寄せて來るの？さア早く、御話し！

カルミアン　それが、女王さま、道々斃れ死ぬ者が多くて、アレキサンドリアの葬儀師だけでは手が廻らず……

アポロドラス（咳拂ひをする）いや、いや、その方はもう既でに片付きまして、なに、デオスコリデスがその任に當つて居りまするのでな、別に御心配はいりますまい。疫病と云つても、これは毎年のこと、收穫季節の蝗蟲ほどにも驚くことはありますまいて。――だが、ここに、最も重大なる國家のふしあはせがございますのぢや。それは、ほかでもありませんが、女王陛下、貴女さまの御身の上でございます。――どうも、ほかのことと違ひまして、これは老人の口からさへ申上げ悪いことなのですが、現在、貴女さまは、トレミー王朝の王室令から弟御さまと御夫婦といふことになつて居られる。が、それは、表向きの御話で、ついこの間ローマから御歸還になられたばかりの貴女さまには、シーザリオンといふ立派なシーザーさまの御子さままでが御有りになつてゐらつしやる。ところが、申上げるも涙の種、あのとほりローマの大執政官は敢ない御最後、あとはカシアス、ブルタス、アントニー、オクタヴィアス、リピダスの五人の友食ひ戰爭、しきりに双方から援兵を乞はれるが、私共はじめ參議の者一同どちらともローマのことは見分けがつきませぬので、つひ六十艘の軍船の六艘も派遣せずに居りましたのでございますが、昨夜、計らずも、ローマの形勢が意外の方面から知れましたのでございます。

クレオパトラ　何に、ローマの形勢が？――して、良人シーザーの仇敵は打つてくれましたか？それとも、弱蟲のオクタヴィアスや不評判のアントニーは敗けましたか？エジイプトとローマとの最後の鎖は共和政府の勝利で斷切られてしまつたのか？このわたしが、ジュリアスと心を協はせて、あれほどまでに骨を折つた兩國の提携も、みすみす水の泡となつて、この世界の穀倉と稱へられ、葡萄と棕櫚の國、オジイリスとラの神の鎭座するエジイプトは、ローマの屬國になりはてるのか？――

アポロドラス　いや、いや、女王さま、御欣び下され。なかなかの吉報でござりまする。昨夜、港を警邏する兵卒の捕へ

ました、ナクソスから逃げて參つた海賊達、これらの傳へまするところに依ると、プルタス、カシアスの率ゐる叛逆軍は、アントニー、オクタヴイアスの兩軍と、フイリツピの平野にて最後の決戰をいたしまして、カシアス、プルタス共にもろくも敗軍、自刄いたしたといふことでございます。これは、海賊の一人一人を別々に訊問いたして採りました口書でございますから、よもや嘘では御さいますまい。二年間の永いローマの內訌も、どうやらこれで納まつたものと思はれまする。――

クレオパトラ　まあ、それを聽いて安心しました。どうしてお前は、もつと早くそれを云つて聽かせなかつたのかい？カルミアンもカルミアンです、――お前達は、いつも壁一重隔ててこそこそ內相談をしてからわたしに物を云ふ癖がある。

アポロドラス　――そこでな、女王陛下、臣下の御案じ申すのは、そこからでございまするのぢや。一旦敵軍鎭定となりますれば、アントニー、オクタヴイアスの二將軍は取りもなほさず凱旋將軍、ローマへの手土產に戰勝地の賠償金は云ふに及ばず、この機を幸ひと、地中海一圓の屬領地の諸侯に即刻馳せ參じるように命令するのは火を見るよりも瞭かなことでございます。わけても、アンテオカス、シズマ、パレモン、ヘロド、テトラルク、テスナルクなどの諸王侯は、競つて我れ勝ちにとこの二人の機嫌を伺ひに集まることは知れて居りまする。さて、さうなつた曉に、いままで度々の援兵を乞はれ、トレミー全國の戰艦にあれほどまでの救援を賴んで參りましたアントニーに、このエジプトはなんと應對いたしてよろしいものやら、これは一大難題と思はれまする。私共九人の者共、そのことにつきまして、實は昨夜から首を鳩めて凝議いたしましたが、頓と良い策略が浮ばないのでございます。

クレオパトラ　それはお前大丈夫といふものさ。このわたしは、ジユリアスと正式の結婚はしなかつたものの、世界が認めるほどの戀中ではなかつたのか！

アポロドラス　いいえ、その點はお仰せのとほりに違ひございませぬて――しかし、女王さまもご存知のとほり、ローマといふところは、元老院や貴族や市民などと、共和政體のやかましいところでございましてな、貴女もいくどか死ぬより辛らいと仰日つたやうに、その――どうかすると、シーザーさまのお忘れがたみを蔑ろにいたしますやうな風なので、只今のところでは、如何なものでございますやら。
クレオパトラ　では、ローマと戰爭をしなけりやならぬといふことにでもなるのかい？
アポロドラス　休むを得ませんと、行懸り上、あの頃シーザーさまがアレキサンドリアへ御出ましになりましたやうなことが、二度と繰返へされはせぬかと心痛して居ります。
クレオパトラ　誰が？――オクタヴイアスがかい？
アポロドラス　いやシーザーさまの甥御の方は、どちらかと申せば、お病身勝ちで、それほどの覇氣も御持ち合せにはなりませんでせうが――あのマーク・アントニー將軍でございます。
クレオパトラ　アントニー……あのバッカスのやうな、娼婦キゼリスと浮名を立てられた男だらう。あれなら、アポロドラス、わたしはよく知つてるよ。さうだ、あのチベルの岸の宮殿で、ちようどジユリアスとトレボニアスとが、委員會に相談することがあるとか、委員會を除け物にしようとか云ひ合つてゐるときだつた、扉が勢よく開いて、日に燒けた、若い小兒のやうな顏をした大男が、わたしの方を見て、笑つて這入つて來たのだ。房々した金髮が、氣高い額に葡萄の蔓のやうに絡みついてゐた。……あの男は、嫉妬深いジユリアスに隠れて、わたしの頸へ接吻したことがあるよ！
アポロドラス（悦に入つて）どうも女王陛下には、何もかもこの私奴が申上げようとすることを、ちやんと御洞察遊ばしてゐらつしやるから、全くもつて叶ひませぬて。エジイプトが、この疲憊した狀態で、ローマの猛將軍と戰爭をしたくな

いとすれば、女王さま、そこには唯一つの道しかないのでございます。――それは、御察しのとほり、あの好人物の、バッカスのやうな、いや、若いヘラクレスのやうに強い青年に、もう一度貴女さまの御麗はしい頸に唇を觸れさせることでございます。申して失禮にあたりまするかも知れませぬが、都合のよいことには、今は、あの壯大な中庭(アトリアム)の帷帳をそつと掻き分けて窺かれるシーザーさまも御出にはならないので――。

クレオパトラ　(急に立ちあがつて、緞帳の方へつかつかと歩み出づ) アポロドラス！笛を吹きながら、謀叛人三百人の死刑を笑つて見てゐたトレミー・オーレスの娘であるわたしをお忘れでない！(憤然として去る)

アポロドラス　(カルミアンへ) のう、その笛吹きの王さまは、"トレミイ家でも、一番エジイプトの神々を呪はれて、ローマと内通しておいでの方だつたよ。(カルミアン答へずにクレオパトラの後を追ふ)

緞帳のむかうに騒々しく誰何する聲。アポロドラス近よつて覗き見る。國庫係りのアリアニスぶつくさ云ひながら入り來たる。

アリアニス　このヌワビア人は實に横柄な奴隷ぢや。――うむ、それはさうと、非道く待たせるな、先刻から皆で痺れをきらして待ちあぐむでゐるのだが、……どうぢや、うまく戰爭が防げそうかい？

アポロドラス　いや、女子といふものは、男の反對だよ。

アリアニス　――と云ふと？

アポロドラス　女王陛下には、アントニーと御會見を承諾なされた！

アリアニス愕然とする。

このとき、クレオパトラ再び急ぎ足で登場する。侍女カルミアン及び黒人侍女四人後から從ふ。

クレオパトラ　アリアニス、今日から、このアレキサンドリアの市に三日間、セラピスの大祭典を擧げなさい！　街々

には篝火を焚き、戸毎に色ガラスのランプをともし、宮殿前の廣場の噴水には酒倉にあるかぎりの酒を充たし、中庭から厨へ達するまで、四重にも五重にも食卓を準備して、エジプト中の飢え渇えた人民に、自由に飲み食ひするように！

アリアニス　して、その莫大な費用は？

アポロドラス　まあ、そのいつもの吝嗇はちと愼みなさい。今日といふ日だわい！

クレオパトラ　財源は、この際、假りに國庫の立替えとし、その間直ちに全國の祭司を召集して、あらゆるピラミッドに秘められた歴代の王柩に保存されてある筈の黄金、寶玉を發掘してこれに充てる。エジプトは今日から人民を養はねばならない。――わたしは斷乎として、ローマと闘ふ決心である！ローマを征服して世界をクレオパトラの國にするまでは、わたしは國庫にある最後の一セスターチヤまでも使はう！

カルミアン、アポロドラス、アリアニスの三人呆氣に取られて思はずよろめきかかる。

――幕――

第二幕

（第一場）

玉座の設けてある賓客室の一部。

第一幕より二月ほど後のこと

室の中央に、稍左へ斜めに、高く黄金の玉座が設けてある。そそり立つた大圓柱が一本、わづかに朦朧とした天井の光線の滑り落ちる地位を示す。圓柱は細かい象形文字を嵌めたハソルの神頭を描いた像になつてゐる。

玉座の背後には、唐草に奇怪な禽鳥を扱つた重々しい緞帳の一部が見られる。

南北兩エジイプトを象徴したウレウスの王冠を戴き、手に象牙の王笏を持つたクレオパトラが、繊い金銀の撚糸で織つた長衣を着て、その上に座つてゐる。待女カルミアンの白い姿が、きらびやかな鳥の羽根の大團扇を兩側から動かしてゐる黒い宦官達の間に鮮かである。警護の武官文官僧侶及び學者達は、薄明の彼方に、わづかに光り煌めく武器や、冠物の種類でその存在を暗示してゐる。

アントニーからの特命使節、クインタス・デリウスは、左手を右肩の甲冑にあて、拔いた長劍の尖端を床の上へ落とすやうにして、女王に敬禮して立つてゐる。甲冑の上に紫の小形なマントを着けた、小型な、滑々した貴族的な顔付の武士である。常に言葉の間に、蠱惑的な微笑を見せることを怠らない。

稍長い間。デリウスはしげしげとクレオパトラの顔を瞻上げてゐる。女王はスフィンクスのやうに微動だもしない。

デリウス　偉大なる女王さま、主人マーク・アントニーは、遙かに陛下の高名と、幸福と、榮運とを祝して居ります。

クレオパトラ　同樣に、わたしからも御主人の御幸運を祈ると傳へて下さい。勝利も十分にその果を結んだやうですね。

デリウス　甚だ御言葉に異を樹てるやうではございまするが、主人アントニーの幸福は、唯々女王陛下が一度彼の地へ玉輦を枉げさせ給ふことによつて充たされるのでございます。

クレオパトラ　そりや、さほどまでに、御主人にはこのエジイプトを心掛けられるのであるか？

デリウス　度々の使者の言葉、事書簡にわたりますれば、武將の主人には、まま非禮の點も多きやに愚考されまするが、心は日夕ナイルの河畔にさまよふてでございまする。――

小間。

クレオパトラ（決意の面持ちで）皆のもの一同暫時次室に遠慮しなさい。

侍女カルミアンを除く外は、侍臣侍女達左奥へ退場。

クレオパトラ　優れた使節殿、近う、これへ！――して、御主人の御言葉と云ふのは、それだけのことであるか？――隠くすにはあたらない。わたしは、何の目的あつて、御主人アントニー殿が、かうもこのエジプトをタルラスへ懇望されるかについて篤と知り置きたいのである。

デリウス　それは、慧眼なる女王陛下の御賢察のとほり、世界の東と西とに無役の戦争を避けようがための主人の老婆心からでございます。

クレオパトラ　御主人アントニー殿は、三頭政治の頭目となられたと承知して居るが、さすれば、ローマ共和政府は、新しく世界統一の意図をでも持たれるといふのか？

デリウス　仲々持ちまして。ただ、地中海隣國の諸王が、好誼、親善のために、わざわざタルラスまで出向かれましたにも拘らず、ひとり女王陛下のみが御缺席被遊るとは、諸王侯の手前もあり、ローマ政府の名目もいかがなやうな始末でござりまする。

クレオパトラ　――で、強つてわたしが行かぬとあれば、御主人には何と召さるる御心であらう？

デリウス　はツ、その節には、使節の役の拙者奴が、御心變りのあるまで氣永に御待ち申すよりほかにござりますまい。

クレオパトラ　それでも否と申すなら――？

デリウス　恐れ入りまするが、主人マーク・アントニーと雖も、さほど狭量な人物ではございません。どうしても御出でがないとあれば、やはりそれまでのことかと存じまするが。

クレオパトラ　エジプトに兵を向けるか？

カルミアン　女王さま………！

クレオパトラ　お前の知つた事ではない、控えてゐや。

デリウス　仲々持ちまして、戰爭などとは。ローマも、この度二ケ年間の內爭のために、さらぬだにポムペイ戰爭以來諸方に事を構へるもの多く、兵力の疲憊國務の缺乏、むやみとそのやうな非常手段は。——

クレオパトラ　出來ぬと云ひやるのか？

デリウス　出來ぬとは申されませぬが、元老院が仲々承認せぬ次第かと推察されまする。

小閒。

クレオパトラ　話は別なことになるが、すでにわたしの耳に這入つたところでは、御主人アントニー殿には、このローマの市民どもの蔭口するやうに『ナイルの蛇』などが御目を穢がさずとも、澤山に麗はしい女王達を御集めになつて居られるといふことであるが？

デリウス（快活に笑ふ）あの女王グラフイラとユウトロープについてでござりまするか、——あの御兩所は、謂はばローマにすがられずには王位の危ふい方々、女王陛下の前にはオジイリスの祭壇に迷ひ出た內鼠も同じことでござります。

クレオパトラ（稍焦燥的に）ええ、さういふ仰山な比喩に用はない。わたしの聽きたいのは、御主人アントニー殿の內意ぢや——內意がなかつたとすれば、何と言はうか……デリウス、御主人アントニー殿は仲々貴婦人には名望家と聽いて居るが——？

デリウス（急に溶けた物腰）はツ、主人マーク・アントニーは、殆ど人生の小春日和とでも申しませうか、四十年の年齒に入りまして、あの熱情家的な多血性の偉丈夫としては、まことに危險な時期に際して居りまするかと存ぜられま

す。武將としての荒くれた過去の半生には、これと申すほどのローマンスもなく、殊には令室フルヴィアさまはあのとほりの御氣象。いま男性の花とも云はるべき働き盛りに、眼の醒めるほどの獲を得ましたなら、定めし六頭の獅子に戰車を曳かせてもまつしぐらに驅け込むことでございませう。

クレオパトラ　遙々と御役目御苦勞であつた。——御主人アントニー殿に對するわたしの御返事は、十日の後に申上げる。カルミアン、今宵は、手厚く使節をおもてなし申上げるように。………一言だけ、デリウス殿、そなたも曾てはシーザーの敵のカシアスの友であり、次にカシアスが斃れるとオクタヴィアスに味方し、今はアントニーの特命使節としてわたしに會見して居られる。して見ると、怜悧なそなたの風向を信じて、わたしもマーク・アントニー殿についた方が損をせぬかも知れませぬな——！（デリウス匕首で刺されたやうにだぢだぢとなる）

——幕——

第二場

ギザ。

第三金字塔と呼ばれる、メンカウ・ラ王の木乃伊を收めたピラミツドの麓である。

正面奧一帶に人間の背丈より少し高いほどの黑いイテォピア石を据ゑたピラミツドの礎が、半ば砂にづらもれながら立つてゐる。その上には、大理石の石塊が、大きい三角體の一斜面を暗示させる角度を保つて、無邊の空まで聳える。無數の象形文字の刻んである石と石との繼ぎ目が、陰鬱な皺を見せてゐる。基底石の缺所が、塔身に昇れるほどの段々になつてゐて、昇りきつた處は、自由に二人の人間が通行し得るほどの徑になる。

中央やや右へ寄つて、一枚の石塊が、それだけ取りはづされたやうに横向きになつて一尺ほどの通路を開いてゐる。こ

れは自動的に開閉する石扉であつて、ピラミッドの內部へは、このほかに出入口はない。舞台の前景及び左右には磊々とした石塊の崩れを除いては、すべてが荒れはてた沙漠の空虛である。最初、幕があがつた時には、舞台左端前景から塔身へかけて斜めに、巨大な鋸の歯のやうな月光が、淋しく石の肌に泌みてゐる。時が經つにつれて、月光は少しづつ右へ右へと滑つて行つて、最後に舞台全體が照らされる。これは隣塔カフ・ラ王の第二ピラミッドの投影が移り動くからである。遠くの方から、砂地を踏むで來る多數の人間の跫音と金具や劍のかち合ふ微かな響きで幕があがる。とぎれがちな鼻にかかつた話聲。

舞台は、そのままに、しばらく空虛である。やがて、亂雜な武裝をした潰走兵の一群が、疲れて喘ぎ喘ぎ右端から登場して、左端へ通り過ぎようとして、ちよつと立停まる。

後になつた兵卒　おい急げよ。俺にはこの沙漠が跫音だらけに聞えてならない。

最初の兵卒　御前こそ急げよ。しかしもうこゝまで來りや大丈夫だ。

兵卒三　この邊に水はないかな？

最初の兵卒　水か、貴樣海豚のやうな奴だ、先刻から水ばかり飲んでる。死ぬなよ。

兵卒四　水なら確か向ふのスフィンクスの側に運河がある筈だ。

後になつた兵卒　そして、その向ふがナイルだらう――いくらでも飲むさ。

兵卒五　一體俺達は何處へ行くんだ？

兵卒六　何處つて、遁げさへすりやいゝのさ。考へようによつては、遁走するんぢやない、進むのだ。戰爭を休めるのは

卑怯とは限らないよ。もと〳〵俺ア百姓なんだ。無理に兵隊にされて、こんな坊主と地主の繩張爭ひへ大切な生命を捨てに生れたんぢやない。
最初の兵卒　さうさ、戰爭はローマ人に任しとくさ。今に見ろ、あんなに戰爭ばかりしてると、ローマの政府は屬領地からの内亂でぶつ潰れるぜ。
兵卒三　あゝ水が欲しいな。この山は何だ？
兵卒四　馬鹿云ふな、これは山ぢやない。ピラミツドだ。三大ピラミツドの一つさ、ギザの。俺はもとこの界隈の船夫をしてゐたからよく知つてる。これ、この道路が昔の王さまがナイルから石を運ぶために、十萬人の土方を十年も使つたといふ十間幅の大道のあつた跡さ。それから、こいつはメンカウ・ラといふ奴のお墓で、十萬人の人間が十二年掛つて築いたんだそうだぜ。
後になつた兵卒　嫌に餘計なことを委しく知つてるぜ。案内人でもしてゐたんだらう？
兵卒五　昔の王さまなんて贅澤なことを考へたもんだね。こんな物を築くのより、もつと水道でも拵へて置けやいゝのに。
兵卒三　水道は贊成だ。
兵卒六　俺はこれを見ると癪に觸つてならないよ。スフインクスだとかオベリスクだとか、大體こんな物は俺達を侮蔑するために建てられたやうにしか思はれないよ。いやあの時代には俺達人民があまり仁が良過ぎたのだね。
最初の兵卒　ともかく急がう。追手が掛ると俺達の首はないぞ。
後になつた兵卒　ヤツ、向ふから誰かやつて來るぜ！　巡羅兵の一隊かも知れない。（一同左端を透かして見る）駱駝に乘つた奴と、驢馬に乘つた奴と、あとは徒歩だ――三、四、五人！

兵卒三　なに兵隊ぢやないよ。でも要愼して行かう。まさかの時にアこつちの方が大勢だ。
兵卒五　刀もあるしな……。
最初の兵卒　しつ、默つて！
一同左へ去る。稍長き間。跫音。
突然、盗賊A左端から、礎にやもりのやうに吸ひついて表はれる。剽悍なアラビヤ人風の身堅め。後方にむかつて合圖する。
盗賊A　駱駝と馬は、そこで二人が番をしてるんだ。中へは三人で大丈夫だ。
盗賊B　（Cと登場）なんだい、今の奴等は？
盗賊C　黒ん坊の手下かも知れないぞ。
盗賊A　黒ん坊と云ひや、近頃隨分あばれるやうだな！この間もメンフイスの大地主から、三百人も塊つて奴隷が逃げ出したといふ話ぢやないか――みんなあの黒ん坊の味方になるんだよ。
盗賊B　いままでは王さまの方が威張つてゐたが、これからは王さまを蹴飛ばして逃げる奴の世の中になるのかも知れんぞ。
盗賊C　どうもかう世間が物騒になると、俺達泥棒の方が幅が利かなくなる。
盗賊A　おい、兄弟、そろそろ取掛ろうぜ。
盗賊B　扉の押し方はよく知つてるね？
盗賊A　ヘン、これだけあ、やはり俺さまのやうに、ハイログリフイを知つたもんでないと都合が惡るからう。先刻あの坊主を殺ろしたときちやんとパピラスの記錄を失敬してあるさ。さア龕燈をつけよう！（盗賊Aつかづかと柴ち登る。

盗賊C下から龕燈を差上げてる。B、Aにつゞく）

盗賊A　あれ、開いてるツ！

盗賊B、C　なに、開いてる？

一疋の蝙蝠が洞穴の中から飛び出して、二人の頭上を臭ひを嗅ぎ廻はるやうに舞ひながら、月光の方へ消える。

盗賊B　畜生ツ、うす氣味の悪りい。メンカウ・ラとかいふ木乃伊の魂かも知れんぞ！

盗賊A　お前も先刻の生臆坊主みたいなことを云ふぜ。（もう一疋の蝙蝠飛んで來て、盗賊Cの方へ舞ひ下がる）王さまの魂が二つ三つもあつてたまるもんかい。

盗賊B　でも王さまと王妃とが埋められてるんだぜ。

盗賊A　それよりも、俺の氣になるのは、中から誰か出て來るらしいことだ。

盗賊C　ふむ、たしかに足音がするやうだ。

盗賊A　太い野郎もあつたもんだな、俺達が一世一代の智慧を絞つて、このピラミツドの木乃伊にはきつと香料とふんだんに寶物を詰めてあると睨んでやつて來たのに、おう、兄弟達、もうこりや泥棒もめしの食ひ上げちやよ。

盗賊B　しつ、それにしても、出て來た奴を殺ろして、その稼ぎ高をそつくりそのまま頂戴と出たらどんなもんだい？

盗賊A　こいつは――氣がつかなかつた！よし、では、三人、お前は下に隠れてゐろ、二人から兩側へ立つて、いいか？

（剣を抜く。AとB、石扉の兩側に身を摺りつけて待つ。暫らく間）

足音――石の崩れる音。

突如、人間の頭大の石が、洞孔の上方からあらはれる。盗賊AB呼吸を合はして、發矢と斫りつける。火花。

偉大なる黒人　誰だ？（二人の盗賊の前へぬつと全身を露出して威嚇す。渾身黒く、頭に赤い汗留めの頭巾をかぶり、

半裸體、下袴は白と赤とのだんだら染めであつて、長劍を帶びてゐる。ギリシヤ風なサンダルに足を堅めてゐる）。

盜賊A　お前こそ何者だ？（二人飛び降りる）

偉大なる黑人　俺か、俺は奴隷の味方だ、弱い者の味方だ――そしてローマの敵だ！（悠々と礎の足場を降り來る）お前方は、この頃よく神殿や社祠を荒らし廻はる小泥棒だな？

盜賊C　黑ん奴だ！

　このとき、洞穴内から、多數の黑奴の群や、赭顏の外國人碧眼のゴール人などがあらはれる。一同武裝してゐる。

盜賊一同（だんだんに左奥へ退さる）どうぞ、生命だけはおゆるし下さい！

偉大なる黑人　わかつた、それでいいよ。生命の惜しいうちは眞人間だ。――どうだ、俺達といつしよに、もつと大きい、大仕事をして見る氣はないか！こんな木乃伊の墓の前に、驢馬をつないで、中で誰がどんな會議を開いてゐまいものでなし、驢馬の脚音が聞きつけられぬものでもなし――そんなことで良い氣になつて殺生をしてゐるより、このエジイプト中の奴隷を解放して、新しい奴隷だけの自由な邦を拵へて見る氣にはならんか？今夜ここに集まつたのはほんの少數の者ばかりだが、ユダヤ、シリヤ、アラビア、マケドニアに掛けて、俺達は夥しい同志を持つてるのだ。

盜賊A　へえ、そりや豫々御話は承つて居りますが、どうも私供は奴隷といふ境遇ではないので。

偉大なる黑人　馬鹿ッ！他人の隙を見て物を掠めて歩るいてゐる人間に、何の自由がある！――今夜俺達の集會の場所を御前達に發見された以上は、どうしても仲間に加はつて貰はにやならん。どうだ、一緒にローマの軍隊や、トレミイのあの淫賣女王の軍隊と男らしく鬪つて見る勇氣はないか？俺達の間には頭だの尻尾などといふものはない。俺はただ同志に代つてしやべつてるだけだ。ここに二十五人の同志がゐる。その二十五人の力で俺はお前達を引留めるのだ。

加盟か――死か！

盗賊一同（へたへたと腰をおろす）どうぞ御仲間へ御加へ下さい。

偉大なる黒人　いや一緒について來るうちには俺達の仕事はわかるよ。物は理窟ばかりぢやない。さあ、それでは、同志達、夜の明けぬうちにナイルを越さう。お前達も駱駝なり驢馬なりへ勝手に乗るがいい。默つて！足を輕ろく！昔俺達の先祖が鞭打たれながら石を運んだ大道を、逆に都へ押寄せよう！

一同粛然と左へ退場。

消え行く跫音。月光一としきり

白衣を纏ふた祭司、アリアニスと侍臣二人を案内して、右からひそかに登場する。アリアニスの手には龕燈が光つてゐる。

祭司（段々昇りかけて）おや、御役人様、ここにも多數の足跡がございます！

アリアニス（地に踞んで調らべ廻はる）石原の方はどうだね？

祭司（覗き込む拍子に一疋の大蝙蝠が飛び出して顔を掠め去る）ひやツ――アメンテの御使ひだ！と、この通り、中はがらんどうでございます

アリアニス　エジイプト王朝歴代の靈廟を荒らし廻はる憎くい奴！ああ　女王さまも、この上は國を賣るより外に賣る物がなくなつたわけだ！

――幕――

第三幕

アジア・マイノルに於けるタルラス市のシドナス河口。花環で扮飾した巨大な帆船の船首の一部が、夜の河の仄青い背

景に聳えてゐる。岸には無數の篝火や松火、その前に一群のローマ兵や漕手の黑奴の群などが、がやがやしてゐる。船はガレー船で、半ばすぼめられた絹の帆が幽かなエジプト模樣を見せて夕風に疲れたやうにぐつたりしてゐる。舳（へさき）の不思議な鳥を彫刻した金具の裝飾が、船内から洩れるシストラムのがらがら鳴る音や、箏のやうな笛や、クロタリのかちかち鳴る拍子と共に、異樣な情緒を與へてゐる。黄ろい幔幕を張りめぐらした船室が、彎曲した舷に半分だけ見えて、棕櫚の葉の蔭から裸體で踊つてゐる舞妓（アルマ）の姿がちらちらする。

舞台の左には岸の亂杭があつて、船を繋ぐ太縄が張り切つて杭をたわめそうに見える。あらゆる半東洋的な騒音で幕あがる。

黑奴の一　おい踊らう！

黑奴の二　相撲を取らうか？

黑奴の三　その方がいいぞ！（黑奴一と二格闘しはじめる。舷へ出て來たクレオパトラの侍女の一人花束を持つて見てゐる。群集次第々々に黑人達の掛け聲に惹かれて右端へ集まる。ローマ兵しきりに興味を感じて、自分達も聲援する。音樂一としきり。船内のどこかから蒼い煙がたなびいて來る）

黑奴の二（手痛く投げられる）おら、あの甘い牛の灸ける臭ひを嗅いでから、腹に力が這入らなくなつた。（一同笑ふ）

侍女の一　ほら、勇士にあげるわよ！（花束を黑奴の一へ投げる。黑奴無性に嬉しがる）

ローマ兵の一　俺と一番やるか？（黑奴に挑戰する。二人相撲ふ。ローマ兵げもなく投げ飛ばされる。口惜がる。笑聲。ローマ兵二進み出でて挑む。黑奴、ローマ兵の二を手ひどく投げたため、對手は岸を滑つて水の中へ這入る。一同引上げる。笑聲）

ローマ兵の三　俺が――。(飛び込んで黒奴を投げる。)さあ、來い、誰でも對手になつてやる。(花束降り來る)

船上には侍女がもう二三人増えて、しきりに黒奴を獎勵してゐる。ローマ兵達口惜がる。黒奴の三、ローマ兵の三と取組む。双方互角らしく仲々勝負がつかぬ。ローマ兵蹶起となつて聲援する。この時、船室内から美裝したクレオパトラ出て來る。下の騷々しさに氣を取られて、自分も手に持つた孔雀の團扇を翳さす。

クレオパトラ　エジイプトか――ローマか！　勝つた方に、わたしの團扇をあげる！

一同熱心に相撲ふ二人を中心にして、船を半ば女王の方へ回して解きながら、やんやと騷ぎ立てる。黒奴の三、あはやローマ兵を投げようとする處を、ローマ兵の四、そ知らぬ振りをして劍の尖端で黒奴の胸腹を突く。黒奴の三氣合が拔けてだちだちと腰を折る。ローマ兵の三兩手を擧げる。クレオパトラ孔雀の團扇を投げ與へようとする。船の漕手長(黒人)つと群集中から進み出て、ローマ兵の四を指さす。

船の漕手長　卑怯な眞似をするない！

ローマ兵の四　ローマの軍人を卑怯とは何だ！

船の漕手長いきなりローマ兵の四を衝き飛ばす。兵卒よろめく。一同氣色ばむ。

ローマ兵の一　奴隷ども、生意氣なッ！(劍を拔く)

黒奴の一　よしッ！(船上の橈を取るといきなりローマ兵の中へ躍り込む)

舞臺左右に別れて、ローマ兵と黒人の群は鬪爭を開始する。クレオパトラ手を拍つて笑ふ。胸飾の眞珠を指さす。

クレオパトラ　勝つた方にこれを投げるよ！

そのとき、クレオパトラの背後に、紫のトガを甲冑の上へ羽織つたアントニー現はれる。牛のやうに逞ましい男でもる。もし世の中に、體全體の好男子といふものがあつたとすれば彼である。顏は寧ろ痴鈍な、べそを搔いた小兒のや

うな顔で、執拗性と破滅的な勇氣——賭博打ちの放膽——を示す以外には、全身の一つの道具立としか云へない。頭に黄金の鉢留め。寵臣エロスあとに從ふ。幾度もクレオパトラの肩へ手を掛けようとしては躊躇する。

アントニー　えへむ！大分、御待ちになりましたか？（クレオパトラ聞えない）

アントニー　エジイプトの女王！（やはり聞えない）

アントニー　よく御見えになりましたね。（處女の物云ふときのやうににやにやする。依然としてクレオパトラには聞えない。勝負は正に黒人側の負けらしく、一度に劍を閃かして突貫して來るローマ兵のために、その二三人は水の中へ擲き込まれる）

アントニー（大聲にて舷からローマ兵を制す）やめいツ！何だこの騷々しさは！（一同平伏する）

クレオパトラ（不興げに振り返へる）誰だい、折角面白くなりかけたものを！

アントニー　マーク・アントニーそのものでございます。（船内の音樂再びはじまる）

クレオパトラ　おゝ、貴方が、貴方を——實は御待ちして居りました。（女王らしく身を外らす）

アントニー（恭しく一禮して、彼女の右の手に輕るい接吻をする）たうとう、御出になりましたね！（手を放さない。クレオパトラ暫く默つて、まじまじとアントニーを眺めてゐる。アントニー幾度か言葉に苦悶しながら、何かを云はうとして體を摺り寄せる。クレオパトラ徐々に船室の方へ後退する。この時、ローマ兵の間に、第二幕第二場の盜賊ABCDEの五人ローマ兵の服裝をしてひそかに入り泥じりつゝ見物してゐる。

アントニー（魅せられたもののやうに、左舷を一廻りして、船室内へ半身を沒したクレオパトラへ）ますます——あのときに比較べて倍も御美しう見えます。

と、その途端に、盜賊ABの二人、船へ躍り上がつて、右の甲胄の脇腹の隙から短劍を突込まんとす。エロス盜賊A

の腕を掴む。

アントニー　何奴だ！（振り向いて盗賊Bを引掴み、舷からローマ兵へ向けて投り出す、エロス盗賊Aをしたたかに船の向ふ側の水中へ敲き込む）兵卒達、シリアスを呼んで、もつと警戒を厳重にするやうに申し傳へろ！もし女王の御身の上に萬一のことがあつたらどうする！（ローマ兵盗賊Bを押こくりて退場）

クレオパトラ（上半身だけを幕から出して）構ひません。さあ、御這入り下さい。今夜は、わたしの方からは御招き申ましたのですが、どうぞ、御氣に掛けられずに、どうぞおゆるりとおくつろぎ下さい。（黒奴達船腹の穴から投り出される食物を圓座にすはりながらむしや〱食ふ）

アントニー　私は、武骨者でして、言葉が仲々劍のやうには廻らないのですから………（幔幕の中へ入る）

エロス、腕組をしながら、甲板の上を歩るいてゐる。音樂の音。アントニーとクレオパトラの二人、幔幕の上に陰影となつてあらはれる。しきりにアントニーが何か云ひながら、手や肩を動かしてゐる。クレオパトラ手に盃を持ちながら、じつとアントニーの方を向いてゐる。風扇（パンカア）を動かす手と、酒杯を充たす侍、女官の影が閃めく。黒奴の群しきりに幔幕の方を振り返へつて見ては、笑つたり肱で突き合つたりしてゐる。

黒奴の五　畜生ツ、蚊がゐてしようがねい！

船の漕手長　お前でも蚊に刺されることがあるのか。

黒奴の六　冗談云つちやあいけねえ、お互に人間だ！

黒奴の七　俺は先刻から眼を刺されてならねえ！（幔幕の方を指さす）

黒奴の三　この蚊といふ奴は、生物の血を吸つて生きてやがるんだな――。

黒奴の二　それで妙な聲で泣いて來るんだ。こいつが泣いて来たときは御互にお要愼だ。きつと何か持つて行かれるんだ

からな。

黒奴の一　今に人間も、この奴のやうに空を飛んで他國の兵隊を殺ろすかも知れねえな。

エロス（舷の上から）おい、御前達やかましいな！向ふへ行つたらどうか？

船の漕手長　向ふの方はローマ兵がゐて、又喧嘩になる。

エロス　では此方は？

黒奴の一　此方は錢がないと行けねえ――女郎屋町だ。

黒奴の二　俺達は居殘り組なんだよ、軍人さん。賭博で勝つて錢のある奴等は、先刻から此方の町へ向つて進んでやがる。

船の漕手長　もし又萬一の事があつてはと、かうやつて張番をしてゐる――といふこともあるんですよ。やかましかつたら、野郎共へすこし錢をやつて下さい。一同で良い潮時を計らつて歸へつて來やすから。

エロス　お前達は女王さまの御座船の漕手なのかい？それにしちや、馬鹿に下司な奴ばかり揃つたもんだな。

黒奴の四　下司さ――人間は、起きたら働くもの、働いたら腹が減るもの、腹が減つたらわめくもの、港へ着いたら船乗は遊びたいもの――それでローマの大將は下司な奴を見たら錢を投げるものと定まつてらア。

黒奴の五　どうせ他の國から唯で分捕る金だものな。

黒奴の六　女はどんなに綺麗だつて、子供を孕むものさ、男はどんなに偉らそうな顔をしたつて女を追ひかけるもの、着物と仕事が違ふだけで――あとはみんな下司さ。

エロス（二つ三つ金貨を投つてやる）そら、遊んで來い！やかましい奴等だ！エティオピアン奴ー

船の漕手長　やかましいのは當り前さ。體は一生奴隷になつてるが、この口から出る言葉だけは主人に買はれてないから

な。（右へ去る）

アントニー立ち擧がつてクレオパトラを抱きしめる。

クレオパトラ　暑い、ああ、暑苦るしいこと。すこし、幕を開けて！おお、月が登つてゐます！（宦官、幔幕を引絞る。向ふの方に滿月が登つてゐる）

アントニー　お忘れですか、ちようど私がスペインのムンダの戰爭に勝つて凱旋した時でしたね、はじめて御目にかかつたのは！あの時分、貴女のアトリアムには、トレボニアスが出入りしてゐました。それから、レピイダス、ルーファス、考古學者のアツテカスも――ローマの學者で、貴女の半エジイプト風な感化を受けないものはなかつたでせう。シセロでさへも、一度か二度御伺ひした筈です。

クレオパトラ　そのシセロを誰が殺ろしたのですか？

アントニー　いや、血腥ぐさい話はやめませう。――歷史家のソラスト、皮肉なアシイニアス・ポリロね、――よく覺えてゐるでせう。皆な貴女の、この月のやうな美に牽引されて聚まつた星でした。ああ、シーザーの全盛の時だつた！それから、或る日、貴女と私とが二人きりでした……。

クレオパトラ　シーザーの遺業を繼ぐ英雄はもう出現しないのでせうか？

アントニー　有ります！女王、それは貴女が、あのアトリアムで、私に半分接吻（くちづけ）したままになつてゐるあの接吻（せつぷん）を、完全にして下さることによつてここに現はれるのです。

クレオパトラ　貴方が――？

アントニー　私は貴女によつてしか强くなり得ない男です。

この時、偉大なる黑人、右端から姿をあらはして、船の下に蹲まりながらじつと耳を傾けてゐる。

クレオパトラ　奥さんのフラヴイアさんでせう――――それでなければ美しいシセリス、それでなければ赭毛の猶太女、それでなければグラフイラ……。

アントニー　クレオパトラ！――――ローマが欲しくありませんか？ローマの屬國が？ローマの統一された大帝國が？ローマは大きくなる、クレオパトラ！――――ローマは私が劍を一と振り揮ふごとに國境をひろめて行く――――そのローマは、貴女がたつた一と言仰日やれば屠られた牛のやうに貴女の足元に蹈まるのです。

クレオパトラ　――でも、わたしは考へてゐます。ローマ人は、戰爭に勝つだけで、ちつとも働らかない國民ですからね。それがわたしの國の人民などと違ふところです。戰爭をして、國境を弘めて、他國の富を分捕りしてゐるときは善いのですが、それはほんの一時限りの話ぢやありませんか！例へて見れば――澤山の美しい女を漁つて歩るく男のやうなものです。多情な、强健な女の心臟の掠奪者のやうなものです。烈しい戀をして、二人とも樂しい幾日幾夜かを過ごす、男は去ります、男は去つてまた他の美しい女と烈しい戀をします、かうして無數の女は、一人々々その男の戀に醉ふでせう。しかし、戀によつて生れる二人の間の子供達はどうなりますか？無數の、その男によつて戀された女達には、無數の子供が生れます。――男はしまひにどうするのですか？それはローマです、それがローマの膨脹です！貴方御自身にしても……

アントニー　女王、私に云はして下さい。男の戀する時は全心全生命で戀をします。男性の戀は戰爭に從事してゐる二人の武士の氣持です。二人のうち一人は斃れねばならない。決死的です。ですから、ほかの事を考へる餘裕がない。無駄な動作は一つもない。息の呼吸、心臟の鼓動、一つの言葉、眸の向けやう、一進一退が直ちに生命の安全か不安全に關はるのです。ですから眞劍です。――何と云はうか、深いのです、瞬間的ではあるが深く深く致命的な術擊を敵に與へようとして飛び込むのです。敵を斃してからの事は考へる餘裕がありません。先づ敵を斃すこと、それが動きの全生命です。

クレオパトラ　それは貴方の戀です。――でもジュリアスはさうではなかつた。

アントニー　女王、貴女はまだシーザーのことを想つておいでですか？（手を握る）

クレオパトラ　シーザーの胎した大きい帝國を……。

アントニー　シーザーは私を愛してゐました。恐らく彼の部下で、あの狭量なシーザーが心からゆるしてゐたのは私だけであつたでせう。――今、シーザーはない。クレオパトラ、このアントニーを愛してはくれませんか？いや、私は、何を云つてるのか！――私はもう貴女以外に世の中に女といふものがないのです！私は貴女を戀してゐます。私は幾度、あの不躾な手紙を貴女に差上げてから後悔したことか！貴女の紫の帆を張つて、此處へ御いでになるのを幾度私は吐息しながら待ちあぐむだことか！私は、夜な夜な貴女のまぼろしに憑かれて、枕が熱くなると、眞白なシリア産の馬を曳かせて、荒野を駈け廻はりました。馬は、私のやうに感じの鋭どい奴で、駈け出すと、血管が全部表へ現はれるのです、うす赤い鼻孔からは火を吐きます。この馬に手綱をつけずに、私は、心の悶えに堪えかねて、瀧や谿を箭のやうに疾驅させました。――馬はよく私の心を知つてゐます。いつも彼は同じ道を飛んで來て、まつしぐらに海へと出るのです。そして、私と共に東の海を眺めて高く嘶くのです。しかし、貴女は來られなかつた。そして、今宵、たうとう來られたのだ！クレオパトラ、私のこの切ない胸の中を汲んで下さい。私は戰爭に勝つ――それは、戰爭に興味を感ずるからではなく、又、敵をどうしようとするからでもなく、實は心の苦惱から逃れんための心なき彷徨に過ぎないのです。私の劍の刃の一擊一擊は、貴女の心へ近づくための一歩一歩の道開らきでありました。私は、貴女に、一番大きい贈り物が捧げたかつた。アジア・マイノルを領定した私は、このエーギアの海に臨んだ、世にも大き花束を手にして、貴女の御いでを待つてゐました。しかし、我が つれない女王は來なかつた。花束は空しく私の手の中に凋みかかつてゐた。――しかし、然り、しかし、たうとう、貴女は來られました。私は嬉しい！私は今夜ほど空前絶後の喜悅に浸つ

たことはありません！貴女が欲しいと仰曰れば、私はあの月をも手に取つて捧げます！（接吻しようとする）

クレオパトラ　まだ、まだ――アントニー、わたしも……（不圖言葉を轉ずる）わたしには、治むべき國があります。わたしは、はしたない歌姫のやうに、身輕るなアルマのやうに最初に御目にかかつた強い男に身を任せるわけには行かないのです。――また、お目にかかりませう。わたしは、第一、此處へは、ローマの統治者から審判かれに來たのでした。

アントニー　そんなことはどうでもいいのです！私は貴女を戀する！もし私の愛が貴女に祕みとほらなかつたなら、この劍から迸る血潮がせめて貴女の御座船の板子を染めるでせう。（短劍を拔く）

クレオパトラ（しづかに制しながら）アントニー、貴下はそれほどまでに、このエジイプトを想つて下さるのですか？

アントニー　オリムパスの神々に誓つて！

クレオパトラ　――では、ではね、御互に心をゆるし合ふ前に、唯一つわたしの頼みを聽いて下さらない？

アントニー　何なりと、女王のためには！

クレオパトラ　わたしの妹のアルシノーエ、これは惡るい女です、この女はわたしが王位に即いてゐるのを嫉んで、いろいろな叛逆人をそそのかして、エジイプトに革命を企んでゐるのです。――アルシノーエは、今エフイサスに居るのです。

アントニー　エフイサス！

クレオパトラ　どうして？

アントニー　いや、エフイサスからは、最近二十萬タレンの陪償を豫期してゐるのです。

クレオパトラ　そのエフイサスのダイアナの寺院のメガビセスといふ僧侶が、妹を匿くしてゐるのです。アントニー、妹

を殺ろして下さい！序にその坊さんも妹を誤まつた罪で斬罪に處して下さい！――さうしたら、わたしは貴下の戀人になりませう。

アントニー（獨白）美しいコルレリアのエフイサス！

クレオパトラ　何ですと？

アントニー　いや、彼處のダイアナの神は乳房を三つ持つてゐましたよ。

クレオパトラ　その三つの乳房にローマが戯れたのでせう！（屹となる）

偉大なる黒人音もなく右へ退場。

アントニー　殺ろします！殺ろして差上げませう！（クレオパトラの體を弓のやうに抱き絞ぼる。二人の上半身孔雀の團扇にて掩はる）

――幕――

第四幕

（第一場）

闘技場の一部、アレキサンドリア。前幕より三年ほど後。舞台は右手から、中央奥まで、袖をひろげてゐる觀客席の一翼によつて、弓形に遮斷されてゐる。その雛段の中ほどに、緋の幕を覆ふた貴賓席あり、アントニーとクレオパトラとが、熱心に左斜めに下の方のピツトを眺めてゐる。その右傍に通路。二人を取圍んで、貴族、貴婦人、侍女、従臣、宮官、アントニーの武將達、王室の諸役人、一樣に下の方を覗き込んでゐる。少し隔つて富豪ポリデマス。闘技場には數千の觀客が充滿してゐる心にて、時折、勝負のつき次第に、百雷のやうな喝采や掛聲が下の方から響き上がつて來る。

富豪のポリデマス（ローマの武將へ）今度のは少し手剛ふございますよ。ごらんなさい、あの筋骨を！
武將の一　牛も猛烈な奴ですな。
富豪ポリデマス　ピットがから低い盆のまん中ですから良ろしいが、平地で殺ろし合つた日には堪りませんな。——危くてどうも。
貴婦人　でも、わたしは、もうちつと危險を感じて見たいやうな氣がしますの。
アントニー　一向に面白い勝負はないね。よそうか？　誰かから生きた血を沸せるやうな——クレオパトラ、貴女の方がよつぽど私にとつては獰猛な闘牛だ！
クレオパトラ（妖艶に）奥さんオクタヴィアのことを忘れる？——ローマへ歸へつちや駄目ですよ！——
アントニー　私は戀だつてけだものとの決闘だつてちつともちがはないと思ふがね。（接吻する）人間の一切は力競べさ！
クレオパトラ　强くなつてね！强く！——いいえ、戰爭のことぢやないの。わたしに痺れるやうな戀をして！（强く男の手を握り緊める）——ああ、アントニー、貴下と二度目に會つてから、もう三年になるのね。何と短かい三年だつたらう！わたし達二人は、戰車の心棒のやうに、廻はつてゐるのかゐないのかわからぬうちに、その三年を過ごしてしまつた。
アントニー　同じことが、三千年であつたとしても、二人の戀に變りはない。
クレオパトラ　わたしは、最初貴下に會つたときには、いろいろな事を考へてゐた。しかし、今はもう何も考へられない。どうしてかう女といふものは馬鹿なものだらう？——（宦官二人酒杯を持つて來て二人に酒を注ぐ）わたしは、もうすつかり貴下の囚虜になつてしまつた。わたし自身の考と云つては、今は何一つありあしない。わたしの考へることと、わたしの見るもの、わたしの行ひの一擧一動が、みなアントニーの心持から離れられなくなつてしまつた。わたし

は貴方の愛らしい猫のやうな武將の眼で物を見てゐる。貴下のパアセアンとの戰爭に、而かもわたしの心へ駛に打拂いて來る。

アントニー　私だつて、今鬪技場に、奴隸と牛の鬪ひを見てはゐないのだ。今私は、二度目に貴女と會見したときのやうに、おぼろげながらもシーザーに對する嫉妬などは感じてゐはいない！　私の心からは、あらゆる物が拭い去られてゐる、浄められてゐる。——もうローマもどうでもいい、オクタヴイアス・シーザーが何をしようと構はない、元老院がどんな決議をしようとそれも苦でない——妻、オクタヴイアスの妹と云ひたい、あのオクタヴィアのことも忘れてゐる、この氣持を何に比喩へよう！　千頭の天馬（ペガシス）に車を曳かせて、雲の中を驅け廻つたつて、これ以上の氣持にはなれない！クレオパトラ！——

クレオパトラ　アントニー——！

二人の周圍の緋の幕が除ろに垂れる。下には猛烈な牛の吼える聲。觀客の掛け聲。クインタス・デリウス封緘した書簡を携へて、階下から昇つて來る。武將シリアス無言にて、幕の方を指さす。カルミアン帷幕の中へとりつぐ。

デリウス　アントニー將軍、元老院のケーヤス・ソシアスから至急の御書面です。使者は早船で港に待つてゐますが——。

アントニー（懶げに幕を開く）また、例の論爭か？（書簡を受取り讀む）——なに、終日、十二時間の對論の結果、オクタヴイアスは、閣下が三頭統治の原則に背いてレピダスを失墜せしめ、彼れの領地を横領し、更らにアフリカの占領、その武器軍隊の併合をなじり、恣にセクタス・ポンピアスより返還せしめたにシ、リー島を快樂の代償に濫費し、故參兵士をも顧みずして勝手にイタリー本土を配下の武將兵卒達に分割し與へたること、即ちローマ政府を蔑ろにしたる所以なりと列擧して、閣下の進退に對する決を採らんとせしも形勢非なるを見て、茲に策戰を一變し、三頭統治制の撤廢を主張するに至つた。議員アヘノバラスは即刻閣下に面會して事の急なるを告げんとして當地へむけて出發することゝな

つた。しかし、アヘノバラスの出發に先立つて、予は豫め議會の形勢を閣下に通告することが予の義務なりと信ずる故に、急使を以てこの書を……云々、か——クインタス、わかつた、返事はない。使者は十分に饗應して歸へしてくれ。デリウス通路を降り去る）あの臆病者のオクタヴィアス奴！　よし義兄とは呼ばんぞ！　もう義弟ではない！

クレオパトラ（幕から顏を出し）またローマから來たのね？　貴下にローマは禁物です。手を變へ品を變へて、奥さんから呼び出しに來るんですよ！

アントニー（瞑想的に）こりや、惡るくしたら、義兄と一ト戰爭はじめなけりやならぬかも知れない。

クレオパトラ　何でもいゝわ！　戰爭でも離婚でも虐殺でも——どんなことをしても、あんなやかましい人達を葬つてしまふことですよ！　ほんとのこと世界のローマはこゝにあるんですもの——ね、貴下とわたしとかうしてゐるところはローマよ。

階下に群集の罵り騷ぐ音がする。次に鬪牛の一聲悲鳴を擧げて斃れる物音。と、異樣な靜寂がアレナ全體の空氣を、水を打つたやうに鎭める。

小間。

誰かのピットで演說する聲。

聲　同志諸君、　俺といしよにやつて來い！俺達奴隷は、今日からこのアレナの砂に屍を曝らすのはやめよう！。時は來た。同志よ起て！諸君、目ざす仇敵は、あの玉座だ！女王クレオパトラと、遊蕩兒マーク・アントニーとを、このピットに引擦り降ろして牛と鬪はせよう！進め！

アレナ全體の人間が總立ちになつて騷ぎ出す。人波が崩れたと思ふうちに、偉大なる黑人長劍を振り翳さして、アントニーの帷幕に迫る。武將達各々劍を拔いて防戰する。黑奴の群次々と現はれて、ここにローマ兵及び將校達と、入

り亂れて劍を交はす。女達は右往左往に逃げ惑ふ。クレオパトラ、カルミアンに庇ひ立てられながら、自若に立つて平然と見物してゐる。アントニー莞爾として劍を拔き合せ、偉大なる黑人と渡り合ふ。武將シリアス、マルセラスの二人、物をも云はずに、偉大なる黑人の背後から足を掬ふ、黑人倒れる。その拍子に彼れの長劍、傍らにうろうろしてゐる富豪ポリデマスを薙ぎ倒す。黑奴達やるまじと爭ふ。ローマ兵防戰す。武將二人折重なつて、偉大なる黑人を縛ばり上げる。

シリアス　こいつです、將軍、この黑ん坊にちがひないのです。———土民の頭です！

マルセラス　こりや先刻牛を斃した奴ぢやないか？

シリアス　叛逆人の頭目ですよ。

アントニー　よし、中庭へ引出して首を斬つてしまへ！

クレオパトラ　かういふ者がエジイプトにゐるとはちつとも知らなかつた！、ちよつと、その男をわたしに貸して下さい。——

アントニー　どうするの？危險だよ。

クレオパトラ　なに、わたしにはわたしの死刑の仕方があるから。（エジイプトの武官達にむかひ）お前達、この男を、例の濠へ入れて置いて！

偉大なる黑人齒噛みしながら左奥へ引立てられる。その他の黑奴達、下へ下へと追詰められ、遙かにピットの方で劍戟の音や悲鳴がする。見物席はすつかり空になつて、遙か屋外に群集のどよめき逃げるけはひが聞えるのみである。

クレオパトラ　ああ、この方がよつぽど面白い鬪牛だつたわね！（からからと空洞な餘韻を作なつた女王の笑ひ聲）

——幕——

第二場

或るささやかな百姓家。その前。

泥土を乾固めて、處々に石を嵌めた戸口。穢らしい道路がその前を横ぎつてゐる。一本の枯れた棕櫚の木が、風にかさかさ鳴つてゐる。

幕あくと、五人のローマ兵が家の前を取卷いてひそひそ囁き合つてゐる。やがて、その一人が戸の外から、見えないやうにして聲を掛ける。

ローマ兵の一　おう、誰もゐねえかね？

農民の一　（内にて）居るが、何ぞ用かい？

ローマ兵の一　無花果を屆けて來たよ――。

農民の一　なに、無花果？今年は無花果の出來は惡りいだに、そりや珍らしいこツた！（姿を現はす）

ローマ兵の一　それ引括れ！（ローマ兵四人にて高手小手に縛ばり上げる）

農民の一　（抵抗しながら）おら何も惡りいことしやしねえだよ！

ローマ兵の一　それ家探がし！（ローマ兵二人屋内に入る）惡りいことか善いことか知らんが、女王さまの命を狙ふとみなかうなるのだ。

農民の一　そんなことは知らねえ。俺は平和にかうやつて百姓してる身だに。

ローマ兵の一　俺達がちやんとお前を突留めて來るからには、密告せる者があつてのことだ！默つて歩けツ！

ローマ兵の二人　（奥より長劍及び强弓などを持つて來る）この通りだ！

ローマ兵の一　よし、よし、エヂプト兵は臆病だ。(左へ去る)

右から農民二三人恐る恐る歩み寄り、家の中の空になつたのを見て、互に囁き合ふ。或る者は大地を敲いて慟泣する。農民達だんだんに數が殖える。一同默つて左の方を向いて、はげしく拳を振る。

――幕――

第三場

アントニーの陣營。シリアの海岸。前場から餘程經てから。右奥に贅澤な寢椅子。いろいろの武器がその邊に立て掛けてある。テントを開くと海が正面に見える。海上には數十艘のガレー戰艦が碇泊してゐる。

アントニーは胡麻鹽頭を掻き摧りながら、まん中の卓に俯向きになつて掛け居る。シリアス、マルセラス、デリウス等が一齊に聲を立てて議論をしてゐる。その一人は手に地圖を振り翳してゐる。喧騷と波の音に幕あく。

デリウス　海戰は駄目だ！

シリアス　でも二百艘の軍艦があるのに！

マルセラス　大將は海戰では敗けるにきまつてる！

デリウス　オクタヴイアスは海に慣れてゐる！

シリアス　でもエヂプトの海軍は強いぞ！

マルセラス　駄目、覇つてるのは我々ローマ軍だよ！

デリウス　さうだ。――海戰は反對だ！

マルセラス　おい、アントニー思ひ切つてくれ給へ！この戰は敗けだよ！――我々一同賴むから、この海戰だけは思ひ止

まつてくれ！

デリウス　アントニー、俺は……俺は何んと云はふか。…………昨日、君は指揮艦の帆掛に燕の巣を食つたのを見たね。あらゆるローマ人のやうに、あの吉兆を見て君は手を拍つて喜んだ。今日は別な燕の一群が來て、先の奴を追遣つてしまつたよ！

クレオパトラ　（ひそかにテント内に入る）あの燕は追ひ出されましたか？（吐息）

デリウス　暫らく闘つてゐましたが、たうとう新しい奴に追ひ拂はれたのです。

アントニー　ああ、やかましいツ、諸君、一寸出て行つてくれ、誰も彼も、少しの間、俺を休ましてくれ、考へさしてくれ、！俺の頭は絞りに絞られた海綿のやうだ！堪らない。――

一同顔を見合せて、しづかに去る。クレオパトラ一人居殘る。

クレオパトラ　可哀そうに、可哀そうに――（頭髮を撫でる）でも、ねえ、アントニー良かつたわ。海へ出てよかつたわ、わたしはきつとこの海戰は勝つと思ふの。――わたしの船が二百艘あるんですもの。デリウスの燕の話なんかほんとにしないがいいことよ。一體ローマ人は迷信が深くていけない。左の靴を先へ穿くとか、暗闇で物を云はないとか、鼠の音がしたら集會の席を逃げるとか、全く馬鹿げてゐる。そこへ行くと、マケドニア人の血を享けたわたしなどは、あの香（かう）の匂ひのするケームを治めてゐても、ちつともそんな氣ぶりはないでせう？

アントニー　（ぼつかり眼を瞠く）クレオパトラ、酒を持つて來てくれ！俺は醉ひたい！妻は離別し、ローマを向ふに廻はして闘はねばならぬ俺は――今ほんとに頼りにするのは、お前と酒だ！……酒と戀と！（クレオパトラ頷いて去る）

テントの表の方が急に騒々しくなる。數百名の跫音が、どこかへどどど――ツと崩れて行く。タインタス・デリウス憂鬱な顔をしてそつと這入つて來る。

デリウス　アントニー、思ひ切つてくれ！あのナイルの蛇を、思ひ切るなら今だぞ！軍隊は皆敵の方へ走つて行く、あのとほりだ！——タレオパトラを歸へしてしまへ！

アントニー　出來ん！武士としてそんなことが出來るもんか！俺は彼女を愛してるんだ！

デリウス　武士——飛んだところへ武士をかつぎ出すもんだ。それよりも、君の部下が可愛くはないか？　ゴール戰爭やフイリツピ以來君の楯となり矛となつて防いで來た君の部下に愛着を感じないか！聽け、あの音を——また、潰走して行く。俺は、俺は泣きたくなる！アントニー、君さへあの妖婦を思ひきれば、ローマは明日からもで君の手に戻るんだぞ。

アントニー　駄目だ！駄目だ、駄目だ、駄目だ！——俺には、あの女がどうしても思ひ切れない！

デリウス　ローマの精衞十六軍團を鏖殺しにしても、君はたわけた戀がしたいといふのか？

アントニー　俺はもうローマもローマの精衞も、心では既うに失つてゐるのだ。（氣を取り直し）が、この戰爭は勝つぞ！

アントニー　一世一代の大海戰で、オクタヴィアス・シーザーを地中海の藻屑にしてやる！してやる。

デリウス　駄目だ！海戰を嫌ふからこそ兵隊は遁走するのだ！女は兵法を知らん、君を知らん！

アントニー　海戰！海戰！——どこまでも最初の計畫に從つて、海戰だ！俺の勝つ道はほかにないわ！

デリウス　マーク・アントニー、君も——シーザーと同じことだ！みたあの女の犧牲になるのか！

アントニー　クレオパトラの惡口をついたら承知せんぞ！

デリウス　君の幕僚や參謀は一人一人君を離れるぜ。昨日はアヘノバルブスがローマへ歸へつた。つひ今の先までここにゐたマルセラスも、もうゐないだらう……。

アントニー　なに、マルセラス——？

デリウス　そして、飽くまで海戰說を主張すれば、この俺も手を引くより外はあるまい！

アントニー（暫らくデリウスの聲の反響に耳を傾けてゐる。そして徐ろに）クインタス・デリウス、そりや、ほんとか？

デリウス　悲しいことだが、海では鬪へない！

アントニー　よし、行け！行け！俺も嫌味は云はん。引留めはしない！アントニーは最後の一人になるとも、あの犬猿啻ならぬオクタヴィアスと鬪ふんだ！行け！——何を泣く？去れと云つたら去れ！（泣き咽びながら、快活そうに笑はうと力める）おーい、エロス、酒を持てッ！（デリウス首を振りながら去る。テント外に多數の跫音、遠くへ消える。アントニーじつと耳を峙ててゐる。ぼろぼろと淚が手甲の上へはふり落ちる）

クレオパトラ（酒瓶を持つてあらはれる。テントの一端をかかげて海を見せる）ごらんなさい、綺麗な艦隊でせう？——あれでわたし達二人は全世界を征服するのよ！

アントニー　クレオパトラ！お前を愛する！——お前を愛する！お前を愛する……（嗚咽）

—幕—

第四場

戰艦アントニアデの甲板。海戰の後三日目の夕方。風の音、波濤の響。船は動いてゐる。索具、太綱石砲などの間に、一つの椅子が据えてある。そのむかうに欄干、欄干の下は海。アントニー、髮を振り亂して椅子の上に、石像のやうに掛けてゐる。右端にクレオパトラ、エロスに手を曳かれて逡巡しながら彼に近寄らうとしてゐる。カルミアン及び侍女エウノエ、メリラも從ふ。アントニーと彼等の間には、無限の距離がある。

エロス　お靜かに！閣下は、ああやつて三日も何一言云はれず、飮まず食はずに座つてだけゐらつしやるのです。

クレオパトラ　アントニー！――アントニー！おわびに上りました！生涯に他人にあやまつたことのないわたしが、おわびに上りました！

エロス　閣下！閣下！（アントニー無言で一行を見返へす。カルミアン駈け寄つて彼の肩を揺ぶる。悶げに横を向く。カルミアン、クレオパトラと顔を見合はして泣く。）

クレオパトラ（カルミアンを押のけてアントニーの膝元に身を投げ）わたしが悪ふございました！わたしが悪るかつたのです！どうぞこのわたしを思ふ存分にして下さい！貴方の御心の癒えますように、どんな御怒りの苛責でも受けます！――さあ、鞭打つて下さい。その縄で縛つて海へ投げ入れて下さい。ここに肌身放さぬ短刀があります。これでわたしの胸を思ふ存分に御突き下さい。アントニー、何か一と言云つて下さい！女には沈黙が一番怖いものです。アントニー、畜生とでも、ナイルの蛇とでも、吸血鬼、女魔――何でもいいから一と言わたしを罵つて下さい！（泣く）ほんとに、わたしは何故あの日に限つて逃げたのでせう……？戦争の殘虐があまりにわたしの神経に祟つたためかしら？わたしは、両方の艦隊が近づくのを見てゐました。黎明（よあけ）ごろでした。喇叭が鳴る。両方の艦隊が撓を揃へて御互めがけて、波を蹴り、身をすくめて二列の猛獣のやうに近づきました。あはやと思ふうちに猛獣の群は口から砲弾、石火箭、鉛の棒、鐵箭を数限りもなく噴き出すのです。手を擧げた兵卒があると思ふと、その男はもう顔を血だらけにして仆れてゐました。わたしは見るに堪えなくなつたのです。何をしたかと考へる暇もなく、わたしは船頭に命じて、船を沖へ出してゐました。………貴方は、わたしの船を知つてゐらつしやる貴下は、忠實にわたしを保護しようとなさつたのです。――忠實に！（泣く）そして、すべての物を失つたのです！何もかも、失くしてしまひました！二人は、二人は……

（泣く）

アントニー（茫然として立ちあがる）エロス、劍を執れ！（エロス命ぜられた通りする）鞘を拂へ。しつかと持てよ。俺に

プルタスと同じ最後を遂げさしてくれ！（一同駈け寄る）

クレオパトラ（しつかと留めながら）まだまだ、アントニー、エジイプトが――わたし達二人にはエジイプトが在ります――あの夕日のかなたに、貴方とわたしのエジイプトだけは殘つてゐますよ……

アントニー（非常に高い處から彼女を眺めるやうな表情で）エジイプトか――――エジイプトは墓場の國だつたな！

クレオパトラ　大きい、大きい墓場の多い國でございます……（波の音。夕陽一段とどす紅くなる）

――幕――

第五幕

あなぐら。アレキサンドリア。前場から一月ほど經て。

奇怪な犬の頭をした人間や、横向きの鷗鵜の首をした神様や、獅子の頭をした女王などの像を刻んだ大圓柱が、仄ぐらい室内のいたるところにすくすくと聳えてゐる。赤と黄と白との單元色を使用してゐるにも拘らず、圓柱の存在が朦朧としてゐるのは、あかりの入り口がわづかに左隅の地上へ通ずる石段にあるのと、右端の獄房から曲折して來る光線とのみによつて照らされてゐるためである。右前方に、長方形な大理石の台が椅子代りにぽつんと置いてあるだけで、室内にはほかに何物もない。ただ、渦卷き模様の石床に、巨人の耳環のやうな鐵の鐶が嵌めてあるのが見える。石の腰掛の上に、虎の皮を敷いてクレオパトラが沈思的な表情をして、脇息やうの物に凭りかかつてゐる。その側にカルミアン、イラス、一人の宦官とが蹲まつてゐる。

アントニー鎧に身を緊めたなりで、殆ど何も見えない風に眼を瞠いて、室の中央にぼんやり立つてゐる。兜をいただかぬ頭髪はかなり白くなつてゐる。そして、無精髭が伸びてゐる。落魄した將軍の面影が物腰動作にあらはれる。

牢の右端にあたつて、幽かな身にかかつた鐵帯と鐵鎖の音がする。ときをり、鎖のぢやらつく響と共に、壁を幾重にも經だてて聞えるやうに重苦るしい。

幕あくと、すべては暫らくそのままに靜止の狀態にある。ただ、女達の動かす團扇のみが、うすぐらい中にさやさやと搖らぐ。右端の獄房から、女の歌がやや明瞭になつて來る。

『……地獄の小川に立ち寄つて
　蛙の給仕で掬む酒は――
　なき血を絞る沼の水……。』

それが終ると、屋外遠く喇叭の響がする。

アントニー　（悄然と我に返へる）もう一と戰さ！――クレオパトラ、行つて來る！　昨日は勝つたのだ。今日こそは追ひ詰め斬り捨つて、アレキサンドリアからローマの最後の一兵卒まで追拂つてやる！（膝まづいてクレオパトラを接吻する。女王無言で眼を瞑ぶる。カルミアン啜り泣く）

クレオパトラ　遣りたくない！　遣りたくない！――もうすこしゐて。わたしの胸にぴつたりと顏をあてて！――ああ、

アントニー　……………どうしても行くの？

突然獄房の一つから、狂氣じみた聲が高らかに笑ひ出す。

エロス、アントニーの兜を捧げて、シリアスと共に石段を驅け降り來る。屋外に石砲の音。

エロス　閣下、出陣の用意は準ひました。

アントニー　よし、馬は？

シリアス　馬も昔の遠征時代を夢みてか、しきりにバイロンの下で足掻きをしてゐるよ。

アントニー　ふむ、故郷のシリアまで驅けさしてやるか――良い馬だ！　行かう！

クレオパトラ　一と言だけ、アントニー（すがり寄る）怒つてゐないね？　もう、わたしを恨んでゐない？　貴下にあの水のやうな冷めたい眼で見てゐられると、わたしは淋しい、賴りない、「ひとりぼつちの、惡るい惡るい女になつちまうんだもの――。快よく、朗かな氣持で、ローマまでも攻め入る覺悟になつて下さる？

アントニー（無理に快活な笑ひ）ローマまで攻め入るはよかつた……さあ、途出（かどで）を祝はう！　カルミアン、酒杯を！

宦官低く頭を下げて左より去る。

シリアス　今日はまた女王はなぜこんな陰氣なところへ來て居られるのですか？――場所もあらうに。

クレオパトラ　今日はわたしが手づから死刑を行ふの！

シリアス　えツ、死刑？

クレオパトラ　この間ぢうから賢者の拵へてゐる新しい毒藥を試してみるのです。――暗らいね、カルミアン、あかりを呼びなさい。

カルミアン（手を拍つ。牢獄の番人右から登場）あかりを持つておいで。（牢獄の番人一禮して去る）

シリアス　何故また毒藥などを――？

カルミアン　女王さまは、あの海戰以來もとの女王さまではございません。――わたしが、辛らふじて、モルフイアスの神と女王さまの仲を割いてゐるのでございます。

牢獄の番人篝火を持ち來る。

牢獄の番人　ほかに何ぞ御用は？

カルミアン　あとでよろしい。（番人去る）

アントニー　私もこの頃になつて、漸くこのエジイプトといふ國の魂が心に泌みて來たよ。——女王クレオパトラには、やはりエジイプトから引離すことの出來ない、燃える火だ、光だ、すべてを焼け爛らせる強い力だ！　彼女こそ太陽の神さまだ！

宦官、多數の男女、宰相アポロドラス、アリアニス、ペーチなど出て來る。侍女達台の上の酒杯を配ばる。カルミアン一同へ酒を注ぐ。

アポロドラス　アントニーさま、昨日は偉らい御手柄でございましたの、私は、御殿の望樓から拜見して居りました。遠くの方は眼が霞んで見えませんでしたが、閣下の白い御馬だけははつきりいたしました。いやお勇ましいことでございましたよ。先達、貴下さまは俺ももう五十だなぞと仰有つてでしたが、いや、私など五十の年齢にはあんな堂々とした大將振りは思ひもよりませんが——。

アリアニス　五十と云へば、わしも一度はその年を越えた覺があるが、どうして、[illegible]から女王さまと御二人でいちやついて……いやこれは失禮、その御睦ましいところを拜見さして戴くと、まだ、あの、それ、お二人がおしのびでラコテスの不潔な賣春婦の巣窟へ御遊びにいらつした時そつくりですわい。（一同立つて杯を擧ぐ。）

アントニー　女王クレオパトラの限りなき幸福と永遠の美とに！（一同乾す）

クレオパトラ　わが夫アントニーの勇ましき勝利と、ローマへの進軍に！（一同乾す）

アポロドラス　やれ、これで芽出度い出陣だ！

アリアニス　それからの、シリアスさま、金は當分のうちは不自由はありませんのぢや——兵隊へばら撒く分のさ。俺は

な、昨日の勝利で、ここの猶太人の金持が偉らく乘氣になりましてな、幾らでも用立てるといふ話をして參りましたよ。

シリアス　外國人が多いせいか、エジイプト兵は！ローマの軍人とはちがひますな！

アポロドラス　いや、もう何もかも近頃は金の世の中になつて參りましたよ。私の考ぢや、この國はもうちつと農業よりも細工物を始めた方がよろしからうと思ふんだがの……。

アントニーほか武將達歩み去らんとす。クレオパトラ石段の下でアントニーに追縋、永いわかれの接吻を交はす。武將達去る。アントニーわざと快活さうに劍を拔いて一揮し去る。

アリアニス（低聲にて）どうも今日の戰爭は——わからないぞ。

アポロドラス　なにしろ星が（石の腰掛を指さす）登つてゐるからの。勇士の勢力にも限りがあるさ……。

アリアニス　どれかうしては居られない。勘定方が急がしいんでな。——いや、この分ではエジイプトは軍用金だけでも、今にみな沙漠になつてしまふよ。

クレオパトラ　行つてしまつた。——もう二度と會へないのぢやないかしら。——どうもそんなやうな氣がする。

アポロドラス　女王さま、近頃はすこし御顏の色がよろしふございませんな。イラスどの、例のロヂウムの方は御用ゐかの？——あれなら、薔薇の精と百合の粉末と水蠟樹のなんとやらで拵へてあるさうな、御顏には至極御結構な筈ぢや。——デオスコリデスがイジイスの神に誓ふて製藥したといふ御自慢の練り藥だからの。

クレオパトラ　アポロドラス。わたしはこれで何歲だつたらうね？

アポロドラス　やはりお若かくていらつしやる。お自分の御年齡を御忘れるなるほど御若かけりや結構なことで。——ええと、夏の、ショムオの最初の月でございますと——三十九才でいらつしやいますね。

クレオパトラ、三十九年――いろいろなことがあつたわね。この永い永い三十九年に。お前は、この三十九年を、いつもわたしといつしよだつたわね。そして、お前だけはいつも變らないね。……

マリマニス　これはいつもの女王さまと打つて變つて、まことにお沈みでいらつしやいますな。それよりは、一つ御氣を變へ遊ばして、望樓から戰場の樣子でもごらんになりませんか？――

クレオパトラ（構はず）アポロドラス、女の一生といふものは、思つたことの萬分の一も成就げてゐないものね。……さうだ、若かつた頃には、わたしも男のやうな夢を抱いてゐたものでした。ジユリアスがなくなつてからは、このわたしがローマ帝國の再建をさへ空想してゐたのだ。それからはその夢に引擦られて生きて來たやうなものだつた。――男も知つた。戰爭にも出た、戀もした、子供も生れた、そして、今わたしの掌に殘つてゐるのは何だらう？……燃えつくした情熱だ、灰になつた野心だ、わたしのためにみじめな死を遂げた無數の人間だ、戀人だ……ねえ、アポロドラス、わたしはときどき心の懊惱に堪えがたくなると、窓から顏を出してナイルの流域を見渡すの――すると、わたし達人間のこせこせした懊惱とは何の關係もなく、いつもながらのエジイプトの空は若く、ナイルの水はやはり永久に流れてゐるのだ。自然には、惱みも、無理も、利慾も、はげしいこの肉の焦燥もないやうに、そつくりそのままで生きて行く力が潛んでゐるのではないか？あの平和、あの均整、あの靜かな自然の生活力が、人間の生活そのものであつたら、どんなにわたし達は幸福だらう――？

アポロドラス　いや、女王さま、それは、貴女が窓から御顏を御出しになつたときだけの自然觀でございますよ。――仲仲もちまして、自然界にも、いろいろな煩悶や鬪爭がございましてね、さうやすやすと參るわけのものでございません。昨日のナイルは今日のナイルと岸を異にして居りまする。ワイレエの島にも佳い木がだんだんに枯れて參りまする。近頃のこの沙漠の荒れようはどうでございますか？何物も變化いたしまする。早い話が、昨日王樣の臙脂をお流し

になりましたバスの水は、今日の水とは違ひまする。昨晩召し上がつたマッシカスの酒は、もう二度と御あがりにはなれませぬ。星と雖も變ります――――すべては變化のうちに。

この時、侍醫デオスコリデス、その弟子に黃金の藥函を捧げ持せて入り來る。一同へ會釋して、しづかに函を女王の前へ据ゑる。クレオパトラ、何かをカルミアンに囁く。カルミアン言葉を宦官の一人に傳へる。宦官右へ去る。

カルミアン　みなさま、これから女王さまはすこしの間、おひとりでおいでになられたいさうでございますから――上へ立去られるやうに。

イラス、侍女達及び黑女達ページなどに囁く。彼等左より去る。

アポロドラス　いやこれは老人の長話、いつもながら、御邪魔でございました。（恭しく叩頭してアリアニスと共に退場）

デオスコリデス（蛋白石の小瓶を取り上げ）これはシセリアの林檎の精でございまして、小量づつ服用いたしますると、とてもこれを缺いては生きて行けぬといふ藥、もし一日でも服用いたしませぬとばつたり斃れるといふ――まあ、謂はば男女間に適宜に用ゐられればよろしい物でな。（瑪瑙の小瓶を取り出す）この方はベラ・ドンナの精藥。（琺瑯の小瓶）これが、曾てお試しになりましたユパスの木の果。（黑い瓶）これが服用して斃れましても、顏色血相一向に變化を來さぬといふ――につこり笑つたままでも死ねますところの、アフリカのナーヂヤ・ハジエといふ毒蛇から搾りました大毒藥でございます。

クレオパトラ（急に瞳光に力を増したやうに緊張して）その蛇の毒を試めして見よう！　カルミアン、杯を。なみなみとこの上へ酒を充たして。（藥を一滴したたらす）

牢獄の番人、狂女を引立て來る。狂女、

「……涙そそげよ、ヘリオドーレ、からい涙を貴婦人へ。」

と歌ふ。

牢獄の番人　騒ぐな！　女王さまの尊い御前だぞ！

クレオパトラ　よし、よし、さあ、これを御嘗み！　お前はほんとに可哀さうな人だよ。この酒を嘗むと、きつと幸福に眠れるから。

狂女　女王さま？――女王さまは、わたしのことだよ！　お前はメムフイスの都にゐた時からわしの召使つた小間使ぢやないか！（嘗む）

一同しづかに狂女を見戍る。狂女無言のまま石床へうつむく。侍醫脈搏を見る。

デオスコリデス（弟子へ）屍を取りかたづけい（弟子官官と二人にて狂女を運び去る）

クレオパトラ　もうあれでいいの？

デオスコリデス　即死、眠るやうに死んで參りまする。

クレオパトラ　もう一人たしかわたしの試して見たい男がある筈だ。あの奴隷を引出して！（牢番去る）

屋外に吶喊の聲。喇叭の響。

クレオパトラ　あれは、ローマ軍かしら？

カルミアン　いや左樣ではござりませぬ。

クレオパトラ（心痛むさま）アントニー！

牢番偉大なる黒人を拉して來る。鐵鎖をしかと床の鐵鐶へ結びつける。黒人ひどく面窶れしてゐるが、眼だけは鋭どくて烱つてゐる。

クレオパトラ　お前、よく永い間辛棒してゐてくれたね。――わたしは、いつかお前に會ひたいと思つてゐたのよ。お前は、昔わたし達を鬪技場で襲つたことがあるね。あれは、何かわたしやアントニーに對して、深い怨しみがあつてのことかい？お前は一體どこの國の誰の間諜なのか？裁判官は、御前に加擔したものは、皆謀叛人といふことにして、死刑にしてしまつたが、お前だけは、わたしが直きに會つて訊ねたいと思つてゐたのだ。お前はわたしの王位を狙つて、このエジプトに黒人の王國をでも再建したいといふ心なのだつたか？

偉大なる黒人　女王、その毒で紅く塗つた唇を開いたり閉ぢたりする間に、早く俺をここへ呼び出した目的を遂げたらいいぢやないか！――お前のやうなエジプト一の阿呆女と關はつてる俺ぢやないわ！

クレオパトラ　なにわたしを、エジプト一の――？（笑ふ）よく云つたね。クレオパトラ、トレミー・オウレテスの息女として生れて、天にも地にもさう罵られたのは今がはじめてだ。お前が最初だ。その理由は――？

偉大なる黒人　早く毒を嚥ませろ！

クレオパトラ　いや嚥ませません。云ふまでは、お前に生きる苦しみを與へて上げるよ。

偉大なる黒人　俺を十年も十二年も、この牢屋へぶち込んで置いて、お前は、俺に馬鹿女だと罵られるのを待つてゐたのだらう。――それが即ち馬鹿でなくて何だ！阿呆でなくて何だ！

クレオパトラ　一と言訊ねよう。――わたしも二十年以上このエジプトを治めてゐる。國に不平はなし、内亂も起らない、一體、それで、何がお前を謀叛人にしたのか？

外に再び軍馬の聲、あはただしい跫音。

偉大なる黒人　あれを聽け！あれでもお前は國を治めてるといふのか？エジプトのどこに平和があるといふのか？馬鹿ツ――俺は牢屋に坐つてゐても、俺の耳はいろいろな物を聽いてるのだ？俺の眼はお前の心臓の底までも見透かしてゐ

るんだ。虚勢を張るな！エジイプトは滅亡しかかつてるんだ！

クレオパトラ　面白い男だね。こんな男を誰が最初に奴隷にして買取つたのだらう？――して、御前、今ここに、わたし達の絶對權力の中にさう鎖に縛ばられてゐて、お前はわたしに勝つたと思つてるかそれとも潔よく敗けたと告白するか？

偉大なる黒人　お前と智慧くらべか。――そんなことを云つてるうちは、お前は馬鹿だよ。臣下の報告を眞に受けて、世の中の表つ面だけを見てゐる御前には、勝つた敗けたの二つしかあるまい。そんなことでエジイプト一國が治まるかい？　治まらぬ證據は、そこに立つてる御前だ！　お前の心臓はもう腐つてる！　お前の虚榮心も根がつきた！　お前は、この薬を俺達無辜の者に試服させて、――それから自分もいざとなつたらそれで自殺するつもりだらう？　お前が自殺するには理由がある。深い理由がある筈だ。それは自分の胸に聽いてみるがいゝや。――どうしてもさう考へたいといふなら云つてやる、クレオパトラ、お前は敗けたのさ、俺は勝つたのさ！

クレオパトラ　さうやつて手足を縛ばられて牢獄の中で毒殺されるかも知れないお前が――勝つたのかい？

偉大なる黒人　俺は一人ぢやないぞ。無數の俺が、今にこのトレミー王家が、ベニ・ハサンの殿堂のやうに歴史に埋もれて、新しい國が建つのを待つてるんだ。俺が死なうと生きようと――その法則に狂ひはないのだ。さア早く殺ろせ！毒を嚥ませろ！

　この時シリアス左隅から轉ろげるやうに走り來る。滿身負傷して息を喘ましてゐる。長劍は鋸のやうに齒が缺けてゐる。

シリアス　女、女王さま――！

カルミアン　何ごとです、シリアスさま？

シリアス　殘念！　オクタヴィアスは、アレキサンドリアの都門を占領いたしました。

クレオパトラ　してして、アントニーは？

シリアス　自、自殺しかけて、蟲の息でございます……。

　はげしい砲聲。

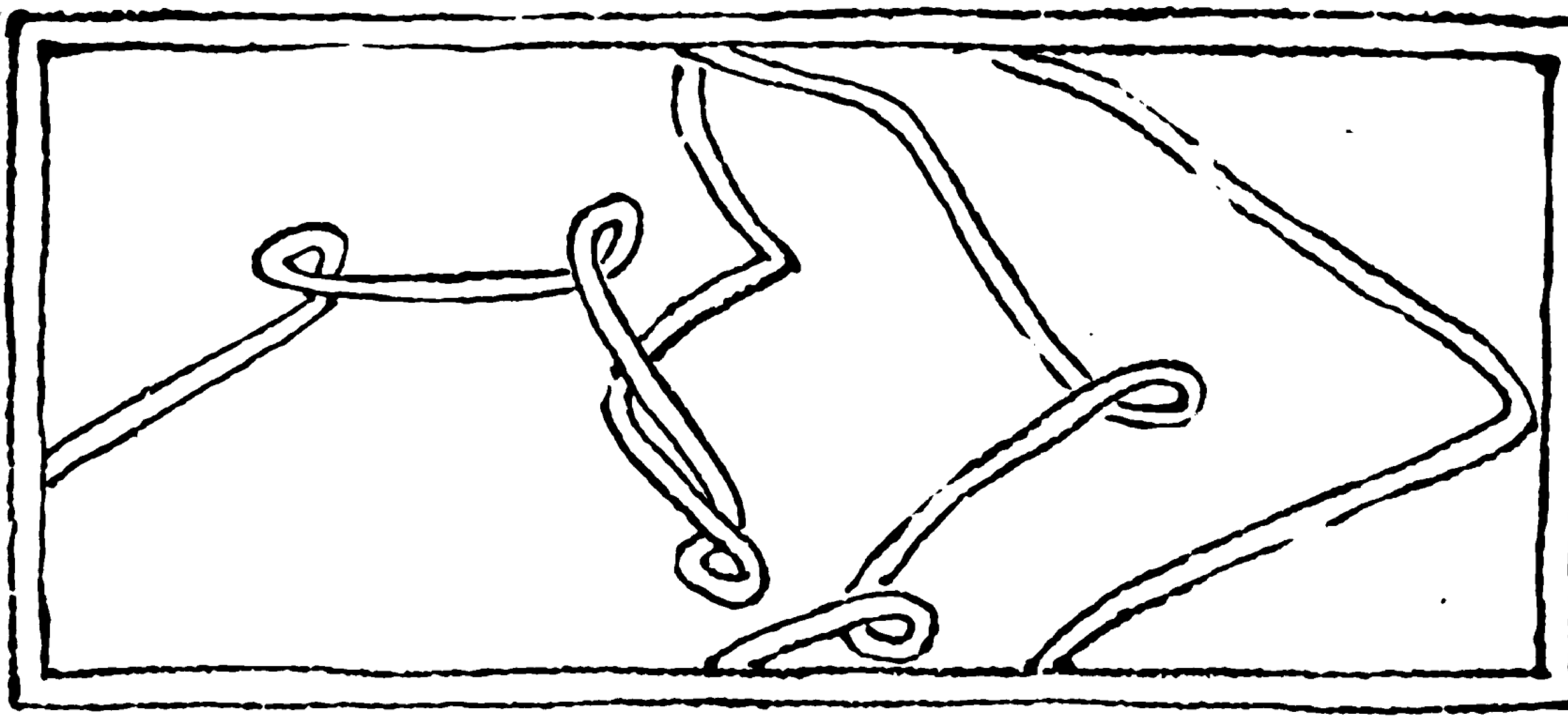
クレオパトラ　自殺しかけて……おゝ、可哀さうに、アントニーが。――デオスコリデス、何をぼんやりしてゐるのです。早く城門へ馳けつけて、アントニーの手當を！　さア皆愚圖々々しては居られない！（カルミアンと米裕を除く外皆去る）

クレオパトラ　わたしは、わたしは……あゝ、囚へるつもりでわたしはやはり囚へられてしまつたのだつた。ローマを征服しようとしてローマに征服されたのだ。……アントニー、子供達、カルミアン――この胸は、この苦るしみ！

　城壁の崩れる音。クレオパトラいろ蒼ざめて卒倒する。

偉大なる黒人　あれがエジイプトの崩れる音だわ！（大聲に笑ふ）鐵鎖の響。

――幕――（了）



律子と瑞枝

水上瀧太郎

高木律子	二十三才
小柴瑞枝	二十一才
高木賢一	十七才
竹村景吉	三十二才
主　婦	五十才位

第一幕

律子と瑞枝と賢一の間借してゐる二階。ふたまつゞきの廣い方に律子病臥してゐる。夜。

梯子口から主婦あらはれる。

主婦　高木さん、またいつもの男の人が來ましたが、どうしませう。今日は何か會社の方の話があるのだから、一分でも二分でもお目にかゝり度いつてね、いくら病氣で寢てるからつて斷つても、きかないんですよ。

律子　困るわねえ。けれども會社の用だつていふと、思ひ當る事もありますから、お通しして下さいな。でも、こゝでは爲樣がないから、そちらで御目にかゝりませう。

主婦　また口說かれないやうに用心なさいよ。

律子　いやな小母さん。

主婦階下へ行く。

律子中じきりの襖をしめ、手鏡を見て髮に櫛を入れる、羽織をひつかけて次のまへ行く。

同時に竹村あがつて來る。

律子　こんななりをして居りまして、失禮で御座いますが。

竹村　いゝえ、こちらこそ御病氣のところへ御邪魔しまして。いかゞですその後は。

律子　どうも長引いてしまひまして。でも此頃は熱もさがりましたし、氣分もひところよりは大層よくなりましたから、自分では起きてもいゝやうに思ひますけれど、お醫者さんのお許が出ませんのと、何分體が疲れて居るものですから、大事をとつてもう少し引籠つてゐようかと存じまして……

竹村　かるはずみをすると取返しがつかないから、まあお大事になさい。

律子　ありがたう存じます。

竹村　高木さん、さぞかしうるさい男だと思つてるでせうが、今日は社の用事でうかゞひました。僕としても、あなたに結婚を申込んで斷られたからは、こちらには一寸來にくいのですけれど……

律子　どうぞあの事はお忘れ下さいまし。

竹村　さうはなかなか忘れられませんよ。（まぎらかしに笑ふ）今日うかゞつたのは、あなたも御承知の通り、うちの會社には病氣缺勤者給與規定といふのがありましてねえ。あれは元來月給者が長く休んで、給料たゞとりをするのを懼れて制定したので、日給者に適用するのは慘酷なんだが、又一方から考へると、長く休んでゐても、現に會社員名簿に名前の載つてゐる間は、補充として新規の人を雇入れるわけにもゆかないので……

主婦煙草盆と茶を運んで來る。

竹村　どうぞおかまひなく。

主婦階下へゆく。

竹村　それでその、勤續年數によつて欠勤期間が定めてあつて、期間が切れると自然退社といふ事になるのですが……

律子　その事はあたくしもよく承知して居ります。つまり、今月中に出勤しませんと、あたくしも退社になるといふので御座いませう。

竹村　さうなんです。あなたのやうな模範的の婦人社員には特別の詮議があつてもいゝと思つて、係長にも話してみたけれど、矢張多勢の社員がゐるものだから、人によつて差別的待遇をするといふわけにもいかないといふので……

律子　それはさうで御座んせうとも。あたくしもから長く休まうとは思ひませんでしたが、遂にこじれてしまひまして、つい會社にも御迷惑をかけてしまひました。まだ御覧の通り病みはうけて居ますので、萬一此の月末迄に出られませんやうでしたら、解職になつても致方御座いません。

竹村　それで、その事を前以て御注意申上て置かないと、後で誤解があつても困るといふので、僕が御使者に來たやうなわけでして……

律子　毎度恐入ります。

竹村（公用はすんだといふやうな態度で煙草をふかしながら）この間會社をやめた小柴さんは、今でもこちらに御いつしよですか。何處かほかに勤めてゐるさうですが。

律子　兩洋商會といふのに出てゐらつしやいます。

竹村　何故うちの會社をやめたのですかねえ。あの人もなかなか仕事はよくしたが。

律子　あの方は英文タイプライタアが出來るものですから、その方の口を探してゐたのです。それに今度のところでは、はじめから月給だささうでして、さういふ點も私共には望ましい事ですから。

竹村　しかし、あの商會の經營者の淺羽つて男は評判のよくない男でしてねえ、學校では吾々の先輩だつたが、先代が金を殘したものだから、隨分遊び廻るさうですよ。小柴さんも奇麗だから、うつかりするとひどいめにあひますぜ。

律子　でも、しつかりしてゐらつしやるから。

竹村（時計を出して見て）いや、とんだお邪魔をしました。では、なるべく月末迄に出勤して下さい。折角熟練したあなたによされては吾々の係の能率にかゝはりますからな。

律子　さうでもありますまいけれど、あたくしとしても此上職を失つては困りますから、どうにかして出勤したいと存じます。

竹村　ながい事寢てゐたので、隨分かゝりも大變でしたでせう。失禮ですが、何かさういふ方の心配はありませんか。

律子　會社から頂く給料で、やつと生活してゐるのですから、かういふ時には心細う御座いますわ。

竹村　さうでせうとも、それで何ですか、別にさしあたつてどうといふやうな事は……

律子　困つてゐるかと仰るのですか。それは困つて居りますわ。

竹村　僕がいふと變にとられるかもしれないが、若しお醫者のお禮とか藥代とかいふやうなもので、入用がありましたら、失禮ですが御用達してもよござんすけれど……

律子　ありがたうございます。

竹村　僕は決してそんな事で恩に着せようなんて氣はありませんよ。たゞ一時援助してあげるだけのつもりです。その點誤解されては困るんだが。

律子　ありがたうございます。けれども、只今差當つて拜借しなければならないといふ事もありませんですから。

竹村　さうですか。又何か心配事でもありましたら遠慮なく御相談なさい。出來る丈の事はしますよ。（又時計を見て）おやおや、大變お邪魔してしまつた。では失禮します。こんなに長く起きてゐて、障りませんかしら。ではお大事に。

　竹村梯子段へかゝるのを、律子送るこゝろでしたがふ。

竹村　もうどうぞ、お見送には及びませんよ。そんな事して體に障るといけない。

律子　では失禮致します。

　下りてゆく客の後姿を見下してゐる。

　見送り果てゝ、又床に戻る。

　主婦夕刊新聞を持つて上つて來る。

主婦　無事でしたか。口説かれやしませんでしたか。

律子　いゝえ、今日は會社の用でしたから。

主婦（そんな事には頓着なく）男らしくさつぱりあきらめればいゝのに。毎日のやうに手紙を寄越したり、草花なんか持つて來たりしてさ。此間來た時、あたしア思ふさまいつてやつたんですよ。高木さんは病氣だから、幾度來たつて無駄

ですよ、逢ひたくないつていふ人のところへ、度々押かけて來るなんてみつともないぢやありませんかつてね。ちつとひどいかなとは思つたんだけれど、あゝいふのに限つて妙に押の强いものだから、手きびしくやつてやつたのさ。

律子　惡い人ではないのですけれど、困つたものですわねえ。

主婦　それでも、よくよく思ひ込んだものと見えて、いくら嫌はれても思ひ切れないんだねえ。あなたも奇麗に生れついたおかげで、自分では知らず識らず、罪をつくつてるんですよ。

律子　もう結構。

主婦　いゝえ、ほんとですよ。裏の寄宿舍のお婆さんとお風呂でいつしよになるんですが、あんたんところの二階にはいい女が二人も居るもんだから、うちの書生さん達が大騷ぎだつていつてましたよ。傘の色かなんかでつけたんでせうか、あんたの事を紫さんと呼んでるんだつて。それから小柴さんが、なんとかいつてましたよ。ピンタさんさ。何の事ですかねえ、英語かしら。

律子（うるさくなつて返事をしない）

主婦　いつだつたか小柴さんに男の人から手紙が來て、いついつかに日比谷公園に來てくれつてのがあつたでしよ。あれなんかも裏の書生さんのしわざぢやあなかつたかしら。あたしはあんたの方がいゝと思ふけれど、小柴さんも當節向のいゝ女つていふんでせうね。

律子　奇麗だわ、あんなに表情のある眼つてないと思ふわ。

主婦　あの方もおくにの方で、義理のお母さんの連子とかに惚られて、逃出して來たんですつてね、どんな事があつても國には歸らないつていつてましたよ。

律子　人つてものはめいめいうるさい事があるものですわねえ。

主婦　でも小柴さんは、あんたと違つて、何のくつたくも無さゝうぢやありませんか。

律子　あたしは駄目。意氣地が無いのよ。それに弟の事も心配だし、瑞枝さんのやうにはなれないわ。

主婦　性分ですよ。陽氣な人とさうでない人と。どうでせう、此の頃の小柴さんたら、餘程どうかしてますよ。夜は度々遅く歸つて來るし、髮の結ひ方でも、みなりでも、すつかりはでになつたぢやありませんか。ないないで、いゝ人でも出來たのかしら。

律子　いやな小母さん。

主婦　いゝえ、どうだかわかりませんよ。あんたもいつしよに會社に通つてゐる頃は、こんなに遅くなる事は一度だつて無かつたのに、近頃は一週間に二日か三日、きつと遅くなるんですからねえ。よつぽどあやしいもんですよ。

律子　それは、こんどのところは貰ふものも多いかはりに、商賣柄忙しいのでしよ。個人商店つてものは、大きい會社のやうに規則づくめではないでせうから、夜業なんかもあるんですよ。

主婦　おつとめの事はわからないけれど、あたしの眼にはちやんとわかつて居るんですよ。たゞの娘さんと、いい人の出來た人とは樣子が違ふんですからね。

律子（處女に特有の羞恥と憤で返事をしない）

主婦　おやおや、とんだお喋りをしてしまつた。今夜は頼まれた物を縫ひあげてしまはなくちやあ。

喋り足りない後姿を見せて階下へ行く。

律子新聞を讀んでゐる。

賢一歸つて來る。

賢一　只今。

律子　お歸りなさい。今日は何時もより遲かつたぢやないの。

賢一　ちよつと廻道したものだから。

律子　何處へ行つた？

賢一　何處ツて事もないんだけれど、晝間役所が忙しかつたものだから、變に疲れちやつて頭がぼんやりしてるから、無闇に歩いてやつた。姉さん、氣分はどう。

律子　いゝ方よ。あたしも何時迄も寢てはゐられないから、四五日したら起きようかと考へてるの。

賢一　熱は。

律子　朝のうちはちつとも無かつたけれど、夕方になつたら、又微熱があるやうな氣持がするの。あたしもうはかつてみるのいやになつちやつた。

賢一　（律子の額に手をあてゝみて）少しあるかな。大した事はないけれど。

律子　かういふのがいけないのよ。熱があるならあるで、すこし位高くなつていゝのだけれど、あたしのはいつ迄も同じやうな、これが一番いけないの。じれつたくなつちやつた。

賢一　今はいけない時候だからなあ。

律子　時候のせいならいゝけれど、あたし、やつぱりほんものになるのではないかしら。

賢一　ほんものつてそんなことありやあしないよ。お醫者さんもただの風邪のこじれたのだといふぢやありませんか。

律子　それは氣やすめよ。あたしはお父さんの子なんだから、あの病氣が出やしないかと心配はしてゐたのよ。

賢一　姉さんがさうなら僕だつて同じだ。親が肺病で死んだからつて、子供にもきつと遺傳するとはいへないとさ。

律子　賢ちやんは大丈夫よ。あなたはお母さん似だから。

賢一　さうかしら。
律子　そつくりよ。
賢一　あんまりありがたくないなあ。僕も今にお母さんみたいな人間になつてしまふのかしら。
律子　違ふわよ。そんなつもりではないのよ。
賢一　だつてお母さんにそつくりだつていふからさ。
律子　それは爲方が無いわ。だけどお母さん似だからつて、一から十まで同じだといふわけではないわ。
賢一　一から十まで同じでたまるものか。
　二人しばらく默す。
律子　あたし昨夜お母さんの夢見ちやつた。
賢一　どんな夢。
律子　子供の時の夢なの。はつきりとは覺えてゐないけれど、みんなで庭に筵を敷いて、お辨當を食べるところだつたわ。お父さんもゐたし、賢ちやんもゐたし。眼が覺めてから淚が出ちやつた。病氣になると氣が弱くなつて、あんなに憎んだお母さんの夢なんか見るのねえ。賢ちやんはお母さんの夢なんか見たことない。
賢一　ないよ。
律子　ほんと。
賢一　うゝん、もう先にはあつたけれど・
律子　さう、やつぱりねえ。
間。

律子　お母さんどうしてるかしら。あたし達の事考へることもあるかしら。

賢一　どうしてたつていゝぢやないか。事業に失敗した上、死病にとつつかれたお父さんを、さんざん苦しめた奴と………（突然憤がこみあげて來る）あんな奴の妾みたいなものになる根性なんだ。僕達の事なんか考へるものか。僕はお母さんの事なんか、なるたけ想ひ出さないやうにしてるんだ。

律子　賢ちやんは氣が强いわね。あたしもあの頃は氣丈だつた。お母さん程けがらはしい人間は無い、こんな人と同じ家に住み、こんな人といつしよに御飯を食べる事なんか出來ないと思つて、東京に出て來る氣になつたんだわ。賢ちやんは全くあたしに誘はれて來てしまつたのね。

賢一　うゝん、僕は一人でも飛出したよ。誰があんな侮辱をうけてゐられるものか。

律子　だけどねえ、あたし此の頃は時々思ひ出すの。あたし達がお母さんの不都合を攻めた時、お母さんは泣きながら何といつて。みんなお前達の爲めだ。お父さんが借金の外には何も彼もなくなつてしまひ、その上長くわづらつてゐた後で誰がお醫者のお禮をし、誰がみんなに御飯を食べさせる事が出來るか。これからさき、誰が働いてお前達に食べさせるか、あたしはみんなお前達の事をおもふから——といつて泣いたわねえ。あたしはあの時のお母さんの心持を、此の頃になつてやうやく察しる事が出來るやうになつた。

そつと眼を拭く。

賢一　そんならお母さんを許してもいゝと思ふのかい。僕は御免だ。

律子　さうぢやあないのよ。たゞお母さんも決して惡い人では無く、弱い、氣の毒な人だとおふやうになつたのよ。

賢一　姉さんも病氣の爲めに弱蟲になつたんだなあ。僕はかうして姉さんと二人で働いて生活してゐられれば滿足だ。役所の給仕で、朝から晩迄こきつかはれてゐるのだつて、國の町の人達にうしろ指さゝれて、肩身の狹いおもひをしてゐる

よりは、よつぽどましだ。中學に入る事が出來なくたつて、ほしい本が買へなくたつて構ふものか。

律子　此の間ほしいといつた字引は未だ買つて上げなかつたわね。あたしがなほつたら、きつと買つてあげるから待つてね。

賢一　何いつてるのさ。僕はそんな事いつて姉さんをいやがらせようとは思つてやしないよ。

律子　この頃は自分が働けないものだから、賢ちやんのお小遣も、すつかりあたしの爲めになくなつてしまふのね。

賢一　そんな事いはなくつたつていゝぢやないか。だけどね、僕瑞枝さんには濟まないと思ふよ。あの人がゐなかつたら、僕の力ではお醫者を呼ぶ事も、藥を買ふ事も出來ないからねえ。

律子　ほんとに瑞枝さんにはお氣の毒ねえ。いくらなかよしだからつて、斯う迄親切にしてくれる人なんてあるもんぢやあないわ。あの方だつて、おくにの方は立派にやつてゐらつしやるさうだけれど、うちを捨てゝ來てるのだから、今ではあたし達と大した變りの無い身分よ。今度は今度で、少しでも收入の多い方がいゝからつて、馴れた會社をやめて、勤務時間の長い商店に移つたのも、みんなあたしの爲めなんですもの。

賢一　僕は瑞枝さんの親切だけは一生忘れない。

律子　あたしこそ、どうして恩返しをしていゝかわからないわ。萬一此の儘ほんものにでもなつてしまつたら、一生御恩になりつぱなしで、むくゐる時はありはしない。さうしたら賢ちやんがかはつてしてくれるわね。

賢一　よさうよ。そんな下らない心配は。いつたい姉さんはさきの事ばかり苦にしてゐるからいけないんだ。惡い癖だよ。

律子　損な性分なのね。だけど、くどいやうだが、瑞枝さんに對しては、あたしは感謝で胸がいつぱいになる——（聲が顫へてやめてしまふ。）たゞあたしが心配してゐるのは、かうして寢てから三月の餘にもなり、その間收入は・な[illegible]、

すつかり瑞枝さんのお世話になつてゐるのだが、これからさき、まだ斯うやつて寢てゐるやうだと、さうさう瑞枝さんだつて背負ひきれるわけが無いのだから、何とかあたし達も覺悟しなくてはなるまいと思ふの。
賢一　覺悟をするつて?
律子　あたし達があの人と別れて、こゝを出て行かなくてはならないかと思ふのよ。
賢一　出て行つてどうにかなるかしら。
律子　なるかならないか知らないけれど、兎に角瑞枝さんの肩を樂にしてあげなくてはねえ。(默つて考へてゐる)それはさうと、瑞枝さん今日も遲いのね。いくら忙しいからつて、こんなに遲く迄引止められては堪らないわ。
賢一　南洋商會つてなんだらう。
律子　亞米利加や獨逸と取引があるんだつて。
賢一　割合に貧弱な店だね。
律子　どうして知つてるの。
賢一　今日散歩ながら見て來てやつた。外からだから内の事はわからないけれど。
律子　みかけはそんなでも、大變はでな商賣なんだつてさ。あたし達の會社なんかとはまるつきり風が違ふらしいわ。
賢一　だから瑞枝さんも此の頃は、段々變つて來たんだねえ。
律子　賢ちやんの眼にもさう見えて。
賢一　隨分變つたよ。頭から、お化粧まで變つたぢやないか。
律子　男の癖にそんな事迄氣がつくの。
賢一　だつてあんまり變り方がひどいからさ。

律子　そりやあ女は爲方がないわ。いつしよに働いてる人がさういふ風なら、ひとり丈違つたなりもして居られないぢやないの。

賢一　そんなら姉さんも、外の人がはでな風をすれば、その眞似をするのかい。

律子　あたしは駄目。あたしは依怙地だから多勢といつしよにはなれないのよ。そこへ行くと瑞枝さんは、そんな事にはこだはらないから、いくらでも流行について行かれるのよ。あゝいふ明るい氣持は、とても羨しいわ。

賢一　僕はあんなはでな風嫌ひだ。

律子　餘計な事だわ。瑞枝さんは瑞枝さんであれでいゝのよ。それに、あの位なら、そんなにはでつていふ程ではないわ。世間はもつともつと思ひ切つてはでになつてるんだもの。あたしがあんまり地味なものだから、それと比べて目立つだけなのよ。それぢやあ瑞枝さんが可哀さうだわ。

賢一　そんな事いつて、階下の小母さんだつて、さういつてたよ。小柴さんの此の頃の變りやう、あれがモダン・ガアルつていふんでせうかつて。

律子　こゝのうちの小母さんは口がうるさくていけないのよ。あんな人、なんてつたて構やしない。あなたなんかいつしよになつて、女のみなりの事なんか、とやかくいふのはおよしなさい。みつともないわ。

賢一　(意外に強い律子の語氣に反撥して)僕はみなりの事ばかりいつてるんぢやあないんだ。それよりも、あの人の全體が變つて來たと思ふ。せんのやうにおちつきがなくて、年中そはそはして居て………

律子　およしなさい。あたし達は、瑞枝さんに感謝する事以外に何もいふ事は無いのです。あなたゞつてその位の事はわかつてゐるでしよ。聞苦しいわ。

賢一　僕惡口をいつてるんぢやあないよ。たゞ心配してゐるんだ。階下の小母さんなんかゞいやな事をいつてるから。

律子　小母さんなんか何をいつたつて取合はなければいゝのよ。どうせいゝ加減な事を想像してゐるんだから。
賢一　だけど、瑞枝さんについては、僕も變に思ふ事がある。
律子　まだそんな事をいつてるの。變に思ふ事つて、何が變です。はつきりいつてごらん。
賢一　僕は瑞枝さんが、夜業があるなんて嘘では無いかと思ふんだ。いくら忙しいからつて、女の事務員が九時になつたり、十時になつたりする事が度々あるものかしら。
律子　それはお役所なんかとは違つて、商賣となれば忙しい時は忙しいのよ。
賢一　をかしいなあ、僕今日瑞枝さんの店の前を通つた時、もう扉がしまつて、あかりが消えてゐたんだもの。
律子　賢ちやん、あなた變な氣を起して、探りに行つたんぢやないの。そんな探偵の眞似みたいな事すると、姉さん承知しませんよ。
賢一　だつて………………
突然おもてに自動車がとまる。格子が開く。
律子　瑞枝さんからしら。
瑞枝、醉つて居る。
瑞枝　苦しい。
律子　（起上つて）どうしたの。
瑞枝　（ぺたんと坐る）あたし、お酒飲まされちやつた。
律子　お酒？　まあ、あんたつたら。
瑞枝　かんにんしてね。

律子　かんにんするもしないも、あんたそんな事していゝの。

瑞枝　よくないのよ。よくない事は知つてゐるわ。だけど飲んちやつた。あんまり勸めるんですもの。

律子　誰が。

瑞枝　店の人達。だつて女の人も平氣で飲んで見せるんですもの。あたしだつて、お酒位飲んだつて大丈夫だと思つてね、つい飲んちやつたのよ。

律子　いけないわ。ほかの人が何をしたつて、あんたはそんな眞似をしてはいけない。

瑞枝　叱つちやあいや。かんにんするといつて頂だい。

律子　（とらうとする手を振拂つて）瑞枝さん、あたしは眞面目にいつてるのよ。

瑞枝　だからかんにんして。（無理に律子の手に縋つて體を崩す）あゝ苦しい。いきが切れて、顏がほてつて、頭がづきんづきん痛む……

律子　おひや貰つてあげませうか。賢ちやんおひや持つて來て。

賢二不愉快さうに立つて行く。

律子　瑞枝さん、あたし女の醉拂ひなんか大嫌ひよ。

瑞枝　だからあたしあやまつてるのよ。もうお說敎なんかしちやあいや。あたしあんたに叱られるの大嫌ひ。あんたは姉さんで、あたしは妹。だから、だから叱らないで、可愛がつてよ。それでなければ、あたし泣いちやう。

律子　およしなさいよ、そんな駄々子みたいな事いふの。ふだんならあんたの茶目さんは可愛らしいけれど、今日のやうなのはいや、それよりも、いつたい、どうしたのか、ちやんと話して頂だい。誰と、何處に行つて、どうしたか。

瑞枝　もう二度とお酒なんか飲まないから何も訊かないで頂だい。

律子　いゝえ、訊く。あんたあたしには何もかくし事はしない約束よ。

瑞枝　そんな意地惡いはないでさ。

賢一こつぷに水をもつて來る。

律子　さ。

瑞枝　ありがたう。あゝおいしい。お酒なんかよりおひやの方がよつぽどおいしいわ。

律子　瑞枝さん、あたしくどいやうだけれど、きくだけの事はきいてよ。あんたもかくしだてしないで、はつきりいつて頂だい。

瑞枝　何をさ。

律子　あたし眞面目なのよ。よくつて。

瑞枝ただうなづく。

律子　あんた今日誰と何處へ行つた？

瑞枝　御夕飯を御馳走するからつて、主人がみんなを御料理屋へ連れて行つたの。あたしたちのとこみたいな店では、さういふ事が時々あるのよ。

律子　女の人までも。

瑞枝　こないだうち、大變忙しくて夜業迄させたから慰勞の爲めだ。みんないつしよがいいつて、あたしを入れて三人ゐる女の人も、みんな行つたの。あたし一人なら斷るんだけれど、みんなが行くつていふのに一人だけ斷るのも變だから、つい誘はれてしまつたの。さうしたら、みんなお酒を飲んで、あたしにも無理に飲ませるんですもの、ひどいたらないのよ。

律子　それから。
瑞枝　あたしお酒なんて飲んだ事ないでしよ。だから、こんなに醉拂つてしまつた。もう、こんな事しないから、ゆるしてよ。
律子　それでもよく一人で歸つて來られたわね。
瑞枝　あたし、とても、一人で電車に乘る事なんか出來ないのよ。だもんだから、自動車でそこの角迄送つて來てくれた。
律子　誰が。
瑞枝　主人が。
律子　瑞枝さん、賢一のゐる前で、こんな事いふのはいやだけれど、あたしの性分として默つてゐられないわ。氣にさわる事もいふかもしれないけれど、ゆるして頂だい。あたし、あんたの今度のおつとめ先は、よくないところぢやないかと思ふの、なんだか、今にとりかへしのつかない事が起きさうな豫感があるのよ。いくら忙しかつた慰勞だからつて、女の事務員迄料理屋へつれて行つて、お酒を飮ませるなんて變ぢやないかしら。
瑞枝　變よ。たしかに變よ。それでも世間では珍しい事ではないんですとさ。
律子　駄目。あんたは人のする事なら、何でもして構はないと思つてゐるからいけない。いいえ、あんたつていふ人は、人のする事が直ぐにしてみたい人なんだわ。
瑞枝　ひどいわ、それは。
律子　いゝえ、さうよ。あたしには危險に思はれて爲方がないの。あたし、あんた程好きな人はないから、そんないやなところに勤めさせて置き度くない。あんたは、こんなに長く寢てゐるあたしに、何から何迄よくして下さるばかりでなく、つとめはつらくても收入の多い方がいゝといつて、今度の店に變つたんでしよ。みんなあたしの爲めでしよ。あた

し達は、職業によつて、さも獨立した生活をしてゐるやうに見えながら、一寸病氣にでもなれば、藥代も拂ふ事も出來やしない。幸ひあなたみたいなお友達があつたからこそ、お醫者樣にもかゝれるし、下宿を追出されないでも濟んだんだわ。感謝するわ。何といつて感謝していゝかわからない。けれども、そんな店に行くのはいや。ひとごとではないわ。

瑞枝　あたしはまだまだあなたに對して盡し足りないのよ。あたしこそ、あんたつて人が居なければ、どんなに世の中が寂しいかわかりやあしない。

律子　ありがたう。ほんとにあたしはあなたといふお友達があるのでしあはせなのよ。でも、そのお友達があたしの爲めに、少しばかり月給が多いからつて、いやなところにつとめてゐるのを、默つてみてはをられない。あたし、お醫者なんかにみて貰はなくてもいゝ。三度三度御飯なんかいたゞかなくてもいゝ。だから、あんたは そんな風儀の悪い店なんかやめてよ。ね、あたしの體がなほつたら、又どこか二人いつしよのところに勤めませうよ。月給なんかいくら安くてもいゝわ。二人がいつしよに働いてゐられゝば、それ程幸福な事はないぢやないの。

せき込んで喋るので咳入りながら、律子瑞枝の手を強く握る。

瑞枝感動して、身をすり寄せる。

瑞枝　あたしが悪かつた。かんにんして、かんにんして……

——幕

第二幕

前の幕よりも二月位後。

病院の一室。

瑞枝顔面と手に繃帶をして床上で鏡を見てゐる。外傷の回復期。

賢一ノックして入つて來る。

瑞枝　誰。あゝ賢ちやん。今頃どうしたの。

賢一　今日は日曜だよ。

瑞枝　あらさう。ちつとも知らなかつた。まあおかけなさいな。姉さんは。

賢一　又職業探しに出て行つた。三四日前、先の會社にゐた人に往來であつて、その人の心當をきいて貰ふ事になつて居るんだつて。

瑞枝　それでは今日は來てくれないかしら。

賢一　どうだかしらない。たぶん來ないだらうと思つて僕來たんだ。

瑞枝　さう。姉さんあんたにはあたしのところへ行つてはいけないといふんぢやないの。

賢一　うゝん。

瑞枝　さうでせう。かくしたつてわかるわ。

賢一　いけないつたつて構はないぢやないか。ひとが入院してるのを見舞つて悪い理屈は無いや。

瑞枝　賢ちやんも偉くなつたわねえ、先の頃は姉さんのいふ事だと、口返答も出來なかつたくせに。

賢一　そんな事あるもんか。

瑞枝　だけど、ほんとに姉さんのいふ通り、賢ちやんはあたしのところへなんか來ない方がいゝのよ。こんな顔になつてしまつたのも罰だわね。あたしがあの晩乘つた自動車がトラックと衝突したと知つた時、賢ちやんどんな氣がして。

賢一　僕はね、あの晩瑞枝さんが、いくら待つても歸つて來ないものだから、夜つぴて寢られなかつた。何か大變な事が

起つたに違ひ無いと思つてね。姉さんも姉さんで、眠つたふりはしてゐるんだが、床の中でため息をつくのが聞えるのさ。

瑞枝　さう、そして朝の新聞を見た時、姉さんは何といつてた？

賢一（答へるすべを考へながら）新聞は半分は出鱈目だから、さう思つてゐろ。どんな事が書いてあつても、瑞枝さんを信じてゐろつて……

瑞枝　で、あなたもあたしを信じてゐたの。新聞に書いてあるやうな女では無いと思つてくれたの。

賢一（困つて）新聞なんてほんとに出鱈目なんだからなあ。

瑞枝　さうばかりもいへないのよ。あたしの事なんか一概に嘘とはいへないわ。

賢一　でも、嘘の事もあるんだらう。

瑞枝　それはあつてよ。けれども、何といはれても爲方が無い。自業自得なんだから、律子さんの眼には、あたしなんかなんて卑しい人間に見えるでせう。あたしはあの方のやうな強い意志を恵まれて生れなかつたのよ。だからあなた方にさげすまれるやうな事になつてしまつたんだわ。

賢一　僕達瑞枝さんをさげすんだりなんかしてゐやあしない。姉さんの長わづらひの間、どんなに親切にしてくれたか、その恩は忘れてはいけないと、姉さんも始終さういつてる。僕だつてさう思つてゐる。誰がさげすみなんぞするものか。

瑞枝　それは、むかしの事でしよ。今ではあたしなんか、同じ家にゐるのもけがらはしいんぢやあない？

賢一　そんな事あるものか。

瑞枝　あつてよ、あつてよ。あゝあ、何故あたしも、あの時運轉手やあの男の人のやうに、ひと思ひに死んでしまはなかつたんだらう。

賢一　死ぬなんて、そんな馬鹿なこと、この位の傷なら直きなほるだらう。

瑞枝　此の傷は元の通りにはなほらないのよ。それよりも、あたしつていふ人間が、もうどうしたつて元の通りにはなれないわ。あたしは此の病院にかつぎこまれ、意識を囘復した時に、直に律子さんと賢ちやんの事を想ひ出したわ。こんな姿になつたからは、もうあの二人には顏を合せない。どうのめのめと逢へるものか。瑞枝は死んだものと思つて頂だくと、そればかり考へて、悲しくなつて涙が出たわ。それなのに、翌日眼がさめたら、病後で衰弱してゐるのに、律子さんが附添つて看護してゐて下さるんだもの、あたしには、それが苦痛だつた。何故ほうりつぱなしにして置いてくれないの、何故見捨てゝ行つてしまつてくれないのと、心の中で恨んでゐたわ。賢ちやんには、こんなひねくれた心持はわからないでしよ。

賢一　瑞枝さんは怪我をしてから、又人が變つちやつたなあ。そんなにひがんで居るのはいけないと思ふよ。

瑞枝　ひがんでゐるつて？

賢一　ひがんでゐるとも。僕達は、瑞枝さんにどんな事があつたつて、一生變りはしない。いつ迄もいつしよに暮らしてゐたいんだ。

瑞枝　ありがたう。賢ちやんは先からあたしが好きだつたのね。姉さんよりもあたしの方が好きなんでしよ。やかましい事をいはないから。どう？　好きだつたのなら好きだつたといつて頂だい

賢一　瑞枝さんはいつ迄も僕を子供扱してゐるんだなあ。そんな事きかれて返事が出來るものか。

瑞枝　いやな人。はつきりおつしやいな。あたしの方が好きだつて。

賢一返事が出來ない。

瑞枝　だけど、あたしはむかしの瑞枝ではないのよ。わかつて？

賢一すつかり悄氣てうつむく。
瑞枝じつとその様子を見てゐる。
律子ノツク無しに入つて來る。

律子　（冷かに）おや、賢ちやんも來てゐたの。
瑞枝　もうちよつと前から。
律子　どう、あなたは。
瑞枝　もう退院してもよさゝうに思はれるの。顔の繃帶はなかなかとれないでせうけれど、手や足の痛みは殆んどなくなつたわ。
律子　さう。一度お醫者さんにきいて見ませう。でも、なるたけ無理をしない方がいゝ事よ。
瑞枝　それでも病院にゐては不經濟だから、一日も早く退院したいわ。
律子　そんな事いつて、無理に出てしまふわけにもいかないでしよ。手當丈は充分しなければ。
瑞枝　充分にしたつて、どうせ傷だらけの顔ぢやあないの。どうなつたつて構ふものか。
律子　（賢一に）あなた先刻から來てゐるのでしよ。そんならもう歸つてもよくはない。
瑞枝　いゝぢやありませんか。居たつて。
律子　あたし瑞枝さんと二人つきりで話したい事があるから、あなた先に歸つてね。
賢一　（むつとして）では歸らう。さよなら。

賢一さつさと出てゆく。

律子　あの人は今度の事があつてから、どうかしてしまつて、勉强も何も手につかないのよ。あの記事の出た新聞を、幾

度も繰返して讀んでゐるの。

瑞枝　自分の信じて居た人が、いやしい心の持主だつたと思ふと殘念なんでしよ。あゝいふ純粹の心持の人には強く響くのね。濟まないわ。

律子　あたしの口からいつてはをかしいけれど、賢一はあなたを慕ひ過ぎてたわ。あの年頃になると、何か戀愛の芽生のやうな感情があるのではないかと思ふの。あたしには男の子の氣持は わからないけれど。

瑞枝　まさか賢ちやんが。

律子　いゝえ、さうもいへないわ。此の間も筆記帖の古いのが本箱の中にあつたら、何氣なく開いて見てゐると、詩や歌のやうなものが書いてあつて、それが矢張り戀愛の感情をうたつてゐるのよ。いつたいあの子早熟の方だけれど……
……

瑞枝　若しさうとしたつて、それは戀とかなんとかいふものではないでしよ。あたし達だつて、女學校の時分には、何といふ事もなく、先生や上級生を慕はしく思つた事があるでしよ。あんな氣持ではないのかしら。

律子　取越苦勞かとも思ふけれど、でもほんとに心配は心配なのよ。

瑞枝　それで賢ちやんがあたしのところへ來るのをいやがつていらつしやるの。

律子　別段いやがるつて事はないけれど……

瑞枝　さうかしら。あたしは、あたしみたいな自墮落な女に近づかない方がいゝと、あんたが考へてゐるの かと思つた。

律子　いやな瑞枝さん、何故そんなに疑ふんでせう。

瑞枝　律子さん、あたしこんなになつてからは、なるべくあなたとほんとの心持の、觸れ合はないやうに觸れ合はないやうと努めてゐたけれど、うちあけるよりも秘しかくしてゐる方が苦しいから、お互に腹臟なくいひあつてみない？

律子　どういふ事なの。あたしはあんたにかくしてゐる心持なんか何もないけれど。

瑞枝　嘘。あたし、あんたの心持はよくわかつてゐてよ。

律子　つまらない想像はいやよ。あなたにも似合はないぢやないの。何でも構はなずおつしいな。

瑞枝　そんならいふわ。

律子　なあに、おつしやつたら。

瑞枝　律子さん、あなたあたしを憎んでゐるでしよ。大嫌ひになつちやつたでしよ。けがらはしいと思つてゐるでしよ。顔を見るのもいやだと思つてゐるでしよ。

律子　どうしたの、そんなに興奮して。よくないわ。

瑞枝　いゝえ、あたしほんとのあなたの心持をきゝ度いのよ。

律子　いやな方。何故あんたはそんなに疑深くなつたのだらう。

瑞枝　あたしがさういふのは、自分の馬鹿がはつきりわかつたからよ。それから、あなたの性格を、あなた自身よりもよく知つてゐるからよ。ねえ、律子さん、あなたの現在いだいてゐる私に對する感情を、はつきりきかせて下さるのが、何よりの親切だわ。あたし達のながい間の友情に對しても、かくしだてするのは慘酷だわ。

律子　瑞枝さん、あなたはあたしを信じないの。あたしはあなたを嫌つたり憎んだり、さげすんだりする心持は微塵もないわ。あたしはあなたに心をいつはつた事は、たゞの一度もありはしないわ。

瑞枝　きつと。

律子　きつとよ。

瑞枝　律子さん、あたしはもう、元の瑞枝ではないのよ。あなたにあまつたれて、可愛がられて喜んでゐた瑞枝ではなく

なつたのよ。

律子　あなたは矢張どうかしてゐるわ。そんなに自分でいろいろの心持をこしらへて苦しむのはいけないことよ。瑞枝さんはむかしの通りのあたしの瑞枝さんよ。

瑞枝　あなたこそあたしの心持がわかつて下さらないのよ。あたしは自分のした事を、あなたから非難されるのは覺悟してゐるの。あなたはあたしが、兩洋商會に入つてから、萬事につけて變つた變つたといつて、度々忠告してくれたわね。いつだつたか、あたしが醉拂つて歸つて來た時は、ほんとに恐いと思ふ程叱られたわ。あんなところにつとめてゐてはいけない、直ぐにやめてしまへといはれたでしよ。あの時ほんとにやめてしまへば、こんな事にはならなかつたのに、あんたのいふ事をきかなかつた罰があたつたのね。あの時、お酒を飲んだ丈でも、あなたは許して置けない人なんですもの。それがあたし……どうせわかつて居るでせうけれど、あたし自分をやすやすと提供してしまつたのよ。(泣聲にはなつてゐるが泣いてはゐない)

律子　瑞枝さん、およしなさいよ。そういふお話なら、いづれゆつくりきくわ。今そんな事考へないでね。

瑞枝　考へるなといつても、それは無理よ。誰が考へないで居られるものですか。いくら自業自得だつて、あんまりひどいわ。こんなみつともない片輪者になつてしまつて、あたし世の中が、こんなに暗くならうとは思はなかつた。ほんとのところ、あたしはあなたと斯うしてゐるのもいや、これからさき、あなた方といつしよに居る事なんか、あたしには堪へられない、そんな我慢は出來ない。

律子　何故そんな事をいふの、あたしいやだわ。

瑞枝　あなたは清淨な事を理想とする人ですもの。あたしみたいに踏みはづした女を、側に置いて平氣で居られる人ではないわ。

律子　いゝえ、決してそんな事はない。あたしはあなたにどの位、精神的にも物質的にも世話になつたか、どんなに助けられて來たか、それを忘れるやうな女だと思はれては殘念よ。どんな事があつたつて、あなたの方から逃げて行つたつて、一生あなたを忘れはしない。あたしの友情に變りはない。

瑞枝　あたしの方から逃げて行く？そんな事があつていゝものですか。

律子　だつてあんたはあたし達といつしよには居られないつていふから。

瑞枝　あたしはあなたのやうな理性の勝つた人に縋つてゐて、はじめて安心してゐられたのだわ。最初に一目あなたを見た時、これはたゞの人ではないといふ氣がしたのよ。あたしの直感に間違ひはなかつた。あなたの端正な顔と、考へ深い眼の光、それがどれだけあたしを頼らせてくれたか。あたしはまだ戀愛の感情を、ほんとには知らないのよ。それはあなたに對する思慕の情が、戀する餘地を與へなかつたの。あなたの庇護があれば、あたしは一生淸らかに暮らせる――そんな事もなぐさめのひとつだつた。それがどうでせう。あたしは自分から、あなたの一番嫌ふ境界に落込んでしまつたのですもの。

律子　瑞枝さん、もう過ぎた事は爲方が無いわ。それよりも、これから二人で助けあつて、出來る丈意義のある生活を送りませうよ。

瑞枝　駄目よ。駄目よ。あたしには何が意義ある生活か、まるつきり見當がつかない。

律子　正しく生きる事。奴隷のやうに扱はれてゐた女が、獨立して生活する、それ丈の事でも意義があるわ。

瑞枝　そんな事、あたしには何の値打も認められないわ。あたしは、あなたのやうな精神的の滿足丈ではいや、あたしはいつでも、内心おもひあがつて居た。結婚しようと思へば、どんなところへでも行かれる。結婚なんかしまいと思へば、タイプライタを叩いてさへゐればいゝ。さういふ安心があつたの。それなのに、こんな顔になつてはあたしには人

中に出る勇氣が無い。あなたのやうな奇麗な方には、醜い容貌の者は、どんなにいぢけた心、どんなに寂しい心を持つて居るか、まるつきりわからないのよ。自分でいつてはをかしいけれど、人が奇麗だといつてくれゝば、あたしだつて嬉しかつたわ。それ丈の事にも生甲斐を感じて、一生の安心がもたれかゝつて居られたの。それがどうでせう。顔半分に傷痕が殘つて、死ぬ迄消えないといふのですもの、あたしは駄目。あたしは駄目。

律子　あたしはきりやうが惡くたつて、そんなに悲觀しはしないわ。それではあなたの煩悶は、顔の傷の事ばかりなのね。

瑞枝（意味をとりかねたが察して）いゝえ、決してそればかりではないけれど、でも、若い女にとつて、これこそほんとの致命傷ではないでせうか。

律子　瑞枝さん、怒つてはいやよ。だけどあたしなら、顔の傷よりももつと消し難い傷の方が深いと思ふわ。

瑞枝蒼白になつてじつと相手を見る。

律子　あたしは、こんな事はいふつもりは無かつた。けれども、あんたがあんまり顔の傷ばかり氣にしてゐるものだから……

瑞枝　律子さん、あたしの場合、あなただつたらどうなすつて。

律子　あなたの場合つて？

瑞枝　あたしの不幸のもとは、南洋商會に入つた事だと思つて居らつしやるでせう。あの時は、少しでも收入の多い方をと思つて移つたのよ。先の會社では普通の事務員でしよ。隨分報酬が違ふんですもの。尤もふだんはそれでよかつた。自分がどうにか食べて、着て行かれゝば滿足だつたわ。けれども、あなたが病氣になつてからは、あたしはもつともつとお金がほしくなつてしまつた。今から考へれば、僅かのお金だけれど、前の會社からは退社手當を貰ふ、今度の店ははじめから月給がいゝ、そんな事を胸算用して、あたしは一息ついた積りだつた。だけど、駄目。お金なんてものは、よ

つぽど澤山あるのでなければ、少し位の多い少ないでは同じことだわ。どうかしてもつとお金がほしい。あなたに何の心配も無く養生させ、出來る事なら轉地もさせ度い。賢ちやんにも勉强させ度い。さういふ慾が段々大きく、しまひにはお金の事ばかり考へるやうになつてしまつたわ。そこへつけこんで來たのが、あの男なのよ。だけど、あたしはひとに誘惑されたとは思はない。いくら反省してみても、自分から進んで行つたとしか考へられない。それ程お金がほしかつた。。さうする外に、あたしなんかのうでゝ、どうしてお金が入つて來るでせう。

律子　瑞枝さん、それではあなたは、みんなあたしの爲めだとおつしやるのね。あたしが病氣で寢てしまつて、收入はなくなる、醫者にかゝる、いろいろものいりが多く、あなたに負擔をかけなければならなくなつた爲めに、あなたは……

（心外に堪へられなくなつて聲が消える）

瑞枝　いゝえ、律子さん、誤解しては困るわ。あたしはあなたの爲めに身を捨てたとはいひはしないわ。あたしは意氣地が無かつたのよ。そんな事迄しなければ、外に絶對に途が無いといふせつぱつまつたところ迄は行つて居なかつた。あたしのは、自分にも慾があつたのよ。みつともないなりはしたくない。いゝ着物も着たい。洋服も着てみたい。さういふ根性の强い人間ですもの、決してひとの爲めにどうといふ事はいへないわ。むしろ、ひとの爲めといふ口實の出來たのに安心した、その心に隙間が出來たのだと思ふわ。

律子　いゝえ、いゝえ。あなたはあたしの爲めに犧牲になつたと思つて居らつしやるに違ひ無い。何故あたしなんか、死なうとどうしやうと、放つて置いてはくれなかつたのです。あたしはあなたに、そんな事を求める氣はなかつた。

瑞枝　だからあたしはさういつてるのよ。決してあなたの爲めではない、自分の心のぬかりだつたと。だけど律子さん、お金の無い女が、親とか良人とかにくつついて居ないで、生きてゆく途があるものでせうか。

長き沈默。

突然律子に感動が來る。

律子　瑞枝さん、許して頂だい。あたしは自分の方が年上だと思つて、姉のやうな氣持でゐたけれど、ほんとはあたしがあなたに甘つたれてゐたのね。あなたが、どんなにあたしの事を心配してくれたか、どんなに苦しいはめに陷つてゐたか、どんな誘惑に直面してゐたか、あたしにはわからなかつた。だから、あたしは自分勝手な理想主義から、あなたの行爲を憎み、嫌ひ、さげすむ心を抑へる事が出來ませんでした。あたしこそ憎まれ、さげすまれなくてはならない人間なのに、それには微塵も氣が附かず、何の反省もなく、自分はいゝ子になつて、あなたを咎める心でいつぱいでした。許して頂だい。

淚が頰を傳ふ。

瑞枝しばらくそれを見守る。無言のまゝひしと抱きつく。上から律子かゝへてむせび泣く。

幕

第三幕

第一幕に同じ。

瑞枝まだ半面に繃帶をしたまゝ雜誌を讀んで居る。

律子歸つて來る。

律子　いやに雲が低く下つてゐて、氣持の惡い日ね。往來を步いてゐるうちに、頭のしんがぼうつとして、自分が何處にゐるのだかわからないやうな氣がするわ。

瑞枝　うちにゐても息がつまるやうで、堪らないのよ。又傷口が痛みさうな豫感がして爲方が無い。かういふお天氣だと、繃帶が一層うつとうしく思はれるわ。

律子　今年はほんとにどうしたつて年なんでせう。

瑞枝　太陽の黑點があるんですつてね

律子　いやだいやだ、太陽の黑點は。何處へ行つても、不景氣で人べらしの必要はあるけれど、新らしく採用する餘地はないとか、あなたは體が弱さうだから、缺勤が多からうとか、こつちで望むところでは、てんから相手にしてくれやあしない。さうかと思ふと、新聞廣告を賴りにして行くところなんかは、まるで信用の出來ない人達ばかりで、あれではまるでこつちから女街宿に飛込んで行くやうなものだわ。今日なんぞ、かういふうちがあるのよ。共榮相互利殖會社つていふのが、婦人監督役招聘といふ廣告を出してゐるから、たづねて行つて見ると、とてもひどい路地の中で、浴衣がけの事務員らしい若いのが取次に出ると直に、社長が二階から裸で下りて來て、まあお上んなさいなんていふのよ。そこそこに逃げて來てしまつたけれど。さうかと思ふと、保險證券擔保貸金組合つていふのは、通ひならば日給八十五錢で、同居してくれゝば食費もだゝで、月給四拾圓くれるなんて、人を馬鹿にした事をいふんですもの。腹が立つて爲方が無いから、何故通ひだと安いのですかつてきいてやつたら、通ひだとふいに休まれて困る事があるからだなんて白々しい事をいひながら、人の顏ばかり見て笑つてゐるの。それからもうひとつ冒險してやつた。あたしだつて、本心からそんな家に雇はれやうとは思はなかつたけれど、どんな樣子のものか知つて置き度いと思つて、女給さん至急入用と書いて貼出してあるカフエに入つて行つたの。亭主とおかみさんがかはるがはるいろんな事をきくのよ。御亭主はあるかだの、いろ男はないかなんて、隨分失禮なのよ。そのあげくがどうでせう。給金といつてはあげないけれど、お前さんのきりやうで心懸さへよければ、うんと儲るよ、その上いゝ鴨でも引かゝれば玉の輿さだつて。

瑞枝　ひどいわねえ。

律子　あゝあ、あたし女がつくづくいやになつた。なんだつて女なんてものに生れて來たんだらう。世の中が男なら男ば

かり、女なら女ばかりだつたら、どんなに合理的に暮らせるでせう、男と女とがいつしよになる世の中では、女はいつ迄たつても駄目ね。女にも職業が與へられ、經濟的獨立が出來るやうになつたといふのは表面ばかりで、女の重役も、女の課長さへありはしないぢやないの。たゞ家庭内の召使だつたのが、事務所の召使にもなれるやうになつたといふに過ぎやあしない。それも、女を雇ふ方が安いといふ、たゞひとつの理由で許される丈だわ。少數の天才か、幸運者は別として、昔から女の食べてゆかれる唯一の職業は、藝者の外に何があつて。何もありはしないぢやないの。

話のうちに主婦あがつて來る。

主婦　ごめん下さい。お話中ですか。

律子　いえ、構ひません。どうぞ。

主婦　今日はなんていやなお天氣なんでせう。とつても堪つたもんぢやあない。これでは達者なものだつて病氣になつてしまひますよ。

律子（氣の無い返事）ほんとにねえ。

主婦　小柴さんもこんな日に、お醫者さん通ひはかなひませんね。

瑞枝（うるさゝうに）えゝ。

主婦　何べんいつてみても同じ事だけれど、ほんとにとんだ災難でしたねえ。

瑞枝　罰があたつたのですわ。

主婦　それでも、まだしも運が強かつたんですよ。その男の方や運轉手なんか、その場で死んでしまつたんだつていふぢやありませんか。御身分のある方だつていふのにねえ。

二人とも不愉快になつて默つてゐる。

その氣色をみてとつて　かへつて反撥的に。

主婦　それはさうと、ほんとにいひにくい事なんですが、うちでも御存じの通り、長いこと注文取に田舍を廻つてゐて歸つて來ませんし、あたし一人留守をして困つてるんですがね、高木さんも長い間わづらつて寢てゐらしつたし、小柴さんもとんだ事で、いろいろ出の多かつた事は承知してゐますけれど、こつちも二月も三月も支拂を頂かなくては、全く困つてしまひますからねえ。あたしんとこだつて、華族さんでも大臣方でもないんだから、だまつて寢てゐても、銀行のお金が子に子を生むつてわけにはまゐりませんしね、今月も亦頂けないとなると、あたしもひぼしになつてしまはなければならないんですよ。

律子　小母さん、さう仰らないでも、あたし達も心配してゐるのです。何とかしなければ濟まないとは思つてゐるのです。けれど、何しろあたしも長らく寢てゐましたし、そのうちに會社の方もやめられてしまひ、やつとよくなつて、これから新規のつとめを探して働かうといふやさきに、今度は瑞枝さんがこんな事になつてしまつたんですもの、ほんとのところ今直ぐにつてわけにはいかないのですが、どうにでもしてお返ししますから、もうしばらく待つて下さらない。今日のところ三人のうち、賢一だけ稼人なんですもの、如何心配しても爲方がないのですわ。でも、あたしだつてさういつ迄も斯うしてはゐられませんから、ほんとにもう少し待つて下さいましな。

主婦　だつてさ、あんたの病氣の時から隨分待つてあげて、これが癖になつてはあたしの方もやりきれませんよ。

律子　小母さん、あたし達を信用して頂だいな。今迄にこんな事は一度も無かつたのですからね。あたし達も、ほんとに今は苦しいんですもの。

主婦　高木さん、餘計な事をいふやうだけれど、あんたなんか考へやうひとつで、ちつとやそつとのお金に苦勞しないだつて濟むぢやありませんか。人一倍いゝ女に生れて來たしあはせで、どんないゝめを見る事も出來るんぢやありません

か。あたしみたいになつては、誰だつてはなも引かけないけれど、此の頃は女にだつて、いろいろ面白い商賣があるつて話ですよ。

瑞枝（たまりかねて）小母さん、小母さんは律子さんに何をしろつていふの。お妾にでもなれつていふんですか。

主婦（一層意地にかゝつて）何もお妾とばかりは限りますまいけれどね。

瑞枝　あんまりひどいわ。そんな事いつて。

主婦　あたしにいはせれば、小柴さん、あんただつてあんまり人がよすぎますよ。社長さんだかなんだか知らないけれど、勝手な眞似をされて、おまけにひどいめに逢つたんぢやありませんか、向のうちにねぢこんで行けば、先方だつて話のわからない人間ばかり揃つてるわけでもないんでしよ。

律子　小母さん、御親切にありがたう。あたし達もよくよく考へてみますから、もう少しの間待つて下さいな。

主婦　ほんとにとつくりと考へて御覧なさいよ。惡い事はいはないから。

律子　御忠告は忘れませんわ。だからがまんして下さいまし。

主婦　爲方のない人達ねえ。そんなら一度にとはいはないから、少しでもいゝから入れて貰ひませうか。さうしないと、八百屋や豆腐屋にやるお金もないんですからね。

律子　そんならあたしの持つてゐる丈、みんな差上ませう。どの位あるか知らないけれど、それでかんにんして下さい。

帶の間から金入を出し、さかさにして疊の上に錢を落す。

瑞枝と顏を見合せて苦笑する。

律子　これつきりありませんわ。

主婦（すつかりつむじをまげて）そんなら遠慮しずに頂いて置きませうよ。（ひとつひとつ錢を拾ふ）それでは、あとも

成るたけ早くして下さい。あたしんとこも、たゞであなた方を養つてゐられる身分ではないんですからね

主婦わざとおちつきを見せて去る。

瑞枝　なんていふ失禮な奴なんでせう。あたし達がこゝに來てから、もう二年にもなるのに、まだあんなに人の心がわからないんでせうか。

律子　あゝいふ人は、人の心なんてものの存在は知らないのよ。

瑞枝　だつて、あんまりだわ。あたし達あの人には、隨分親切にしてやつたのよ。いつでしたつけ、御亭主が旅先でお金がいるといふ時には、恰度貰つて來たボオナスを、その儘貸してやつた事もあつたし、あの人が病氣をした時には、あなたとあたしとかはりあつて、よつぴて看護してやつた事もあつたぢやないの。

律子　駄目よ、そんな事いつたつて、あの人には自分の苦みはわかつても、人の苦みはわからないのだから。いゝわ、いいわ。當分何とでもいはして置いて、こつちも一生懸命に働いて、今に又御世辭をいはせてやるから。

瑞枝　だつて、あんまり失禮よ。あんたにむかつて、きりやうがいゝからどうだとかいつてさ。

律子　いゝ事よ。あゝいふ人間にはとりあはないのが利口よ。お金の顔さへ見せてやればいゝんだから。

瑞枝　でもねえ、そのお金つてものが、あたし達には縁のないものなのではないかしら。

律子　そりやあ百萬長者になれつこはないけれど、いつ迄かうでもないでしよ。

瑞枝　あんたは何時でも將來に希望を置いてる人なのね。

律子　えゝ、あたし夢想家なの。

瑞枝　あたしには明日の希望がなくなつちやつた。律子さん、あたしはね、此の繃帶のとれる日の近づくのが、段々苦痛になつて來たわ、元の通りなほるものならいゝけれど、深い傷痕の殘る事は覺悟しなければならないと、お醫者さんも

いふんですもの。いくらあんたにさとされても、あたしには勇氣が出ない。こんなみつともない、誰にも直ぐに、あゝあの女だと指さしされる顏を、のめのめと人中に曝す事は出來ないわ。第一、あたしは、あなた方きやうだいのやうな、清淨な人といつしよにゐるのが苦しいのよ。御覽なさい、此の頃の賢ちやんを、あんた、いつかさういつた事があるわねえ、賢ちやんはあたしを慕ひ過ぎてゐたつて、あれはほんとうだつたのね。賢ちやんはきつと、あたしを缺點の無い、やさしい女だときめてしまつてゐたのね。それが途方もない人間だつたとわかつたものだから、世の中にあるものゝ値打が狂つてしまつたんでしよ。此の頃賢ちやんの樣子を見ると、あたし自分の罪業が恐ろしくなるわ。

律子　それはあたしも心配してゐる事なのよ。あの子はちいさい時から敏感過ぎていけなかつたの。だけど、なんといつてもまだ子供ですもの、別段戀とかどうとかいふ意味ではなくて、たゞ何か人なつかしい感情の芽生が折られてしまつた位のものでしよ。

瑞枝　それでもねえ、あたしにはきかなくなつてしまつたわ。まだしも病院に來てくれた頃はよかつたんだけど。

律子　いつか折を見て、あたしからようく話をしてみるわ。此間も、あんまり遲く歸つて來たから、どうしたのかと思つたら、役所のお友達といつしよに淺草へ行つたんですつて。段々さういふ事を覺えるので、あたしも心配は心配なのよ。

瑞枝　なんだかあたしの事がもとになつて、一人の人を惡くしてしまふのではないかと考へると、こゝにいつしよにゐる事は辛いのよ。そんな風に人に迷惑をかけ、自分自身は生甲斐を感じる事も無いものが、たゞ生きてゐるといふ丈で、何の意義があるのでせう。

律子　瑞枝さん、又あなたはじめたのね。あんたはあたしさへあれば、外には誰もいらないといひいひしたのを忘れたの。一生涯あたしといつしよに暮らしてゐたら、生甲斐を感じない？あたしは、あなたといつしよに暮らせる丈でも生

甲斐があると思つてよ。

瑞枝　あたしも先にはさう思つてゐたわ。さう思ふ自分の感情に醉つてゐたけれども。正直にいへばもう駄目よ。

律子　それぢやあひどいわ。あたしはちつとも變らないのに。

瑞枝　あんたはそれで生甲斐を感じる筈よ。だつて、あんたには奇麗に身を持してゐるといふほこりもあれば、弟を偉いものにしようといふ張合もあれば、あたしといふ片輪みたいな厄介者を背負つて立つてゐて、それの爲めに犠牲になつてやるといふ强い者の喜びがあるわ。あたしにはさういふものが一つも無く、みんな遠方に行つてしまつて、もう二度と歸つては來いのですもの。あたしは、東京へ出て來てから、一度も音信をしない故鄕の事も考へるやうに弱くなつてしまつた。でも、自分が見捨てゝ來た土地、誰も彼もむかしのあたしを知つてゐる土地へ、どうして此の姿で歸れるのですか。

律子　あんたもお國の事を考へたの。あたしもふいと鄕里の事を想ひ出す事があるわ。母に縋つてお金を送つて貰はうか、あたしのうちが貧乏になつた爲めに、心ならずもよその人の世話になつてゐる母ではあるけれど、少し位の融通ならしてくれるだらうなんて、勝手な事を考へるのよ。けれども駄目。あたしには出來ない。母の行爲を非難したものが、どうしてその母からお金が貰へるでせう。母のお金は、母が自分で正當に稼いだお金ではないにきまつてるわ。母が身を賣つた、みのしろ金にひとしいものだわ。あたしには、そんなお金を貰ふ事は出來ない。出來ない。瑞枝さん、どうぞ辛抱して頂だい。今にあたしがどうにかするから。

瑞枝　どうにかするといつたつて、どうなるものでせう。あなた一人なら、それはどうにでもなつてよ。だけど、あたしはどうなるでせう。あたしには働く氣も、自分を養つてゆく氣も何もないのよ。そんな氣はなくなつてしまつたのよ。あなたに慰められてゐる瞬間には、あたしもまぎれて笑つてゐられるかもしれないけれど、人つてものは、さうさうひ

とつの心持を持續ける事は出來やあしないわ。あたしは此の世の中がいやになつてしまつたんですもの。人は未來の夢を持つてゐないで、生きてゐられる筈が無いわ。あたしは矢張、あの時死なゝかつたのが不幸なのよ。どうしてみつともなく生殘つたんでせう。

律子　およしなさいよ。それよりも、あたし達の友情を、どこ迄も至上のものとして、そこに生甲斐を見出す事につとめませうよ。生活の事なんか、どうにかなるに違ひないわ。まさか、ひぼしになる事もないと思ふわ。

瑞枝　若し、どうにもならなかつたら、どうして。

律子　あなた一人をひぼしにはしないわ。あたしもいつしよにひぼしになるのよ。

瑞枝　（わざとはれやかに）嬉しい。あたし早くひぼしになつてしまひ度い。

　　律子が笑顔を向けたのに甘えて。

瑞枝　あたしほんとは死んでしまひ度い。いやなおもひをして生きてゐるよりも、いやな事の少ないうちに死んでしまひ度い。

律子　あたしは死ぬのは嫌ひ。此の世の中に生きる力が無くて、負けて死ぬのなんかいやだわ。

瑞枝、あたしはもう負けてしまつたのですもの。そんな負惜みはいはない。

律子　負惜み？ひどいわねえ。負惜みでもなんでもいゝわ。あたし、どうかして瑞枝さんを、もう一度むかしの快活な瑞枝さんにしてみたいわ。

瑞枝　無理な注文よ。やつぱりあなたには、今のあたしつてものが、ほんとにはわかつてゐないのねえ。

律子　その事はもういはないで頂だい。あたしだつて愈々となれば、あなたのいふ通り、いつでもいつしよに死んでおあげますよ。でもね、あたしいつだつたか、何かで讀んでひどく口惜しく思つた事があるのよ。女といふものは、直に自殺

といふ最後の手段を擇んで責任を廻避する――そんな攻撃だつた。あたしはそれを讀んだ時、ほんとに口惜しく思つたの。死ぬものか、どんな事があつたつて死ぬものかと決心してやつた。ほんとに死を擇ぶ事は卑怯な氣がするの。

瑞枝　それは、あなたがまだ死ぬやうなめにあはないからいへる事なのよ。

律子　いゝえ、あたしは死なゝいわ。どんなめにあはされても。たゞ、あたしに死ぬ場合があるとしたら、あなたといつしよに死ぬ事だけだと思つてゝ頂だい。

主婦突然梯子口から顔だけ出して

主婦　高木さん、お客さまですよ。

律子　どなた。

主婦　いつもの男の方。斷りますか。

律子　（考へて）あたし、おめにかゝりませう。

瑞枝に意味のあるやうな無いやうなめくばせをして立つ、

主婦の顔消える。

律子へだての襖をしめ、次の室に坐蒲團を出し、階下へ行く。

直ぐに、竹村景吉を伴つてひつかへす。

律子　又こんな狹いところで失禮ですけれど。

竹村　お邪魔してすみません。その後はすつかり御丈夫ですか。

律子　おかげさまで元氣になりました。

竹村　矢張流感かなにかだつたのですね。

律子　さあ、いかゞでせうか。肋膜炎とか肺病とか、そんな病氣ではないかと心配して居りましたんですよ。
竹村（襖の奥を氣にしながら）小柴さんは今でも御いつしよで。
律子　えゝ、でも今日は出かけまして、居りません
竹村（矢張襖が氣になる）では、どなたもおいでにならないのですか。
律子　えゝ、あんまりとりちらして居るものですから、樂屋は御目にかけ度くないと思ひまして。しめると暑いので御座いますけれど。
竹村　小柴さんはとんだ事でしたねえ。新聞を見て驚きましたよ。あの人もうちの會社をやめないで、辛抱してゐればよかつたのに。
律子　でも、兩洋商會の方ですと、自分の技能の振へるタイピストとして、相當の待遇をしてくれるといふ話でしたから。
竹村　そのかはり、とんだ大怪我をするやうな事になつたぢやありませんか。つまらない事をしたもんですなあ。
律子　それは結果から見ての事ですわ。誰がそんな不幸を豫想するものですか。
竹村　しかし、いつかもお話したやうに、あそこの主人といふのは評判の色魔だつたのですからねえ。で、小柴さんは、今はどうしてゐるのですか。
律子　まだ怪我がなほりきらないものですから、病院へ通つてゐらつしやいます。
竹村　傷は餘程ひどいのでせう。顏をやられたのださうですね。
律子　えゝ、お氣の毒ですわ。
竹村　氣の毒ですねえ。あの人なかなかシヤンだつたし、自分でも大分自信があつたのでせう。
律子　さあ、どうでせうか。

話が途切れると間が惡く、竹村煙草を出して火をつける。

律子（賢一の机の上の新聞をとつて）灰皿もありませんの。これでかんべんして頂きますわ。

竹村　いや、それには及びません。

ポケットから別の煙草を取出し、ひとつを灰落しに代用する。

律子　竹村さん、今日は何か御用でもおありなんですか。

竹村（ひどくあはてゝ）いや用事といふわけではないのです。會社をやめてから、どうしてゐらつしやるかと思つて。それに會社の立場も一度よく説明して、惡からず思つて頂き度いと考へましてね。實際病氣欠勤者に對する規定は、少し慘酷ですよ。あれは何とか改正しなくては………

律子　その事ならわかつて居りますの。あたくし、會社の御處置に對して、別段何とも思つては居りませんわ。

竹村　さういはれると尚更御氣の毒ですよ。あなたのやうな、讀み書きそろばん何でも達者な人を失ふのは、會社としても非常な損ですからなあ。

律子　竹村さん、よして頂きませう。あたくし、ほんとに何とも思つては居りませんわ。多勢の人を使つてゐらつしやるのですもの、めいめいの都合で勝手に休むやうでしたら、仕事の能率はあがりつこありませんわ。

竹村　なんだか、こつちが氣になるものですからね。

律子　御親切に。恐入りました。

竹村　それで、その後はどうしていらつしやるんです。

律子　どうもいゝつとめがなくて困つて居ります。

竹村　それは困りますね。あなたなんか、何でも出來るのだから、雇ふ方からいふとしあはせなんだがなあ。うちの會社

なんかも、一度やめた人には再入社を許さないなんて窮屈な規則を作つてゐるのは愚ですよ。不都合があつてやめたのなら別だが、病氣なら爲方がないぢやありませんか。

律子　あたくしねえ、今日はカフエの女給になつてみようかと思つて、行つてみたのですよ。

竹村　カフエに？

律子　え〻。それからこ〻のおかみさんには、女中奉公か賣春婦にでもなれといはれましたわ。

竹村　まさか。

律子　い〻え、ほんとなのです。おはづかしい話ですが、このうちへ拂ふ可きものも拂へないやうな次第でして、だもんですから、今日はお茶も煙草盆も出て參りませんのです。

竹村　さうですか、それはひどいなあ。成程、あれだけ長くわづらつて、その上就職の道が無いとすれば、お困りなのは無理もありませんよ。

律子　あたくしの病氣の時は、小柴さんが何から何迄して下さつたのでした。ところが、その小柴さんがあんな事になつたのに、あたくしにはどうしてあげる力も御座いませんのです。それで、あつかましい事ですけれど、一度おたづねして、御願ひしてみようかとも思つてゐたのですが、あんまり蟲のよすぎる話ですから………

竹村　あつかましいといへば、僕こそあつかましいはなしで、あなたが迷惑される事を承知しながら、かうして度々うかがうのですから、さぞかし不愉快に思はれる事と氣はついてゐるのです。いつだつたか、此處のうちのばあさんに、手きびしくいためつけられましたよ。

律子　申譯ございません。

竹村　さういはれると尙更參つてしまふ。

律子（しばらく考へて）竹村さん、あたくし自分ながらづうづうしいと思ふのですけれど、あなた先日御出で下さつた時、あたくしが病氣で困つてゐるなら、少し位の事は心配してやつてもいゝといつて下さいましたが、只今でもさういふ御親切を御持ち下さるのでせうか。

竹村　それは、あなたが困つてゐる場合、勿論僕なんかに大した事は出來ないけれど、出來る範圍に於て御助けする位の事なら、何とかしてあげ度いと思つたのでしたが……

律子　只今でも？

竹村　つまり、今さしあたつて困つてゐるといふんでせうね。

律子　えゝ、はつきり申しますと、一文も無いので御座います。けれども、あなたの御言葉に甘えて、こんな事を御願ひするのは、あんまりずるいやうにも考へましてねえ。

竹村　ずるいなんて事は無いけれど。

律子　いゝえ、あなたから度々御親切に御手紙を頂いた時には、失禮な御返事を差上げながら、自分が食べる事も出來ない程困つて來たとなると、今度は勝手な御願ひをしようといふのですから。

竹村　それは別問題ですよ。で、いつたいどの位御入用なんです。

律子　さうですねえ、あたくしどもの力では、一時におかへしする事は出來ないし、さうかといつて度々御願するのもいやだから（しばらく考へて）いかゞでせう、五百圓拜借出來ませんでせうか。

竹村　五百圓？

律子　この家の拂ふものは大した事はありませんのですけれど、小柴さんの入院費も隨分かゝりましたし、これからも未だいるだらうと思ふのです。

竹村（豫想した金額より多いので）五百圓ですか

律子　實は千圓と申上げようかと思つたのですけれど、五百圓でもあたくしどもには大金ですし、ほんとのところ、あたくしまだ五百圓のお金を持つた事は御座いません。いゝえ、その半分だつて、持つた事があるかないか……

竹村　五百圓は困つたなあ。僕はあなたの下宿料か藥代位の話と思つてゐたのだが、小柴さんの入院費もあるのですか。病院も近頃は高いからなあ。

律子　いかゞでせう、拜借出來ますでせうか。

竹村　しかし、その入院費の方は、あの男の家の方で負擔するのが當前ではないでせうか。

律子　でも、御主人がおかくれになつたのでは、どうにもなりませんでしよ。

竹村　僕にとつても五百圓はとても大金ですよ。實は百圓内外の事と考へてゐたのでしたが、こいつは弱つたな。

律子のはつきりした態度にすつかり壓倒されてゐる。

律子　無理な御願でしたかしら。

竹村　どうも少し荷が勝過るので…………

律子　それでは致方御座いませんわ。あたしも大金を拜借するには覺悟をして居りましたのですよ。

竹村　覺悟？

律子　えゝ、どういふ覺悟だと御考へになつて？

竹村　さあ、なんですかなあ。

律子　あたくしねえ、あなたの御望みになるものを差上げようかと思ひました。

竹村氣魄に打たれてしまふ。

長き間。

竹村（非常な努力で）では、僕がその金をお貸しするとしたら、いや、その金を差上るとしたら、あなたは僕が度々申上げた通り、僕と結婚してくれるつもりですか。

律子　はつきり申上ませう。あたくし、結婚はいやなのです。お金も拝借する丈で結構です。第一あたくしは、あなたに對して少しも戀を感じては居りませんの。たとひとりひきを致さうかと思ひましてねえ。

竹村　冗談はよしませう。僕は實際眞劍で、あなたに結婚を申し込んだのですから。

律子　あたしこそ眞劍なのです。

極めて眞面目なので、竹村愈々かたくなる。

竹村　今の御話は御話として、僕は決して代償を求めようとは思ひません。しかし、兎に角金策して見ませう。出來るか出來ないか、いづれあらためて伺ひます。

律子　折角御出で下さいましたのに、いやな事ばかり御耳に入れてすみません。

竹村　いゝや、なあに……

追はれるやうに階下へ行く。

律子見送つて行き、直に引返す。

襖をあけると、瑞枝沈思してゐる。

律子側に來て坐つて。

律子　瑞枝さん、驚いた？

瑞枝　驚いたわ。あんな事いつて追拂はれては堪らないわね。

律子　あたし追拂ふつもりでいつたのではないのよ。あたし、ほんとに自分をくれてやらうかと思つたの。

瑞枝　あなたが。まあ、どうして。

律子　瑞枝さん、あたしにもようくわかつた。女には、からだの外に提供するものは何もない。腕力があれば土方にもなれるけれど、あたし達では駄目だし、あたし達の持つてゐる才能なら、男の方が餘計もつてゐるに違ひ無い。どうしてもせつぱつまつた場合に、女がお金を得る道は外には無いわ。あたしは、あなたが容易に人にゆるした事を心の中で攻めて居た事を後悔した。あのおひとよしの意氣地なしと向きあつて話をしてゐるうちに、あたしはあなたの事ばかり考へてゐたのよ。あたしも同じ犧牲を拂はう。同じ苦痛を經驗して見よう。さう思つて、切出したの。若し、五百圓即座に出したら、あたしはきつと拒まなかつたでせう。

瑞枝　律子さん、あんたどうかしたんぢやないの。ほんとにさう思つたの。

律子　ほんとに。

瑞枝　では、明日にもあの人が、お金を持つて來たらどうなすつて。

律子　持つて來やあしなくつてよ。あたしはあの會社に入つた時から出る時迄、あの人の下で働いて居たから、よく知つてるけれど、あの人は惡い人では無いのよ。どつちかといふといゝ人だわ。たゞ小心な、意氣地なしなのよ。あたしのいひ出したお金なら持つてゐるに違ひないのだけれど、驚いてしまつたのね。あたしの態度にびつくりしてしまつたのよ。

瑞枝　でも、ようく考へて、又出直して來さうな人ぢやあない？あの人には、さういふ變な根强さがあると思ふわ。

律子　あたしは來ないと思ふ。あの人は、ほんとに氣の毒な位熱心に、あたしと結婚したいといつて來たのよ。だけど、結婚はしないといつてやつたから、もう來やしないわ。普通の男のやうに大膽ではないのよ。だから、かういふ一夜妻は貰へないのよ。

瑞枝　わからない事よ。幾度あんたが斷つても、根氣よく手紙を寄越したり、あつてやりもしないのに度々たづねて來たり、いつもいやな顏もしなければ、怒つた樣子も見せない、何處かに執念深いところのある人だわ。萬一決心してやつて來たら、あんたどうするつもり。

律子　あたしねえ、瑞枝さん。その時はその時の考へにまかせるわ。さつきは、ほんとに自分もあなたの爲めに犧牲になりたかつたの、けれども、今は又我身が惜くなつて來た。あたし、若しその時いやだつたら斷る。いつたん決心して差上げますといつたのだから、やつてしまつてもいゝけれど、考へてみるとお金なんかいらなくなつた。瑞枝さん、あたしもあんたといつしよなら、死んでしまつても構はないわ。

瑞枝　だつて、あなたは死ぬ事はないわ。あんたが死んでは賢ちやんが可哀さうだわ。

律子　賢一は賢一で、自分の力で生きて行くでしよ。たゞ、あたしは、死ぬ事はやつぱり嫌ひなのよ。どうしても卑怯な逃げ方だと思はれるの。だから、もう一度あたしが滿足して生きて行く道を探してみる。いゝえ、職業なんかどうでもいゝの。そんなものでなく、もつともつと、あたしの心をしつかりとつかまへて、夢でもなんでもいゝから、それによつて強い生甲斐を感じる事が欲いのよ。そんなもの無いかしら。無かつたら、その時にいつでも、あなたにあたしを差上るわ。

瑞枝、律子の兩手を握る。

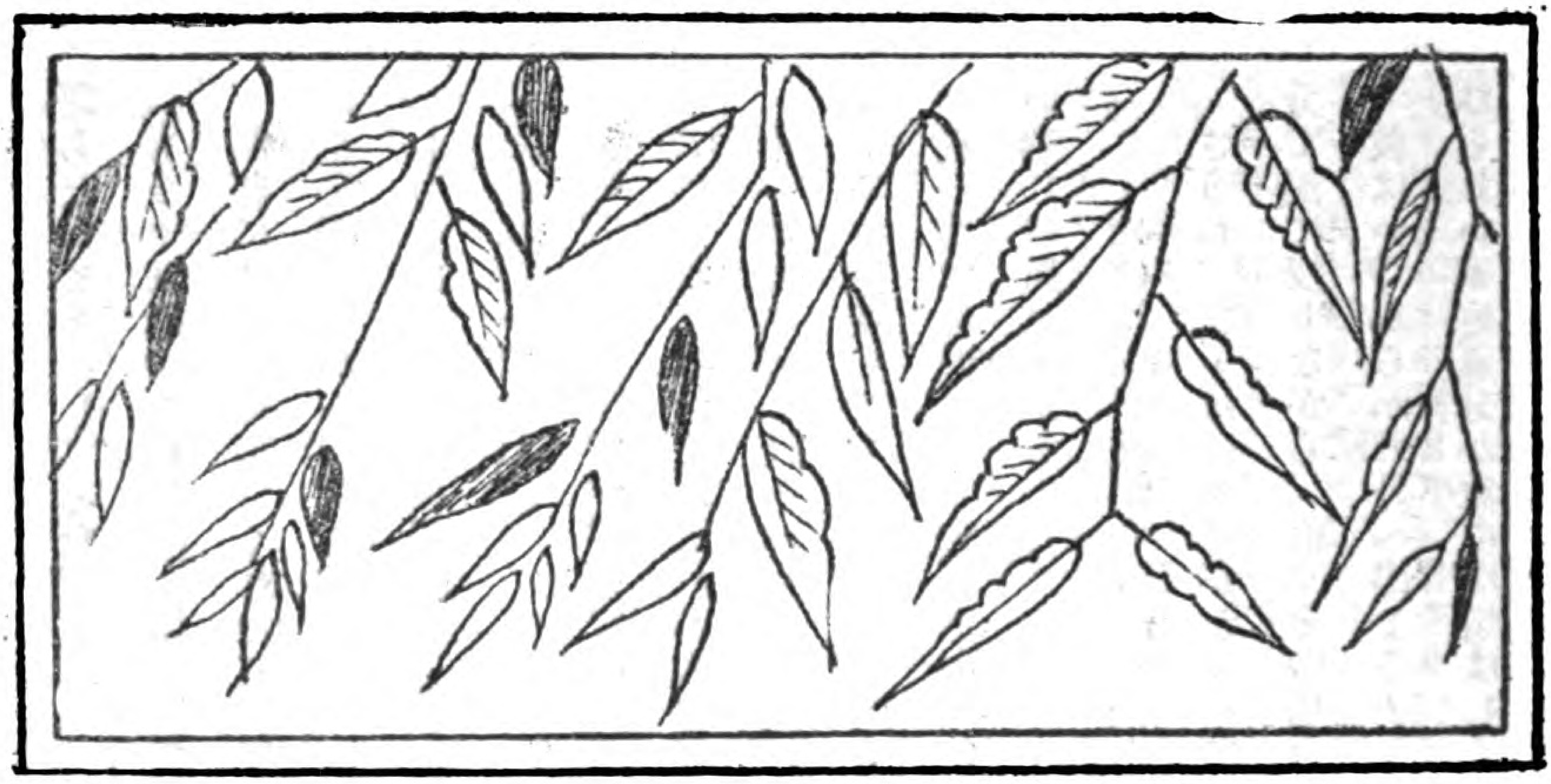
瑞枝　律子さん、ほんとに。

律子強くうなづく。

二人とも感激に言葉を失つて、互に顏を見合せたまゝ動かない。

幕

（昭和三年八月三十一日）



芭蕉と齒朶

徳田秋聲

深い雜木林のなかに建てられたバンガロー風の其の別莊へ著いたのは午後の何時頃であつたらうか。彼はこの高原地へ來る途中、初めてそこを通る同行の姉娘と妹娘に、ウスヰ隧道の出來た時のことなどを語つて聞かせた。それは四十年足らずのむかし、彼が初めて東京へ出た時の思出話であつた。同じ文學を志した友人のK君と徒歩でこゝを通つたとき、隧道の難工事に從事してゐる勞働者達の荒くれた風貌や關東辯がいかにアムビシヤスな、田舍からぽつと出の二人の幼な青年を驚かしたかを思ひ浮べたりした。荒いウスヰの山や谷々には、木の芽が漸く吹かうとしてゐた。旅客を運ぶ馬車が、喇叭を鳴らして、遠い山裾の道を走つてゐた。

「長野からづつと此の邊を歩いて、高崎から又た汽車に乘つたのさ。」彼は語つたが、それからの長い過去の現實が總て自身にも嘘のやうな話であつた。

「祖母さんも家が可けなくなつて、東京へ出るとき馬車で此處を通つたさうだ。」彼は附加へようとしたが、彼女のことは語らないことにしてゐた。

「もう十五通つたわよ。」汽車の長いのに倦んでゐた幼い蝶子が言つてゐた。

別莊には迎へに來てくれたH青年兄妹と祖母とが來てゐるだけであつた。主客六人は上り口の廣い廊緣のところで青葉の影を浴びながら、暫らく話してゐた。彼は羽織をぬいで、梁や手摺などの伐倒した雜木で造られた無造作な、しかしがつしりした其の建築に興味を感じた。

「これは好いですね。」

「兄の設計なんですが、夏だけのもので、一年中風雨に曝らしておくんですから。」

「この土地には皆さんこれが大變好いと仰つて。」お祖母さんも言つてゐた。

十一になる蝶子は十四になる妹の京子さんと、前から悉皆友達になつてゐた。料理場から料理を持出す窓をもつた食堂でもあり應接室でもあり遊戯室でもある二十坪ばかりの廣間には、これも素材のまゝの手摺をもつた段梯子があつた。その前の方に疊敷の日本室があり、後ろのドアを開けると、そこに厠があり、厠と勝手元の間の廊下を行くと、そこに明るい感じの風呂場があつた。

「こゝだけは父が後から改築したんですが。」

「さうね、こゝは一番手がかゝつてるやうだが、僕等が郊外に家を建てるとしたら、これが好いな。」彼はのう〳〵した氣分で湯に浸りながら、直ぐその場合を想像した。

彼はいつからか郊外へ出よう〳〵と考へてゐた。近頃は殊にその思念が強かつた。長く染みこんで來た都會趣味や町住ひらしい家庭氣分が彼には煩はしくなつてゐたが、その癖彼はまた二十年住みなれた家を離れかねて、家を造築して見た

り、最近は又増築工事の時破壊された庭を造り直したりして、兎角居住に迷ひがちな自身の氣持を強ひても落着けようとしてゐた。けれど造つてつけの建築と、年々建てこんで來る周圍の氣分とが、屢々彼を憂鬱にした。彼は竹を植えたり、友人のところから叡山苔をもらつて來て貼りつけたりした。こゝへ來る前に、大森の青年から贈られた芭蕉が、子供達の洋館の窓先きに、美事な青い廣葉を一枚々々と擴げて行つてゐたりした。しかし此處が彼の藝術的生活の落着きどころだとは思へなかつた。その上彼の家庭は最近迹りに分裂作用を行ひつゝあつた。彼は家に殘つた四人の子供のうち、青年期に達しようとしてゐる上の一人がまた何かに彼の心を脅かしがちなのに神經を惱ませてゐた。

「先生これは温泉ですよ。」H青年は彼に告げた。

「さう。何ういふ成分の……」

「さあ、それはよく知りませんけれど。」

温泉はこゝまで引かれる途中で温くなるらしかつたが、石炭を少したけば可い程度であつた。風呂からあがると子供達は二階へあがつてスウトケースを開けてゐた。二階にはシングル、ダブル取交ぜて素朴なベツドを具へつけた幾つかの寢室があつた。疊敷もあつた。

「先生の部屋はこちらです。」H青年が案内してくれた。それは青年自身のと廊下を隔てゝ向合つた一室であつた。

彼は窓を明けて見た。窓の下の雜木林の彼方に流の音が聞えた。鶯が啼いてゐた。

「M君のところは。」彼はきいた。

「△屋の近くでせう。あすこで聞けば解るでせう。いらつしやる？」

「行つて見ようよ。」

「ぢや御飯でもすんだら。」

彼は昨年I子とこの避暑地へ來たときと同じやうに、今年も齒を病んでゐた。彼は去年に懲りて立つ前夜近所の齒醫者で浮いてゐる犬齒を拔いてもらつた。それはもうさうする外ない齒であつた。去年もその齒が彼を惱ました。しかし拔いた跡がまだ痛かつた。次ぎの齒も少し浮いてゐた。彼は含嗽劑を用意してゐたが、食事をする時、少し難儀だつた。

彼は何彼と用心ぶかく指圖をしながら、姉娘の持つて來たものゝなかに外出着を一枚も入れてないのに氣がついた。

「初め入れたんですけれど……。」彼女も困惑してゐた。

「それあ困つたね。」

彼女はもう古くなつた友禪模樣の縮の單衣を着て出たが、こゝの晩方の陽氣には少しぺら〳〵しすぎてゐた。でも町へ近づくにつれて、浴衣がけの女學生などを見かけた。

「そんなに可笑しくもないよ。」

彼女は別に悲觀してはゐなかつた。不斷彼女は父親に何一つ要求したことはなかつた。避暑にも行きたがつてはゐなかつた。

「山へも海へも行きたくないと言つてらしやいますよ。今年の夜具のお洗濯を手傳ひかた〴〵佛蘭西語をやりたいなんて。」お婆さんが彼に告げた。

「着物がないから？」彼は氣を廻して見たけれど、さうではないらしかつた。

町には土地にふさはしい野生的な開放的な外國婦人の姿が多く見られた。ブルドッグのやうな顏をした肥つちような婆んが旦那樣と手を組んで歩いてゐたりした。でも此處は外人の發見した避暑地であつた。そして此處に夏をすごす日本人も亦、彼等のやうに生活するのが、土地の氣分にふさふのであつた。キャムプ生活の少し進歩したやうなものが適當だと思はれた。こゝへ贅澤な別莊など造るブルヂョワは入れない方が可いのであつた。彼はさう思つたが、その癖お上品なブ

ルヂョリ氣分の少しもない場所は、彼も餘り好かないのであつた。

△屋旅館の風呂番がM君の家を案内してくれた。じめ〳〵した木立のなかの暗い道を一行はがや〳〵騷ぎながら其男について行つた。窓明りが所々に見えた。

漸とM君の家の前へ出た。豆の蔓で作られた隧道をくゞると、夜目にもダリヤや花魁草の咲き亂れてゐる前庭の花畑が目についた。餘り晴れやかな夜でなかつたので、椽側の板戸がもう締まつてゐた。M君の妻が大人や子供達と一緒に、茶の間に見られた。M君は少し驚いてゐた。

「さあ皆さん何うぞ。」

子供達は躊躇してゐた。解放されたさうであつた。

「町を散歩するでせう。」彼はさう言つて一人で上つた。

M君は座敷の眞中に小机を一つおいて、四邊は綺麗に取り片付いてゐた。

「どこに？」

「H氏の別莊にゐるんで。娘に附いて來たのです。男の子供は海へやつてありますが、事によつたら此處で一軒借りようかとも思つて……。」

「まだ家はありますよ。」

「しかし去年の海水浴で子供が一年病氣をしなかつたから、矢張り海が可いんだらうと思ふ。」

「海は散漫で。」

「僕等にはね。」

二人は郷土のお菓子を摘みながら小さな煎茶茶碗で苦茗を啜りながら語つた。彼はお茶人風な此の人の前へ來ると、自

分のがさつなのが目に着いた。しかしM君も彼と同樣に、最近居住に落着きかねる風であつた。M君は東京の庭をこはして、郷里に用意してある土地に靜かな境地を求めて庭を造りつゝあつた。しかし其はM君の全部ではなかつた。

「少し散歩しませんか。」

「しませう。」

M君はきちんと仕度をして家を出た。

町へ出ると二人は色々な店へ入つて見た。日本の骨董店や支那の雜貨店など。其邊一體に居留地の色彩が漂つてゐた。

途中でH青年と子供達のK喫茶店を出てくるのに出逢つた。

「M先生に紹介していたゞきたいんで。」

彼は紹介したが、M君は妹の京子ちやんを此の土地で前から知つてゐた。

スヱターを賣る店などへ立寄つてから、一行はM君と別れた。

彼は每日彼等を引連れて方々歩いて見た。そして二三日すると、姉娘は新調の洋服を着てゐた

「こゝで洋服を造る人が多いんです。外國人がゐるんで安いんです。」H青年にさう言つて敎へられたところで、姉娘の着物の不便を救ふために、支那人の店でそれを誂へた。二三軒の店を、彼等はぞろ〳〵片地を見て歩いた。そしてトムで一着註文すると、靴や帽子を搜しあるいた。時間がかゝつたけれど、みんな好いものが見つかつた。

それがお盡頃のことであつた。彼は齒痛の全く癒り切らないのに焦れて、一旦歸つてから齒醫者へ行つた。助手の日本人が叮嚀に見てくれた。先生の外人も來て見てくれた。

あとで女の事務員が手帖をもつて、時間の都合を考へながら、

「明後日のお晝頃は如何でせう。」

「結構です。」

彼はさう言つて、通りから体を徹つた。途中自轉車で飛ばしてゐるトムに逢つた。摺違つてから、挨拶した男が假縫をもつて來た彼であつたことに氣着いた。

明朝廣間へおりて來ると、洋服がもう届いてゐた。

「チャンコロは勉强するね。」

一體に日本人は何といふ口達者な怠けものゝ多いことよと思はずにはゐられなかつた。

「ちよつと着てごらん。」

紅殼色に砥の粉色の縞をもつた柄とスタイルが彼女の姿を愛らしくした。

「好いぢやないか。」

彼は微笑ましげに眺めてゐた。彼は此の頃この娘に偶に一枚づゝでも著物の柄を見立てゝやるのが趣味の一つであつた。著物の面倒なぞ見てくれる母親のない寂しさを、彼はよく知つてゐた。蝶子が大きくなつた時に、誰がその役目をしてくれるだらうと、彼は時々思つた。でも蝶子は効性が好かつた。

昨夜もベットに腰かけながら、夜おそくまで彼等四人の子供達の氣質や學業や前途について、H靑年と久しく話に耽つた。彼は幼少四人の弟妹のために、二人の兄達が禍にこそなれ、力にはならないことを痛いほど知らされてゐた。

彼とH靑年と三人の子供達と、そして彼の長男やH靑年の親友であるT靑年の姿が、或日またM君の安靜な家庭を襲つた。彼は楓の下に持出された椅子に腰かけてゐた。M君もそこへ出て來た。

「入らつしやい、入らつしやい！」彼の緣先きに並んだ娘達が、M君の愛らしい子供達を呼んだ。彼女たちは、何うかし

て其の子供達を近づけて見ようと骨を折つたが、近づかなかつた。

漸と阿母さんに連れられて、そこへ出て來た。M君はさも幸福さうに、二人の其の子達を眺めてゐた。

「君の小さい時分の顏がこの男の子の顏だとおもへば間違ひはない。」彼は小い方の、柔軟な白い皮膚をもつた、腫れぼつたい目をした、詩人の卵のやうな男の子の顏を指した。

「大變だ。僕がこんな結構な子供だつたら。」M君は自から謙遜するといふよりも、寧ろ愛兒を正直に讃美した。そして其は又た二人とも讃美するに可い子供達であつた。

郷土の煎餅が鑵ごとそこへ持出された。

「あゝ、壽煎餅ですな。これ旨いから、一枚食べて見たまへ。」彼はH青年に勸めた。

「さう。ぢや食べて見よう。」

皆なの手に月のやうな大きい煎餅があつた。中には缺けたのもあつた。M君は食料品を大抵郷里から送らせてゐるほど郷土を愛してゐたが、彼自身はM君のやうに、總てのものが美いと思ふほど主觀的にはなれなかつた。

「竹は何うなりましたか。」

叡山苔と一緒に貰つた矢竹のことであつた。竹はM君によつて能く仕立てられてあつた。

「玄關の兩脇へ植ゑたやうです。」それは又た適當な使ひ方であつたが、植木屋が持込んで來た十五株ばかりの矢竹も、何處へ散らばつたか判らなかつた。

「植木屋といふものは、舊からあるものを、何處かへ隱くしてしまふもんでね。」

「さう！」彼も苦笑したが「こゝは樹は落葉松や栂のほか何にもないが、楓は好いね。」

「ちよつと此方へ……。」M君は入口の處にある一もとの楓の側へ彼を誘つた。それは猩々とか何かといふのであつた。

それから大屋の畑の方へ葡萄を見に行つた。若い各種の楓が軟かいその枝葉を風に戰がせてゐる下に、徑二尺もあらうと云ふ美事な葡萄が、野菜のやうに作られてあつた。

「楓何うです一本お持ちになつては。」

「面倒で。」

「葡萄もいゝですよ。」

「素敵な葡萄だね。」

「これ持つて行けますよ。」

「さあ。」

二人は皆んなの處へ歸つて來た。

「M、H山房を訪問しようぢやないか。」彼はM君に言つた。

「さうですね。僕も何だか一人ぢや訪問しにくいから。」

彼はそれよりもT青年をM、H君に紹介しようと思つた。T青年は珍らしい沈着な文學の研究者であつた。孰かといふと、彼は哲學者らしい大人つぽさをもつてゐたが、藝術鑑賞も高いらしかつた。

「皆んなは何う。」

子供達は默つてゐた。京子は彼を「酒と刀」だと言つてゐたが、一兩日前彼が子供達を其の山房へつれて行つてから、彼等のあひだにM、H君が子供達に好かれてゐないことが解つた。

「お山のおぢさん、子供に口を利かないから厭ですて。」H青年が言つた。

「奥さんがあんなに皆を歡迎して御馳走してくれたぢやないの。」彼は言つた。

「むゝ、でも……。」誰かゞ呟いた。

　　お山のおぢさん變りもの
　　誰が行つても口利かぬ

誰かゞ又口吟んだ。

一同は笑つた。

「子供つて皮肉に出來てるもんだな。」彼も笑つた。

出かけに雨がしよぼ〳〵降つて來た。彼は毎日のやうに外で雨に逢つたが、輕い山雨も亦好かつた。ミカサの雜木林の朝の氣分は殊に好かつた。鳥の音樂が彼の心を朗らかにした。杜鵑、鶯、それに銀鈴のやうに澄んだ聲も聞えた。閑古鳥や山鳩が、遠くで緩い伴奏を續けてゐた。

途中H青年と子供達とに別れて、町へ出た。そしてガレーヂで自動車に乘つた。水銀の粒のやうに雨が窓硝子を打つた。

「貴方のお住居は何處ですか。この土地での。」M君がT君にきいた。

「Mホテルの近くです。」

「鵞鳥や七面鳥の啼聲が聞えるから直ぐわかる。」

「貴方のところの？」

「いや、隣りの西洋人が飼つてるんですが、九月の半ば頃になると、一羽もゐなくなつてしまふ。ちよつと變な氣持ですが、西洋人はあゝ云ふことに、實に徹底してゐる。尤も氣にするのがセンチメンタルなんでせうけれど。」

「遣り切れない。あの太い腕を剝出しにして、すて大(でか)い圖體をした外國婦人に出逢ふと、僕等は參つちまふな。洋行なんか

する氣になれない。」

「行つていらしたら何うです。」

「子供があるもの。S君は幼い人達を人にあづけて、よく二年も三年も外國にゐたと思ふね。」

雨が少し强くなつて來た。

M、H山房はコハンスキーの隣りであつた。下で自動車を乘棄てゝ、彼は先導した。涼しさうな無地の帷子を着てゐる夫人が愛想よく迎へてくれた。主人と反對に、夫人はいつも溢れさうな愛嬌があつた。椽側からとゞいた白蚊帳の包みが、石をセメンで固めたマントルピースの側にあつた。勿論この建物もバンガロー以上であつた。

「ブルジョウアですな。」

「厭ですわ、ブルジョウアなんて――ぢや此方へ仕舞つておきますわ。」

三人椅子につくと、やがてM、H君が今何か書きものに沒頭し切つてゐたらしい、無表情な顏をして二階からおりて來た。高いので、雨風が三方の硝子戸に强く當つた。崖ぎわの草木が戰いてゐた。其處らが荒寥としてゐた。こゝに一夏を過すM、Hは修業者のやうに感ぜられた。

「ストオブに火をたいたら。」M君が薄寒さうに言つた。

やがて夫人によつて、炭火の盛られた、大井のやうな火鉢が、彼とM君との間におかれた。

M、HとMと二人のあひだに話がはづんでゐた。大流行の大衆文藝、この夏東京へ來た人形芝居、夏目漱石や芥川龍之介の俳句、それから映畫、マルタス、終ひに革命……

「△△△が廢刊になつたら、みんな困るだらう。」M、Hが言つた。

「藝術では食へなくなるね。それでも可いんだ。何うせ僕等は食へなかつたんだから。」彼は言つたが、獨りになつてから

彼は生活のことを兎や角考へなくなつてゐた。

「ほんとうに食へなくなつたら、僕は爲方がないから先頭に立つね。」M君が少し興奮した聲を出した。

「さう、さうさ。食へなくなつたら……それが眞實さ。」M、H君が和した。

傘をかりて三人は山房を辭した。夫人は草履ばきの彼に眞新らしい上等の下駄を持出して來たりした。

「Sさん、私が家政婦に行つてあげませうか。」出かけに夫人が笑談を言つた。

「何うぞ。貧乏ですからお金も何うぞ。」彼はさう言つて外へ出た。

「なか／＼ユテリタリアンだが明快ですね。」細い坂路をおりたところで、H青年が言つた。

「今度の論文なんか一世を蔽つてるぢやありませんか。」M君が賞讃した。

「さう。僕は讀まないが……。」

雨が益々しげくなつて來た。泥水がフエルトを透して、彼の足袋の裏にじめ／＼滲みこんで來た。

「この木を一本S氏の庭へ入れたら、外に何にもいらんね。庭一杯だ。」M君は路上、栗張りの美事な一株の櫻の大木を仰ぎながら笑つた。

町へ出てから、K喫茶店へ入つて疲れを休めた。そして其處から俥を傭つて、彼は林のなかの家へ歸つてみると、子供達は廣間で、カロムに夢中になつてゐた。

雨風の強い或る日に、彼はH青年と京子さんとに送られて、二人の娘と汽車に乘つた。

「僕も東京へ歸りたいな。」H青年は別れを惜しんだ。

「海岸の方へも何うぞ。二人が寂しがつてゐるだらうと思ふんで。」

え、行きます、いづれ九日に歸りますから。僕も今日から勉强します。づゐぶん遊んだから。兄が來ると、兄は社交家だから、人が來て勉强が出來なくなるんで。」

「どうかお祖母さんによろしく。京子ちやんも寂しくなるね。」

「しかしお友達が來ますから。」

「僕も事によると、もう一度來るかも知れないけれど。」

「何うぞ。今度はお天氣が惡くて可けませんでした。」

發車の笛が鳴つて、汽車が動きはじめた。田青年兄妹の姿が次第に遠ざかつて行つた。そして全く見えなくなつた。

「よく遊んだね。」彼は蝶子の氣分を紛らせるやうに、「これから又海へ行くんだね。兄さん達が待つてゐるぜ。」

蝶子はにつと笑つた。

窓がしまつてゐるので、客車は饐れてゐた。旅から歸る子供達を誰も待つてゐるもののない寂しさは、子供達には兎に角、彼には又何となく懷しいものに思へた。

　彼は毎日田舍から出て來てゐる甥の立てゝくれる薄茶を飲んで、來る日も來る日も雨ばかり降つてゐる庭を見てゐた。

彼は蒔繪師であつたが、商用で東京へ出て來て、彼の二階に寢起きをしてゐた。

「おぢさんがお立ちの時、正門前で自動車にお乘りになるのを見たのですが、御旅行とは氣づかなかつたもんですから。」

甥は彼が歸つて來たとき、さう言つて挨拶した。

お客を待遇すことは、今の生活氣分とは、てんで折合はない感じであつた。何もかもがちぐはぐだらけであつた。彼の頭腦は丸いものや角いものや、長いものや短かいものや、硬いものや軟かいものや、古いものや新しいものや、美しい

ものや汚いものがごつちやに入交ざつてゐた。矛盾と矛盾が複雜に鬩ぎ合つてゐた。それを整理することは困難であつた。何から手を著けていゝか判らなかつた。彼は爲ようと思へば何でも出來るやうな氣がしたが、又た何も出來ないやうな氣もした。或時は彼は老いたのか若いのかの、感じすらなくなつてゐた。

彼は甥に餘り愛想よく出來なかつたが、しかし日が立つにつれ、お茶を呑みながら話すにつけ、段々親しみと親切が出て來るのを感じた。彼は商賣に退嬰的な甥を勇氣づけた。

甥は持參の茶菓子がなくなると、町へ出て彼の氣に入りさうなものを買つて來て、それを又た御持參の菓子盆に盛つて彼の側へもつて來て、

「お茶は如何ですか。」

「飲まうか。」

甥は鄕里のお茶人らしい落着きをもつて、お茶を立てた。

「お茶も好いね。人類共通のものでないと、無駄な努力か遊戯のやうな感じがするんだけれど、お茶なんかは惡くないよ。金持の遊戯にしておくのは惜しいやうだ。誰か一宗、立てないものかしら。」

さう言つても彼は、袱紗捌きなぞ形式張つたことを自身にやらうとは思はなかつた。

終ひに彼はお茶を呑まない日は物足りなかつた。娘達をお婆さんをつけて、海岸へやつてから、彼はS青年と甥と三人で暮らしてゐた。

「善いんですね、あの人は。」初め馴じまなかつたS青年も、このお茶人の人柄の好いことが解つて來た。

「現代人ぢやないんだよ。」

彼は輕井澤のM、H山房と、あの狸の穴に彷彿したM君との別莊へあてゝ、燒蒲鉾と昆布に山椒の佃煮を送ると同時

に、二通の手紙を書いた。

……東京も毎日鬱陶しいことです。こんなに雨がふるなら、芭蕉の一株も持つてくれば可かつたと思ひます。

これはM君へあてた狡猾な手紙の一節であつた。彼は芭蕉がほしくなつて來た。

M氏の返書が來てから間もない或朝、美事な芭蕉の五株が屆けられた。彼は床から起出すと、S青年と甥と三人して、庭の隅で荷を釋いた。雄大な芭蕉の葉が、木蔭の朝風に戰いだ。

「これは能く蒔繪の圖案にされるものです。」甥はさう言ひながら、一葉一葉の重なりを、そつと釋(ほど)してゐた。

四五日旅へ行つてゐた間に、洋館の窓ぎわの芭蕉も、幾枚かの新らしい葉を波立たせてゐた。

そして其の午後、山房からもM、H氏夫婦の禮狀がとゞいた。M、H氏のは昔しの彼の手紙とちがつて直截で素氣がなかつたが、夫人のは筆蹟も文章も古への歌人のやうな雅趣を帶びてゐた。

米國大統領候補者

フーヴァー氏と夫人……岸東人
スミス氏と夫人……古莊國雄

◆てなあ、藤原義江氏の後を慕うて……松永秋子

◆いもうとの死をなげく……小金井素子

●二葉地許可問題其他……らいてふ ●不戰條約の成立……永井萬助 ●待合政治……黒河想

●八珍會の記……水島爾保布 ●諸國惡食めぐり……水島律二郎

TEA TIME

●鮎……大田耕治
●變裝する女……廣瀬操吉
●ロダンを罵る女……小熊秀雄

映畫小説 砂の塔……鈴木傳明

◆◆男から見た女の化粧のあら……二十四名家

●就寢前の化粧法●實用履としてのきるく草履●睫毛染デリカブロー●傷んだ毛と赤毛の艶出法●新しいマニキアセット●メリンスの廢物で少女服●消換の自由なベビー服●黑襦子油繪の帶●優雅な電燈カバー●秋鯖と秋刀魚の料理●精進揚と五目すし●秋蒔球根と種子●

婚約時代

●冷たい戀人……健一
●洋子の輕路……みどり
●陸に棲むフィアンセ……信吉
●婚約時代の日記から……百合子

戀愛の危機

●やはらかい掌……艶子
●妙なハッピーエンド……けん子
●若き日の裝ひ……みや子
●見果てぬ夢……愛子

呼物の三大長篇小説 短篇小説

◆土に癒ゆる……德田秋聲
◆脂粉の風……今東光
◆憂鬱な愛人……松岡讓
◆叔父の告白……下村千秋

定價七十錢
振替東京三四番
中央公論社
東京丸ビル

毎月一回一日發行

定價

	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵劵代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

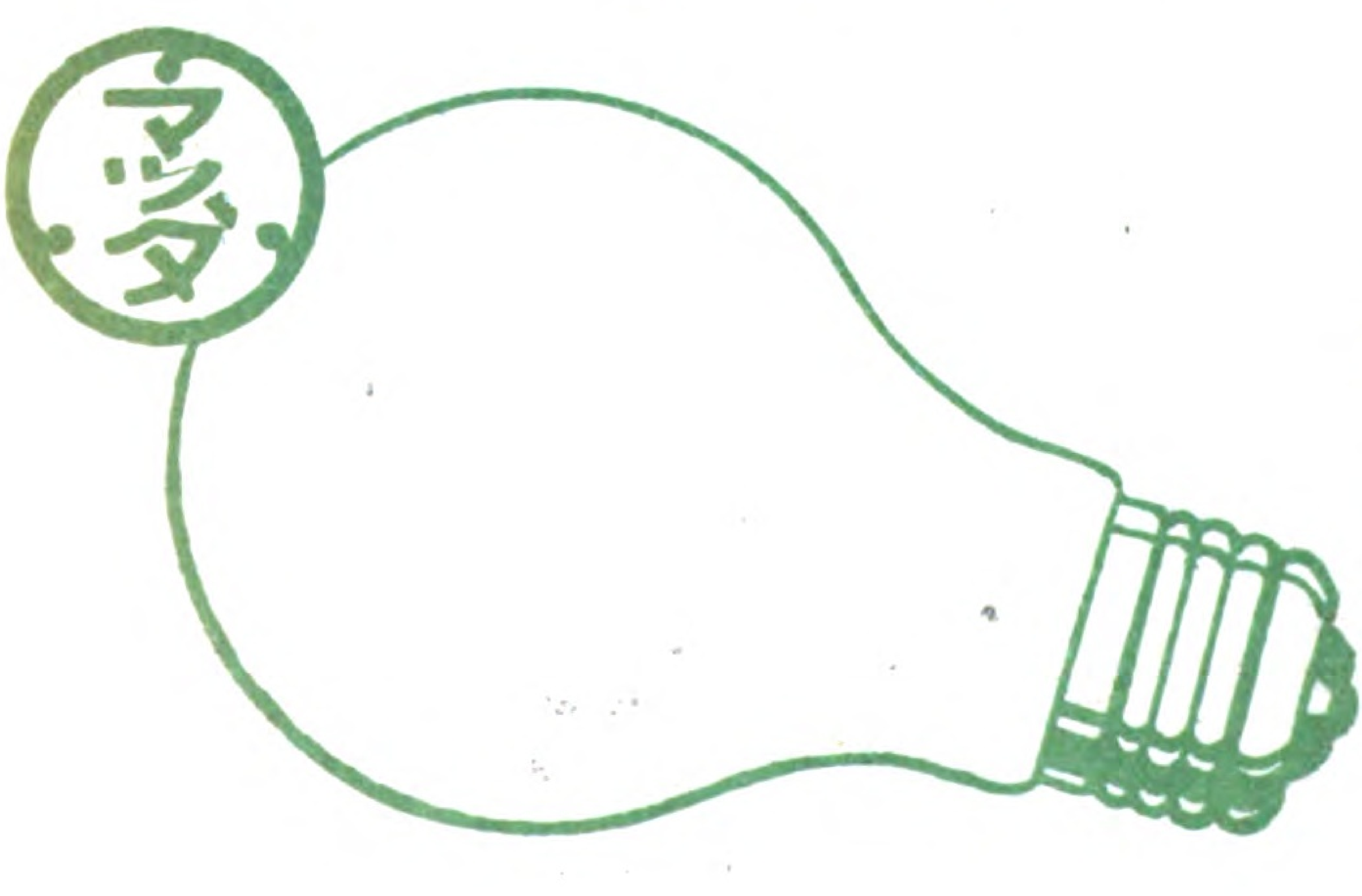
廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年九月十八日印刷
昭和三年十月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷人　高木鳥三
印刷所　株式會社秀英舍

東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ內二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番




マツダ

CHUO KORON (The Central Review.)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

